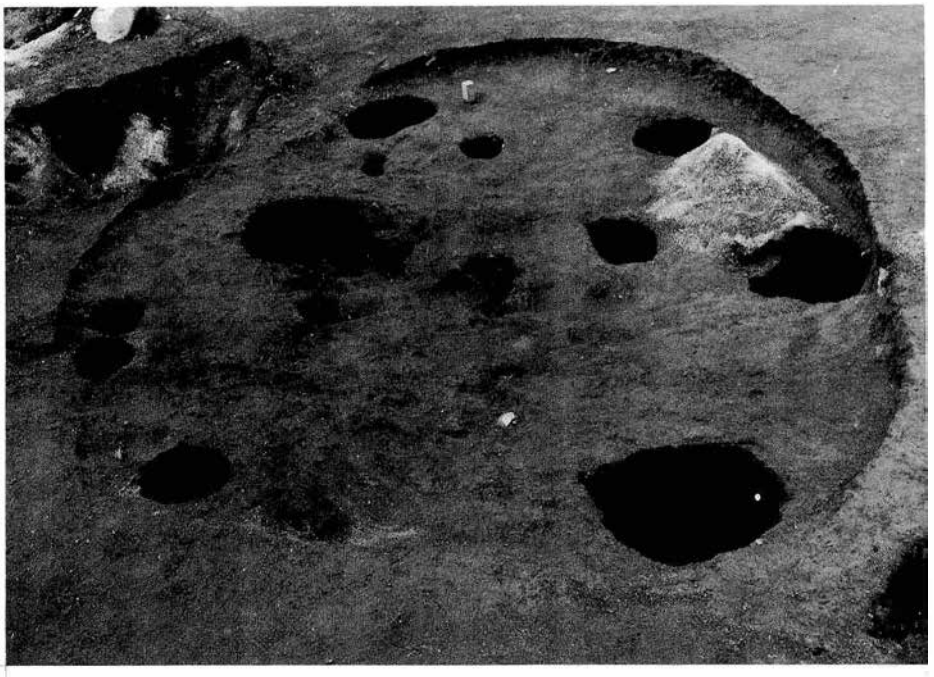
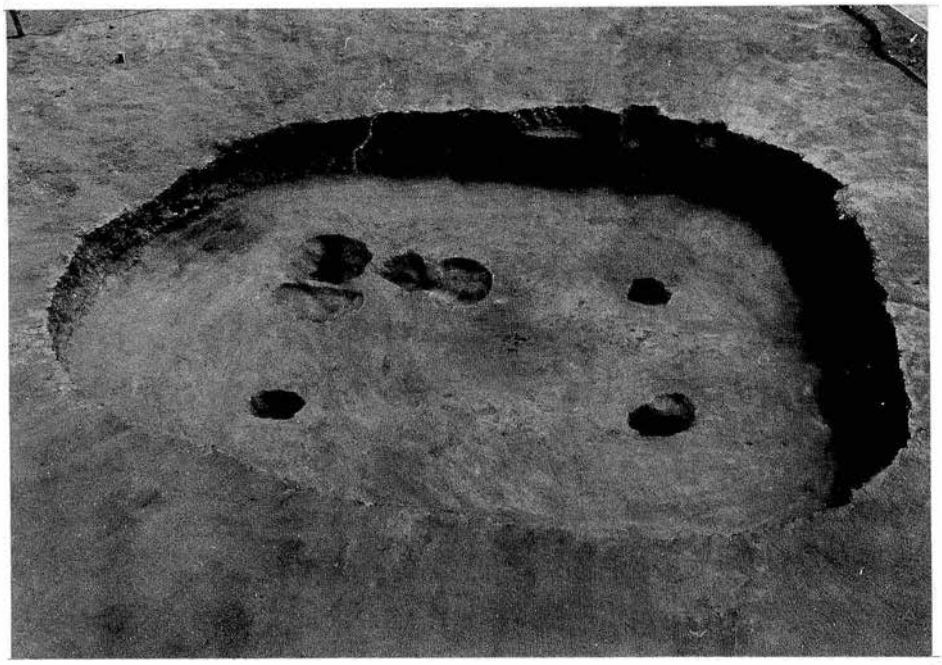
SB—16

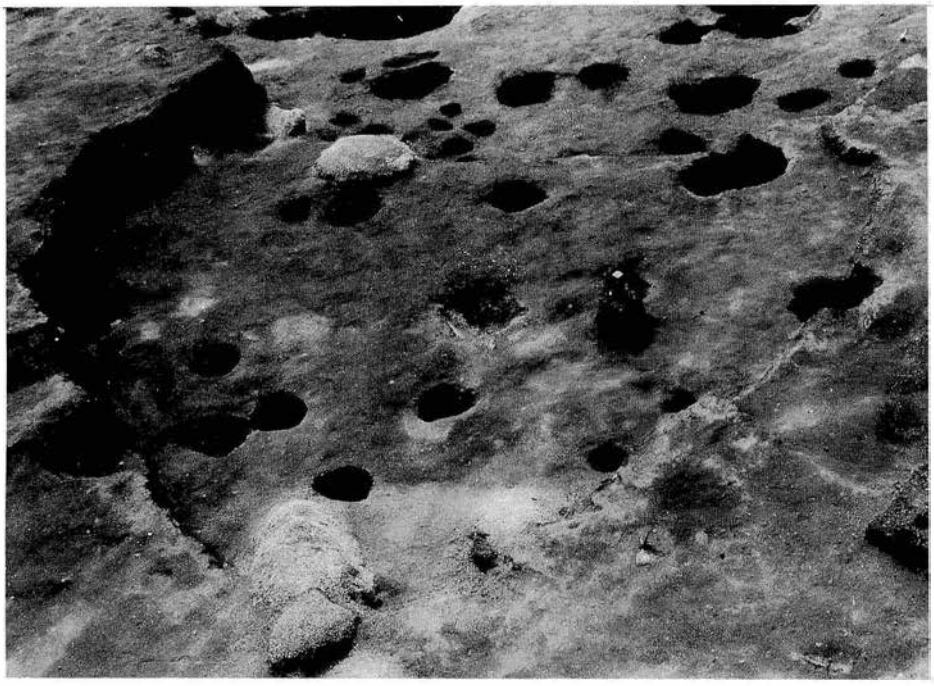
SB—17・18

SB—19





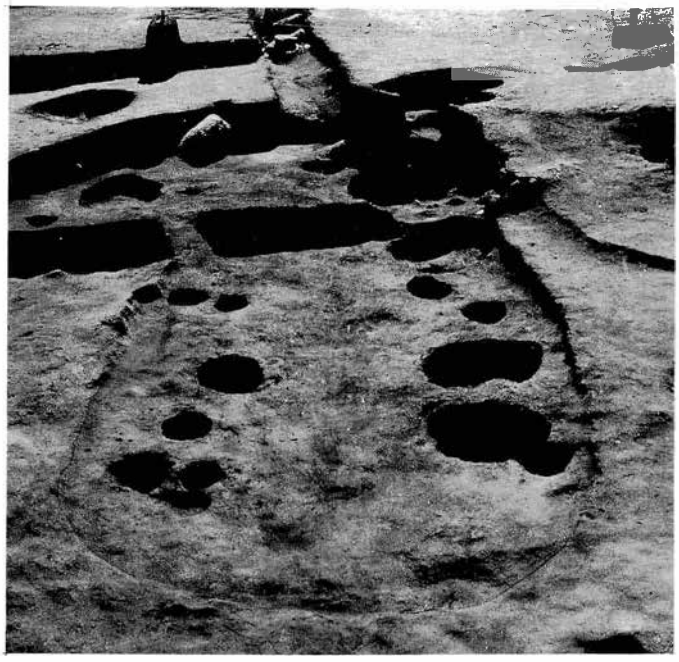
SB—20



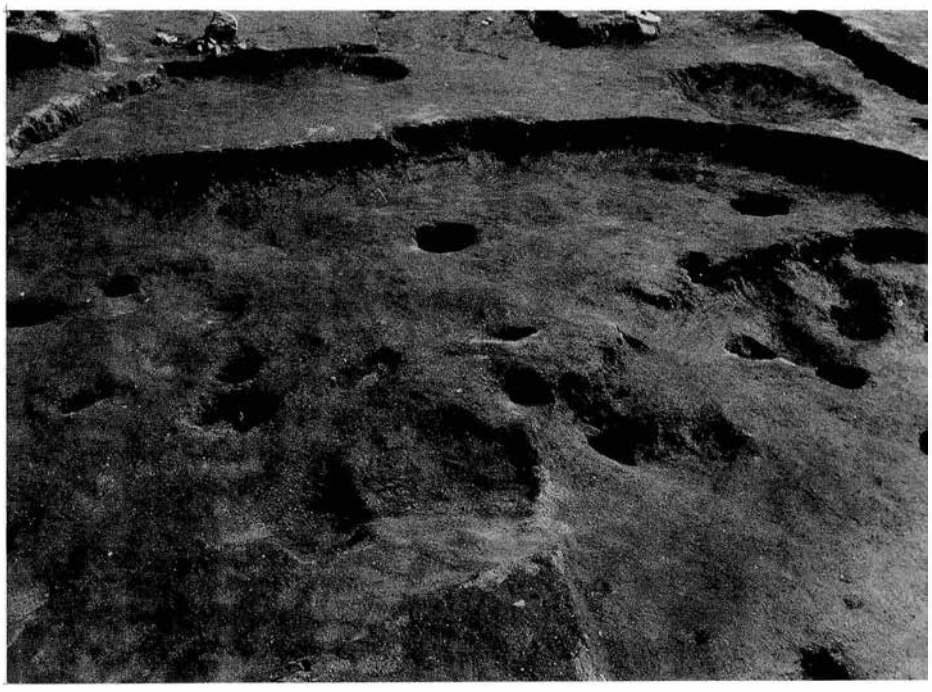
SB—21

SB—22

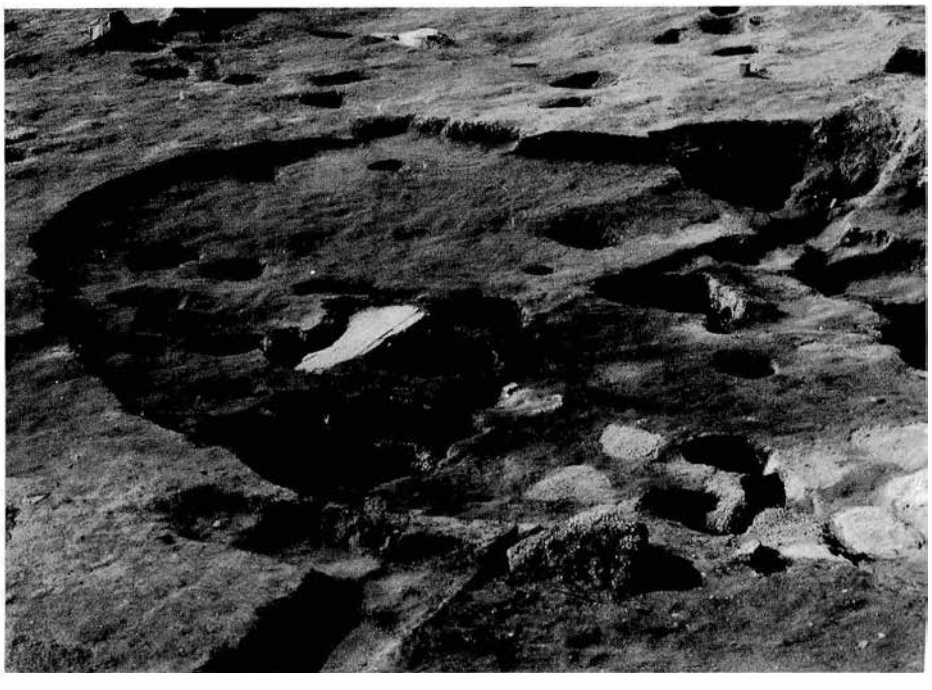
SB－24

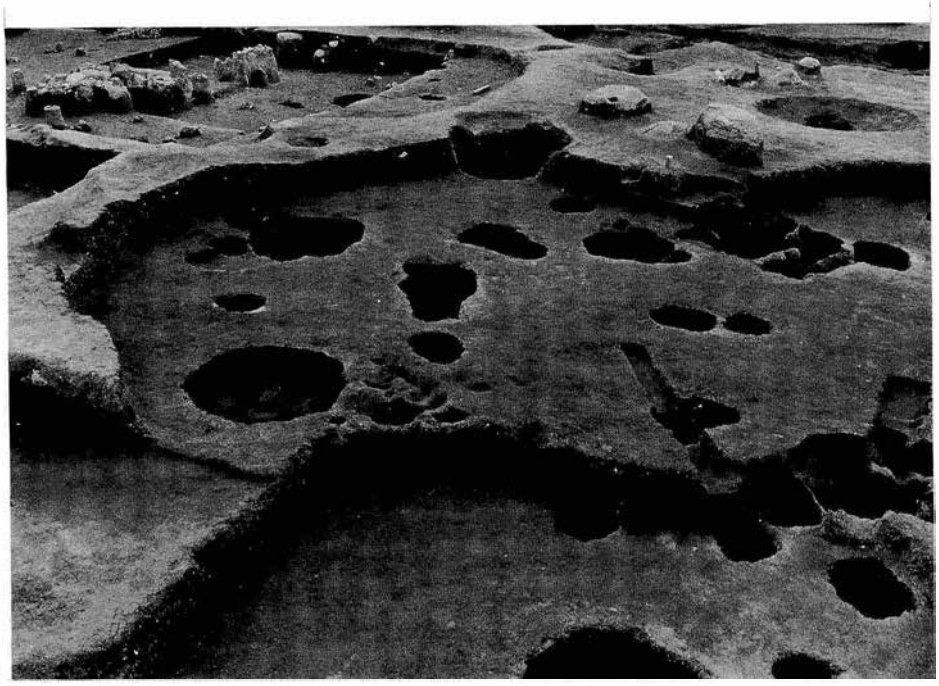


SB－25



SB－26





SB—27

SB—29

SB—33

SB—34

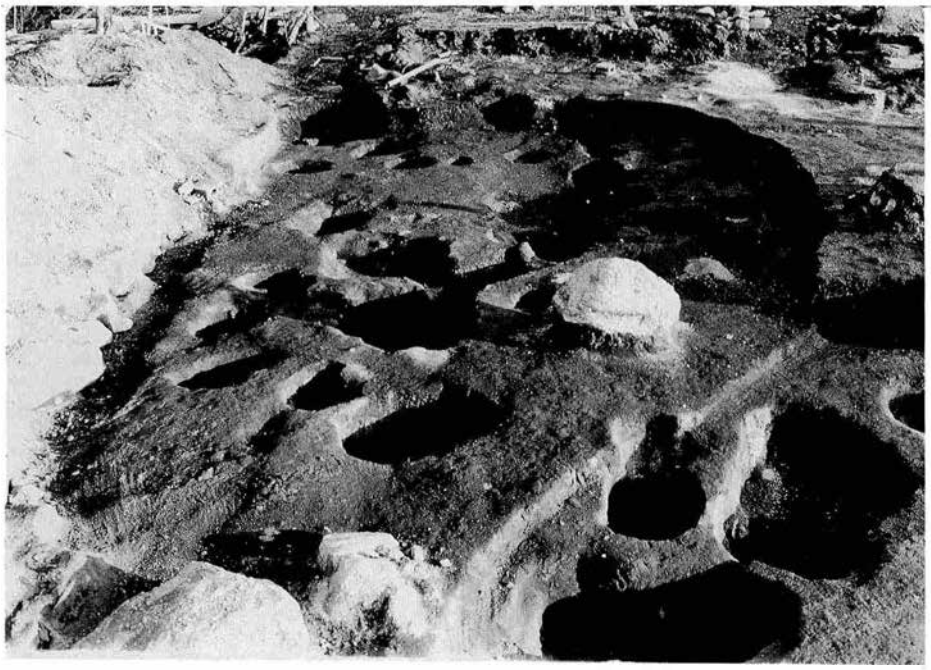
SB—35

SB—54

SB—38

SB—07

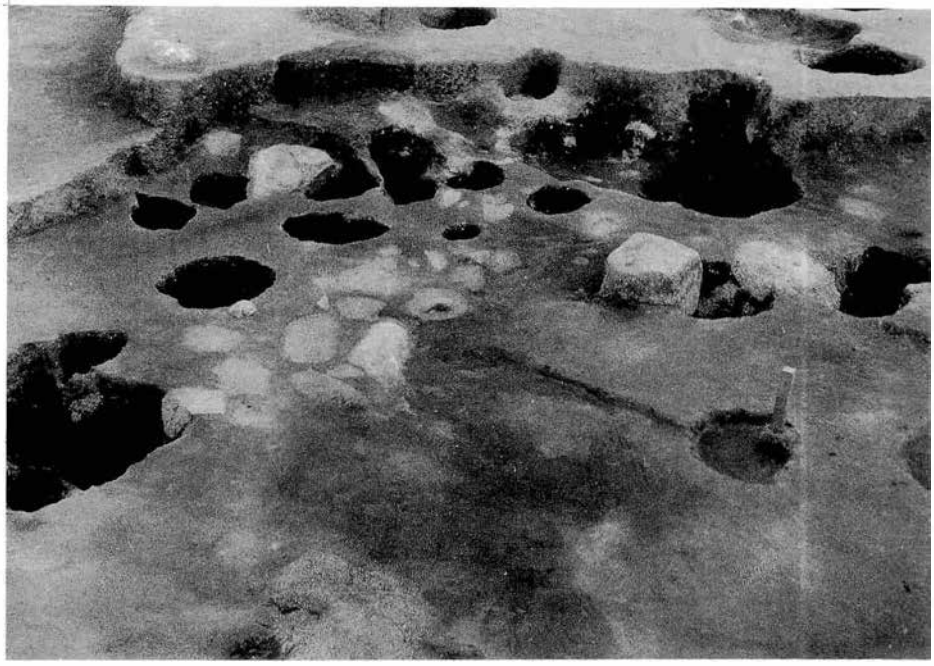
SB—41・42



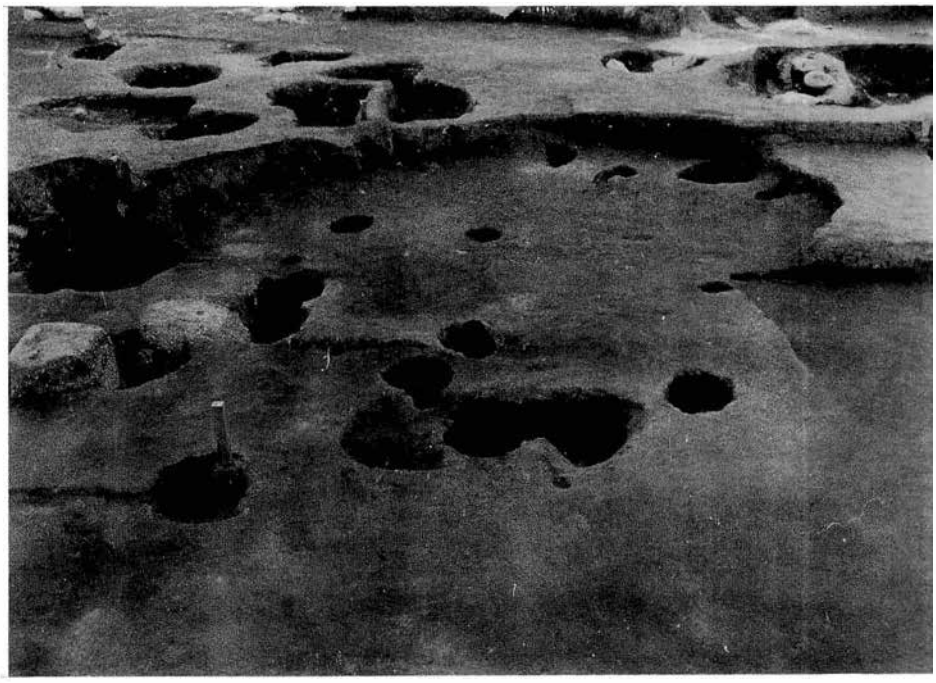
SB—47

SB—48

SB－43



SB－44



SB－45

SB—50

SB—51

SB—52

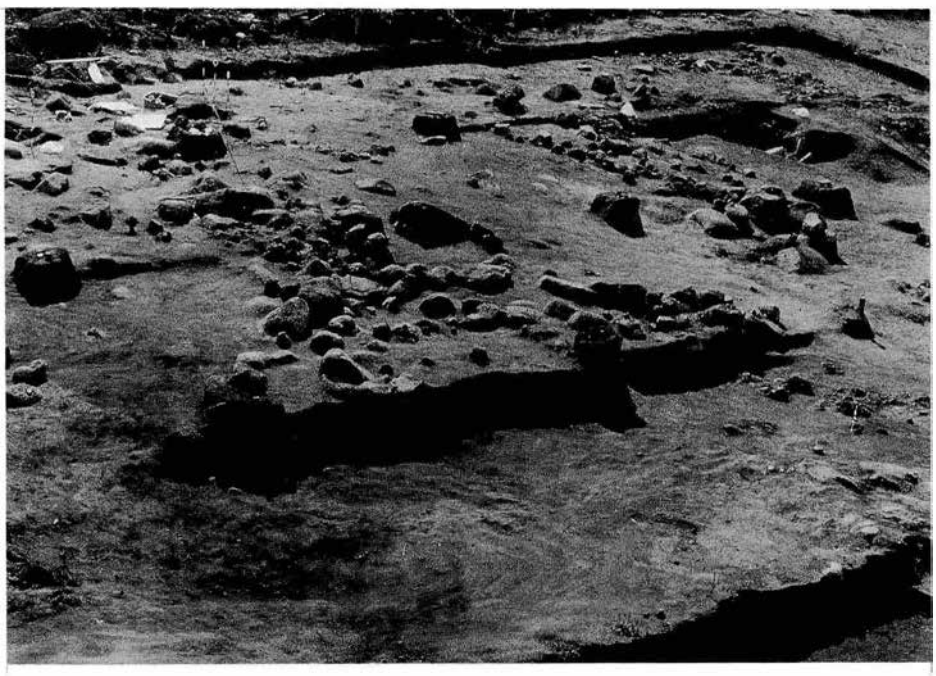
SB—49・53

SB—55

SB—56

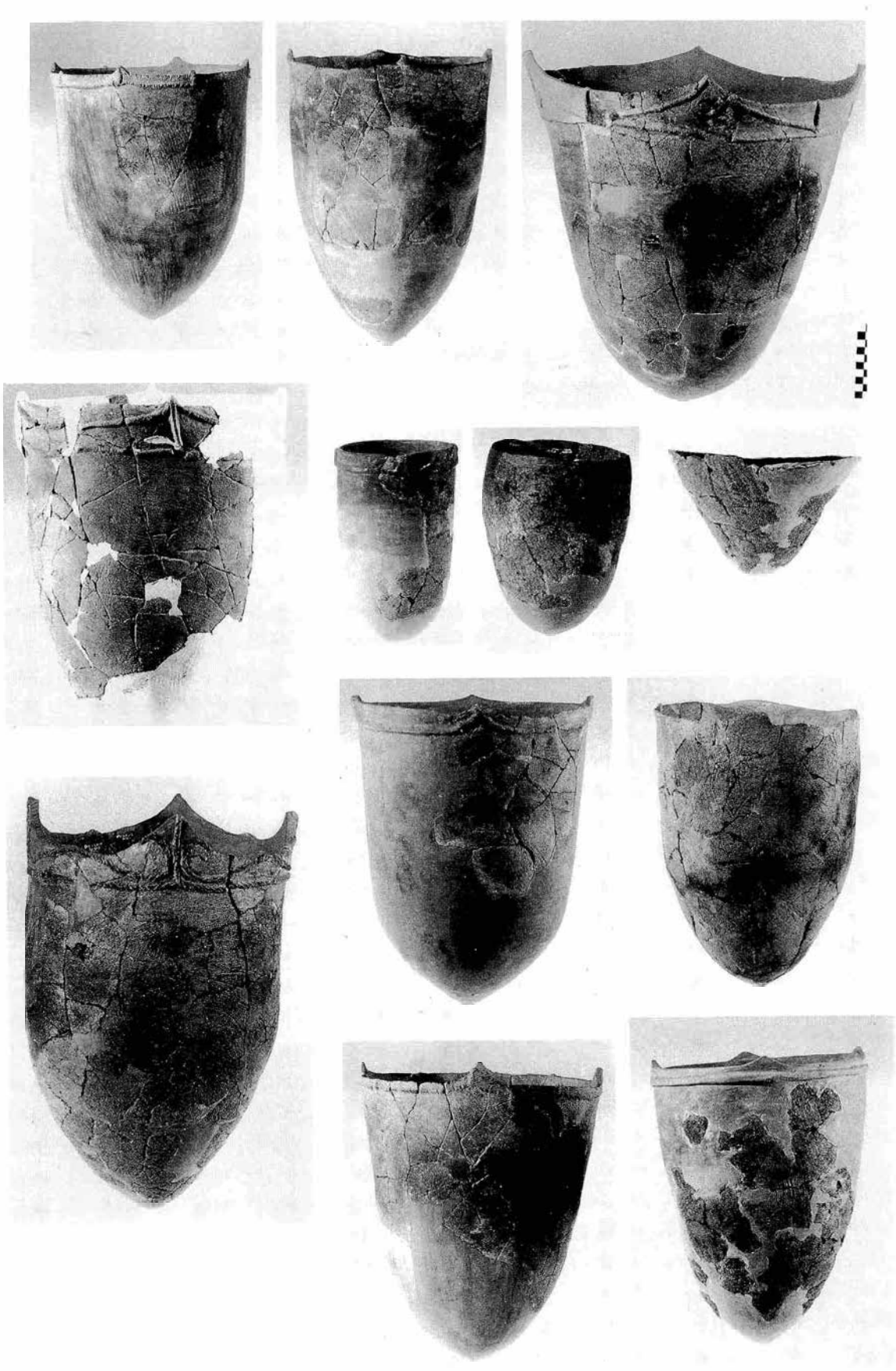
S X－01

S X－01

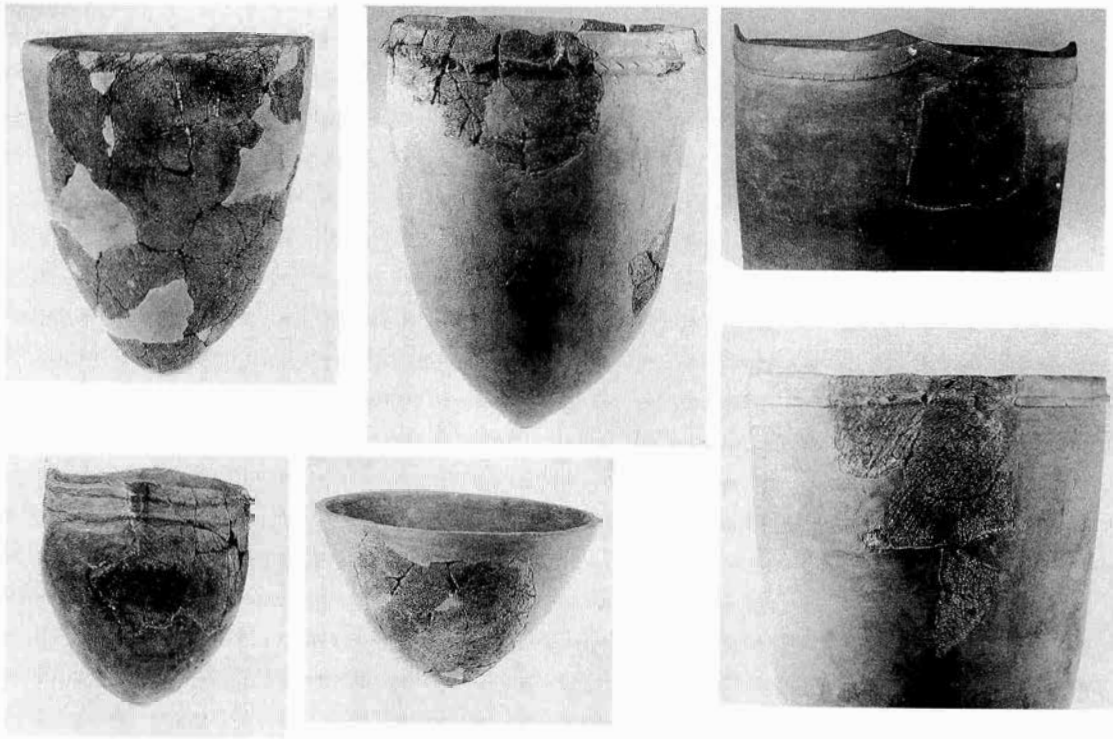


S X－03

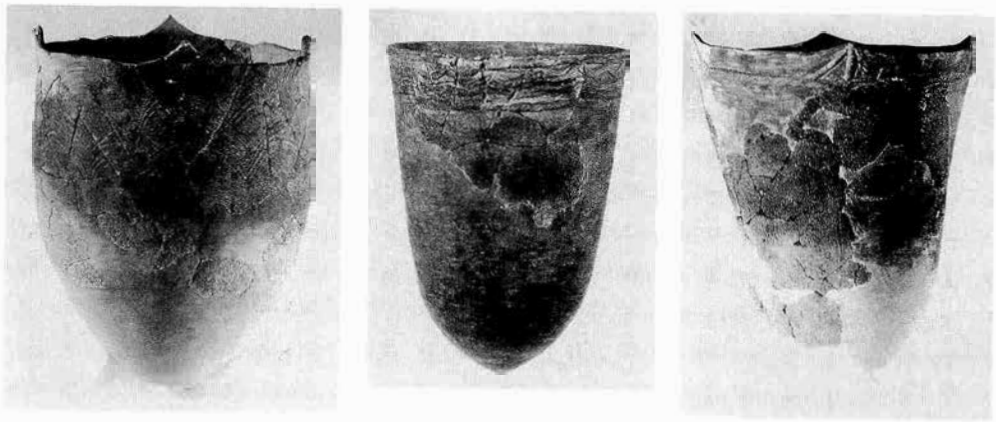
早期ＳＢ一出土土器



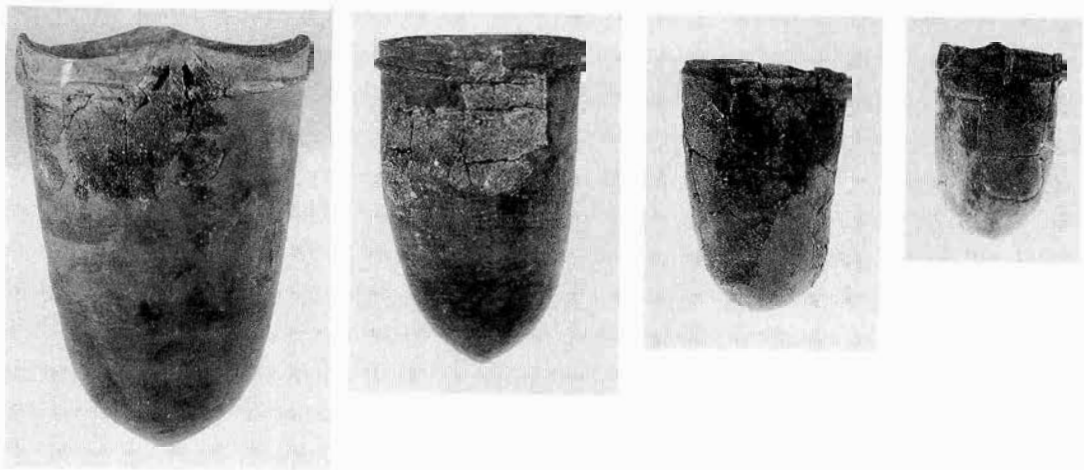
早期ＳＢ一出土土器



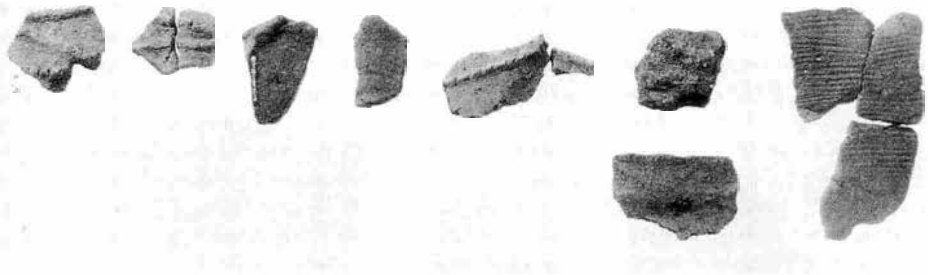
早期ＳＢ一出土土器　その他



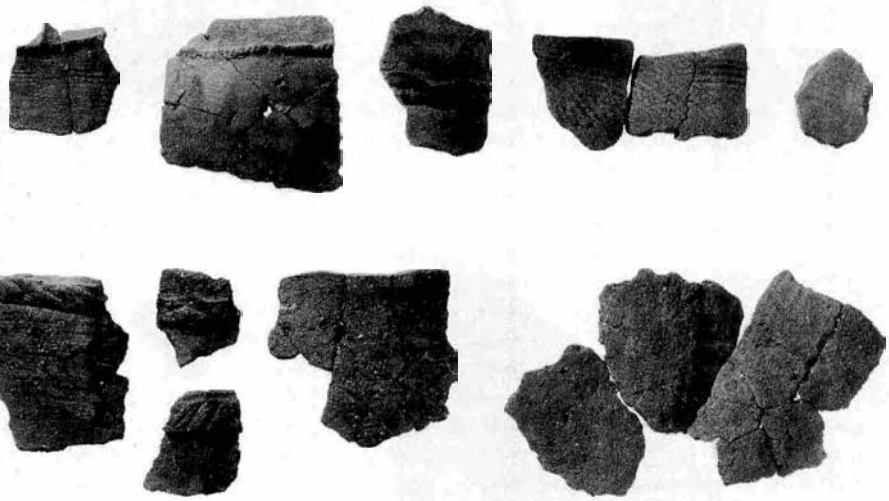
グリッド出土土器



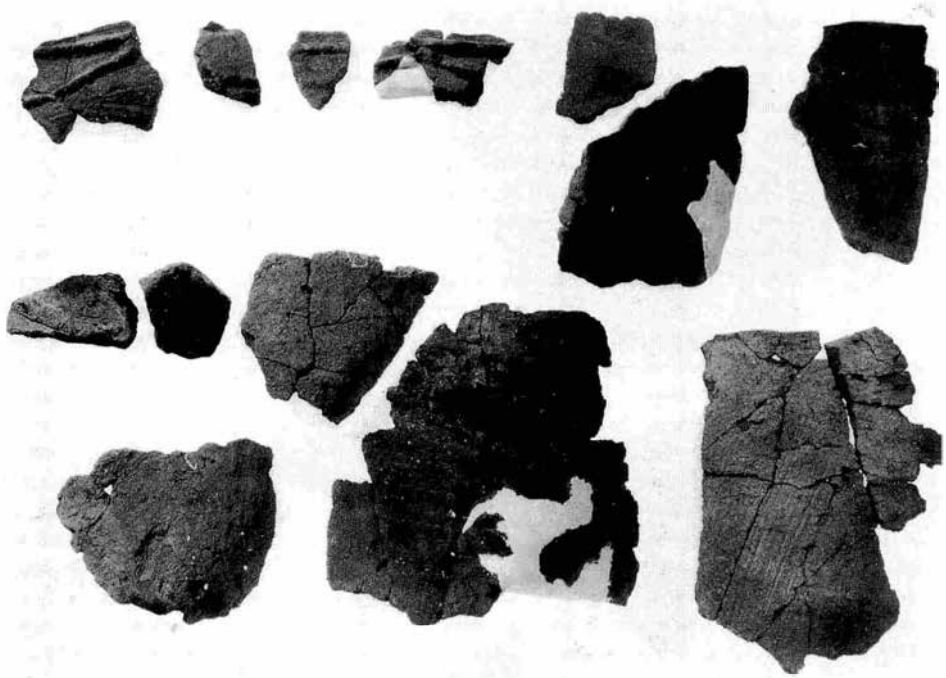
ＳＢ－11出土土器

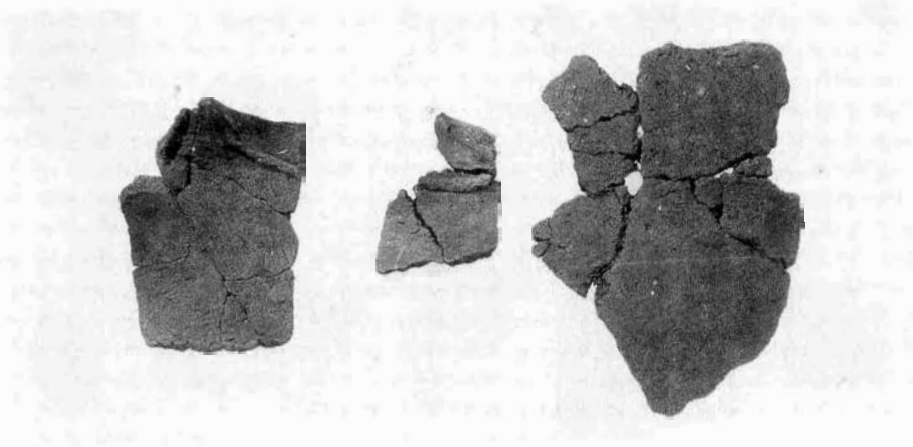


ＳＢ－13出土土器

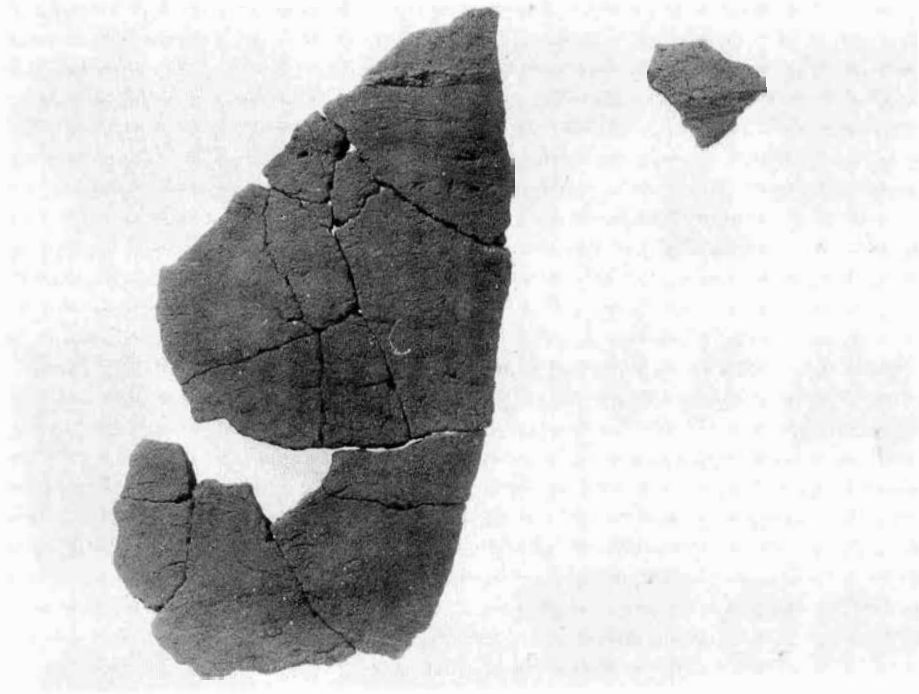


ＳＢ－14出土土器

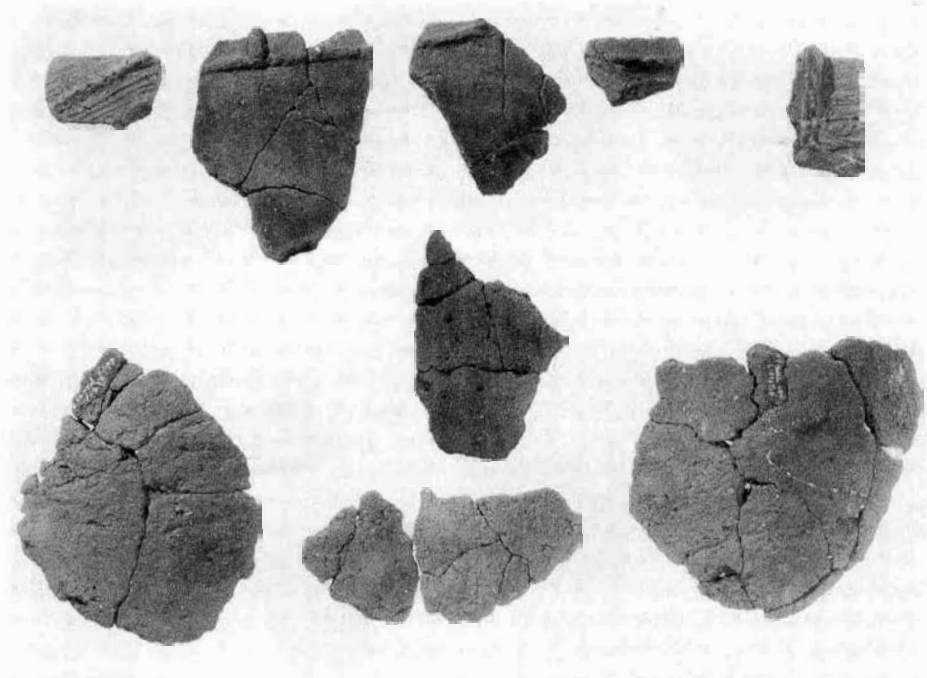




ＳＢ－16 出土土器

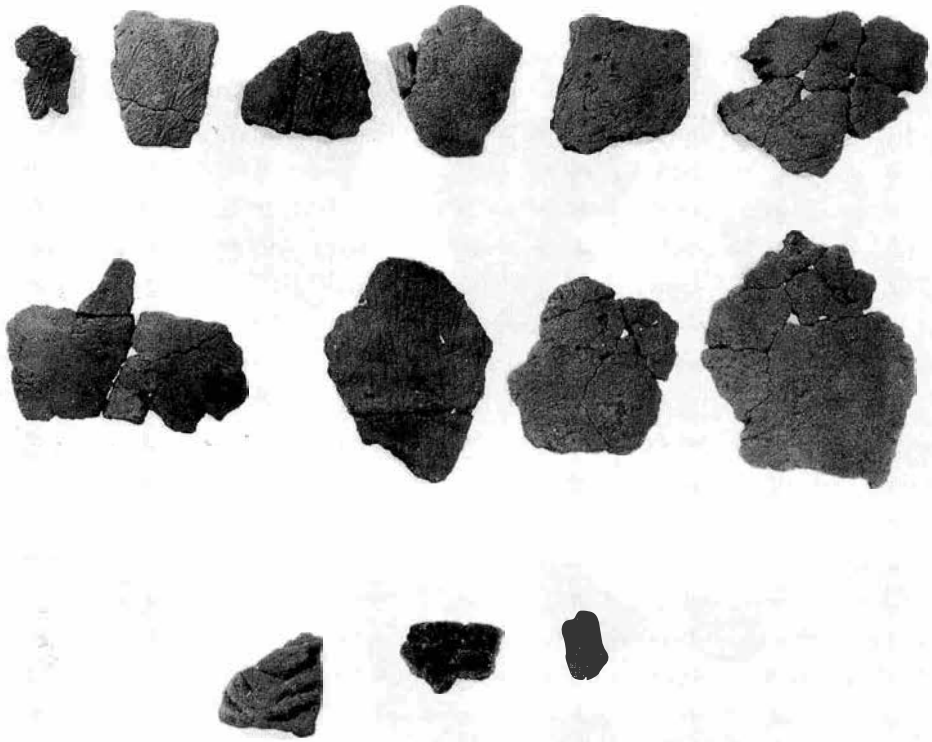


ＳＢ－15出土土器

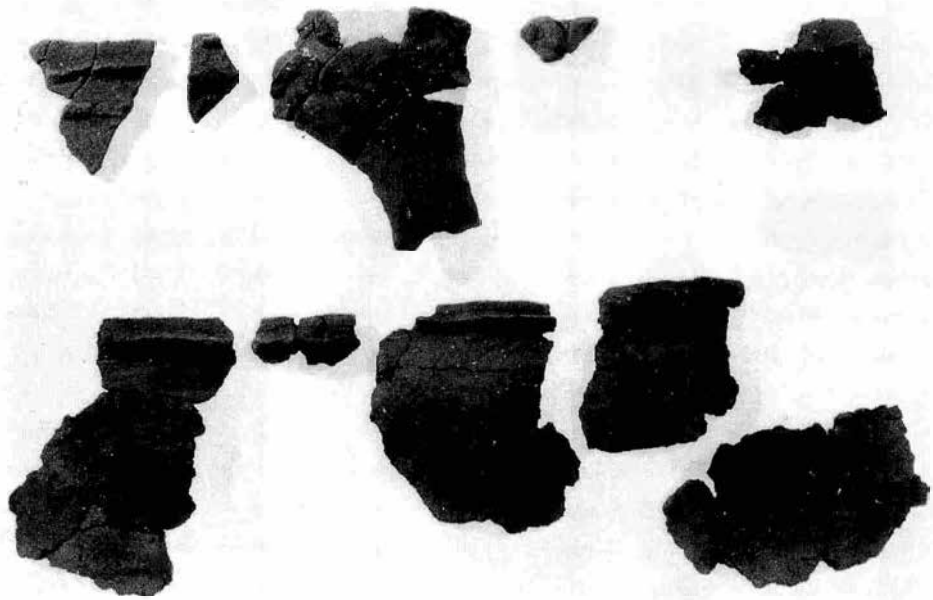


ＳＢ－17出土土器

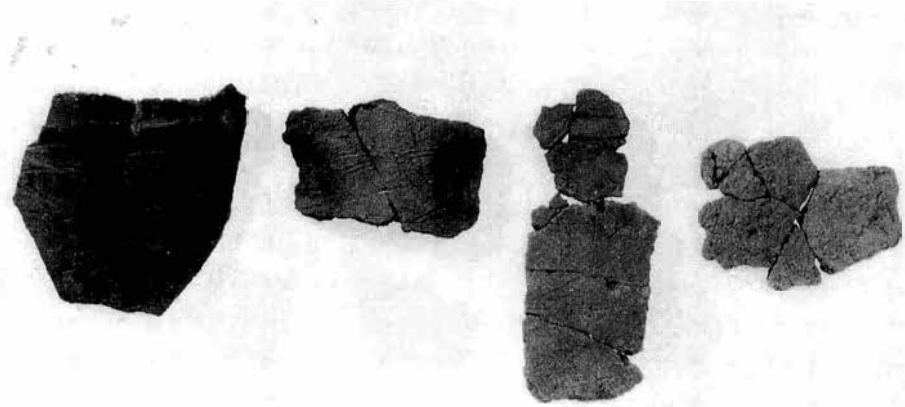
ＳＢ－19出土土器

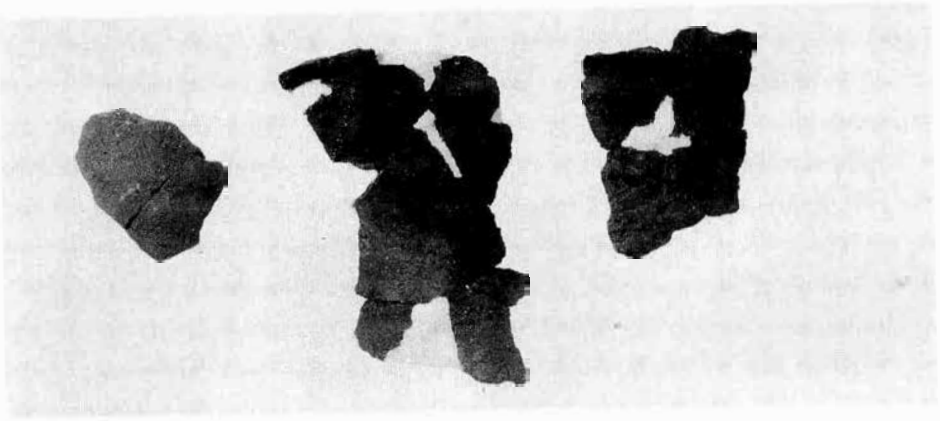


ＳＢ－22出土土器

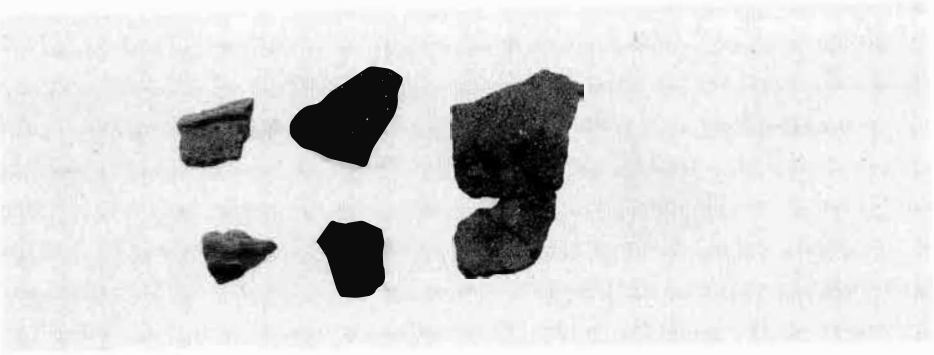


ＳＢ－25出土土器



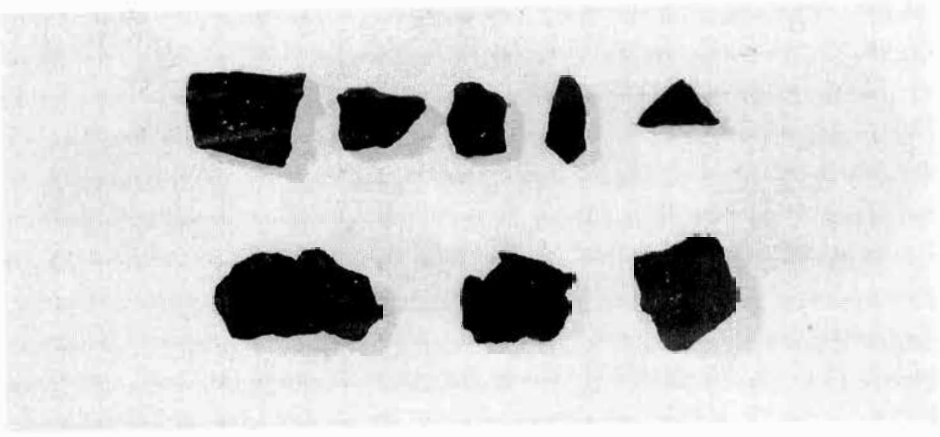


ＳＢ－26出土土器



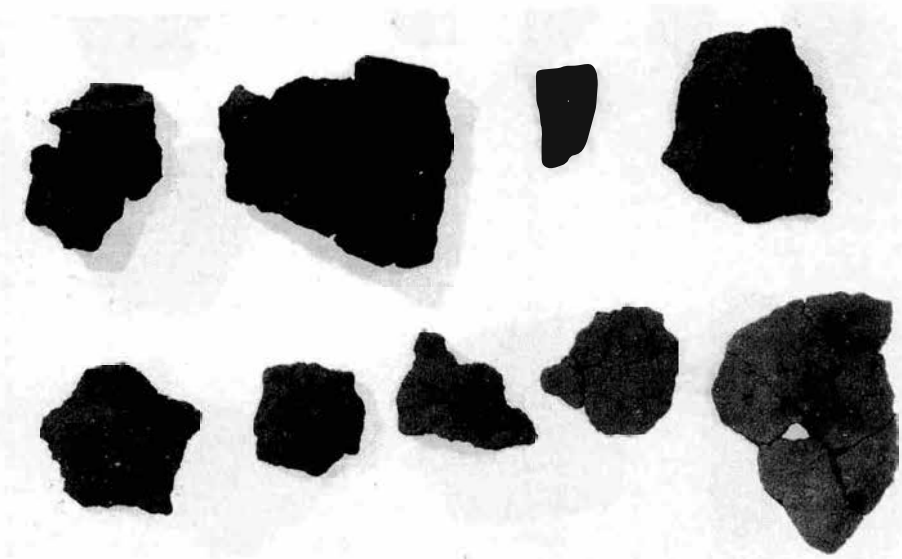
ＳＢ－30出土土器

ＳＢ－36出土土器

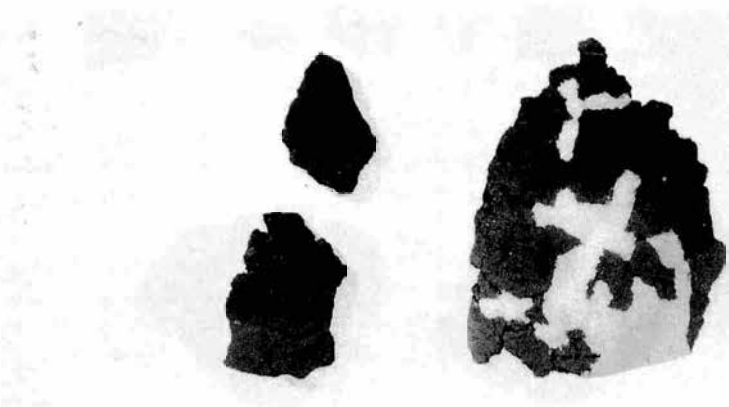


ＳＢ－44出土土器

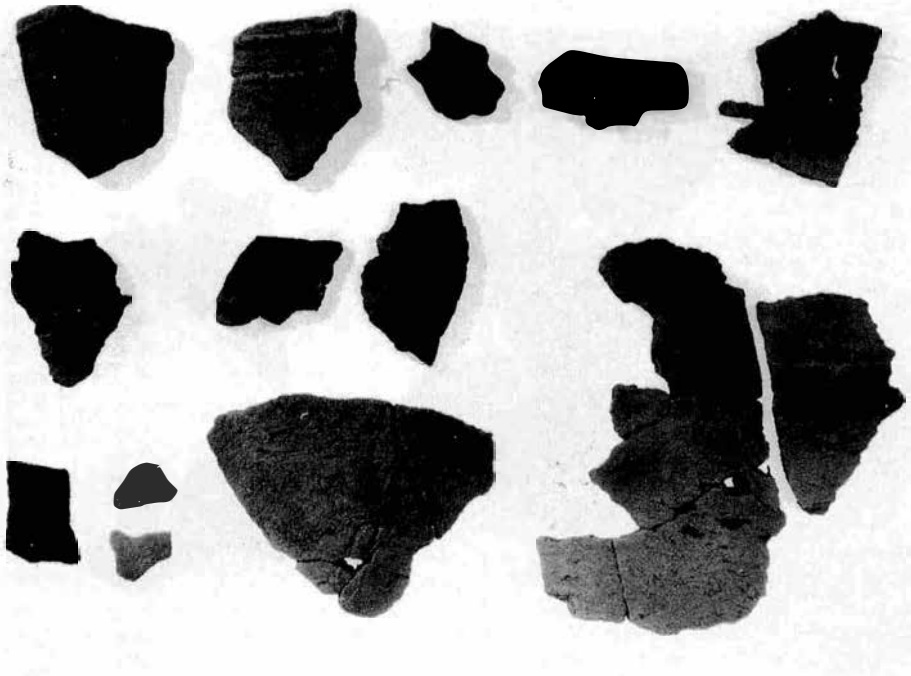
ＳＢ－52出土土器

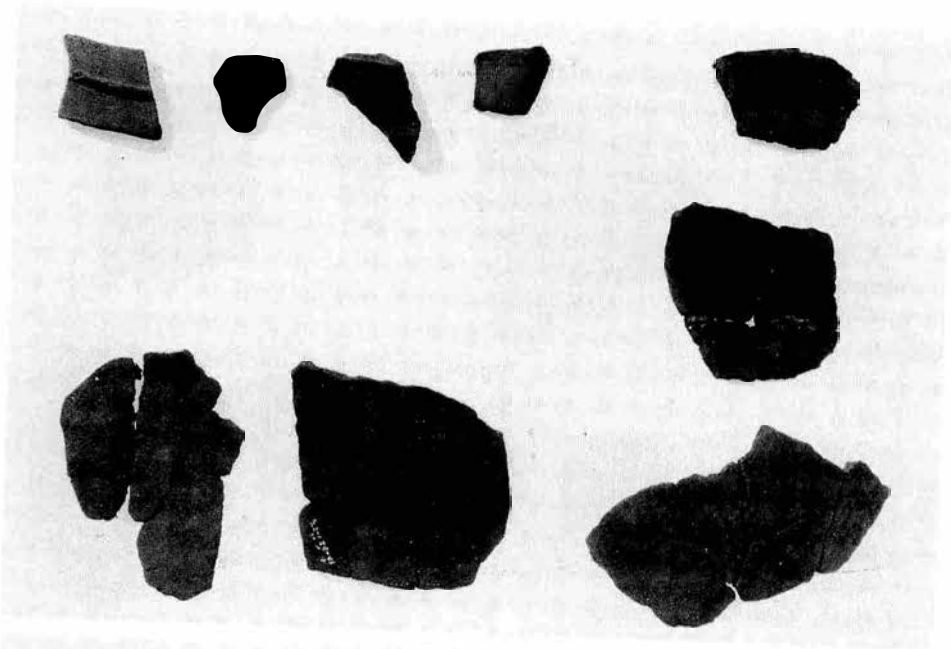


ＳＢ－50出土土器

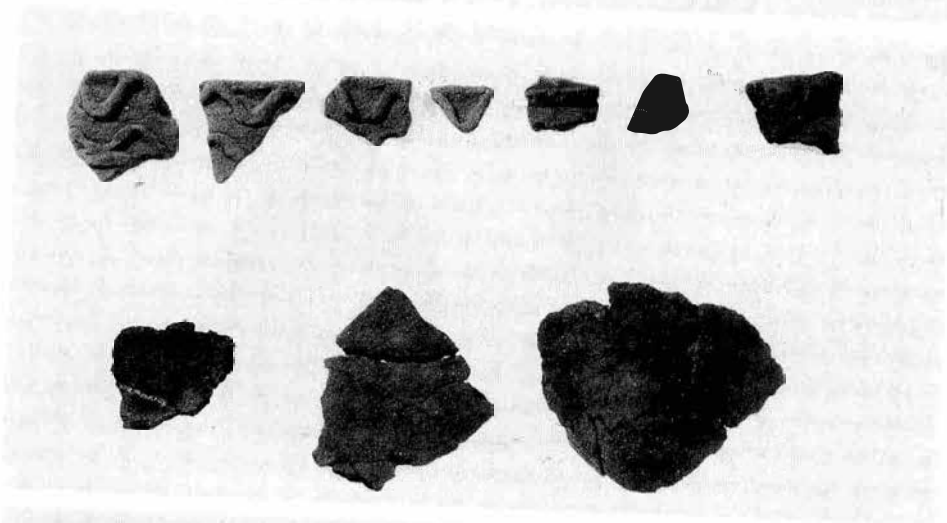


ＳＢ－53出土土器

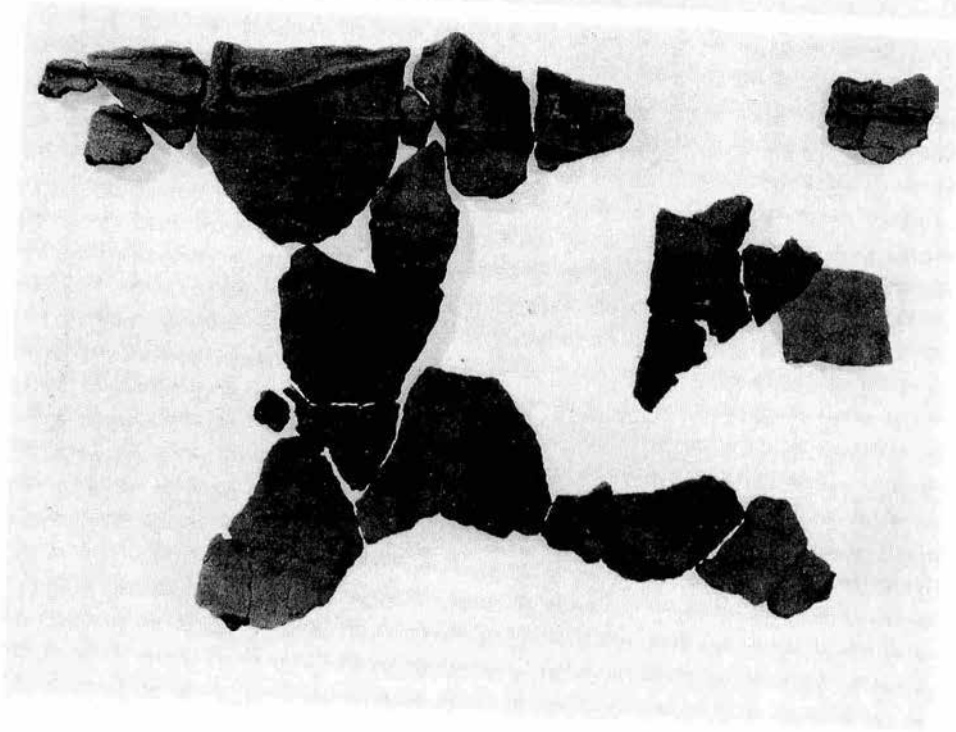




ＳＢ－46出土土器

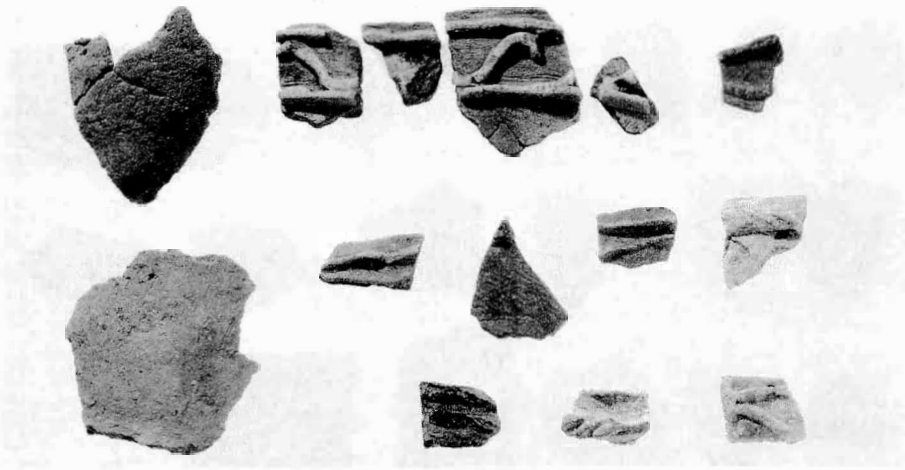


ＳＢ－48出土土器

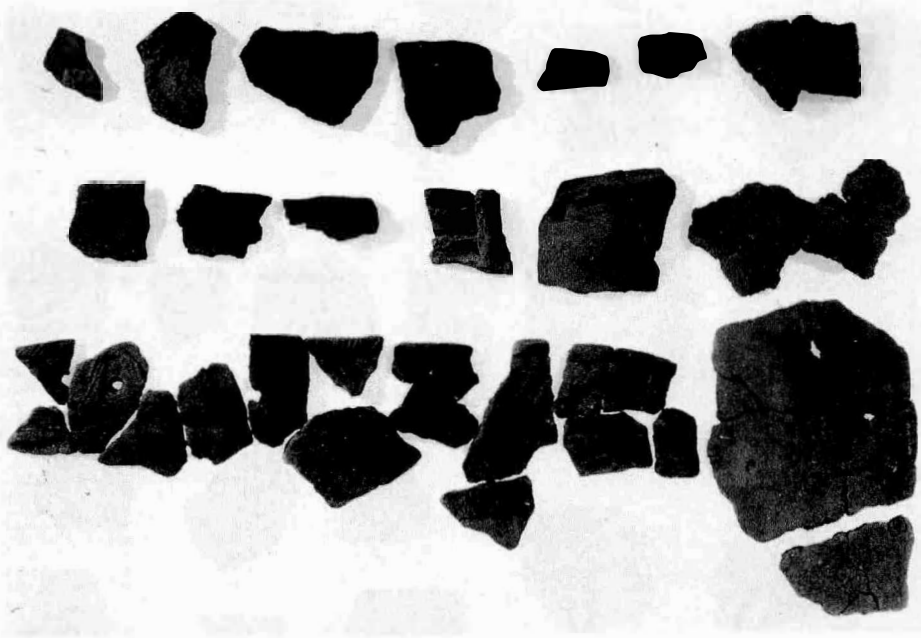


ＳＢ－54出土土器

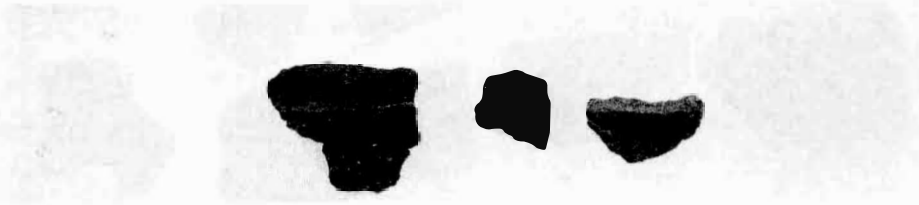
ＳＫ一出土土器



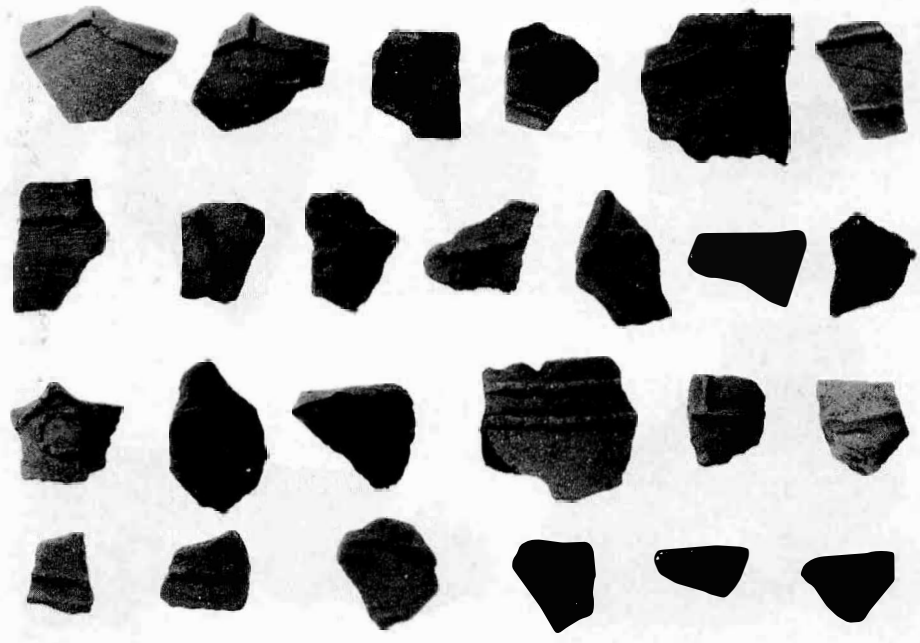
ＳＫ一出土土器

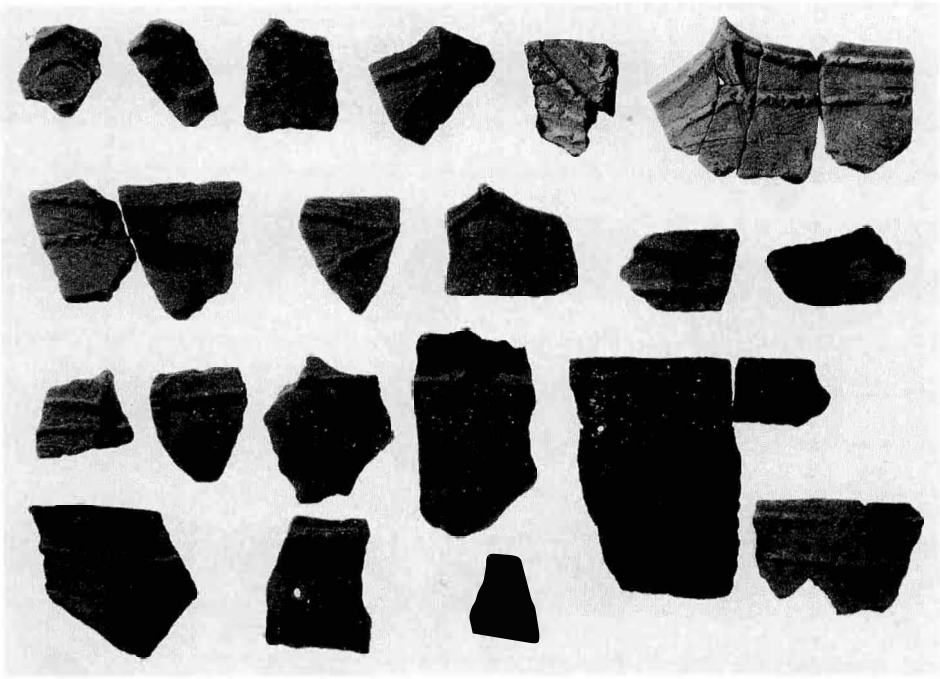


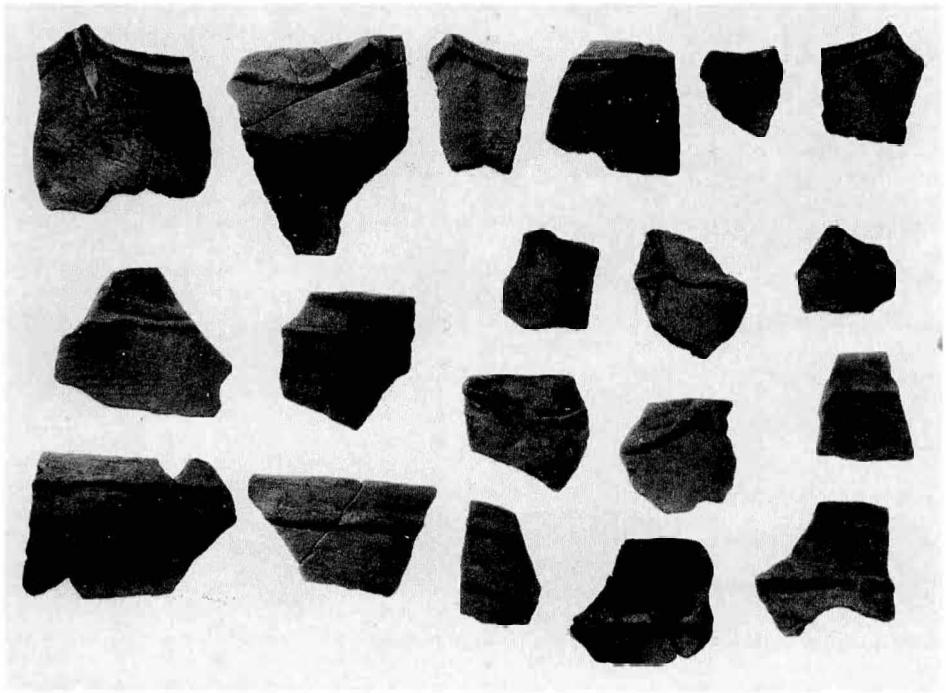
ＳＫ一出土土器

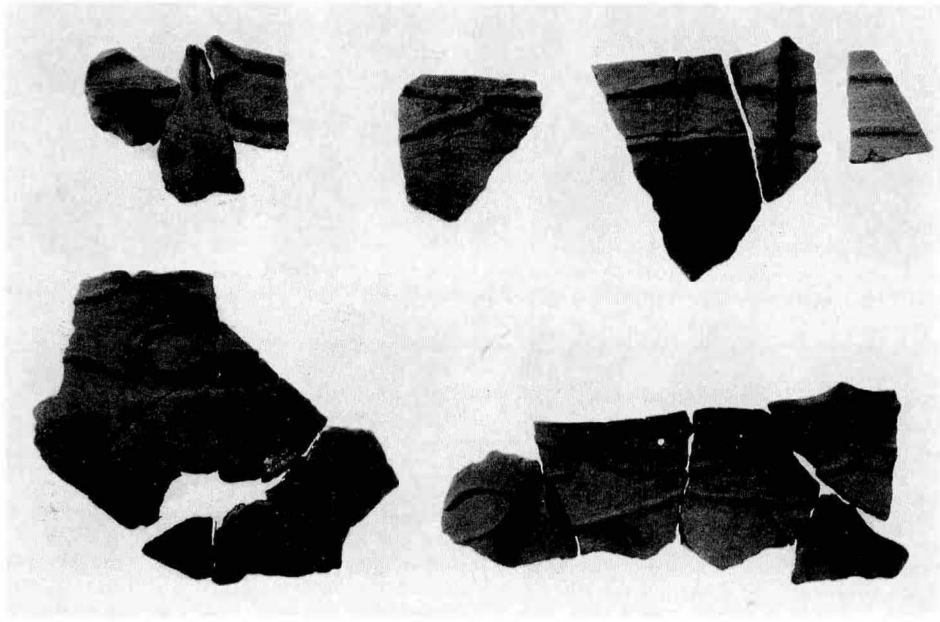


グリッド出土土器



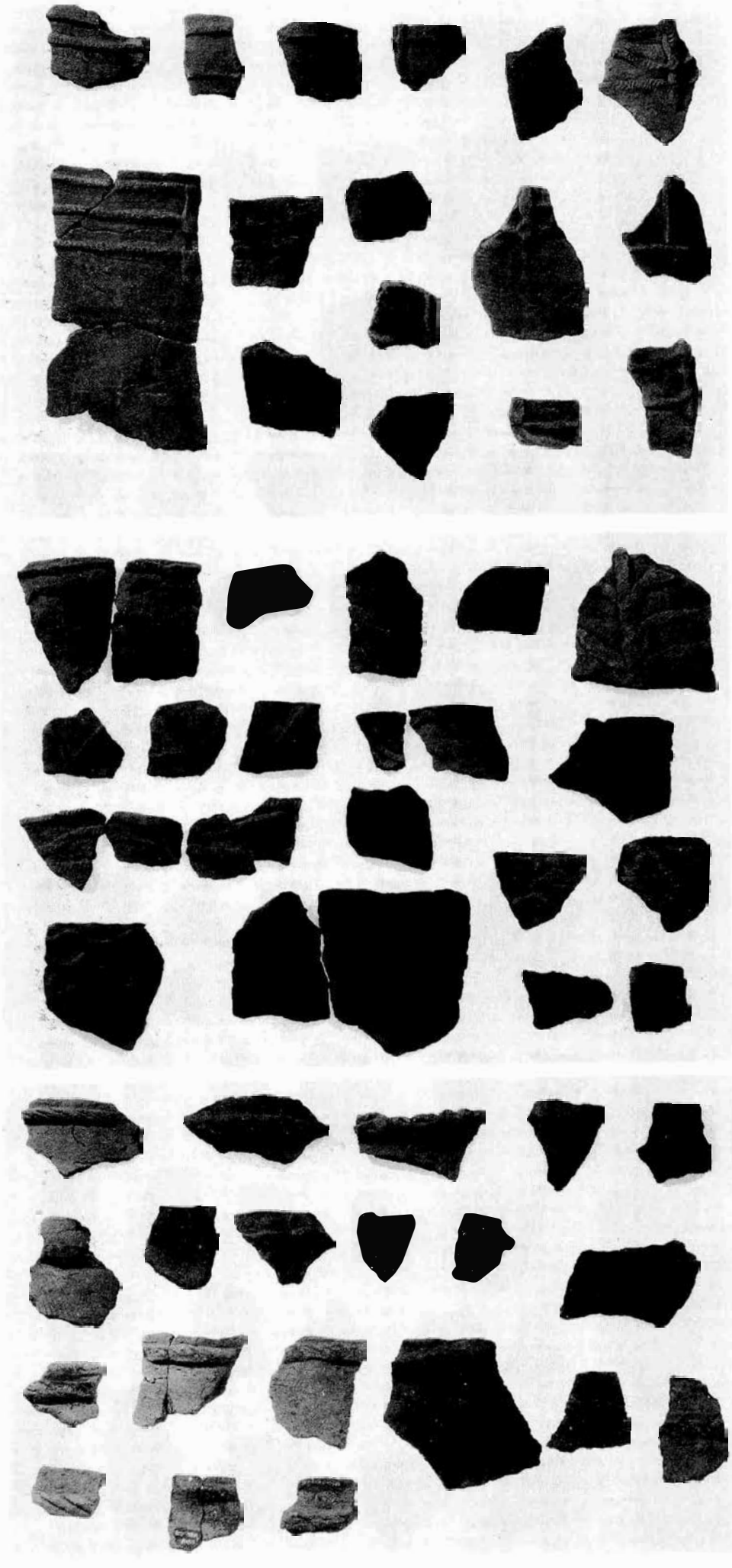


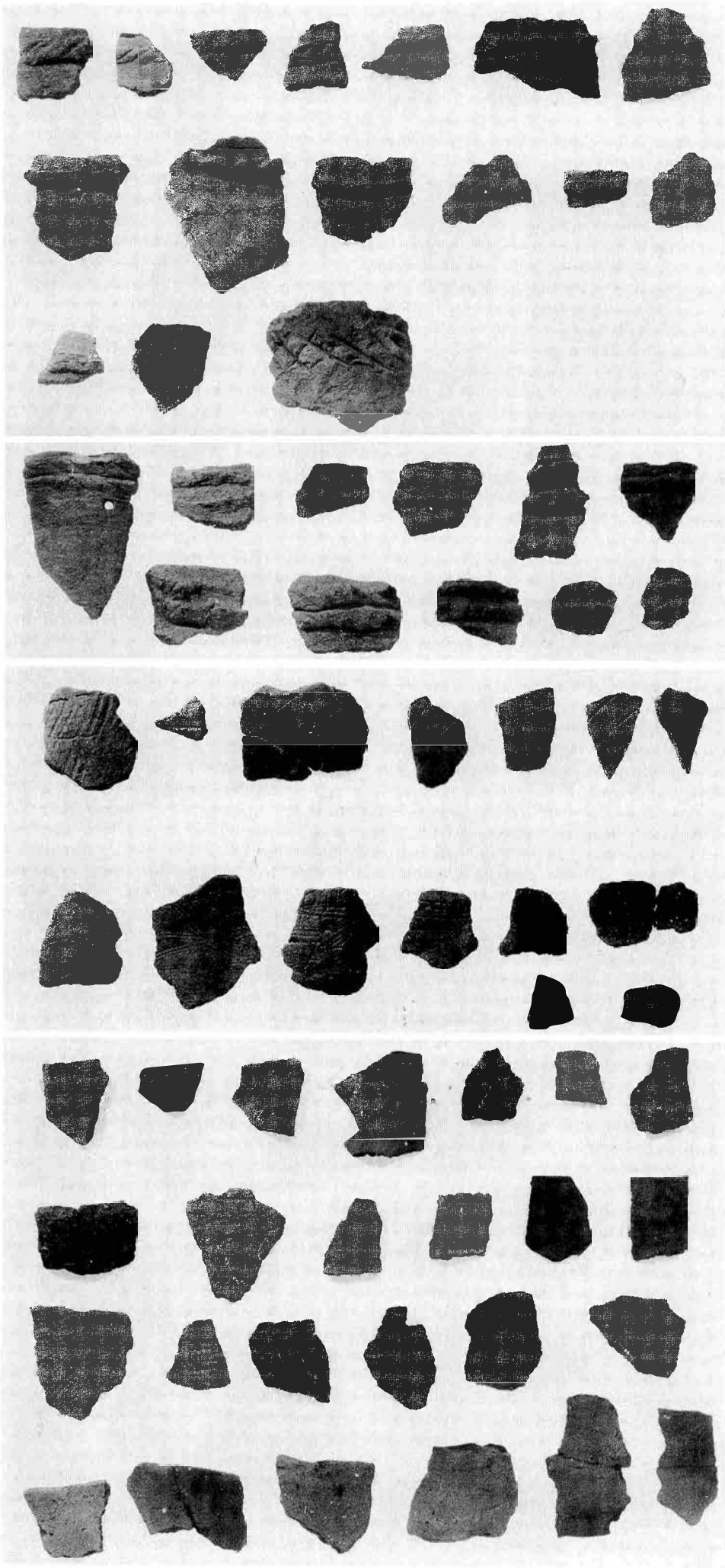




早期グリッド出土土器

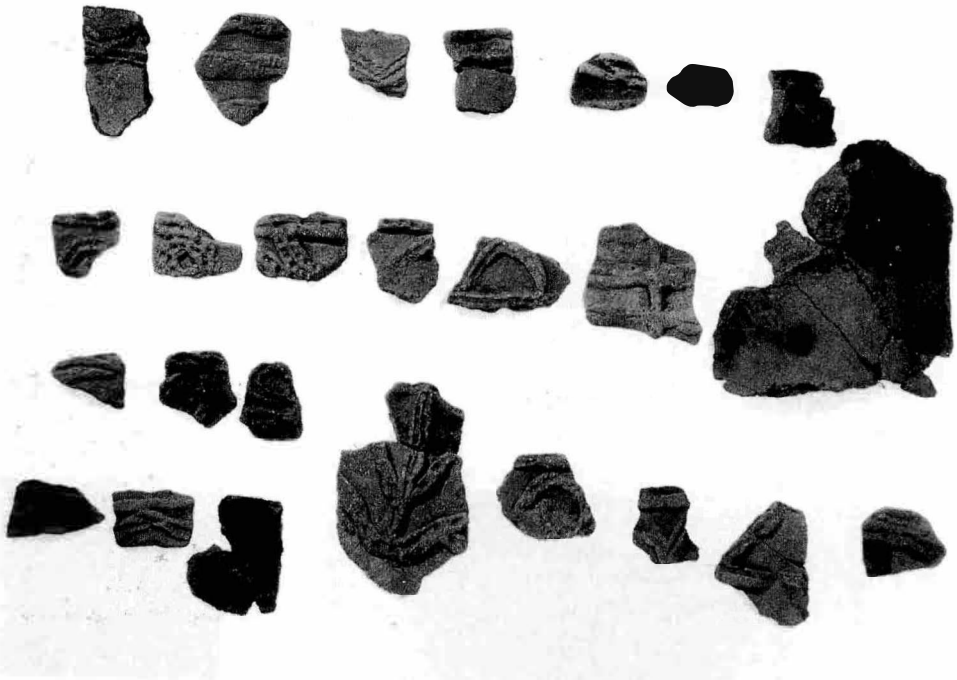
早期グリッド出土土器



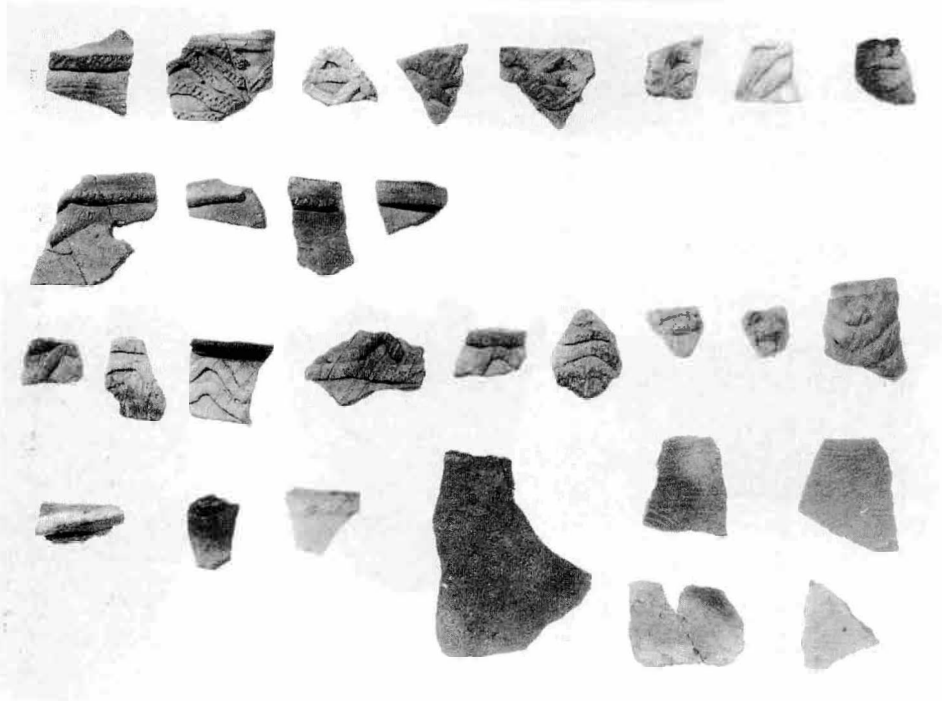


早期グリッド出土土器

前期初頭の土器

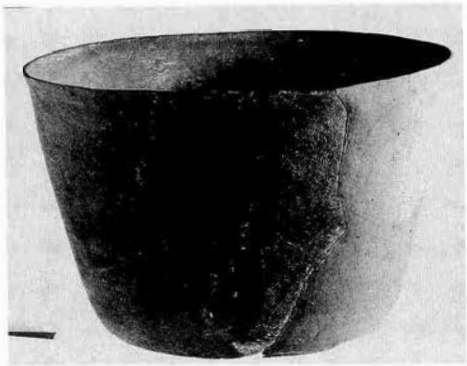


早期末〜前期初頭東海系土器



早期末〜前期初頭東海系土器

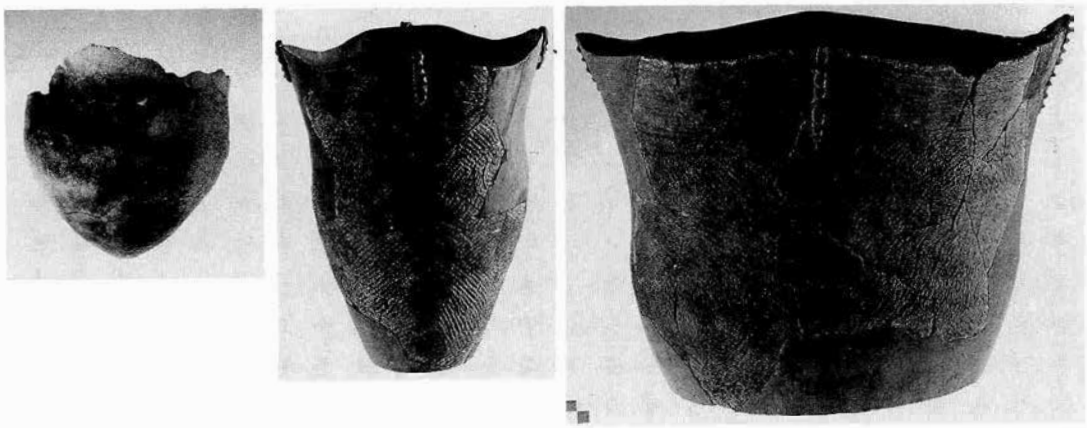
ＳＢ－02出土土器



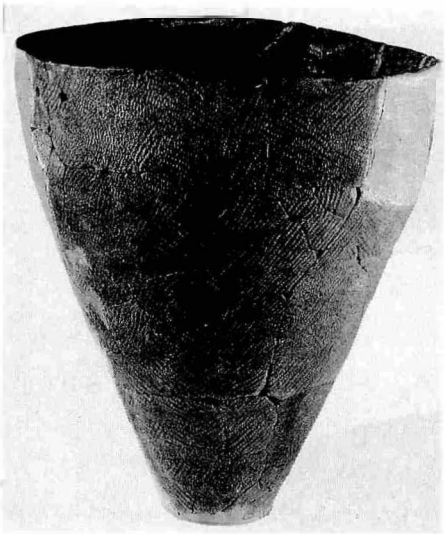
ＳＢ－03出土土器

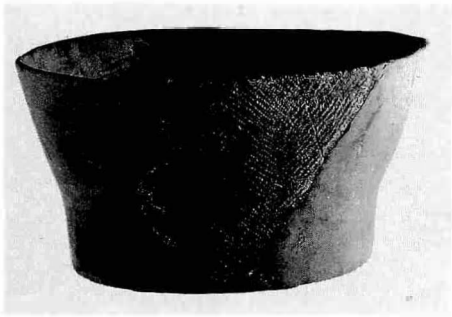
ＳＢ－出土土器

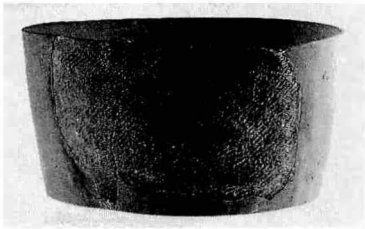
ＳＢ－06出土土器

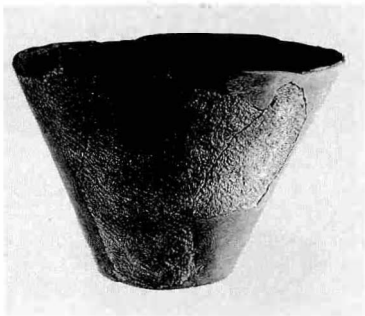


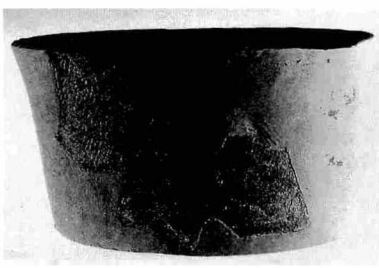
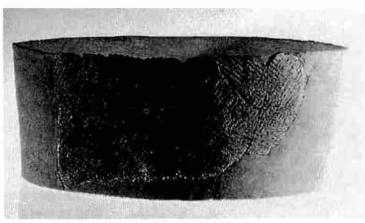
ＳＢ－06出土土器

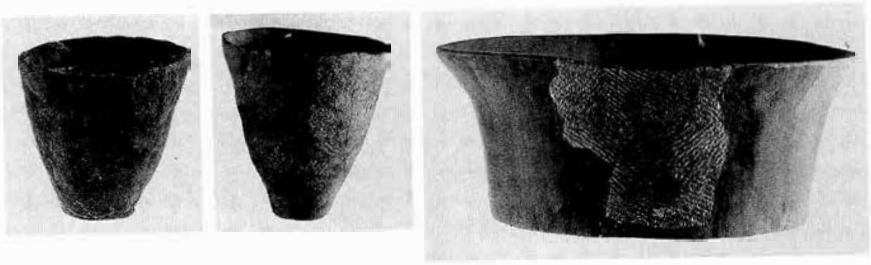




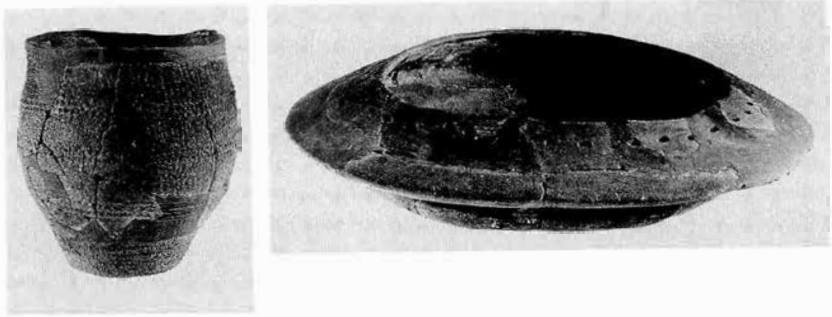




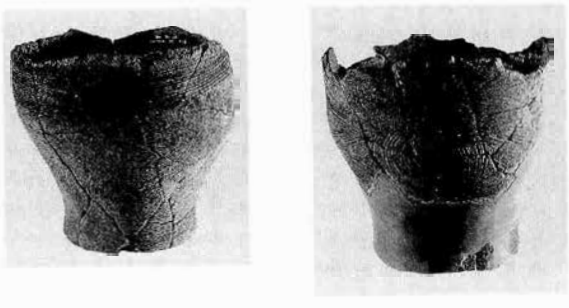


ＳＢ－06出土土器



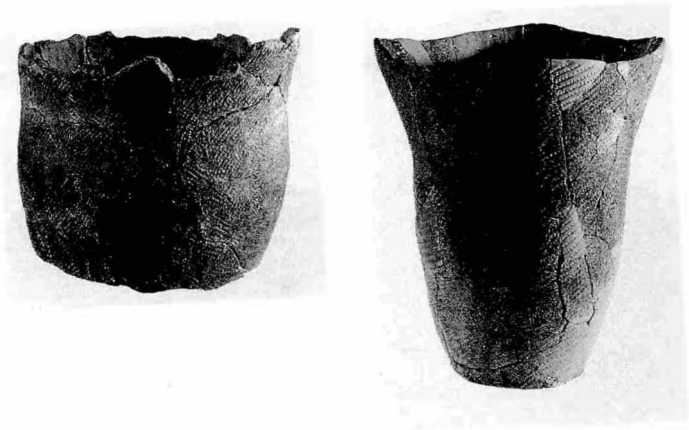
ＳＢ－07出土土器

ＳＢ－12出土土器

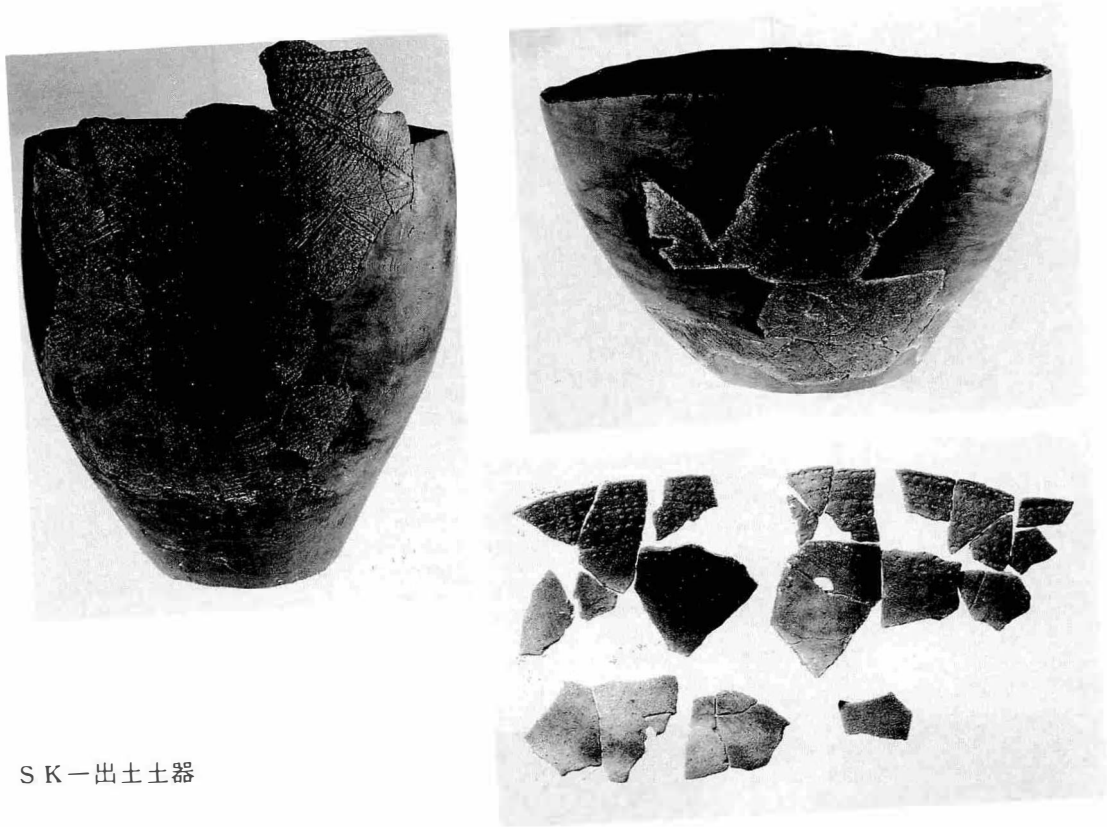


ＳＢ－20出土土器

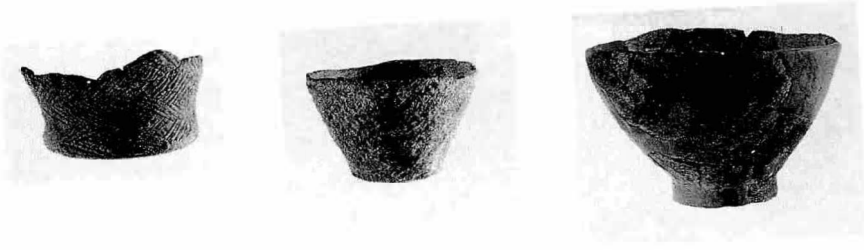
ＳＢ－28出土土器

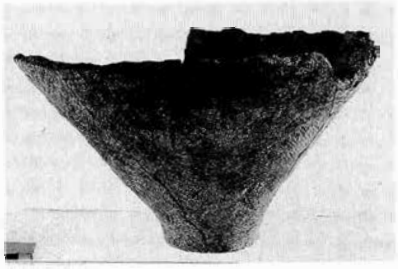


ＳＢ－41・42出土土器

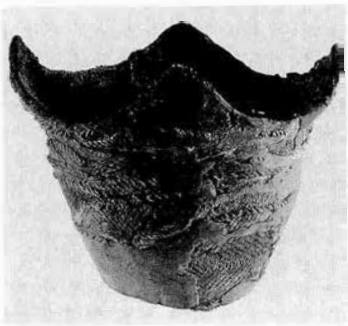


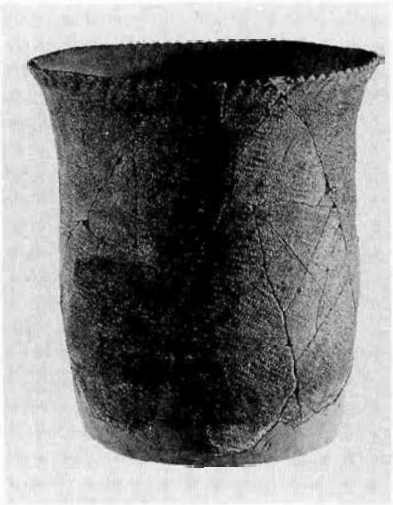
ＳＫ－出土土器





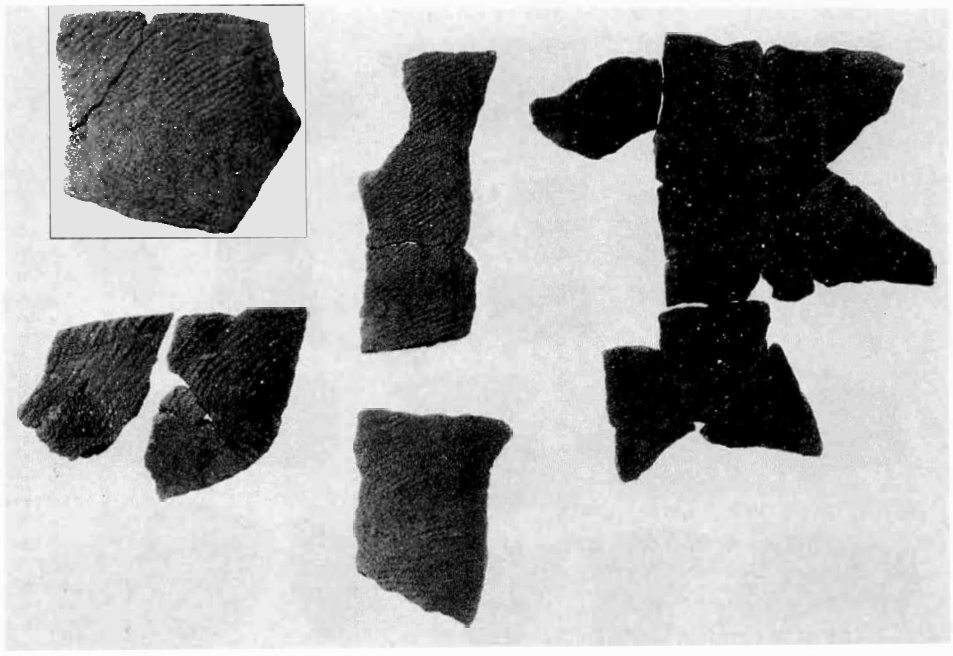
ＳＫ－出土土器

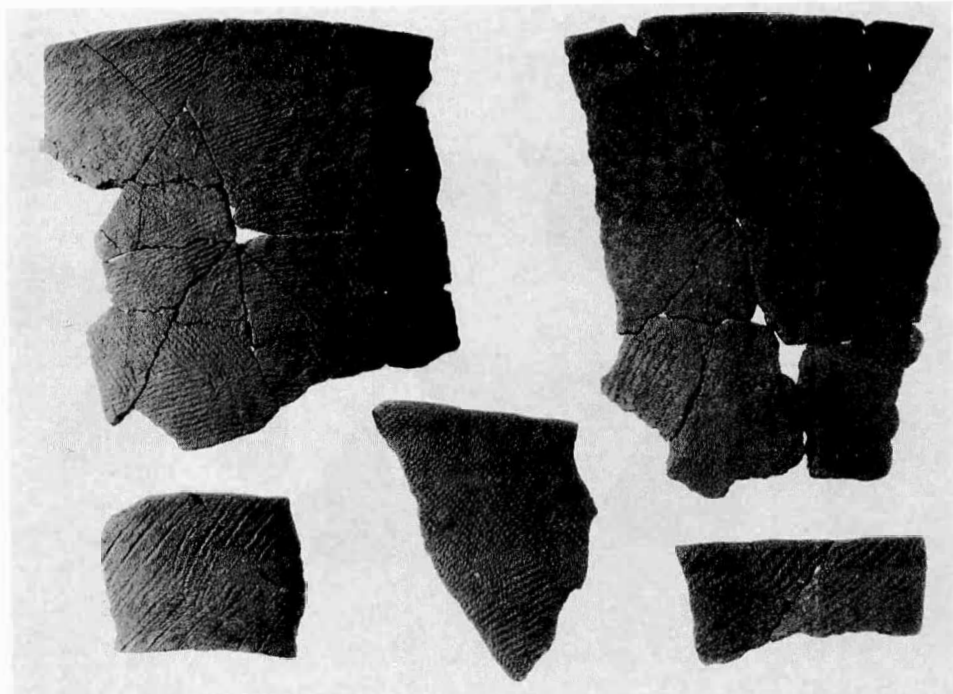




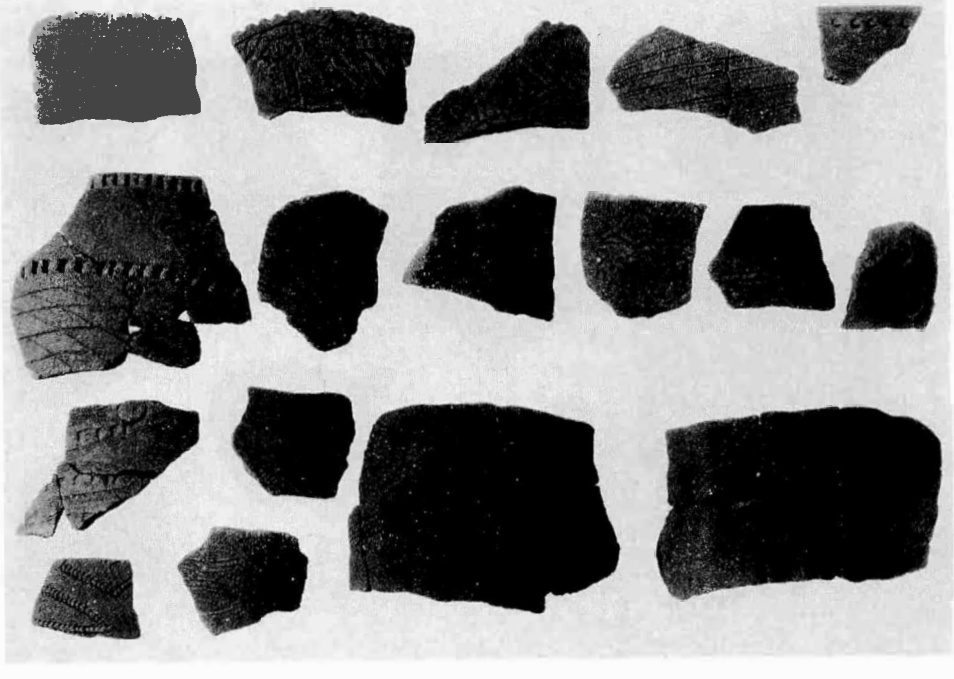
グリッド・その他出土土器

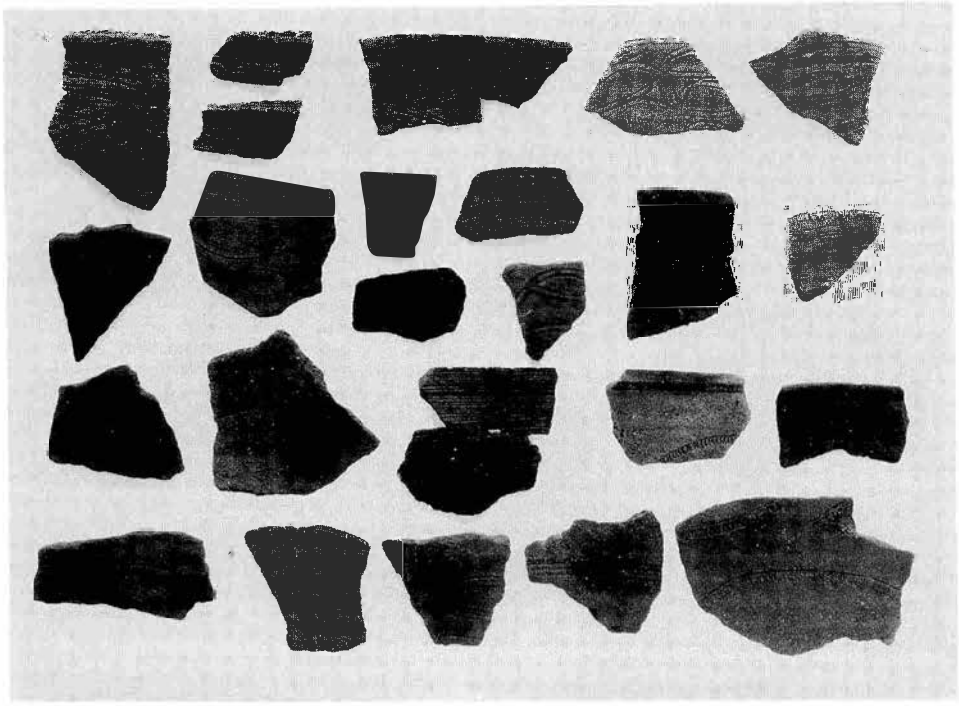
ＳＢ－02出土土器

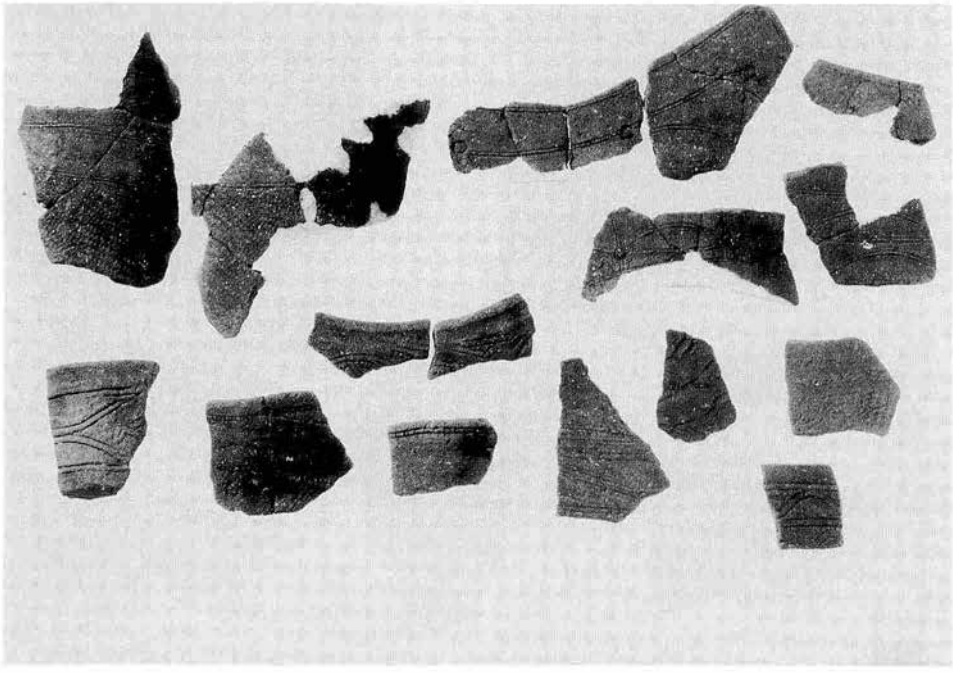


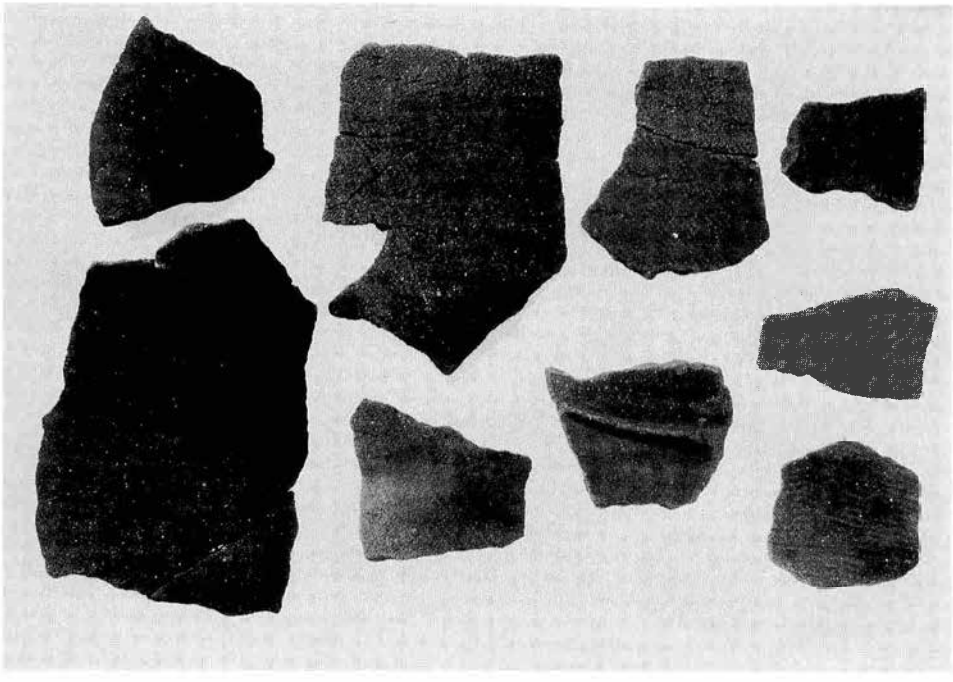


ＳＢ－03出土土器



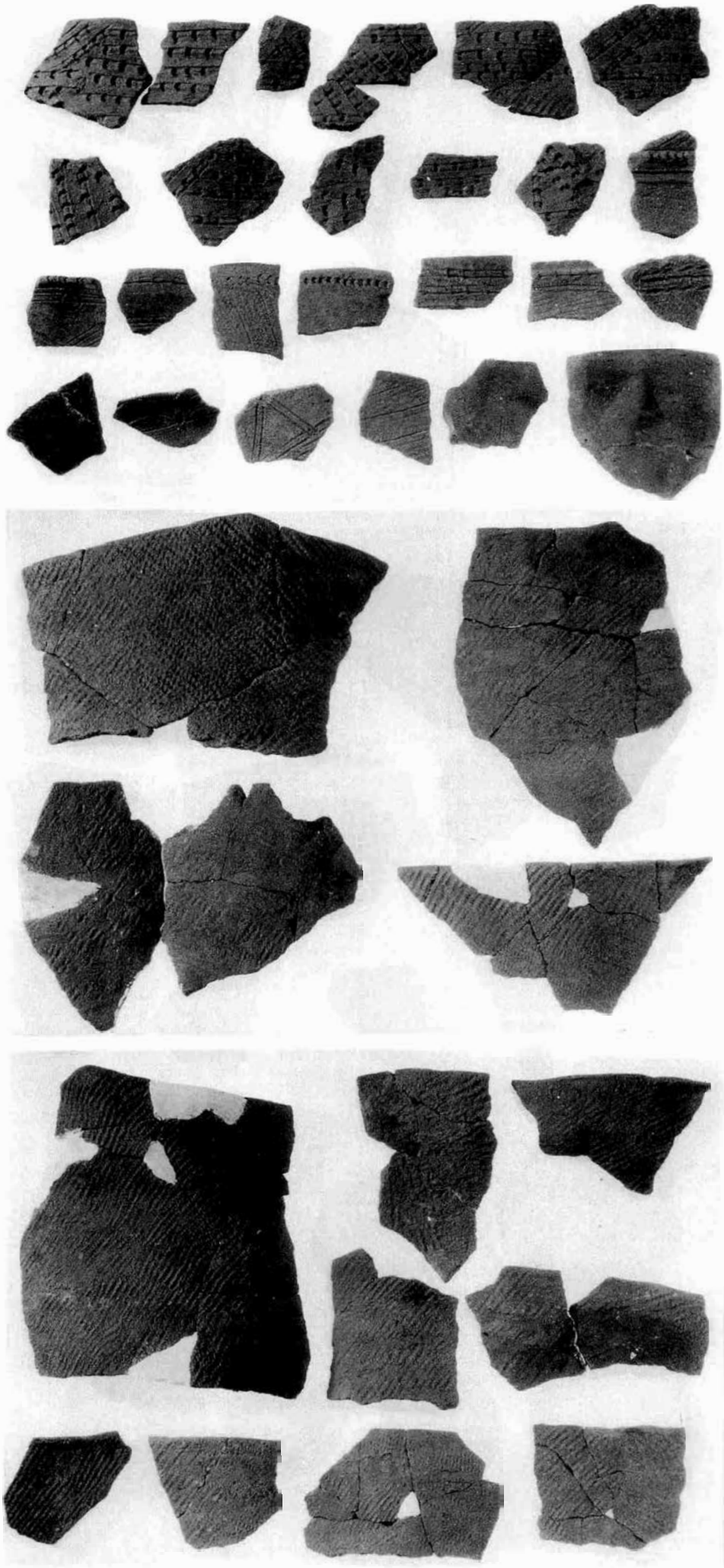


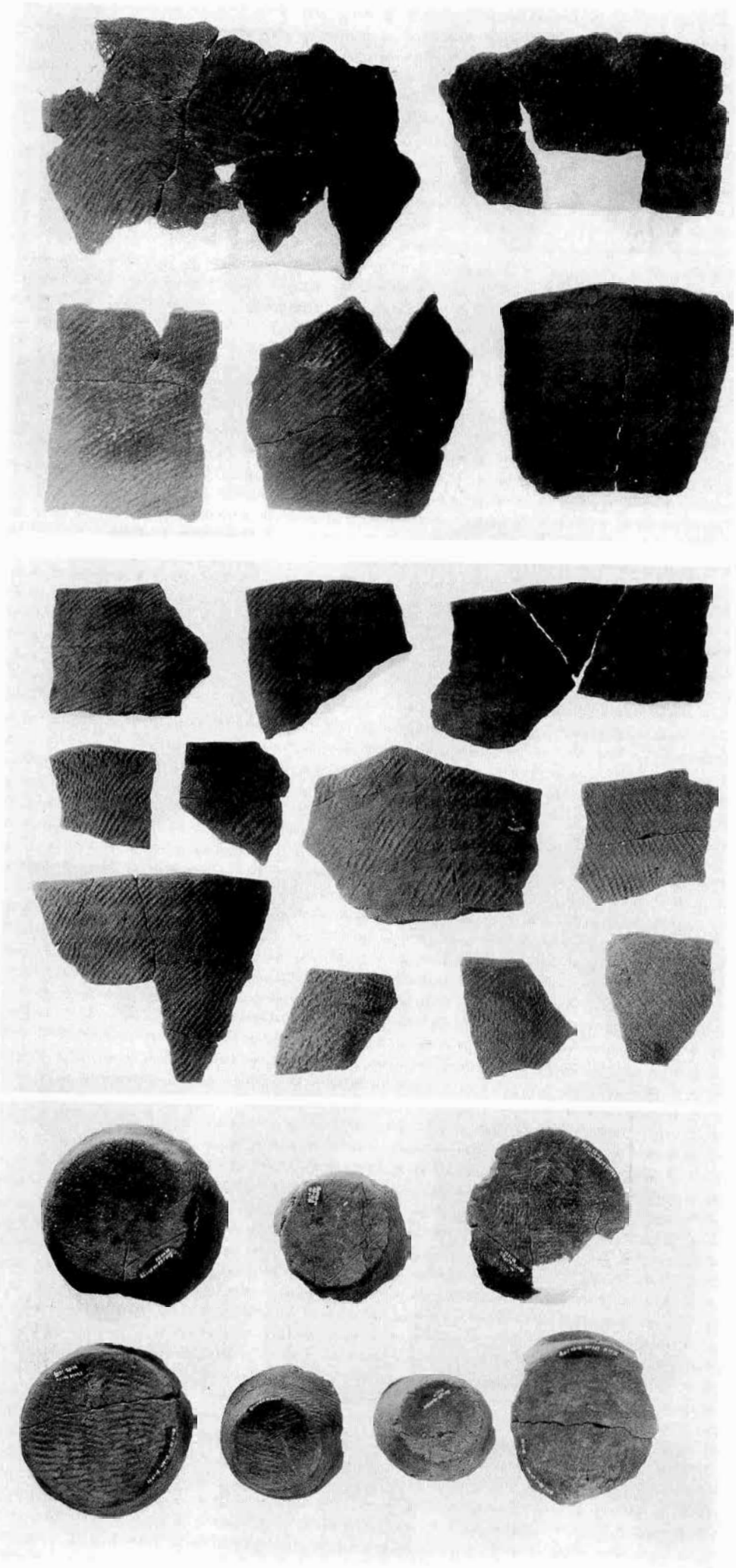




ＳＢ—03出土土器

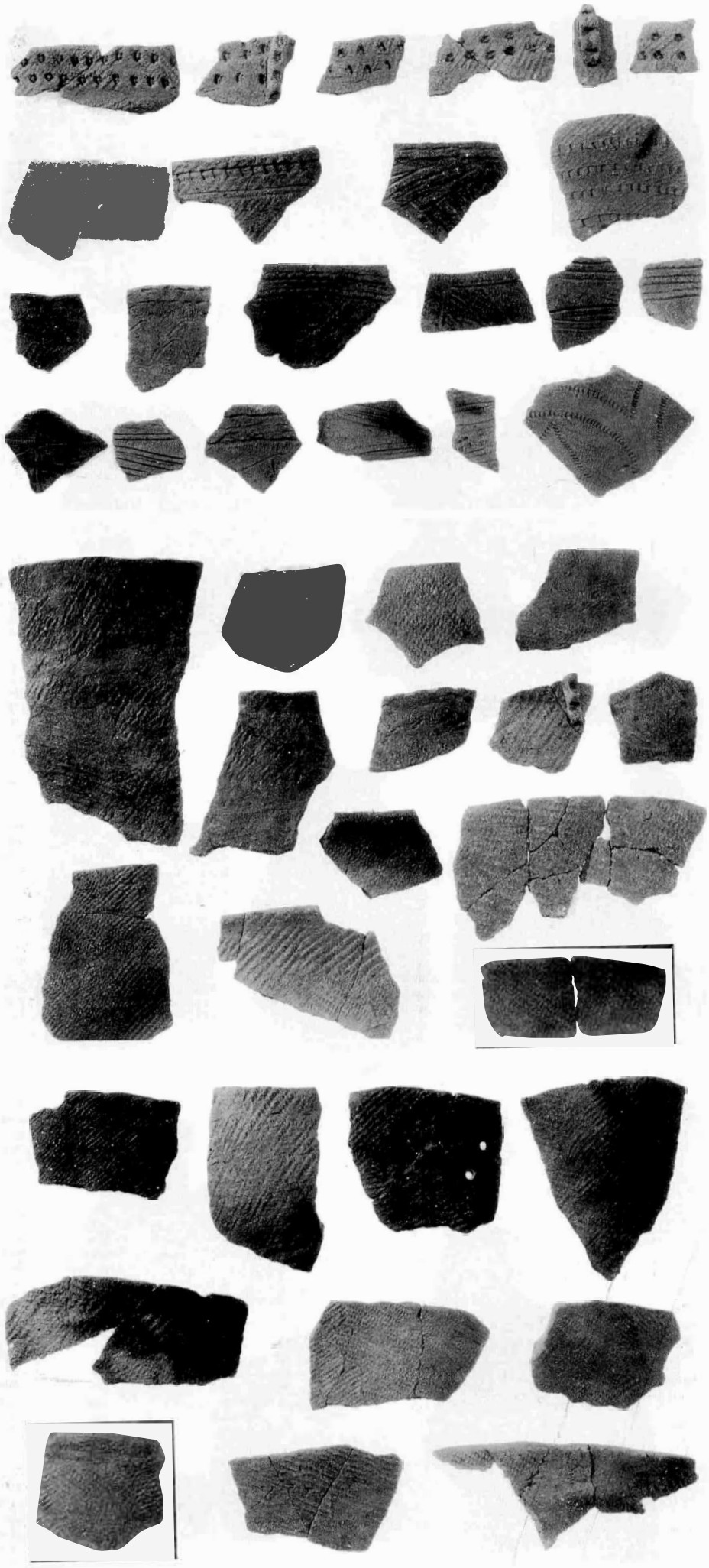
ＳＢ－05出土土器

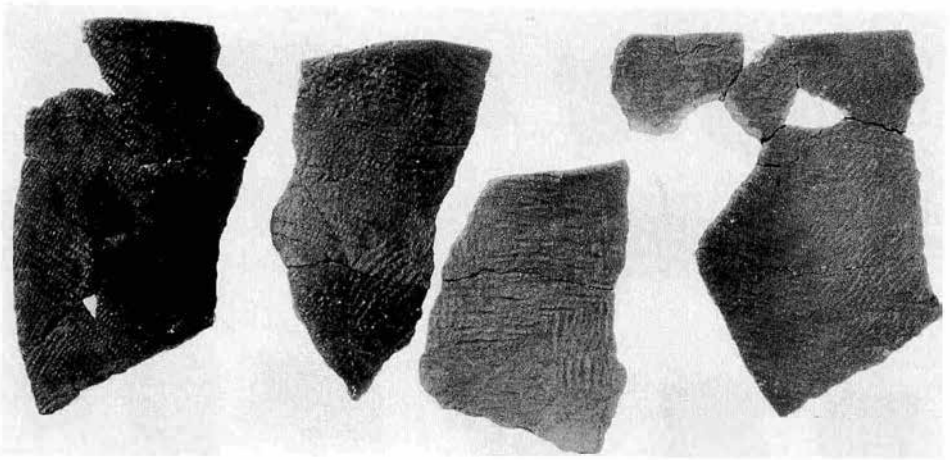


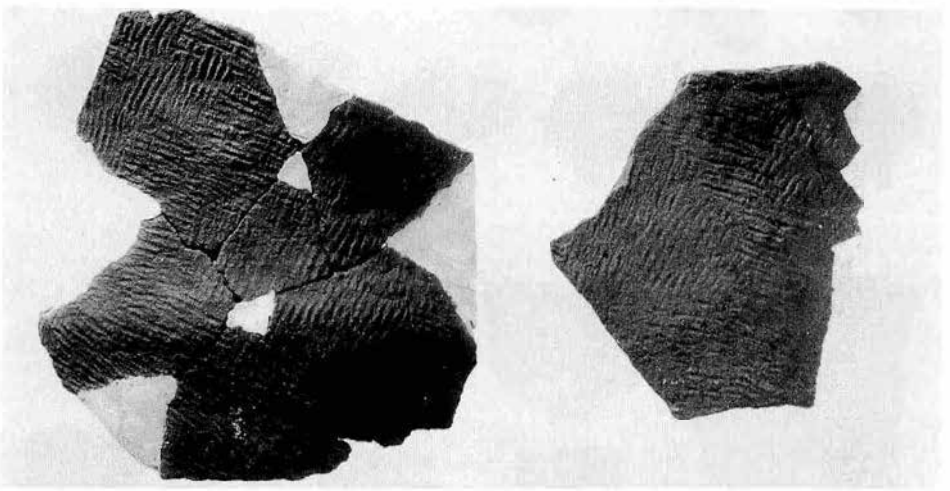


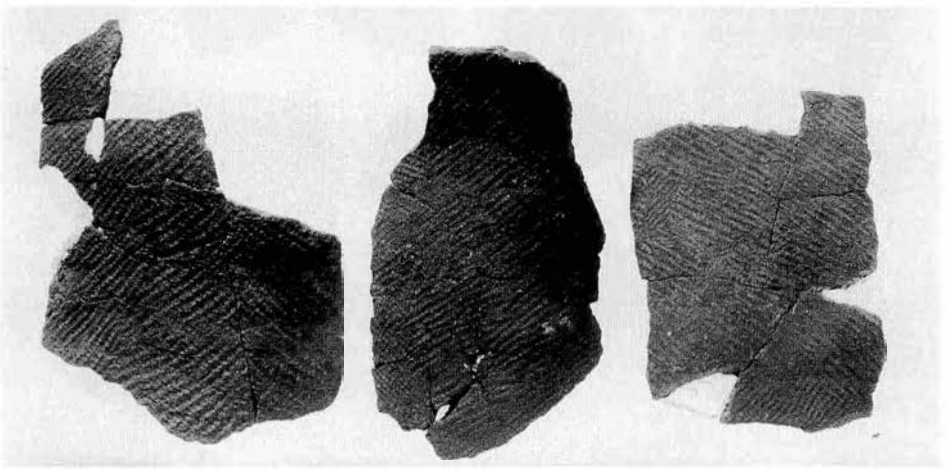
ＳＢ－05出土土器

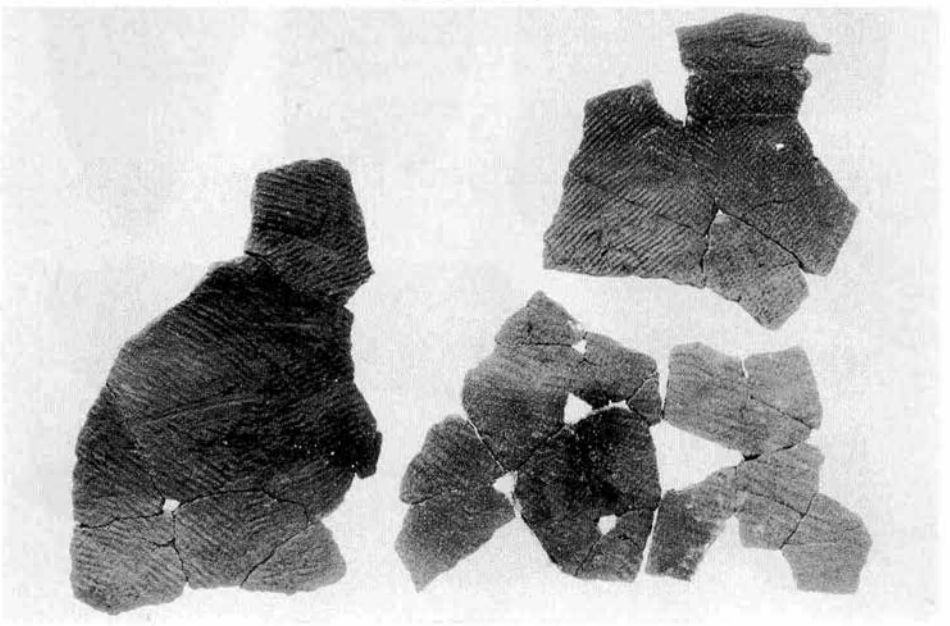
ＳＢ－06出土土器





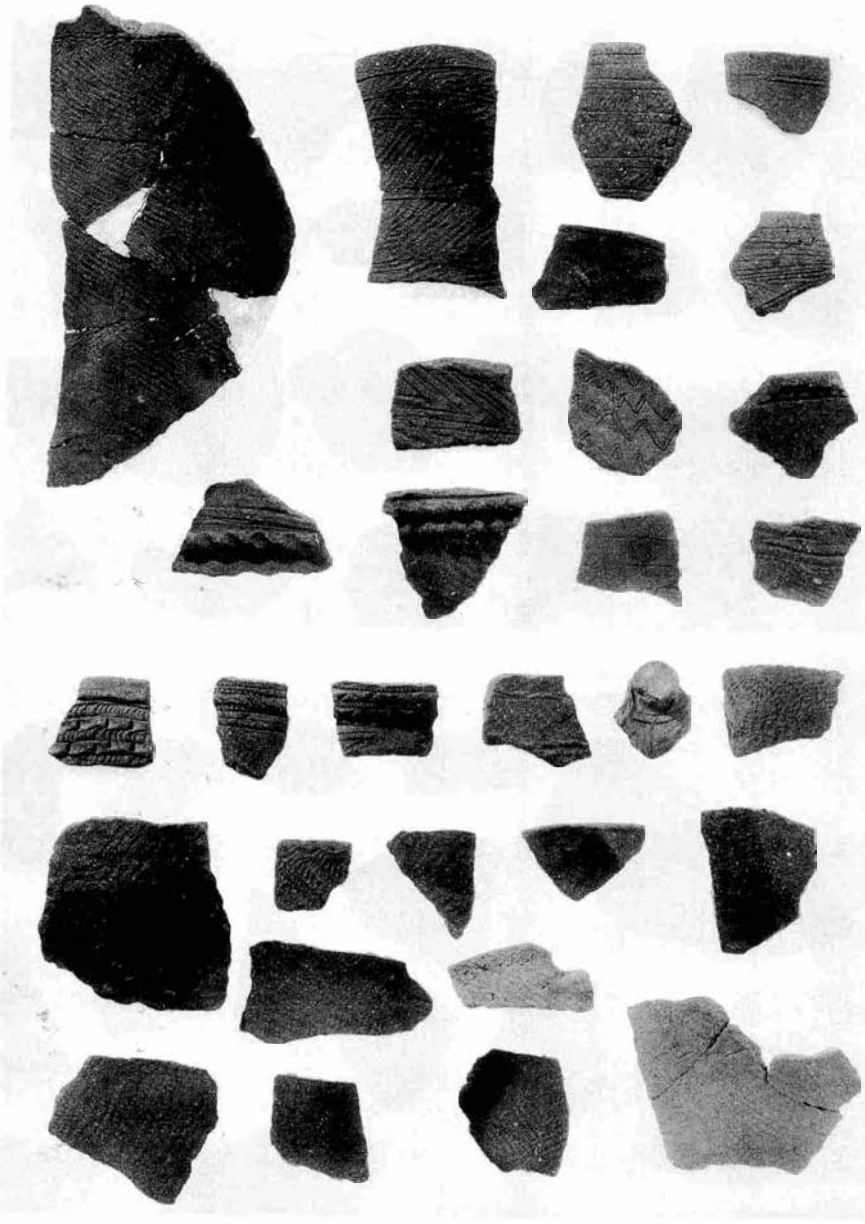




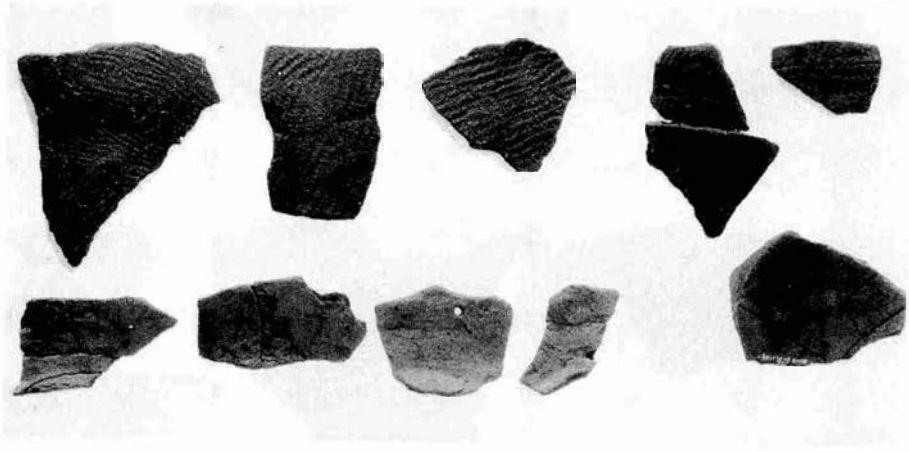


ＳＢ―06出土土器

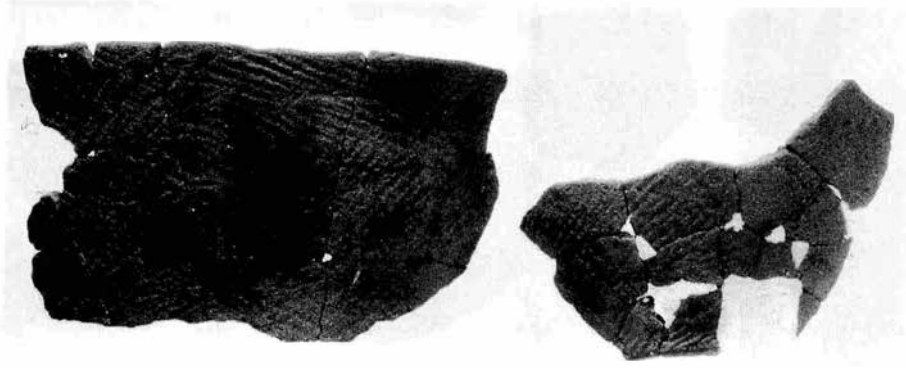
ＳＢ－07出土土器

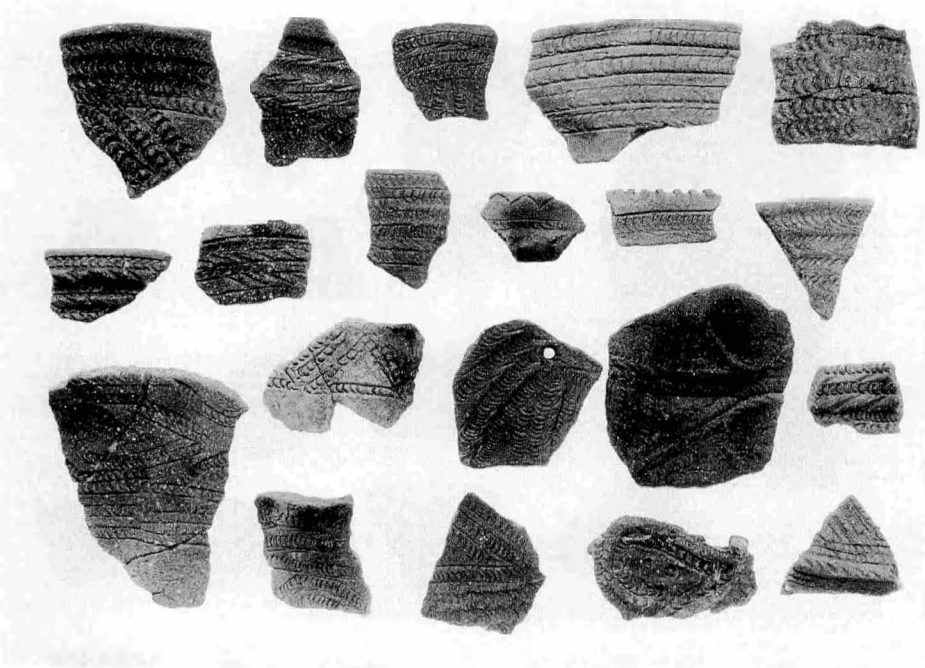


ＳＢ－08出土土器

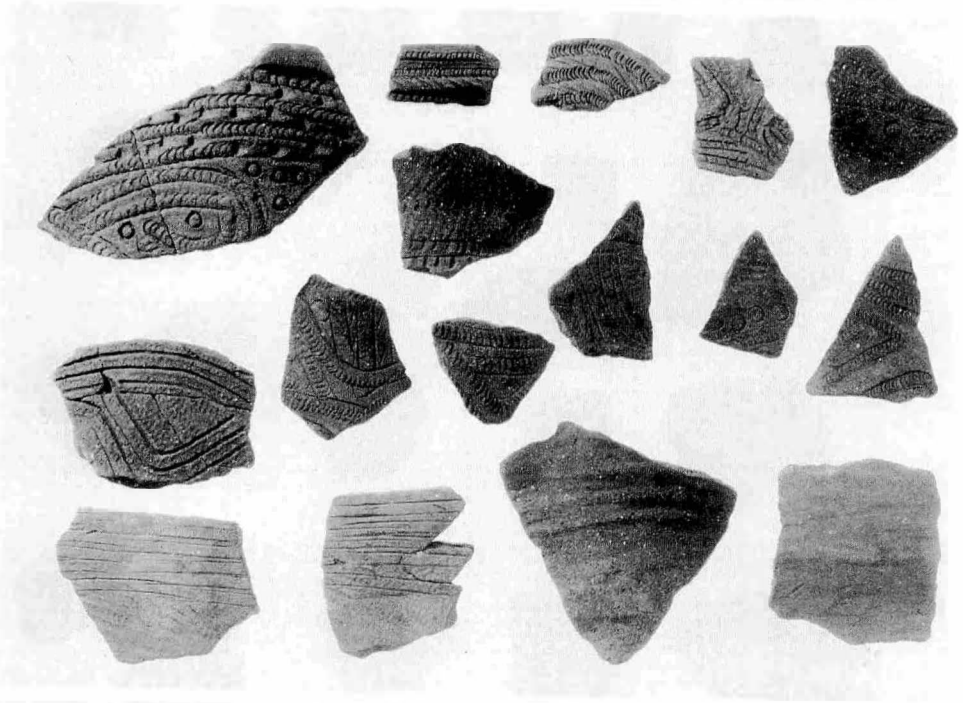


ＳＢ－09出土土器

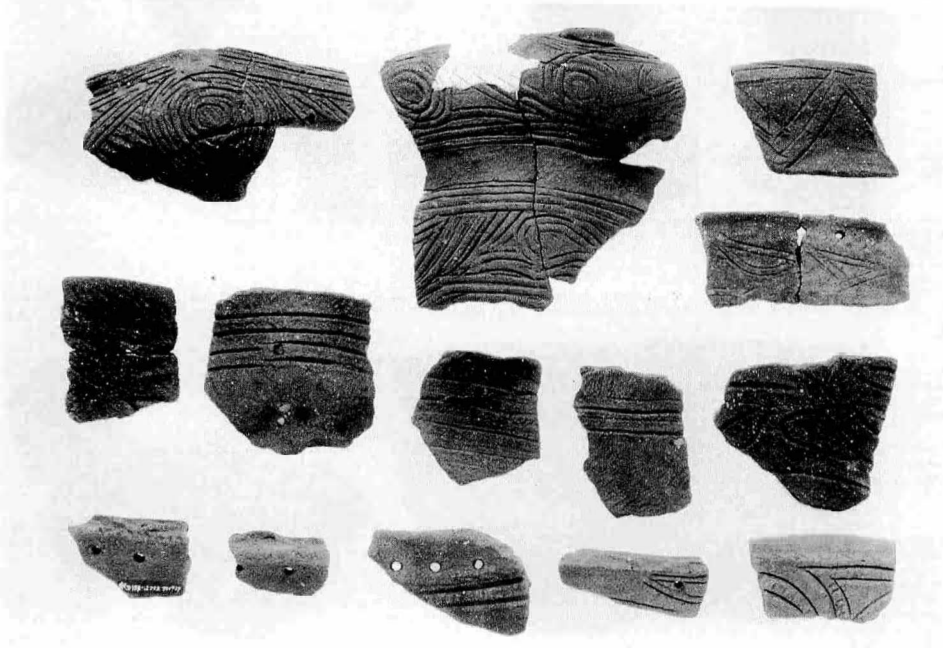




ＳＢ－12 出土土器

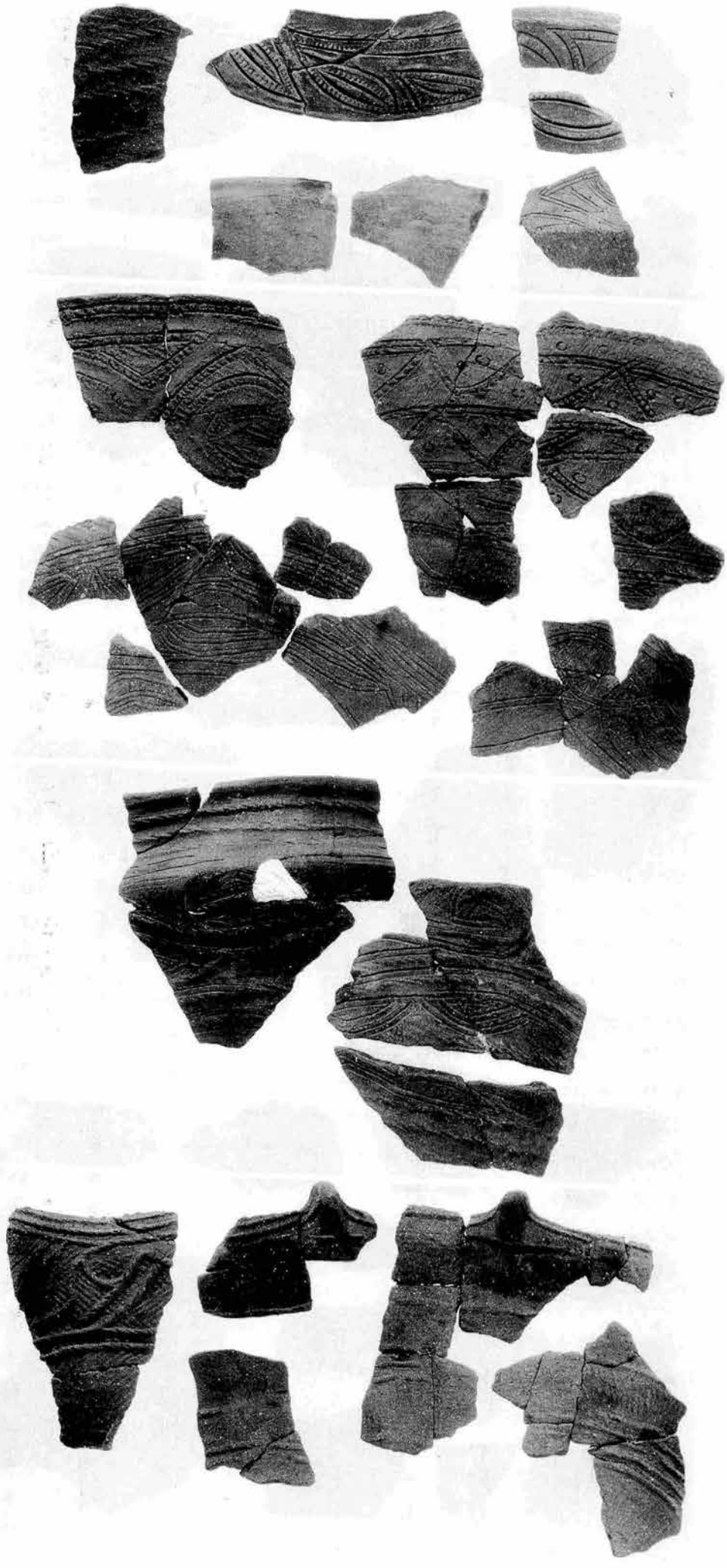


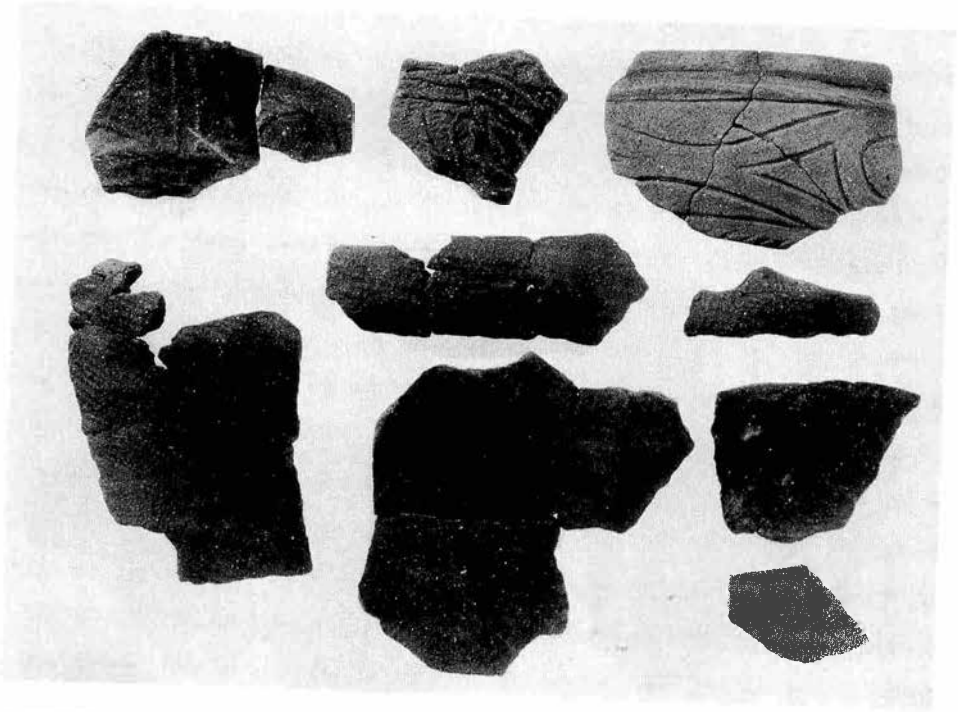
ＳＢ－12出土土器



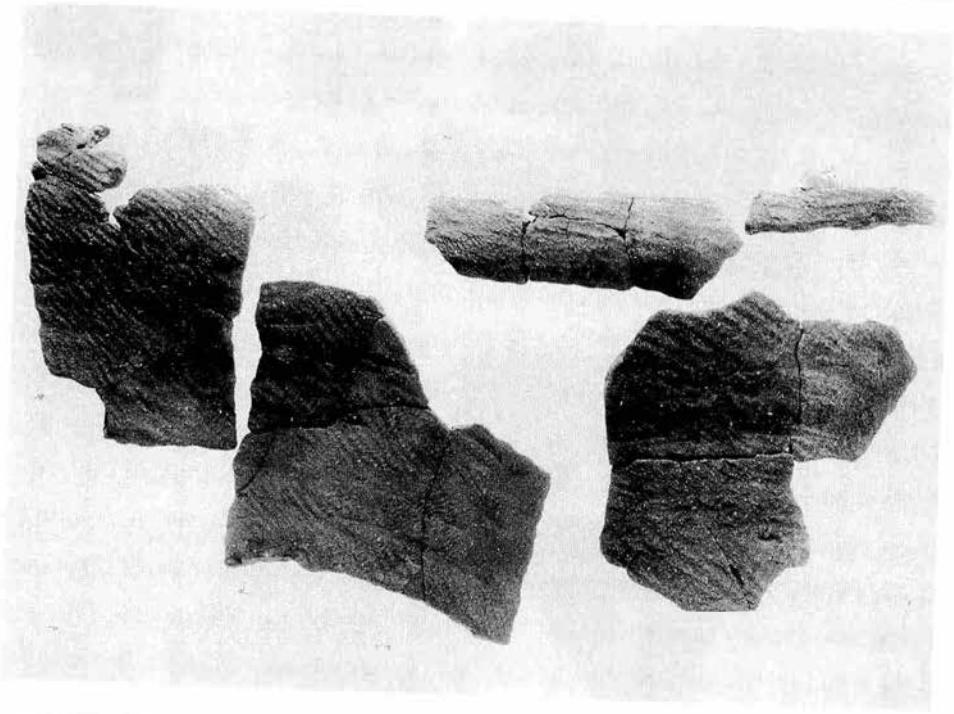
ＳＢ－12出土土器

ＳＢ－12出土土器

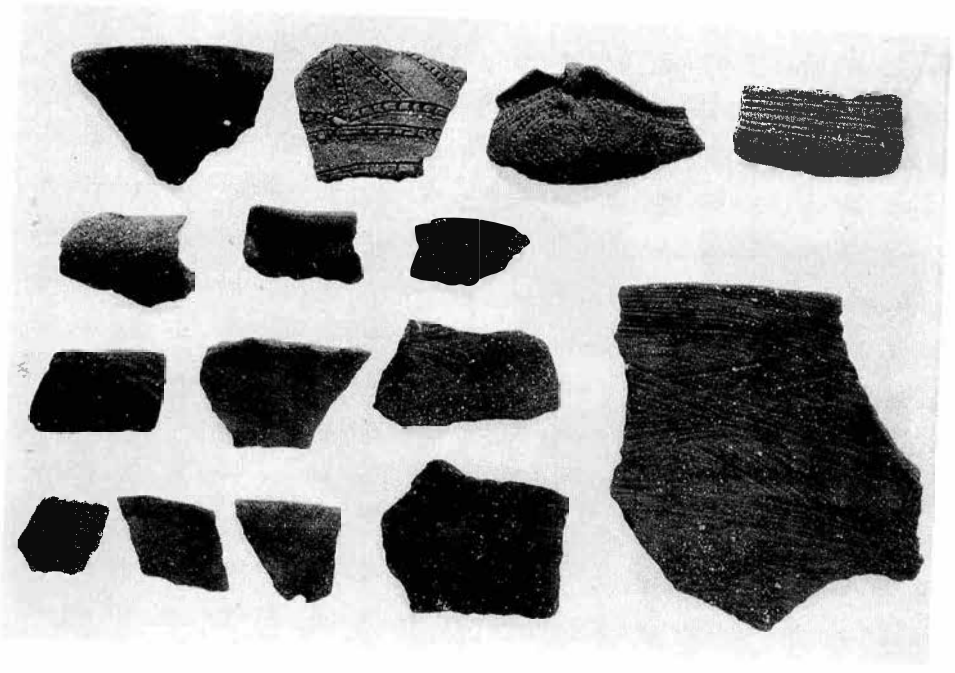




ＳＢ－12出土土器

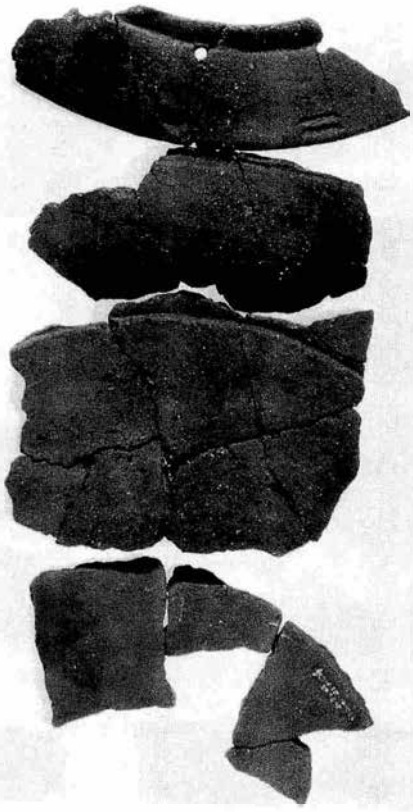


ＳＢ－12出土土器

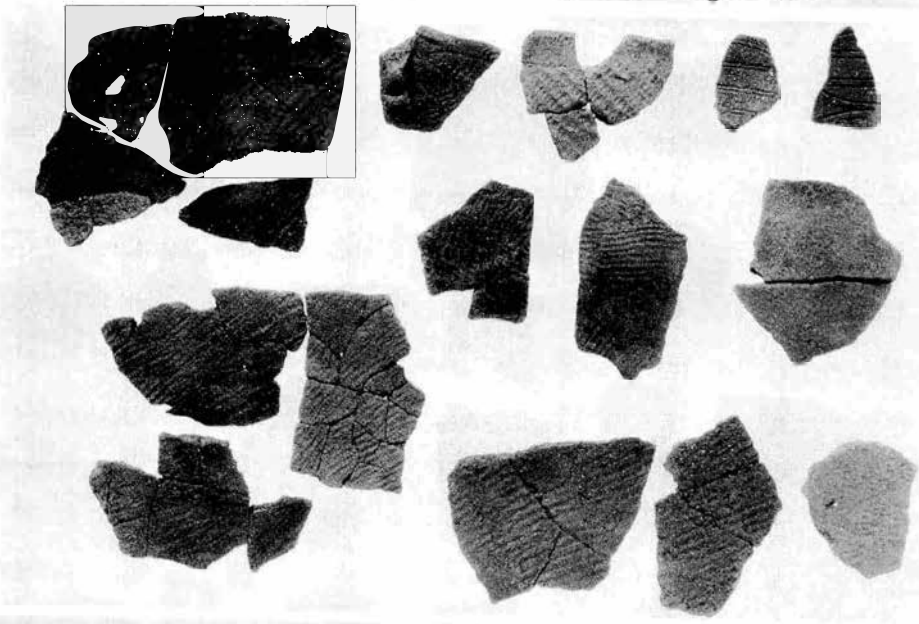


ＳＢ－20出土土器

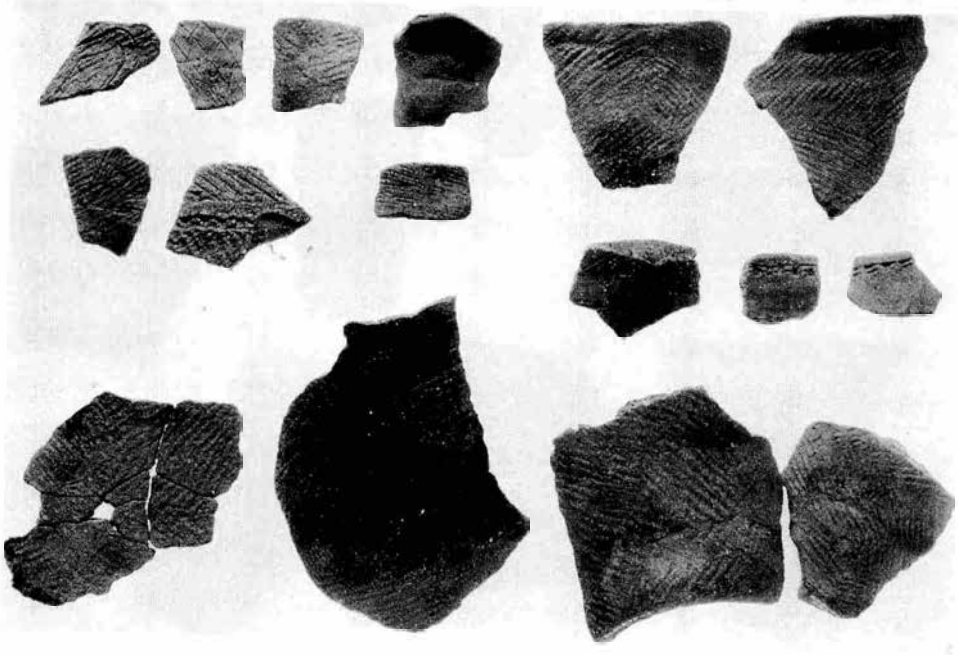
ＳＢ－20出土土器

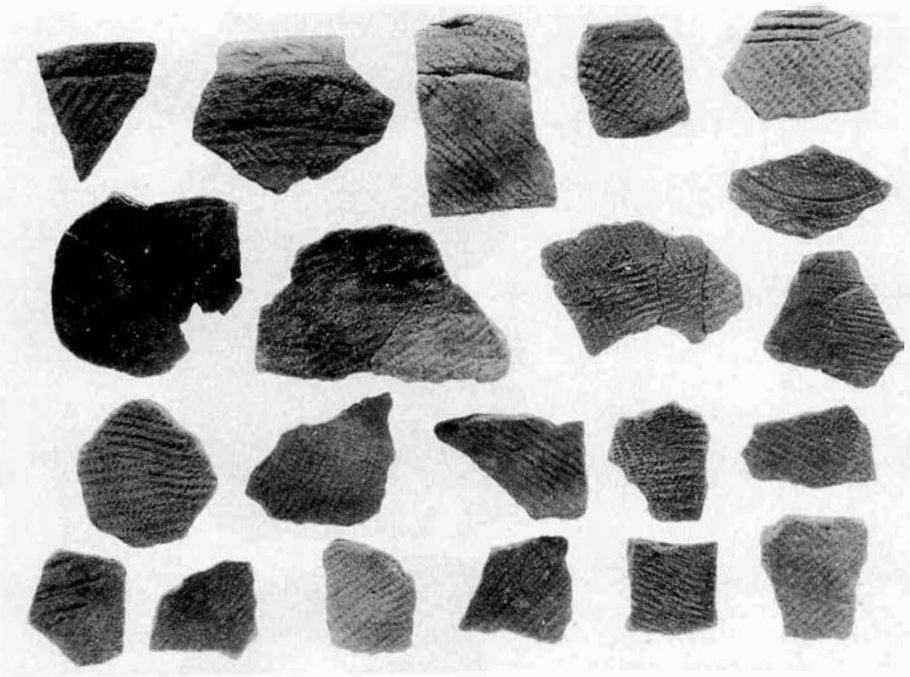


ＳＢ－27出土土器

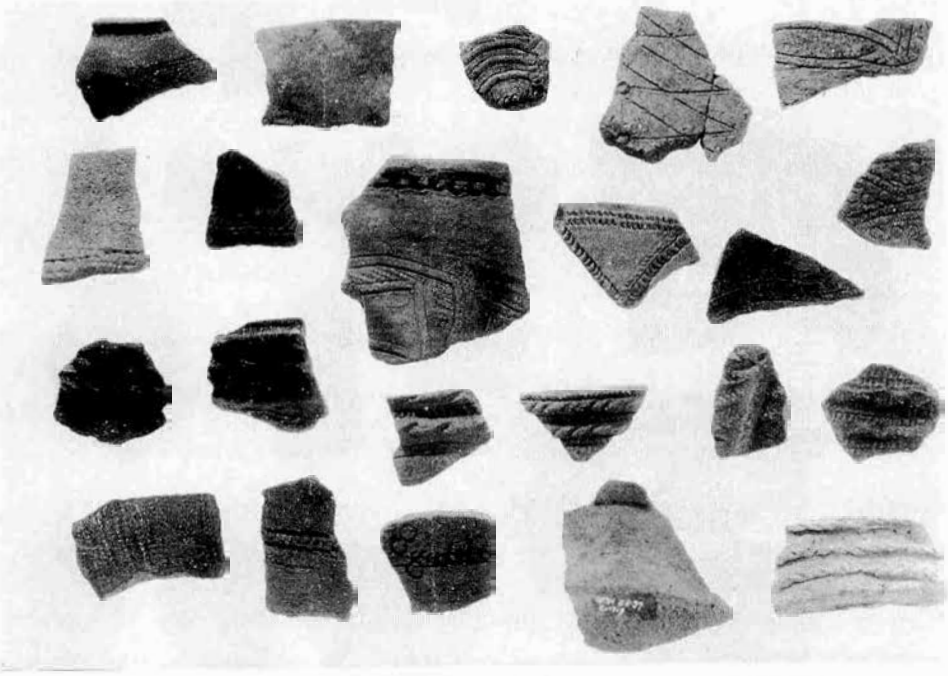


ＳＢ－21出土土器

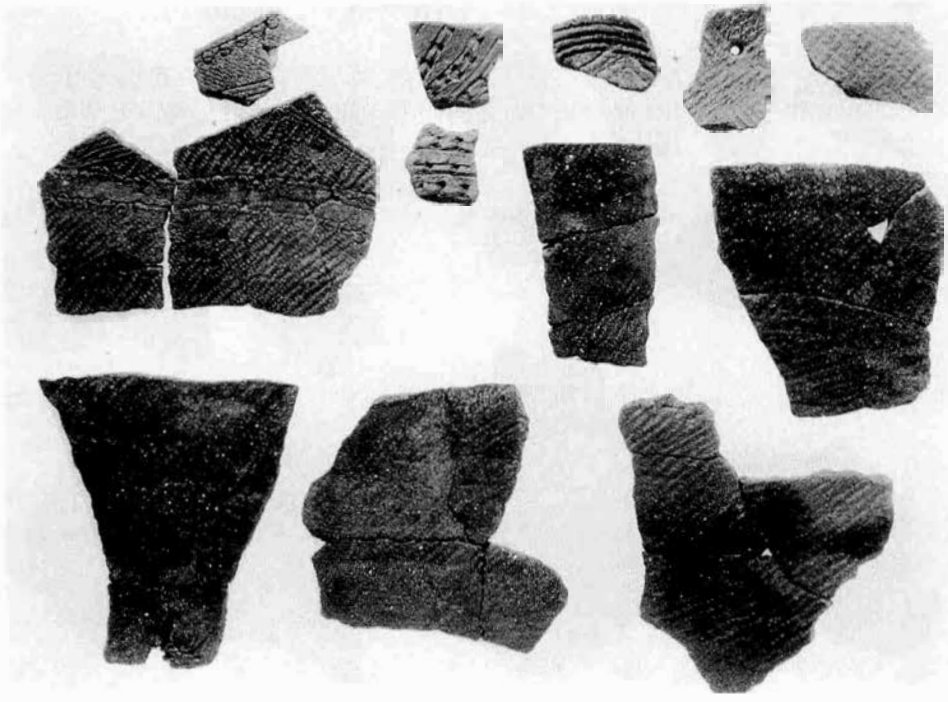




ＳＢ―28出土土器



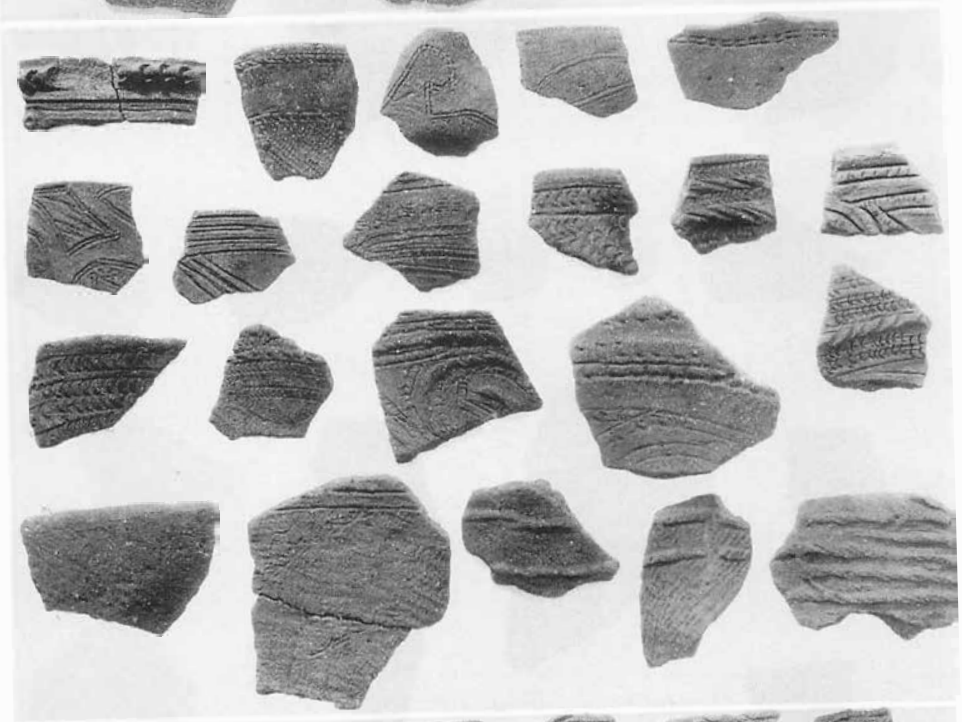
ＳＢ―37出土土器



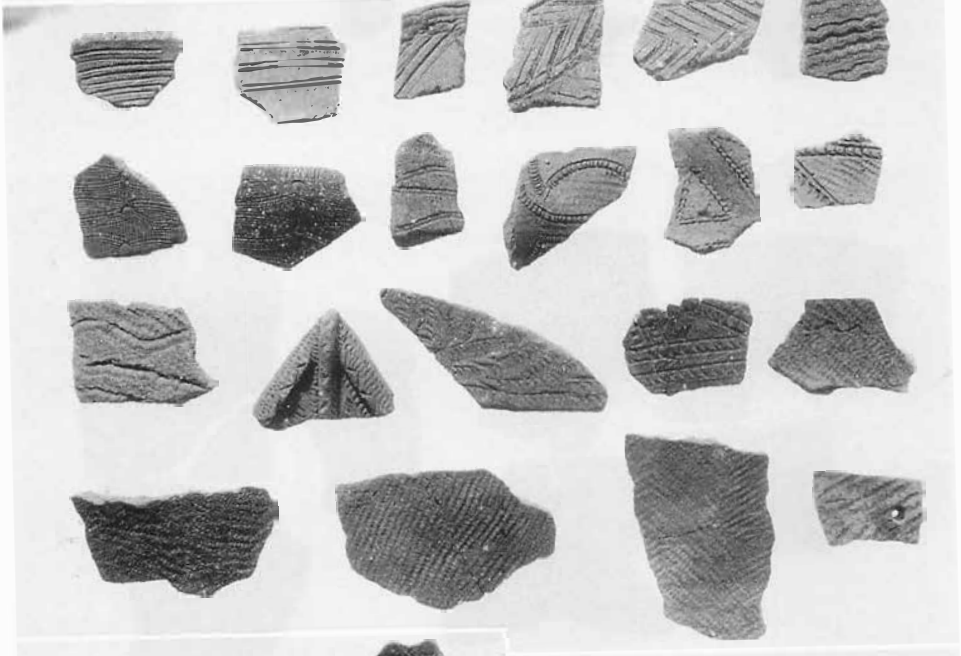
ＳＢ―39出土土器

ＳＢ―41・42出土土器

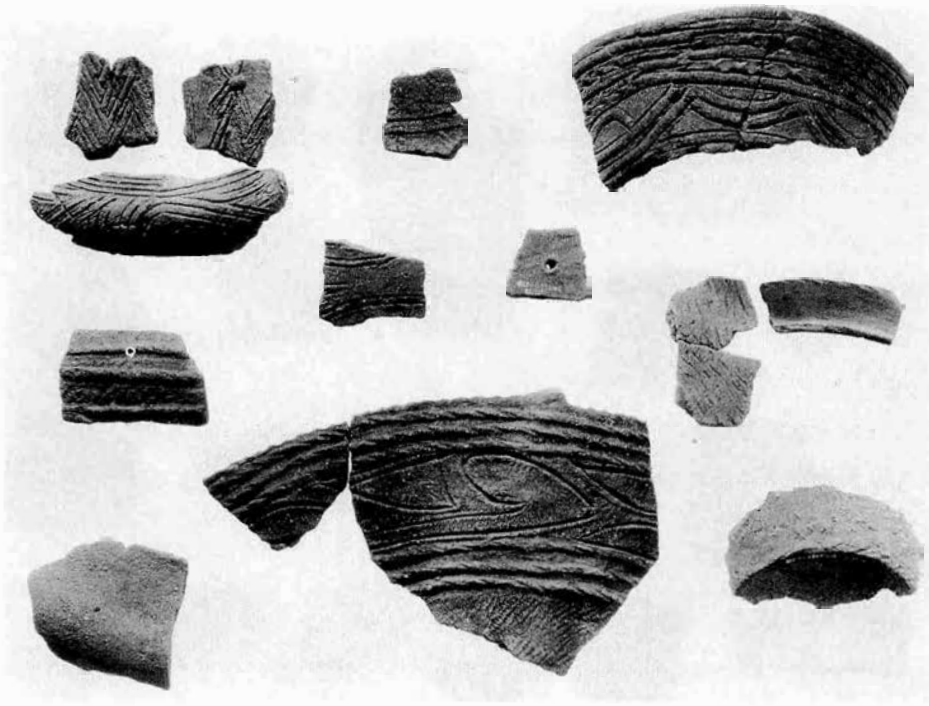
ＳＢ―43出土土器



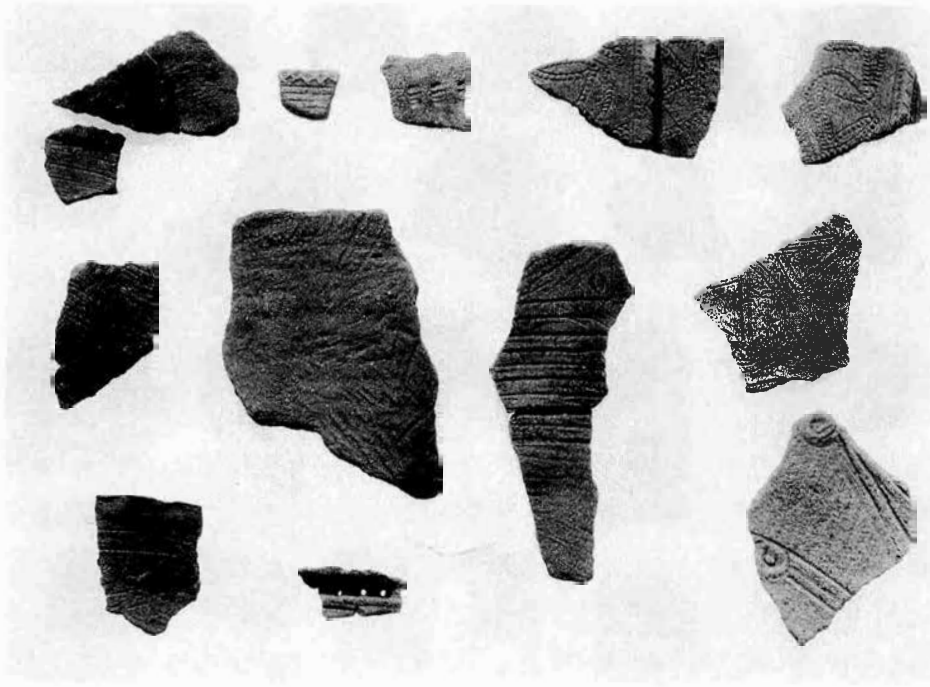
ＳＢ―45出土土器



ＳＢ―55出土土器



ＳＫ一出土土器

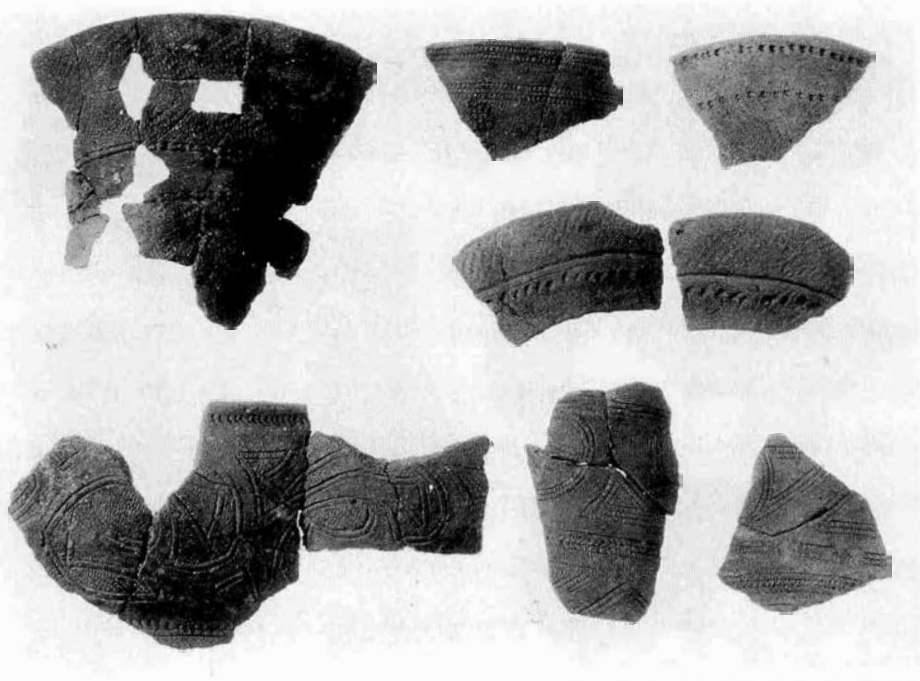


ＳＫ一出土土器

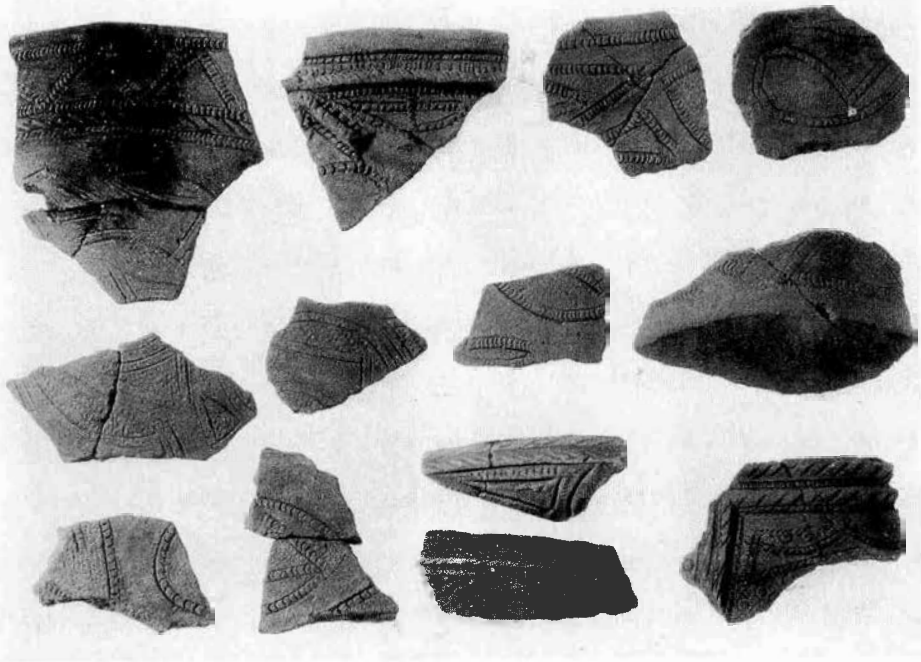
釈迦堂Ｚ３式
黒浜式併行

釈迦堂Ｚ３式
グリッド出土黒浜式併行

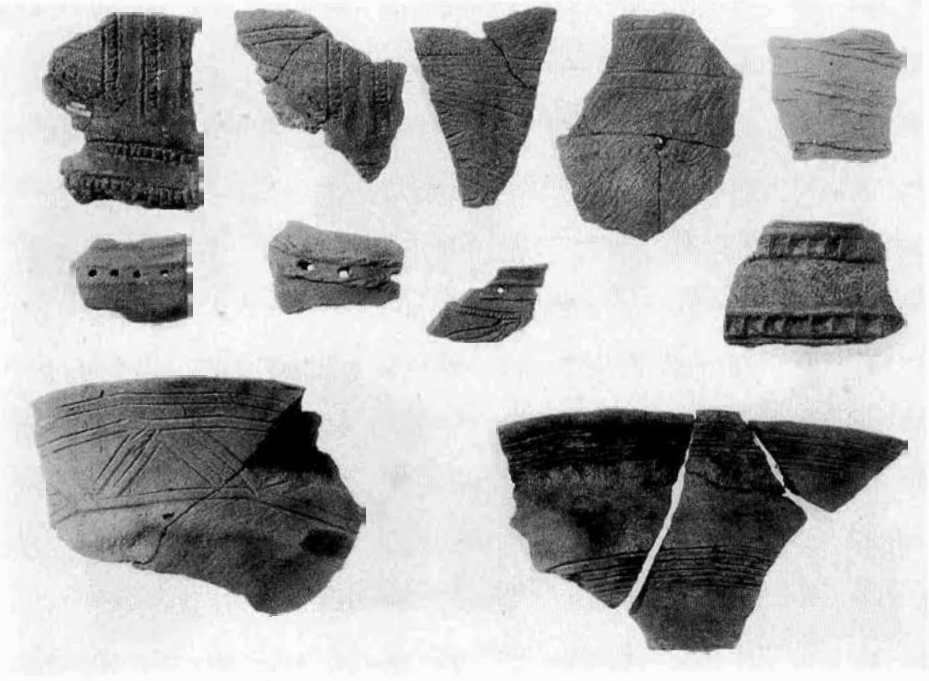
図版60



グリッド出土諸磯ａ式

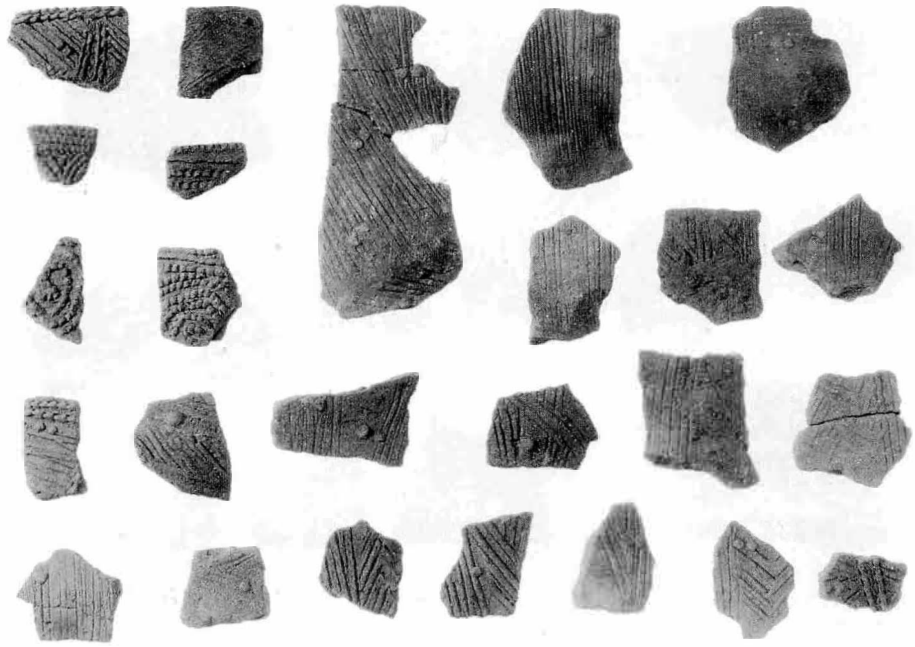


グリッド出土諸磯ｂ式

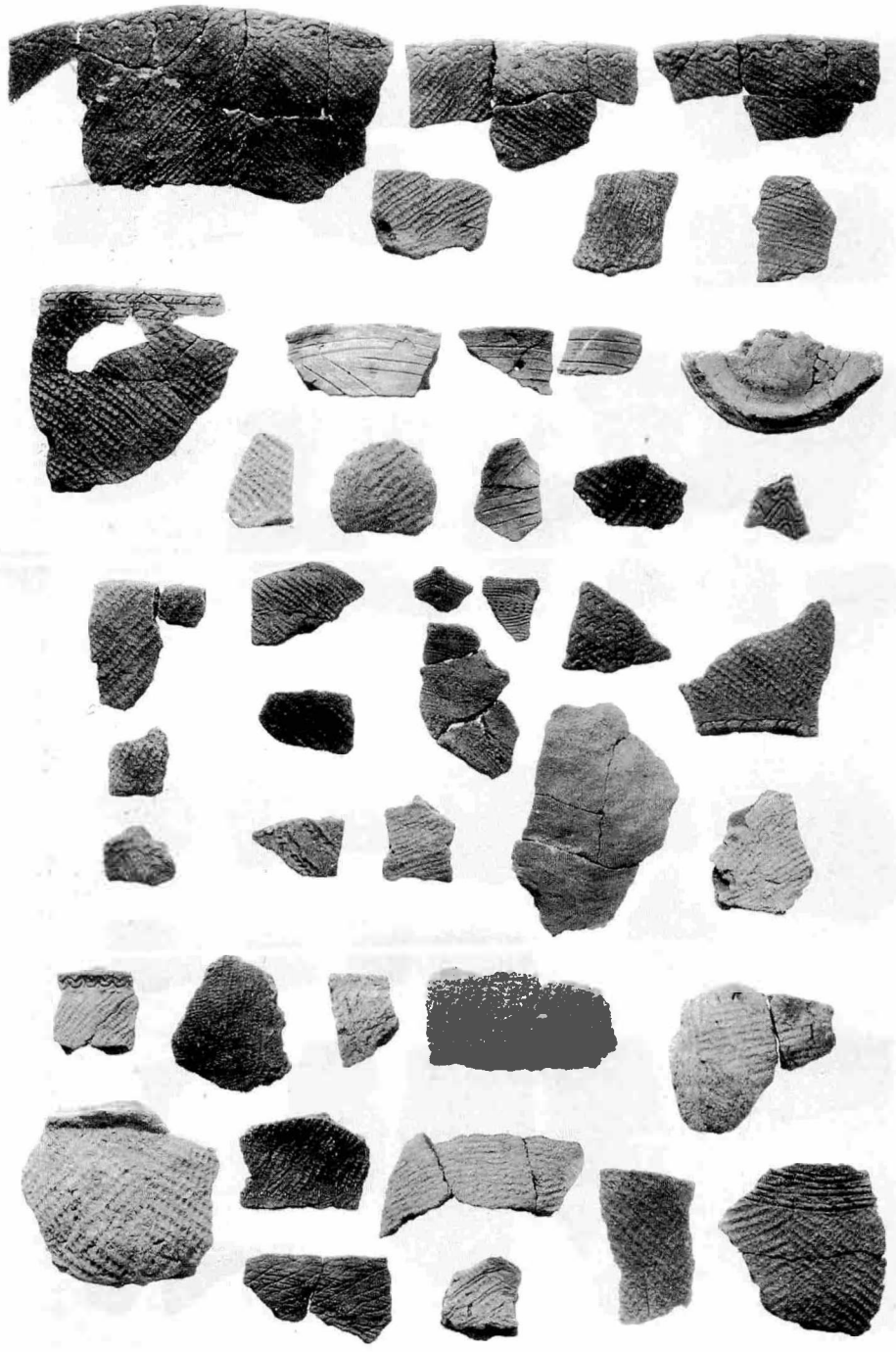


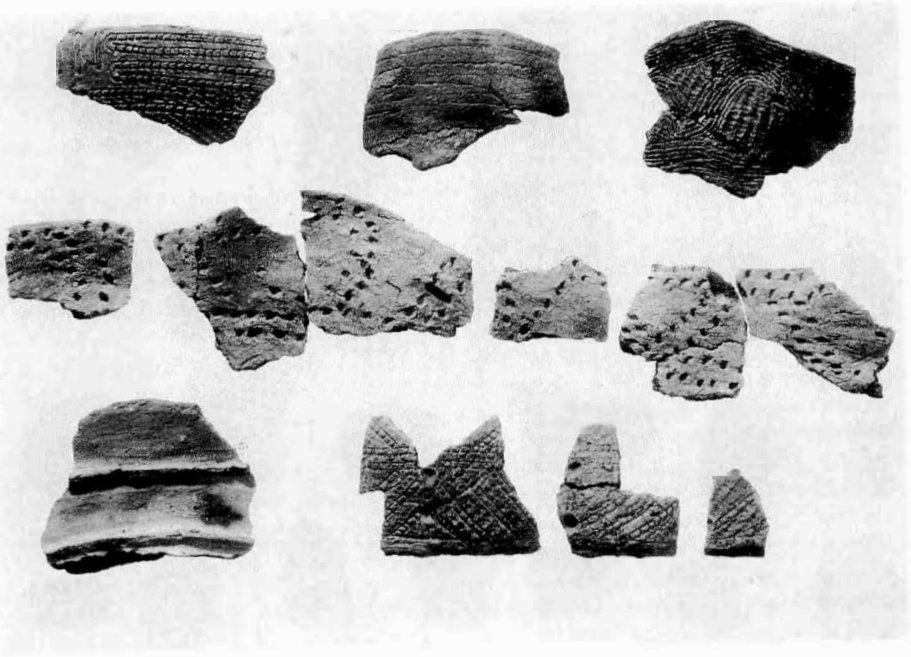
グリッド出土諸磯ｂ式

グリッド出土諸磯ｃ式

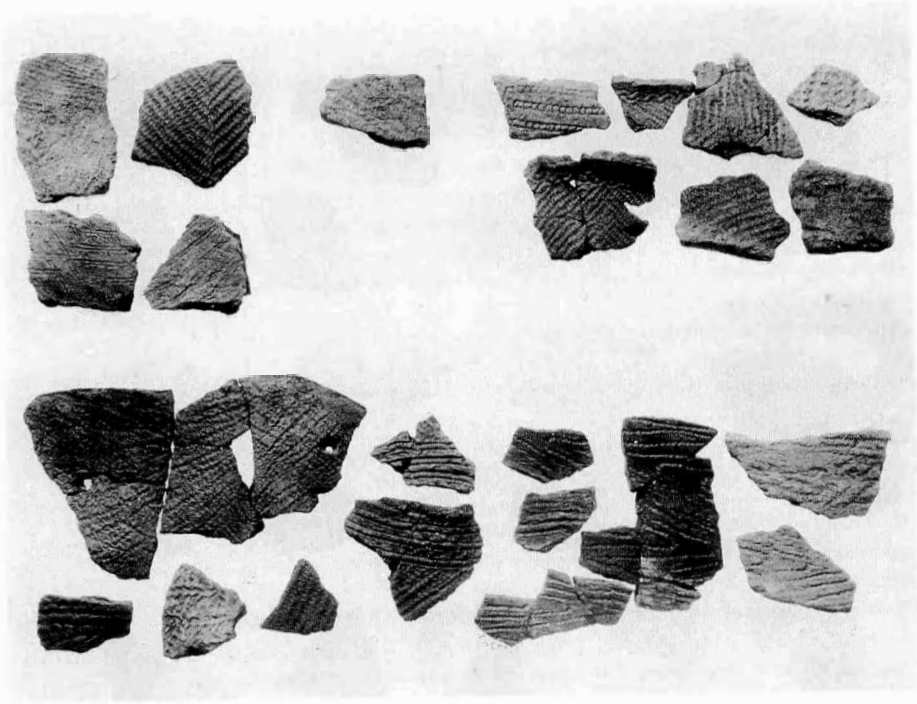


ＳＢ一出土黒浜式

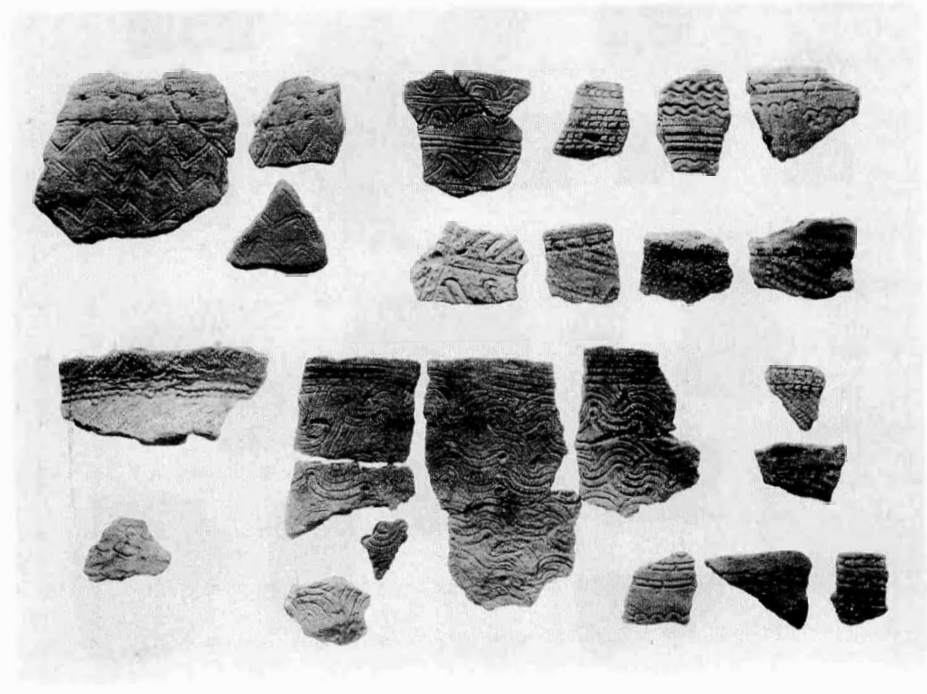




ＳＢ一出土黒浜式

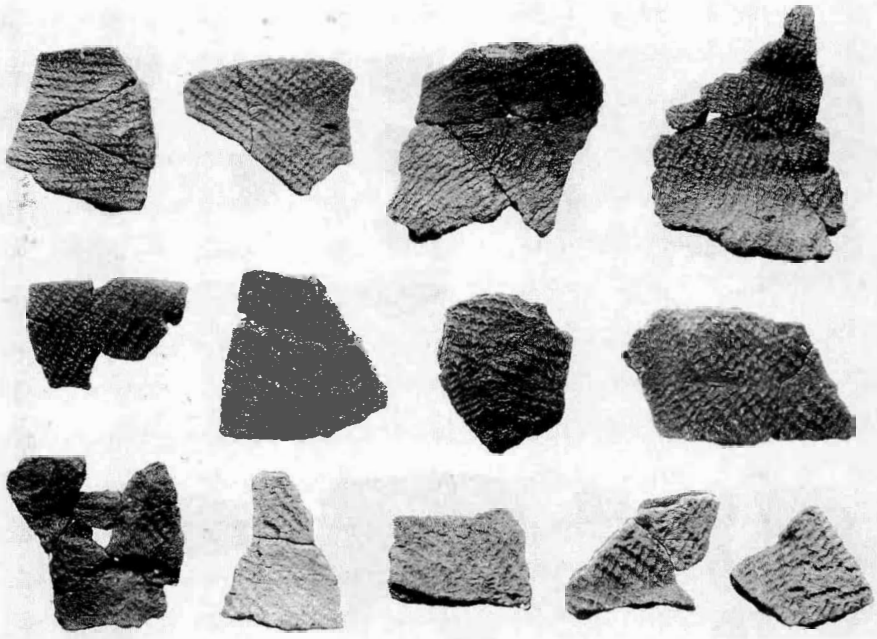


ＳＢ一出土黒浜式

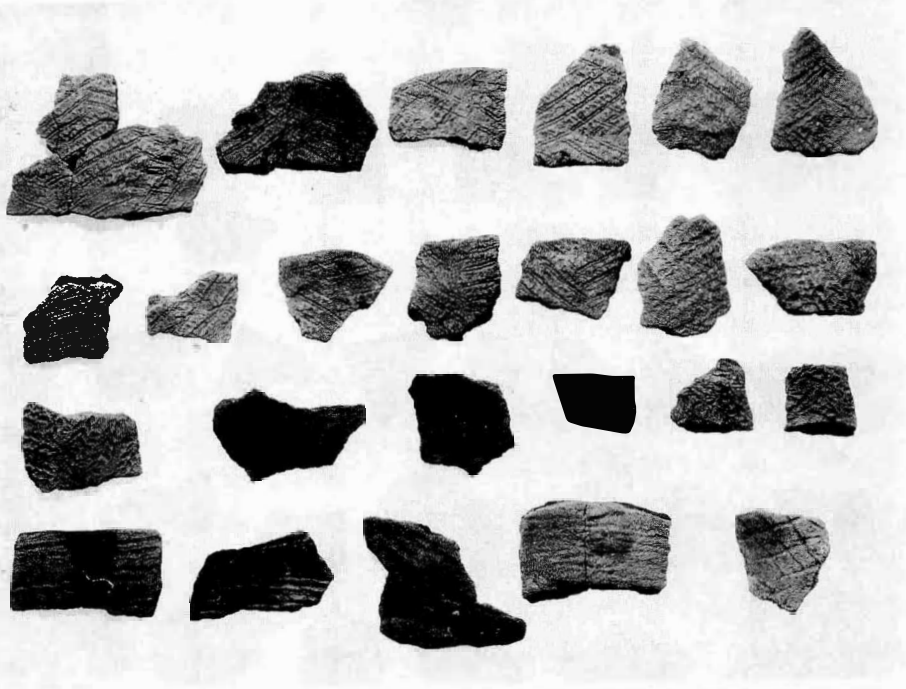


グリッド出土黒浜式

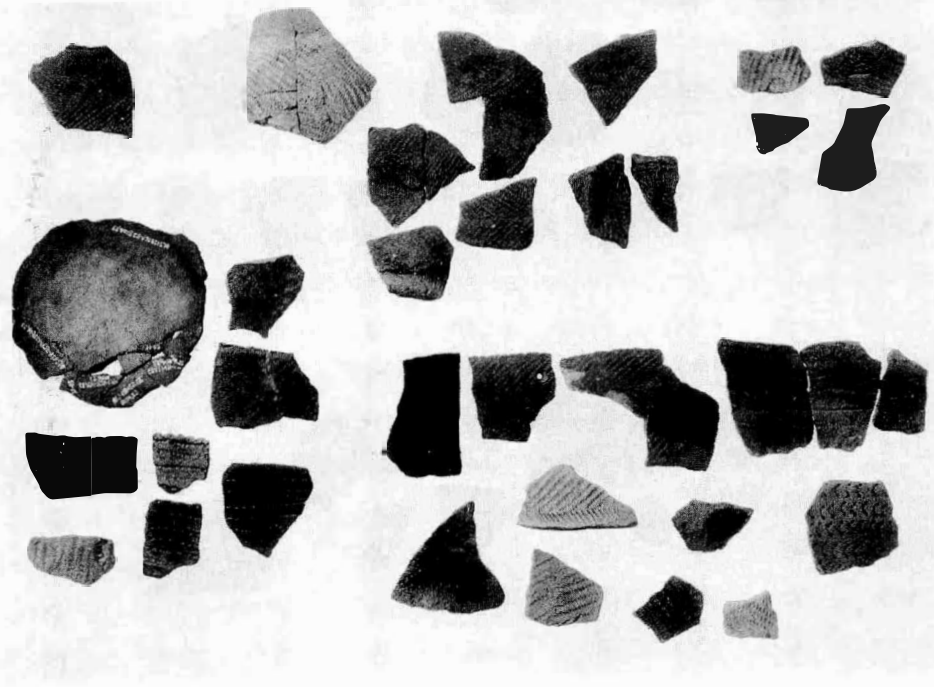
グリッド出土黒浜式

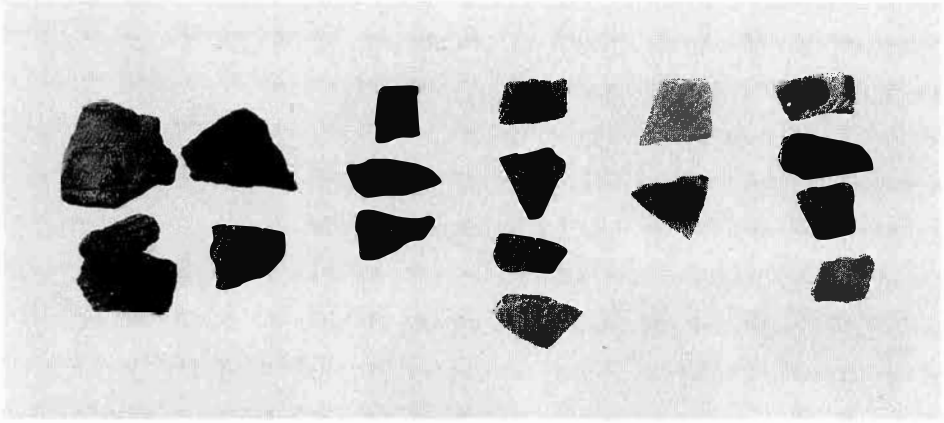


グリッド出土黒浜式

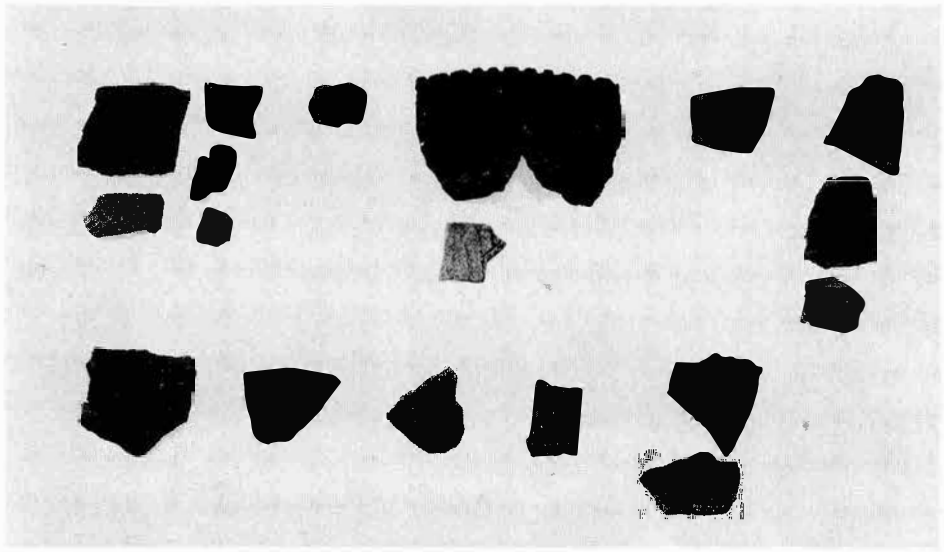


ＳＢ一出土近畿東海系土器

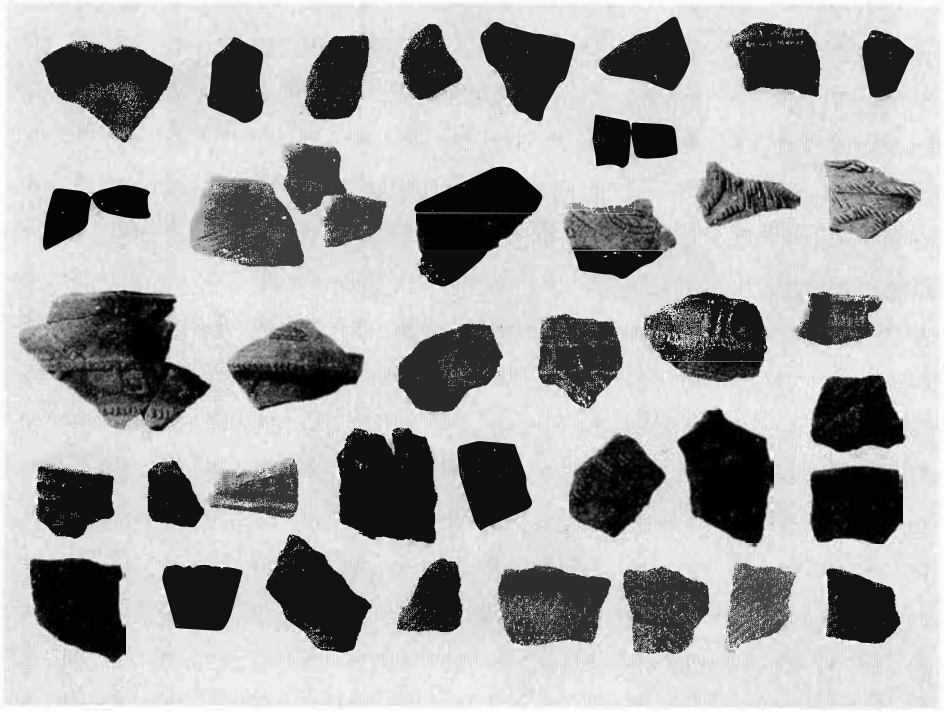




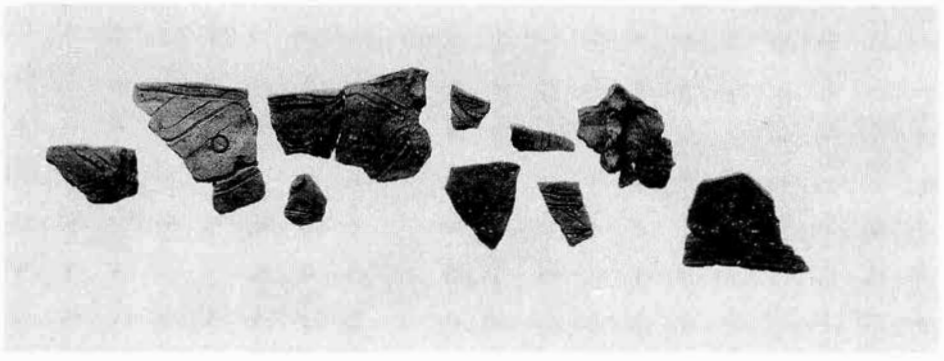
ＳＢ一出土近畿東海系土器



ＳＢ一出土近畿東海系土器

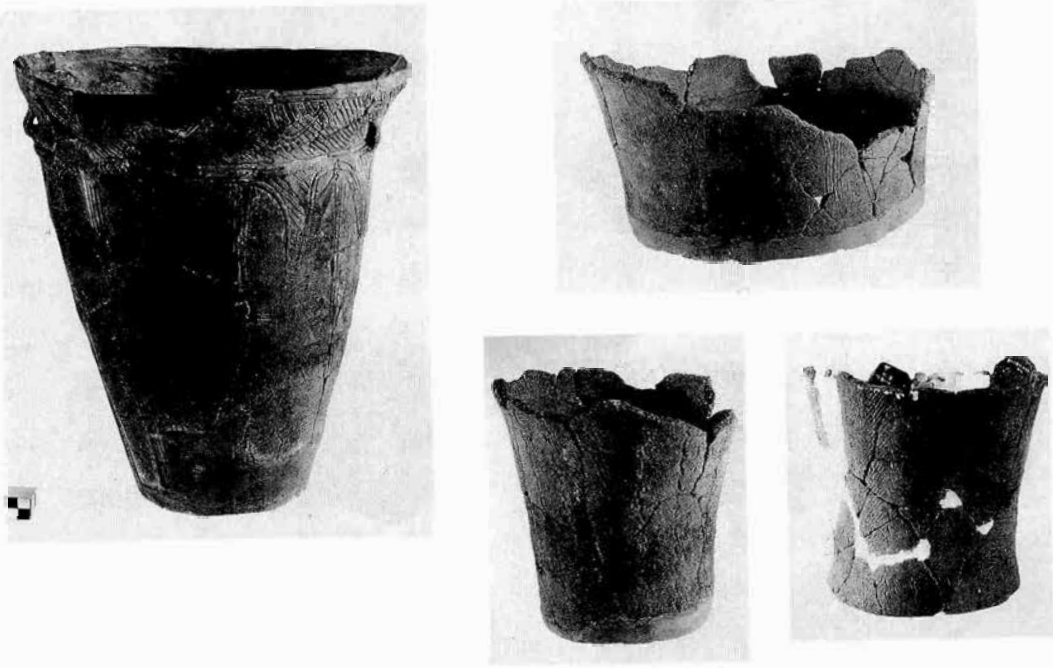


グリッド出土近畿東海系土器

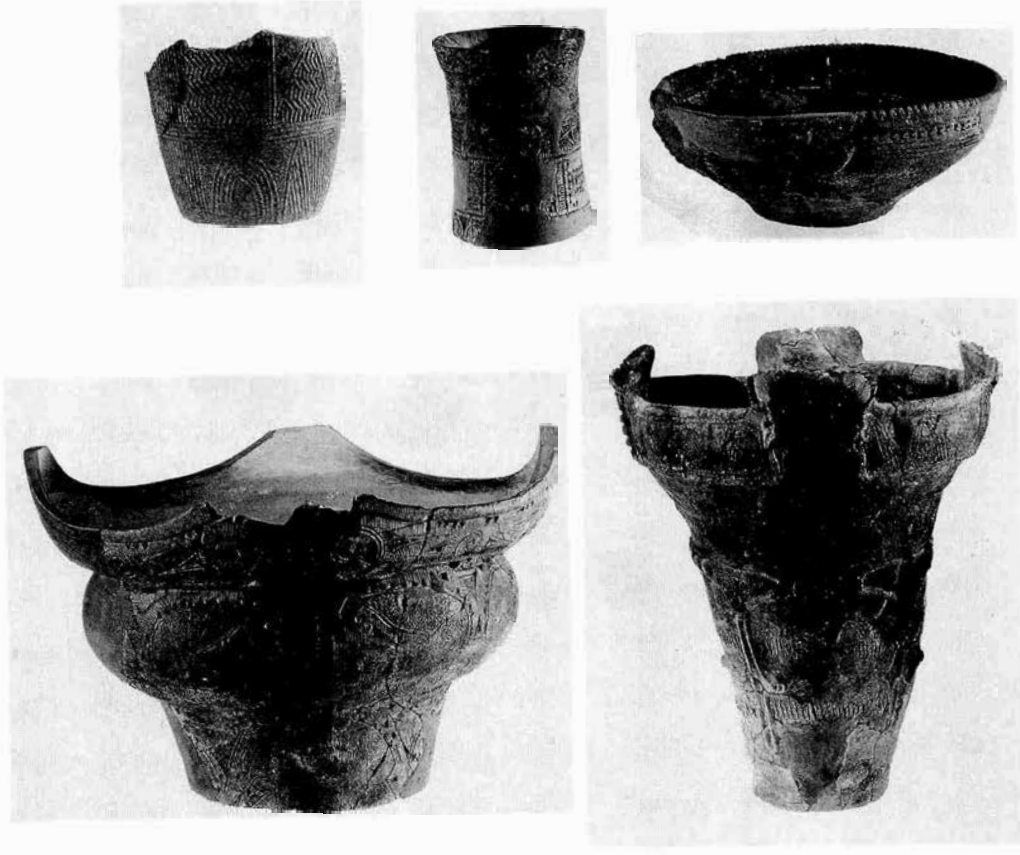


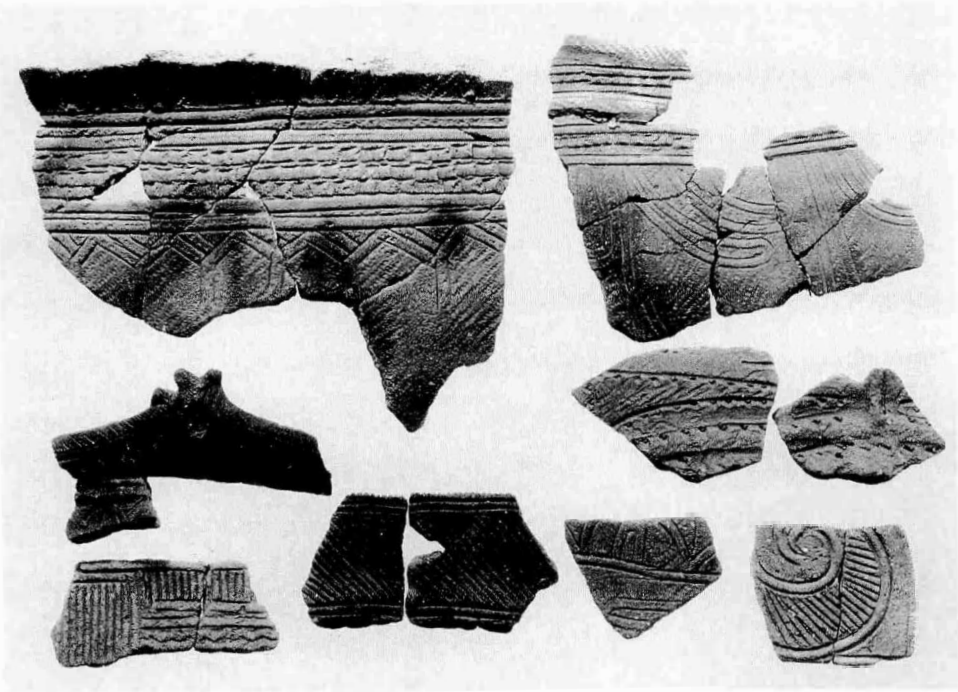
グリッド出土近畿東海系土器

ＳＢ－23出土土器

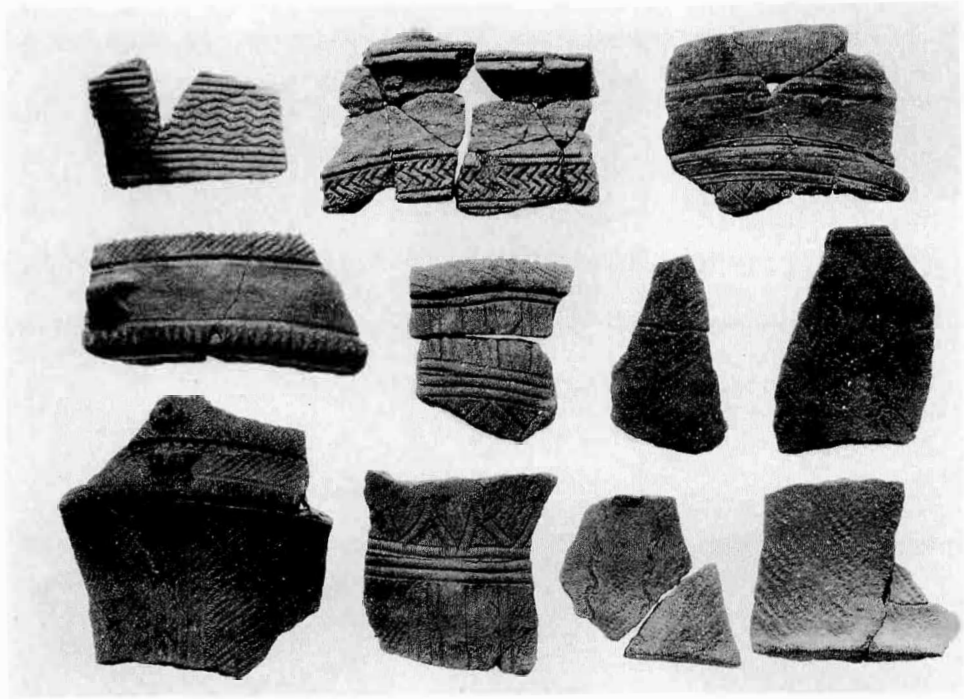


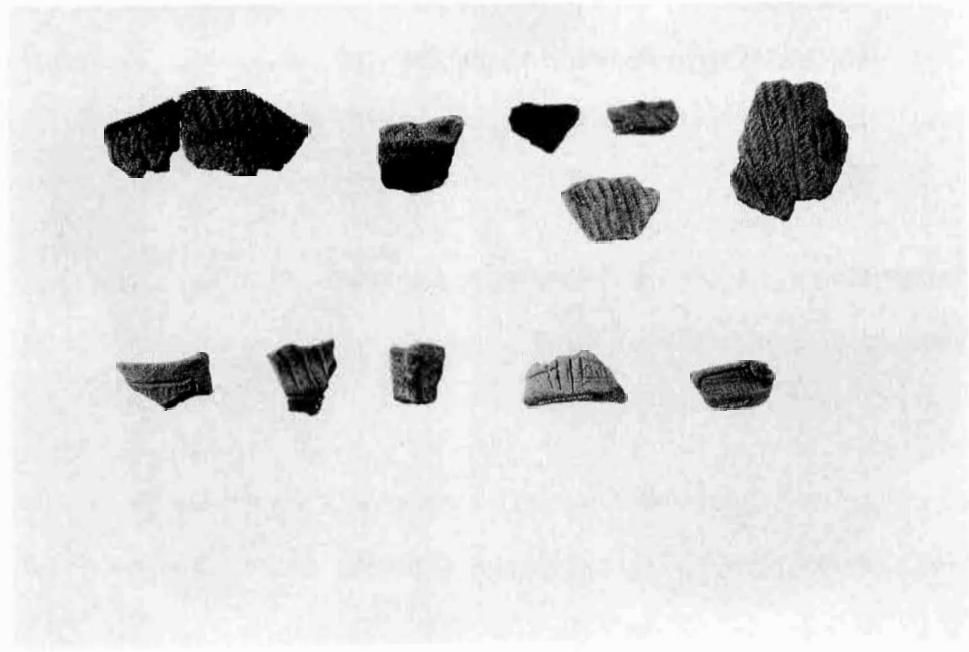
ＳＫ－出土土器





グリッド出土五領ヶ台式





グリッド出土近畿東海系中期の土器

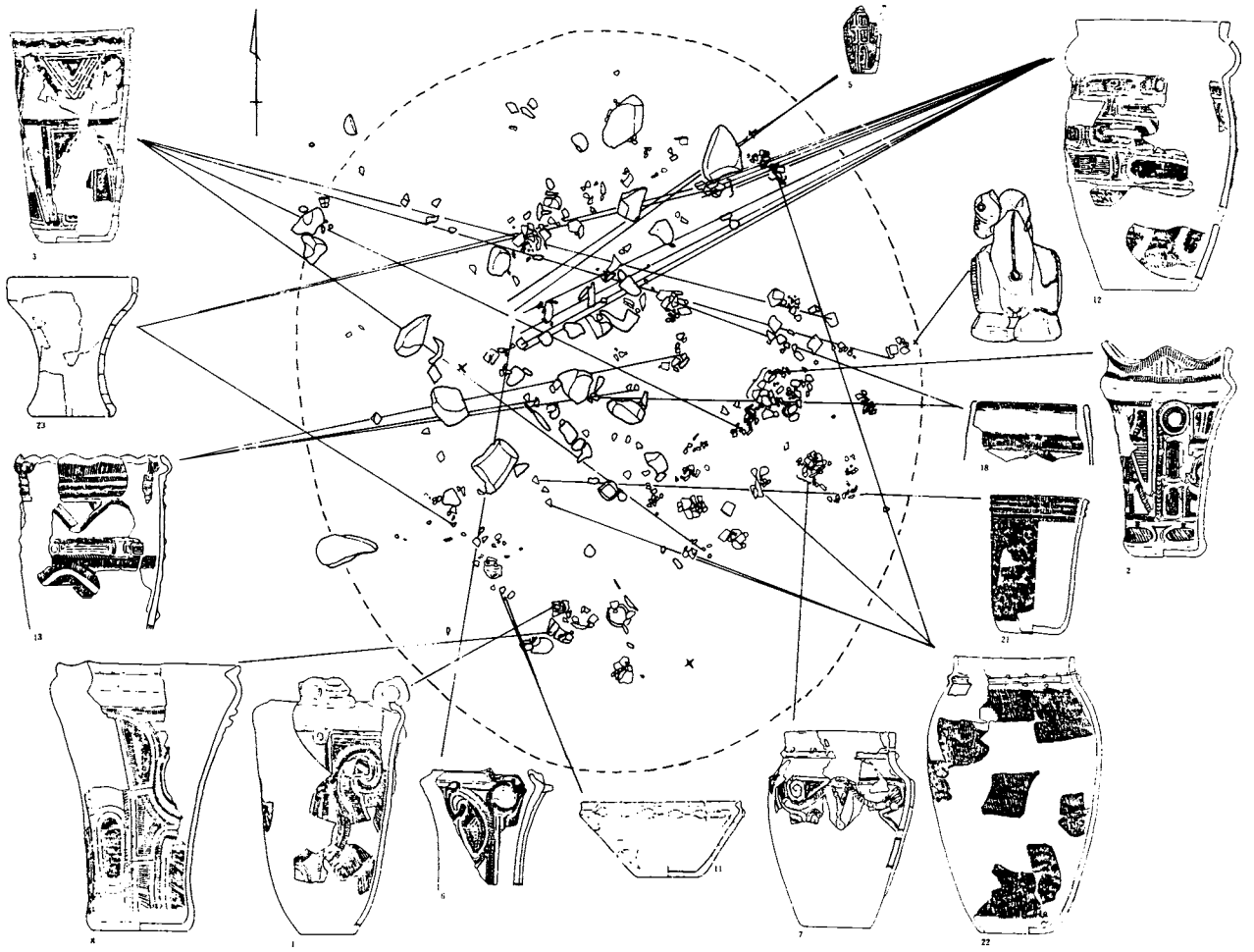
Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－04

やはり黒色土層中に掘り込まれた住居で、プランは不明であるが、ピットがよく残っているので、長径650㎝、短径550㎝程度の住居であったと思われる。炉石は抜きさられており、焼土と炉石が一個のみ残っている。

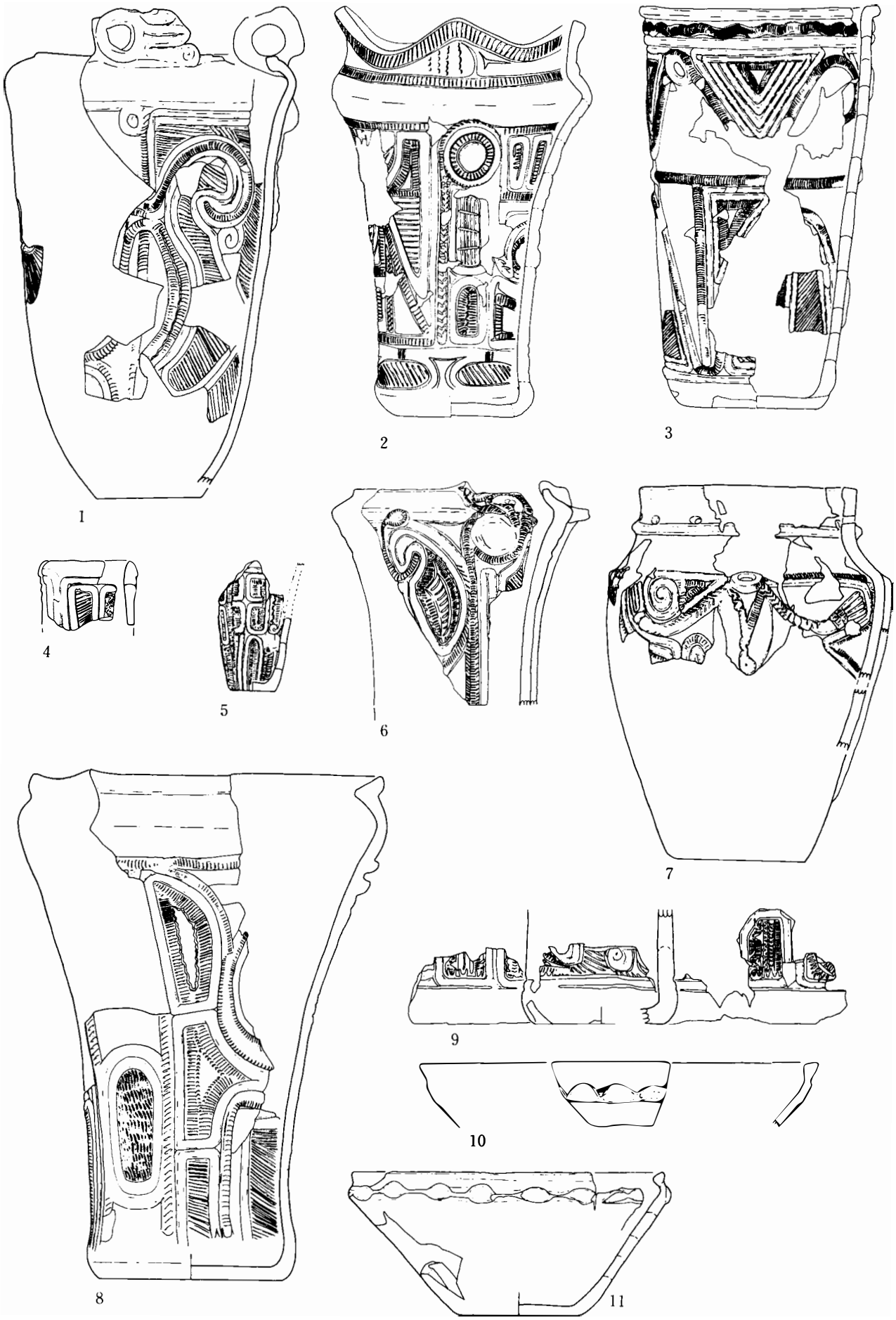
このＳ－１地区の藤内式期の集落の中で、この住居の重要性は、まず、出土遺物が豊富なことと、特殊な遺物に恵まれている点である。有孔鍔付土器が２点出土し、図171－７は胴部に人体文（あるいはカエル文）が付く、また孔は径８㎜と大きい。また22は縄文を全面施文し、肩部に円形の磨消文を付けており、容量も38ℓと大きい。

さらに土偶、図260－30は、広畑形態の土偶で、出産状態を示した土偶である。他に５点の出土がある。

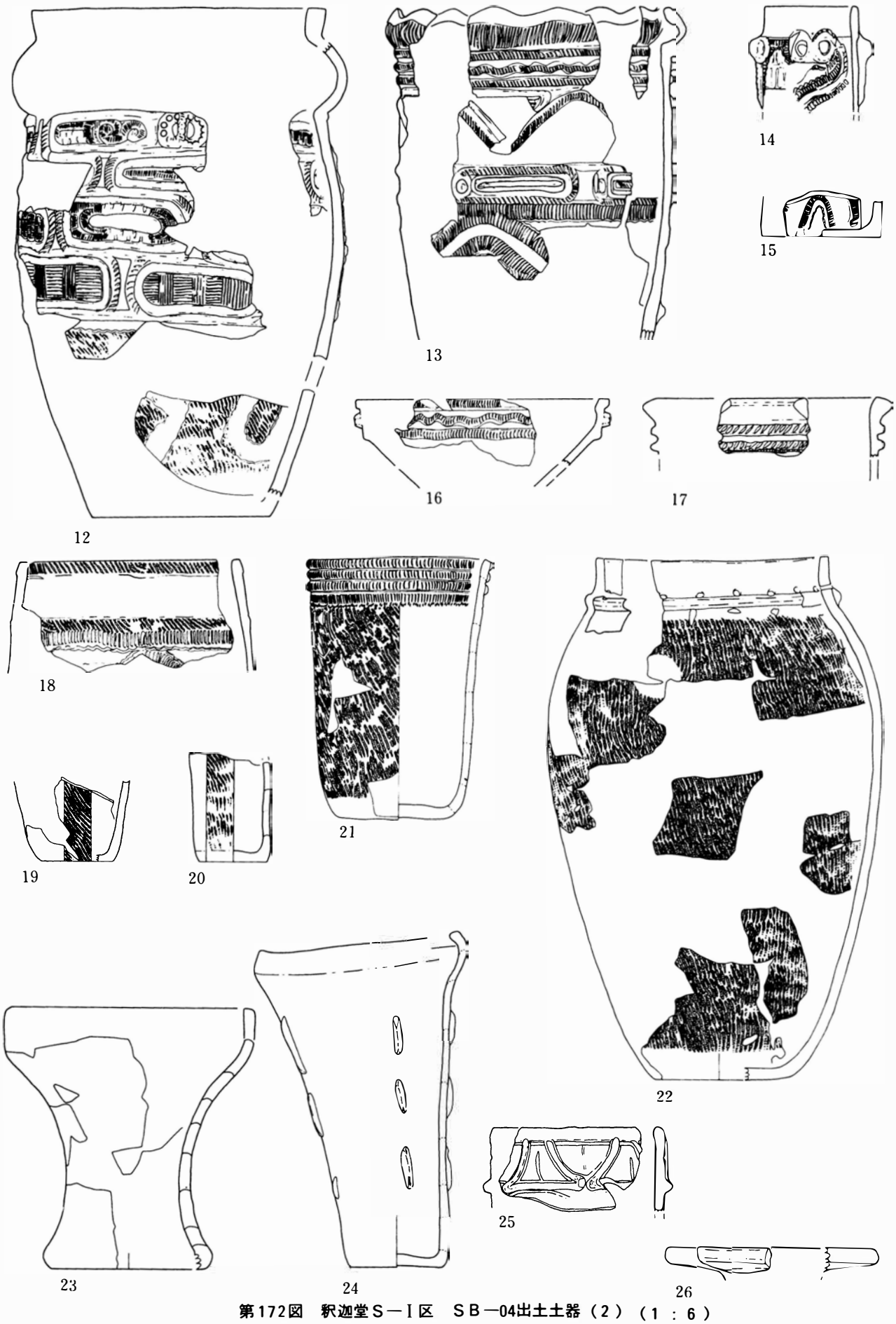
石器は石鏃13、石匕４、ピエス・エスキーユ１、稜磨石５、磨石５、玉石１、石皿２、磨斧１、打斧10、横刃形石器１、黒曜石269ｇ、水晶55ｇ。



第 170 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－04遺物出土状況図



第171図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－04出土土器（１）（１：６）



第172図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－04出土土器（２）（１：６）

SB—04

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
67	171	1		6—1	ミズク把手を持ち、膨した無文の口辺と胴部の区画文はより大型化している。			
		2		6—1	波状口縁と膨した無文の口辺、脚部は縦区画文帯として、胴下部に楕円区画文帯をめぐらしている。SK—04、図No.213—9の土器と近似する器形。	45.8	18.3	
		3			円筒形をなし、口辺部に波状隆帯、胴上半部に三角区画帯　胴下半部に縦区画帯を付けている。	45.0		SK—169 SB—09 SB—18ほか
		4		6—1	小形円筒形の縦区画文土器			
		5		6—1	縦区画の中をキャタピラ文や三角押文で埋める。区画文を形成する半隆起線が一部で終結しない点、および区画の巾が狭いからより古拙の土器と思われる。			
		6		6—1	口辺部がくの字形に内折した器形をなす。			
		7		6—6	有孔鍔付土器　孔の形が8㎜と大きく、胴部に人体文（カエル文）を配し、他を縦区画文で埋めている。			
		8		6—1	大型の縦区画文土器である。口辺部を無文帯とし、胴部を大きな区画文で埋めている口唇部には把手が付くものと思われる。	56.7	34	
		9		6—1	区画文土器の底部である。			
		10		6—7	浅鉢　肩部のところに指頭圧痕を断続的に施している。			
		11		6—7	浅鉢　肩部のところに指頭圧痕を断続的に施している。			
68	172	12		6—5	口辺部の形状も文様も不明、胴上部に楕円区画文帯を配し、胴下部は波状沈線により区画した磨消縄文帯を持つ。			
		13		6	口辺部は藤内式特有の膨みを持ち、頸部に波状隆帯をめぐらし、三角区画帯、楕円区画帯と続き、胴下部は隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線による抽象文を描くらしい。			
		14		6	口辺部無文、肩部にミミズク把手を持ち、指ナデ整形痕の器面に隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線文を付ける。			
		15		6	隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線文			
		16		6—7	口辺部に波状隆帯をめぐらした浅鉢			
		17		6	口辺部に刻目隆帯をめぐらしている。			
		18		6—2	口唇部縄文帯をなすが、胴部は隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線で抽象文を描くらしい			
		19		6—4—b	縄文			
		20		6—4—b	縄文			
		21		6—4—b	口辺部を隆帯＋爪形文で加飾し、頸部にキャタピラ文と波状沈線をめぐらし、胴部は縄文帯となっている。	29	5.4	
		22		6—6	有孔鍔付土器である。これも孔の径が8㎜と大きく、体部は縄文でおおうが、肩部に円形の磨消文を持っている。	58.5	38	
		23		6—3	無文の深鉢			
		24		6—2	無文の胴部に短隆帯が加飾されている。整形の失敗と思われ、まがっている。	38	7.8	
		25		6	無文隆帯の土器			
		26		6—8	台形土器			

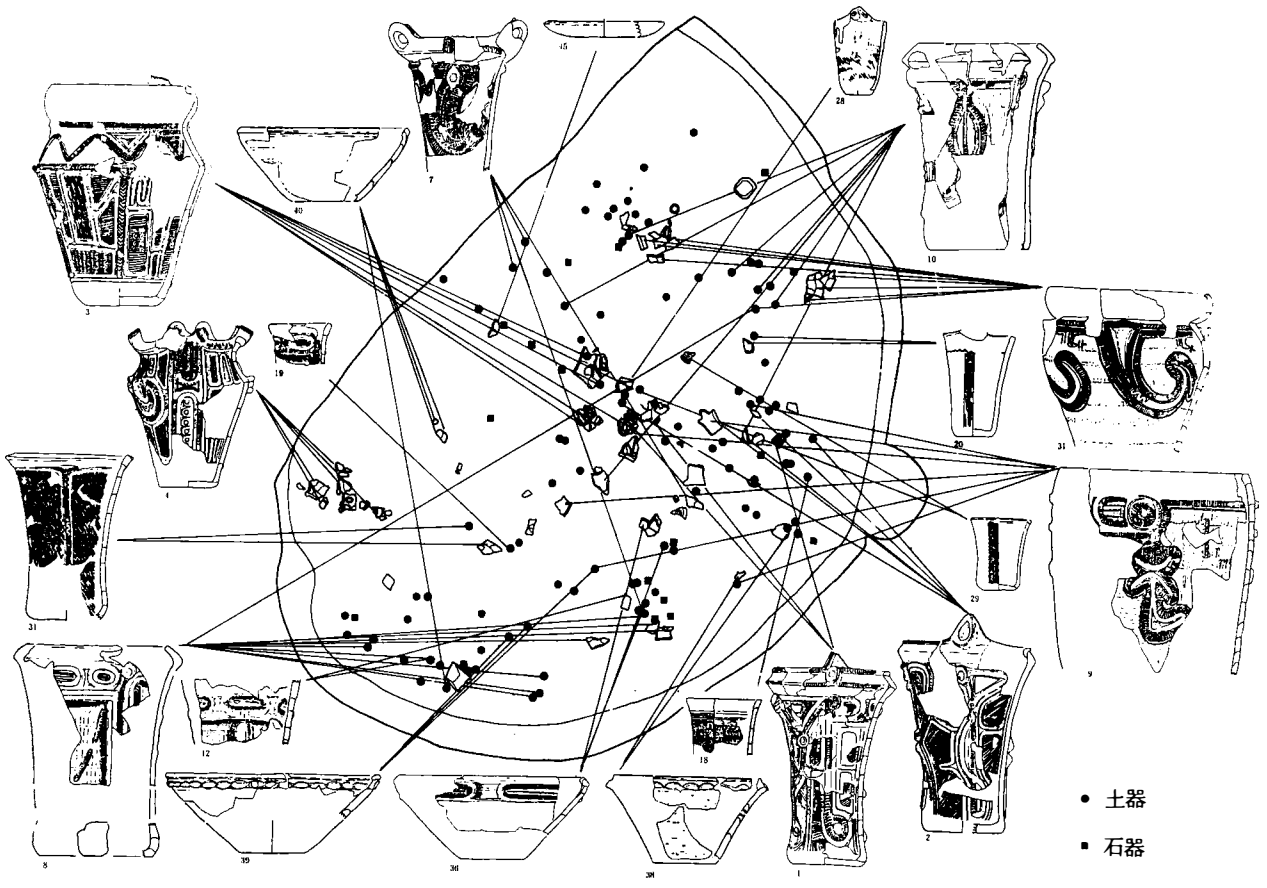
S—I区　SB—10

長径780㎝、短径（600）㎜、掘り込み約60㎝の楕円形をした住居プランである。柱穴は北側の一本のみ撹乱によって未確認だが、6柱穴と思われる。しかも、柱穴が重複しているので、建て替えが考えられる。柱穴の深さも90㎝を測るものもある。

炉石は完全に残っており、南側に面取りした方柱状の石を用いている。他は人頭大の自然石を用いている。

出土土器は、豊富で縦区画文が主体を占める。これに抽象文土器と浅鉢が付く組み合せである。土偶は4点出土している。

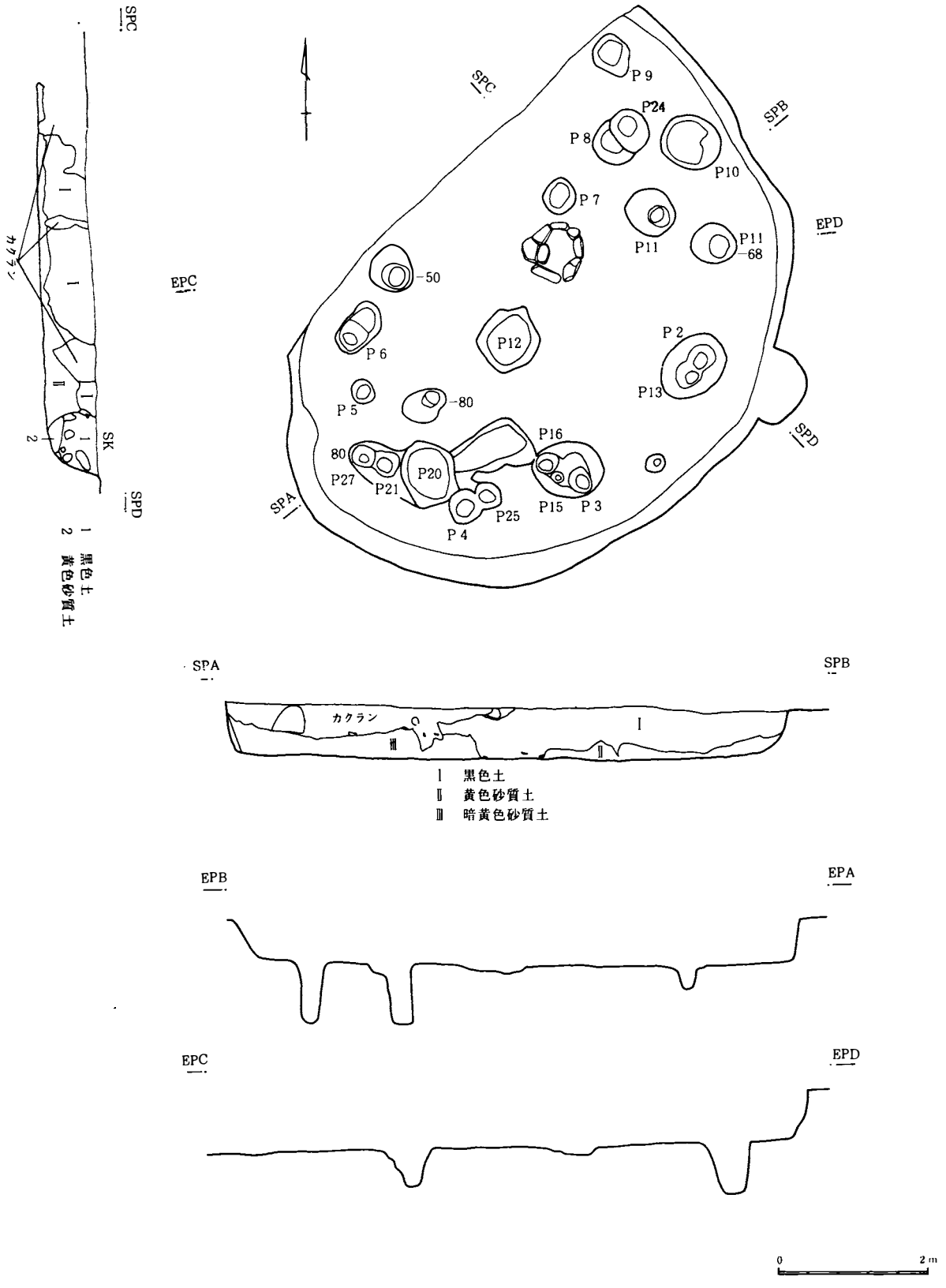
石器は石鏃6、黒曜石コア1、石匕3、稜磨石2、磨石9、石皿3、磨斧2、打斧33、他に黒曜石88g、水晶20gである。



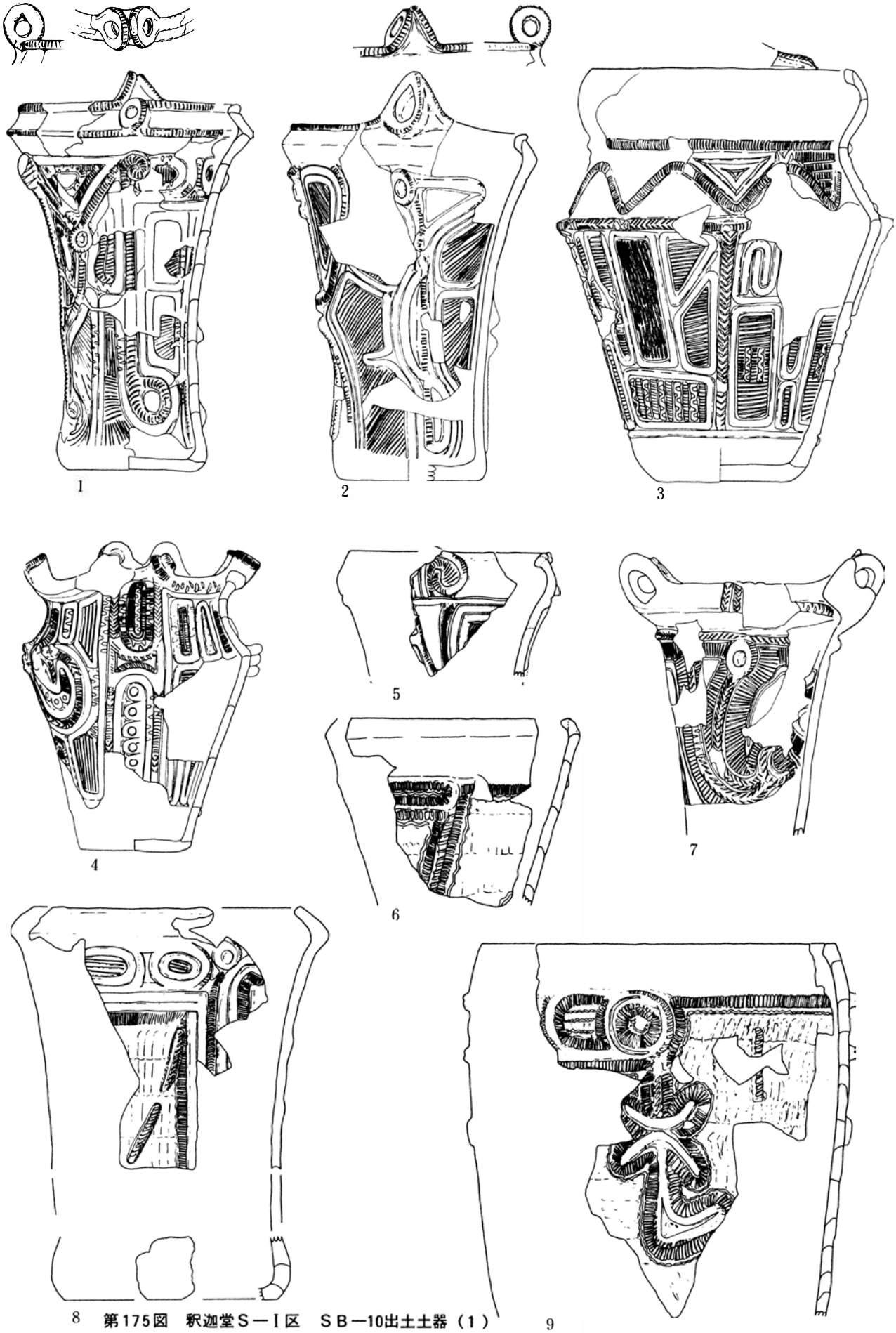
第 173 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－10遺物出土状況図

ＳＢ－10

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
69	175	1		6－1	把手を持ち、くの字形口縁胴部は縦区画文	44.2	7.9	
		2		6－1	1とほとんど同様な構成となる、	37.2	?	
		3		6－1	把手を有すると思われる、肩部に三角区画帯を作り、胴部を縦区画文としている、	46	25	
		4		6－1	縦区画文土器としては、珍らしく4単位の把手を持つ、展開写真に見られるように手のモチーフが器面をおおう。	30.6	8	
		5		6－1	把手を持つと思われる			
		6		6－5or3	頸部に楕区画文を持ち、胴部の器面は整形指ナデ痕の器面に刻目隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線			
		7		6－2	対の把手を持ち、胴部に抽象文の一部を配し、その脇をキャタピラ文、波状沈線で加飾する、			
		8		6－5or3	頸部に楕円文を配し、胴下部は整形指ナデ痕の器面に刻目短隆帯十三角押文のゲジゲ文を配し、他の隆帯のまわりはキャタピラ文＋波状沈線である、			
		9		6－5or3	整形指ナデ痕の器面に、隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線文で抽象文を描く、			
70	176	10		6－3	くの字形口縁、整形指ナデ痕の器面にカエル様の文様を施す。			
		11			隆帯状にキャタピラ文を施している。			
		12		6－5	頸部に楕円区画文をめぐらし、胴部は整形指ナデ痕を有し、そこに隆帯＋キャタピラ文			
		13		6	頸部に区画文帯をめぐらす、			
		14		6－3				
		15		6－7				

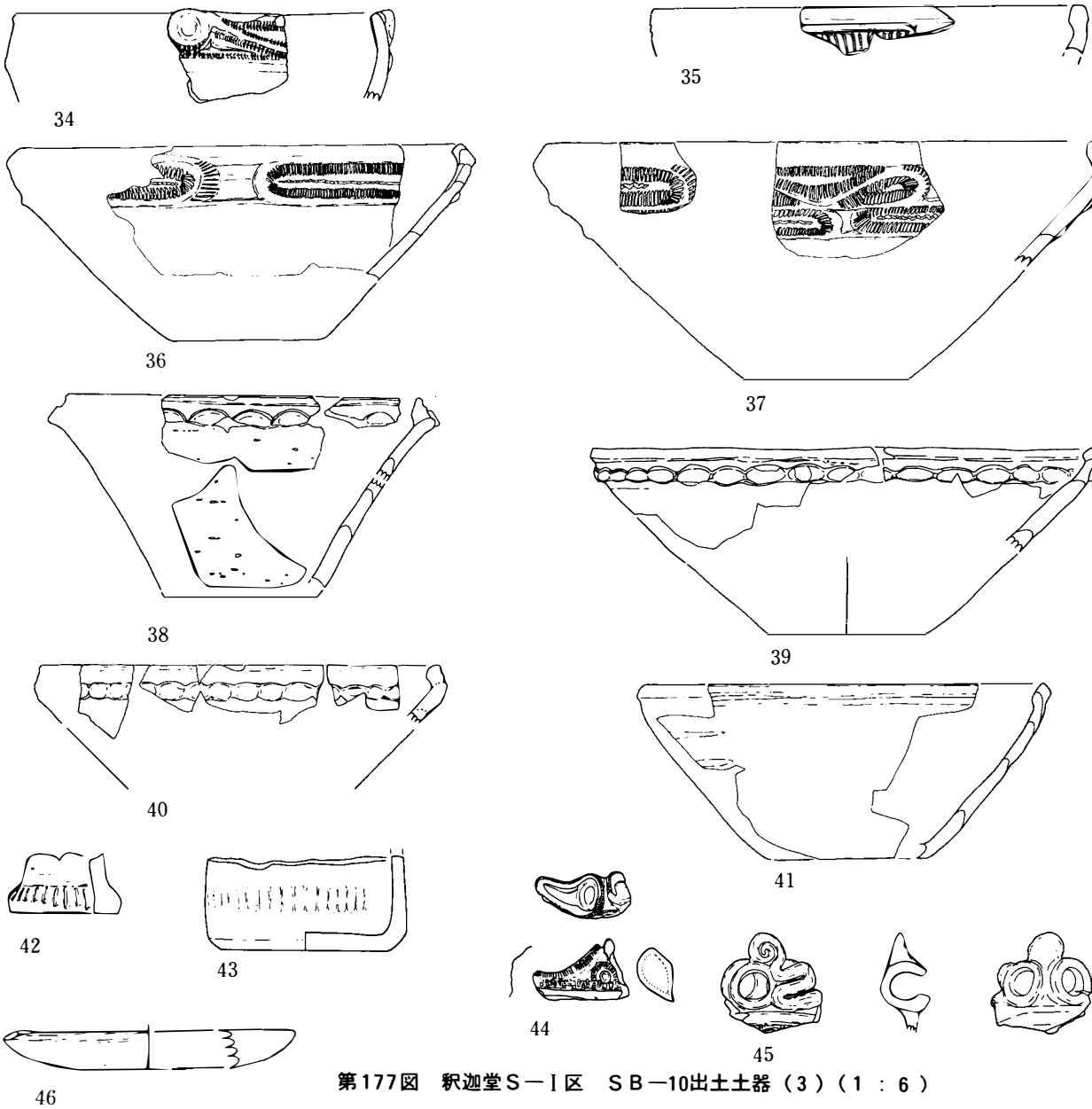


第 174 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－10（１：80）



第175図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－10出土土器（１）
（１：６）

第176図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－10出土土器（２）（１：６）



第177図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－10出土土器（３）（１：６）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
69	176	16		6－7				
		17		6－7	口唇部にミズク把手を有する。胴部の文様帯は不明			
		18		6－4－b	口辺部無文、頸部に波状沈線をめぐらし、胴部の縄文地に三角押文で文様を描く			
		19		6－4－b	頸部に楕円区画文帯をめぐらし、胴部は縄文			
		20		6－4－b	把手を持ち、頸部に三角押文をめぐらす。	22.1	1.8	
		21		6－4－b	胴下部縄文			
		22		6－4－b	胴下部縄文			
		23		6－4－b	胴下部縄文			
		24		6－4－b	胴下部縄文			
		25		6	口辺部縄文帯			
		26		6－4－b				
		27		6－4－a				
		28		6－4－a	口縁部波頂部にミミズク把手を有する			
		29		6－4－a	全縄文の小型土器	14.5		
		30		6－4－a				
		31		6－4－a	口辺部無文で、指頭痕を残す体部に抽象文をキャタピラ文と角押文を施す。			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	176	32		6－7	垂下する爪形隆帯の中に連続コの字文を含めている。	31.5	5.9	
		33		6－7	口辺部無文で体部に縄文を施し、頸部に円形の磨消している。			
	177	34		6－7	三角区画帯をもち、中をキャタピラ文＋三叉文で埋めている。			
		35		6－7				
		36		6－7	口辺部に楕円文帯をめぐらせ、その中をキャタピラ文＋三角押文で埋める。			
		37		6－7	浅鉢では珍しく、三角区画帯と楕円区画帯の2帯の文様をならべる。			
		38		6－7	肩部に指頭圧痕による断続的な押圧文を持つ。			SK－33接合
		39		6－7	肩部に指頭圧痕による断続的な押圧文を持つ。			
		40		6－7	肩部に指頭圧痕による断続的な押圧文を持つ。			
		41		6－7	無文の浅鉢			
		42		6－8	小形の台			SK－46接合
		43		6－2	底部			
		44		6	把手　a類やe類に付くものと思われる			
		45		6	把手			
		46		6－8	台形土器			

SB－01　出土石器

No.	名称	出土地点	大きさ	重さ	備考	No.	名称	出土地点	大きさ	重さ	備考
1	磨石		13.5×7.6×5.5			13	打製石斧		9.2×5.2×2.1		
2	稜磨石		12.4×6.7×6.7			14	打製石斧		8.1×4.0×1.1		
3	磨石		9.6×8.6×3.7			15	打製石斧		9.3×3.5×2.2		
4	磨石	No.5	5.4×5.4×3.5			16	打製石斧	No.18	9.5×3.4×0.7		
5	打製石斧		11.3×5.3×1.6			17	打製石斧		7.0×4.5×1.2		
6	打製石斧		7.6×4.7×1.4			18	打製石斧		9.6×4.1×1.7		
7	打製石斧		13.6×3.7×1.7			19	打製石斧		7.7×3.2×0.9		
8	打製石斧		11.7×3.5×1.4			20	打製石斧		10.7×6.1×1.3		
9	打製石斧		10.7×5.0×0.7			21	打製石斧		5.1×6.7×1.2		
10	打製石斧		8.7×4.1×1.1			22	石匕		4.2×4.2×0.6		
11	打製石斧		6.5×7.8×1.8			23	コア		7.6×4.6×3.0		
12	打製石斧		8.7×4.0×1.1			24	石皿		19.0×12.4×4.6		

S－I区　SB－29

発掘の順序に誤りがあり、前期のSB－07を先に発掘したため、南側の部分を失ってしまったが、長径700cm、短径500cm（推定）、柱穴6個の藤内式の住居である。

炉は長方形石囲炉で、出入口部と奥壁部は柱状の石材を用いて、他は自然礫を用いている。

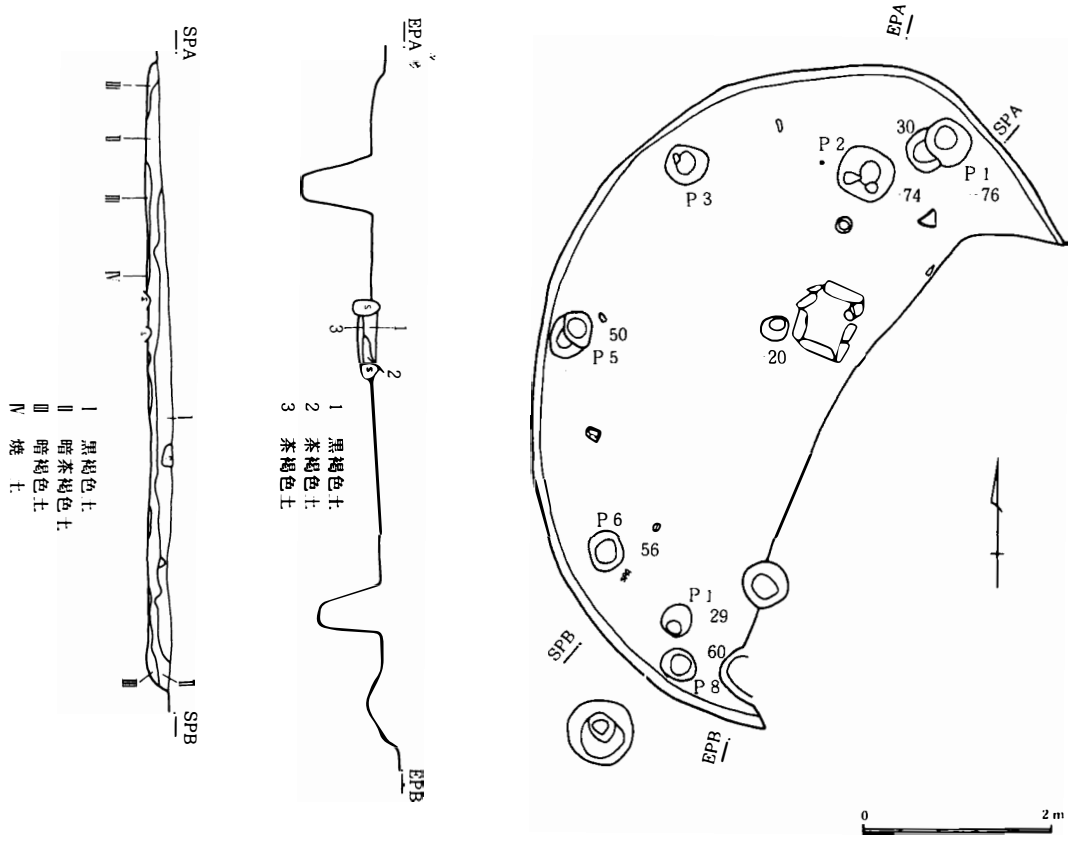
出土土器は小量で土偶も1点と少ない。ただし、M－29で土偶が出土しているのでこうしたものも含まれるのであろう。

石器は石鏃5、ドリル1、スレイパー1、磨石2、打斧2、磨斧1、礫器1、玉石1、黒曜石80g、水晶33gである。

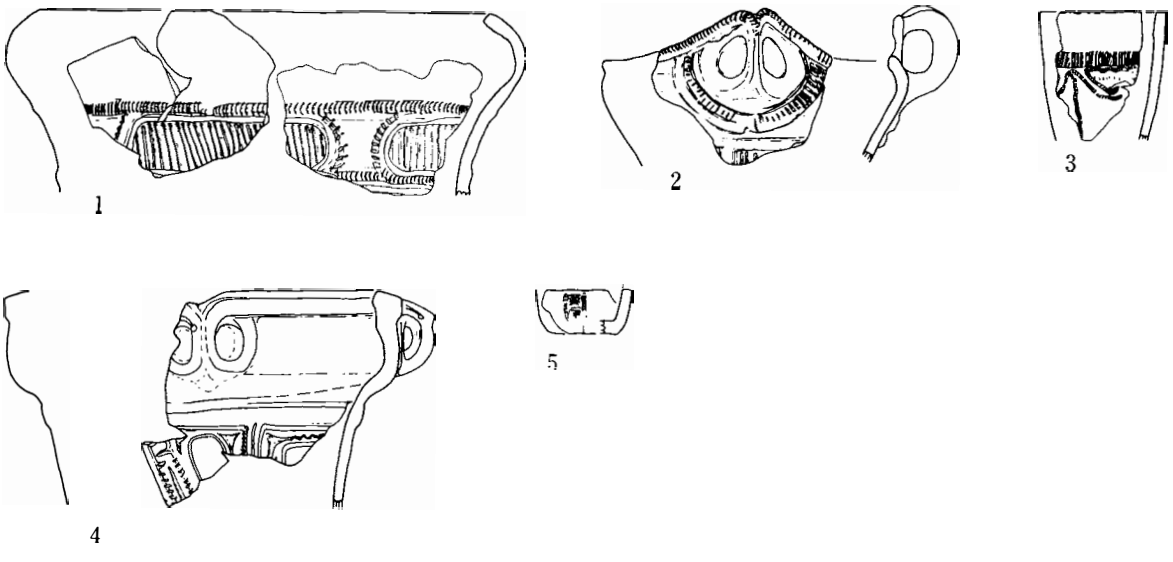
SB－29

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	
	180	1		6－5	頸部に楕円区画文帯をもつ			
		2		6	口辺部にミミズク把手をもつ			
		3		6	口辺部無文　頸部にキャタピラ文、胴部に三角押文で文様を描く。			
		4		6	口辺部無文帯にミミズク把手が付く、胴部は縦区画文であるらしい。			
		5		6	キャタピラ文＋三角文を施す。ミニチュア			

第 178 図　釈迦堂Ｓ－Ｉ区　ＳＢ－10出土石器（１：４）（24は１：８）



第 179 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－29（１：80）



第180図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－29出土土器　（１：６）

Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－31

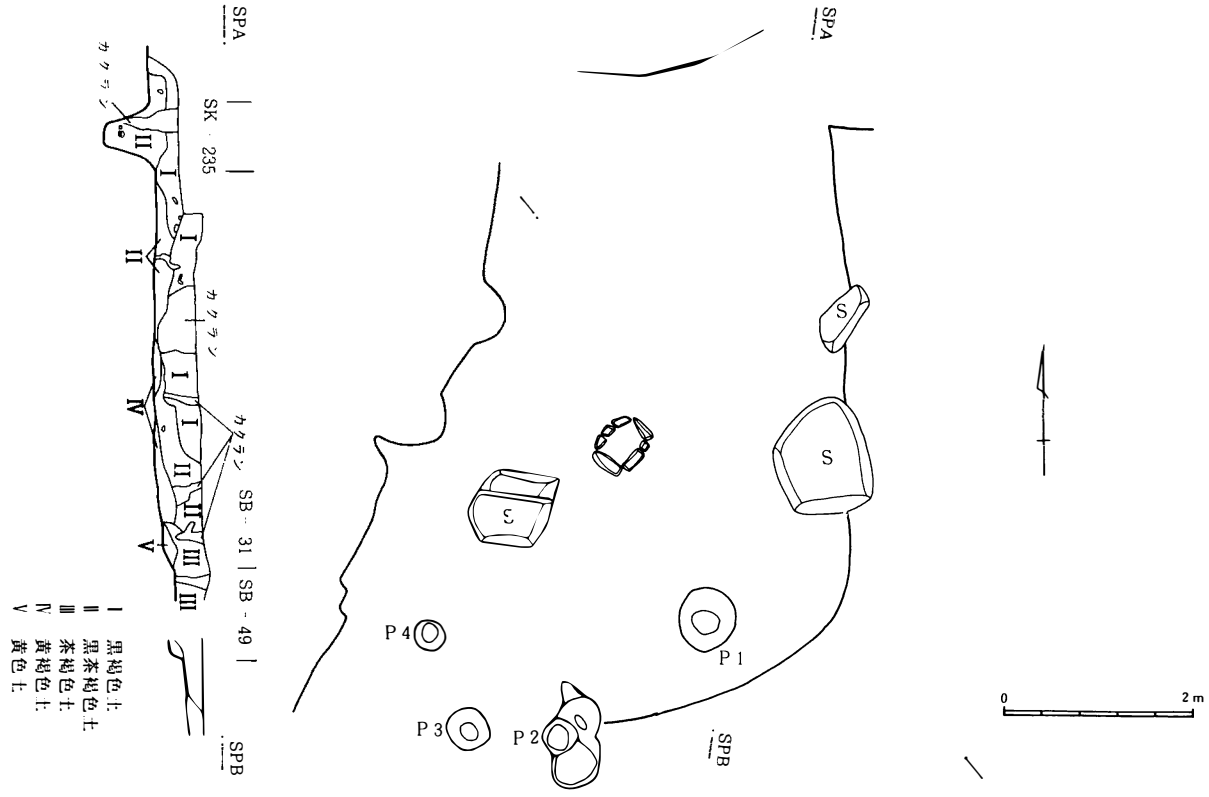
畑地の石垣によって、撹乱されたため、不明な部分が多い。巨石が住居址内に落ち込んでおり、洪水があったと思われる。

柱穴はこの住居址内に伴って確定できるものは２個にすぎない。炉は南側出入口部に方柱状の加工石を用いて、

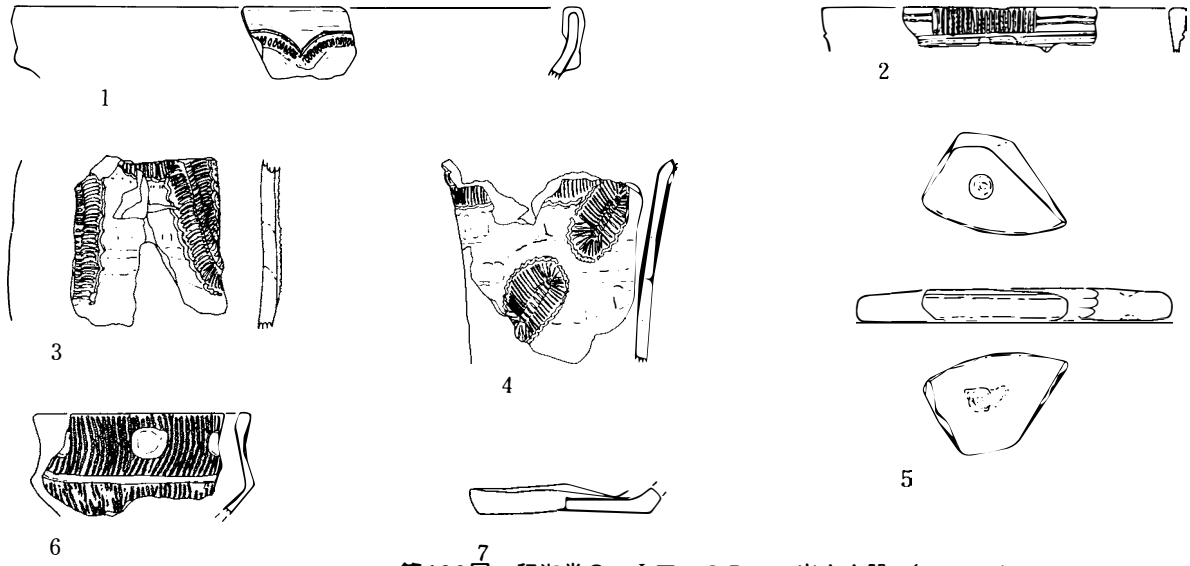
奥壁側にやや長い自然石を用いている。

出遺物は少なくないが、この住居址の上部と思われるＶ－21、21、Ｕ－21、22出土の土器が、少なからずこの住居址と関係あるのであろう。石器は石鏃６、ドリル１、磨石７、磨斧２、打斧２、礫器１、黒曜石250ｇ、水晶51ｇである。

土偶は多く特異で、４点出土し、図255－11はほぼ全身を残した土偶で、藤内式期の典型的な土偶である。他に文様は失なわれているが、円錐形をした鳴る土偶も出土している。鳴る土偶はＳＢ－51からも出土している。



第 181 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－31（１：80）



第182図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－31出土土器（１：６）

SB—31

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	182	1		6—7	隆帯上キャタピラ文			
		2		6				
		3		6—2	整形指ナデ痕の器面に刻目隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線			
		4		6—2	刻目隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線、ゲジゲジ文			
		5		6—8	台形土器　孔を穿とうとした痕が残っている。			
		6		6—4—a	浅鉢形をなし、撚糸文を施し口辺部に円形磨消を施している。			
		7		6	底部			

S—I区　SB—40

黒色土層中に掘り込まれた住居址である。掘り込み、柱穴ともに確認できなかったが、炉址を中心とした遺物の範囲と住居と考えた。

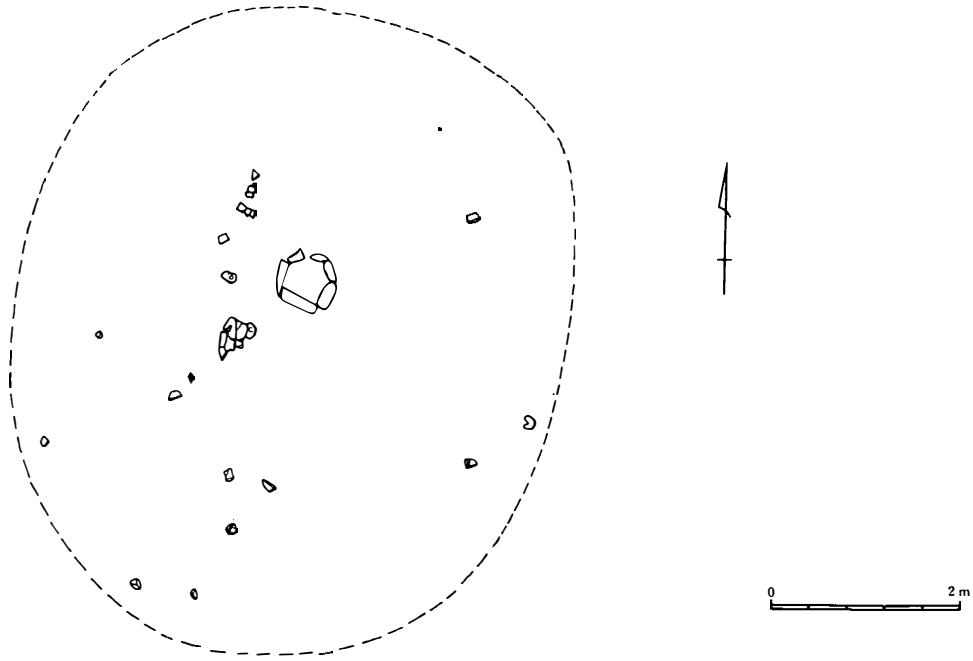
炉址は南側の出入口側に方柱状の加工石材を用い、他を自然石で五角形に組んでいる。

出土遺物は縦区画文土器を中心とした藤内式の特徴を示している。石器は石鏃6、石匕2、稜磨石3、磨石6、磨斧3、打斧5、黒曜石150g、水晶94gである。

土偶の出土はないが、Q—15（図263—46）で出土しているので、これが関係するのであろう。

SB—40

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
71	184	1		6—1	口唇部には把手が付くと思われる。	36.1	7.3	No.6＋7
		2		6—1				
		3		6—1				
		4		6—1				No.7＋8＋R—5＋Q—5
		5		6—1				
		6		6—1	縦区画の小型土器であるが、区画の中をキャタピラ文と半截竹管半月文の組み合せの温泉マークで埋めている。			
		7		6—7	波状隆帯を持った浅鉢			
		8		6—7	口辺部の波状隆帯をもち、頸部に三角区画帯をもつ			
		9		6				
		10		6	整形指ナデ痕の器面にキャタピラ文と波状沈線を施す。			
		11		6—7				
		12		6—3	整形指ナデ痕の器面にキャタピラ文と三角押文などを施す。			
		13		6—3	口辺部無文帯とく、　頸部にキャタピラ文と接続して、短隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線をめぐらし、ゲジゲジ文をなし下部は素文の短隆帯である。	26.7	2.6	
		14		6—4—b				
		15		6—4—b				
		16			口唇部に縄文帯をもつ			
		17		6—7	浅鉢で指頭圧痕隆帯が付く			Q—15 No.6＋No.7
		18		6—7	浅鉢と思われる。			
	185	19		6—1？	1類に付く把手か。			
		20		6—1	〃			
		21		6—1	〃			
		22		6—1	〃			



第 183 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－40遺物出土状況図　（１：80）

Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－47

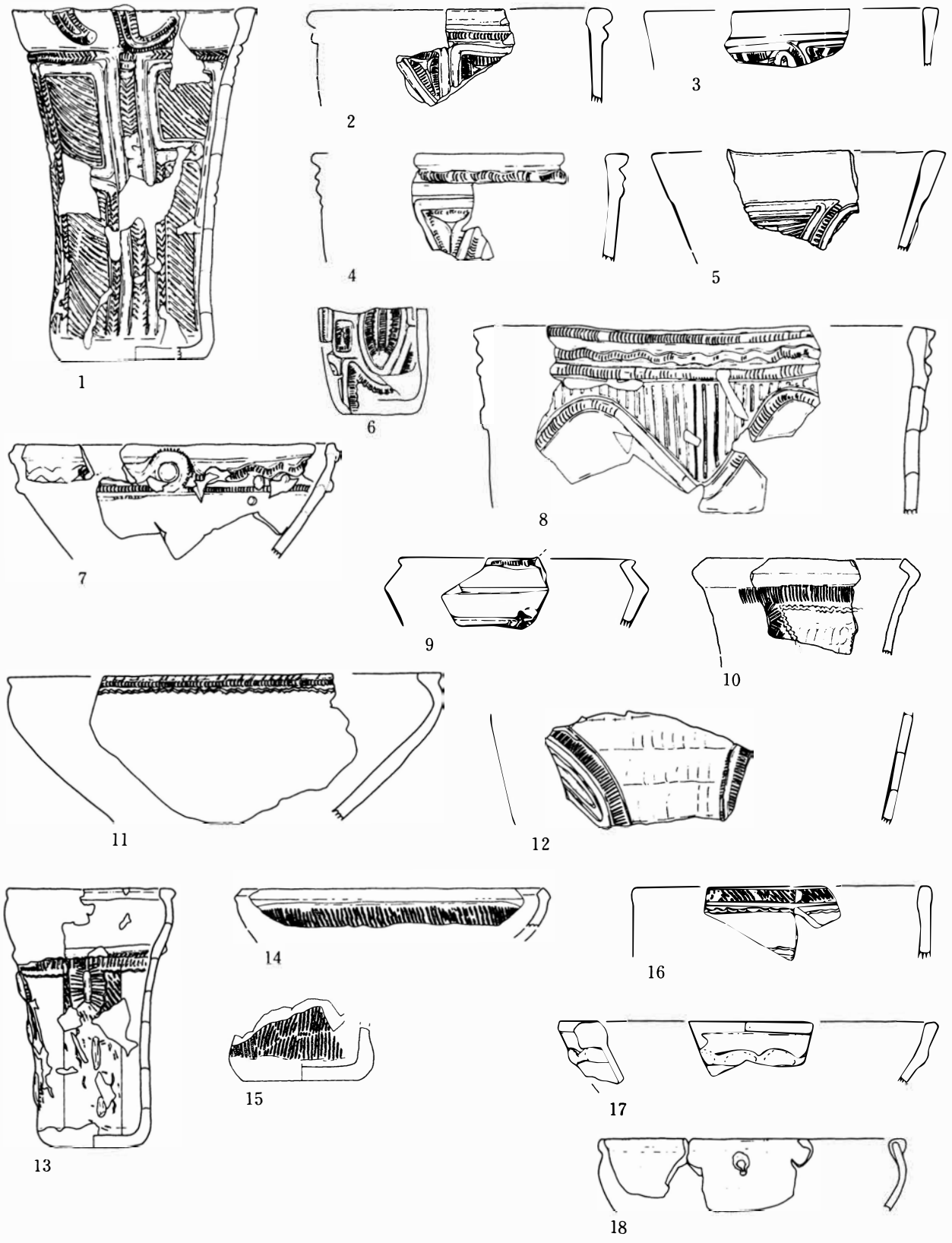
Ｓ－Ⅰ区の東南の隅にある住居は長径750㎝、短径600（推定）㎝で、ピットが多数穿たれているが、６柱穴と思われる。炉址も農耕のため抜き取られている。また北東側は畑の造成の折り削り取られたものと思われる。

出土遺物は少ないが、曲折底を持った土器が２点出土しており、Ｓ－Ⅰ区の住居の中ではより新しい様相を示していると思われる。石器は石鏃３、ドリル２、稜磨石３、磨石４、玉石２、磨斧３、打斧12、礫器１、黒曜石178ｇ、水晶30ｇである。

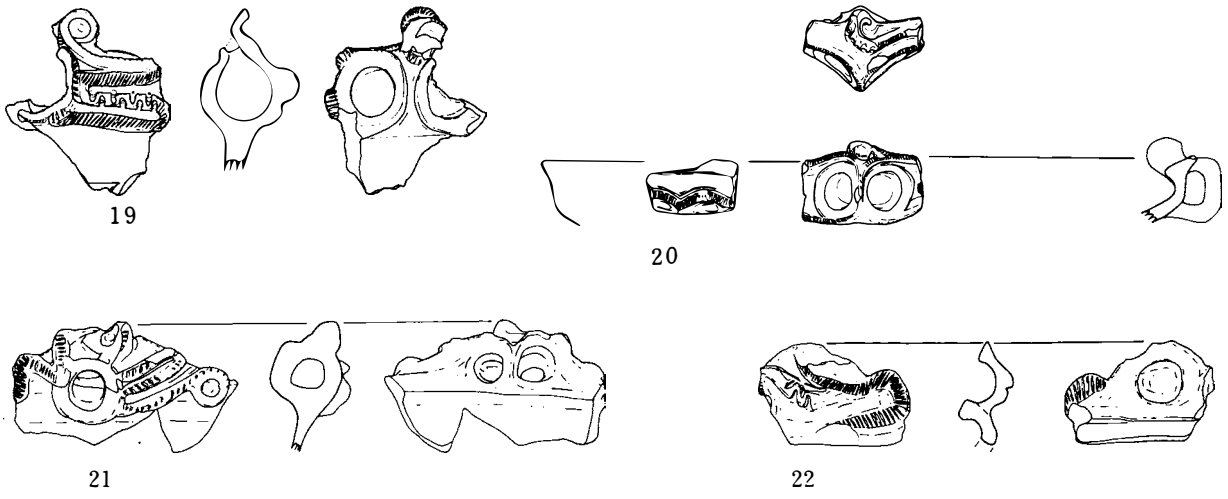
土偶は２点出土している。他に土笛と称している土製品が１点ある。

ＳＢ－47

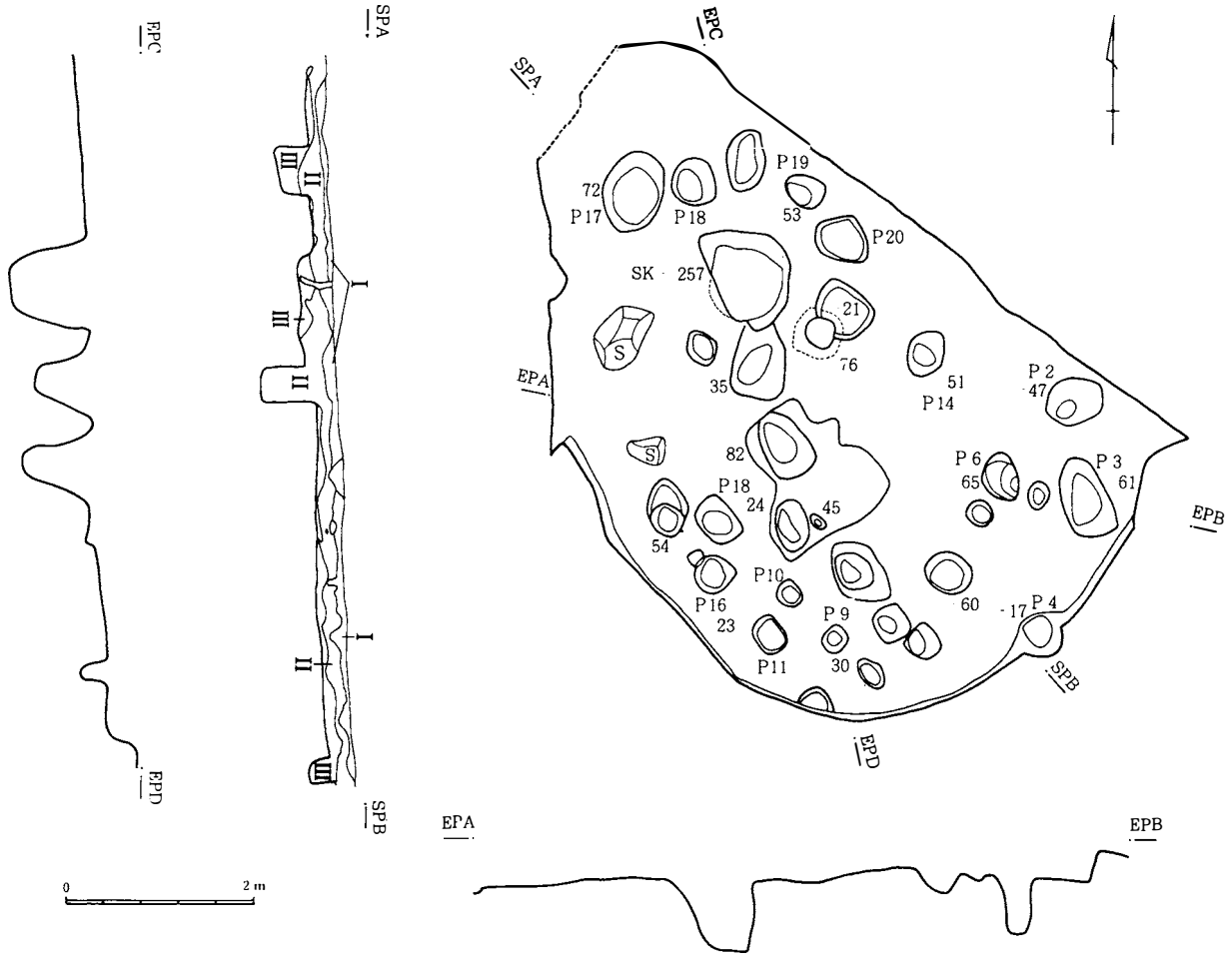
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
71	187	1		6－4－b	口唇部に把手が付き、口辺部無文帯となし、胴部は縄文をなしている。底部は曲折底になるらしい。			
		2		6－4－b	口辺部を無文帯となし、肩部に文様帯をめぐらし、胴部を縄文帯としている。			
		3			口辺部は縄文帯となっている。			
		4		6－4－b	口辺部は曲折底をなしている。撚糸文			
		5		6－4－b				
		6		6－4－b	底部			
		7		6	隆帯上にキャタピラ文を付けている。			
		8		6－8	小型の台			
		9		6				
		10		6－7	無文の碗			
		11		6－1	把手			



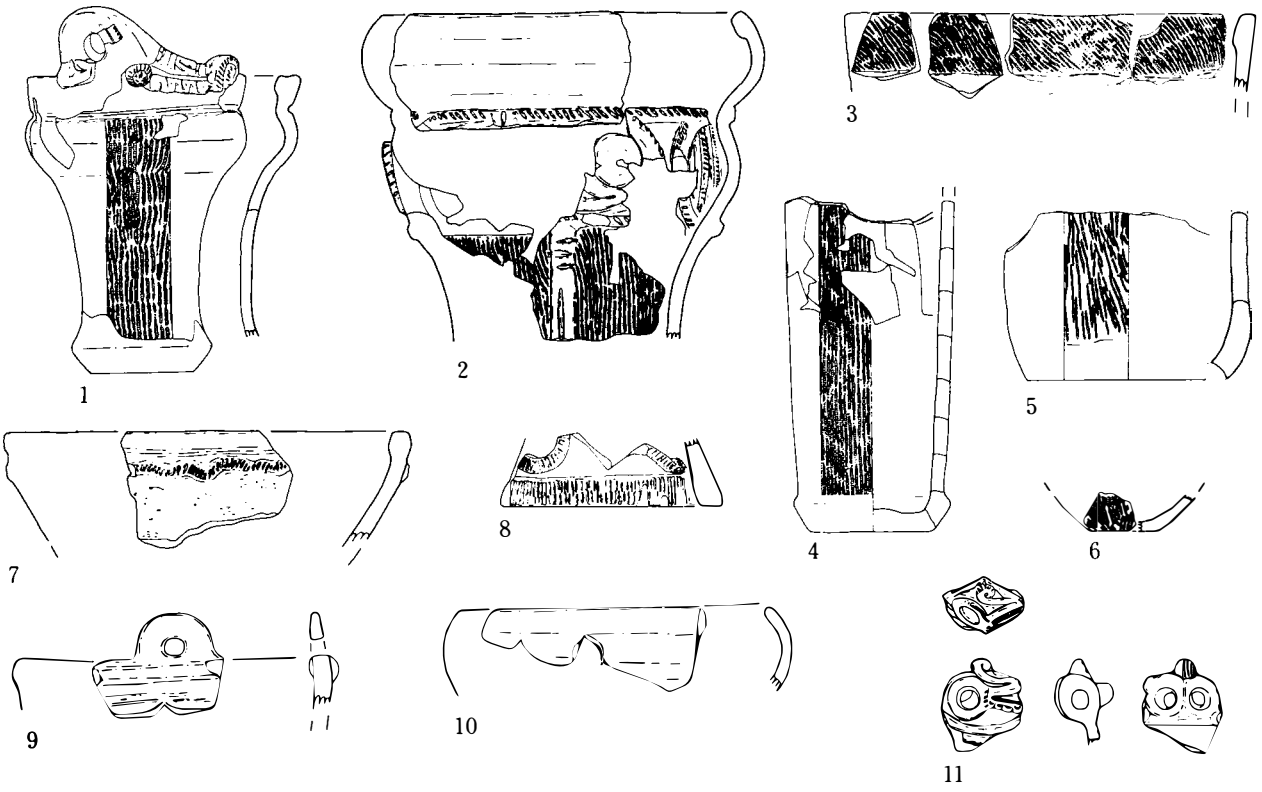
第184図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－40出土土器（1）　（1：6）



第185図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－40出土土器（２）（１：６）



第 186 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－47（１：80）



第187図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－47出土土器　（１：６）

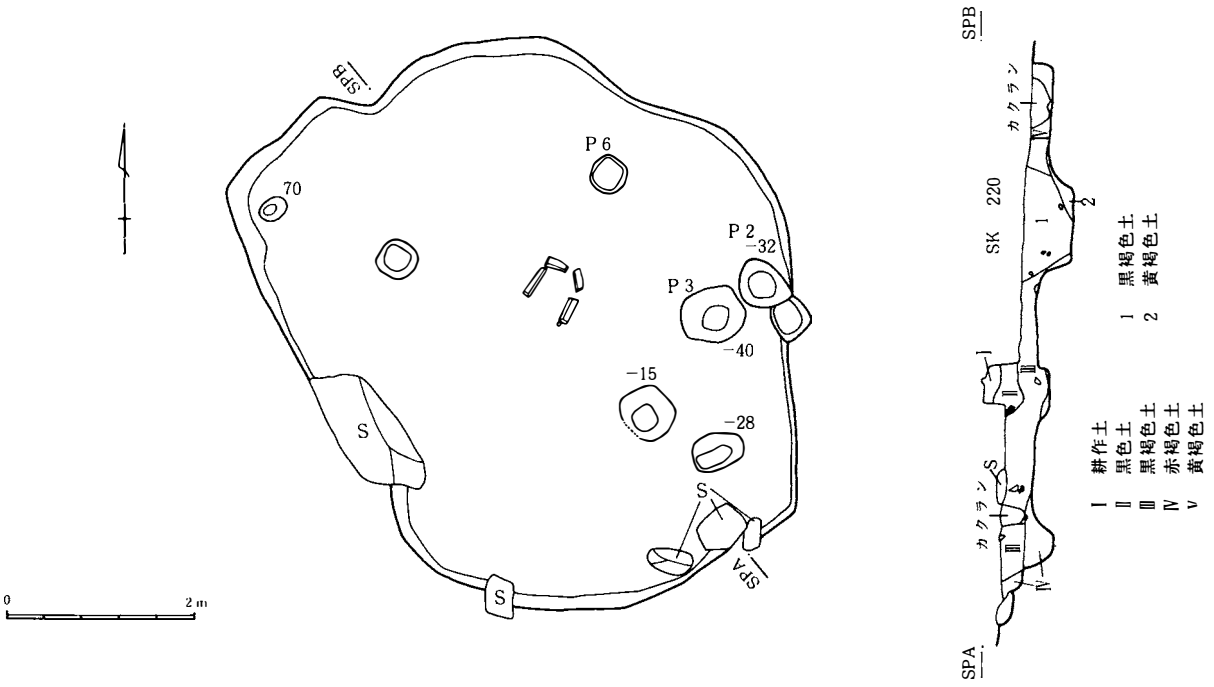
Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－51

Ｓ－Ｂ47と近接した住居址で、他時期の土坑が、多数掘り込まれていたが、ようやくプランを確認した。長径650㎝、短径500㎝。柱穴は４個しか確認されていない。炉址は南側の部分の方柱状の石を失っているが、藤内式期に一般的に認められる五角形炉と思われる。

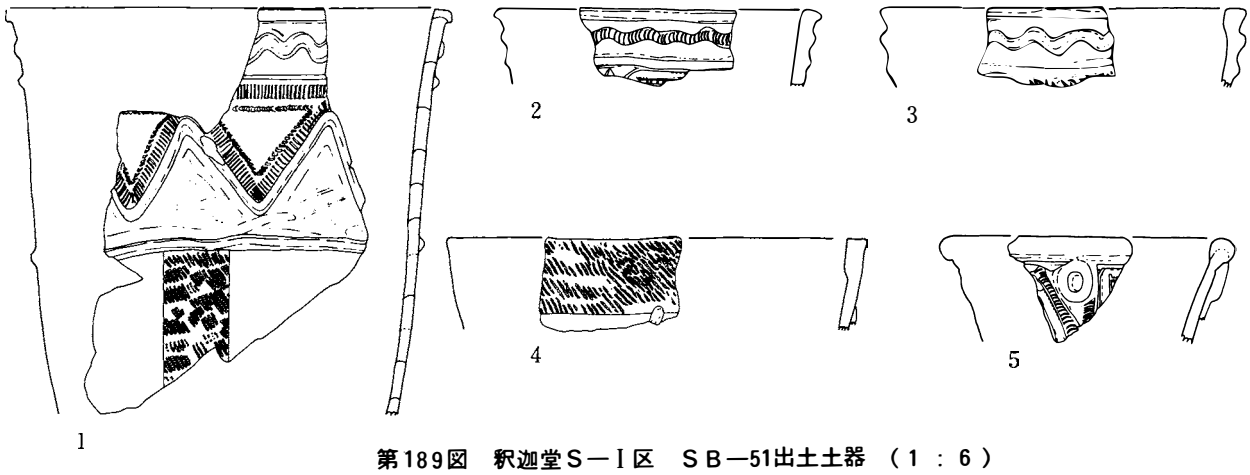
出土遺物は極く少ない。このうち土偶は２点出土しており、１点は円錐形をした鳴る土偶である。石器は石鏃２、石匙１、打斧12、磨斧１、磨石５、石皿１、玉石１、黒曜石144ｇ、水晶35ｇである。

ＳＢ－51

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	189	1		6－4－b	口辺部に波状隆帯　頸部に三角区画をなし、キャタピラ文＋波状沈線、胴下部は縄文			
		2		6				
		3		6				
		4		6	口辺部に縄文帯			
		5		6	縦区画文をなすと思われる。			



第 188 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－51（１：80）



第189図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－51出土土器　（１：６）

第 2 節　土 坑 群

土坑（ＳＫ）について

Ｓ－Ｉ区の土坑群は台地のほぼ中央部に位置する。したがって、藤内式期の集落においては、中央部に土坑群を持つ集落となる。

土坑は早期末～前期初頭の時期のＳＫ－121などがあるが、土器を意識的に埋納したとは考えられない。前期では黒浜式併行期のＳＫ－73や諸磯ａ式期のＳＫ－103のように、ほぼ完形の土器を埋納することは、中期のそれと同様な傾向を示す。またＳＫ－83、89のように住居址内の貯蔵穴と思われる円筒形土坑もある。藤内式期では、ＳＫ－01のように大型土器の中に別々の底部を合子にしたもの、ＳＫ－04のように土器、石皿、土器を重ねたもの、ＳＫ－33のように人頭大の石と共に土器を埋設するものなどがある。ＳＫ－125は炭化物と人骨を出土している。またＳＫ－22のようにフラスコ形の土坑は頂蔵穴である。後期ではＳＫ－55のように中期のような完形土器埋納土坑もある。

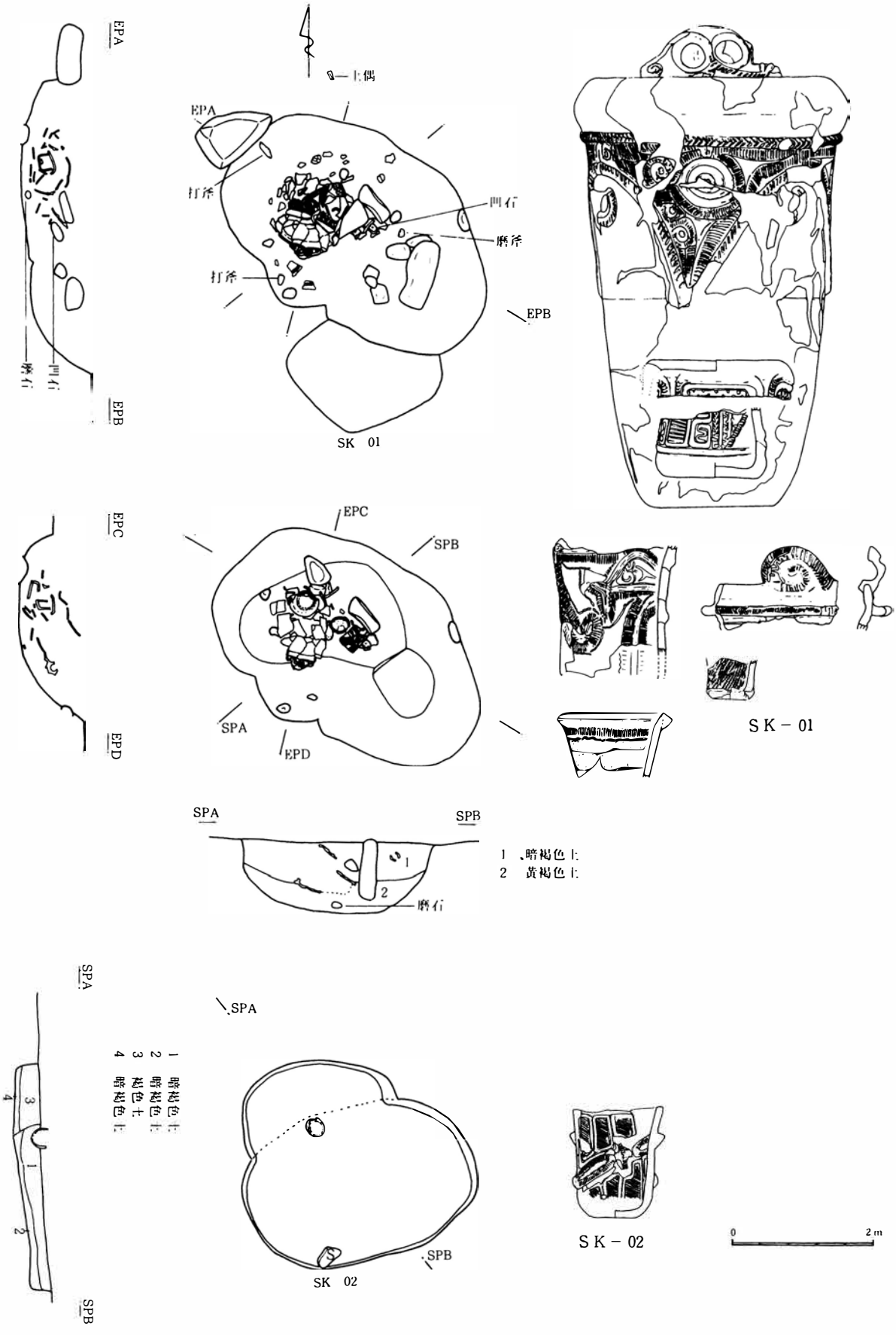
土 坑 一 覧 表

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ	出　土　遺　物	図化した遺物	備　考
	ＳＫ－01Ａ	Ｏ－18、Ｏ－19	205×130×　50	磨斧１、打斧２、磨石１、凹石	藤内(6)	
	ＳＫ－01Ｂ	Ｏ－18、Ｏ－19			藤内(1)	
	ＳＫ－02Ａ	Ｏ－18、Ｏ－19	157×110×　13	諸ｂ	藤内(1)	
	ＳＫ－02Ｂ	Ｏ－18、Ｏ－19	110×（80）×18			
	ＳＫ－03	Ｑ－19、Ｐ－19	(132)×(118)×25			
	ＳＫ－04	Ｑ－19	130×100×　33	石皿１、石錐１	藤内(2)	
	ＳＫ－05	Ｐ－20	170×　80×　26	石皿１、稜磨石３	藤内(1)	
	ＳＢ－06	Ｐ－17	80×　70×　72	打斧１、凹石、粘土	藤内(6)　土偶(1)	
	ＳＫ－07	Ｐ－18	120×100×　62	諸ａ～ｂ、掘之内、北白川	土坑	
	ＳＫ－08	Ｓ－18	67×　61×　18	土器、石錐		勝坂式底部と胴部出土だが不明
	ＳＫ－09	Ｐ－19	140×　80×　27	諸ａ	藤内(1)、前期北白川	
	ＳＫ－10	Ｐ－21	210×192×	焼土塊３、土製品	堀の内(3)	
	ＳＫ－11	Ｏ－18	154×106×　21	打斧、土器、磨石２		
	ＳＫ－12	Ｏ－18	130×（44）×54	土器		
	ＳＫ－13	Ｏ－19	142×120×　55	垂飾、諸ｂ、堀の内、すり石２、垂飾磨石		
	ＳＫ－14	Ｏ－19	140×　95×　48	諸ａ、叩石		
	ＳＫ－15Ａ	Ｑ－19			藤内(1)	
	ＳＫ－15Ｂ	Ｑ－19				
	ＳＫ－16	Ｑ－19		土器	堀之内、拓本①	
	ＳＫ－17	Ｑ－19				
	ＳＫ－18－２	Ｓ－17	103×103×　22	石柱	藤内(4)	
	ＳＫ－19	Ｍ－18	87×　77×　25		藤内(4)	
	ＳＫ－20	Ｍ－18	75×　68×　10	浅鉢	藤内(1)	
	ＳＫ－21	Ｍ－18	60×　58×　73	磨石		
	ＳＫ－22	Ｐ－17	161×155×　47	諸磯ｂ	藤内１個体	
	ＳＫ－23	Ｍ－18	125×　×　94	有孔鍔付土器　早期　諸ａ	有孔鍔付土器、早期	
	ＳＫ－24	Ｍ－18	50×　×　80			
	ＳＫ－25	Ｍ－18	15×　×　69			
	ＳＫ－26	Ｍ－18	34×　×　50			
	ＳＫ－27	Ｍ－18	35×　×　66			

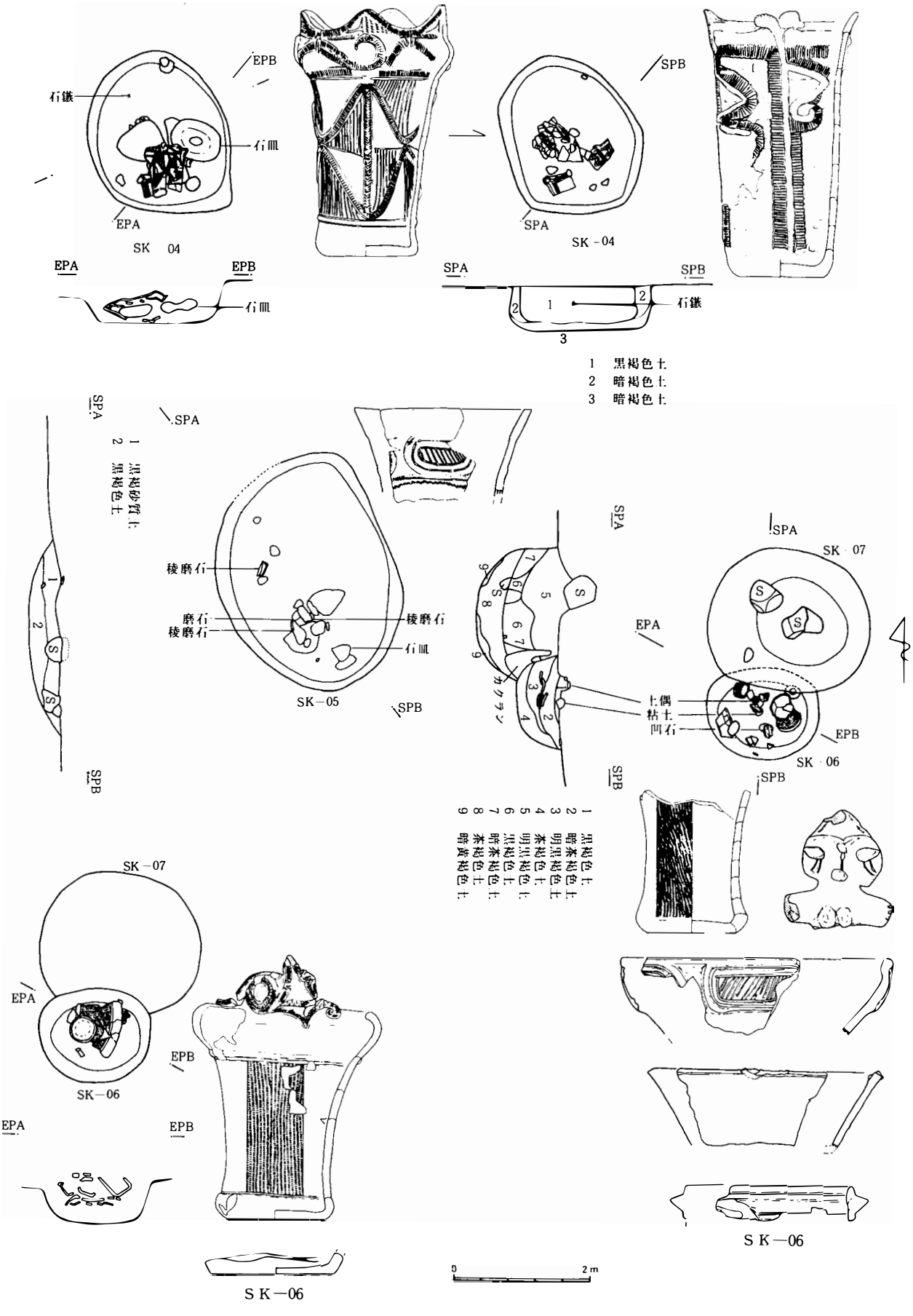
（土坑の計測値のないものは、撹乱や切り合いのため計測値の出せないものである）

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－28	O－17	110× 78× 30	土器、石匙1、骨片1	藤内(4)	
	SK－29		(105)×(101)×52	早期	早期	
	SK－30	S－18、19	90× 80× 25	土器	藤内(1)	
	SK－31A	O－18、O－19	370×215× 36	メンコ2、石斧（打斧）1、礫器1、諸、焼土凹石1		
	SK－31B	O－18、O－19	× ×102			
	SK－33	V－19	122×110× 40	石斧、土器、石斧	藤内(1)	
	SK－34	V－18	136×103× 35	石皿？（磨石）、土器、諸a～b		
	SK－35	P－19	81× 77× 14			
	SK－36	S－20	66× 50× 16			
	SK－38＝58	T－19	× 65× 20	諸b、石皿1		
	SK－39	P－19	74× 60× 15			
	SK－40	P－22				
	SK－41	R－20	(110)×94× 21	メンコ1、土器、	諸磯c 1	
	SK－42	R－20	100× 95× 48	石鏃、土器、石鏃1	堀の内(3)(拓木)	
	SK－43	Q－20	(110)×96× 18	凹石、磨石、石皿		
	SK－44	Q－18	120×106× 93			
	SK－45	P－18、19	90× 75× 22	打斧1、土器	藤内(1)	
	SK－46	V－18	112×112× 40	耳飾	藤内(1)	
	SK－47	V－18、U－19	(140)×103×			
	SK－48	U－18	110×103× 30	土器、諸a、石器	藤内(1)	
	SK－49	V－18	144×134× 42	土器	藤内(1)	
	SK－50	O－19	121× 93× 63	土器		
	SK－51	O－19	(160) ×120×44	土器		
	SK－52	Q－19	96× 81× 19	稜磨石、磨石、土器、折斧1、凹石1	藤内(2)	
	SK－53	Q－19	103× 91× 37			
	SK－54	Q－19	(100) ×87×40	稜磨石		
	SK－55	S－21	165×140× 34	凹石1、諸b、焼土	堀の内(1)	
	SK－56	V－18	102× 95× 21	早、石斧1	拓本（早期）	諸磯片出土
	SK－57 ＝59	P－19	115×113× 38	稜磨石1	藤内(3)	
	SK－58＝38	S－19	113× 97× 36	石皿2、磨斧1、凹石1		
	SK－60	P－20、P－21	90× 85× 30		藤内(2)	
	SK－61	Q－18				
	SK－62	Q－19				
	SK－63	Q－19				
	SK－65	Q－18	70× 60× 40	石皿1、石斧1、土器	藤内(1)	
	SK－66	Q－21、R－21	124×115× 20			
	SK－67	S－20	130× 92× 23	石器、石皿、土器片		
	SK－68	T－21	110×102× 32		藤内(2)	
	SK－69	W－22、X－22	68×5.2× 30		藤内(1)	
	SK－70	Q－21	110× 70× 41			
	SK－71	P－21	60× 58×	早	拓本	SB－19の図面と一緒
	SK－72	R－20、R－21	158×140× 29			SB－19の図面と一緒
	SK－73A	Q－22	76× 65× 10			
	SK－73B	Q－22	70 (70) × 30		黒浜併(1)	
	SK－73C(D)	Q－22	65× (65) ×10	石匕		
	SK－74	S－22	150×145× 8	石皿1		
	SK－75	T－20	96× 92× 34	石鏃2		
	SK－76	T－20	104×102× 42	炭火材1	北白川	
	SK－77	O－21	78× 67× 22	早	堀ノ内	
	SK－78	O－21	77× 62× 25			
	SK－79	O－20	148×143× 37	石器1	藤内(3)	
	SK－80	N－20		土器（五領ケ台）		SB－22の中
	SK－81	T－20	98× 78× 18		黒浜	

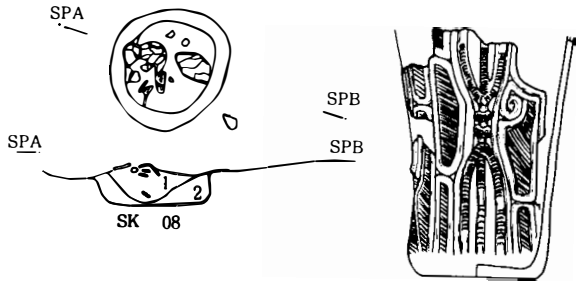
整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－82	R－22	(54) × 40	石皿		
	SK－83	T－19	164×150×130			
	SK－84	T－22	62× 44× 26			
	SK－85	S－23	(110)×92× 65	諸b		
	SK－86	T－22	116×110× 35			SK－86 87
	SK－87	U－22			藤内(4)、早期片	
	SK－88	O－21	97× 90× 22			
	SK－89	T－19	146×120×120		諸b (1)	
	SK－90	R－18	(110)×100×16			
	SK－91	R－18	130× 83× 38			
	SK－92	T－19、T－20	× 47		石鎗ケ台 (1)	
	SK－93	R－18	135× 90× 46			
	SK－94	Q－23	123×104× 30			
	SK－95	Q－23	95× 85× 22			
	SK－96	P－17	160× 70× 20			
	SK－97	K－17	× 33	石鎗ケ台		
	SK－98	S－18、T－18	140×117× 27	石鏃1骨粉	藤内 (2)	
	SK－99	S－18、T－18	80× 58× 44			
	SK－100	S－18	147×115× 25			
	SK－101	P－19	108× 90× 47		藤内 (1)	
	SK－102	R－19	120×(100)×13			
	SK－103	R－19	113×(100) ×	石鏃1、(SB－13内土坑)	前期諸磯a？	SB－13の床面検出のとき発見
	SK－105					
	SK－106					
	SK－107					
	SK－108					
	SK－110・228	T－23、U－23	146×101× 44	石器1	藤内 (7)	
	SK－111	O－23	129×123× 32	打製石器		
	SK－112	R－25			藤内 (1)	
	SK－113	R－25				
	SK－114	R－25				
	SK－115	R－25				
	SK－116	P－25				
	SK－117	P－25				SK－116のとなりを117とする
	SK－118	P－25				
	SK－119	Q－25				
	SK－120	K－17				
	SK－121	R－25		早SK－124と同一		
	SK－122	R－25				
	SK－123	Q－25				
	SK－124	R－25		早SK－121と同一		
	SK－125	P－23		骨4、炭化物1		
	SK－126	Q－25				
	SK－127	Q－25				
	SK－128	R－25				
	SK－129	Q－25				
	SK－130	Q－25			黒浜 (1)	
	SK－131	Q－25				
	SK－132	R－25		すり石1		
	SK－133	R－25				
	SK－134	R－23				
	SK－135	R－25				
	SK－136	R－25				



第190図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－01、02（SK　1：40）

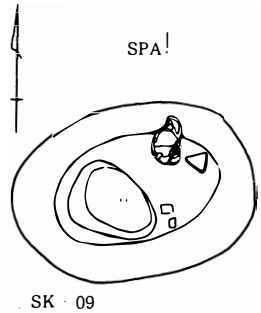


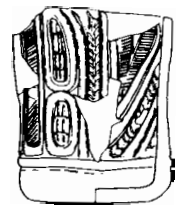
第191図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ－04、05、06、07（ＳＫ　1：40）



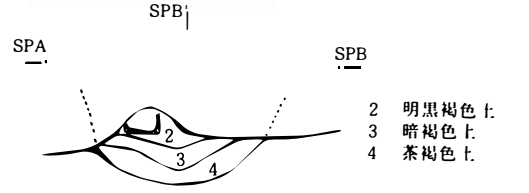
1 暗褐色土
2 暗褐色土

SK—04

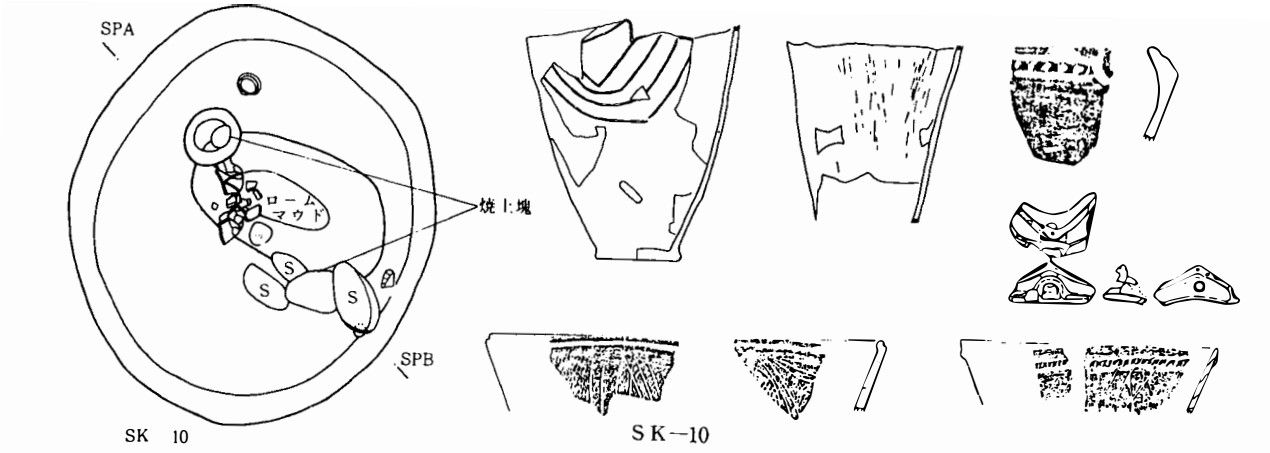




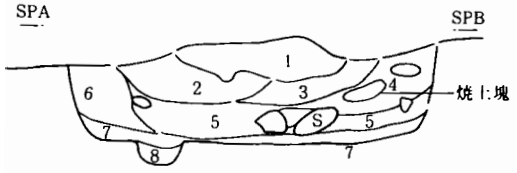
SK—04



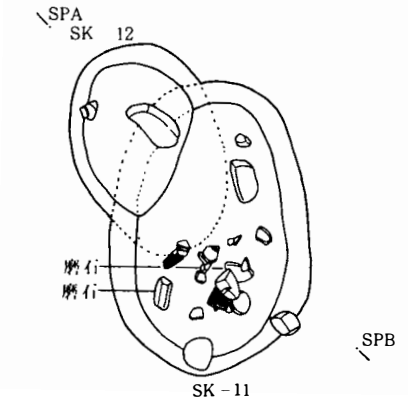
2 明黒褐色土
3 暗褐色土
4 茶褐色土

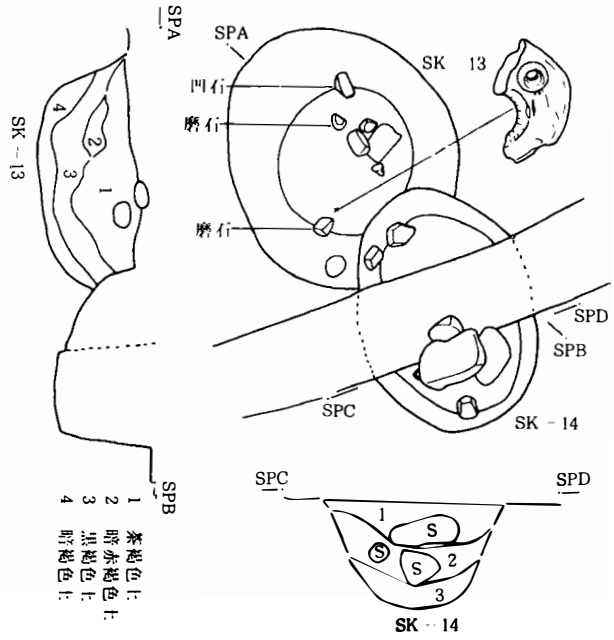


SK—10

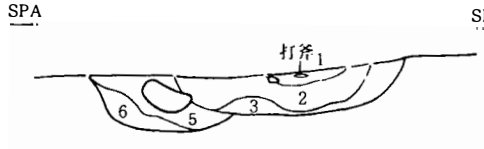


1 ローム
2 黒褐色土
3 茶褐色土
4 赤褐色土
5 黒褐色土
6 暗褐色土
7 暗黄褐色土
8 黄褐色土





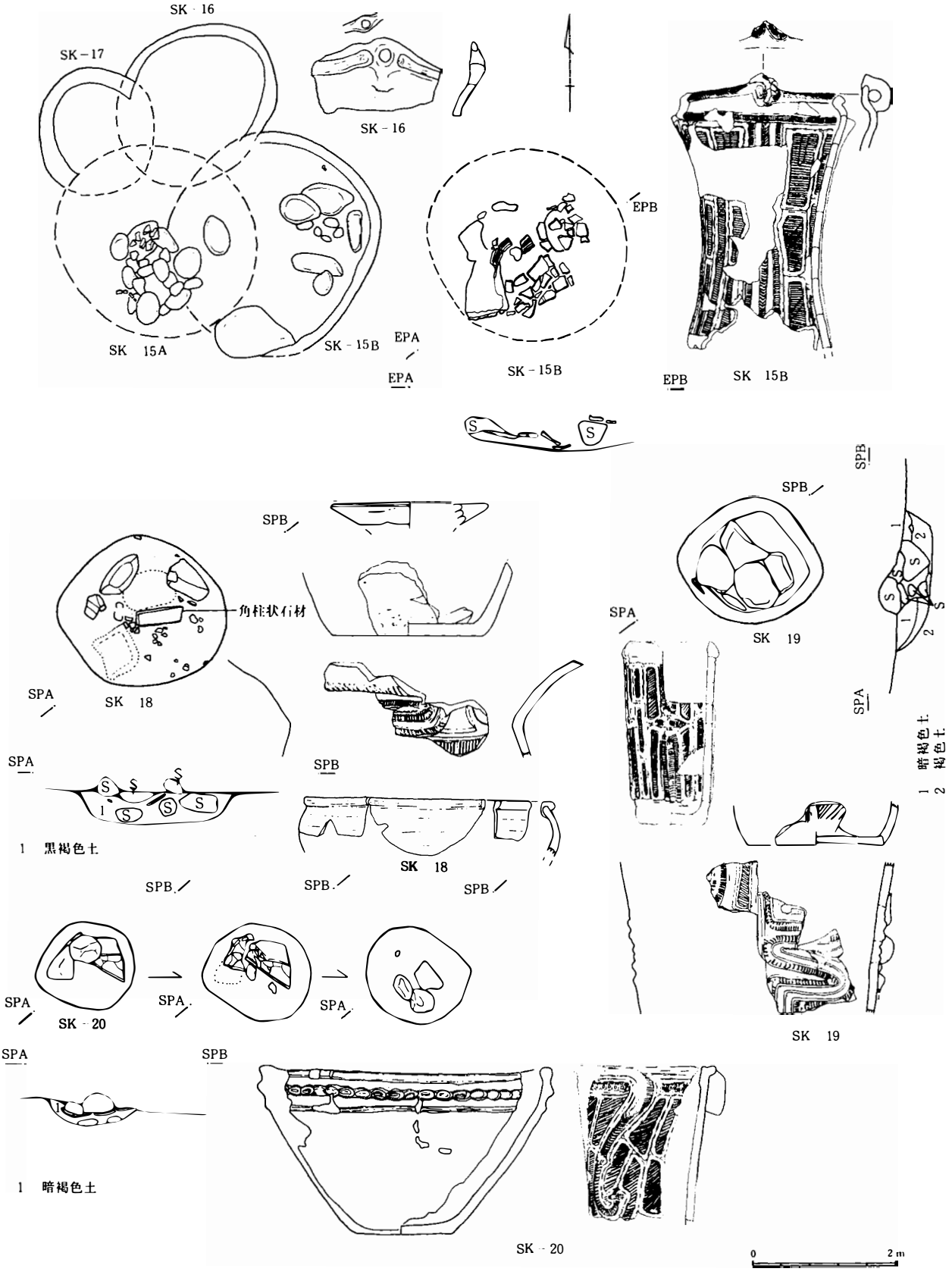
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 茶褐色土



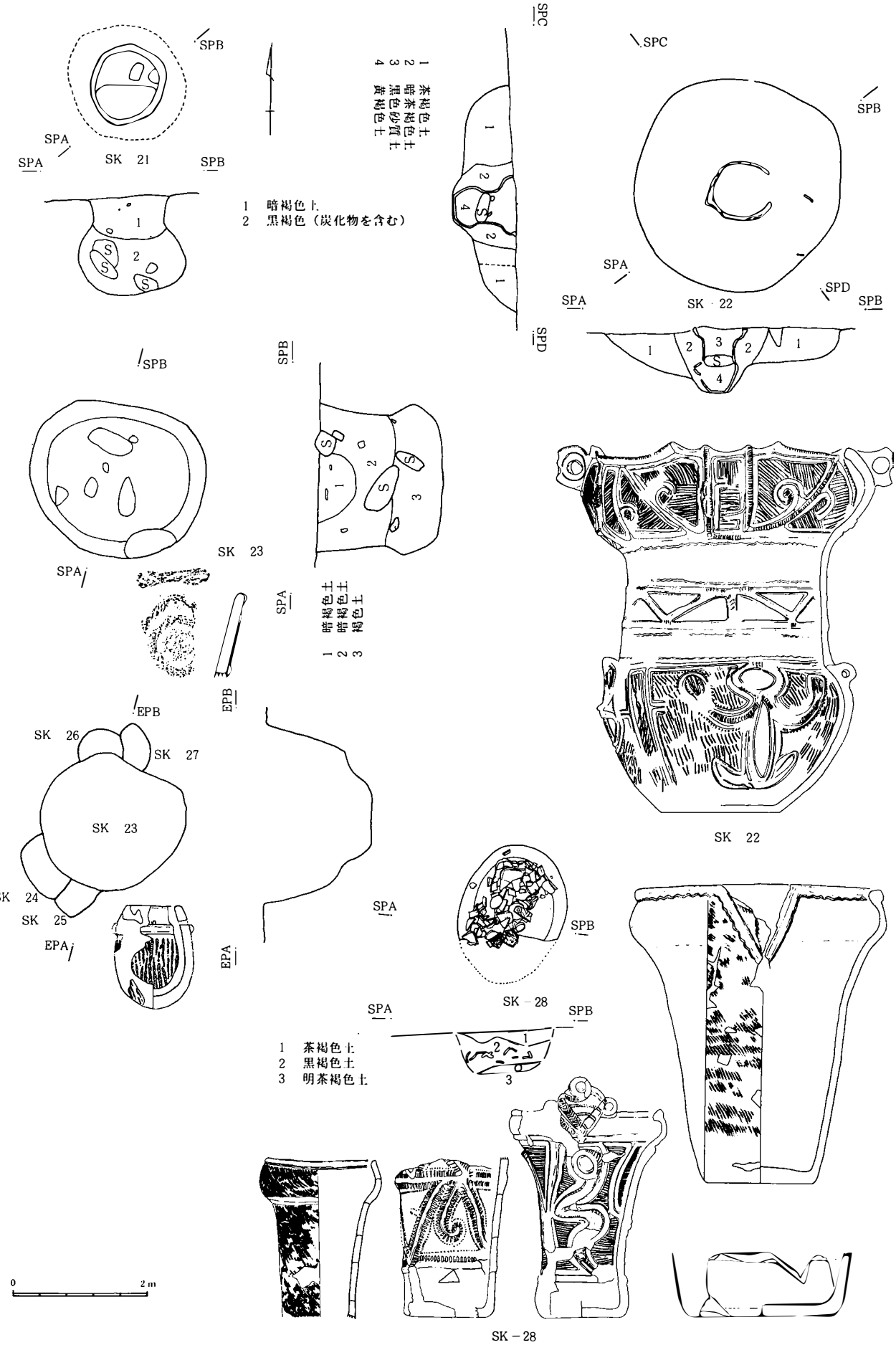
1 暗褐色土
2 暗黒褐色土
3 褐色土
5 茶褐色土
6 暗褐色土

0 2m

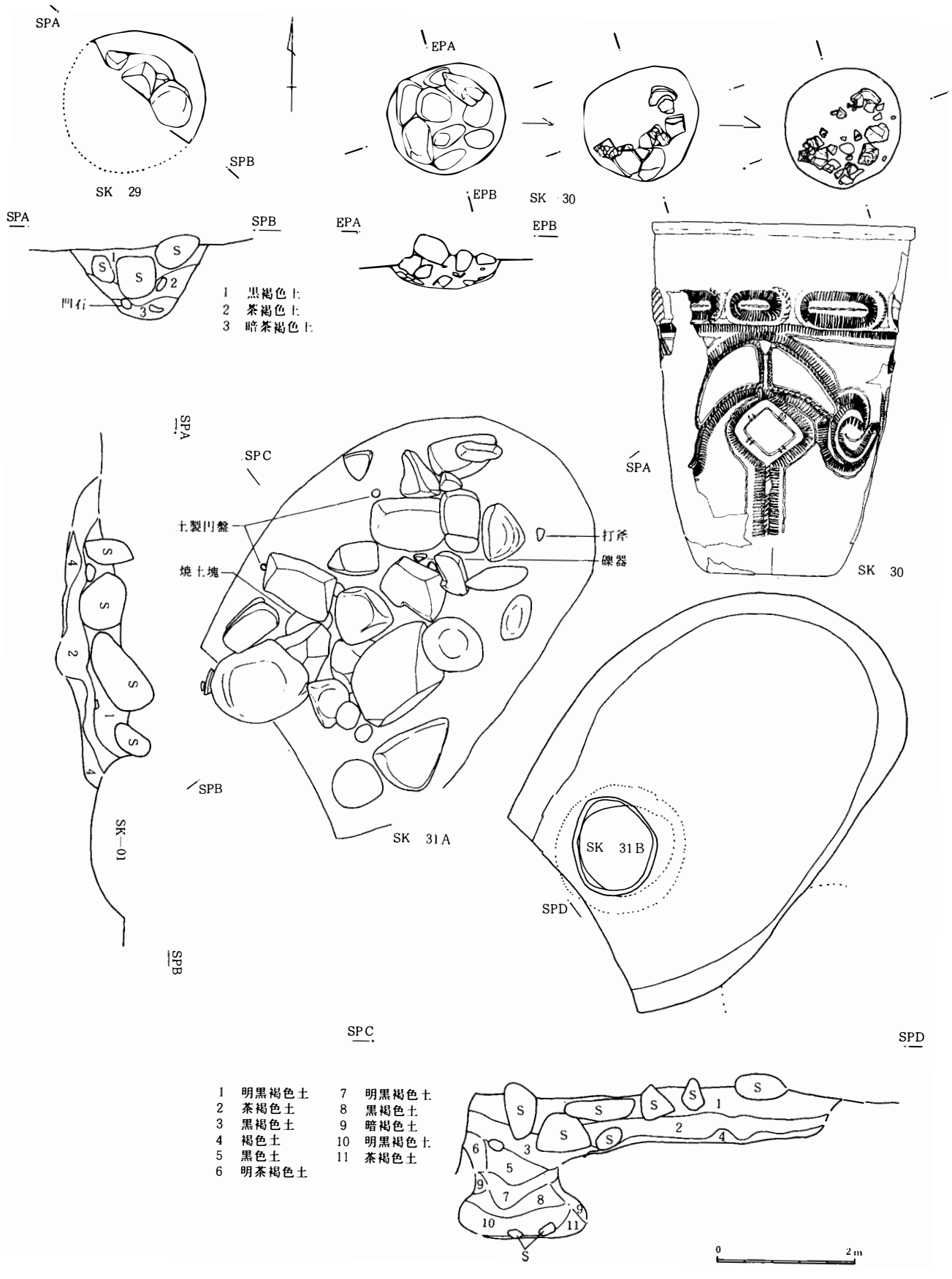
第192図 釈迦堂S－Ⅰ区 SK—08、09、10、11、12、13、14（SK 1：40）



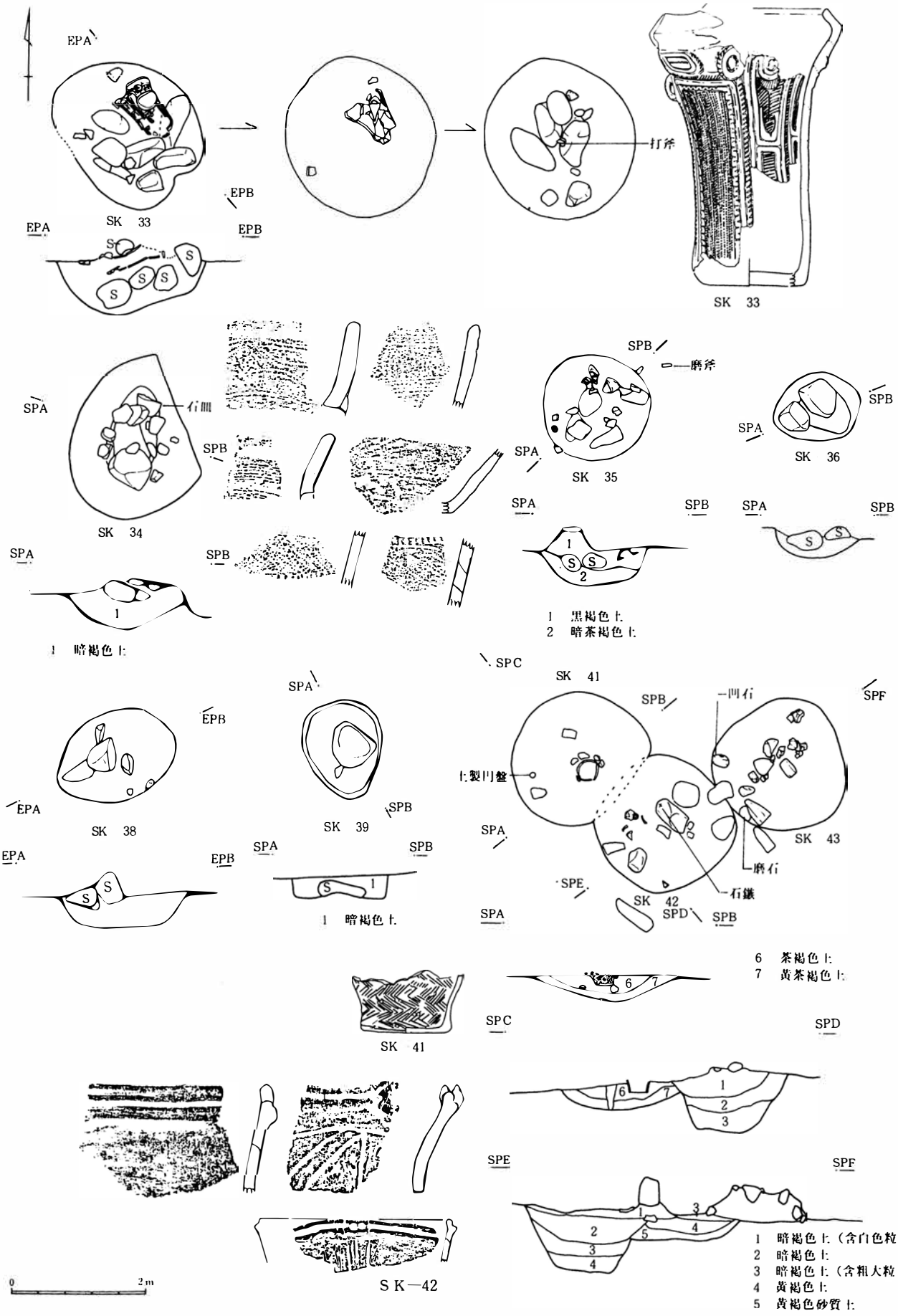
第193図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－15A、15B、16、17、18、19、20（SK　1：40）



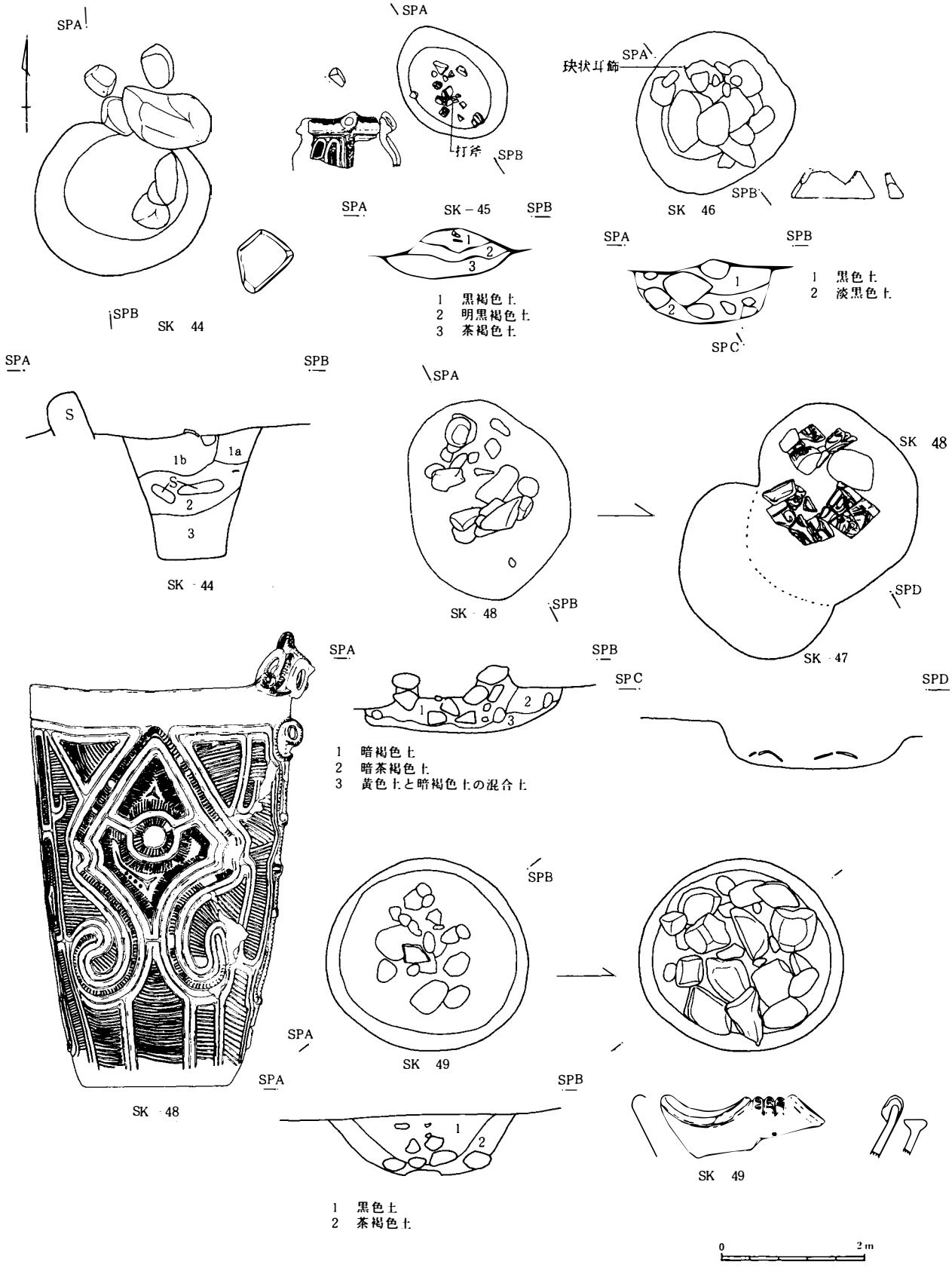
第194図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－21、22、23、24、25、26、27、28（SK　1：40）



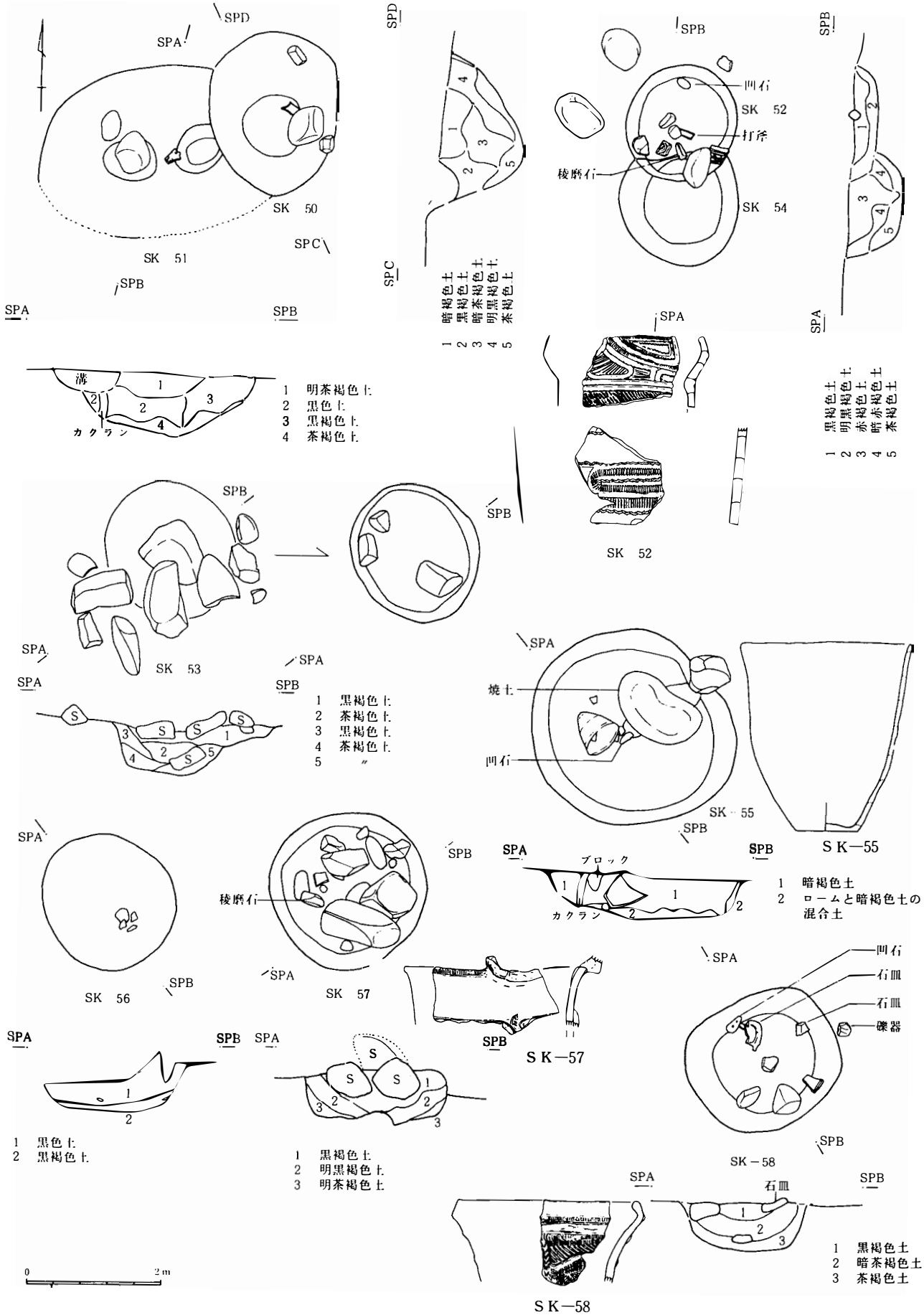
第195図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－29、30、31（SK　1：40）



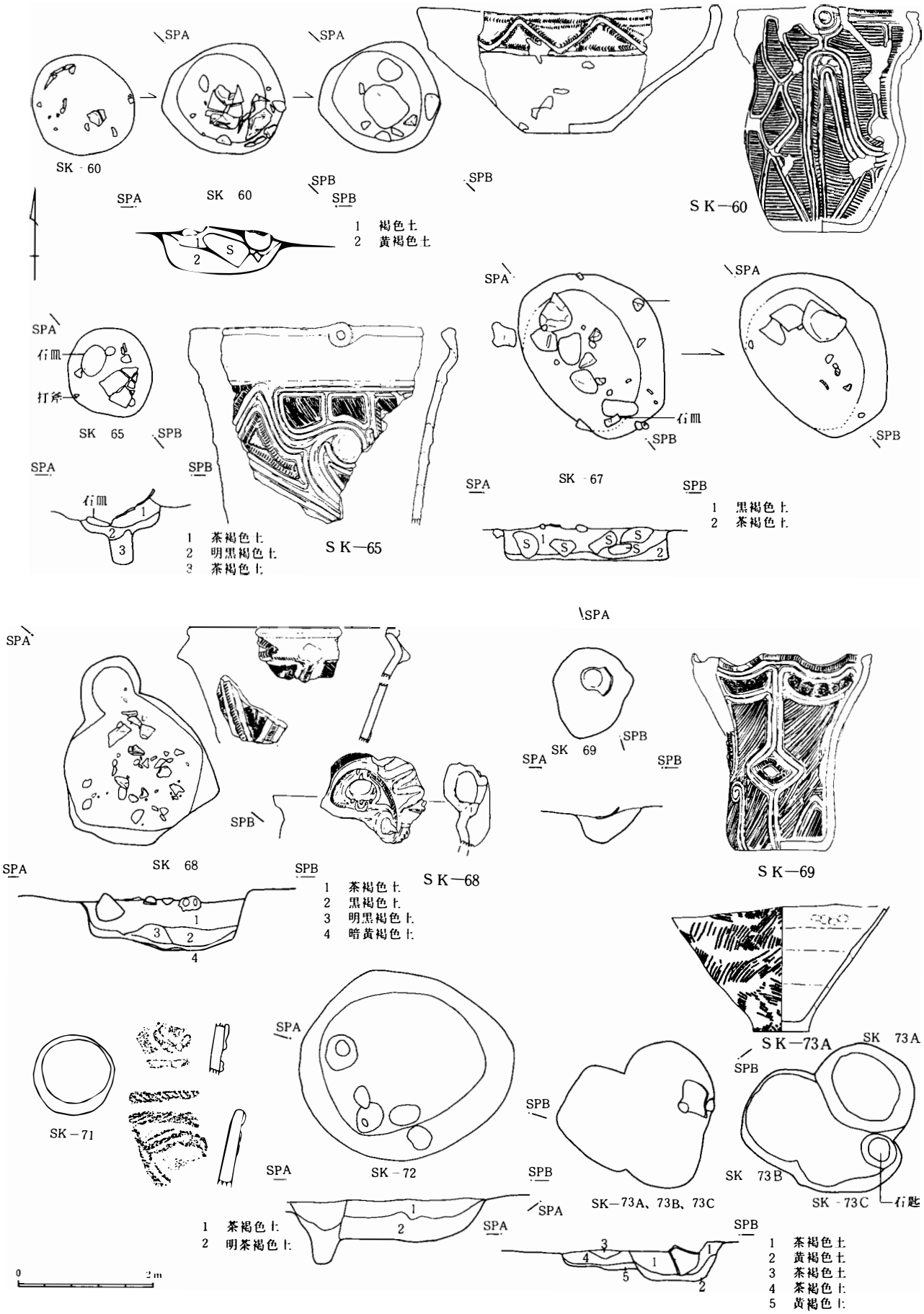
第196図　釈迦堂S－I区　SK—33、34、35、36、37、38、39、41、42、43（SK　1：40）



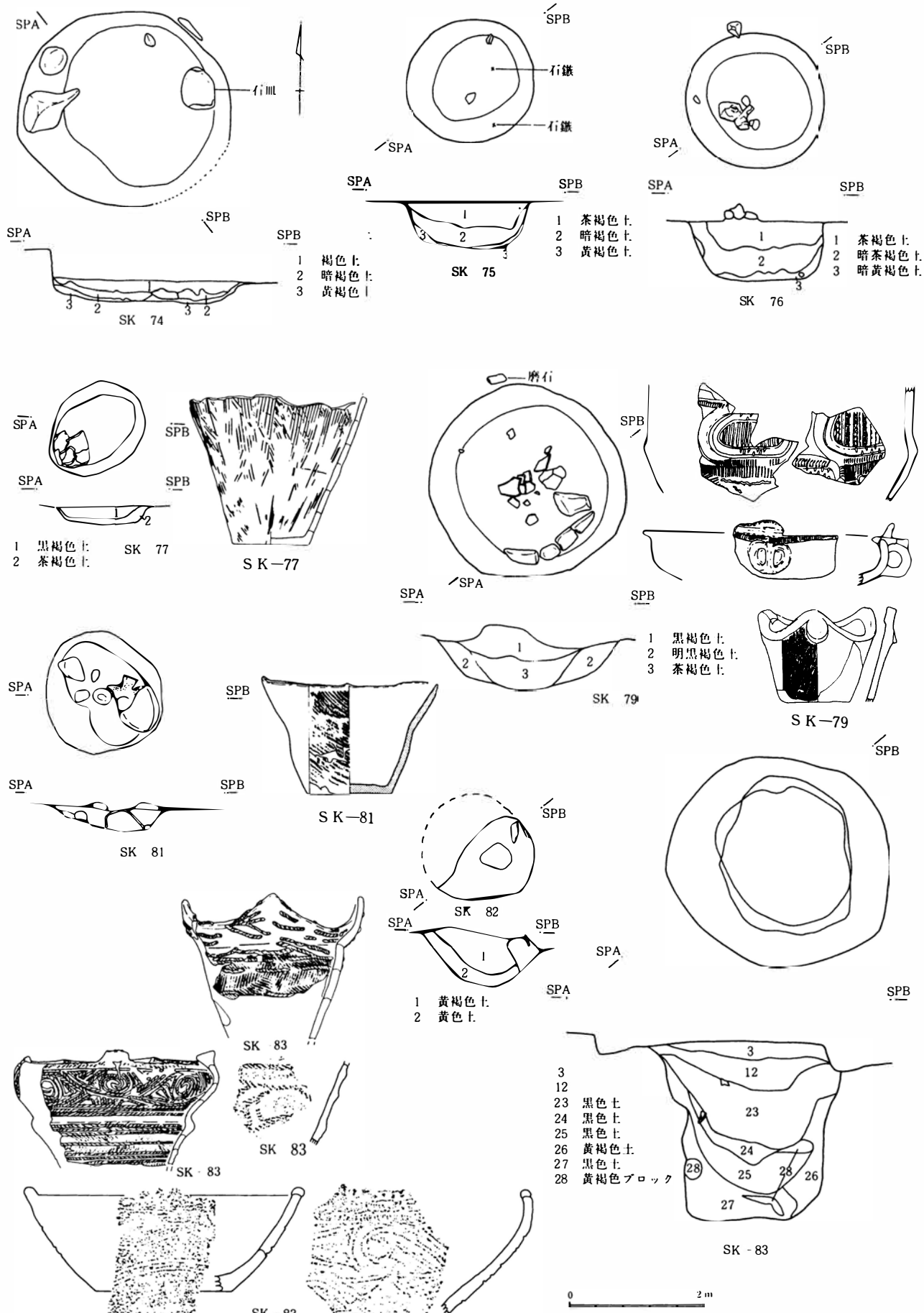
第197図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ－44、45、46、47、48、49（ＳＫ　1：40）



第198図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK—50、51、52、53、54、55、56、57、58（SK　1：40）



第199図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－60、65、66、67、68、69、71、72、73A、73B、73C（SK　1：40）

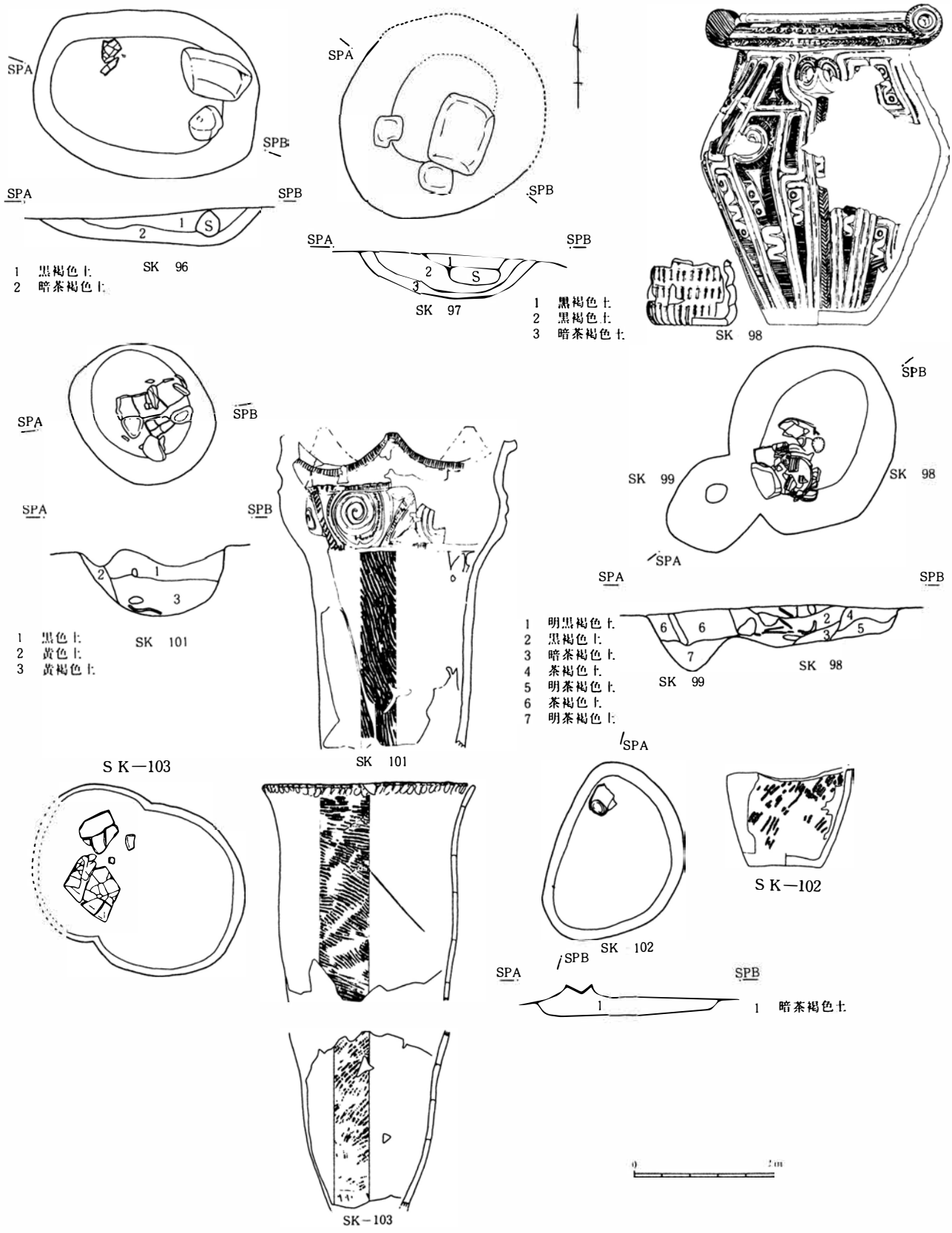


82、83

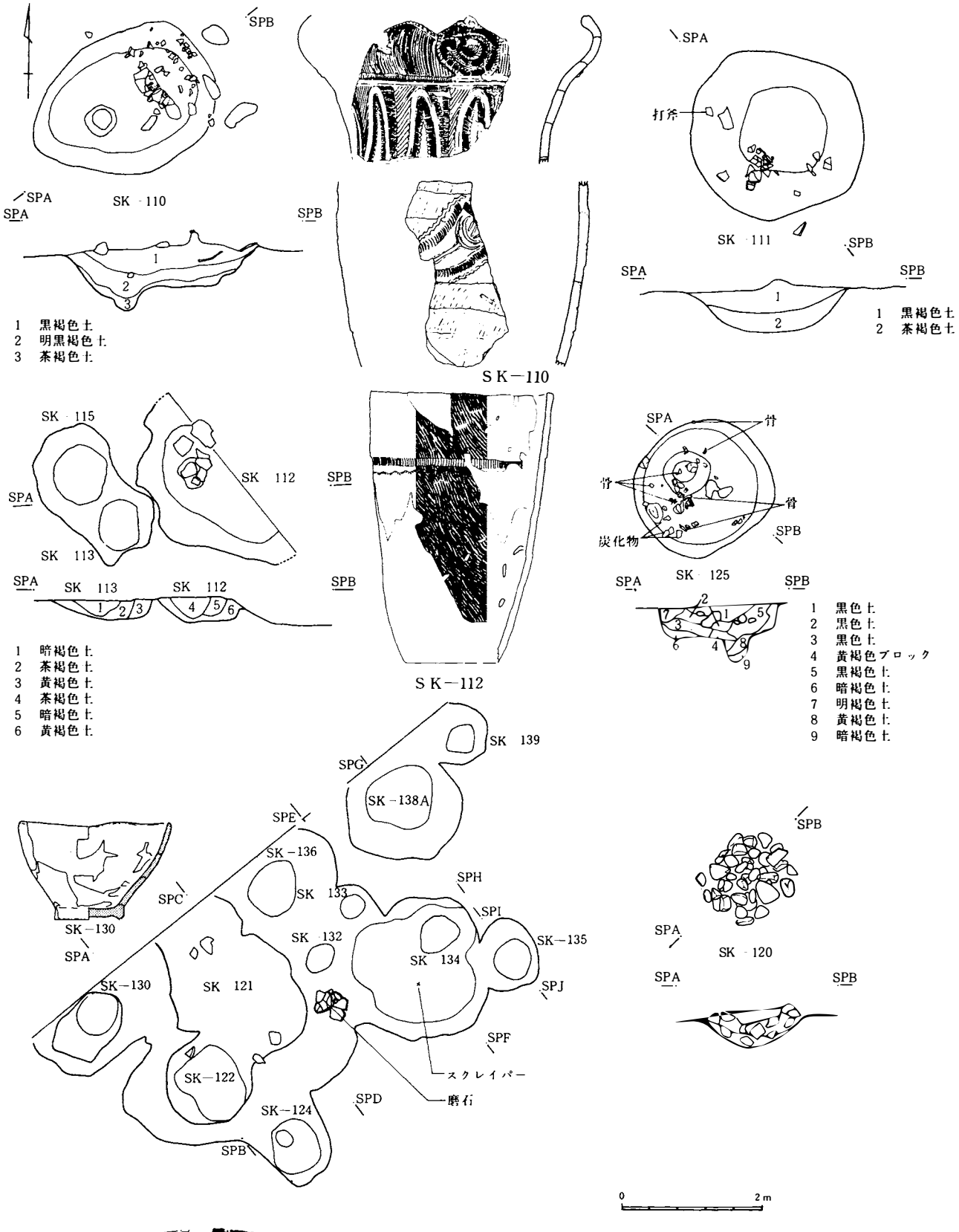
第200図　釈迦堂S－I区　SK－74、75、76、77、79、81

（SK　1：40）

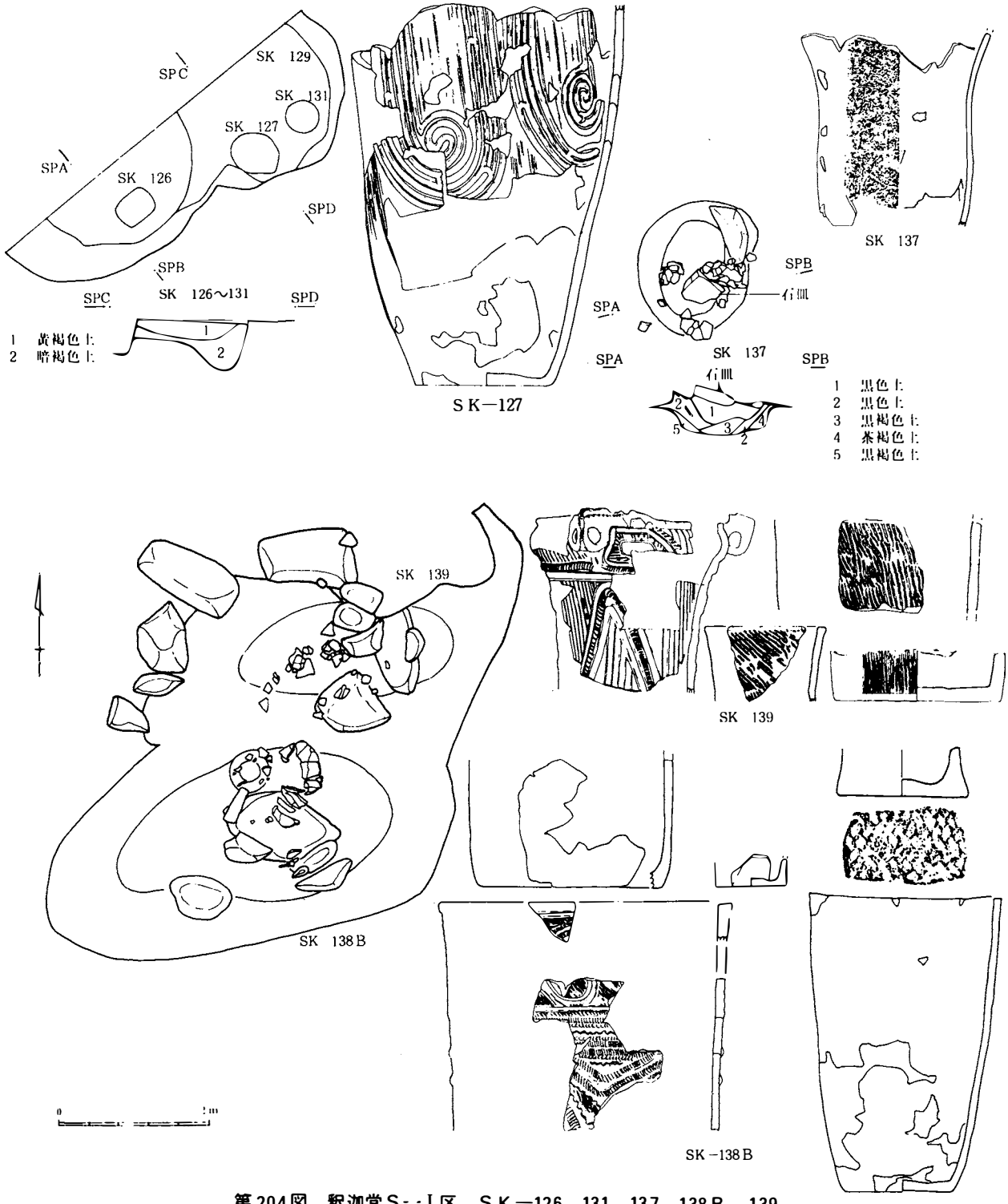
第201図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－85、86、87、88、89、92、94、95（SK　1：40）



第202図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－96、97、98、99、101、102、103（SK　1：40）

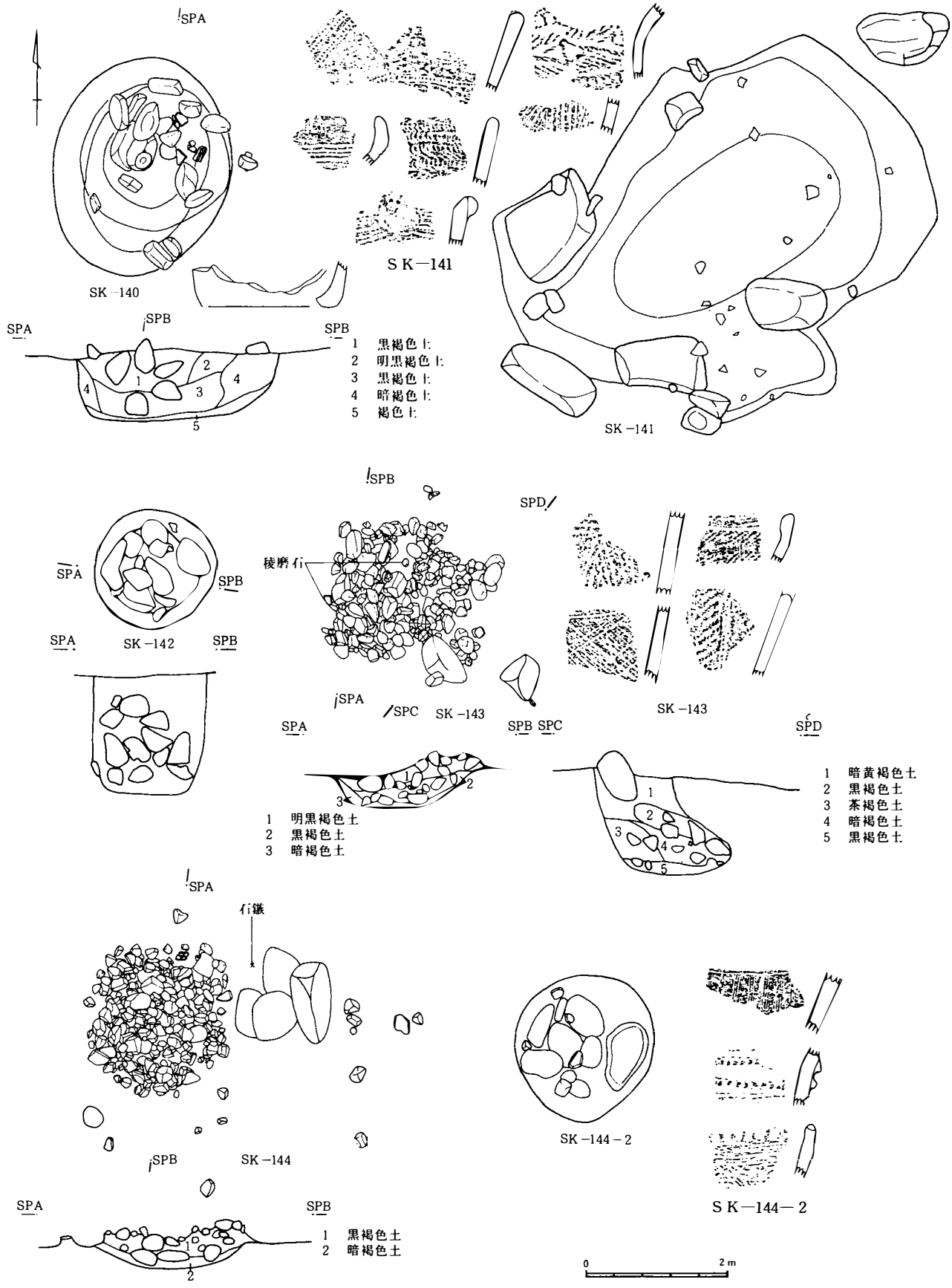


第203図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ－110、111、112、113、120、121、122、124、130、132、133、134、135、136、138Ａ、139
（ＳＫ　1：40）

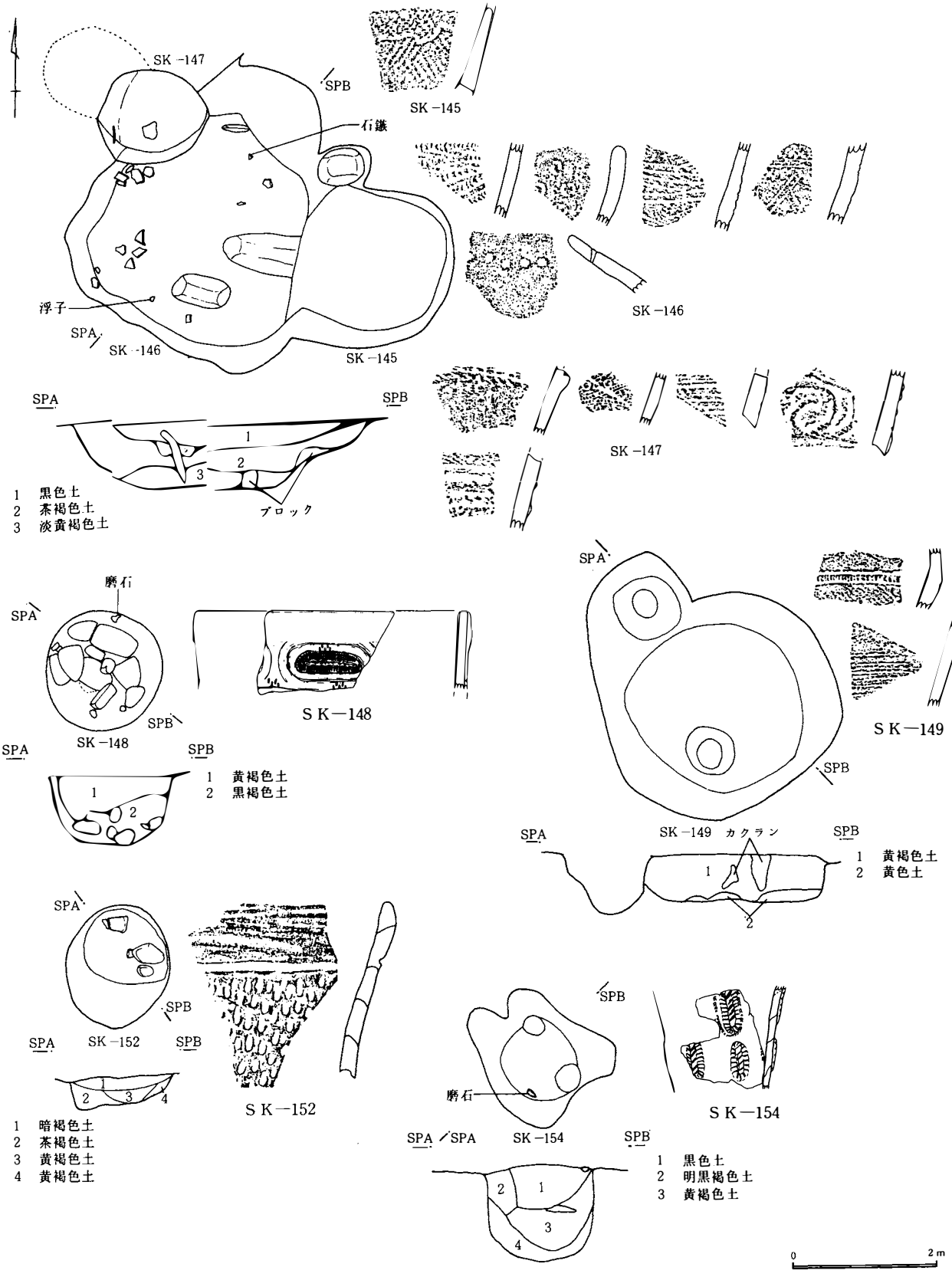


第204図　釈迦堂S--I区　SK—126、131、137、138B、139　(SK　1：40)

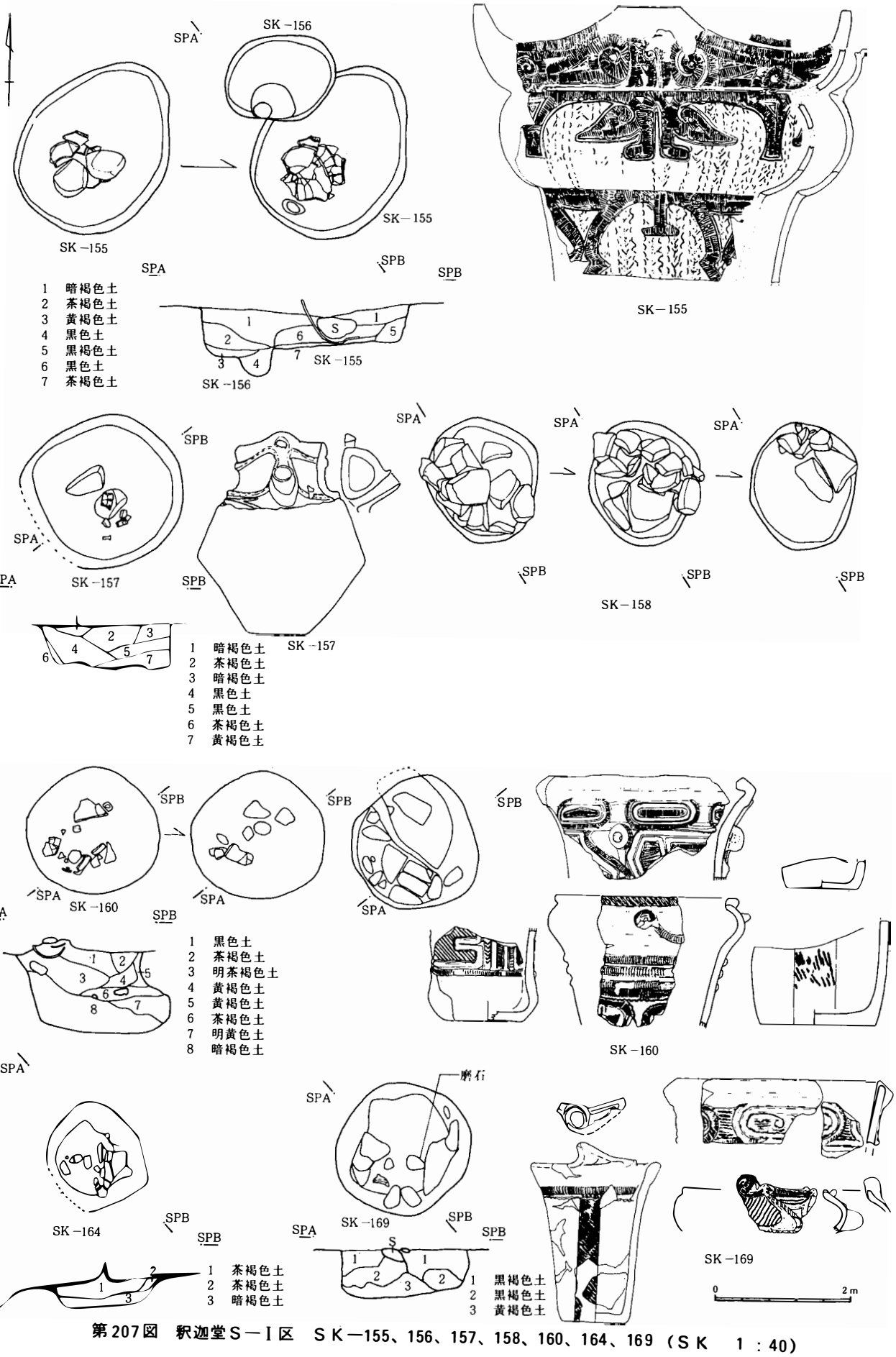
整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－137	R－23		石皿1	諸磯a(1)	
	SK－138	R－25、V－24		石器1、骨	藤内(4)	
	SK－138－2	T－23、T 24				
	SK 139	R－25		石鏃1、骨		
	SK－139－2	T－23、T－24	× 50			
	SK－140	J－17	157×138× 50			
	SK－141	U－23		早、骨	ミニチュア、早期拓本？	
	SK－141－2	H－19				



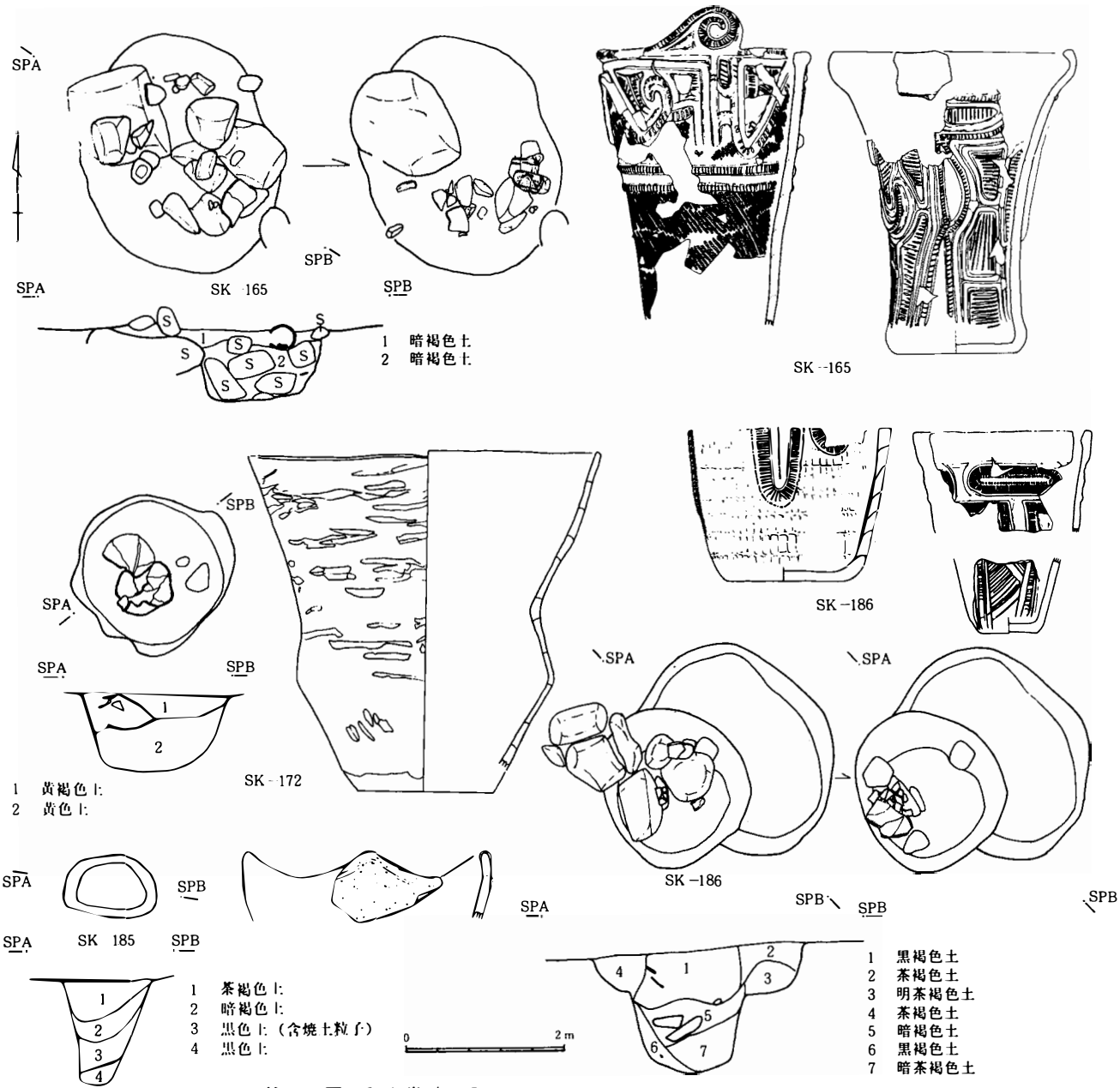
第205図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－140、141、142、143、144（SK　1：40）



第206図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－145、146、147、148、149、152、154（SK　1：40）



第207図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－155、156、157、158、160、164、169（SK　1：40）

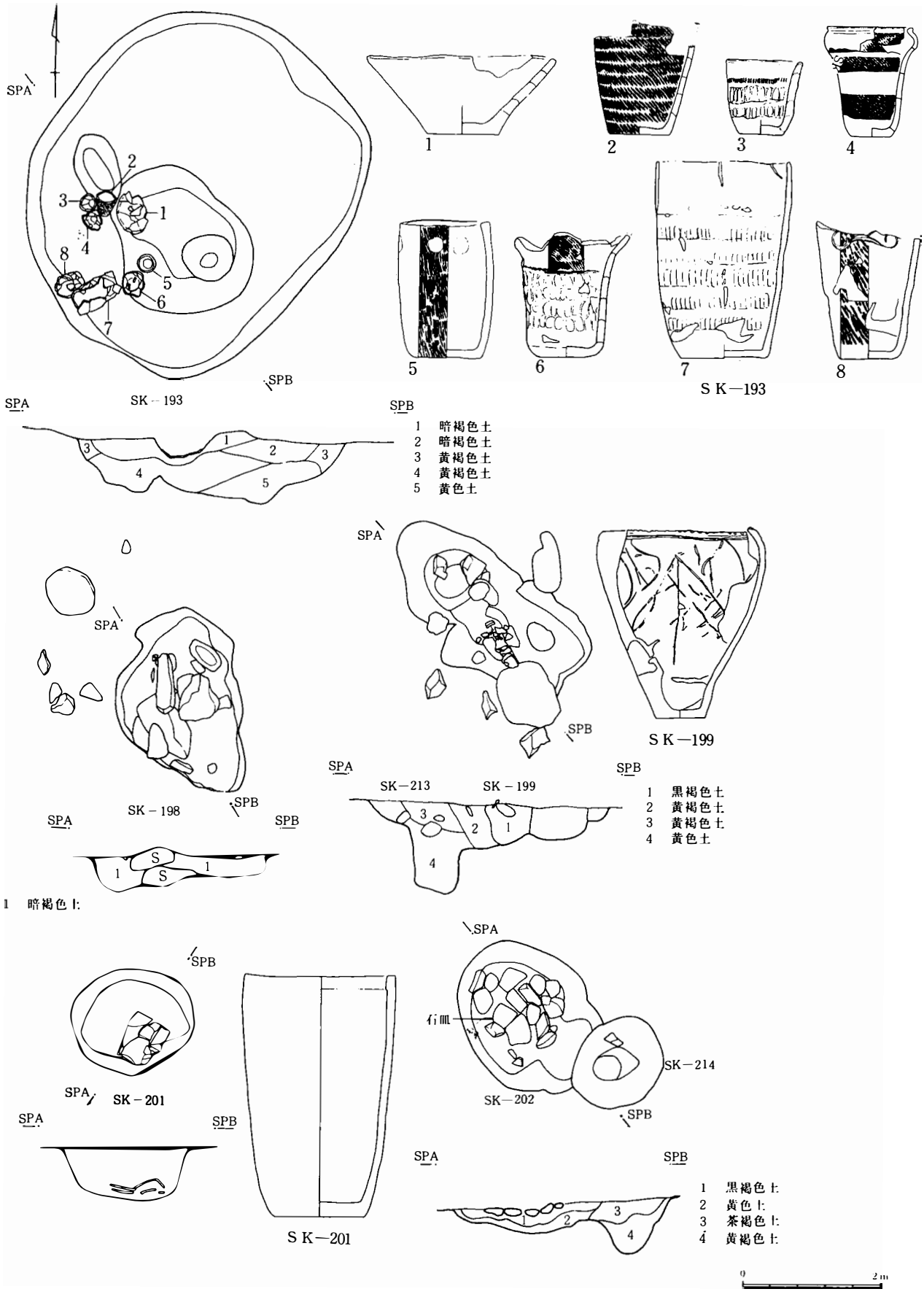


第208図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－165、172、185、186（SK　1：40）

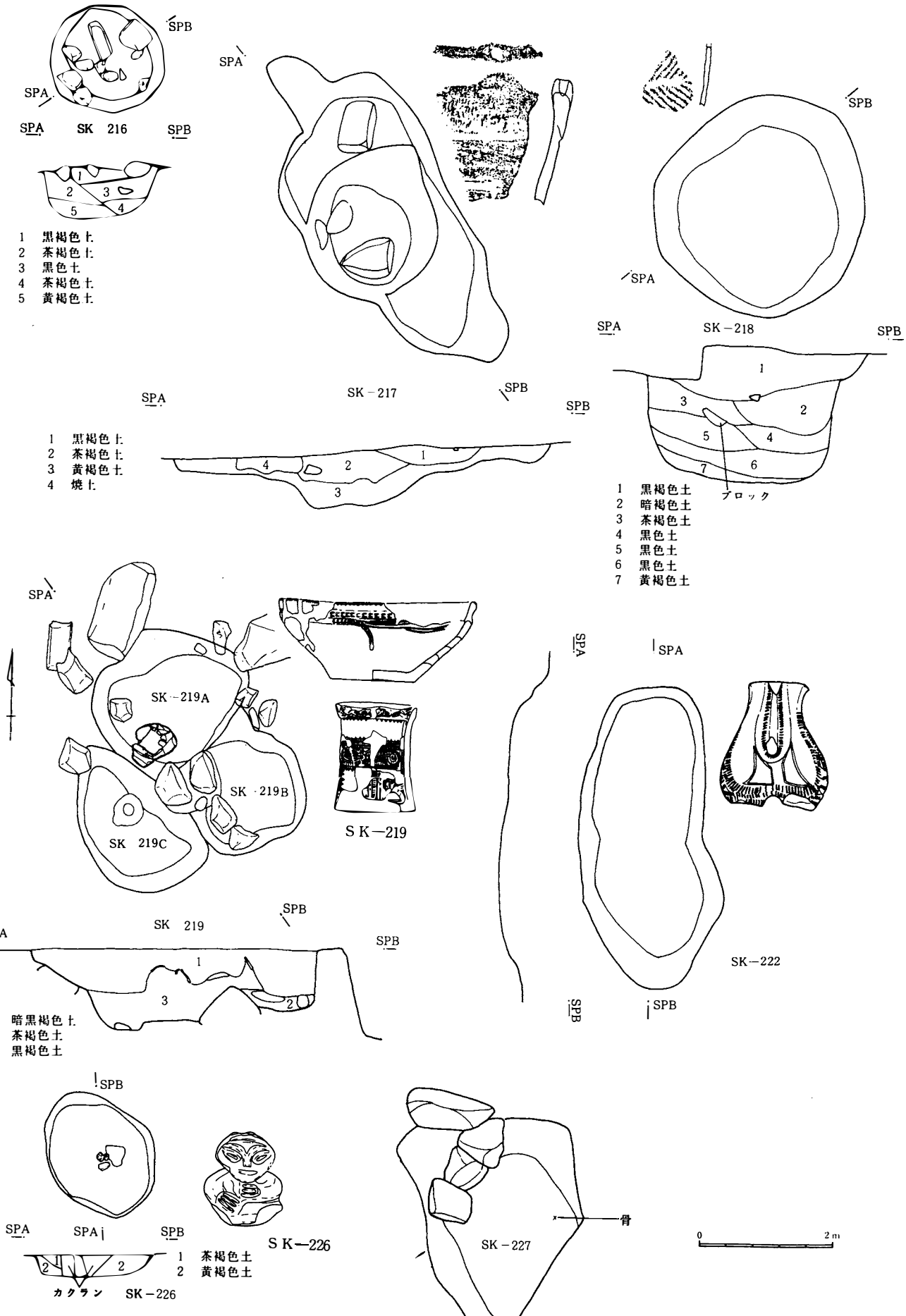
整理番号	土拡番号	グリッド	長径×短径×深さ	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－142	V－22	87×　85×　85	土器		
	SK－143	G－18	106×　57×　69	磨石、稜磨石	諸b	
	SK－144	G－18	105×105×　24	皐、稜磨石1	拓本	
	SK－144－2	V－20、W－20	145×105×　37			
	SK　144－3	V－22	93×　87×　20			
	SK　145	V－22			前	
	SK　146	T－21	72×　62×　45	石鏃1、石、うき	前	
	SK－147	T－21	204×184×		前	
	SK　148	V－21、V－22	82×　82×　47	磨石1		SB－31内土拡
	SK－149	U－22、V－22	170×158×　32		前	SB－31内土拡
	SK－150	T－22				SK－180の一部
	SK－151	N－21	85×　65×　15			
	SK－152	N－21	85×　72×　23	土器	堀之内拓本	
	SK－153	N－21	74×　57×　30			

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－154	S－18	70× 70× 66		藤内	
	SK－155		134×110× 25	土器	五領ケ台 (1)	
	SK－156		85× 62× 50			
	SK－157	N－23	112×110× 31		堀之内(1)、注口土器	
	SK－158	P－15	95× 85×			
	SK－158－2	O－16				
	SK－160	I－21	98× 94× 58	土器、石器、炭化物	藤内 (5)	
	SK－161	S－23	240×（210）×26			
	SK－162	S－22	132×102× 47			
	SK－163	T－23	142× 113× 41			
	SK－164	I－21	70× 74× 20	土器	早期東海系 藤内(2)	
	SK－165	T－25				
	SK－166	T－25				
	SK－167					
	SK－168					
	SK－169	S－24、25	100× 96× 32	土器、磨石1		
	SK－170	R－23	61× 54× 82			柱穴か
	SK－171	R－23	158×102× 49			
	SK－172	S－23、S－24	100× 95× 50	土器、骨片（骨粉2）	堀ノ内、拓本 (1)	
	SK－173	S－24				
	SK－174	S－23				
	SK－175	S－24	（ ）×85×20			
	SK－176	S－23	104× 82×			
	SK－177	Q－16、P－16				
	SK－178	P－16				
	SK－179	P－15				
	SK－180	T－22	150×130× 40	石鏃		
	SK－181	U－22	100×100× 40	焼土		
	SK－182	S－23R	80× 62× 98			柱穴であろう
	SK－183	S－23R	102× × 24			
	SK－184	P－15				
	SK－185	P－16				
	SK－186	I－21	94× 86× 74	土器		
	SK－187	U－19	× × 26			
	SK－189	S－23				
	SK－190	Q－23、Q－24	110× 96× 25			
	SK－191	P－23	×120× 25	早		
	SK－192					
	SK－193	O－24	×220× 45	土器	藤内8	
	SK－194	V－21	100× 93×			
	SK－195	V－21	80×			
	SK－196	V－20		柱穴であろう	図示しない、全体図のみ	
	SK－198	U－27	136× 95× 20			
	SK－199	W－27	(80)× 75× 38		堀ノ内 (1)	
	SK－200					
	SK－201	J－25	90× 86× 48		藤内無文 (1)	
	SK－202	G－19	115× 95× 18	石皿1		
	SK－203	G－19	× 31			
	SK－204	G－19	× 44	諸a	前	
	SK－205	G－19				
	SK－206	H－20	82× 70× 4	五領ケ台	中（五）	
	SK－207	G－19				
	SK－208	H－19	100× 68× 34			

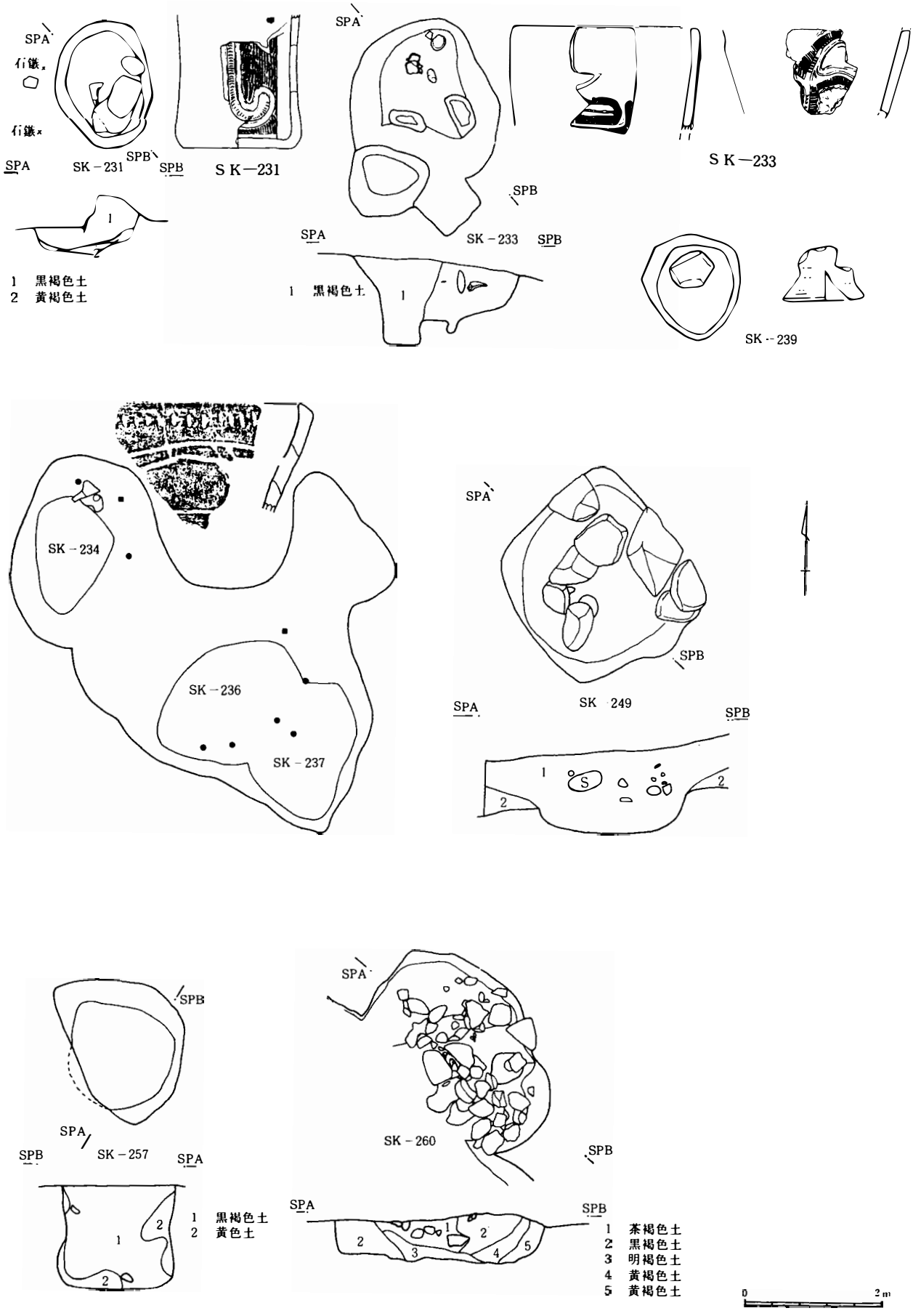
整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK 209	H 20				
	SK 210	H 20		稜磨石1		
	SK 211	H 20				
	SK 212	H 20	279×116× 40	土器	堀之内、拓本1	
	SK 213	W 27	74× 62			
	SK 214	G 19	70× 60× 39			
	SK 215	G 19	× 27	石皿1		
	SK 216	P 15				203と切り合い、SB 42内
	SK 217					
	SK 218	O 15	156×156×102	早		
	SK 219	I 20		早	五領ケ台1、早期	
	SK 219A	T 22	120× × 66	石器1	五領ケ台1	五領ケ台、浅鉢、小形土器
	SK 219B	T 22	90× × 56			
	SK 219C	T 22	123× ×			
	SK 220	X 25		土偶	土偶	SB 51内
	SK 221	X 26				
	SK 222	X 25		前		
	SK 223	W 25		早	前	
	SK 224	W 25		土器a	堀之内1拓本	
	SK 225	W 26				
	SK 226	K 20	100× 80× 16	土器	藤内顔面把手	
	SK 227	U 23		土偶、骨、早	前期の土偶の頭部早	
110	SK 228	T U 23			前	
	SK 229	T 23				
	SK 230				脚付ミニチュア	
	SK 231	L 19	91× 70× 34	土器	藤内1	
	SK 232			早	早期1	
	SK 233	K 19	121×109× 42	土器	藤内2	
	SK 234	W 21				SB 31
	SK 235	W 22	122× 84× 57			SB 31内 柱穴が重なる
	SK 236	W 22				SB 31
	SK 237	W 22		a		SB 31
	SK 238	W 25			前	
	SK 239	W 25				
	SK 240	W 26		b	前	
	SK 241	W 25			前	
	SK 242	W 25		諸b～a	前	
	SK 243	K 19	94× 85×			SB 04の図面
	SK 244	K 19	95× 80×			
	SK 245					
	SK 246			早	拓本	
	SK 247	L 23	98× 70×			SB 45内
	SK 248	L 23	110×			SB 45内
	SK 249	L 24	92× 75× 52	早東海		SB 45内
	SK 250					
	SK 251					
	SK 252			堀ノ内		
	SK 253					
	SK 254					
	SK 255					
	SK 256			堀ノ内1		
	SK 257	× 26	115× 68× 77			SB 47の貯蔵穴
	SK 260		155× × 30			U 15G 集石土坑
	SK 261				阿玉台1	SB 31 炉の下



第209図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－193、198、199、201、202、213、214（SK　1：40）



第210図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－216、217、218、219A、219B、219C、222、226、227
（SK　1：40）



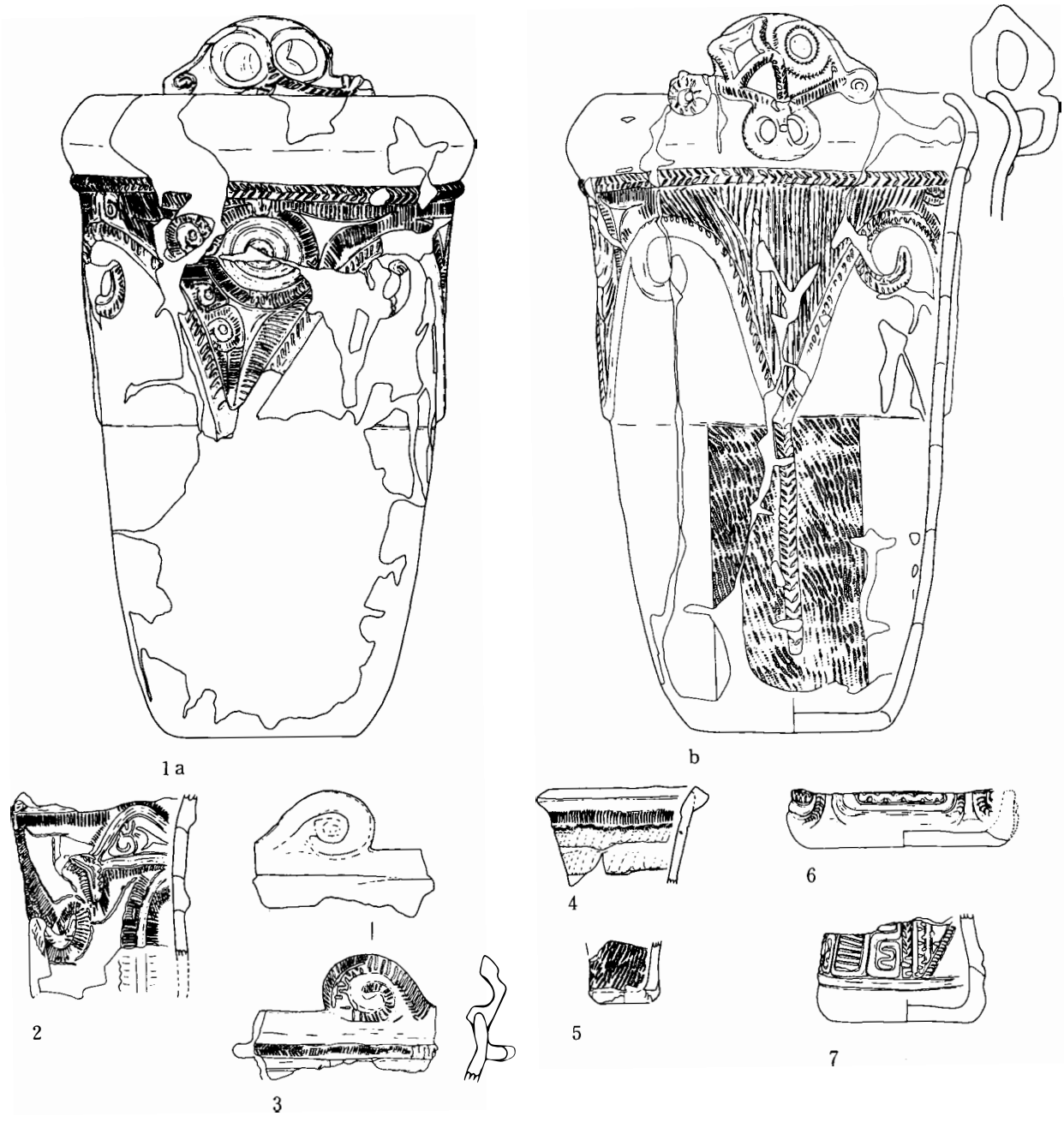
第211図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK－231、233、234、236、237、239、249、257、260（SK　1：40）

第 3 節　中期の土坑出土土器

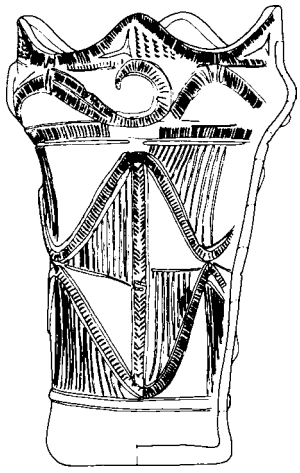
中期ＳＫ

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
72	212	1	ＳＫ―01	6	ミミヅク把手を有し、目から伸びた隆帯の先は三本指となっている。胴上半は大三角区画とし、その中に玉抱き三叉文を施している。その間をキャタピラ文というより沈線で充填している。なおｂ面はその文様を省略している。	66.4	34	
		2	ＳＫ―01	6－2	いわゆる抽象文とキャタピラ文を組み合せた文様			
		3	ＳＫ―01	6				
		4	ＳＫ―01	6－3				
		5	ＳＫ―01	6－4－b				
		6	ＳＫ―01	6－1	破れ口を磨耗してある			
		7	ＳＫ―01	6－1	６を蓋にした合せ口として出土。			
		8	ＳＫ―02	6－1	胴下半部の区画文土器である。			
	213	9	ＳＫ―04	6	口縁部に刻目を有し、丸く膨んだ口辺に波状隆帯を貼り、胴部には隆帯による菱形区画と沈線による消磨し手法を施している。	35.5	5．8	
		10	ＳＫ―04	6－2	輪積痕を残した器面に隆帯を貼り、その脇にキャタピラ文を施している。	38.1	6	
		11	ＳＫ―05	6－5	口頸部に楕円文を配している。			
		12	ＳＫ―06	6－4－b	縄文			
		13	ＳＫ―06	6－5				
		14	ＳＫ―06	6				
		15	ＳＫ―06	6	土偶である。			
		16	ＳＫ―06	6				
		17	ＳＫ―06	6				
		18	ＳＫ―06	6－4　f	ミミヅク把手を有し、胴下部に三角押文による疑似縄文を施しているので分類もｆ類に入れておく。	30.3	6．3	
73		19	ＳＫ―08	6－1	縦区画文の底部である。			
		20	ＳＫ―09	6－1	縦区画文の底部である。			
		21	ＳＫ―13	6－8	台形土器の一部である			
		22	ＳＫ－15	6	縦区画文であり、口縁部に縄文			
	214	23	ＳＫ－18	6	頸部に楕円区画帯を廻らしている。			
		24	ＳＫ－18	6	鍔形のような器形の土器である。			
		25	ＳＫ－18	6				
		26	ＳＫ－19	6－1	小型の縦区画文土器である。	25	1．4	
		27	ＳＫ－19	6－1	縦区画文土器			
		28	ＳＫ－19	6				
		29	ＳＫ－20	6－1	縦区画文土器			
		30	ＳＫ－20	6－7	押圧隆帯をもつ浅鉢			
		31	ＳＫ－22	6－1	口辺部に２つのミミズク把手を有し、頸部にはより古拙的三角区画帯を施し、胴下半部の区画には縄文を施し、人体文（カエル文）をより浮き出させている。	54	31.3	
	215	32	ＳＫ－28	6－1	把手はミミズクではなく、単なる円形の窪みとなっている。縦区画文はより大きくなっている。	35.6	5．3	
		33	ＳＫ－28	5－1	隆帯の脇にキャタピラ文、三角押文をもつ。隆帯は三角区画をなす。			
		34	ＳＫ－28		底部			
		35	ＳＫ－28	6－4－b	口唇部の隆帯の脇に波状浮線文を付け、三角押文も一部に残している。	43.3	17	
74		36	ＳＫ－30	6－2	胴上部にキャタピラ文と波状沈線を有する楕円区画文帯をめぐらし、その下部に抽象文を描き、それ下から菱形文が突きあげている。いずれも、キャタピラ文と波状沈線で加飾している。	50	31.1	
		37	ＳＫ－31	6－1	区画の一部に三角押文を充填した疑似文を施している。	40.5	7．8	
		38	ＳＫ－46	6－1	小型の壺形土器に区画文を施したもの。			
		39	ＳＫ－46	6－8	小型の台である。			

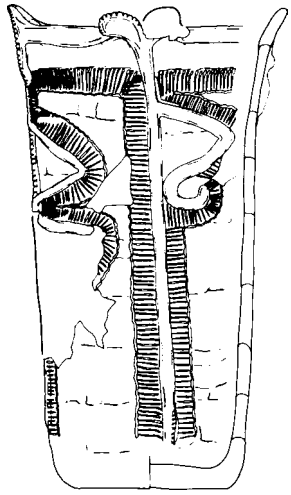
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	216	40	SK－48	6－1	区画文の中の菱形文はキャタピラ文、三角押文、三叉文をよく残している。ミミズク把手は割合と小さい。この土器は土拡底部に敷かれ、図化した片面しか残っていない	54.5	35.6	
		41	SK－49	6－1？	縦区画文土器の口辺部である。			
		42	SK－52	6－4－b	口辺部に縦区画文を有し、胴下部に縄文を施している。			
		43	SK－53	6－5	キャタピラ文と波状沈線による楕円区画帯をめぐらしている。			
		44	SK－57	6－5				
		45	SK－58		小片で全体像が不明だが、三角区画とキャタピラ文を有するもの			
		46	SK－60	6－1	口辺部に無文帯をもたない。	33.9	10	
		47	SK－60	5－1	口辺部に隆帯による三角区画帯をもち、その脇にキャタピラ文と三角押文を有している。			
	217	48	SK－65	6－1	区画文の中にキャタピラ文と波状沈線が使われている。			
		49	SK－68	6－1	縦区画文の中をキャタピラ文と三叉文で埋めている。			
		50	SK－68	6－1	縦区画文の把手である。			
		51	SK－79	6－7	おそらく縦区画文土器の口辺部である。			
		52	SK－79	6－4－a	小型土器			
		53	SK－79	6－5	楕円区画帯をめぐらしている。			
75		54	SK－69	6－1	縦区画文が大型化している。	28.2	5.3	
		55	SK－87	5－1	口辺部に三角区画帯をめぐらし、その隆帯の脇に三角押文を施している。			
		56	SK－87	6	キャタピラ文と三角文を施している。			
		57	SK－87	6	区画の中を渦巻三叉文で充填し、さらにキャタピラ文で埋めている。			
	218	58	SK－87	6	クビレと縦のシノギを有する。			
		59	SK－89	6－1	器形は樽形をなし、区画文は、長抱き三叉文や三叉文で充填し、さらにキャタピラ文を加飾している。	46	24.6	
		60	SK－110	6	比較的薄手の灰白色の土器である。キャタピラ文と半弧文を加えている。			
		61	SK－110	6－2	輪積痕の器面に人の手様の隆帯を付け、その脇にキャタピラ文と波状沈線で加飾している。			
		62	SK－101	6－4－b	波状口縁を持ち、湾曲した口辺に渦巻文や三叉文を施している。胴部は縄文である。			
		63	SK－112	6－4－a	全面縄文の土器で口辺部と胴部の境にキャタピラ文と三角押文による波状沈線を施している。			
		64	SK－138	6	ミニチュア			
		65	SK－138	6	無文土器			
		66	SK－138	6－3	中期前半の粗製土器特有の器形と、器面は粘土を削り取って、ほとんど整形を加えていない。	38.6	11.6	
		67	SK－138	6	口辺部は区画文を施すのであろう。胴下部は三角区画文をなし、キャタピラ文と三角押文と波状沈線を施している。			
	219	68	SK－139	6	口辺部も区画文をなし、胴下部は大きな三角区画をなし、間線は、縦の沈線を施している。			
		69	SK－139	6－4－b				
		70	SK－139	6－4－b				
		71	SK－139	6－4－a				
		72	SK－140	6				
		73	SK－148	6－5	頸部にキャタピラ文と波状沈線を有する楕円区画文をめぐらしている。			
		74	SK－159	6－2	無文地に所謂ゲジゲジ文を施している。刻目突隆帯のまわりにキャタピラ文と時には三角押文を施している。			
		75	SK－159	6－4－b	口辺部と胴部の境にキャタピラ文と波状沈線文を施している。	26.3	1.6	
		76	SK－160	6	胴部の文様帯は不明だが、キャタピラ文の脇に三角押文による波状沈線文を施している。			
		77	SK－160	6				
		78	SK－160	6－1	縦区画文土器			
		79	SK－160	6－4－b				
		80	SK－160	6－5	頸部に楕円文をめぐらし、胴部を区画文で埋めている。			
76		81	SK－165	6－4－b	把手は外面が渦三叉文、内面が玉三叉文となっている。胴上半部が区画文帯とし、下半部を縄文帯としている。			
		82	SK－165	6－1	80と同様な文様構成となっている。			



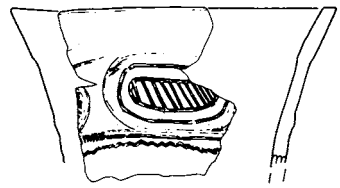
第212図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ出土土器（１）（１：６）



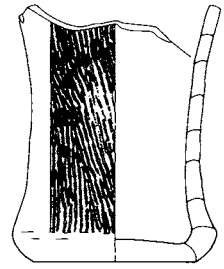
9



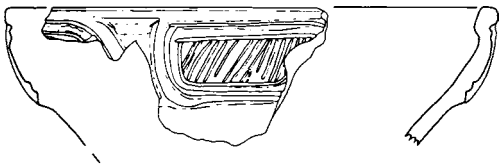
10



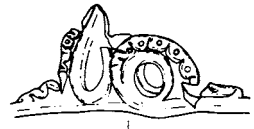
11

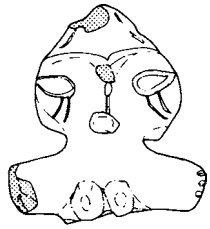


12

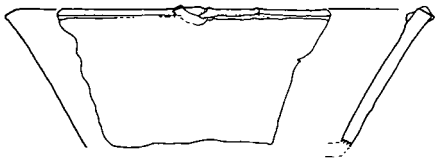


13

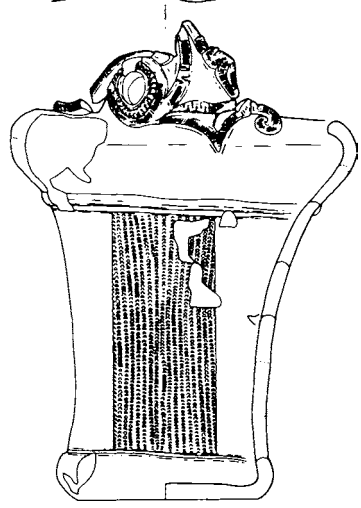




15

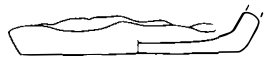


14

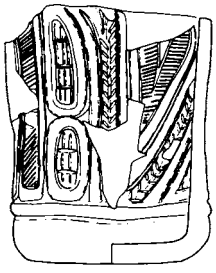


18

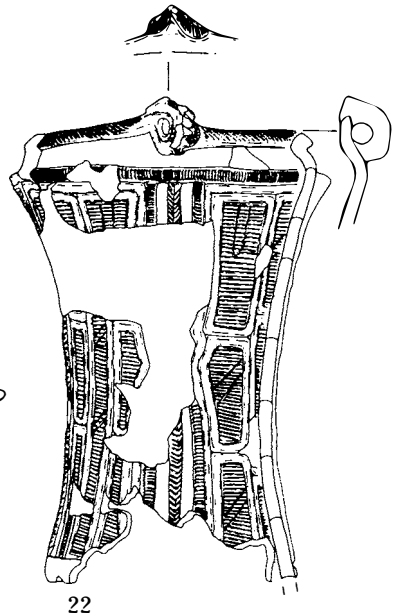
16



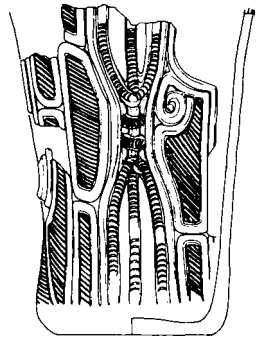
17



20



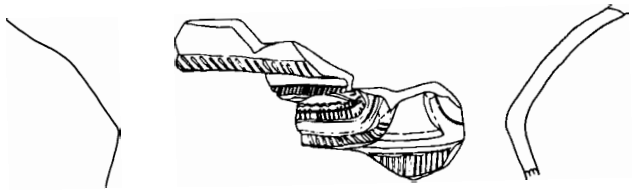
22



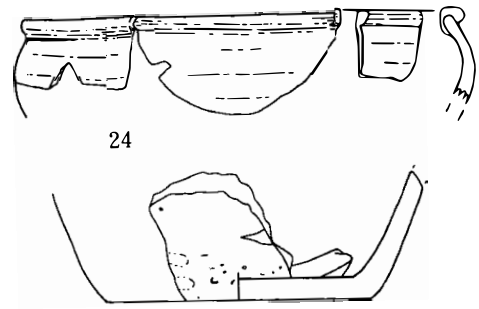
19

21

第213図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ出土土器（２）（15は１：３他は１：６）

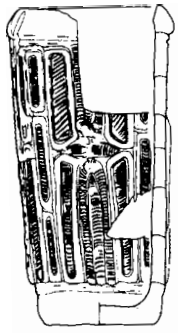


23

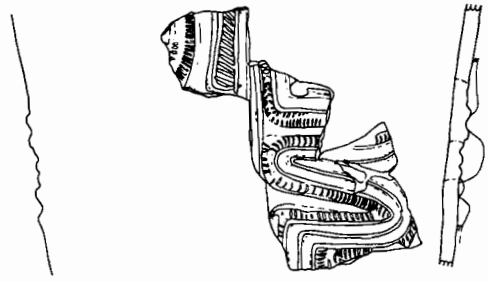


24

25

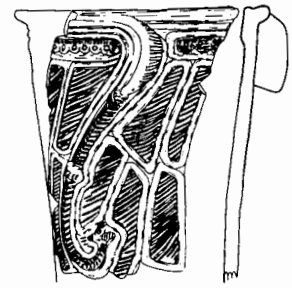


26

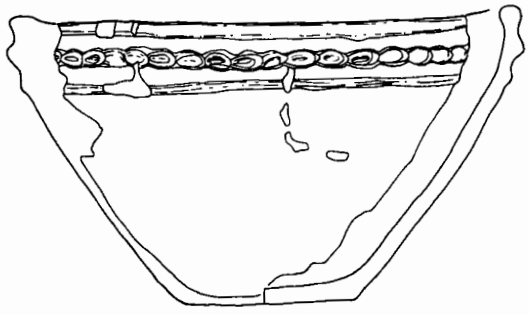


27

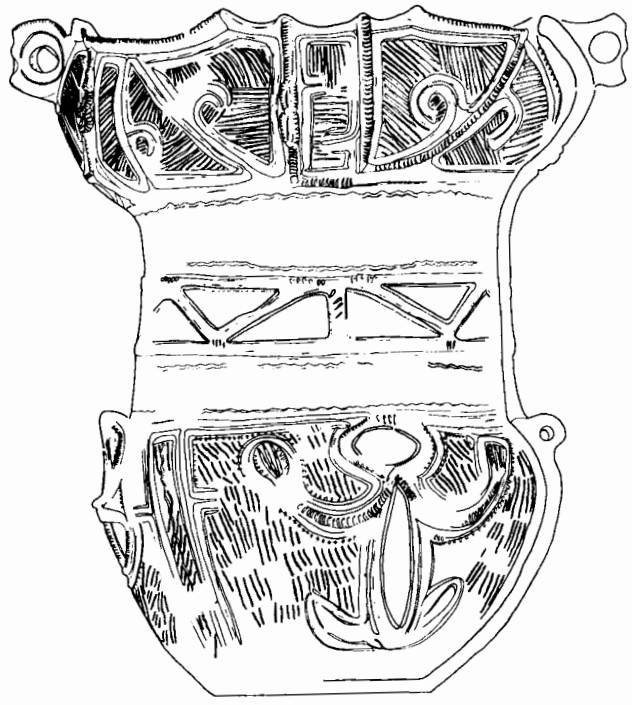
28



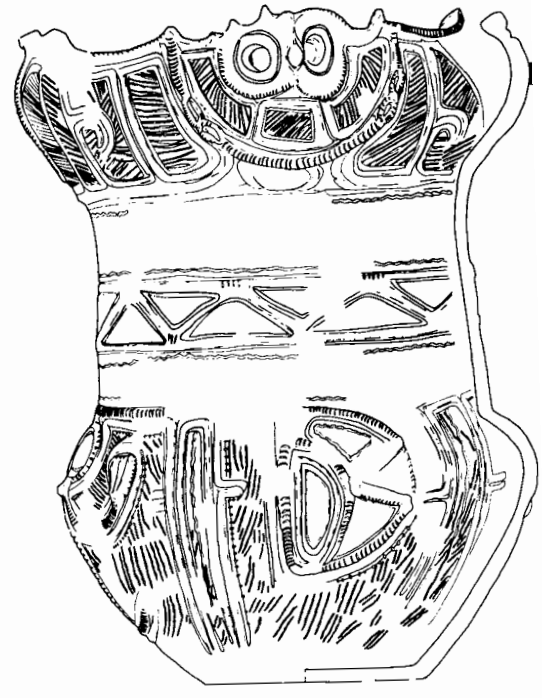
29



30



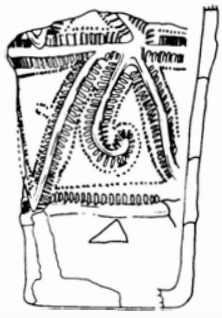
31 a



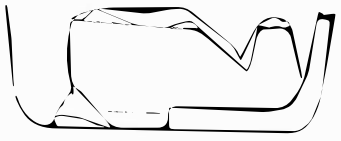
b

第214図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ出土土器（３）　（１：６）

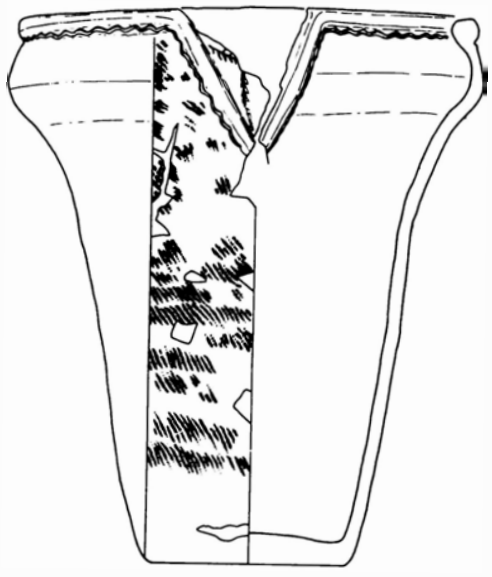
32



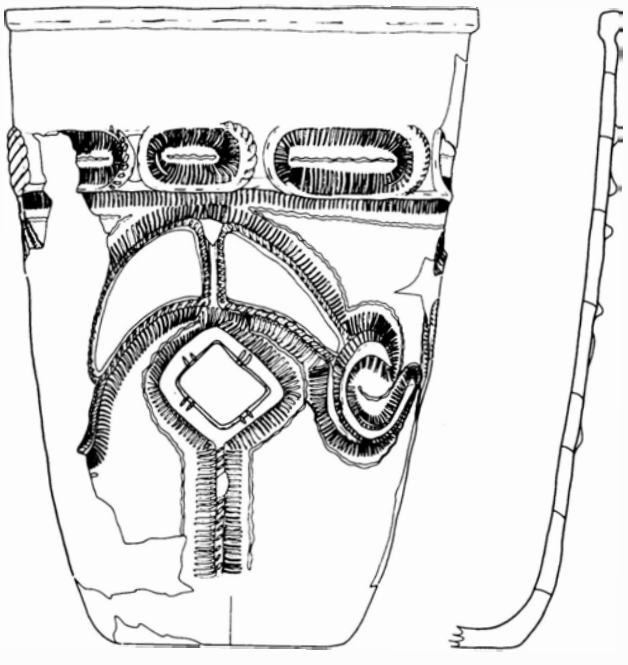
33



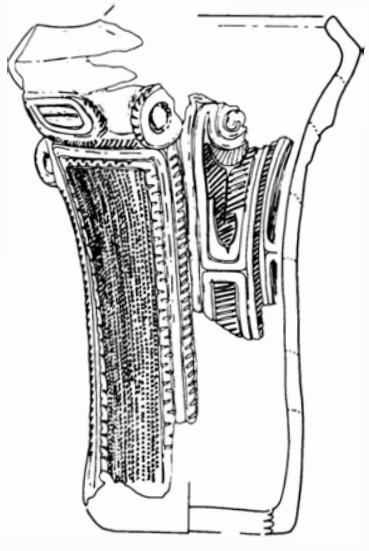
34



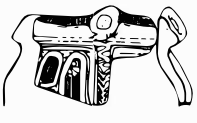
35



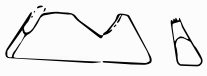
36



37

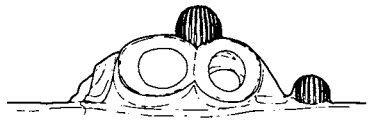


38

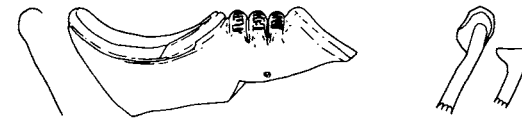


39

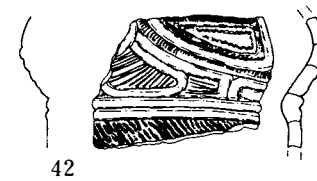
第215図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ出土土器（４）（１：６）



40

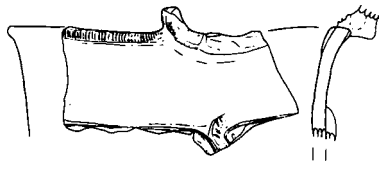


41



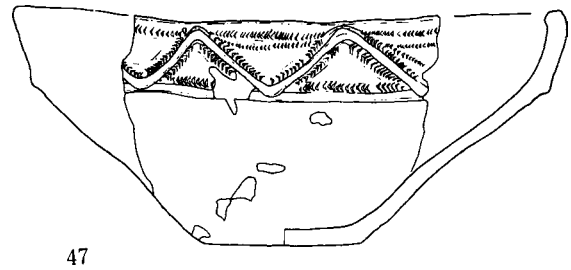
42

43

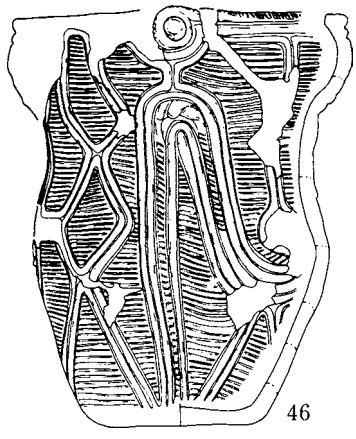


44

45

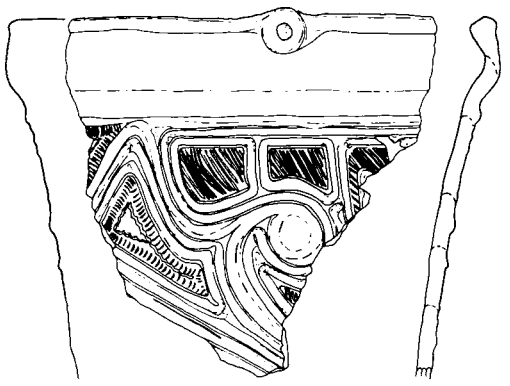


47

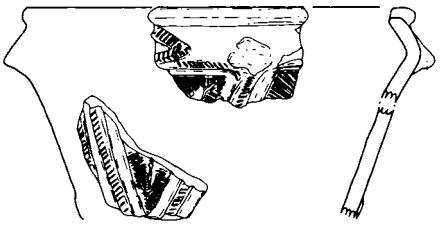


46

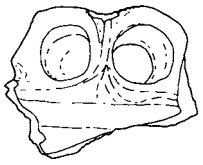
第216図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ出土土器（５）（１：６）

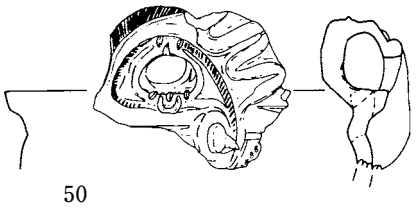


48

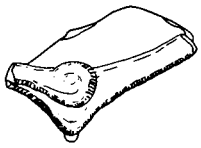


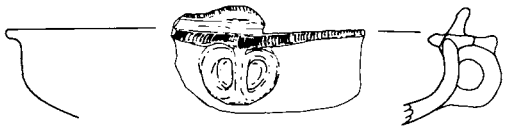
49



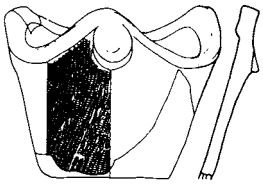


50

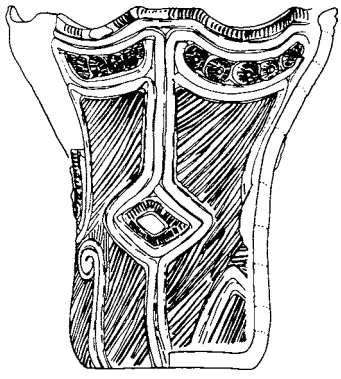




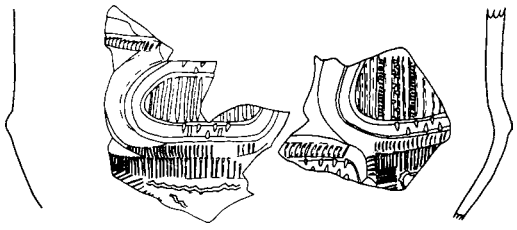
51



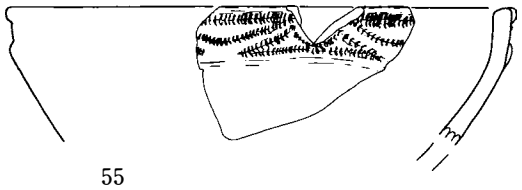
52



54

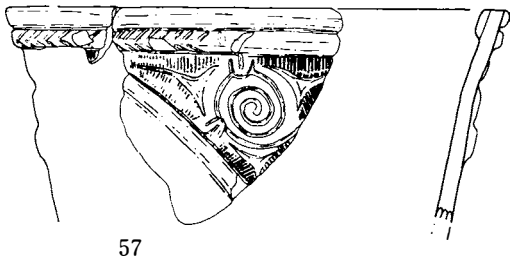


53



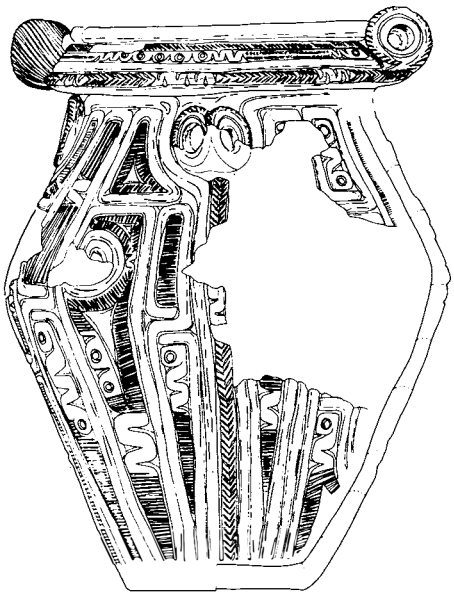
55

56

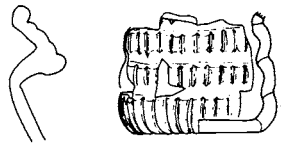


57

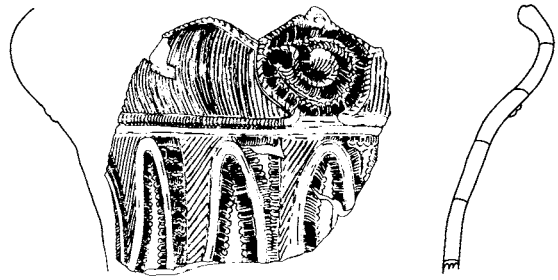
第217図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ出土土器（６）（１：６）



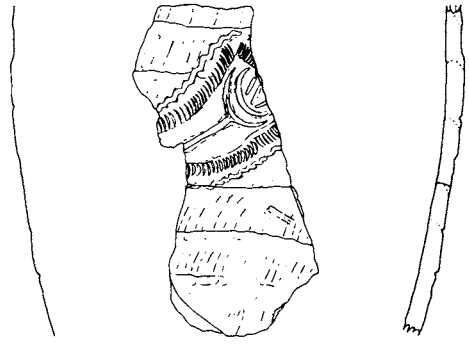
59



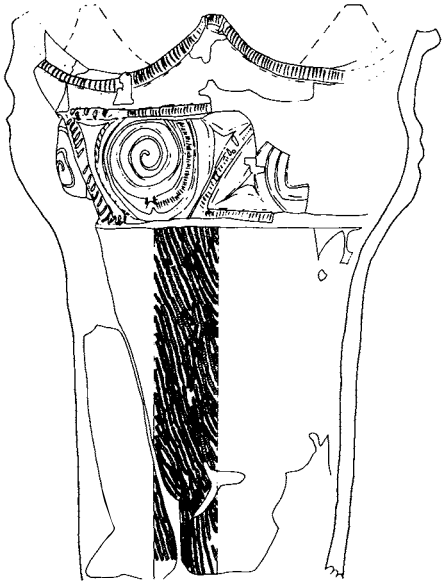
58



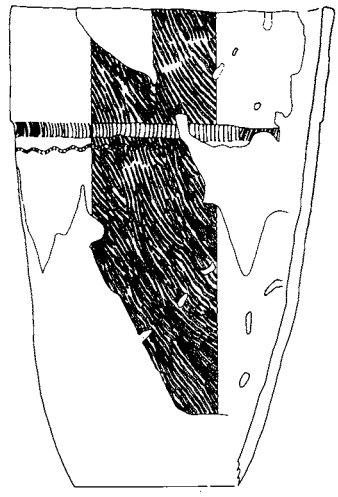
60



61

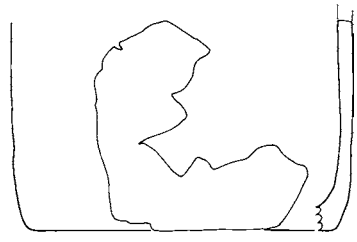


62

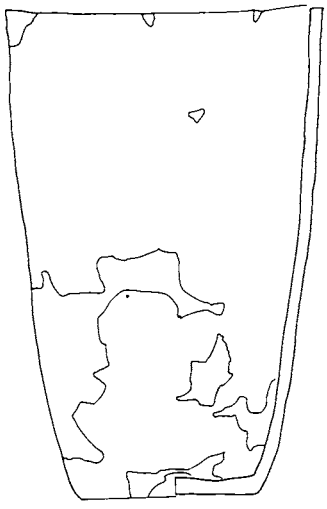


63

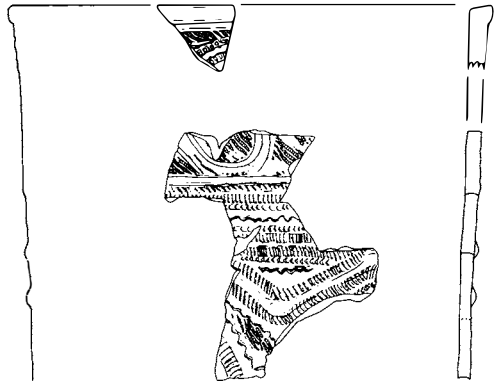
64



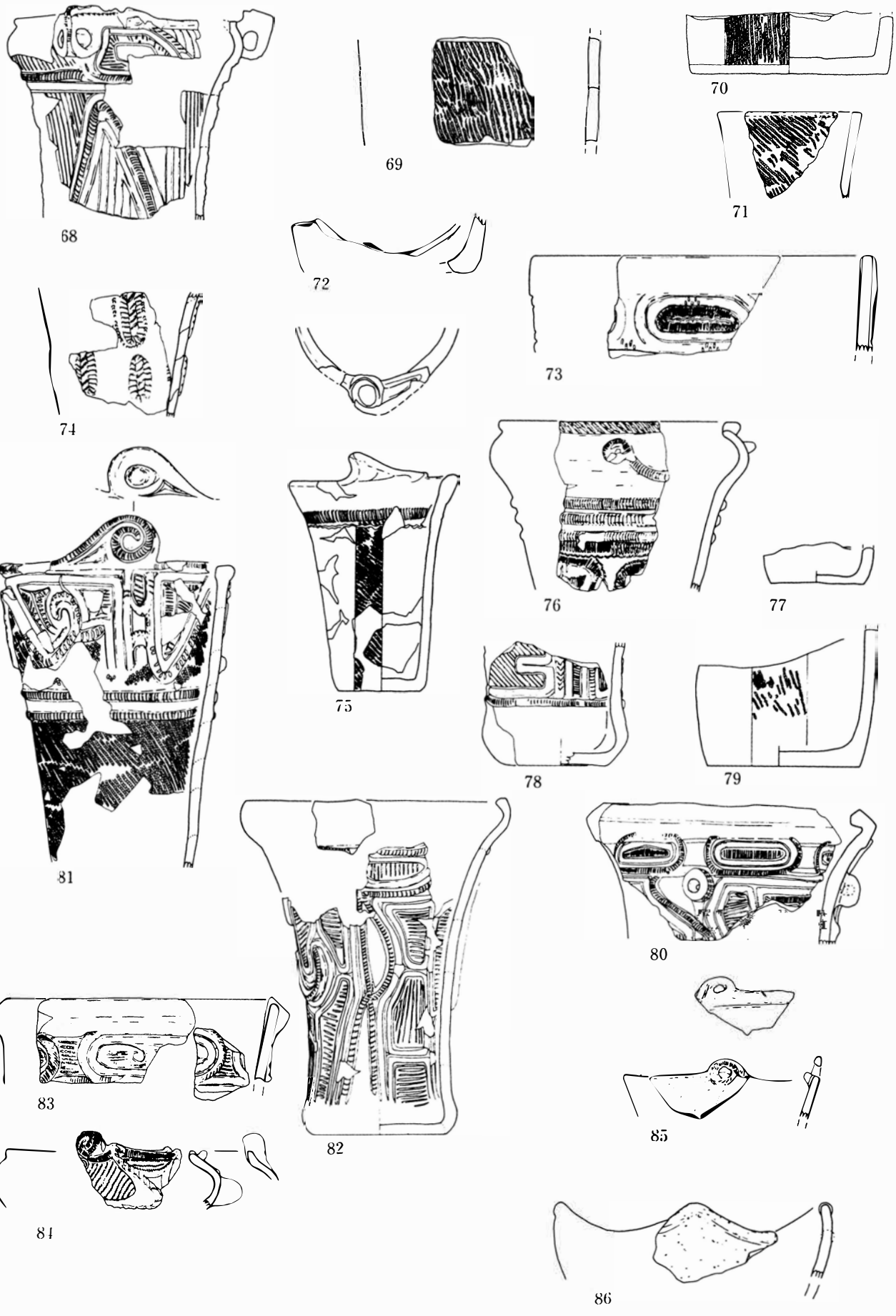
65



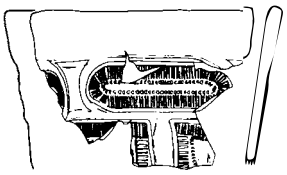
66



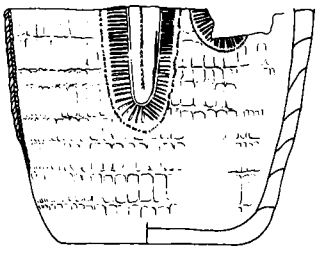
67 第218図　釈迦堂S－Ⅰ区　SK出土土器（7）（1：6）

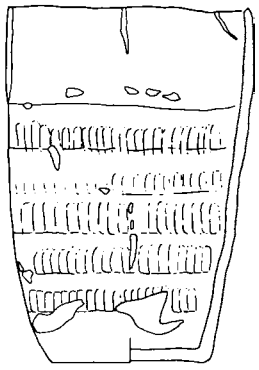


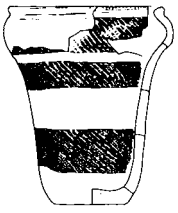
第219図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ出土土器（８）（１：６）

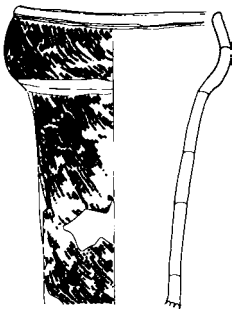

87

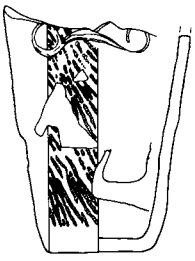
88

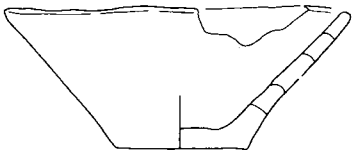

89

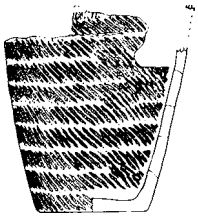

90

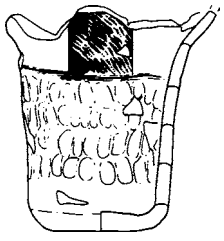

91

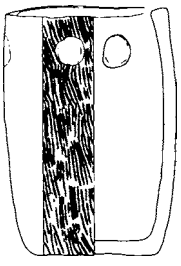

92


93

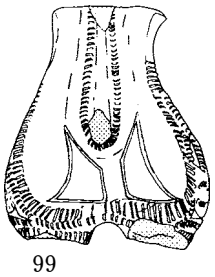

94

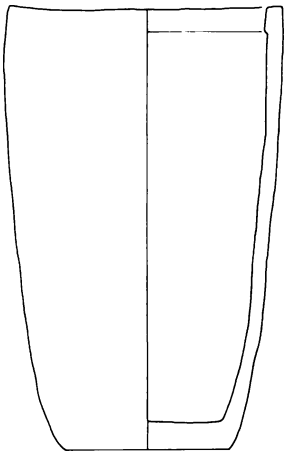

95

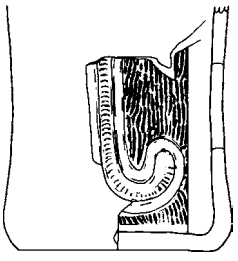

96

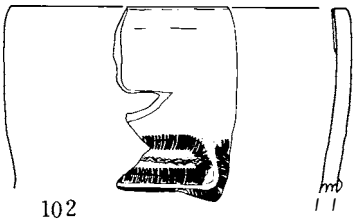

97

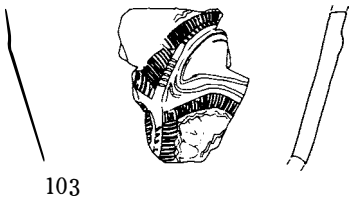
98

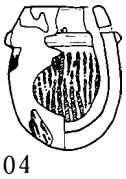

99

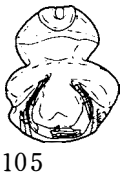

100

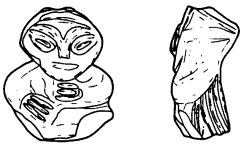

101

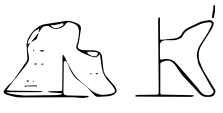

102

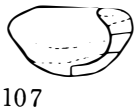

103


104


105




106

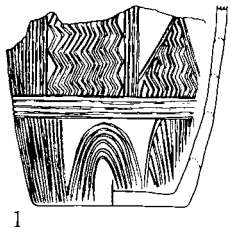

107

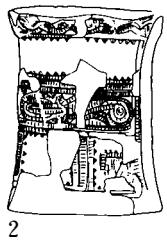
第220図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＫ出土土器（９）（１：６、104－107は１：３）

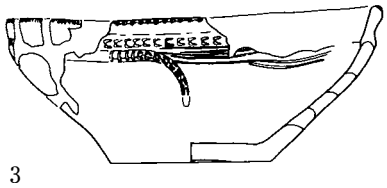
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	219	83	SK－169	6－ 5	80、82と同様な文様構成となっている。			
		84	SK－169		薄手で施文文具も特異である。キャタピラ文、三角押文、連続弧文を施している。			
		85	SK－174					
		86	SK－185					
	220	87	SK－186	6－ 5	口頸部にキャタピラ文と三角押文をもつ楕円文、胴部はキャタピラ文とその脇の三角押文をもつ区画文			
		88	SK－186	6－ 1	縦区画文			
		89	SK－186No.5	6－ 2	指頭圧痕を残した器面に隆帯と隆帯脇キャタピラ文と三角押文			
76		90	SK－193No.7	6－ 3	胴部に指頭ナデ痕を残したまま	27.7	5	
		91	SK－193No.4	6－ 4－ a	小型精製土器で内面のミガキもよい			
		92	SK－28	6－ 4－ a	図版の貼り誤りである。SK－28全縄文の土器			
		93	SK－193No.8	6－ 4－ b	縄文地　沈線文			
		94	SK－193No.1	6－ 7	口辺部の境にキャタピラ文を有する。胴部に指頭圧痕	11.2	2.2	
		95	SK－193No.2	6－ 4－ b	縄文：口辺部に円形磨消縄文			
		96	SK－193No.6	6－ 3	口辺部に縄文　胴部に指頭圧痕			
		97	SK－193No.5	6－ 4－ a	縄文　口辺部に円形・磨消文			
		98	SK－193No.3	6－ 3	口辺と胴部の境にキャタピラ文を有す。胴部は指頭ナデ痕。	10.5	0.4	
		99	SK－220	土偶	典型的な勝坂式期の土偶			
		100	SK－201	6－ 3	中期中葉の粗製土器	34.6	7.5	
77		101	SK－231	6－ 4－ b				
		102	SK－233	6－ 5				
		103	SK－233					
	220	104	SK－23	6－ 7	有孔鍔付土器			
		105	SK－226		土偶様把手			
		106	SK－230	6－ 8	ミニチュア			
		107	SK－141		ミニチュア			

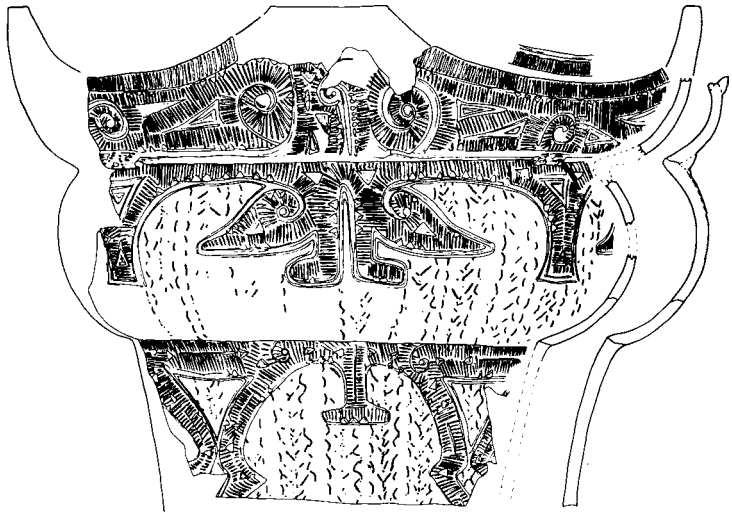
中期のその他土坑

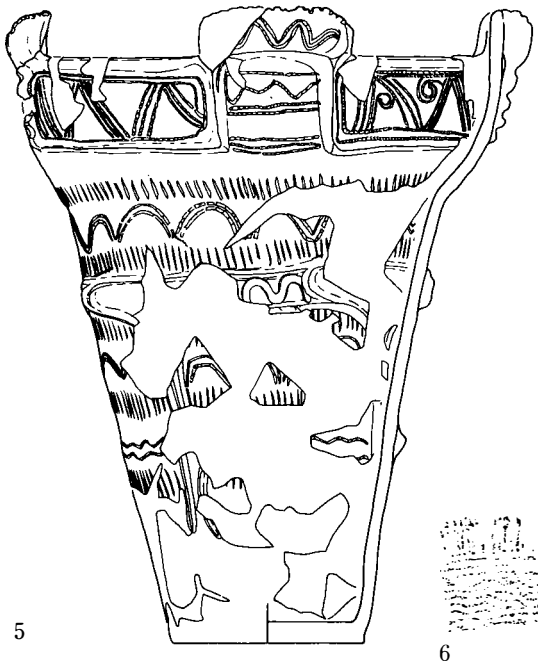
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
65	221	1	SK－92	3－1－b	集合沈線文を有するもの。			
		2	SK－219	3－1－a	結節浮線文から沈線文へ変化する過渡的様相を示している。全面に赤彩を施したと思われる。遺跡全体に散在していた。			SK219、I19、I20、SB54
		3	SK－219	3－1－b	浅鉢			
		4	SK－155	3－1－c	細線文系土器。波状口縁を持ち、渦巻き三叉文を口辺部に持ち、波状下部に橋状把手を付けている。頸部は湾曲して大きく膨み、空白部には結節縄文を施している。胴部は結節縄文を地文として、底隆帯の上に細線文を施して、Y字状文を描くらしい。			
		5	SK－261	SK 261	藤内式期のSB－31の炉の下の土坑から出土した土器で、阿玉台式の特徴である扇状把手を有し、口辺部の区画の中に結節沈線を2条ないし3条施している。胴上部の文様帯には結節沈線による波状文を2条施している。胴下部には隆帯による大きな文様帯となっている。阿玉台1b式か？	46.0	18	
		6	SK－206	3－1－b	集合沈線文土器			
77		7	SK－127	9	曽利Ⅱ式の底部　この地区の曽利式期の唯一の遺構の出土遺物			

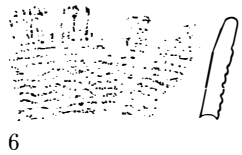

1


2


3


4


5


6

7

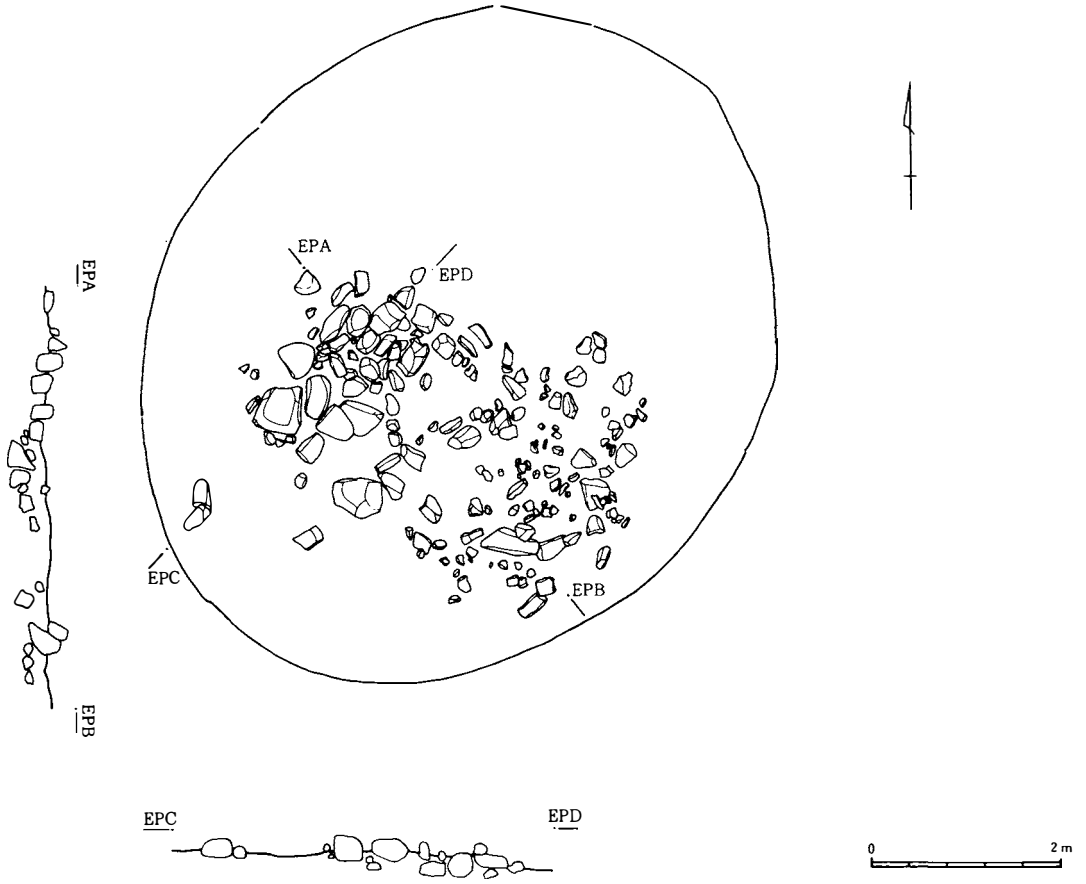
第221図　釈迦堂S－I区　SK出土土器（10）

第　4　節　　中期その他の遺構と出土土器

Ｓ－Ｉ区　ＳＢ－12土層

前期の住居址の埋没途中において、中期や後期の人々が、土器や石を埋設や遺棄した遺構が見られる。ＳＢ－12の土層遺構はＳＢ－12の上層に人頭大の石を置いた遺構で、石組の形状は定形的な形をなさない。出土遺物はほとんど検出されていない。あるいは後期のものの可能性もある。

こうした遺構はＳＢ－12の他にＳＢ－06、ＳＢ－41、42、45の上層にも認められたが、ＳＢ－12上層遺構ほど顕著ではない。



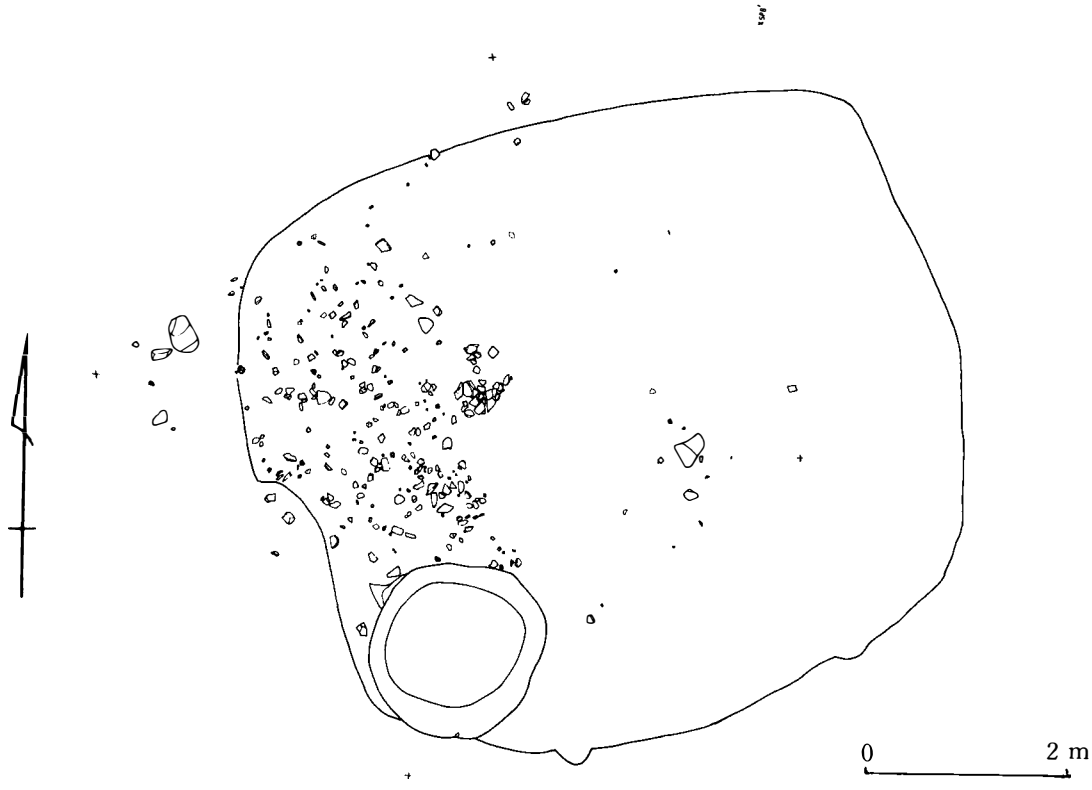
第222図　釈迦堂Ｓ－Ｉ区　ＳＢ－12上層遺構

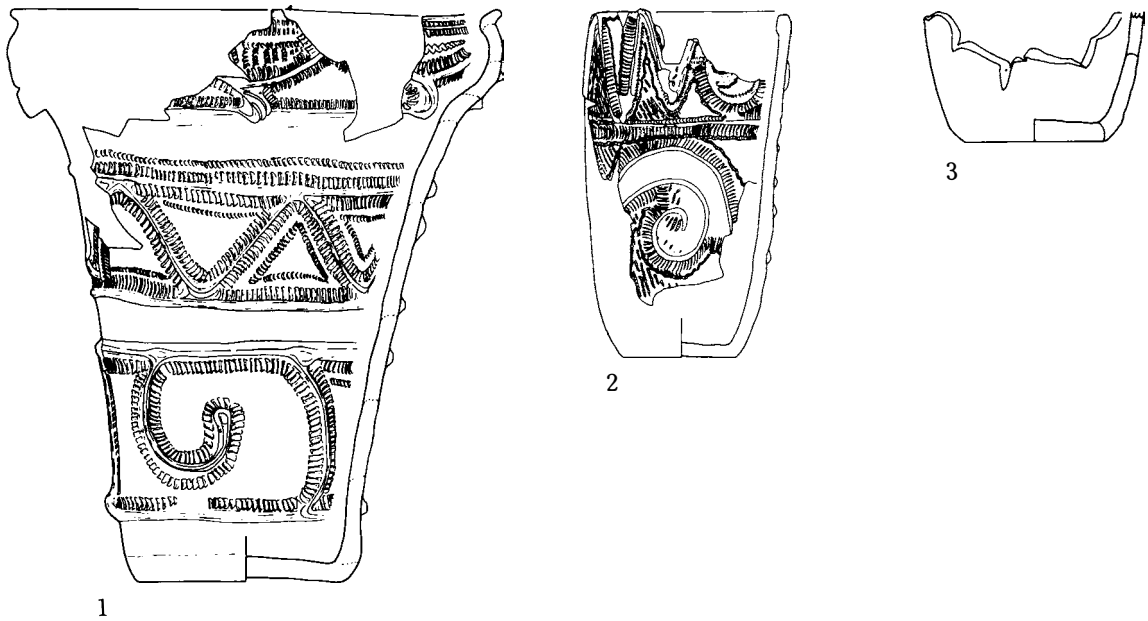
Ｓ－Ｉ区　ＳＢ－03上層

ＳＢ－03は、黒浜式併行期のＳＢ－02を切った諸磯ａ～ｂ式期の住居址である。この前期の住居址埋没後の窪地に小礫や大型土器を遺棄した遺構がＳＢ－03上層遺構である。

前期の住居址埋設後の遺構については、先述したように、ＳＢ－06、12等で認められたが、このＳＢ－03上層遺構のような小礫とほぼ完形土器の遺棄は認められていない。

土器は、型式学的には新道式期に属すべきもので、主体となる藤内式期式期の集落との時間的断絶も考えられるが、これについては土器の型式学的検討が必要とされる。





第223図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－03上層遺構と土器（1：6）

SB－03　土層

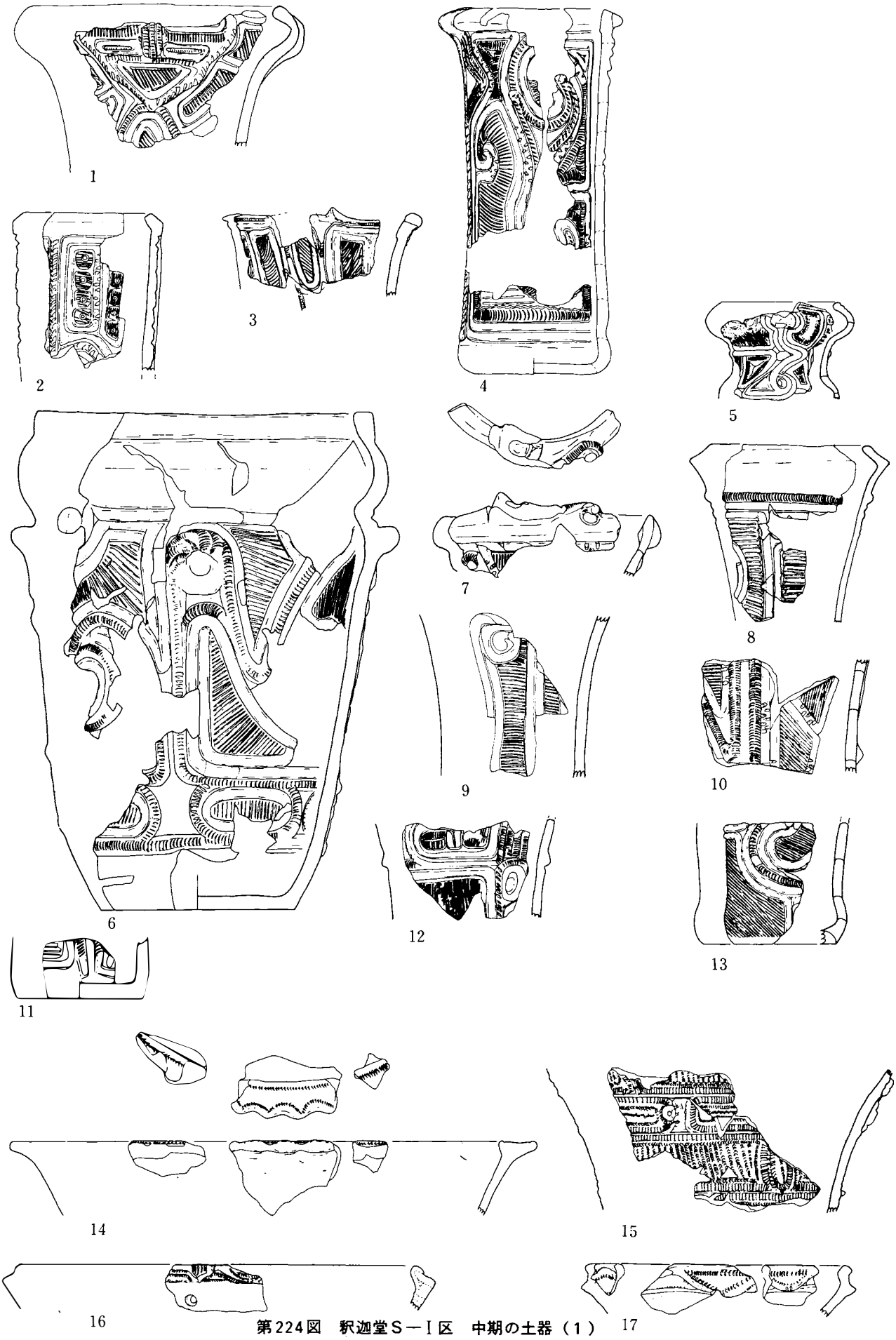
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
71		1	SB－03　上層	5－1	口辺部三角区画隆帯にそってキャタピラ文、三角区画の中に三角押文を充填、胴部にやはり三角区画帯と抽象帯			
		2		5－1	縄文地に口辺部三角区画帯、胴部に抽象帯。			
		3			無文の底部			

第 5 節　中期のグリッド出土土器

グリッド出土の藤内式

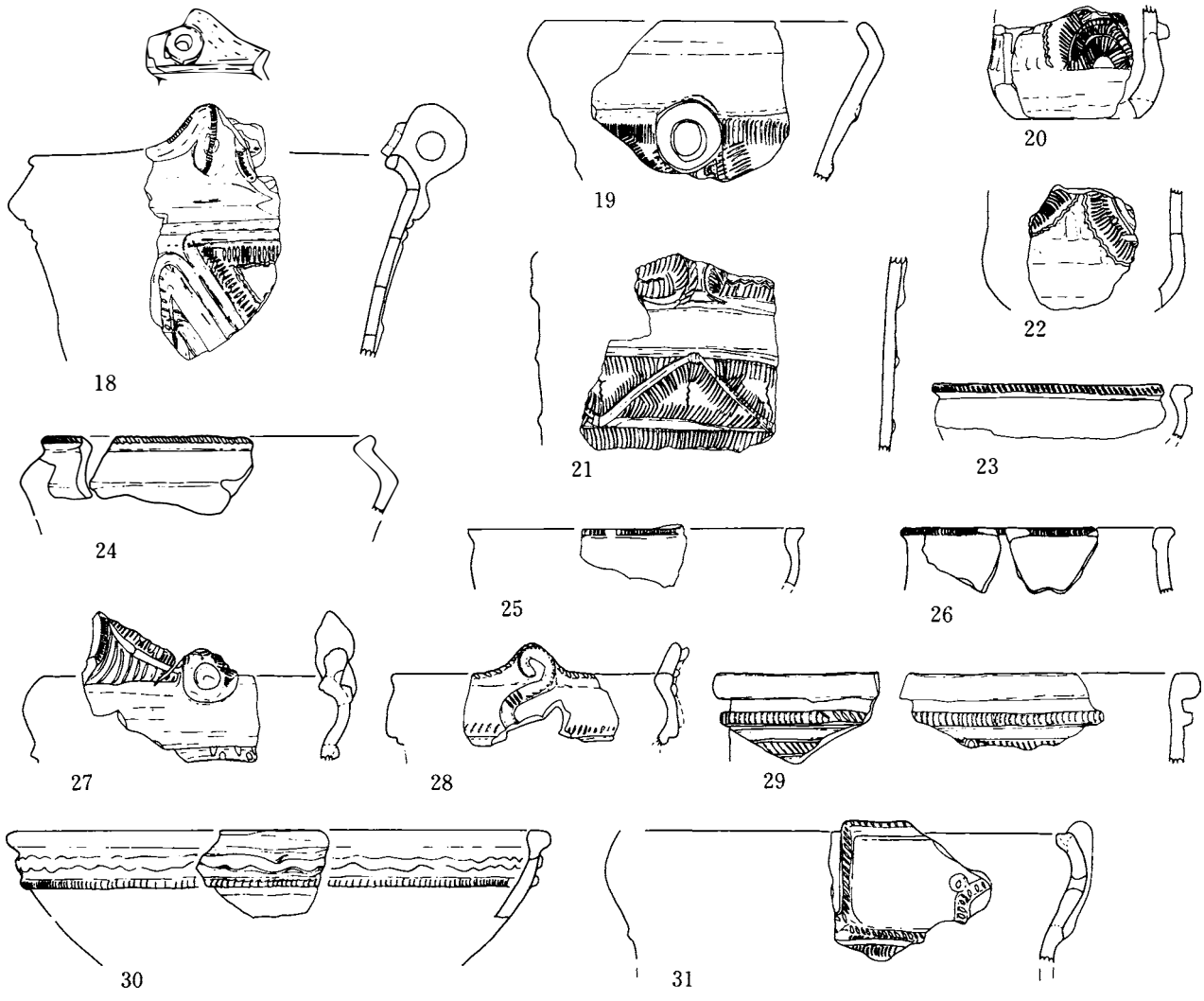
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
77	224	1	W－20	6－1	口頸にある三角区画文は人面のようである。			
		2	S－19	6－1	縦区画文土器			
		3	T－21	6－1	縦区画文土器			
		4	R－24	6－1	円筒形の土器でプランは確認できなかったが、土拡出土であろう。縦区画文土器	41.1	6.2	
		5	L－28	6－1	縦区画文土器			
		6	U－20	6－1	縦区画文土器	55.4	46.6	
		7	S－17	6－1	縦区画文土器			
		8	S－19	6－1	縦区画文土器			
		9	S－19	6－1	縦区画文土器			
		10	Q－17	6－1	縦区画文土器			
		11	X－24	6－1	縦区画文土器			
		12	P－15	6－1	縦区画文土器			
		13	M－18	6－1	縦区画文土器			
		14	M－18、T－20	5－	浅鉢形土器　口唇部に三角押文			
		15		5－	楕円区画文等を三角押文とキャタピラ文を付ける。			
		16	P－20	5－	浅鉢形土器			
		17	M－17、N－19 P－15	5－	三角区画とキャタピラ文			
	225	18	K－18	6－1	三角区画　キャタピラ文＋波状沈線			
		19	P－15	6－1 or 5	隆帯にそってキャタピラ文を施す。			
		20	P－18	6－2	隆帯にそってキャタピラ文を施す。			
		21	V－20	6－5	胎土も白色をなし、異系統の土器である。			
		22	R－18	6－2	胎土も白色をなし、異系統の土器である。			
		23	S－19	6－7	口縁部刻目			
		24	T－22、V－22	6－7	口辺			
		25	X－25	6－7	口辺			
		26	P－19、Q－19	6	口辺			
		27	W－22	6	口辺			
		28	R－24、V－21	6	口辺			
		29	S－16、17	6	口辺			
		30	U－13	6－7	口辺			
		31	S－18	6	口辺			
79		32	N－25	6－1か？	把手			
		33	H－22	6－1か？	把手			
		34	Nトレンチ	6－1か？	把手			
		35	R－17	6－1か？	把手			
		36	N－15	6－1か？	把手			
		37	X－20	6－1か？	把手			
		38	R－17	6－1か？	把手			
		39	O－17	6－1か？	把手			
	226	40	K－17	6－4－b	胴部に縄文を有する土器			
		41	R－20	6－4－b	胴部に縄文を有する土器			
		42	Q－7	6－4－b	胴部に縄文を有する土器			
		43	R－18	6－4－b	胴部に縄文を有する土器			
		44	X－25　No.3	6－4－b	胴部に縄文を有する土器			
		45	M－18	6－4－a	胴部に縄文を有する土器			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	226	46	M−21	6−4−b				
		47	N−19、20	6−3				
		48	Q−19	6−4−b				
		49	T−20	6−4−b	曲折底である。			
		50	N−18	6−4−b	曲折底である。			
		51	M−21	6−4−b	曲折底である。			
		52	W−21	6−4−b				
		53	S−22	6−2				
		54	M−17	6−2	抽象文の一部が見える。キャタピラ文＋三角押文			
		55	N−25	6−2				
		56	R−19 No.11	6−5	楕円文の中に縄文を施している。			
		57	P−18	6−2	口辺部に十字文			
		58	Q−18、R 15、20	6−7	口辺			
	227	59	R−20	6−7	口辺			
		60	Q−17、P−15	6−7	口辺			
		61	U−19	6−7	口辺			
		62	L−20	6−7	口辺			
		63	V−21	6−7	口辺			
		64	P−15	6−6	ＳＢ−04以外唯一の有孔鍔付土器			
		65	S−27	6−0−1				
		66	P−15	6−9				
		67	P−18	6−3				
		68	K−20	6−8	盤状台形土器			
		69	I−21、19、P−15	6−8	台形土器			
		70	N−19	6−8	台形土器			
		71	P−13	6	底部			
		72	M−20	6	底部			
		73	P−17	6				
		74	W−20	6				
		75	I−21	6	口辺部は隆帯上に縄文円形竹管文、キャタピラ文、三叉文、胴部は長方形区画の中にキャタピラ文と波状沈線を施す。			
	228	76	N−19、20	6−7	波状隆帯をもつ浅鉢			
		77	ＳＢ−03	6−2				
		78	ＳＢ−06No.159	6				
		79	ＳＢ−06	6−1か	把手			
		80	ＳＢ−08	6−7	浅状隆帯をもつ浅鉢			
		81	ＳＢ−09	6				
		82	ＳＢ−09	6−4−b				
		83	ＳＢ−08	6−7				
		84	ＳＢ−13	6−4−b				
		85	ＳＢ−21	5	三角区画の隆帯にキャタピラ文			
		86	ＳＢ−27	6				
		87	ＳＢ−42	6−1				
		88	ＳＢ−42 No.6	6−1	縦区画文土器			

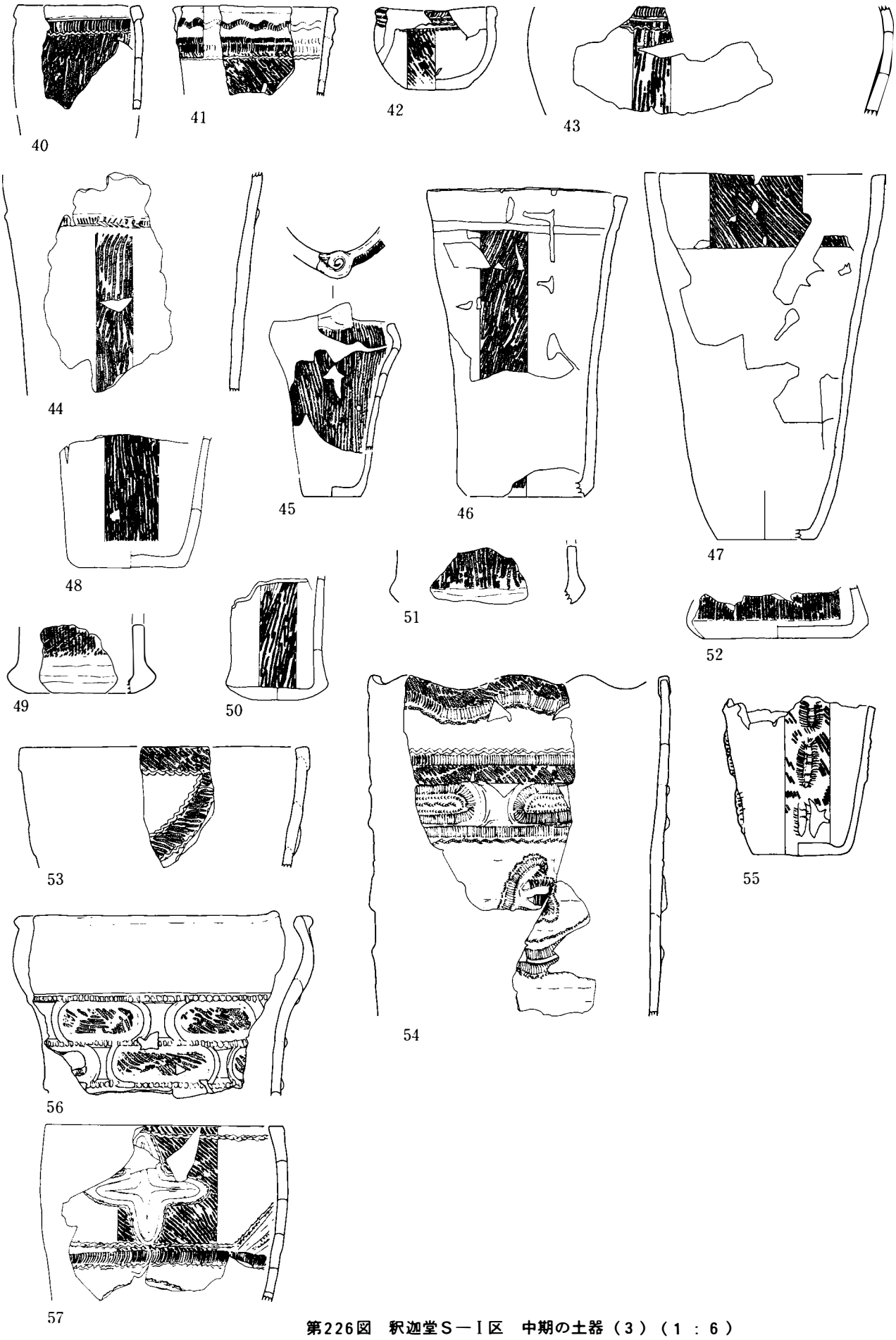


第224図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　中期の土器（１）

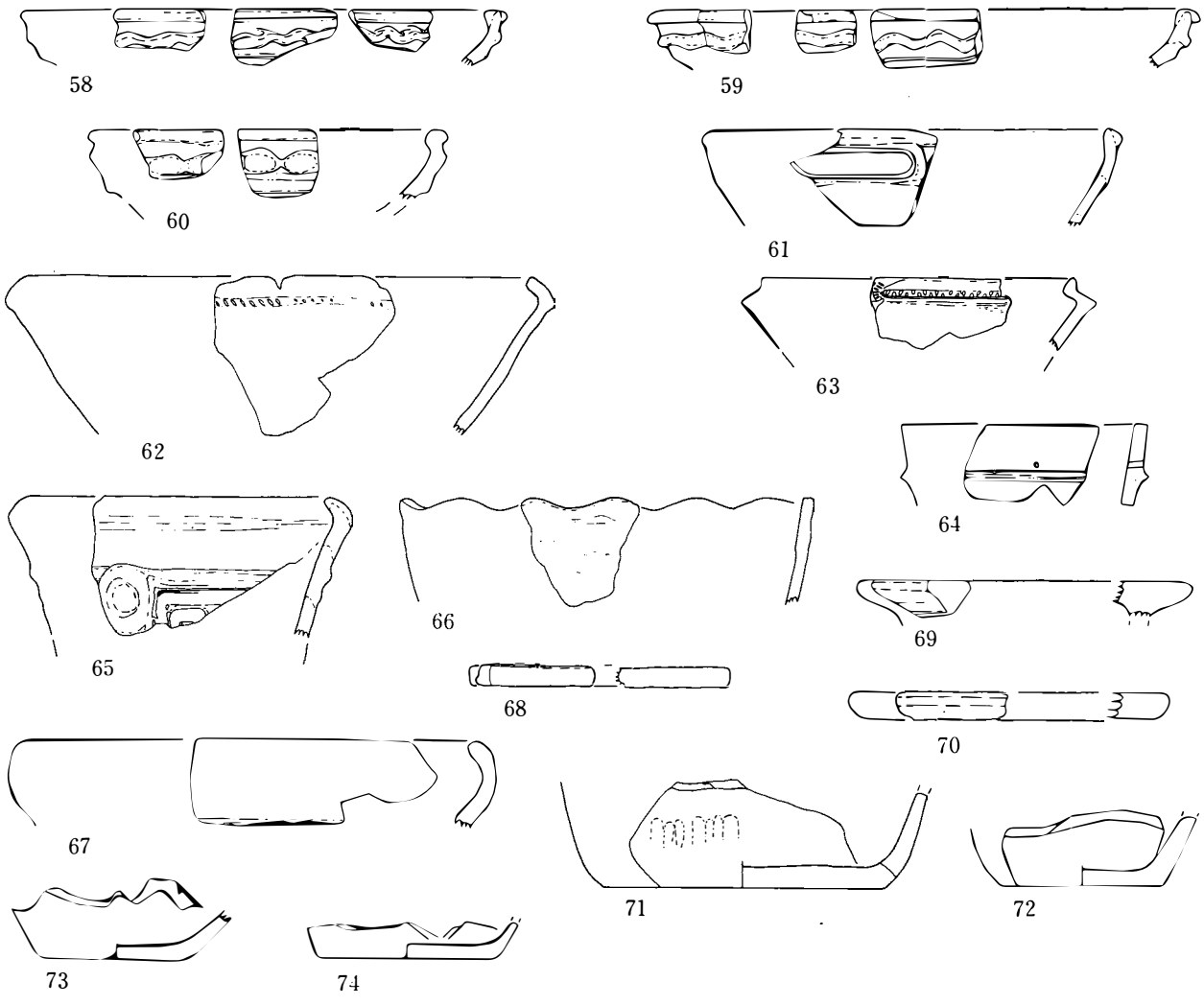
（１：６）

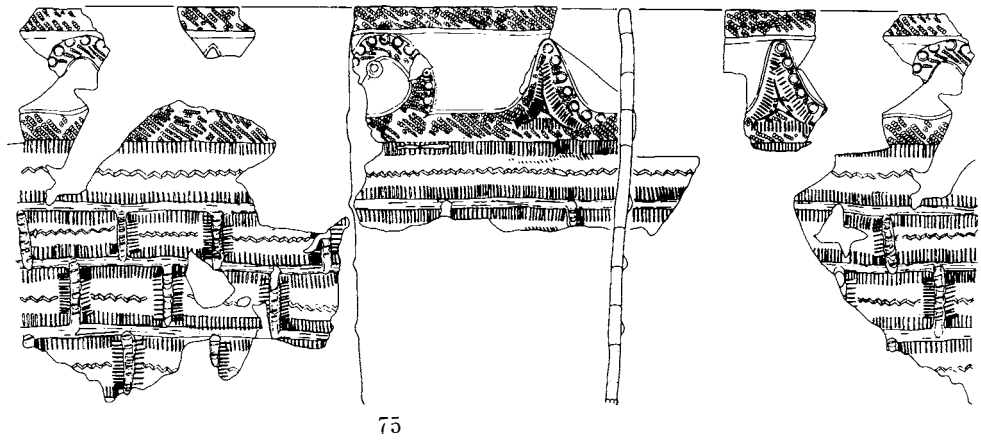


第225図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　中期の土器（２）（１：６）

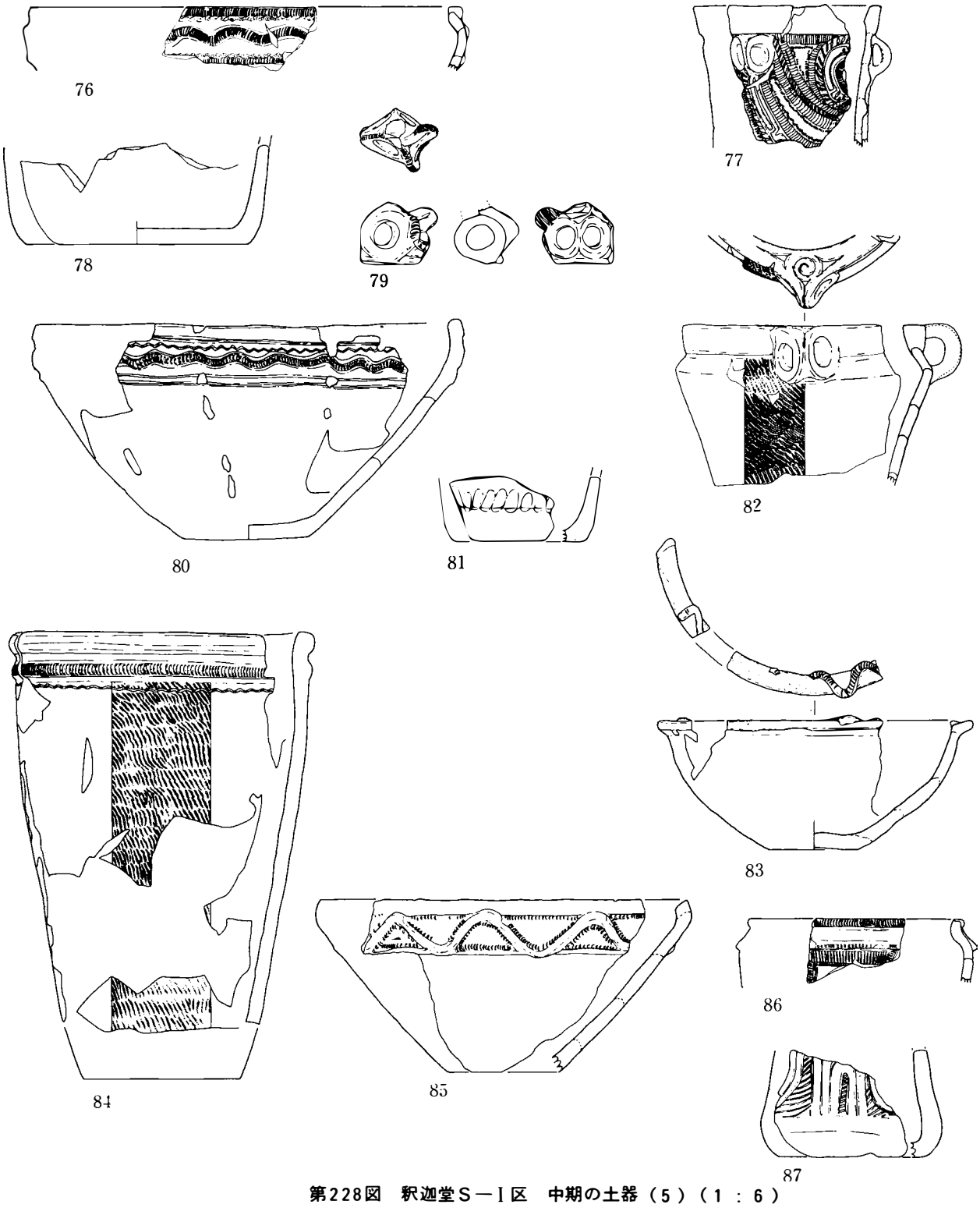


第226図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　中期の土器（３）（１：６）





第227図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　中期の土器（４）（１：６）



第228図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　中期の土器（５）（１：６）

第６章　縄文時代後期

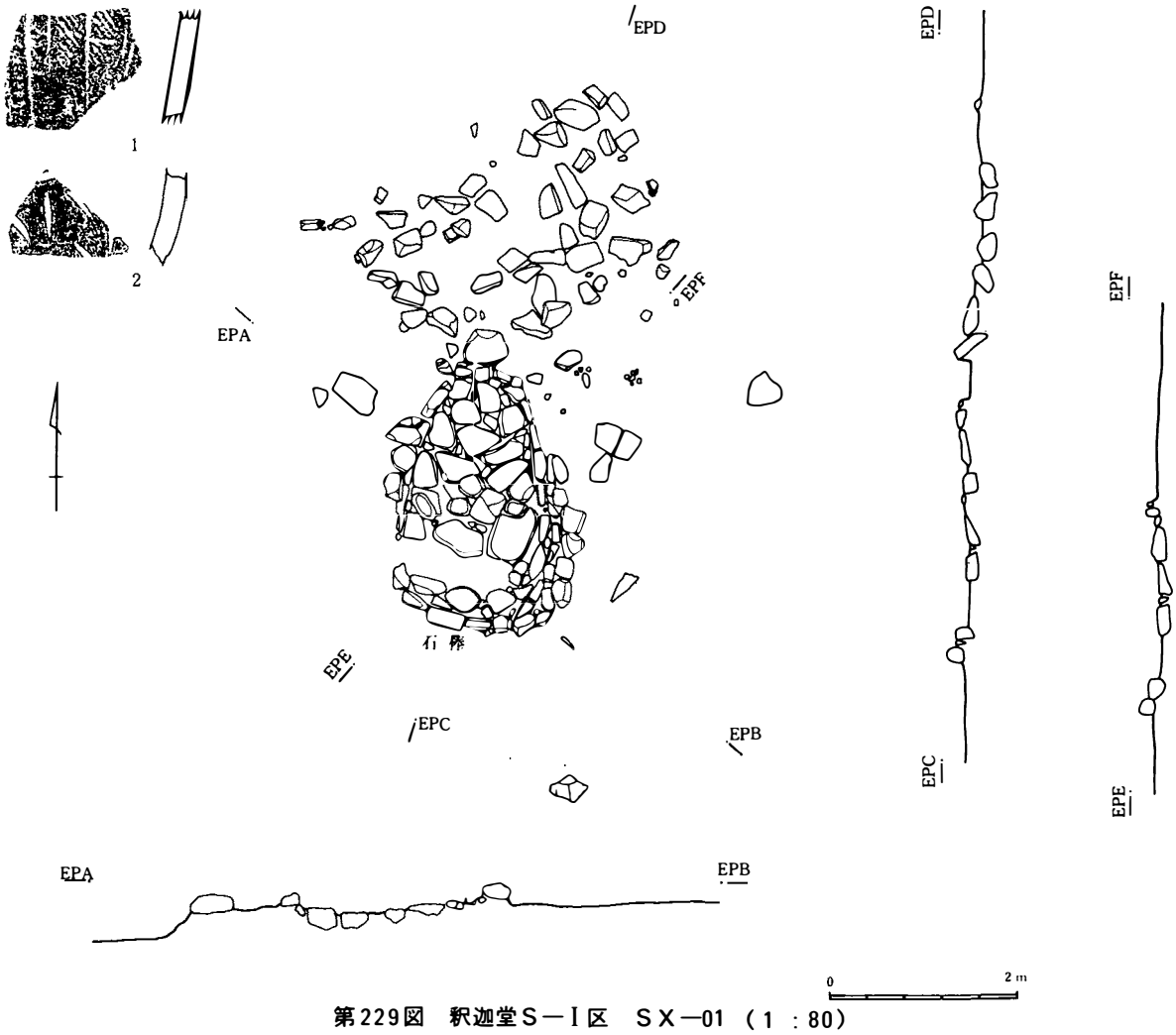
第１節　敷石遺構

Ｓ－Ⅰ区　ＳＸ－01

長軸を南北にした卵形をした敷石遺構であり、縁石として石が一段と高くなり、敷石を囲繞している。南端の部分の縁石は、石棒の一部を転用している。中央部に敷石の欠失した部分があり、炉が存在したか否か不明である。

この整然とした敷石の部分の北側に石の散在しており、あるいは、これらの石もまたこの敷石遺構と一体であった可能性が大である。

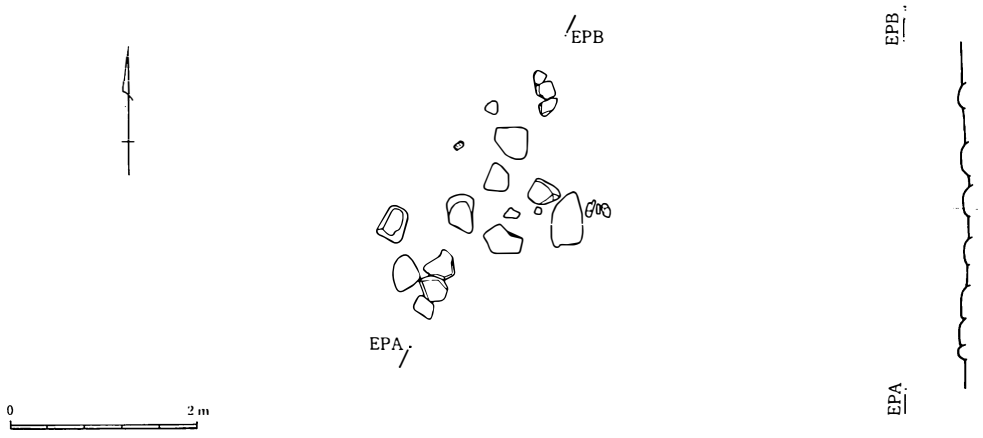
出土遺物は極く少なく、後期初頭の堀之内式土器に属すると思われる小片がわずかにあるにすぎない。



第229図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＸ－01（１：80）

Ｓ－Ⅰ区　ＳＸ－02

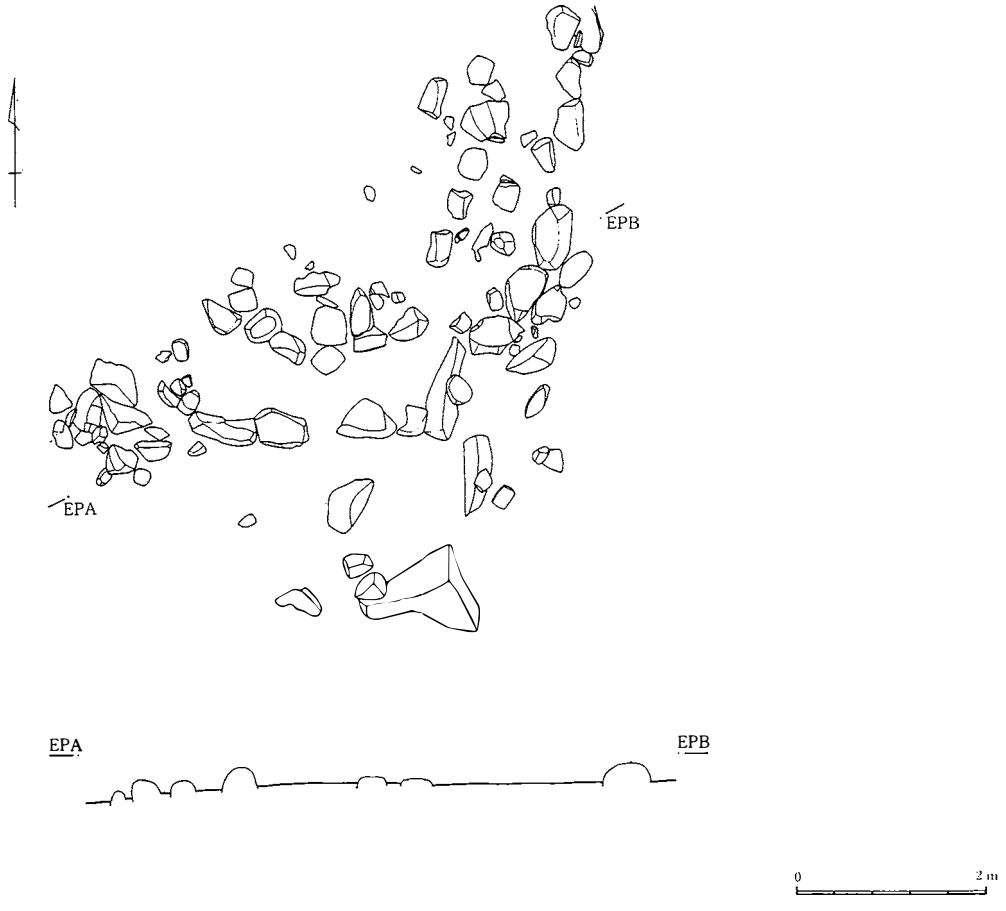
ＳＸ－01の南東で検出された敷石遺構の残存と思われる。畑の区画境に存在したため、多くは耕作のため失なわれたと思われる。



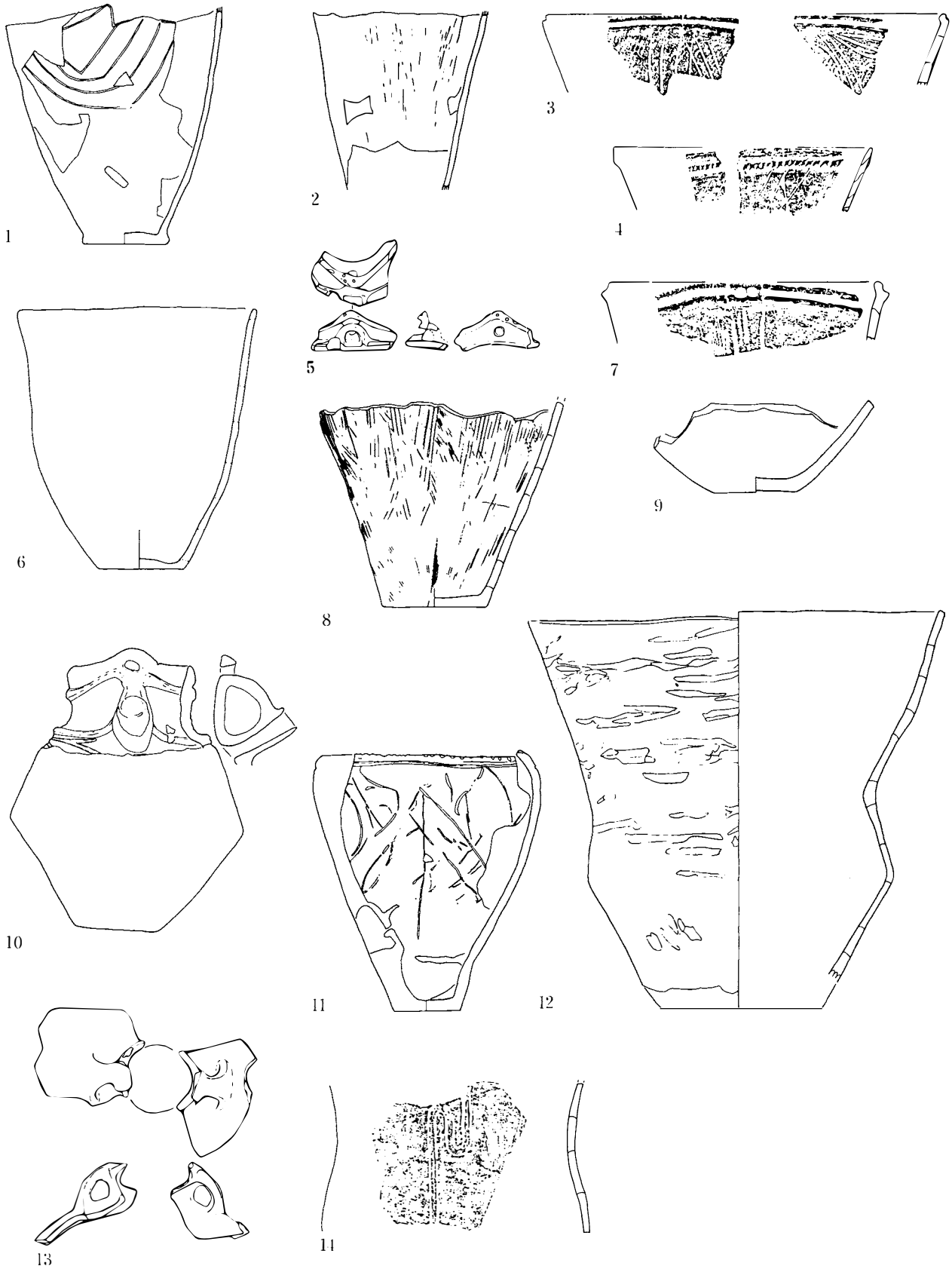
第230図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＸ－02（１：80）

Ｓ－Ⅰ区　ＳＸ－03

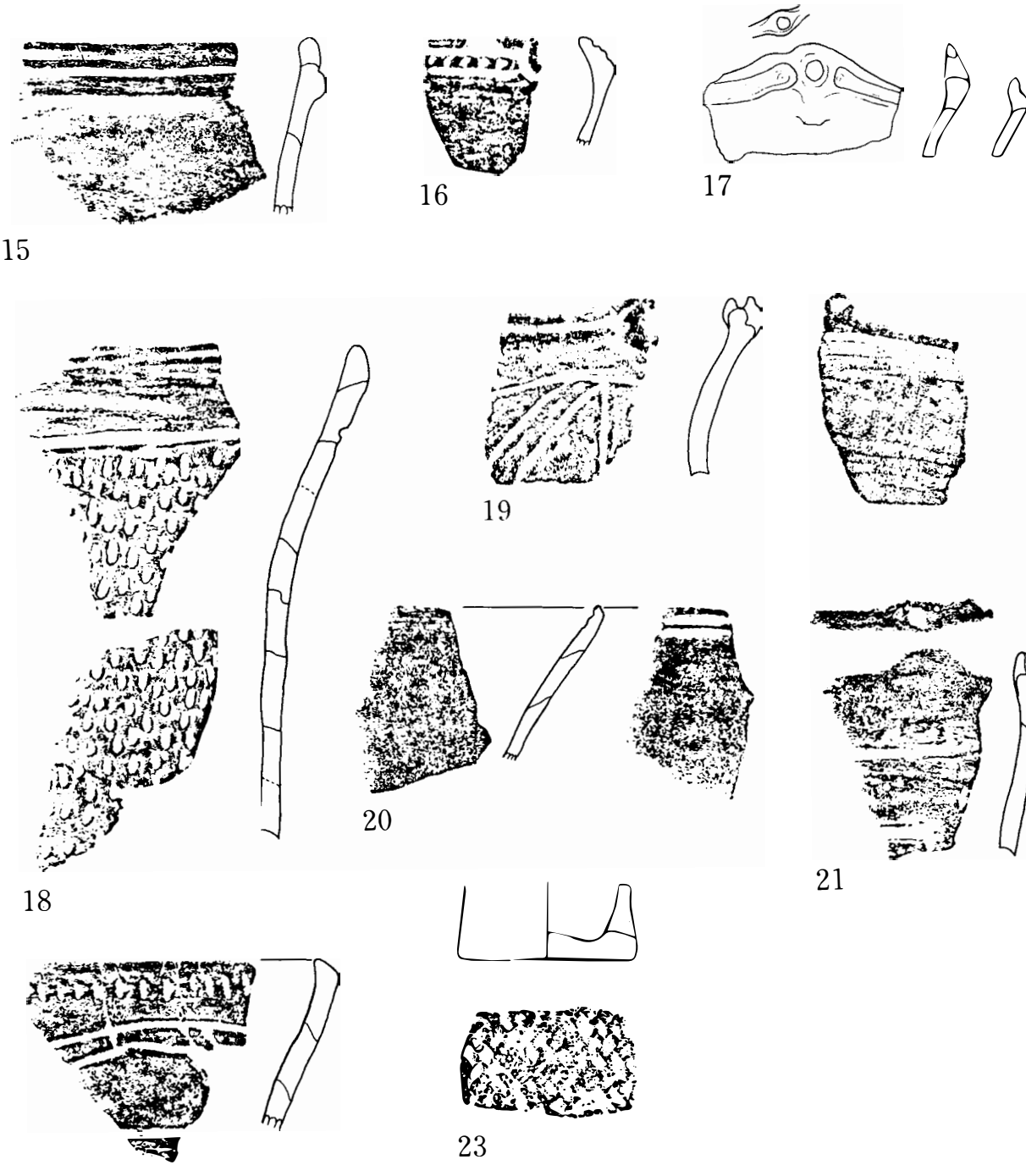
ＳＸ－02のさらに南東で、検出された遺構で北西側が失なわれている半円形の石列である。周辺には自然石も多く、人為的な遺構であるか否か疑問も若干残るのである。



第231図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＸ－03（１：80）



第232図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期ＳＫ出土土器（１）（１：６）



第233図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期ＳＫ出土土器（２）（１：４）

後期ＳＫ出土土器

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
80	232	1	ＳＫ－10	12－1	２本沈線			
		2	ＳＫ－10	12－13	無文粗製土器			
		3	ＳＫ－10	12－8	縄文地に３本沈線			
		4	ＳＫ－10	12－3	口辺部内帯３本沈線			
		5	ＳＫ－10	12－4	注口土器の把手部か			
		6	ＳＫ－55	12－11	無文の深鉢			
		7	ＳＫ－42	12－3	曲折口縁に沈線、胴部は３本沈線			
		8	ＳＫ－10	12－13	条線のある粗製土器			
		9	ＳＫ－10	12－13	底部			
		10	ＳＫ－157	12－14	注口土器の口辺部			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	232	11	SK 199	12-1	口唇部刻目、無文地に2本沈線			
		12	SK-172	12-5	整形痕の残る深鉢			
		13	SK-252	12-14	注口土器の把手			
		14	SK-256	12-1	2本沈線文			
	233	15	SK-42	12-6	曲折口縁			
		16	SK 10	12-6	曲折口縁			
		17	SK-16	12-6				
		18	SK-152	12-14	口辺部沈線、胴部列点			
		19	SK-42	12-1	2本沈線			
		20	SK 172	12-14	内側に沈線			
		21	SK-212	12-14				
		22	SK-234	12-1	2本に沈線			
		23	SK-138	12-13	網代底、1本越え1本替り			

第3節　中期末～後期初頭のグリッド出土土器

中期末の土器

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
81	234	1	U-21	10-1	磨消縄文を有するが、一部しか見られない。			
		2	S-28	10-1	口辺部に沈線、その下に縄文 LR			
		3	U-22	10-1	マド隆帯と胴部に磨消縄文			
		4	T-27	10-1	微隆帯と磨消縄文 LR			
		5	L-17	10-1	おそらく大区画と磨消縄文 LR			
		6	N-28	10-1	縄文地に沈線 LR			
		7	S-23	10-1	円形文の中に縄文 L			
		8	P-23	10-1	縄文地に沈線			
		9	S-28	10-1	縄文地に沈線			
		10	M-24	10-2	沈線に微隆帯と列点			
	235	11	R-18	10	口辺部沈線 胴部に櫛歯状工具による条線			
		12	H-21	10	口辺部沈線 胴部に櫛歯状工具による条線			
		13	R-1	10	口辺部沈線 胴部に櫛歯状工具による条線			
		14	M-19	10	11と同じだが胴部に列点を施す。			
		15	M-20	10	集合条線を施す。			
		16	O-21	10	胴部に集合沈線			
		17	R-18	10	口辺部は不明であるが、胴部に集合沈線			
		18	M 19	10	胴部に格子目文			
		19	P-22	10	胴部に流水状沈線			
		20	V-20	10	胴部に条線			
		21	R 18	10	沈線文			
		22	L 21	10	胴部に列点、14と同じであろう。			
		23	U 27	10	R{r r と思われる反の撚りの縄			
		24	R-11	10	正反の合と思われる縄？			

後期初頭の土器

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
81	236	1	W-22、No.10	11-1	太い沈線でJ字文を描き、縄文を充填する。LR			
		2	W-22、No.11	11-1	太い沈線でJ字文を描き、縄文を充填する。LR			
		3	Q-23	11-1	充填縄文 LR			
		4	S-18	11-1	LR			
		5	W 27	11-1	充填縄文 RLにℓを巻きつけている。			

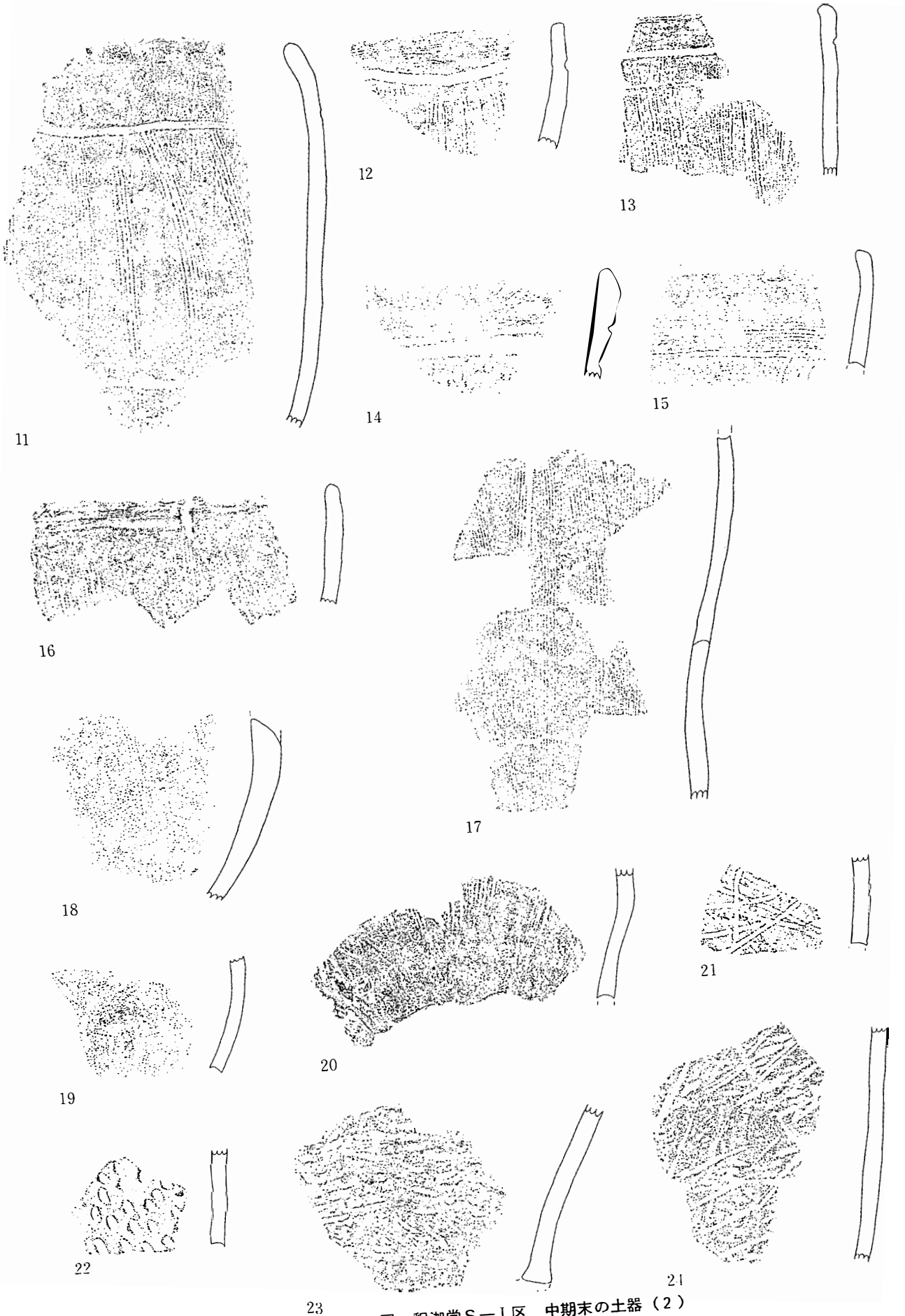
第234図　釈迦堂S－Ⅰ区　中期末の土器（1）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
81	236	6	Q－23	11－1	L			
		7	R－21	11－1	LRとLの2種の縄を併用			
		8	S－21	11－1	縄文LR			
		9	S－28	11－1	縄文LR			
		10	W－21	11－2	列点を有するもの			
		11	W－21	11－2	列点を有するもの			
		12	K－17	11－2	列点ではなく、条痕が加えられている。			
		13	P－19	11－2	列点が施されている。			
		14	S－17	11－2	2列の列点が施されている。			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
81	236	15	M－22	11－3	沈線で崩れた鈎文を描く。			
		16	P－19	11－3	沈線で崩れた鈎文を描く。			
		17	R－25	11－3				
		18	M－24	12－3				
		19	M－22	12－3				
		20	S－24	12－2				
		21	S－28	11－3				

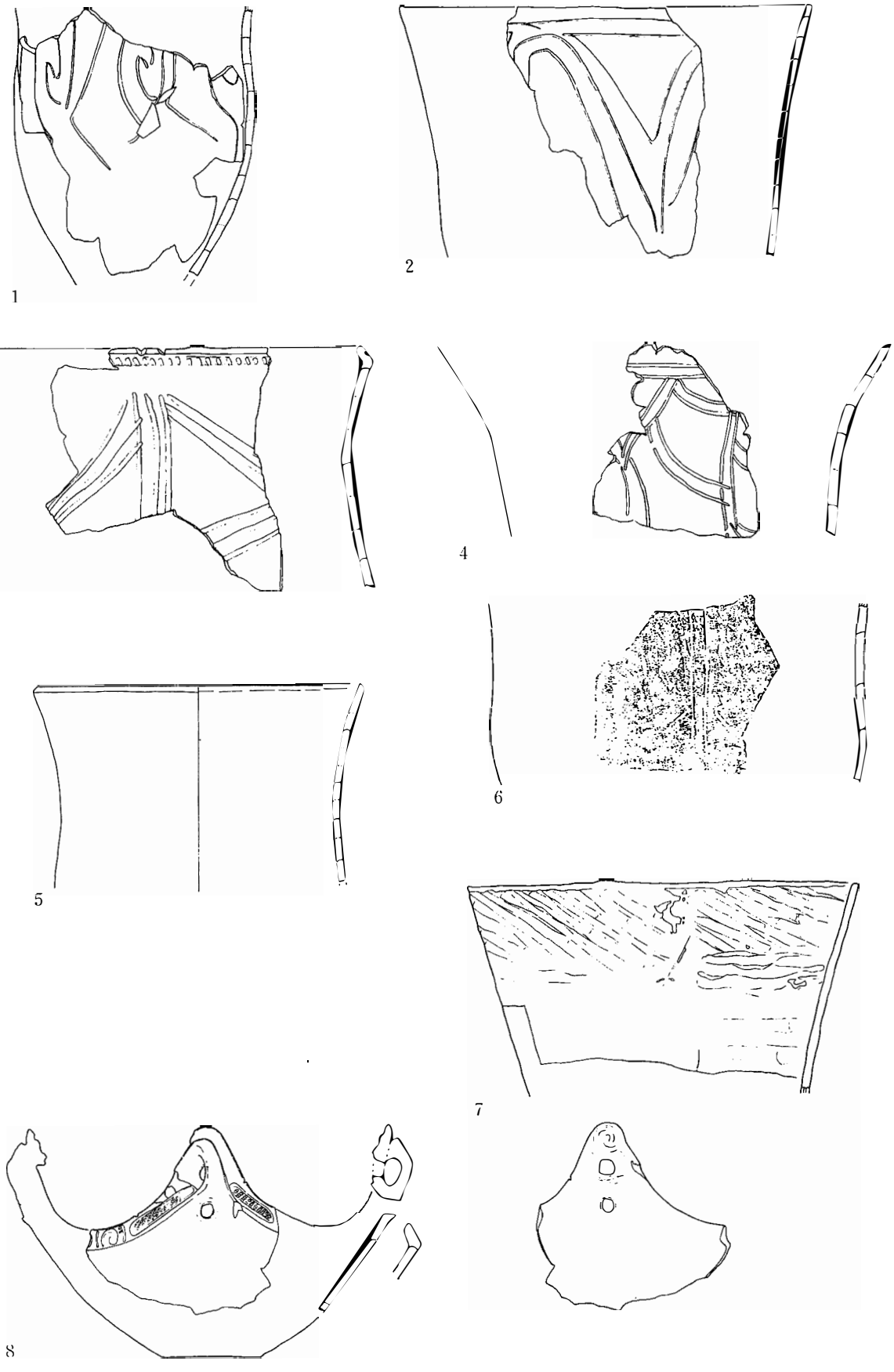
後期の土器

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	237	1	S－28	12－1	鉤状沈線文に沈線が付く			
82		2	R－23	12－1	口辺部に2条、胴部に3条の沈線に三角文			
82		3	W－23	12－1	くの字形口辺の曲折部に刻目、3条の沈線で菱形文			
		4	SB－31、SK－234	12－1	口辺部に2条、胴部に2条の沈線で弧線文			
		5	S－23	12－12	無文			
		6	No.9	12－1	2条の垂線に波状垂線を2本加える。			
		7	U－23、No.3	12－12	口辺部に整形痕が著しい。			
		8	SB－21、No.5	12－9	浅鉢形の口辺部、曲折部に磨消縄文を加えたもの。			
	238	9	T－22	12	波状の垂線がある。			
82		10	L－21	12－1				
		11	R－18	12－1				
		12	S－17	12－1				
		13	N－24	12－1				
		14	M－20	12－1				
		15	P－22	12－1				
		16	M－22	12－1				
		17	R－18	12－1	称名寺式からの変化であろうか。			
		18	P－22	12－3				
		19	R－21	12－3				
		20	M－22	12－3				
		21	V－20	12－3	2本沈線と3本線が併用			
	239	22	U－27	12－2	沈線間に烈点を施す。			
		23	M－20	12－2	沈線間に烈点を施す。			
82	239	24	S－27	12－2	沈線間に烈点を施す。			
		25	U－27	12－2	沈線間に烈点を施す。			
		26	S－18	12－2	沈線間に烈点を施す。			
		27	L－21	12－6	くの字形口辺、無文地に3本沈線			
		28	V－28	12－6	くの字形口辺、無文地に3本沈線			
		29	V－27	12－6	くの字形口辺、無文地に3本沈線			
		30	L－27	12－6	くの字形口辺、無文地に3本沈線			
		31	R－20	12－6	くの字形口辺、無文地に3本沈線			
		32	S－22	12－3	3本沈線を有する。口辺に刻目凸帯			
		33	W－22、No.4	12－3	3本沈線を有する。口辺に刻目凸帯			
		34	V－27	12－3				
		35	W－23、No.4	12－3	3本沈線を有する。			
		36	W－23、No.4	12－3	3本沈線を有する。			
83	240	37	U－27	12－3	3本沈線を有する。			
		38	M－21、No.1	12－3	3本沈線を有する。			
		39	V－27	12－3	3本沈線を有する。			
		40	S－27	12－3	3本沈線を有する。			
		41	T－21	12－3	3本沈線を有する。			

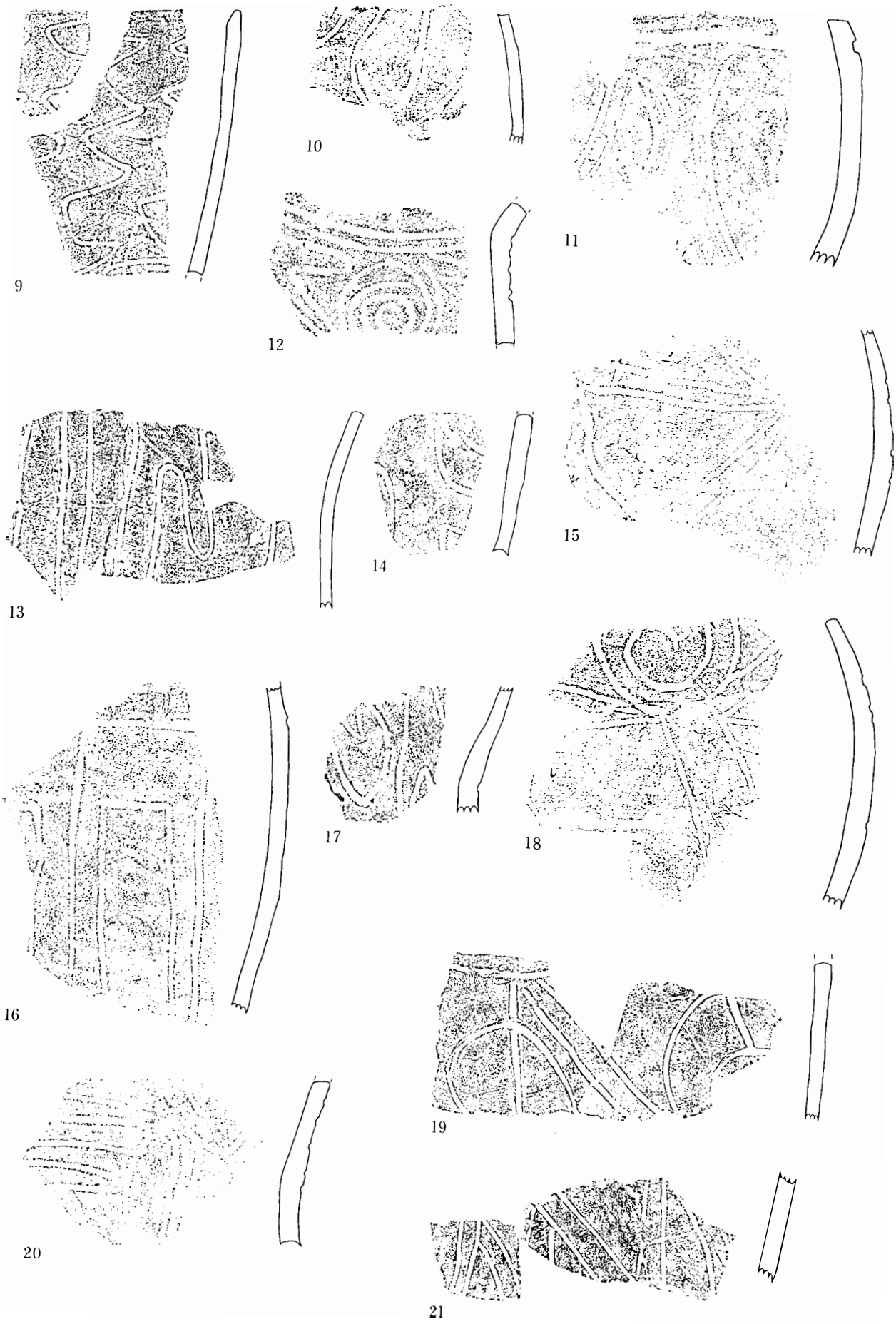


第235図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　中期末の土器（２）

第236図　釈迦堂S－I区　後期の土器（3）

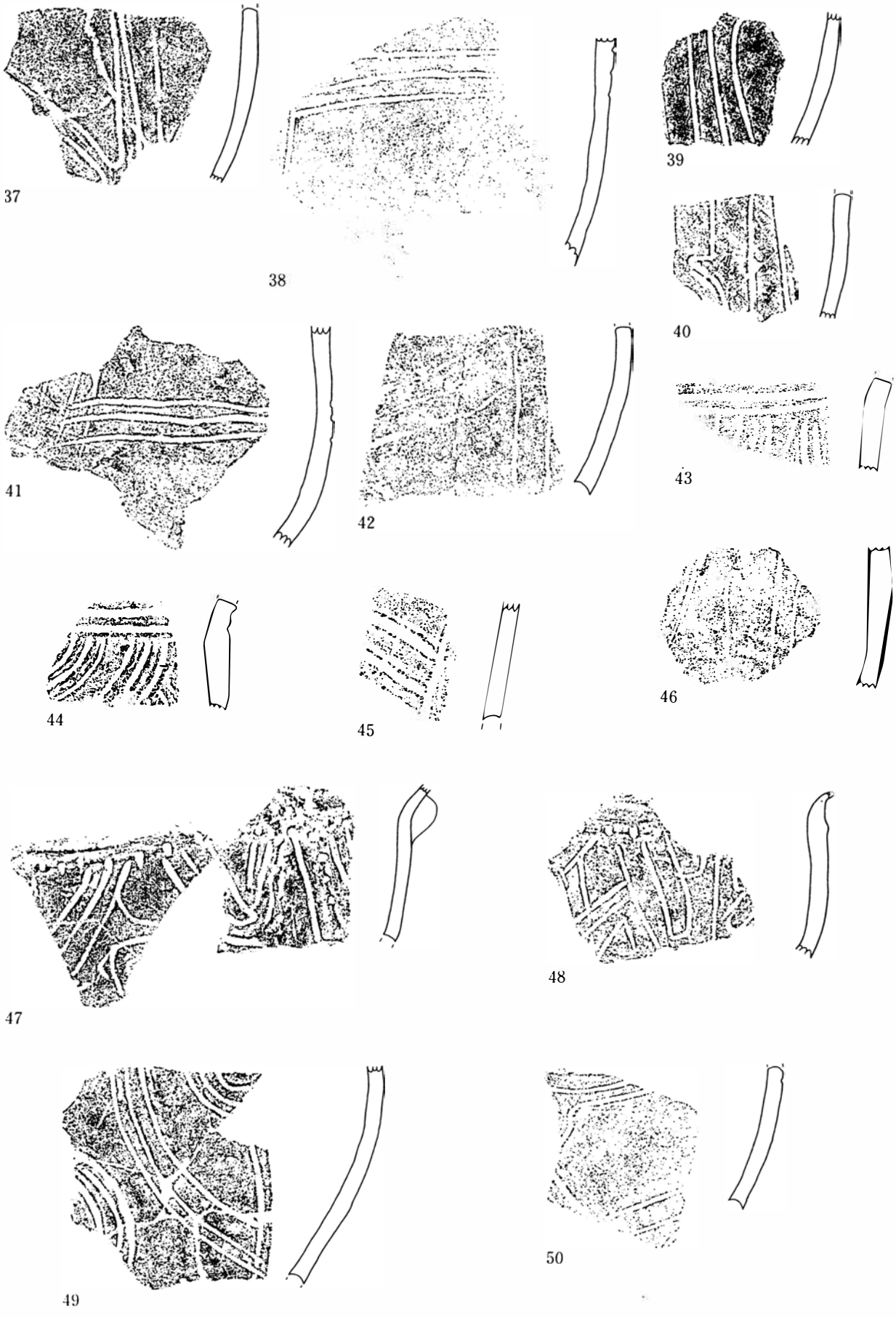


第237図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（４）（１：６）

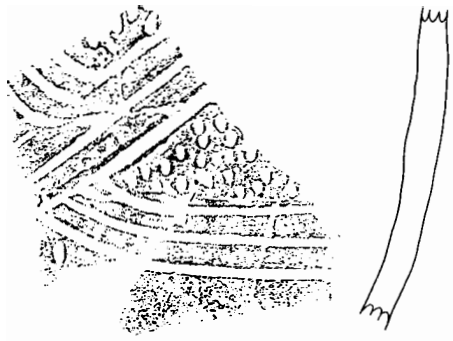


第238図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（５）

第239図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（６）

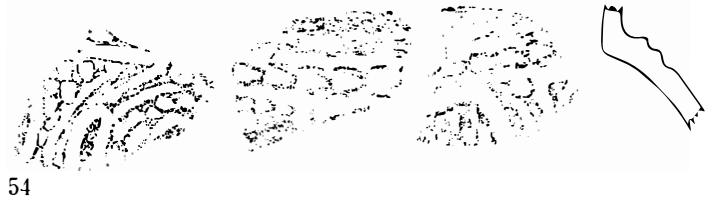


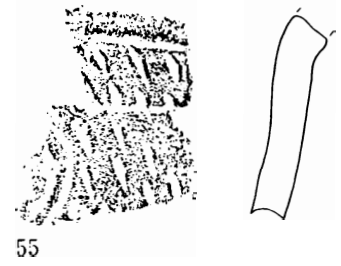
第240図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（７）


51

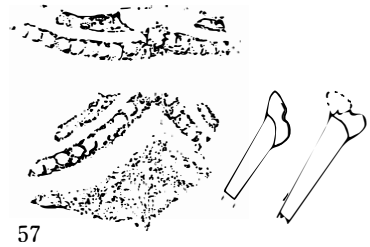
52

53


54

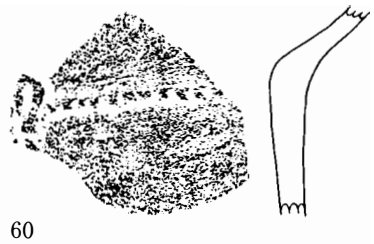

55

56


57

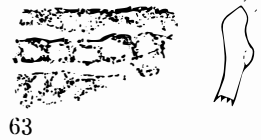
58

59


60

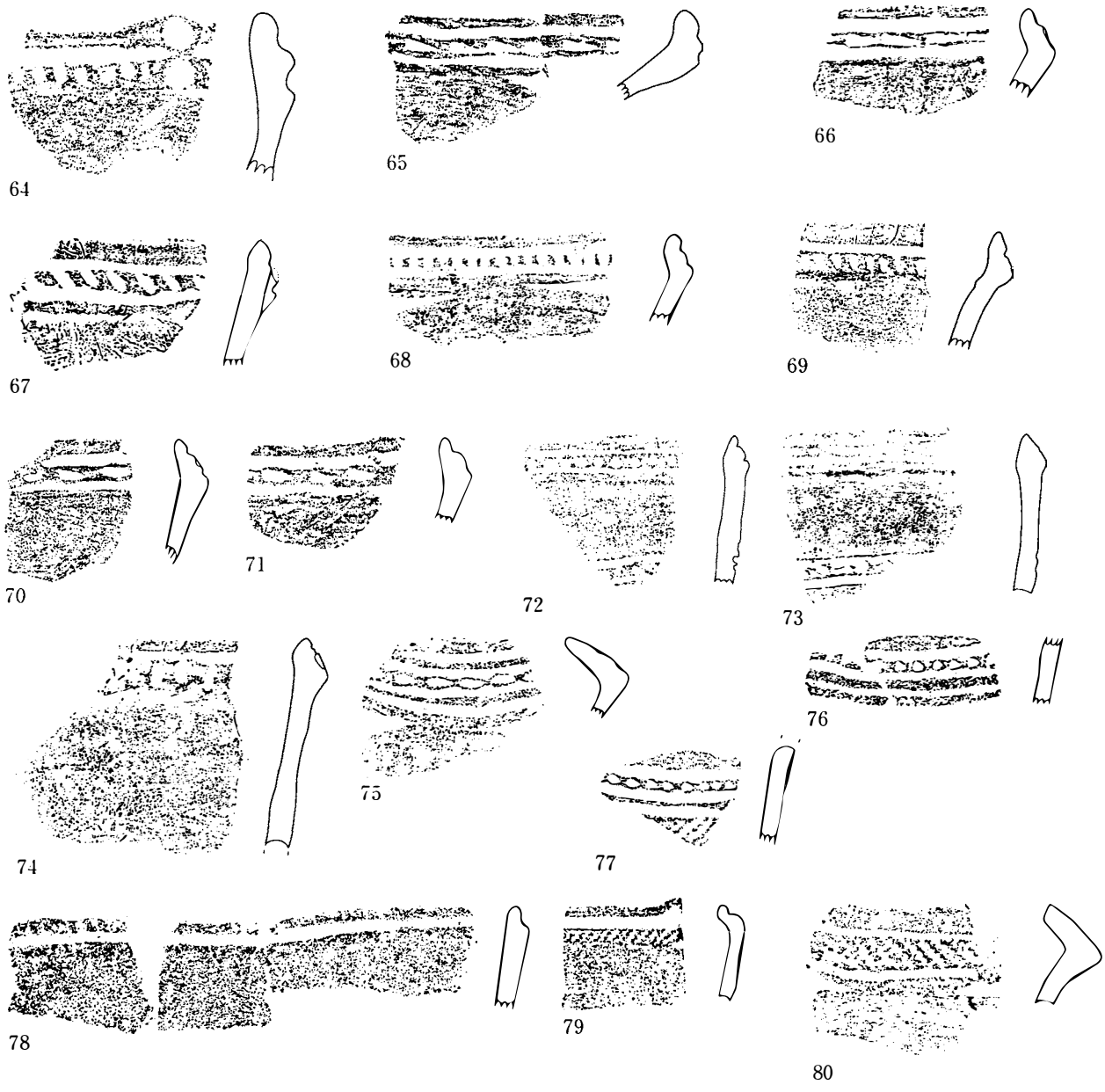
61

62


63

第241図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（８）

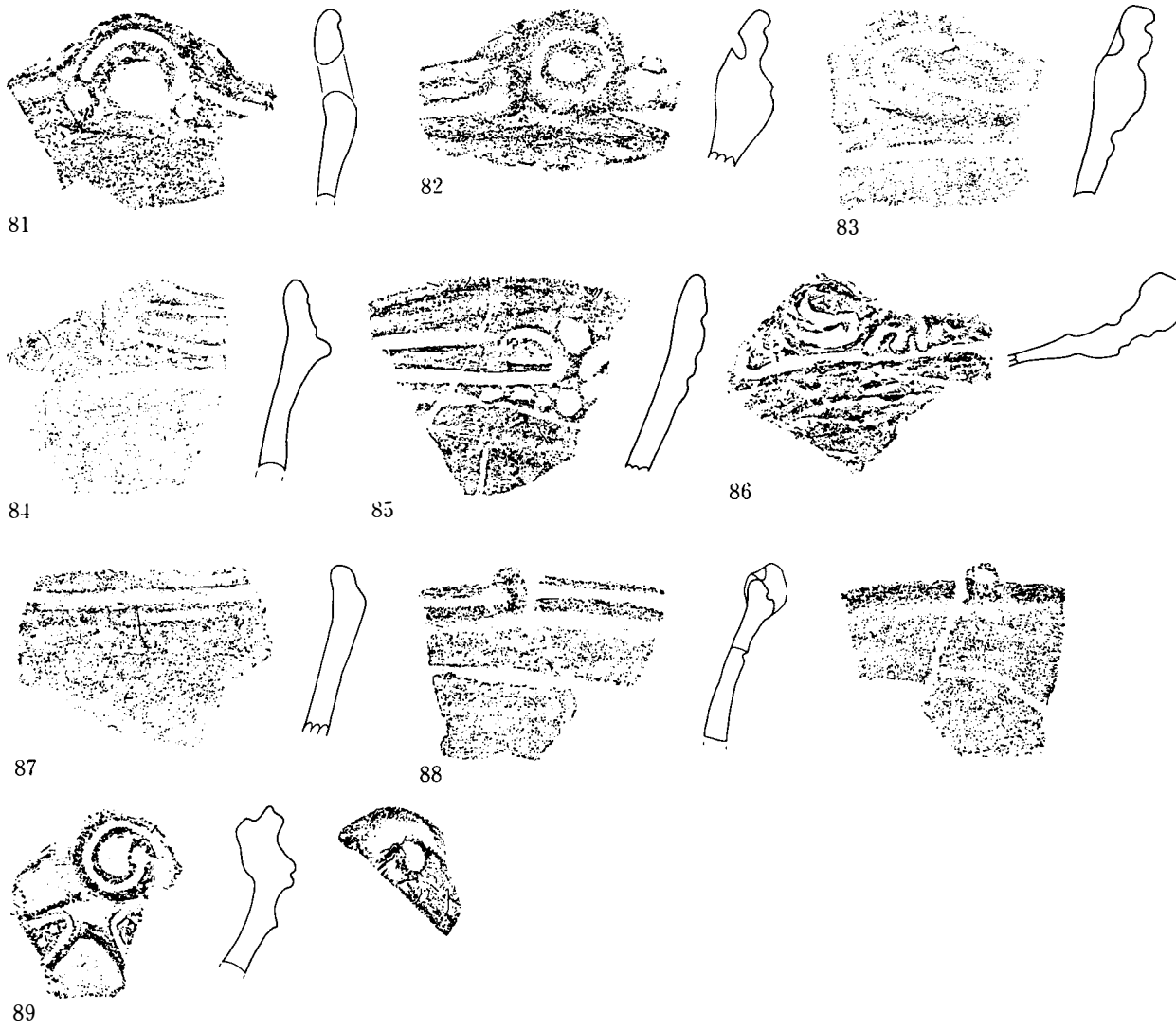
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
83	240	42	N－22	12－3	3本沈線を有する。			
		43	L－17	12－3	3本沈線を有する。			
		44	Q－24	12－3	3本沈線を有する。			
		45	W－23、No.4	12－3	3本沈線を有する。			
		46	L－21	12－3	3本沈線を有する。			
		47	V－27	12－3	口頸部に刻目凸帯を有する。			
		48	V－27	12－3	口頸部に刻目凸帯を有する。			
		49	V－27	12－3	3本沈線を有する			
		50	Q－22	12－3	3本沈線を有する			
82	241	51	S－28	12－4	3本沈線間に列点を施す。			



第242図　釈迦堂S－Ⅰ区　後期の土器（9）

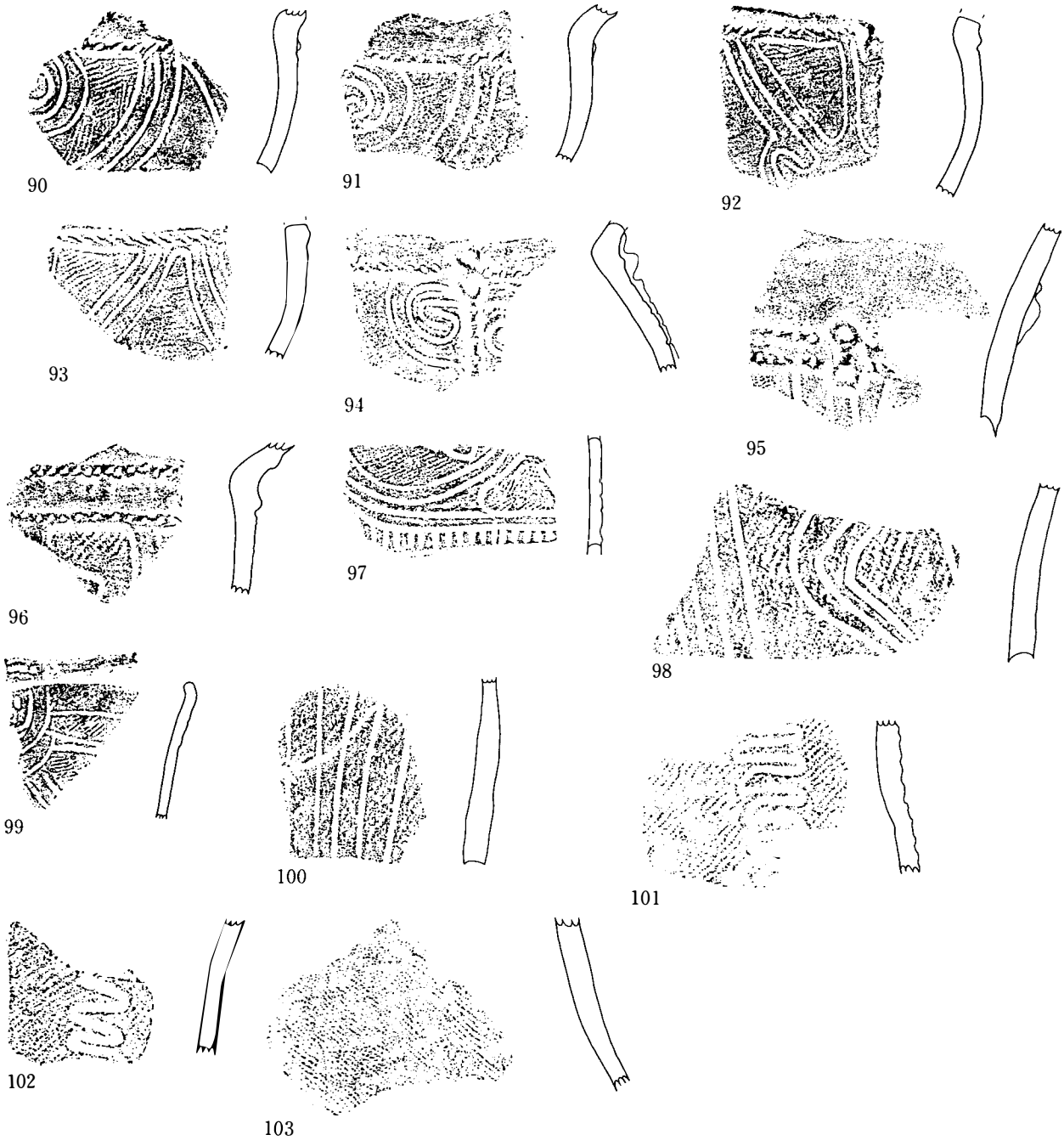
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
83	241	52	Q－18	12－4	3本沈線間に列点というより、沈線を施している。			
		53	T－19、20	12－4	3本沈線間に列点			
		54	R－17、S－18、S－18	12－4	3本沈線間に列点			
		55	Q－26	12－4	3本沈線間に烈点			
		56	M－20	12－5	無文地に凸帯文を付ける。			
		57	W－22、SB－31、No.9	12－5	無文地に凸帯文を付ける。			
		58	N－21	12－5	無文地に凸帯文を付ける。			
		59	S－27	12－5	無文地に凸帯文を付ける。			
		60	S－26	12－5	無文地に凸帯文を付ける。			
		61	S－16	12－5	無文地に凸帯文を付ける。			
		62	Q－24	12－5	無文地に凸帯文を付ける。			
		63	R－17	12－5	無文地に凸帯文を付ける。			
83	242	64	Q－23	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		65	V－27	12－6	くの字形口縁を有するもの。			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
83	242	66	V－27	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		67	P－23	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		68	Q－14	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		69	W－22	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		70	V－27	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		71	N－23	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		72	M－17	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		73	K－22	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		74	T－27	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		75	M－24	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		76	M－24	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		77	V－27	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		78	P－25	12－6	くの字形口縁を有するもの。			
		79	N－21	12－6	曲折部に縄文ＬＲ			
		80	M－25	12－6	曲折部に縄文、３段の縄文ＬＲＬ			
85	243	81		12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
		82		12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
		83		12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
		84		12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
		85		12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
		86	V－27	12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
		87	P－20	12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
		88	SK－42	12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
		89	M－26	12－7	口辺部にメガネ状沈線が付く。			
85	244	90	P－22	12－9	磨消縄文をもつもの			
		91	Q－23	12－9	磨消縄文をもつもの			
		92	P－22	12－9	磨消縄文をもつもの			
		93	P－22	12－9	磨消縄文をもつもの			
		94	Q－23	12－9	磨消縄文をもつもの			
		95	N－24	12－9	磨消縄文をもつもの			
		96	P－23	12－9	磨消縄文をもつもの			
		97	Q－17	12－9	磨消縄文をもつもの			
		98	N－18	12－8	磨消縄文をもつもの			
		99	Q－23	12－9	磨消縄文をもつもの			
		100	M－18	12－9	磨消縄文			
		101	R－18	12－8	地文地にＬＲに太い沈線			
		102	S－19		地文地にＬＲに太い沈線			
		103	S－28	12－14	地文Ｒ			
85	245	104	R－15	12－9	太い沈線で区画し、磨消縄文をなすものＬＲ			
		105	O－24	12－9	太く深い沈線、縄文磨消していないＲＬ			
		106	Q－17	12－9	太い沈線の磨消縄文ＬＲ			
		107	S－16	12－9	太い沈線の磨消縄文ＬＲ			
		108	N－23	12－9	太い沈線の磨消縄文ＬＲ			
84	246	109	Q－18	12－14	浅鉢、口唇部に沈線			
		110	W－19	12－14	注口土器の口縁部か？			
		111	O－27	12－14	浅鉢、口縁から低隆帯がある。			
		112	M－17	12－14	無文の深鉢			
84		113	SB－05	12－1	頸部に８の字文、胴部に２本浅線文			
84	247	114	R－21、S－21	12－9	頸部に隆線をめぐらし、その下に磨消縄文帯を設ける。			
		115	U－24	12－9	頸部に隆帯をめぐらす。そこへ口縁から垂線が下がる。			
		116	W－25	12－9	口縁部から垂線が下がり、その下に磨消縄文帯がある。			
		117	V－24	12－9	口縁下に隆線、その下に磨消縄文帯となっている。			
		118	L－17	12－9	口縁下に縦の隆線			
		119	N－25	12－14	無文地に隆線を貼り付けている。			



第243図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（10）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
84	247	120		12－9	口縁下に２本の隆線、その下に縄文帯Ｌ			
87	248	121	Q－23	12－9	磨消縄文帯			
		122	V－24	12－9	磨消縄文帯			
		123	R－21	12－9	磨消縄文帯　ＬＲ			
		124	R－22	12－9	磨消縄文帯			
		125	Q－22	12－9	磨消縄文帯			
		126	R－21	12－9	磨消縄文帯			
		127	V－24	12－9	磨消縄文帯			
		128	W－25	12－9	磨消縄文帯			
		129	S－23	12－9	磨消縄文帯　ＬＲ			
		130	Q－22	12－9	磨消縄文帯　Ｌ			
		131	Q－25	12－9	磨消縄文帯　ＬＲ			
		132	W－25	12－9	磨消縄文帯			
		133	S－18	12－9	磨消縄文帯			
84	249	134	R－24	12－10	口縁部に２本の隆線、その下に縄文帯			
		135	V－24	12－10	口縁部に２本の隆線、その下に縄文帯			
		136	S－24	12－10	口縁部に２本の隆線、その下に縄文帯			
		137	S－25	12－10	口縁部に２本の隆線、その下に縄文帯　ＬＲ			
		138	U－23	12－10	口縁部に２本の隆線、その下に縄文帯			



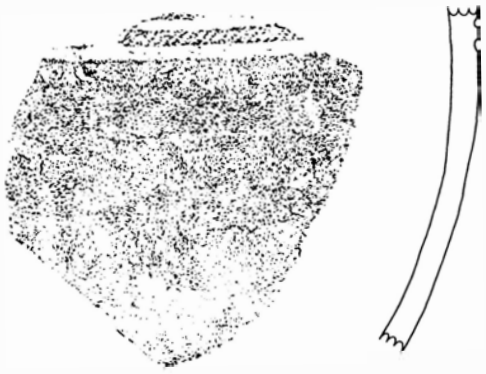
第244図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（11）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
84	249	139	R－21	12－10	口縁部に２本の隆線、その下に縄文帯　L			
		140	V－24	12－10	口縁部に２本の隆線、その下に縄文帯			
		141	V－25	12－10	口縁から縦の隆線が水平隆線に接続			
		142	T－23	12－10	口縁からの縦の隆線は８の字文になっている。			
		143	U－23	12－10	口縁からの縦の隆線は８の字文になっている。			
		144	O－21	12－14	胴部磨消縄文帯が付くか？			
		145	N－19		磨消縄文帯ではなく、刺突文となっている。			
		146	V－20	12－8－a				
		147	Q－23	12－10	口辺部の隆線			
		148	Q－22	12－10	口辺部の隆線			
		149	W－18	12－10	口辺部の隆線			
87	250	150	R－23	12－12	無文粗製土器			

104

105

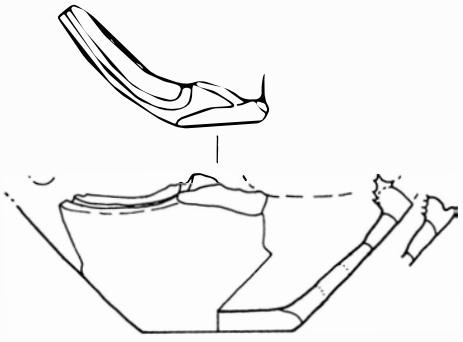
106



107

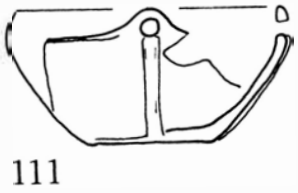
108

第245図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（12）

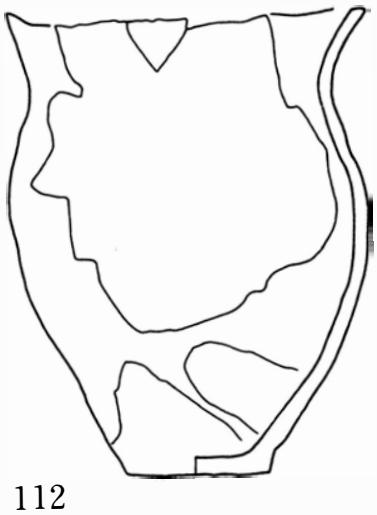


109

110



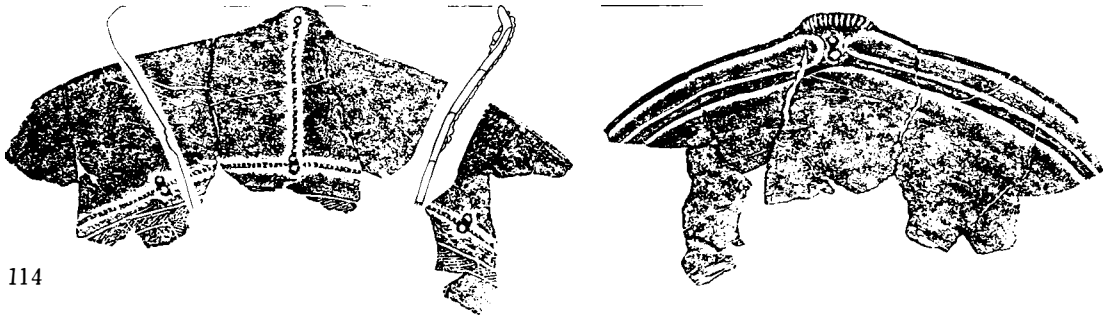
111



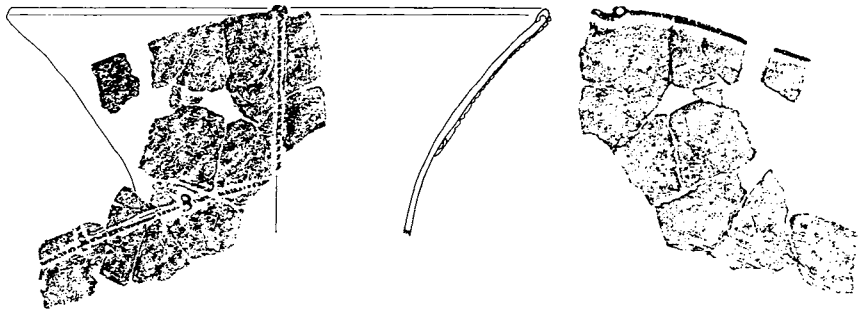
112

113

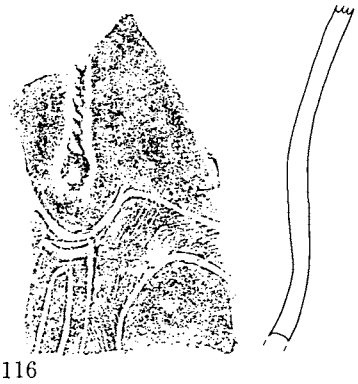
第246図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（13）（１：４）



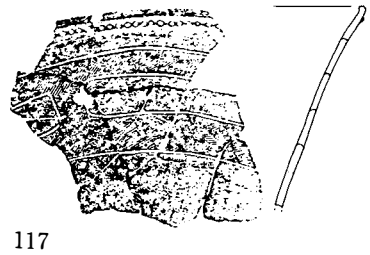
114



115



116



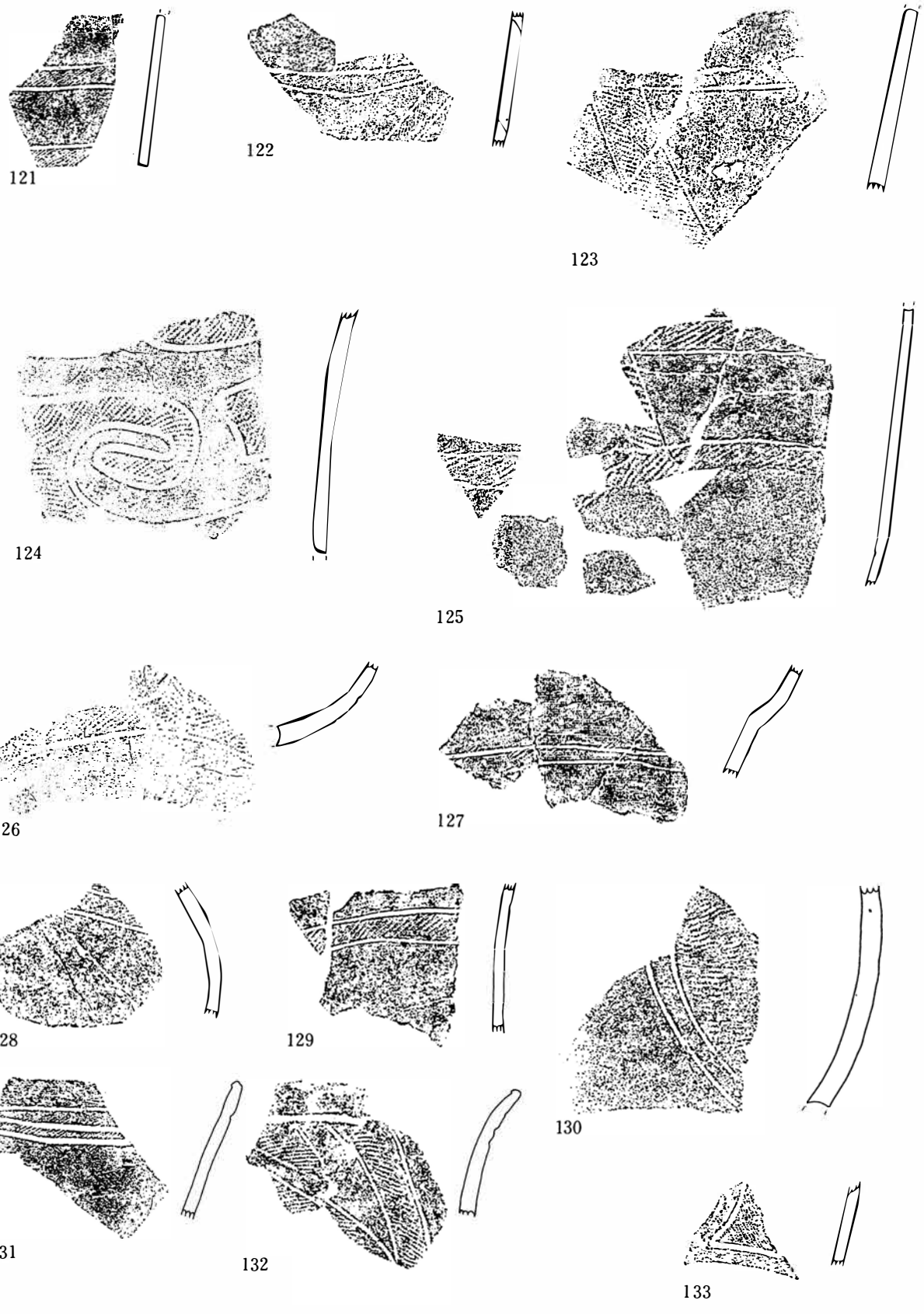
117

118

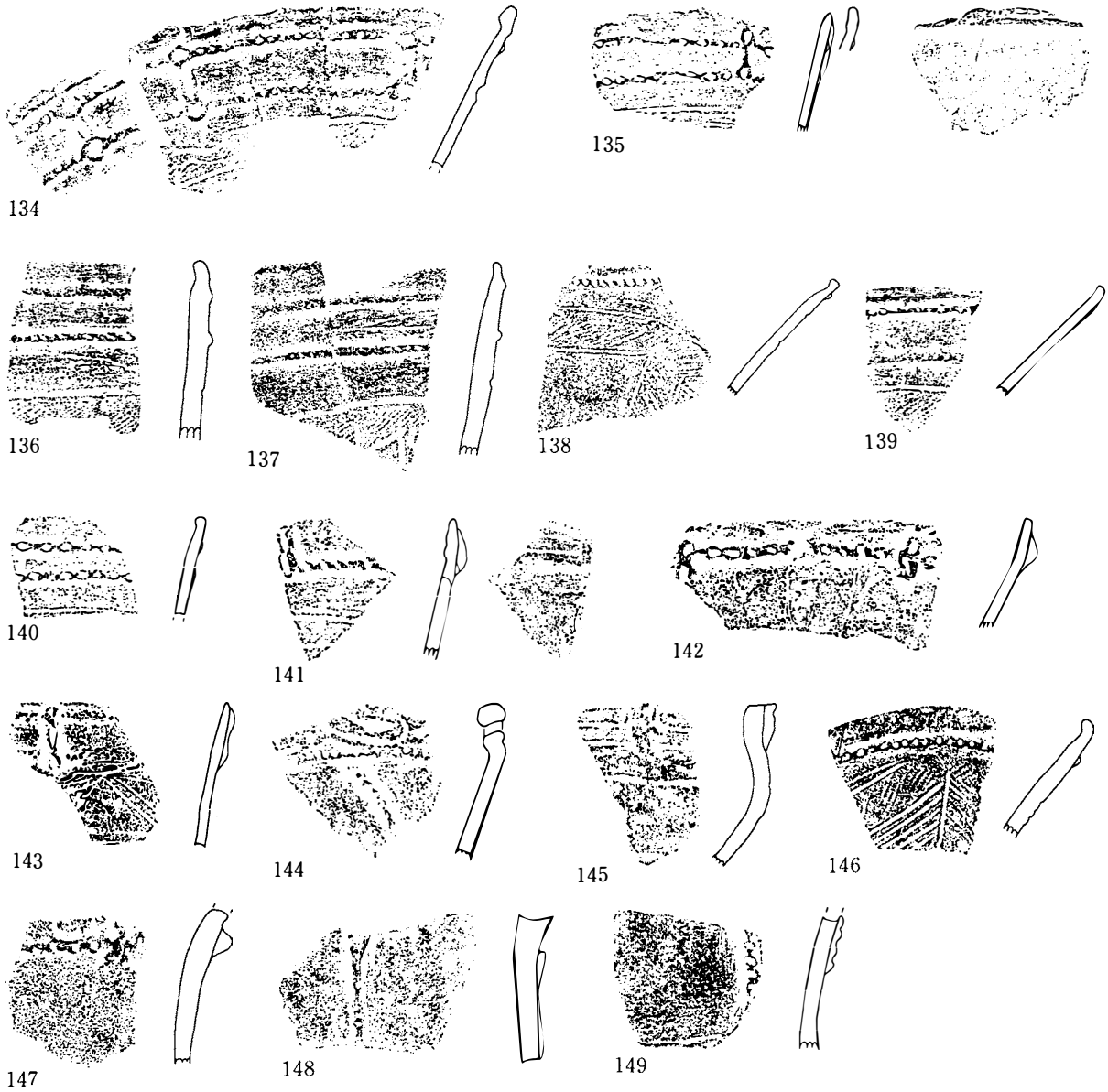
119

120

第247図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（14）（116を除いて１：６）

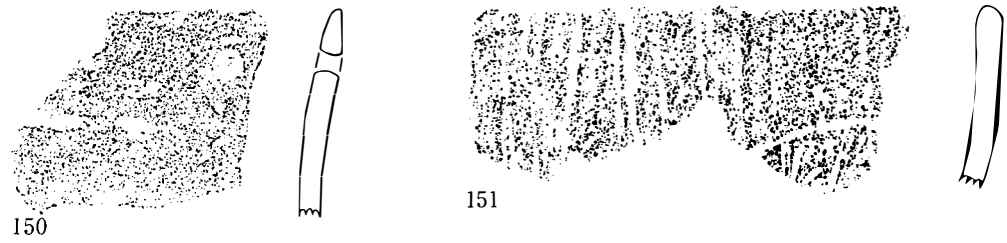


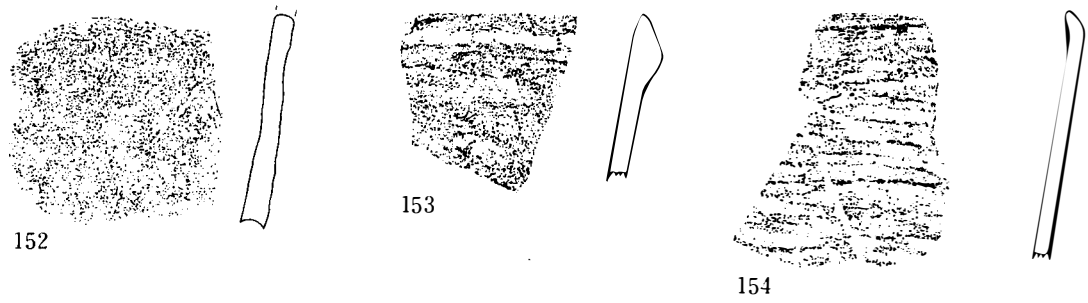
第248図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（15）

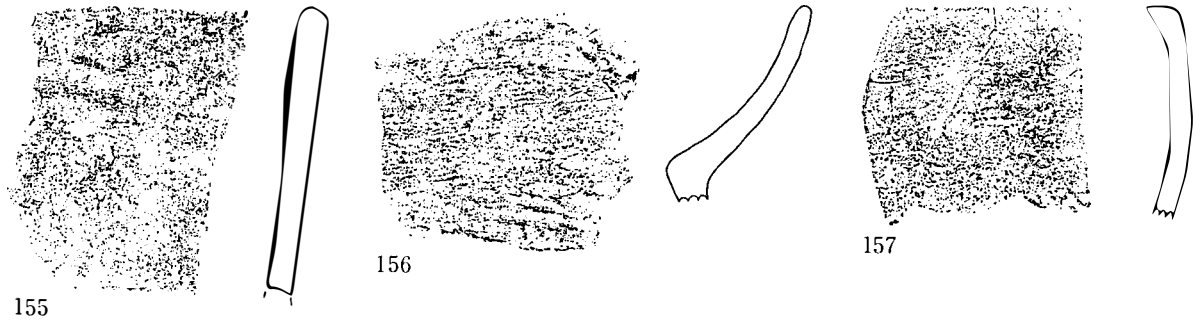


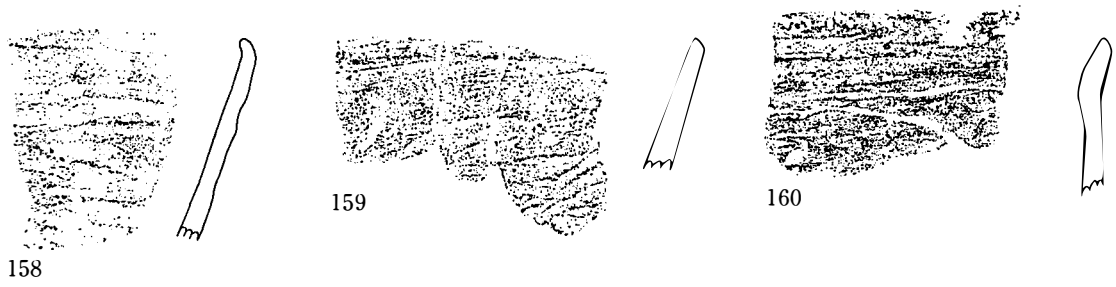
第249図　釈迦堂S－Ⅰ区　後期の土器（16）

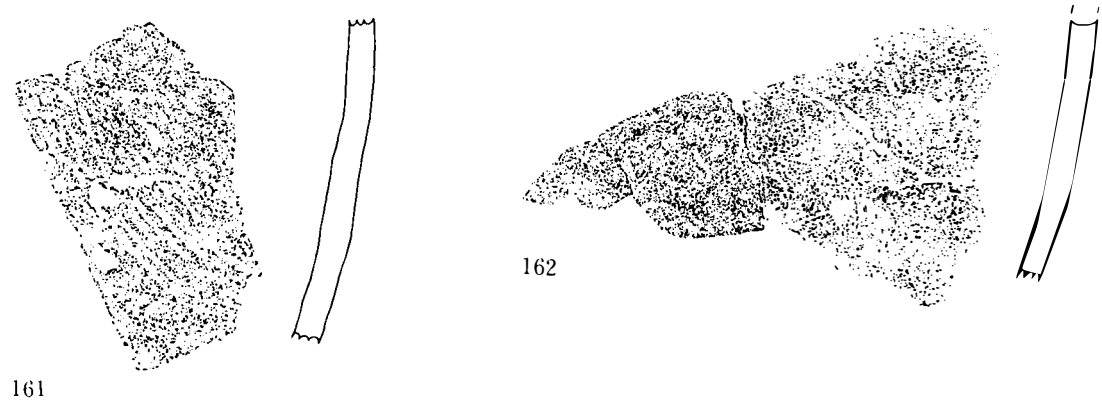
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
87	250	151	R－11	12 12	沈線がある。			
		152	M－21	12 12	無文			
		153	M－21	12 12	無文			
		154	U 23	12 12	無文			
		155	M 24	12－12	無文			
		156		12 12	無文			
		157	S 28	12－12	無文			
		158	W 26	12 12	無文			
		159	U－25	12 12	無文			
		160	S 23	12－12	無文			
		161	P 19	12－12	無文			
		162	W－23	12 12	無文			
		163	T 24	12 12	無文			
		164	U 21	12 12	無文			

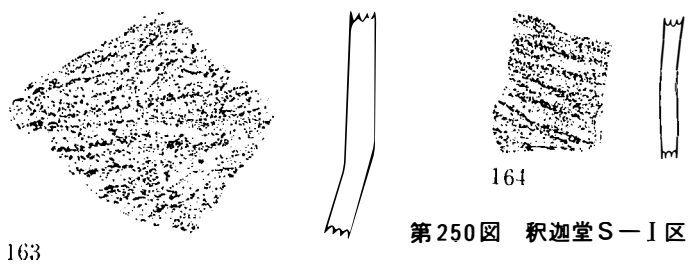




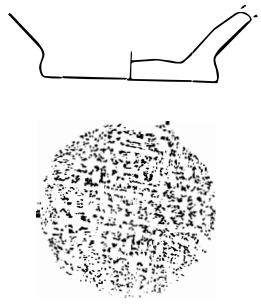


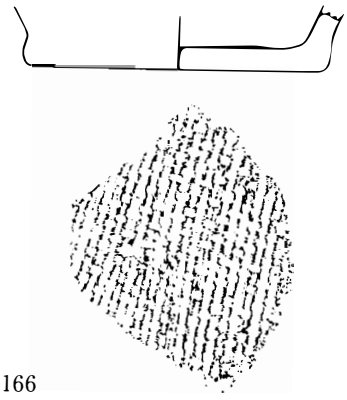


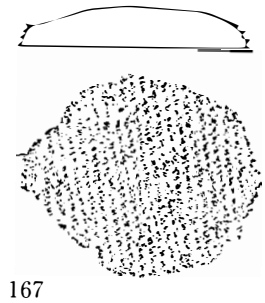


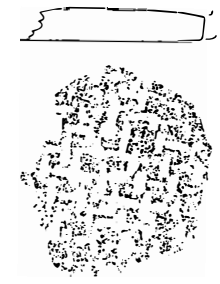


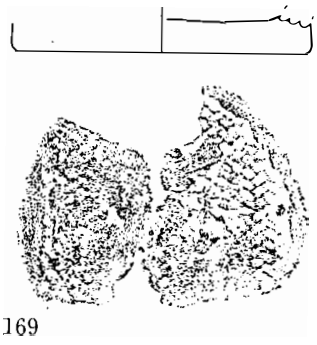
第250図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（17）

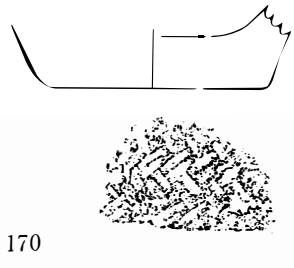

165

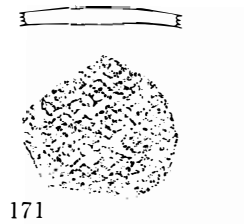

166

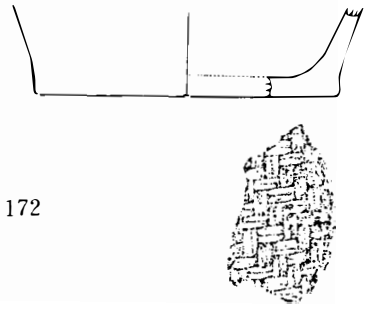

167

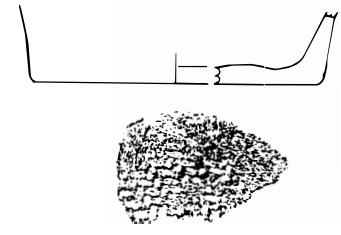

168

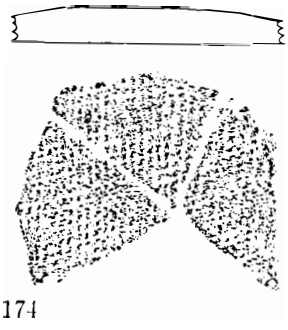

169

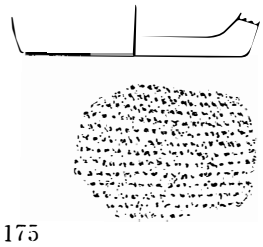

170

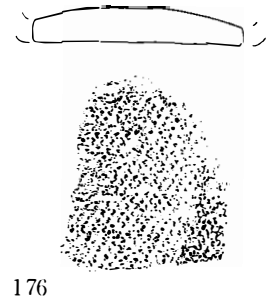

171

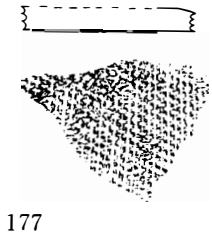

172

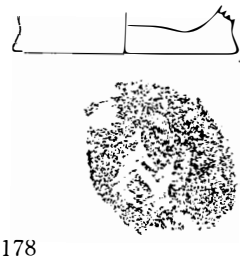

173


174


175


176

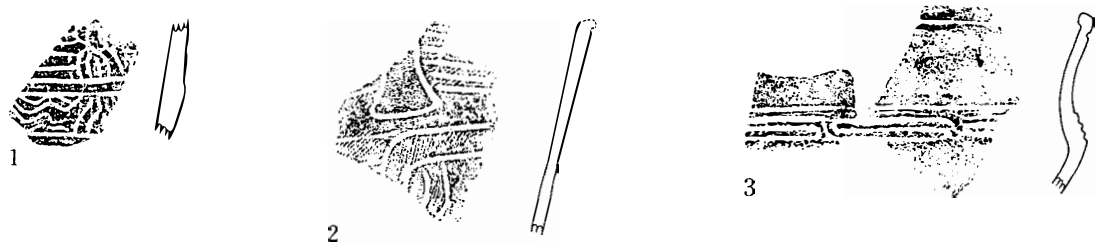

177


178

第251図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　後期の土器（18）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
87	251	165	S 25	12 13	底部 1本越え 1本替り			
		166	S 24	12 13	底部 2本越え 1本替り			
		167	R 24	12 13	底部 2本越え 1本替り 1本ずらし			
		168	R 24	12 13	底部 1本越え 2本替り 1本ずらし			
		169	S 27	12 13	底部 1本越え 2本替り 1本ずらし			
		170	T 27	12 13	底部 2本組みて2本越え 2本替り 1本ずらし			
		171	R 24	12 13	底部			
		172	Q 20	12 13	底部			
		173	R 23	12 13	底部 2本越え 1本替り 1本ずらし			
87	251	174		12 13	底部 1本越え 1本替り			
		175	V 24	12 13	底部 1本越え 1本替り			
		176	S 25	12 13	底部 1本越え 1本替り			
		177	R 25	12 13	底部 1本越え 1本替り			
		178	S 21	12 13	底部			

第 4 節　後期中葉～晩期のグリッド出土土器

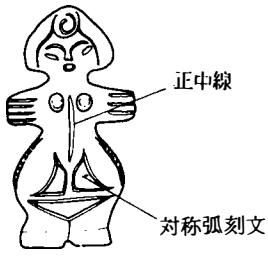


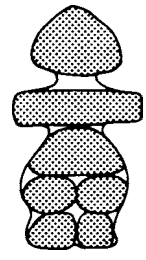
第252図　釈迦堂S－Ⅰ区　後・晩期の土器

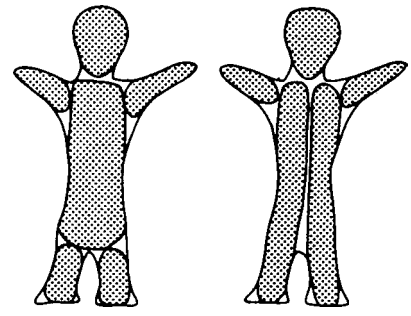
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
99	252	1	Q 23	13 2	加曽利B1式土器			
		2	R 23	13 1 a				
		3	1号墳	14	肩部に雷文が見える。口縁内側の沈線から佐野Ⅱ式以降のものであろう。			

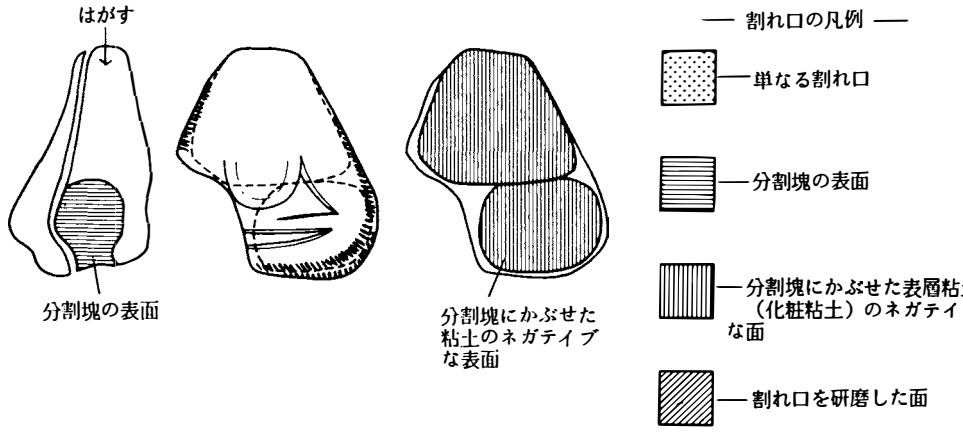
第７章　土偶およびその他の遺物

第１節　土　　偶




勝坂式期土偶
の分割塊製作法


曽制式期土偶の
分割塊製作法



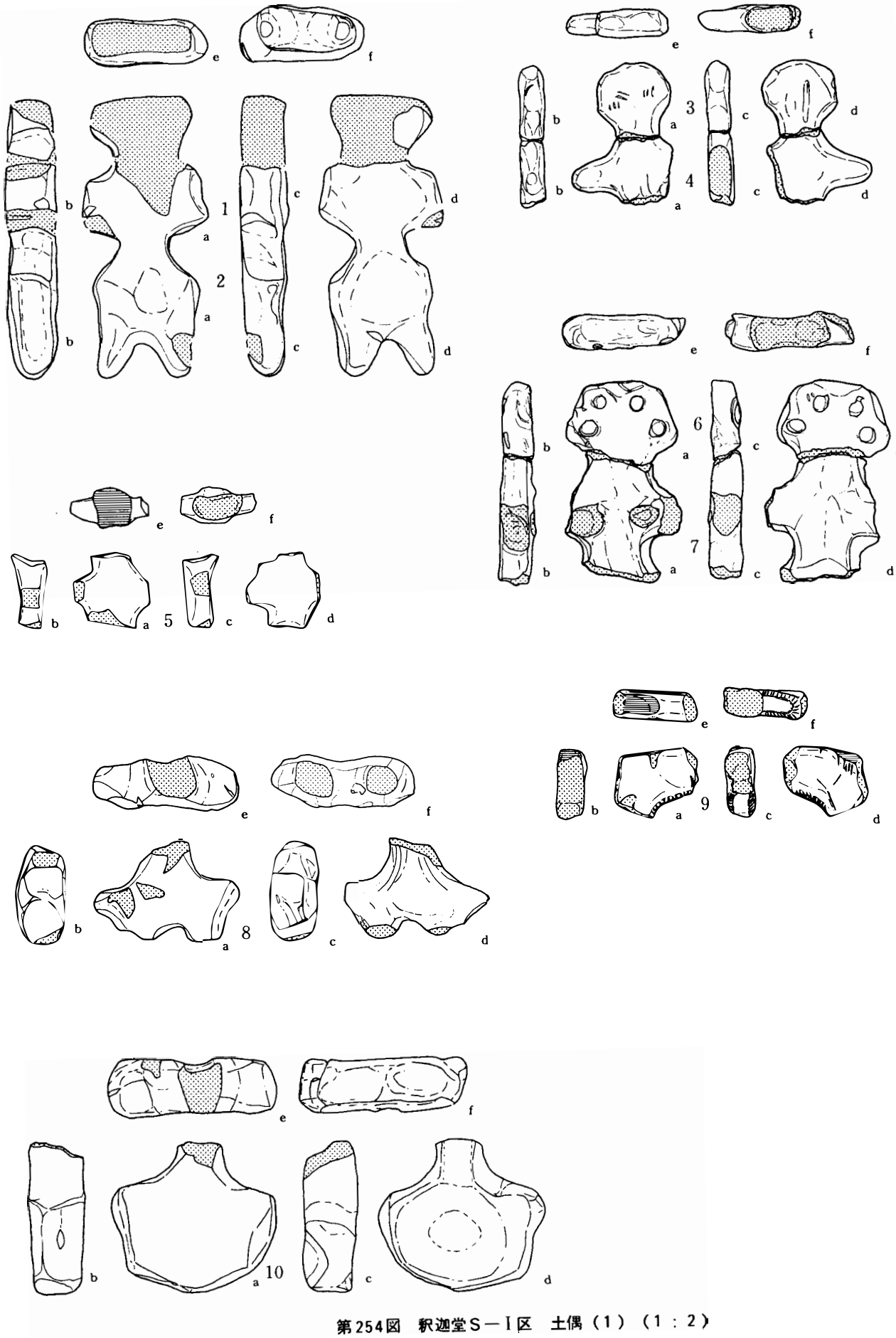
第253図　　土偶凡例

釈迦堂塚越北Ａ地区土偶一覧表

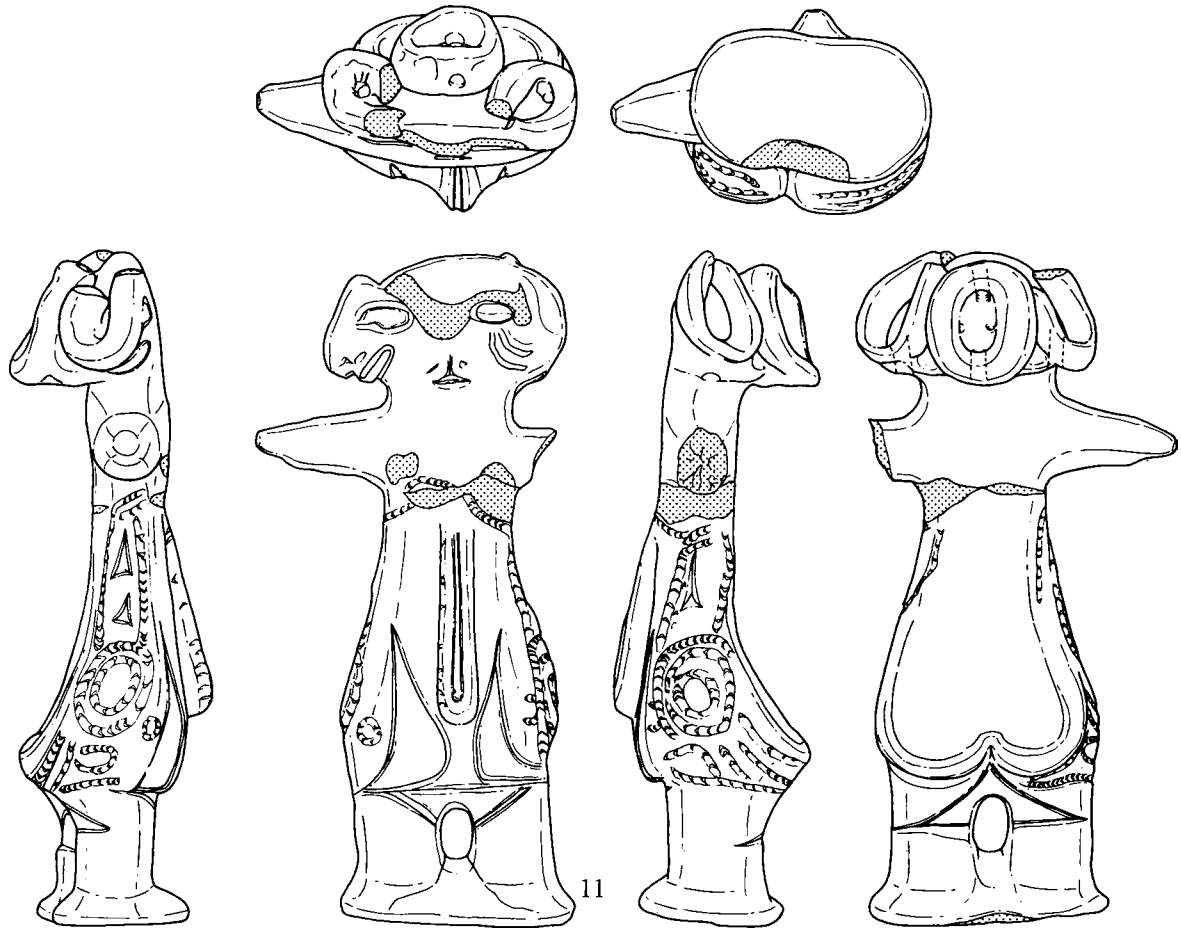
挿図No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
254図 1	ＳＫ－227	頭部	10.2×4.6×1.5	釈迦堂Ｚ３				
2	ＳＢ－05	下半身		釈迦堂Ｚ３				
3	ＳＢ－05	顔	5.3×3.8×1.0	釈迦堂Ｚ３		顔に爪形文	ヒトの爪か	
4	Ｍ－21	胴		釈迦堂Ｚ３				
5	Ｋ－16	胸	2.8×2.9×1.3	釈迦堂Ｚ３	頭部との接合面あり			
6	ＳＢ－05	頭部	7.4×4.2×1.0	釈迦堂Ｚ３		頭部に４孔　乳房欠損		
7	ＳＢ－27	胸部		釈迦堂Ｚ３				
8	不明	腰部	3.7×5.4×1.9	釈迦堂Ｚ３				
9	Ｋ－17	胸部	2.6×3.1×1.1	釈迦堂Ｚ３	頭部との接合面あり	脇下に爪形文	半截竹管	
10	ＳＢ－07	下半身	5.8×6.3×2.0	諸磯ｂ				
255図11	ＳＢ－31	全身	17.6×7.9×3.8	藤内		後頭部長抱き三叉文 脇腹部長抱き三叉文 正中線 下腹部対称弧刻文 逆三角形文 臀部下　三角形文 顔面にダブルハの字文	隆帯 三角押文 隆帯＋三角押文 沈線＋陰刻 沈線＋陰刻 沈線＋陰刻 沈線	後頭部貫通孔３
12	ＳＢ－10	頭部	6.7×8.3×5.6	藤内	頸部に木芯痕	右眉上にし字形文 口唇部に沈線文 左額部に三角形文 後頭部に丸と三角形文	沈線 沈線 沈線 隆帯、その隆帯の上に交互刻目でコの字文を施す。	
256図13	Ｐ－23	頭部	6.5×8.1×5.0	藤内	頸部に分割痕面あり	左眉上にし字形文 両頬に渦巻文	三角押文 三角押文 三角押文＋キャタピラ文	後頭部に貫通孔２

挿図No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
14	SB-04	頭部	5.8×5.4×3.9	藤内		左額上部に三角形文	沈線	赤彩あり 顔面把手か
15	Q-17	頭部	5.0×6.4×4.3	藤内		後頭部に渦巻き三叉文 後頭上部に連続玉抱き三叉文 後頭部沈線文	沈線+陰刻 彫刻文 沈線文	後頭部に貫通孔2
257図16	P-19 川	頭部	3.6×3.6×3.5	?	頸部に分割塊面あり	頸部、頭頂部、後頭部をめぐる隆帯に刻目	隆帯+刻目	
17	Q-17	頭部	8.4×5.2×4.6	藤内	木芯痕あり	頬にダブルハの字文 頸と瞳に円形刺突文 後頭部に円文 刻目隆帯文	沈線 円形竹管 隆帯文 隆帯+刻目	貫通孔1
18	SK-06	頭+胸	8.5×8.0×3.2	藤内	胸部下に分割塊面あり	頬にダブルハ字文 後頭部に変形した玉抱き三叉文	沈線 隆帯+刻目	
258図19	SB-47	頭部	5.0×6.0×4.5	藤内		後頭部に変形した玉抱き三叉文	隆帯	貫通孔2
20	K-16	頭部	2.6×2.6×2.5	中期初頭		頭頂部に変形沈線文	沈線	カッパ型土偶か?
21	SB 23	頭部	2.0×3.8×2.8	中期初頭		後頭部に沈線文		貫通孔1 カッパ型土偶か?
22	L-21	頭部	4.6×4.7×4.3	?	頸部下端に分割塊面あり			貫通孔1
23	J-16	頭部	3.6×5.8×3.2	?		頭頂部に三角形文	隆帯	
259図24	SB-04	頭部	2.8× 3 ×2.1	藤内	頸部に分割塊面あり また同所に木芯痕あり			
25	SB-31	頭部	4.0×3.2×2.0	藤内?	頸部に分割塊面あり また同所に木芯痕あり	後頭部に三角形文 正中線	隆帯 沈線	
26	W-25	頭部	4.0×3.4×3.9	藤内?	頸部に分割塊面あり また同所に木芯痕あり	後頭部に渦巻き三叉文	隆帯	
27	R-17	頭部	6.0×4.9×3.3	堀之内				後期の土偶
28	N-15	頭部	5.4×5.1×3.0	?		顔の表現なし		
260図29	SB-51	右腕+胴部	6.0×4.0×2.0	藤内	胸部上に分割塊面あり また同所に木芯痕あり 左脇腹部に分割塊面あり	正中線、対称弧刻文 両脇腹部に沈線文と半隆帯文、上に刻目	沈線	
30	SB-04	胴+腰+脚部	7.8×4.8×5.1	藤内		腕部に円形竹管文 正中線 腰部に円形竹管文と沈線 臀部下に菱形文	沈線	
31	SB-10	腹部	3.3×5.3×4.8	藤内	左下腹部に木芯痕あり	正中線、対称弧刻文 脇腹部に玉抱き三叉文	陰刻 陰刻	
32	M-17	腹部	3.4×3.4×2.0	藤内	腹部にネガティブな分割塊面あり	正中線 対称弧刻文	沈線 陰刻	
33	SB-01	腰+脚部	3.5×2.4×2.4	藤内	腰上部に木芯痕あり	脇腹部に三角文	三角押文	
261図34	SK 220	胴部	9.3×8.1×4.9	藤内	頸部との接合部と脚との接合部	低隆帯の正中線+幅狭キャタピラ文、対称弧刻文 脇腹に幅狭幅広キャタピラ文 玉抱き三叉文	沈線+陰刻 三叉文は陰刻	
35	I-21	胴部	9.2×8.2×4.2	藤内	胸部との接合部 脚部との接合部	低隆帯の正中線 対称弧刻文+逆三角文 脇腹部玉抱き三叉文	沈線+陰刻 三叉文は陰刻	
36	K 17	胴部	8.3×8.1×3.8	藤内	脚部との接合部に木芯痕	正中線 対称弧刻文 脇腹部に沈線文+刺突文 横臀部に三叉状陰刻文	沈線 波線+陰刻 波線+陰刻	
262図37	F-21	腕部	2.1×3.8×1.3	?				
38	P-24	腕部	1.4×3.3×1.2	?				
39	1号墳	腕部	3.0×1.8×1.6	?				
40	P-15	腕部	1.2×2.0×0.9	?				
41	R-16	腕部	4.4×5.1×2.4	藤内	頸部と接合部、同所に木芯痕あり	手を刻目で表出		
42	V-22	腕部	4.2×4.2×1.8	藤内		手を刻目で表出		
43	K-16	腕部	2.9×5.3×2.5	?		腕と手の間に沈線文 手のひらと手の刻目あり		
263図44	M-19	胸部	5 ×4.5×2.2	曽利	頸部との接合部に木芯痕	背中に爪形文	ヒトの爪であろう	
45	S-19、20	胸部	2.9×3.0×1.5	?				
46	Q-15	背部	4.3×2.6×2.2	新道～藤内	胴部との接合部にあり	背部に円形竹管文		黒駒の土偶に類似
47	N-16	胴部	4.3×5.2×3.5	藤内		正中線 脇腹部に三角押文と交互刺突文	隆帯文	

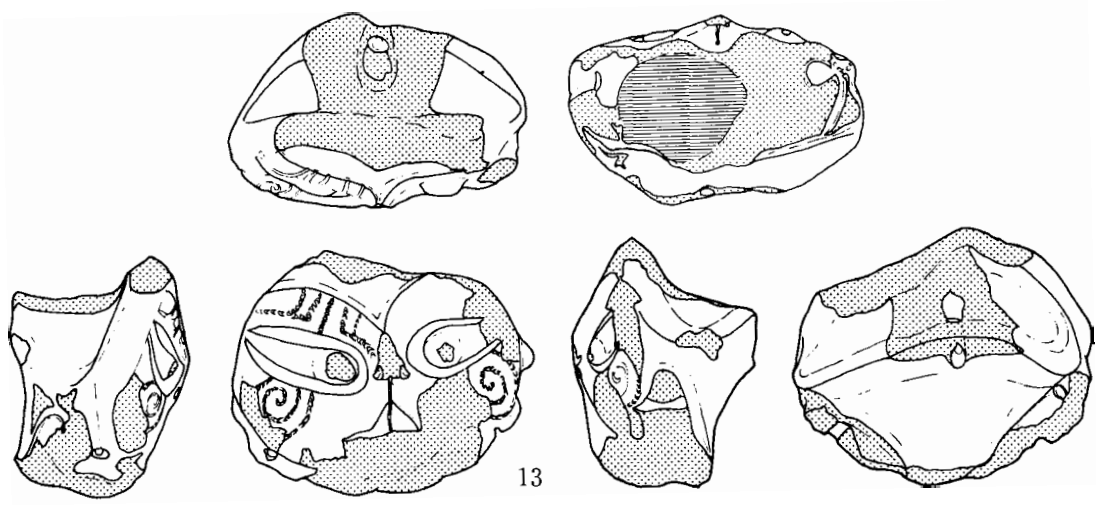
挿図No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
48	P 18	胴部	6.3×5.0×3.3	縄文	胴中央に木芯痕あり	脇腹部に三角押文		
264図49	SB-01	腎部	2.7×3.3×3.5	縄文	胴部との接合部	脇腹部に三角押文		
50	SB-29	腎部	5.9×4.8×3.1	縄文	胴部との接合部にネガティブな面を持つ	脇腹部に三角押文による長抱き三叉文を施す	三叉文は陰刻	
51	P 20	腎部	5.2×3.5×3.2	縄文		脇腹部に三角押文による長抱き三叉文を施す	三叉文は陰刻	
52	SB-01 No.20	腎部	5.2×4.2×4.2	縄文	右腎部との接合部面に見られる	脇腹部に三角押文		
265図53	SB-04	胴部	3.4×3.2×2.9	縄文	胴中央に木芯痕あり	正中線 脇腹部に三角押文	隆帯	
54	N-19 No.37	胴部	4.4×3.0×5.4	縄文		脇腹に三角押文と幅狭キャタピラ文		
55	SB-04	胴部	3.9×3.2×2.7	縄文	胴中央に木芯痕あり	脇腹に三角押文		
56	P-15	腹部	4.8×2.4×3.4	縄文		対称弧刻文 脇腹に渦巻き文と長抱き三叉文	沈線+陰刻 三角押文と三叉文は陰刻	
266図57	SB-51	胴部	5.9×4.0×4.0	縄文	腕部との接合部にあり	正中線、対称弧刻文、円文 脇腹の三角文	沈線 沈線	鳴る土偶
58	SB 31 V 22	胴部	4.6×4.0×4.0	縄文				鳴る土偶
59	P-15	胴部	3.5×2.6×2.3					
60	SB-04	胴部	2.6×2.8×2.2	?	胴中央部に木芯痕あり			
61	SB-47	胴部	3.0×3.4×1.9	?	腕部との接合部にあり			
267図62	R-23	腎部	5.1×3.2×4.0	?				
63	SB-10	脚部	3.3×4.0×4.6	縄文中～井戸尻		彫刻的手法による連続コの字文		
64	I-17	脚部	4.9×3.3×3.8	?	腎部との接合部にあり	三角押文		
65	Q 18	脚部	4.9×4.8×5.9	縄文	腎部との接合部にあり	接合部に刻目文		
268図66	SB-01	脚部	6.0×3.4×5.8	縄文	腎部との接合部にあり	接合部をめぐる角押文		
67	SB 31 V-22	脚部	4.9×3.6×5.1	縄文	腎部との接合部にあり	脚部付根部に三角押文による文様を施す		
68	W 21	脚部	3.1×3.2×2.0	縄文	脚部と足部の接合面			
69	J-17	足部	2.7×3.6×2.4	縄文	足部中央に木芯痕あり			
70	S 21	脚部	3.9×2.2×1.9	縄文				
71	N 18	脚部	1.8×1.9×2.4	縄文				
269図72	SB 04	脚部	2.1×2.5×2.5	縄文				
73	SB 51	脚部	5.8×4.1×4.1	縄文				
74	V-22	脚部	3.6×2.9×2.7	縄文				
75	SB 24	足部	2.6×4.7×3.2	縄文				
270図76	Y-15	足部	3.3×4.1×5.0	縄文				
77	SB-13	足部	2.9×5.0×5.7	縄文	左足部との接合部			
78	R-18	足部	5.4×5.4×7.4	縄文				

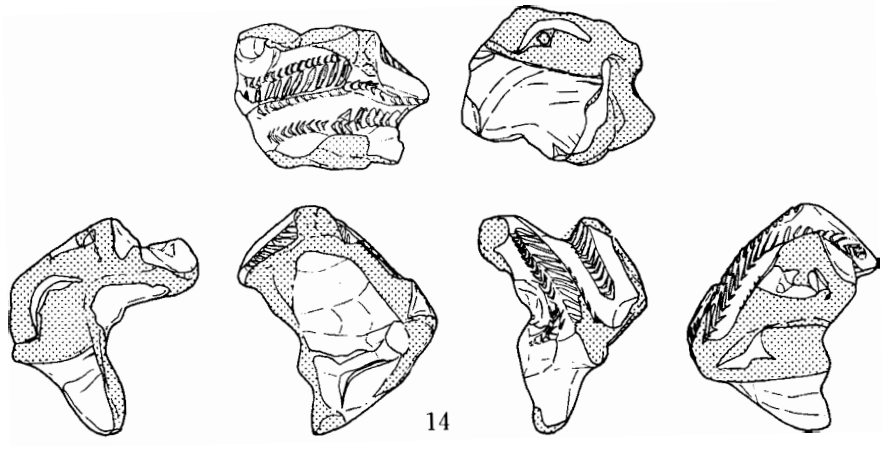


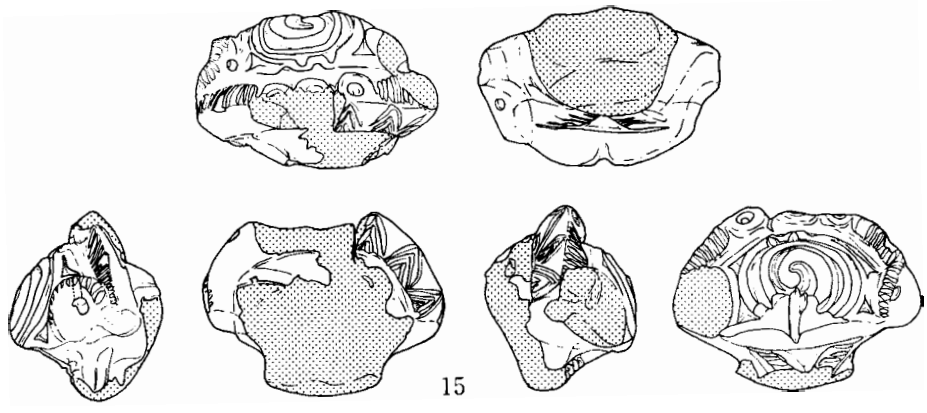
第254図　釈迦堂S－Ⅰ区　土偶（1）（1：2）



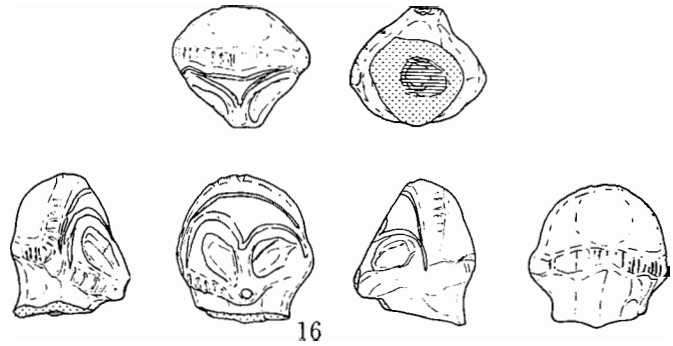
第255図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（２）（１：２）

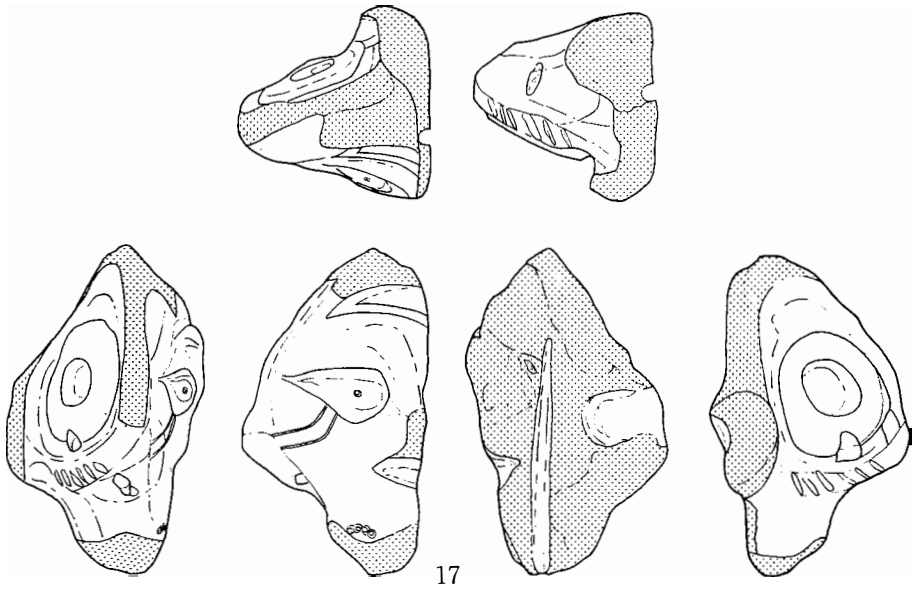


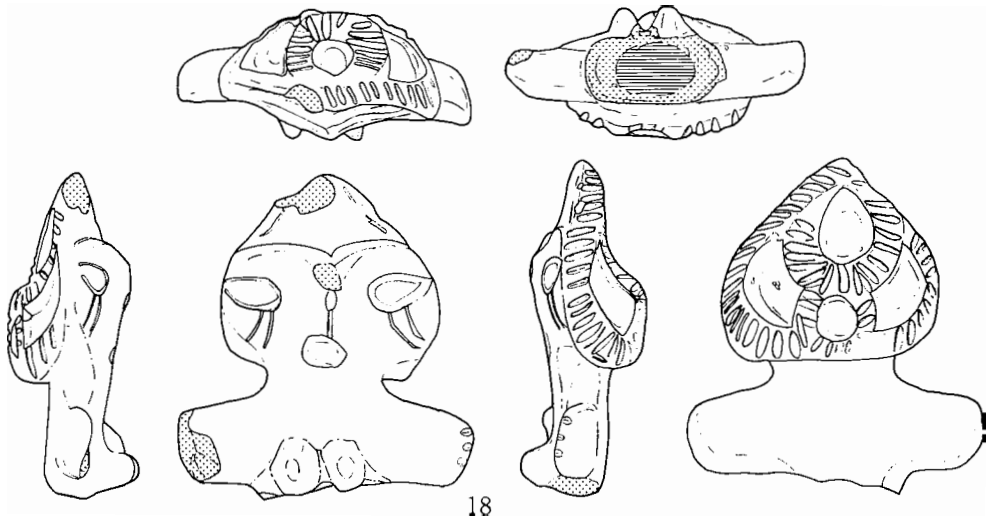




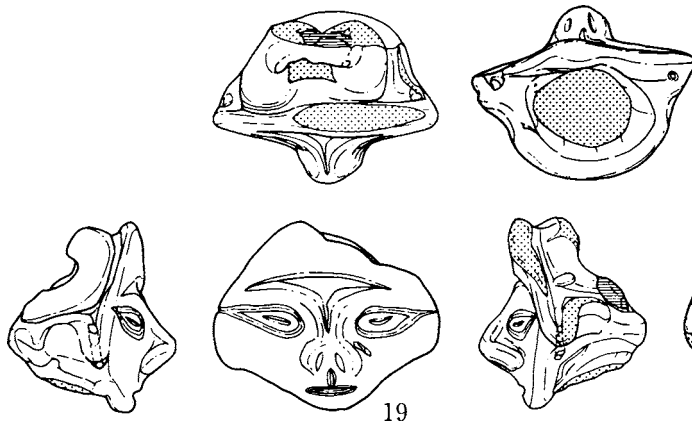
第256図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（３）（１：２）

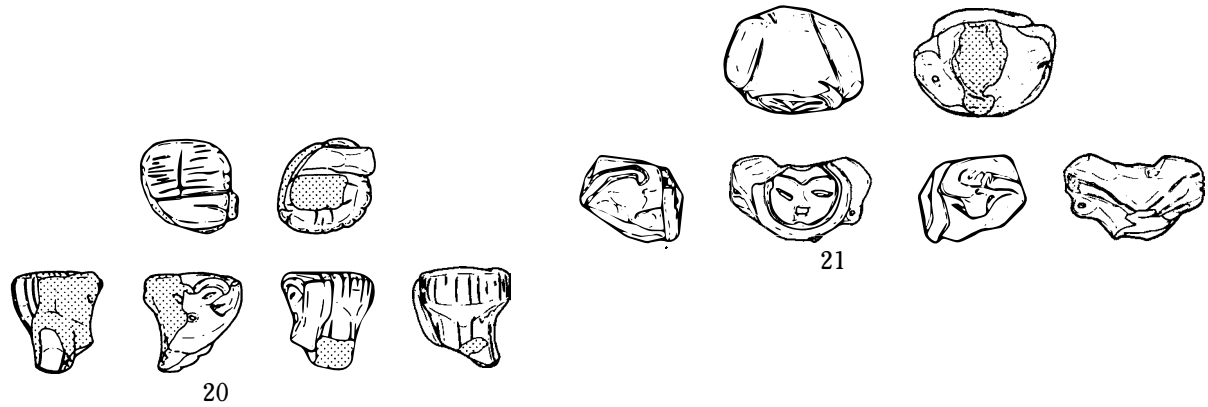


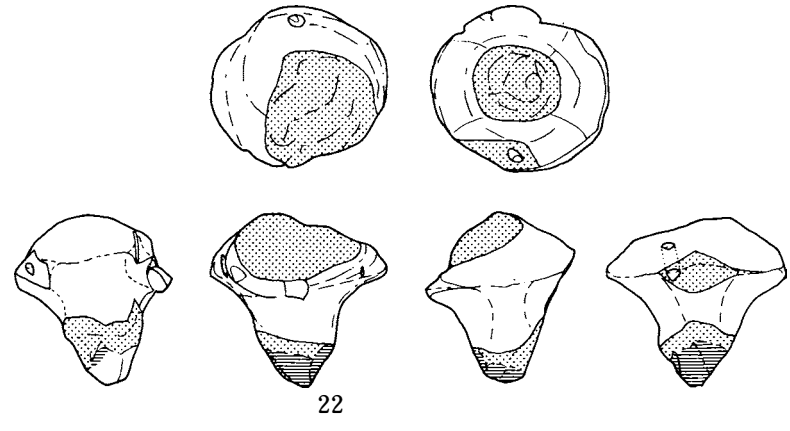


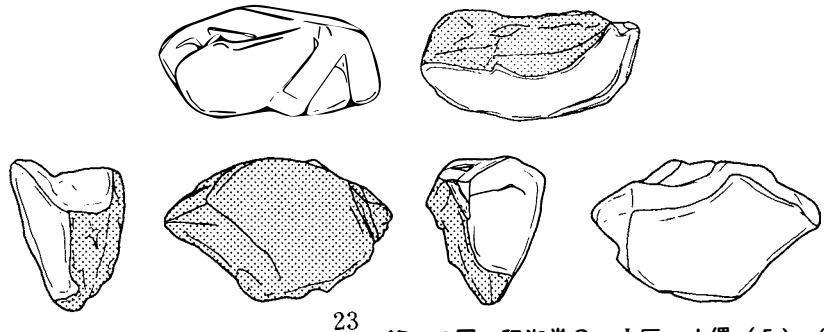


第257図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（４）（１：２）

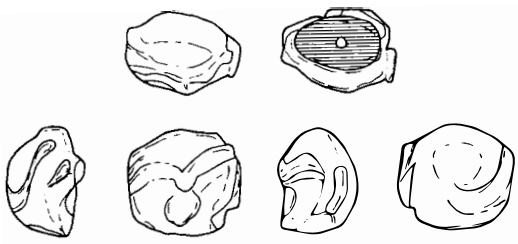




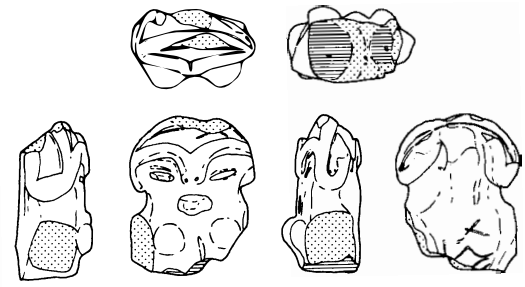




第258図　釈迦堂S－Ⅰ区　土偶（5）（1：2）

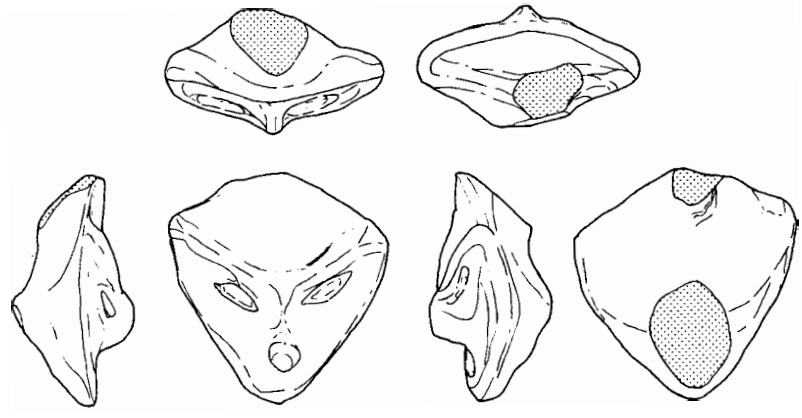


24

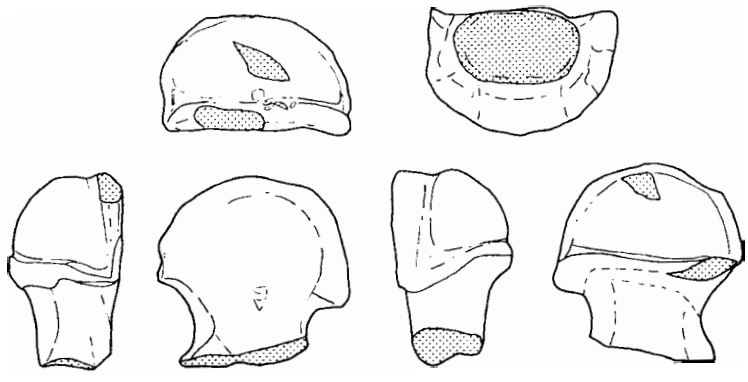


25

26

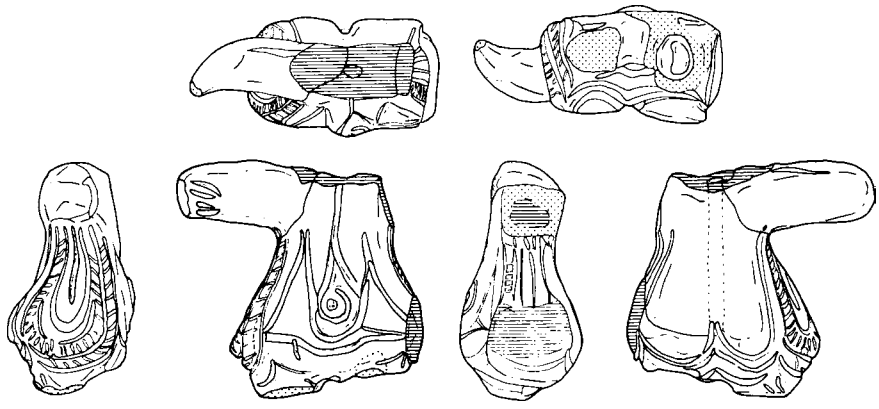


27

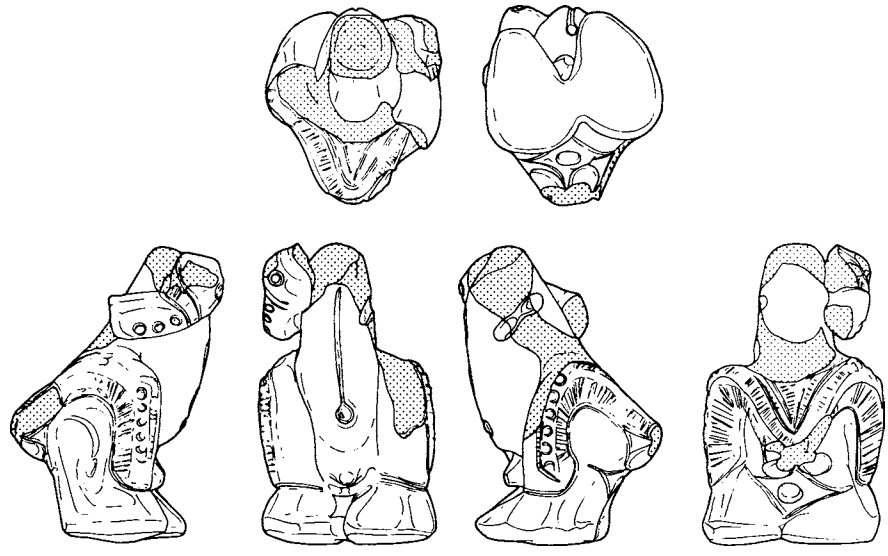


28

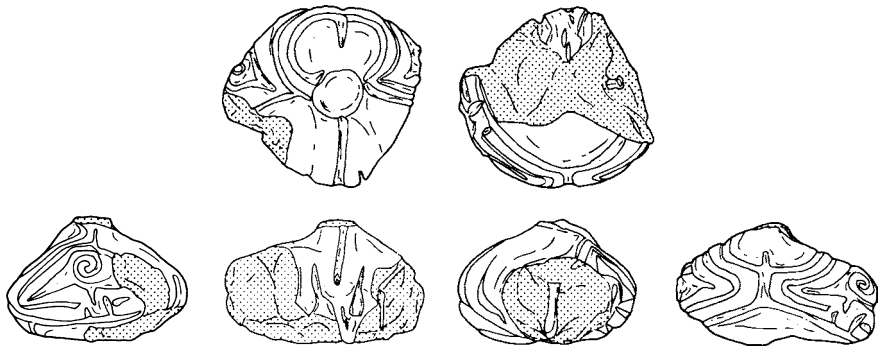
第259図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（６）（１：２）



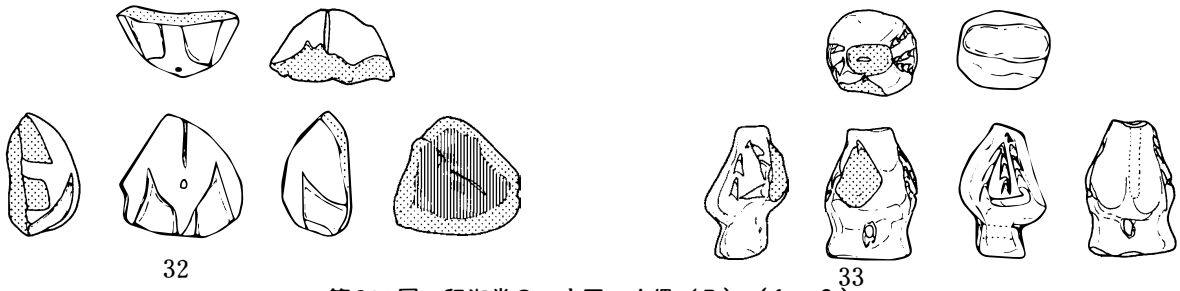
29



30



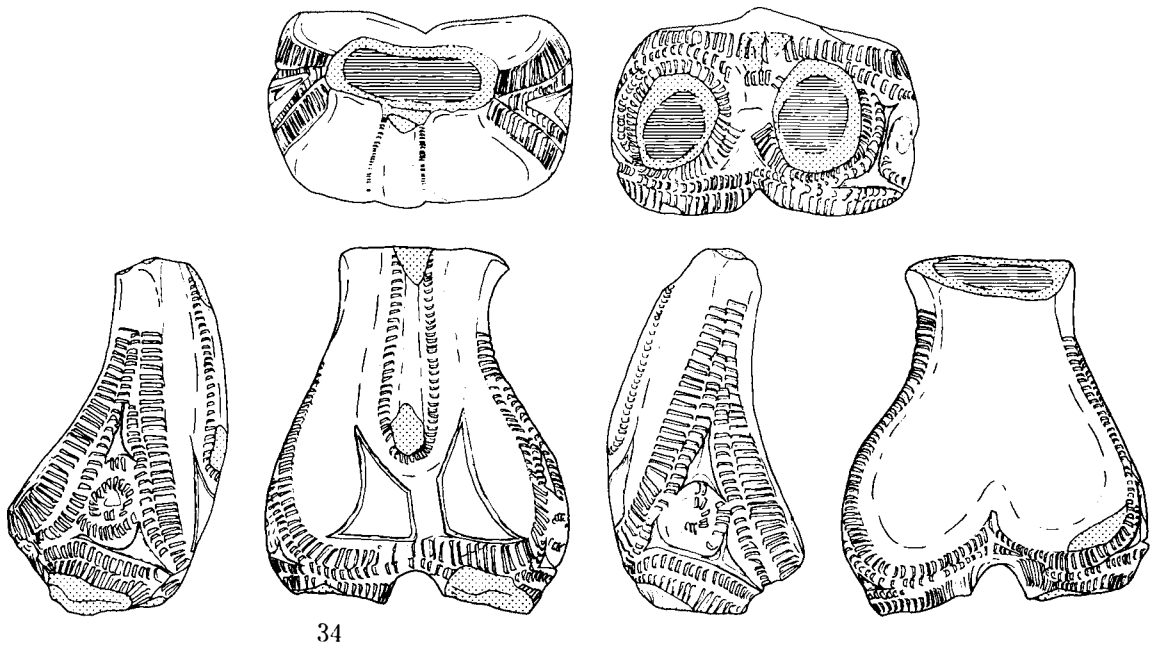
31



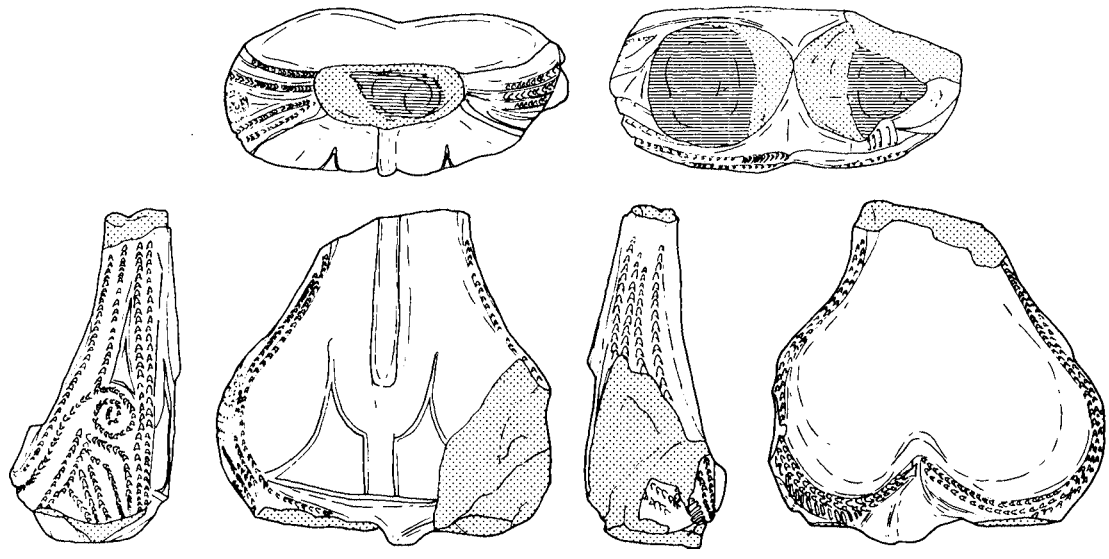
32

33

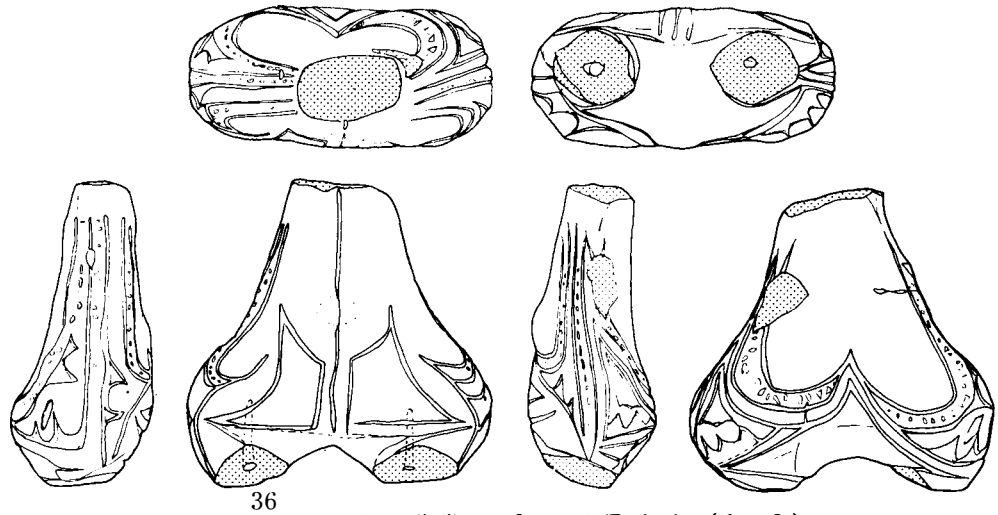
第260図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（７）（１：２）



34

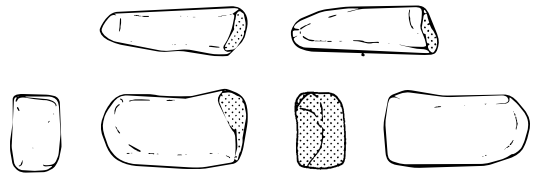


35

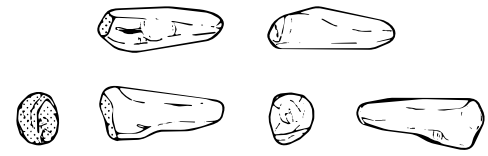


36

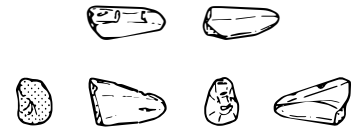
第261図　釈迦堂S－Ⅰ区　土偶（8）（1：2）



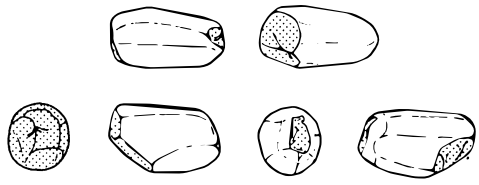
37



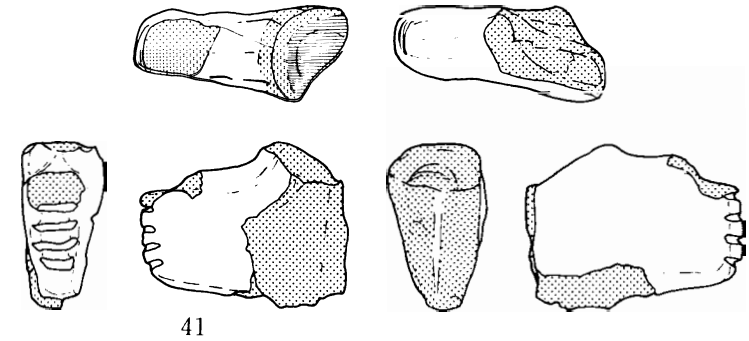
38



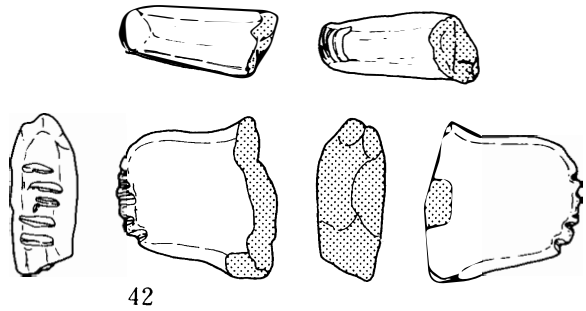
40



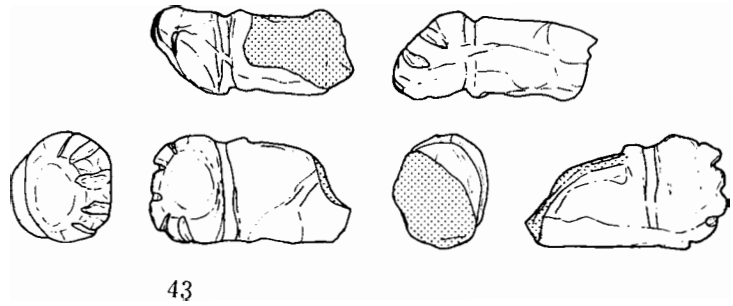
39



41

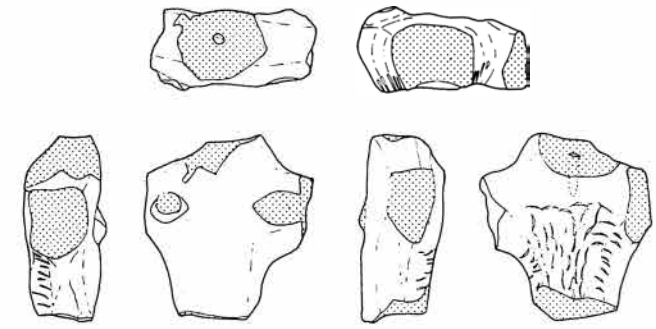


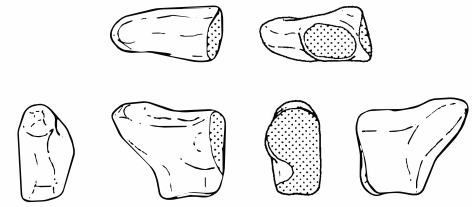
42

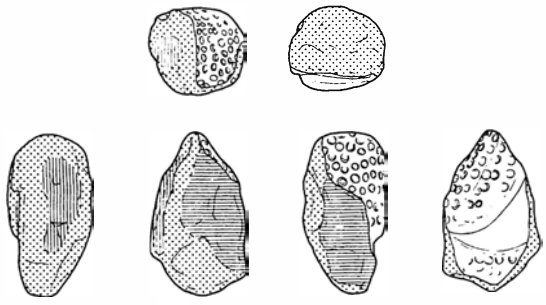


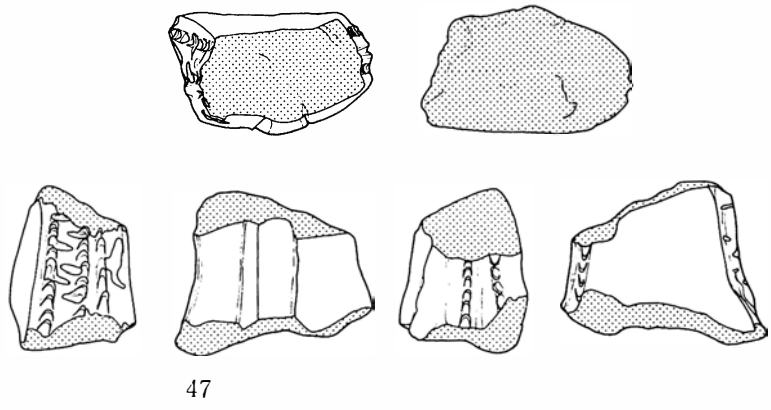
43

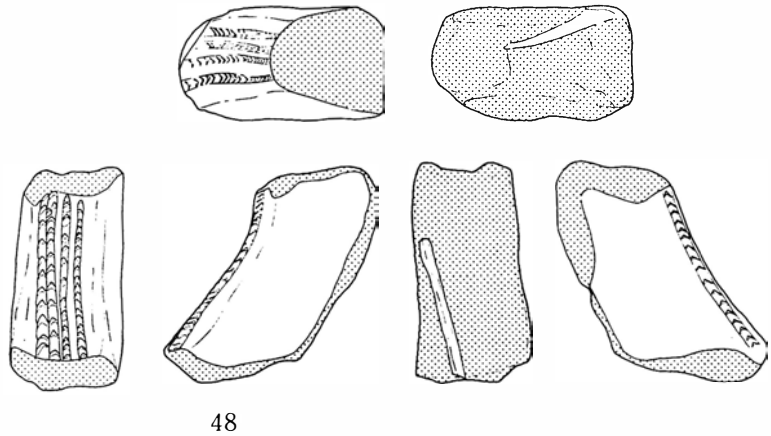
第262図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（９）（１：２）



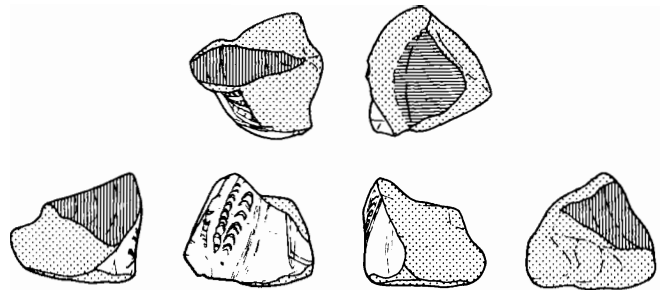




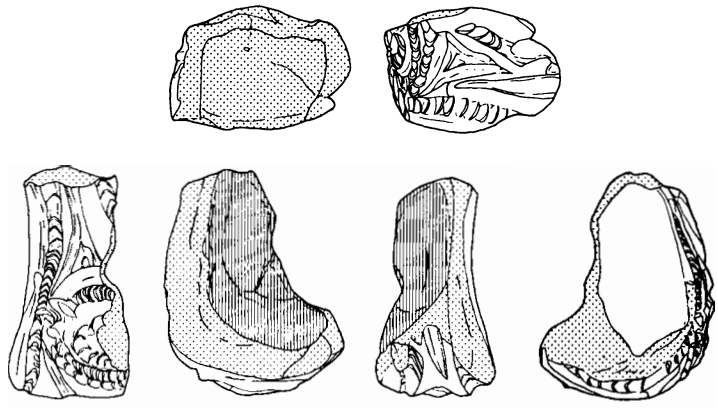




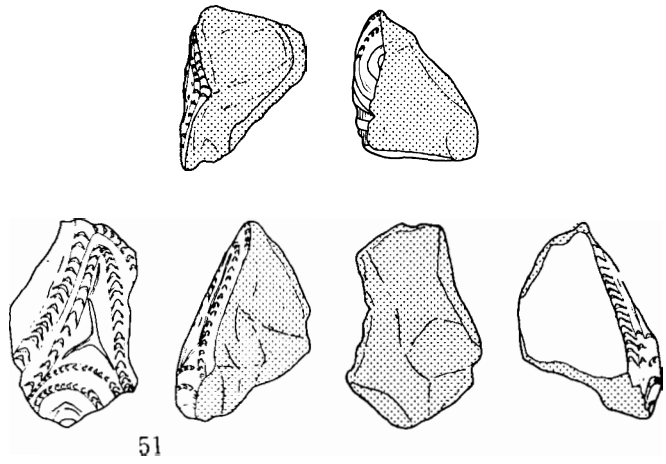
第263図　釈迦堂S－Ⅰ区　土偶（10）（1：2）



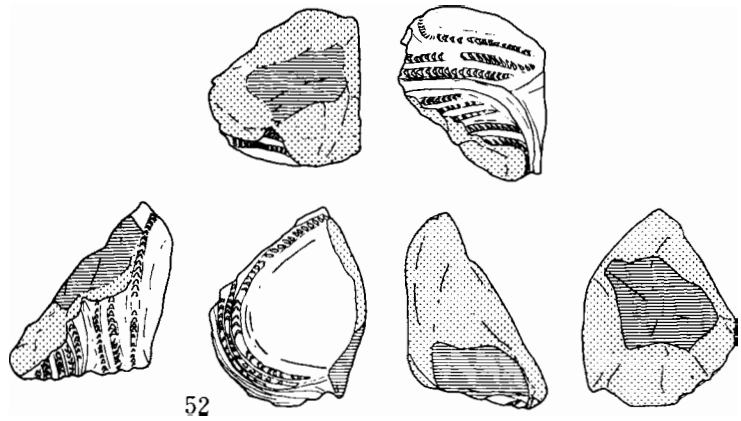
49



50

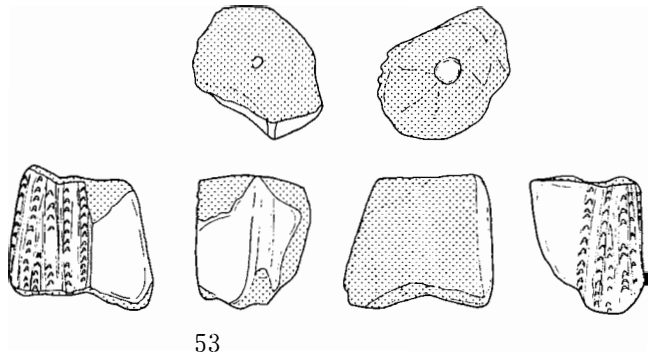


51

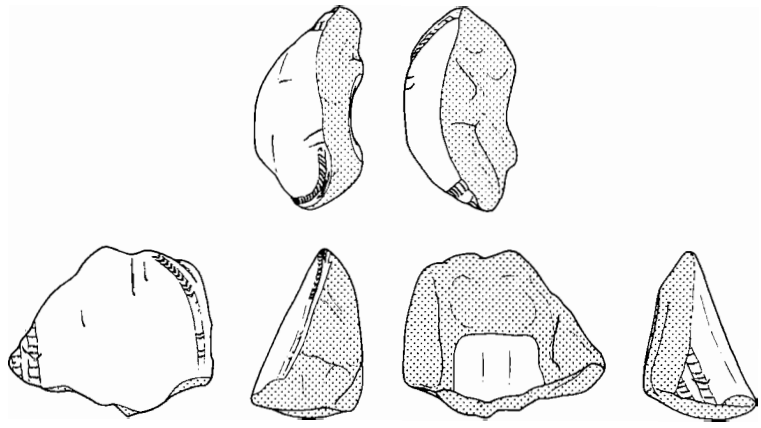


52

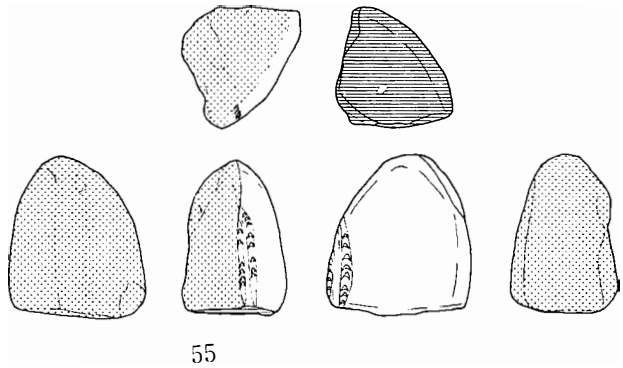
第264図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（11）（１：２）



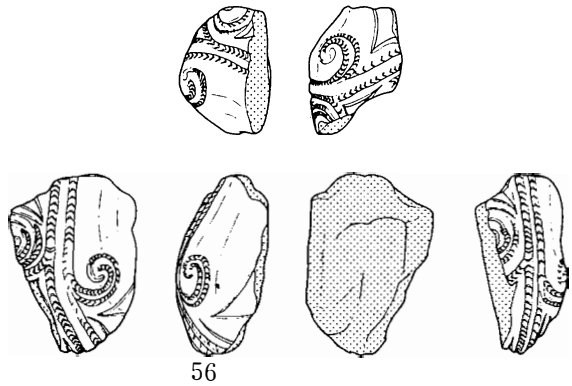
53



54

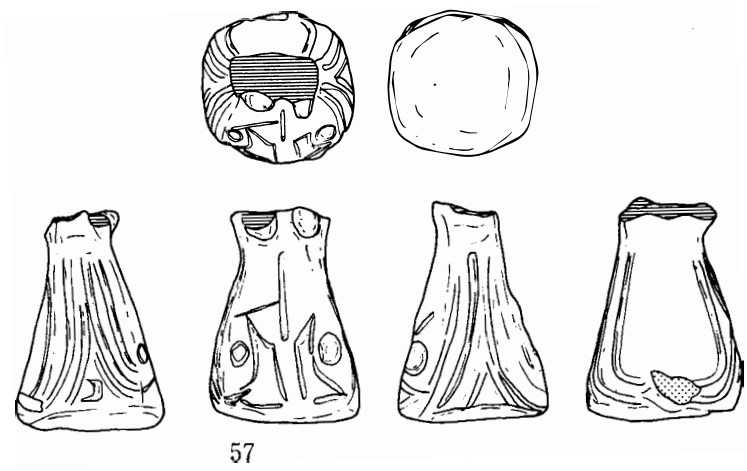


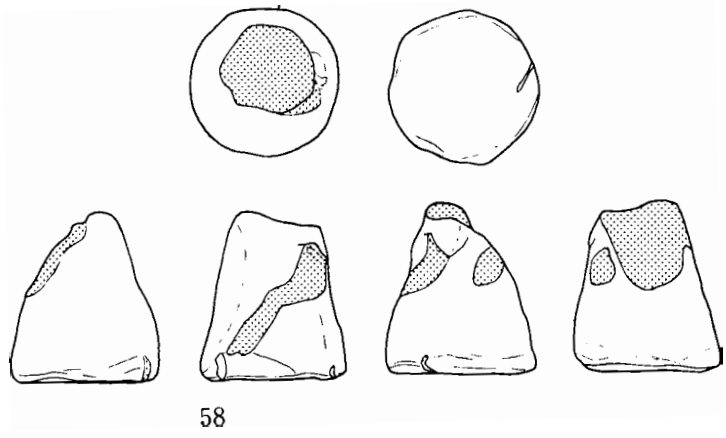
55

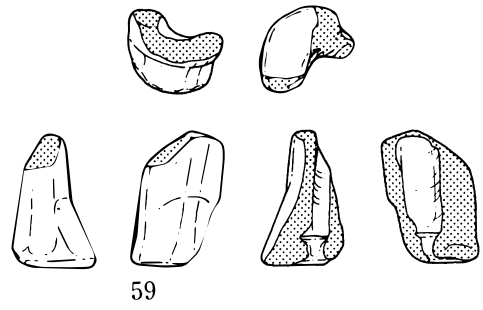


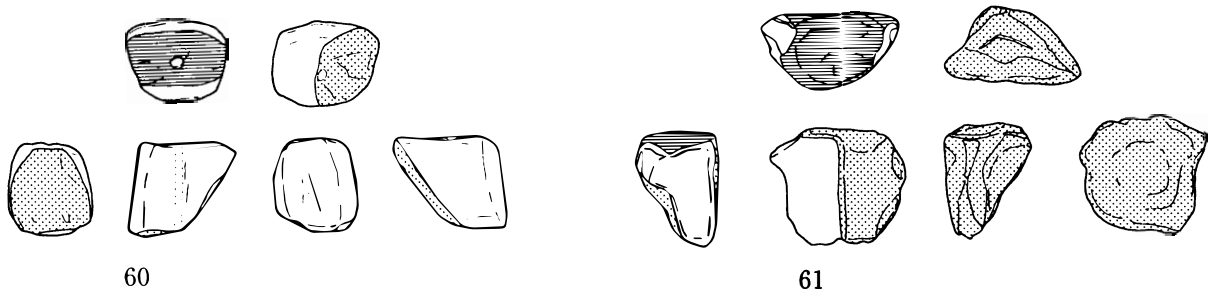
56

第265図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（12）（1 ： 2）

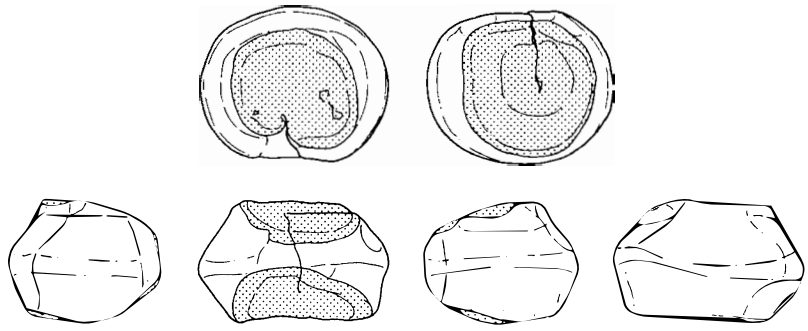




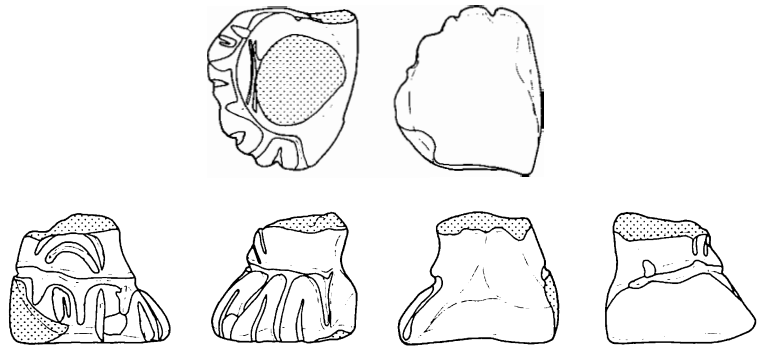




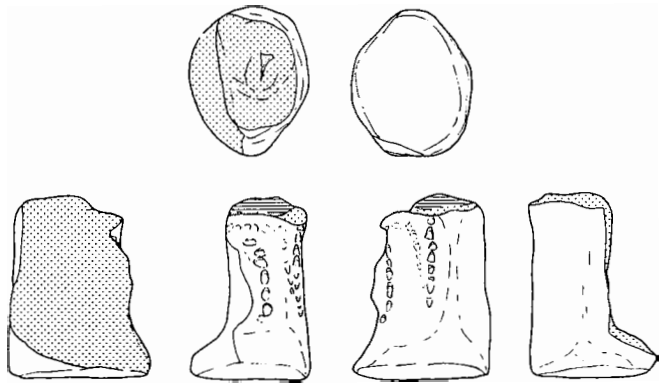
第266図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（13）（１：２）



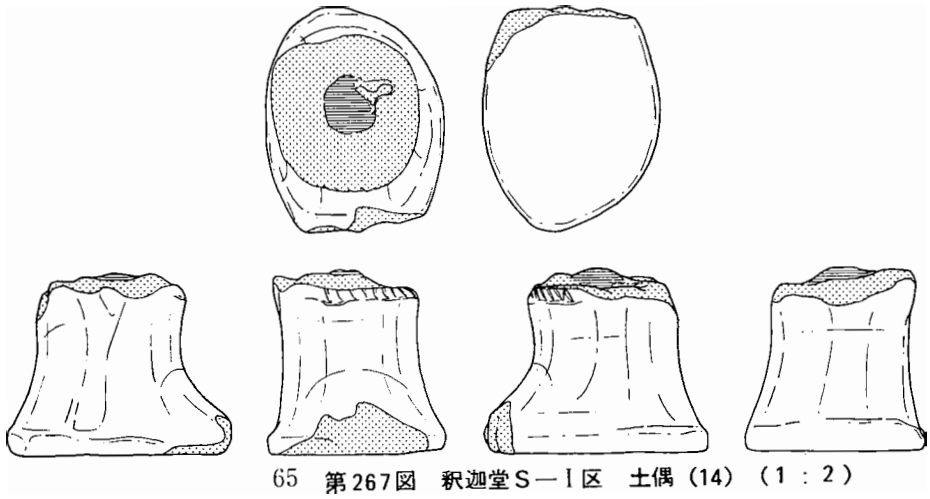
62



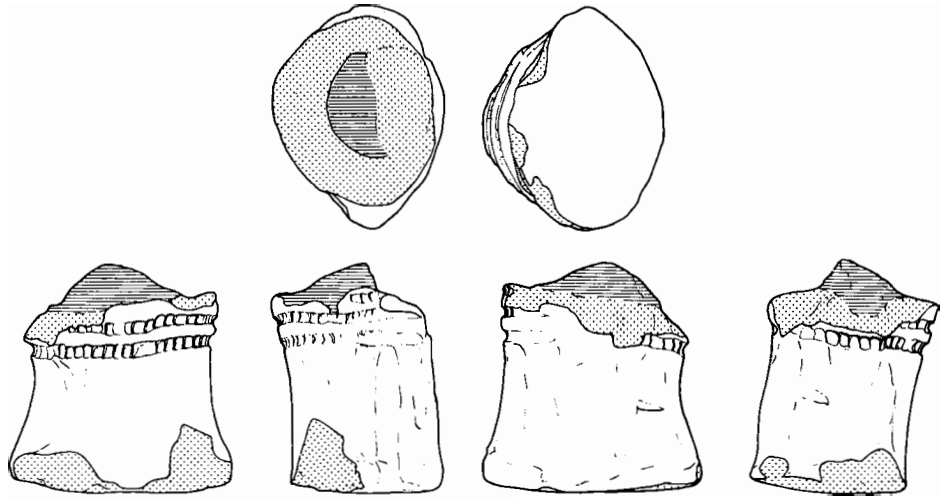
63



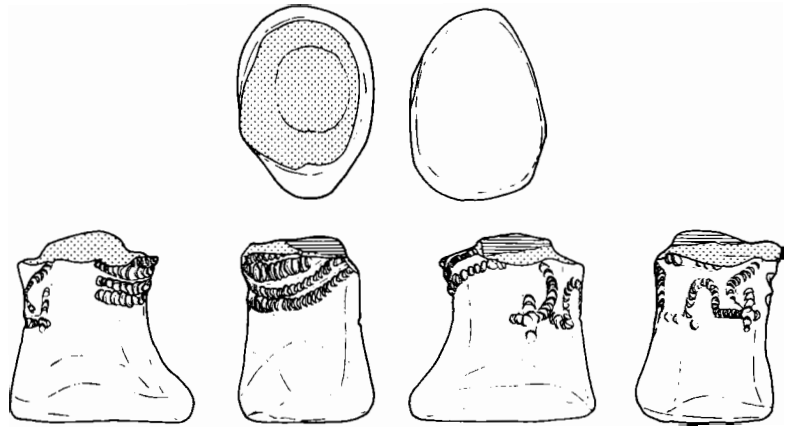
64



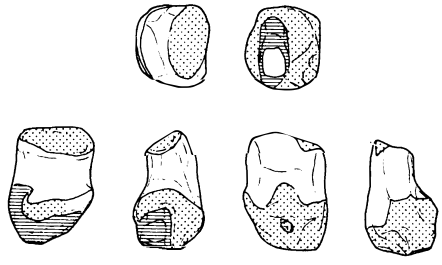
65　第267図　釈迦堂S－Ⅰ区　土偶（14）（1：2）



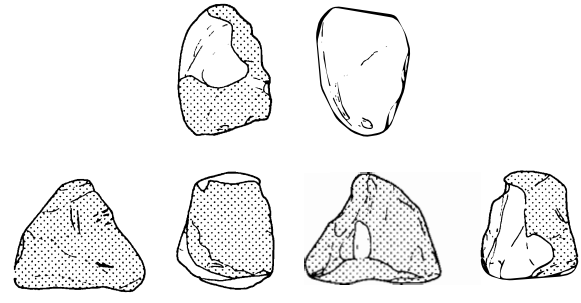
66



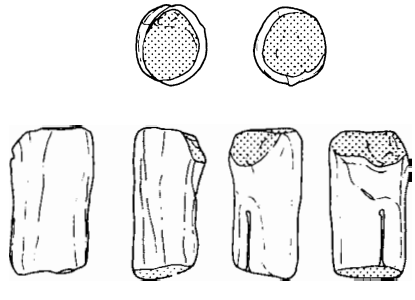
67



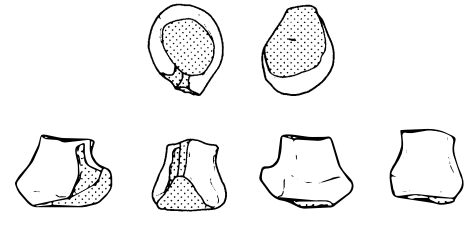
68



69

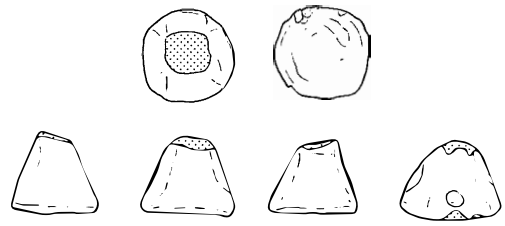


70

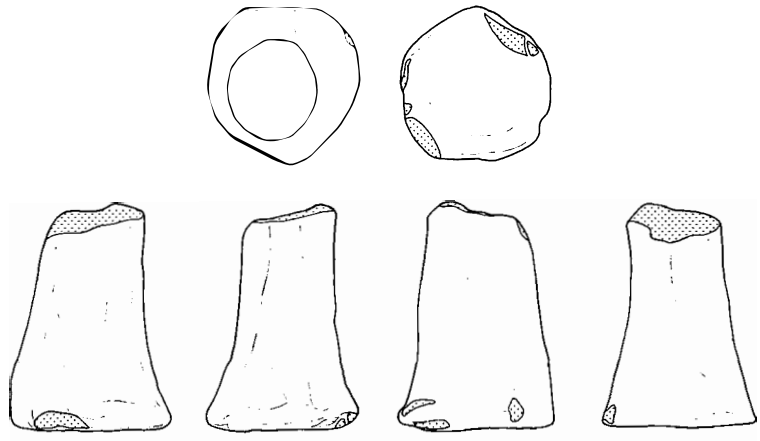


71

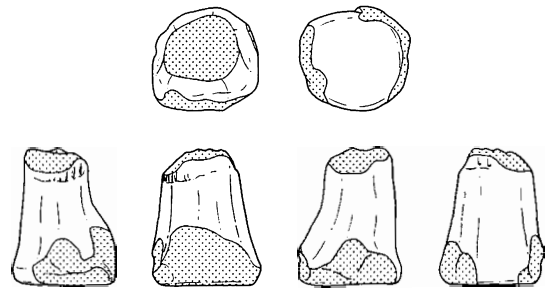
第268図　釈迦堂S－Ⅰ区　土偶（15）（1：2）



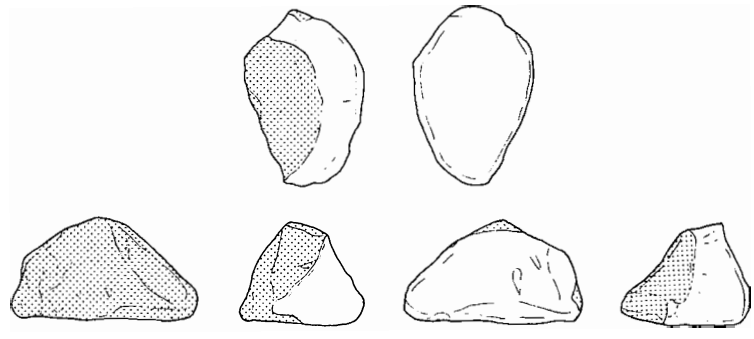
72



73

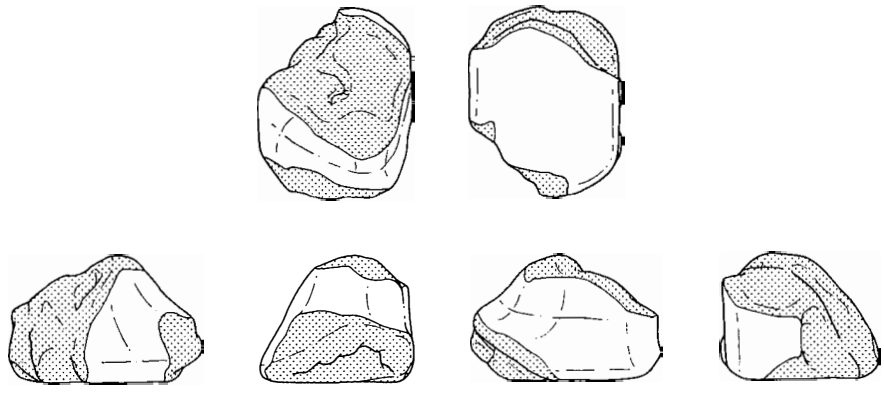


74

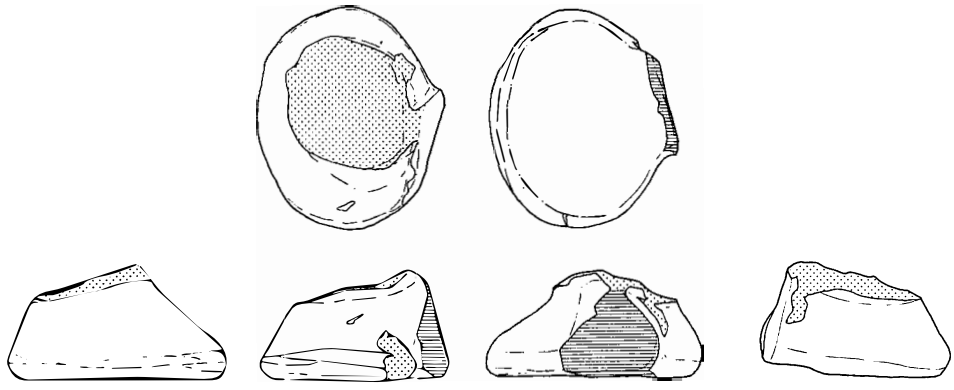


75

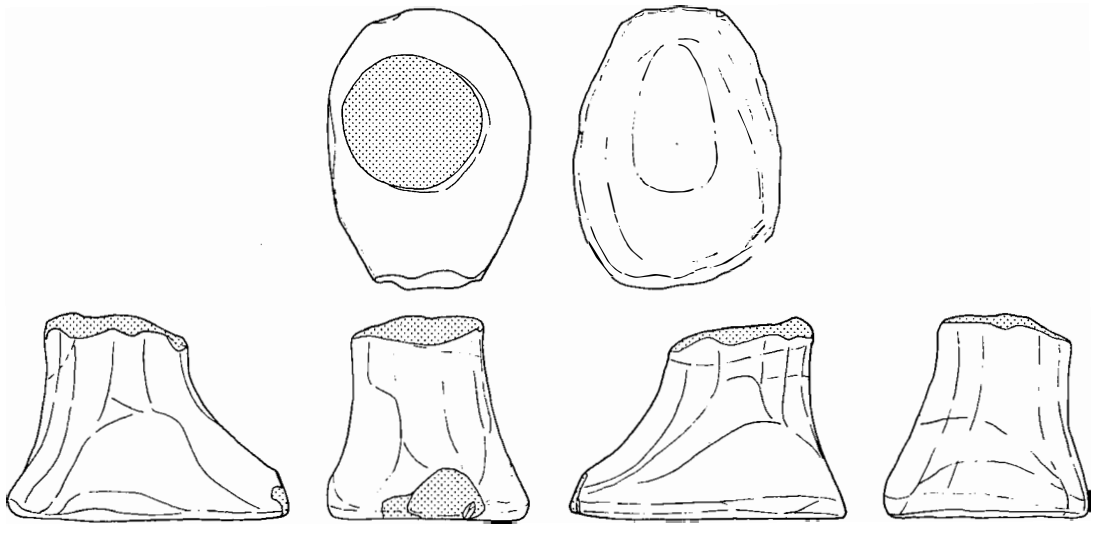
第269図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（16）（1 : 2）



76

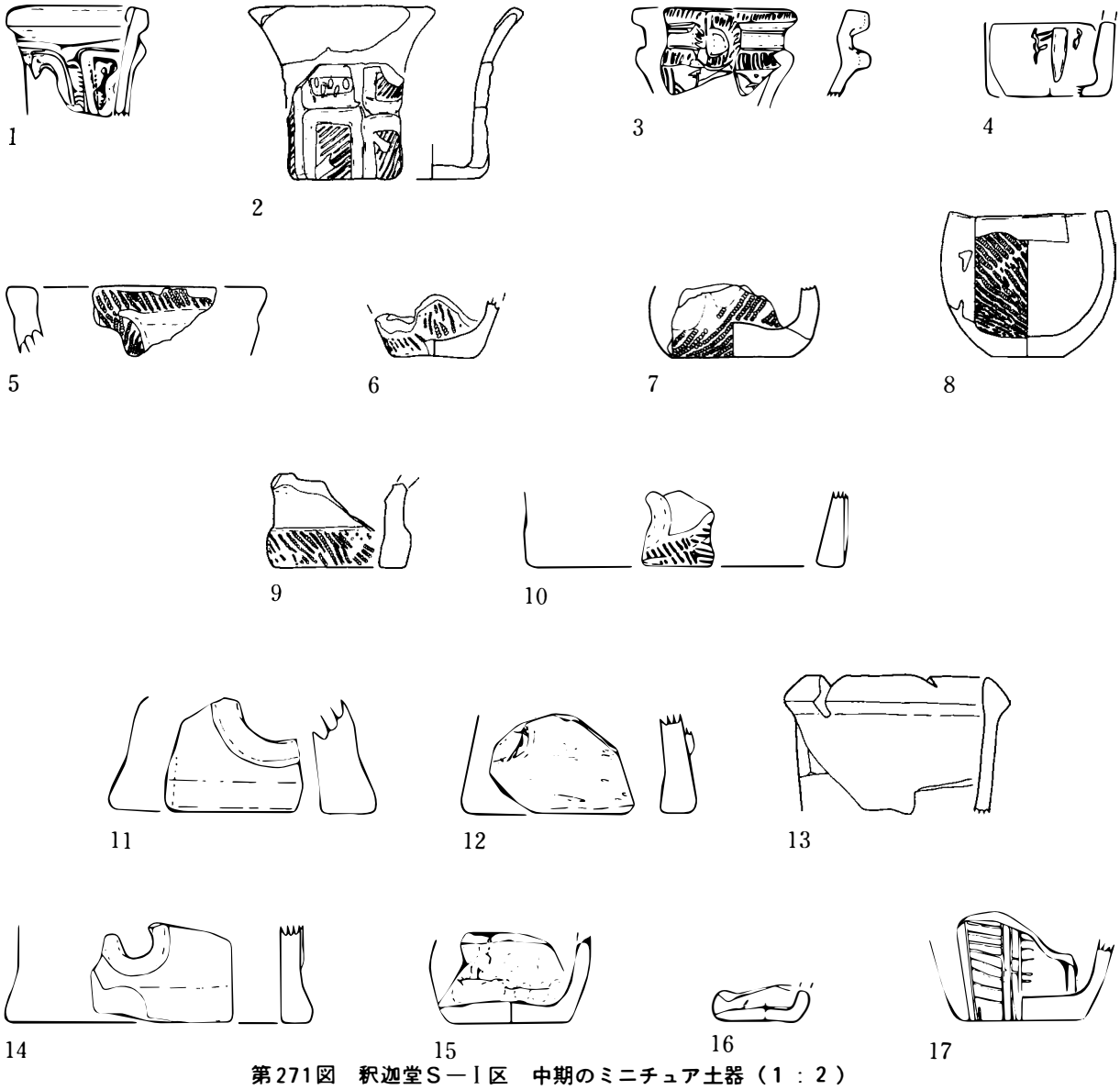


77



78

第270図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土偶（17）（１：２）



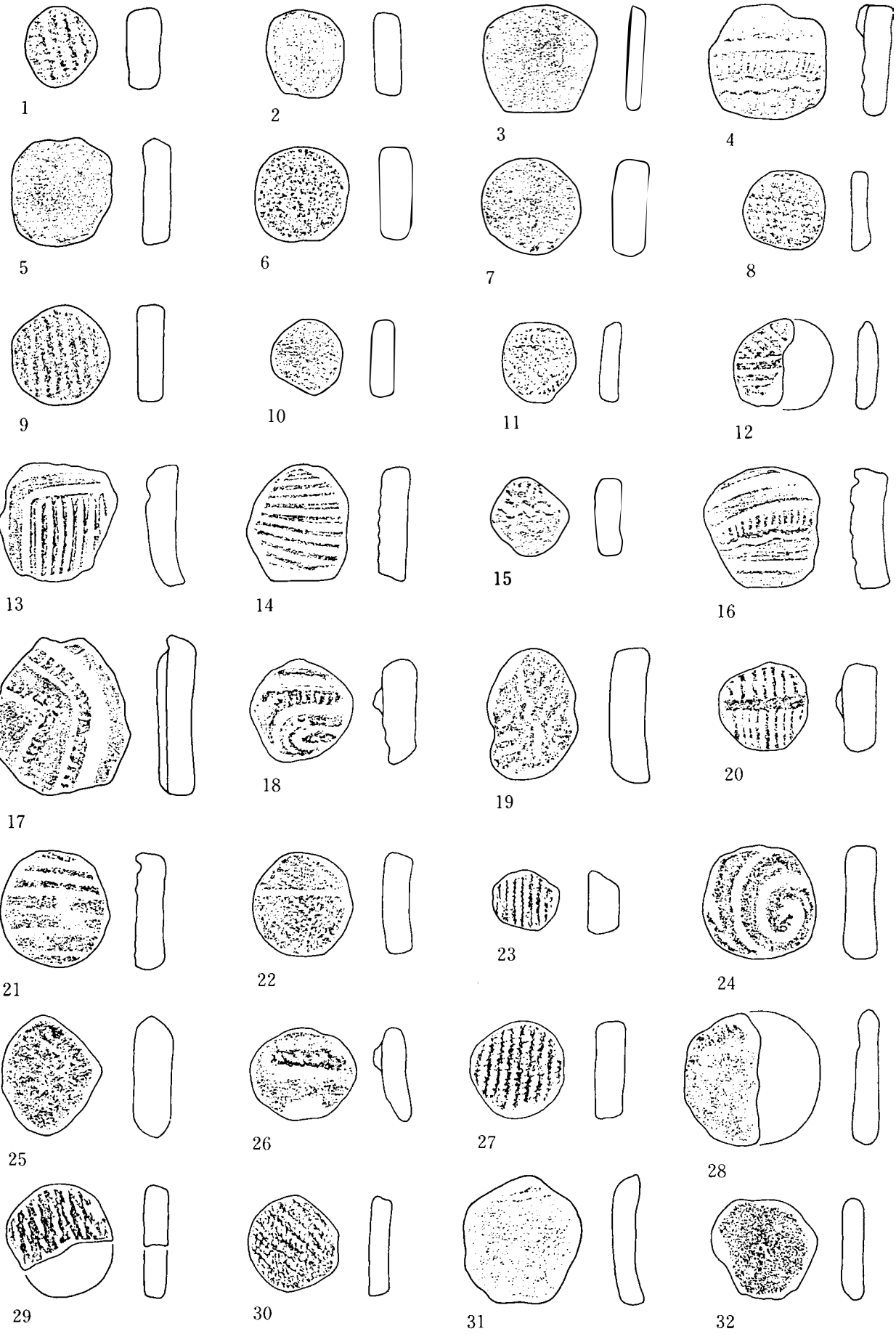
第271図　釈迦堂S－Ⅰ区　中期のミニチュア土器（1：2）

ミニチュア

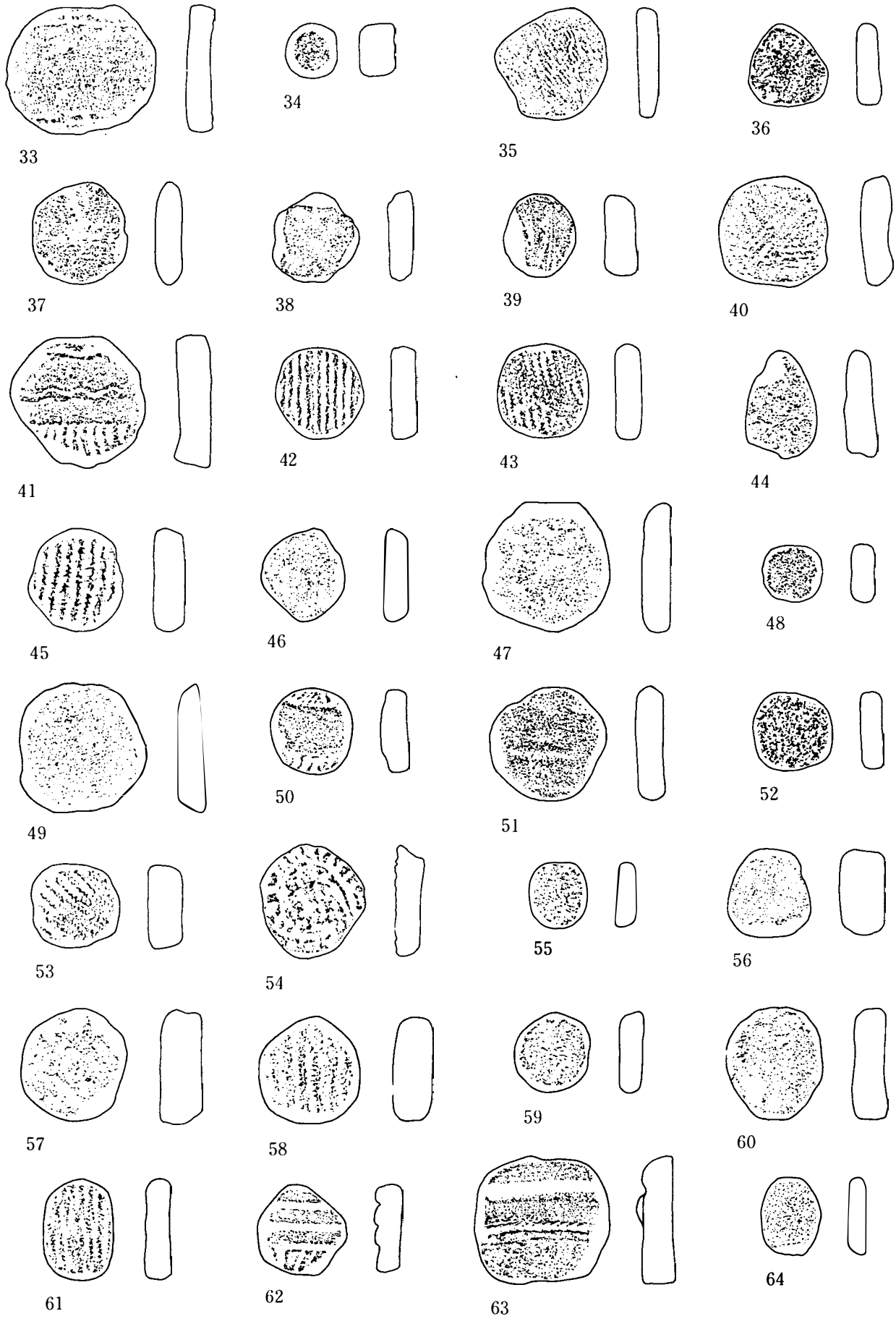
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量	備考
	271	1	S 17		区画文土器のミニチュア			
		2	Q 18		区画文土器のミニチュア			
		3	Q 18		区画文土器のミニチュア			
		4	P 15		いわゆるゲジゲジ文か？			
		5	V－22		組文帯による抽象文			
		6	P－25		組文			
		7	W 19		組文			
		8	X－25　No.2		組文			
		9	P 15		全形不明の脚			
		10	X－24		全形不明の脚			
		11	V－21		全形不明の脚			
		12	P－15		全形不明の脚			
		13	U－22　R－19		無文土器で断面三角形の口縁			
		14	Q－15　No.16		全器形不明の脚			
		15	S B－40		指頭圧痕を残す底部			
		16	Q－15					
		17	J－17		区画文土器のミニチュア			

土製円盤一覧表

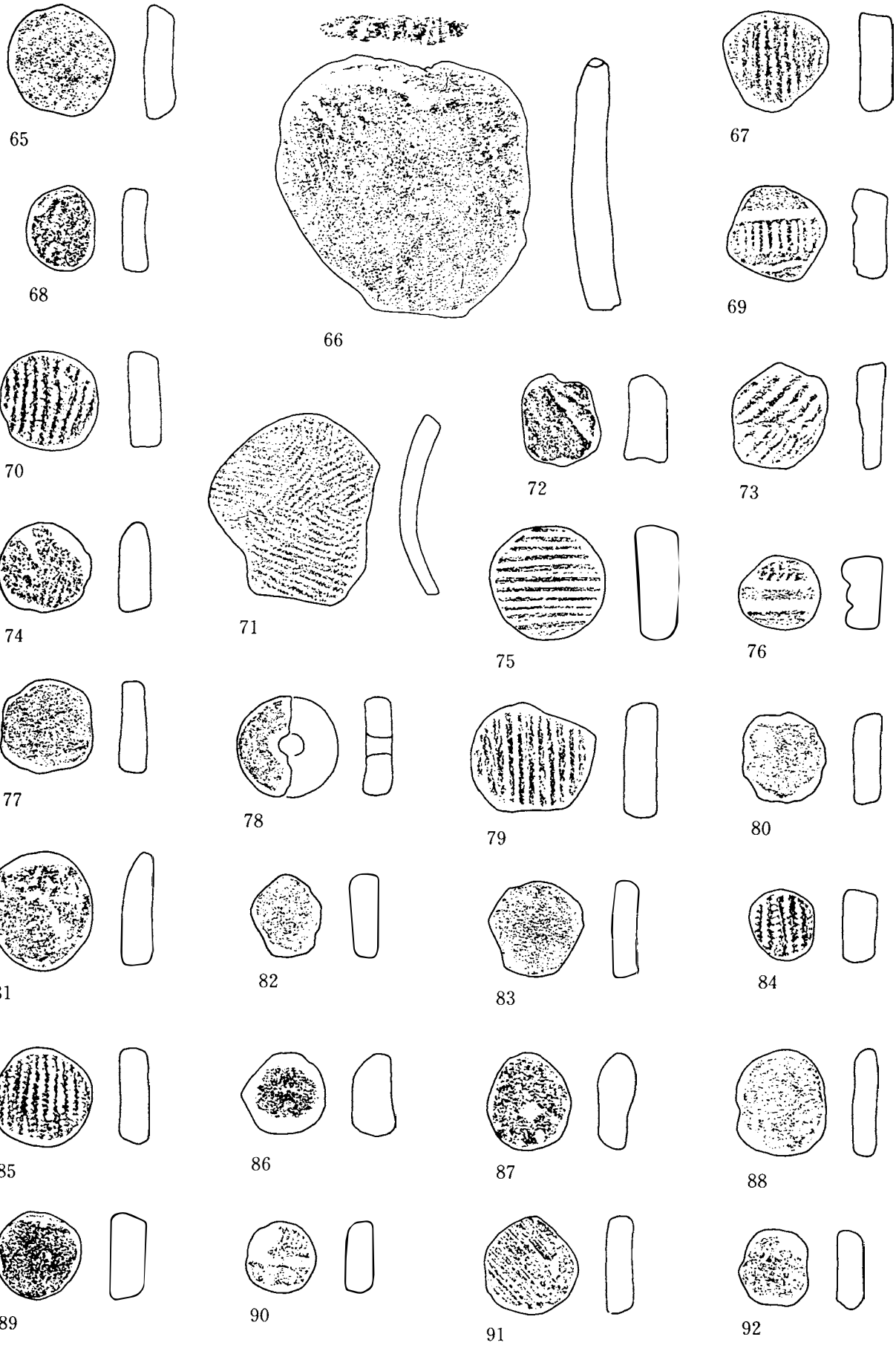
番号	出土地	最大径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	土器片の時期	備考
1	H－21	2.8	1.2	12	中期	周縁がよく擦られている
2	J－16	3.5	0.9	20	後期	
3	J－17	4.4	0.8	18	後期	周縁がよく擦られている
4	J－19	4.7	0.9	25	中期（藤内式）	
5	J－22	4.2	1.0	20	中期	
6	J－22	3.6	1.3	18	後期	磨滅
7	K－17	3.6	1.3	20	中期	周縁がよく擦られている
8	K－18	3.1	0.7	10	前期	
9	K－18	3.6	0.9	17	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
10	K－18	2.7	0.9	8	中期	周縁がよく擦られている
11	K－19	2.9	0.7	10	前期（諸磯a式）	周縁がよく擦られている
12	K－19	3.5	0.8	7	前期（諸磯c式）	半欠、周縁がよく擦られている
13	K－19	4.8	1.0	25	中期（藤内式）	
14	K－19	4.4	1.1	25	中期（藤内式）	
15	K－19	2.9	1.0	10	中期（藤内式）	
16	K－19	4.6	1.2	30	中期（藤内式）	
17	K－19	5.8	1.0	40	中期（藤内式）	周縁は荒い打ち欠き
18	K－19	3.7	1.2	20	中期（藤内式）	
19	K－19	4.7	1.3	27	中期（藤内式）	
20	L－16	3.2	1.2	18	中期（藤内式）	
21	L－16	4.4	1.2	20	中期（藤内式）	
22	L－17	3.7	1.0	20	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
23	L－17	2.5	1.2	10	中期（藤内式）	
24	L－17	4.4	1.2	28	中期（井戸尻式）	周縁がよく擦られている
25	L－17	4.3	1.4	25	中期（曽利式）	磨滅
26	L－17	3.8	0.8	15	中期	磨滅
27	L－20	3.5	1.1	17	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
28	L－20	5.0	0.9	18	後期	半欠
29	L－21	4.1	0.9	12	中期	半欠、周縁がよく擦られている
30	L－22	3.6	0.7	10	中期	
31	L－22	4.8	0.8	23	中期	
32	L－22	4.0	0.7	12	後期	
33	L－24	5.4	0.9	32	前期（諸磯a式）	
34	M－16	2.0	1.3	8	中期	周縁がよく擦られている
35	N－17	4.3	0.8	15	中期（五領ヶ台式）	
36	N－18	3.0	0.7	9	前期	
37	N－18	3.7	0.9	15	後期	
38	N－22	3.3	0.9	12	中期	周縁は荒い打ち欠き
39	N－25	3.2	1.1	5	中期	
40	O－16	4.4	1.0	24	中期（曽利式）	
41	O－18	5.0	1.2	35	中期（藤内式）	
42	O－18	3.4	1.0	15	中期	周縁がよく擦られている
43	O－19	3.7	1.0	16	中期	周縁がよく擦られている
44	O－19	4.0	1.1	13	中期	磨滅
45	O－20	3.8	1.1	20	中期（藤内式）	
46	O－23	3.3	1.0	13	中期	
47	O－23	4.8	1.1	30	後期	口縁部を利用
48	O－25	2.3	0.8	5	中期	磨滅
49	O－25	5.0	1.0	25	後期	
50	P－16	3.2	1.0	15	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
51	P－16	4.3	1.0	20	中期	
52	P－16	3.1	0.8	10	中期	磨滅
53	P－19	3.4	1.3	16	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
54	P－22	4.1	1.0	19	前期（諸磯b式）	
55	P－25	2.6	0.8	5	不明	
56	Q－15	3.4	1.6	20	中期	
57	Q－16	4.0	1.5	27	中期	周縁は荒い打ち欠き
58	Q－17	3.8	1.5	27	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
59	Q－17	3.0	0.8	10	中期	周縁がよく擦られている
60	Q－17	4.1	1.4	22	中期	
61	Q－19	3.7	0.9	15	中期	周縁がよく擦られている
62	R－16	3.3	1.1	15	中期（藤内式）	
63	R－16	5.5	1.2	32	中期（新道式）	
64	R－16	3.0	0.7	5	不明	磨滅
65	R－17	4.1	1.0	18	中期	磨滅
66	R－17	10.0	1.2	132	後期	輪積痕に刻み残存
67	R－18	3.6	1.2	20	中期（藤内式）	
68	R－20	3.0	1.0	10	中期（藤内式）	周縁
69	S－17	3.6	1.3	20	中期（藤内式）	
70	S－18	3.6	1.1	20	中期（藤内式）	
71	S－18	6.8	0.8	30	中期（藤内式）	欠損部あり
72	S－18	3.3	1.3	18	中期	
73	S－20	3.9	0.9	15	前期	
74	S－21	3.6	1.1	13	早期	繊維混入
75	T－17	4.1	1.5	35	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
76	T－18	2.9	1.7	13	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
77	T－22	3.7	0.9	15	中期	周縁は荒い打ち欠き
78	T－22	3.6	1.0	10	中期	半欠、有孔
79	T－22	4.5	1.2	27	中期（曽利式）	
80	U－15	3.2	1.0	15	不明	
81	U－21	4.2	1.2	25	中期	周縁がよく擦られている
82	V－15	2.9	1.0	10	中期	
83	V－15	3.5	0.9	13	中期	
84	V－22	2.6	1.2	10	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
85	V－22	3.7	1.1	18	中期	周縁がよく擦られている
86	V－22	2.9	1.5	15	中期	
87	W－15	3.6	1.2	10	早期	磨滅
88	W－22	3.7	0.9	15	中期	
89	X－25	3.2	1.3	15	中期	周縁がよく擦られている
90	SB01	2.6	1.0	10	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
91	SB01	3.4	0.9	15	中期（曽利式）	
92	SB01	2.8	1.0	10	中期	
93	SB04	4.7	1.1	32	中期（諸磯b式）	
94	SB04	5.0	1.7	49	中期（藤内式）	
95	SB04	4.2	1.1	25	中期（藤内式）	
96	SB04	2.4	0.9	6	中期	周縁がよく擦られている
97	SB04	2.6	0.9	8	中期	周縁がよく擦られている
98	SB04	4.2	1.2	25	中期	
99	SB04	3.9	0.7	15	中期	
100	SB06	3.1	0.9～1.3	7	後期（堀之内式）	磨滅



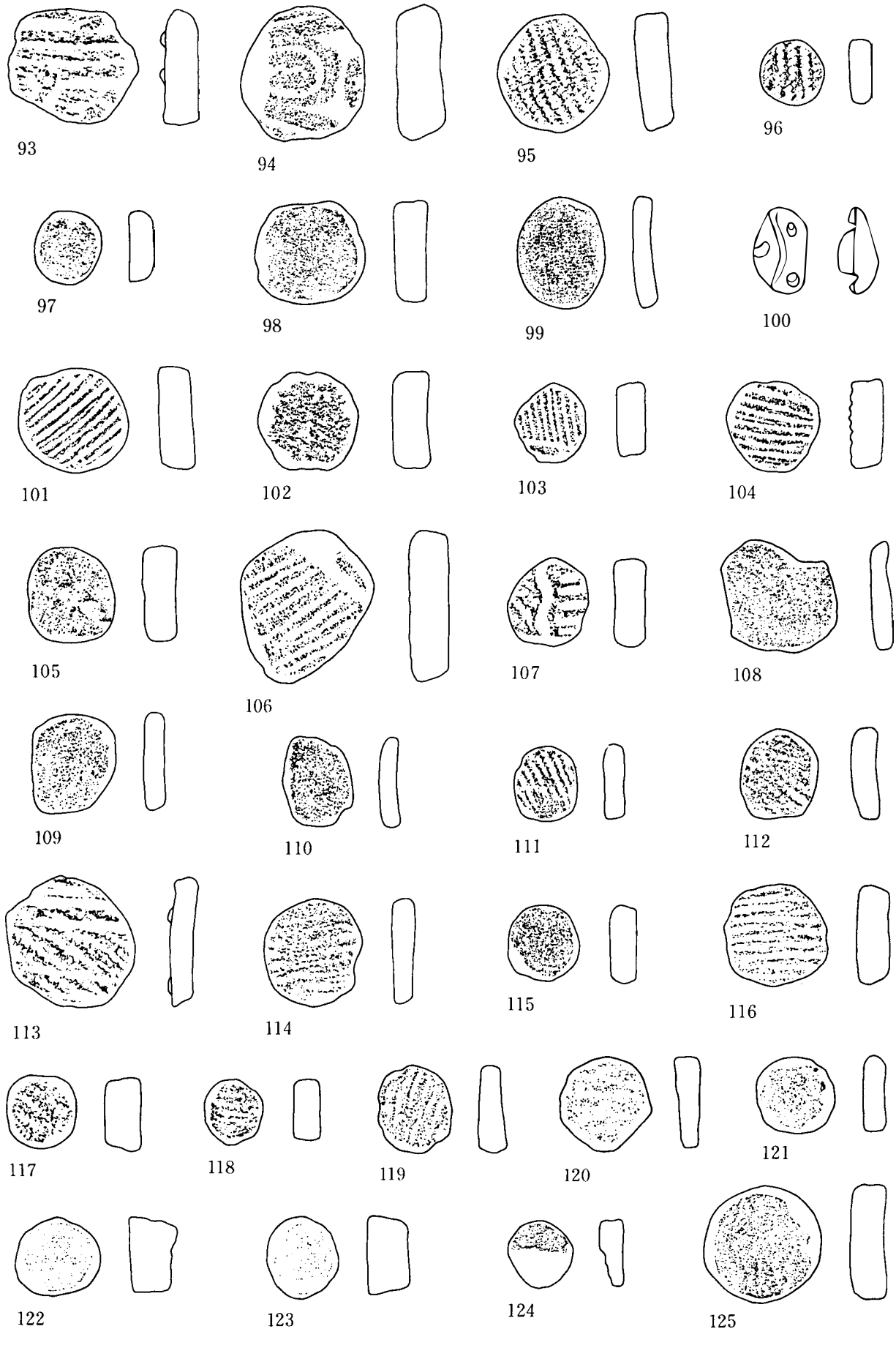
第272図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土製円盤（１）（１：２）



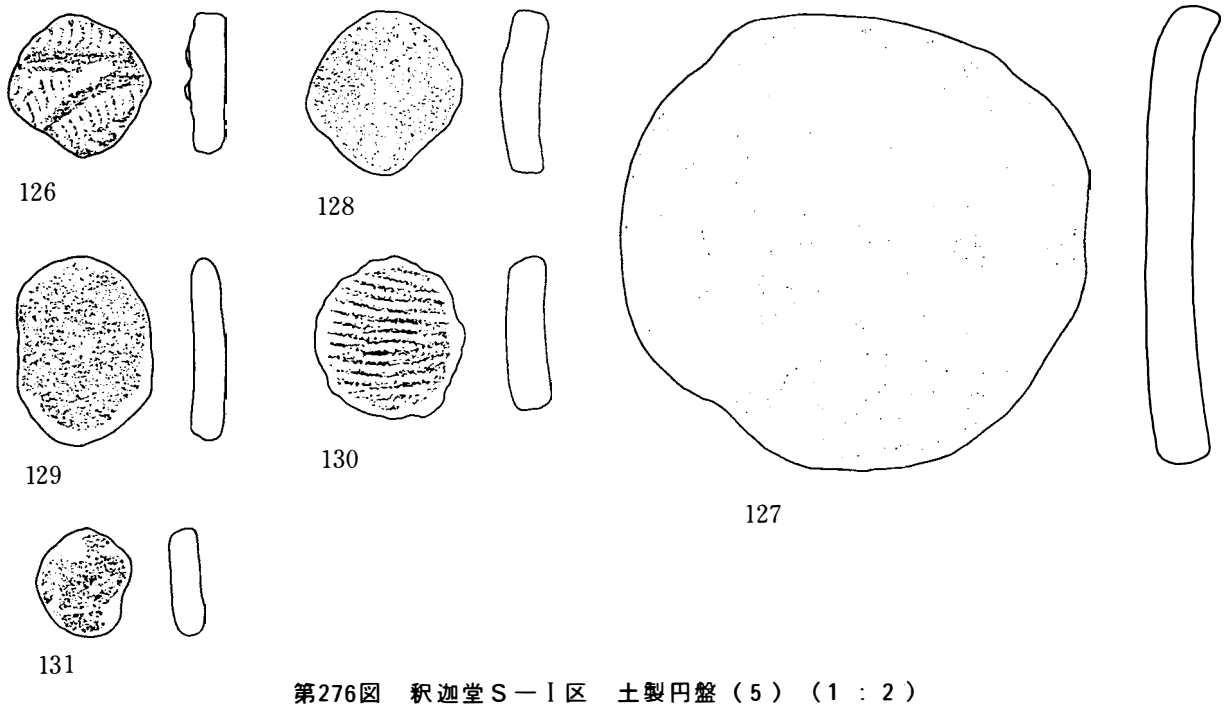
第273図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土製円盤（２）（１：２）



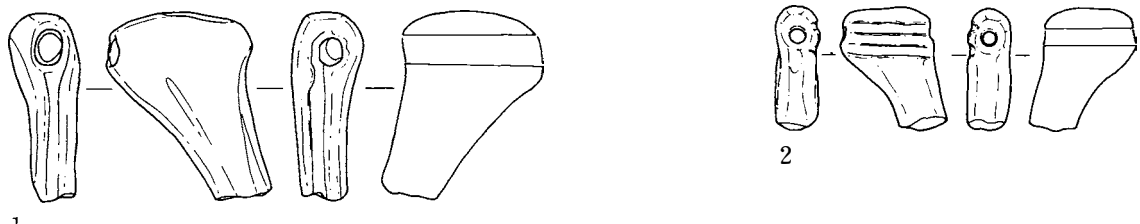
第274図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土製円盤（３）（１：２）



第275図　釈迦堂S－Ⅰ区　土製円盤（4）（1：2）



第276図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土製円盤（５）（１：２）



第277図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土笛（１：２）

番号	出土地	最大径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	土器片の時期	備考
101	S B07	4.1	1.2	25	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている	117	S B40	2.7	1.4	13	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている
102	S B08	3.7	1.3	19	早期	繊維混入、周縁は荒い打ち欠き	118	S B40	2.3	1.0	7	中期	周縁がよく擦られている
103	S B09	3.0	1.1	10	中期（藤内式）		119	S B40	3.2	0.9	11	中期	
104	S B09	3.5	1.1	16	中期（藤内式）		120	S B40	3.4	0.9	13	中期	磨滅
105	S B09	3.7	1.2	18	中期（藤内式）	磨滅	121	S B40	2.8	0.9	10	中期	周縁がよく擦られている
106	S B10	5.7	1.3	42	中期（藤内式）	周縁がよく擦られている	122	S B40	3.0	1.4	18	中期	周縁がよく擦られている
107	S B10	3.2	1.1	15	中期（藤内式）		123	S B40	2.9	1.6	15	中期	
108	S B10	4.6	0.8	15	後期		124	S B40	2.5	0.9	6	不明	周縁がよく擦られてる
109	S B10	3.8	0.8	11	後期		125	S B51	4.3	1.2	30	中期	周縁がよく擦られている
110	S B10	3.4	0.7	7	後期		126	S K29	3.8	0.9	17	中期（新道式）	
111	S B10	2.7	0.8	5	不明		127	S K186	12.6	1.2	23 5	中期（藤内式）	浅鉢の口縁付近か？
112	S B10	3.3	0.9	10	不明		128	S K227	4.2	1.0	22	中期	
113	S B29	4.9	0.8	24	前期（諸磯b式）		129	出土地点不明	4.9	0.9	20	前期（諸磯a b式）	
114	S B29	3.9	0.8	16	後期		130	出土地点不明	4.3	1.0	20	中期（藤内式）	周縁は荒い打ち欠き
115	S B31	2.8	1.0	10	中期	周縁がよく擦られている	131	出土地点不明	2.8	0.8	5	不明	
116	S B40	3.8	1.3	20	中期（藤内式）								

土　笛

No.	出土地点	大きさ	備考
1	S B－47　No.105	(5.0) ×3.7×1.9	下部を欠損する。貫通孔があり、吹くと音を発する。土笛の可能性大。
2	S B－51	(3.2) ×2.5×1.1	下部を欠損する。平行沈線を施す。やはり貫通孔を有する。

釈迦堂Ｓ－１区土製円盤付表

土器片の時期 ＼ 重さg	早期	前期	中期 五領ケ台式	中期 新道式 藤内式 井戸尻式	中期 曽利式	中期 細別時期不明	後期	不明	計
5・6						3	1	5	9
7・8						4	1		5
9・10	1	3		6		7		1	18
11・12						3	2		5
13・14	1	1		2		4			8
15・16		1	1	5	1	10	3	1	22
17・18				5		4	2		11
19・20	1	2		9		5	1		18
21・22						2			2
23・24		1			1	2			4
25・26				6	1	2	1		10
27・28				2	1	1			4
29・30				2		1	1		4
31・32		2		1					3
33・34									0
35・36				2			1		3
37・38									0
39・40				1					1
41・42				1					1
43・44									0
45・46									0
47・48									0
49・50				1					1
⋮									⋮
132							1		1
⋮									⋮
235				1					1
計	3	10	1	44	4	48	14	7	131
				97					

土器片の時期と重さの相関表

土器片の時期 ＼ 長径cm	早期	前期	中期 五領ケ台式	中期 新道式 藤内式 井戸尻式	中期 曽利式	中期 細別時期不明	後期	不明	計
1以上2未満						2		1	3
2 ～ 3		1		7		11		3	22
3 ～ 4	3	4		19	1	23	7	3	60
4 ～ 5		4	1	11	3	12	4		35
5 ～ 6		1		5			2		8
6 ～ 7				1					1
7 ～ 8									
8 ～ 9									
9 ～ 10									
10 ～ 11							1		1
11 ～ 12									
12 ～ 13				1					1
計	3	10	1	44	4	48	14	7	131
				97					

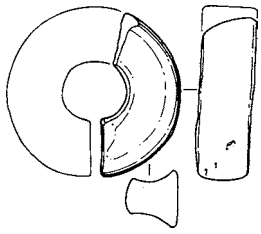
土器片の時期と長径の相関表

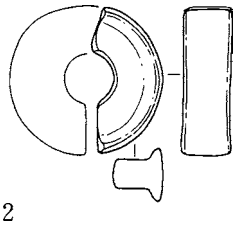
土器片の時期	個数	長径の平均値（cm）
早期	3	3.63
前期	10	4.04
中期	97	3.78
（五領ケ台式）	（1）	
（新道藤内井戸尻式）	（44）	（4.12）
（曽利式）	（4）	（4.15）
（細別時期不明）	（48）	（3.42）
後期	14	4.49
不明	7	2.87
計	131	3.82

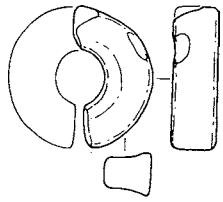
土器片の時期別個数と長径平均値

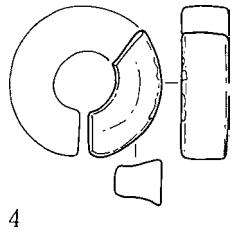
粘土塊

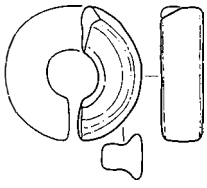
No.	グリット名	重さ	備考	No.	グリット名	重さ	備考
	N － 10	10g	2層		U － 21	20g	3層下、カゴの跡あり
	N － 14	40g	2層		U － 15	10g	東西ベルト
	O － 18	15g	2層		U － 20	7g	3層
	O － 24	25g	2層下		U － 20	7g	3層
	O － 24	5g	2層周溝		U － 20	22g	2層
	P － 15	40g	3層		U － 23	145g	2層
	P － 23	25g	3層下		U － 25	20g	砂層
	P － 24	5g	1層		U － 27	110g	2層
	R － 18	5g	2層		V － 21	25g	3層上
	R － 18	35g	2層下		W － 21	430g	2層
	R － 18	20g	2層下		X － 26	80g	No.2
	R － 18	675g	2層下		表採	10g	
	R － 21	15g	2層		89号土坑	135g	No.11
	R － 22	12g	3層下		SB－03	10g	
	S － 17	25g	3層下		SB－03	5g	
	S － 18	5g	2層下		SB－03	150g	P66 含繊維粘土塊
	S － 21	10g	2層		SB－10	32g	フクド
	T － 19	335g	2層下		SB－39	65g	フクド
	T － 21	10g	3層		SB－29	70g	
	T － 22	5g	3層下		SB－56	7g	

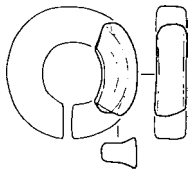

1

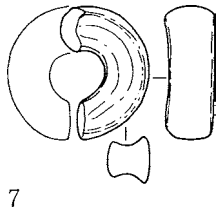

2

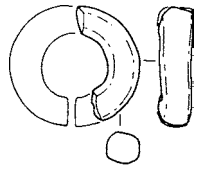

3

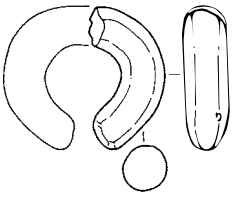

4

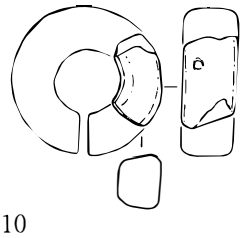

5

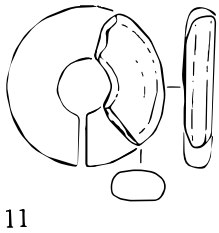

6

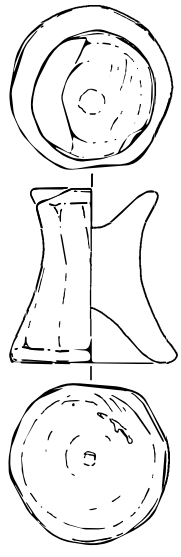

7

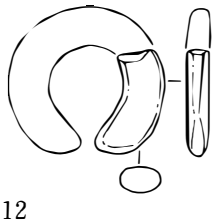

8

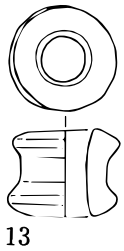

9

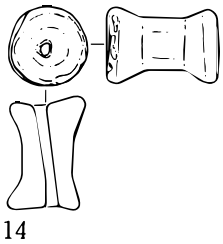

10

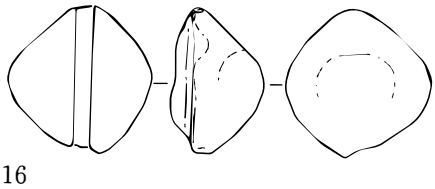

11

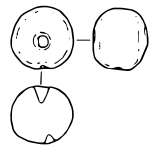

15

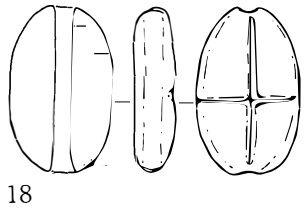

12


13


14


16


17


18

第278図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　土製品（１：２）

S－Ⅰ区　土製品－装飾品

No.	名　称	出土地	素材	たて×よこ×はば	備　考	No.	名　称	出土地	素材	たて×よこ×はば	備　考
1	玦状耳飾	H－18	土製	3.7×2.0×1.2		10	玦状耳飾	SB－07	土製	2.6×1.8×0.6	赤彩有
2	玦状耳飾	K－17	土製	3.4×2.0×1.4	赤彩有	11	玦状耳飾	Q－23	土製	2.8×2.9×0.8	赤彩有
3	玦状耳飾	Oトレンチ住居	土製	3.8×1.6×1.0	赤彩有	12	玦状耳飾	SB－09	土製	3.0×2.0×6.0	
4	玦状耳飾	N－16	土製	2.4×1.2×0.8		13	滑車状耳飾	表採	土製	4.6×4.4×4.4	部分的に赤彩有
5	玦状耳飾	X－22	土製	3.5×2.2×1.4	赤彩有	14	滑車状耳飾	Q－16	土製	4.0×3.8×2.5	川
6	玦状耳飾	G－20	土製	3.0×1.7×0.8		15		?	土製	1.6×1.7×1.4	
7	玦状耳飾	SB－07	土製	3.8×2.0×1.2	赤彩有	16	有孔土製品	O－18	土製	4.4×2.7×1.2	
8	玦状耳飾	I－20	土製	2.4×1.4×1.6		17		?－26	土製	4.8×3.8×2.0	
9	玦状耳飾	K－17	土製	3.4×1.8×0.8		18		Q－17	土製	3.6×4.6×1.0	

第3節　石器・石製品

S－Ⅰ区　浮子

No.	グリッド	大きさ	重さ	備　考
1	SB－28	9.0×8.8×3.9	70g	
2	SB－28	7.2×6.9×2.6	25g	
3	SK－146	5.6×4.2×3.7	20g	
4	SB－06	2.5×3.7×0.7	2g	
5	O－19	3.3×6.7×2.7	10g	

S－Ⅰ区　石錘

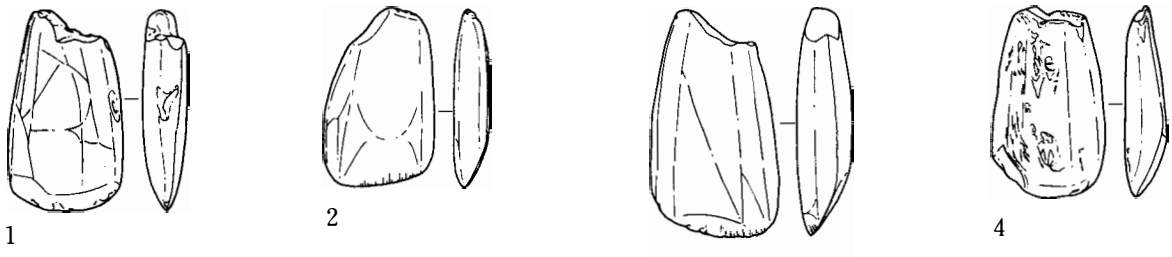
No.	グリッド	大きさ	重さ	備　考
6	K－20	6.8×4.1×1.7	75g	
7	N－21	5.7×4.5×2.0	80g	
8	S－24	7.0×3.7×1.4	65g	
9	S－23＋R－23	6.1×3.5×1.8	50g	
10	R－20	4.2×2.2×0.9	15g	
11	T－20　No.2	4.8×4.1×1.5	75g	
12	X－23	5.5×4.0×1.5	50g	

S－Ⅰ区　磨製石斧

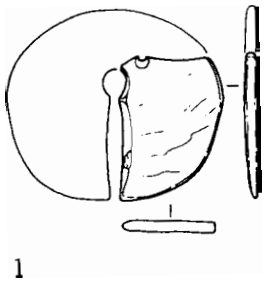
No.	グリッド	大きさ	重さ	備　考
1	SB－36	4.3×3.0×1.2	30g	横斧
2	SB－36	4.7×3.9×0.9	23g	横斧
3	SB－50	6.0×3.3×1.4	40g	横斧
4	I－19	5.1×3.0×1.1	25g	横斧

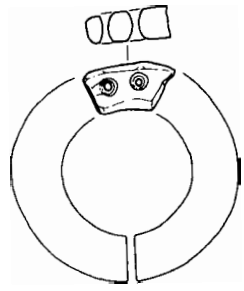
S－Ⅰ区　石製品－装飾品

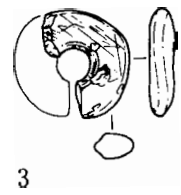
No.	名　称	出土地	素材	たて×よこ×はば	備　考	No.	名　称	出土地	素材	たて×よこ×はば	備　考
1	玦状耳飾	SK－46		3.8×2.8×0.4		12	牙状玉	Q－20		3.1×1.0×0.8	
2	玦状耳飾	SB－42 SK－218		1.3×2.4×0.8		13	丸玉	V－15		1.4×1.7×0.8	
3	玦状耳飾	SB－43		3.0×3.0×0.6		14		Q－23		3.2×0.8×0.8	
4	玦状耳飾	N－24		2.8×2.8×0.6		15		N－19		2.6×1.2×0.7	
5	玦状耳飾	L－17		4.6×4.0×0.4		16		SB－28		4.4×1.6×0.6	
6	勾玉	SK－13		3.2×2.0×1.2		17		S－17	メノウ	1.4×0.5×0.4	
7	勾玉	L－19		3.3×1.4×0.6		18	垂飾	O－19		4.6×2.1×1.2	
8	勾玉	I－16		3.0×1.6×0.7		19	垂飾	U（V?）－16		5.8×2.6×1.8	
9	丸玉	SB-31 V－22		1.3×1.2×0.7		20	垂飾	J－17		4.4×4.5×3.0	
10	丸玉	SB-56 S－8		1.5×1.7×1.2		21		SB－23	ヒスイ	2.0×4.2×1.6	
11	?	J－18		3.1×1.6×0.6		22		SB－29		3.8×1.9×1.3	

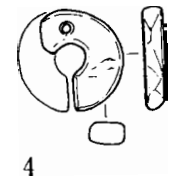


第279図　釈迦堂S－Ⅰ区　石製品（1）（1：2）

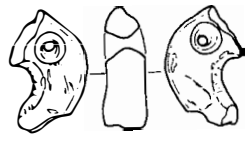

1

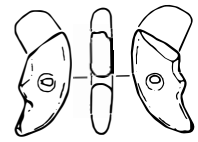

2

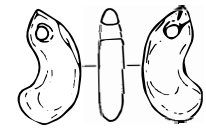

3

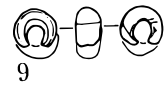

4

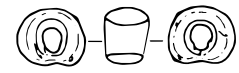
5

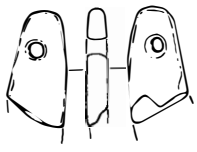

6

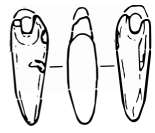

7

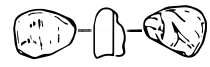

8


9

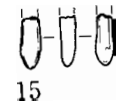

10

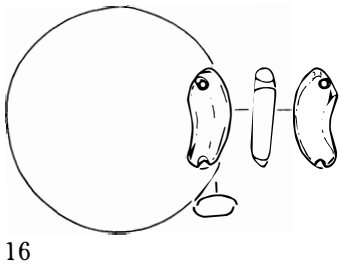

11

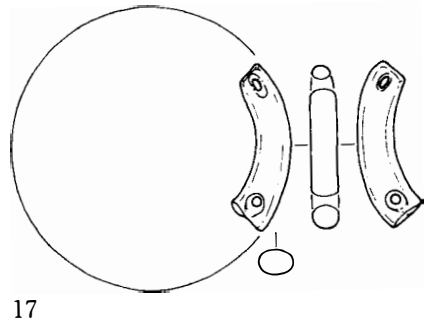

12

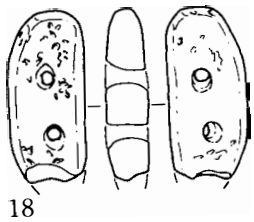

13

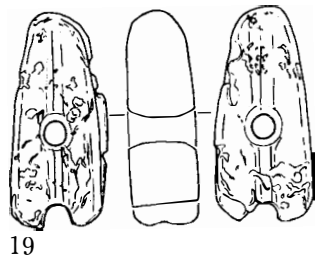
14

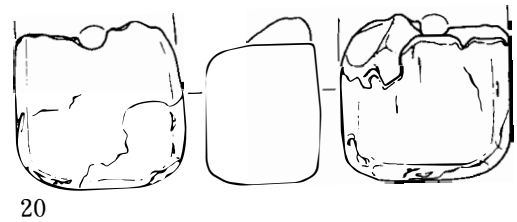

15


16


17

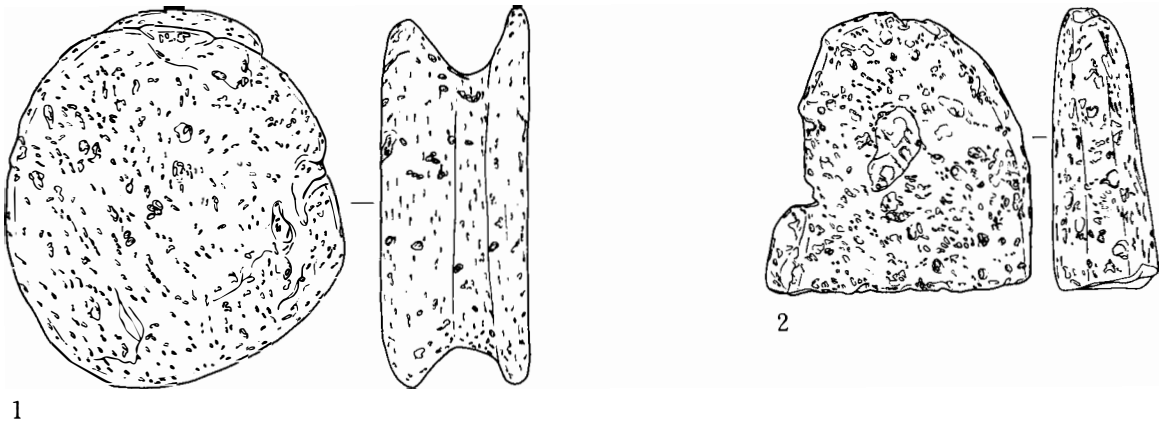

18

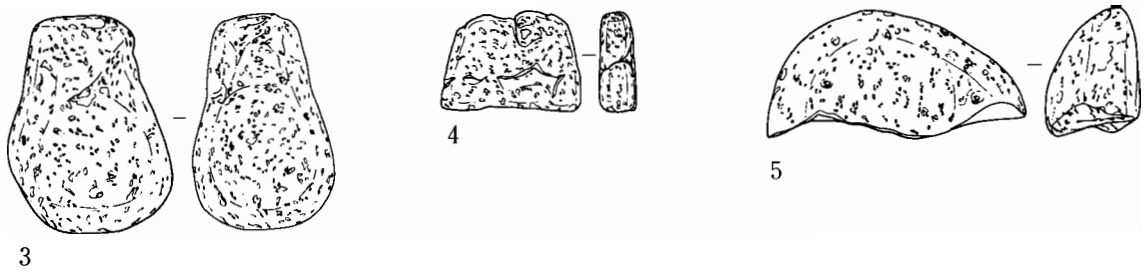

19

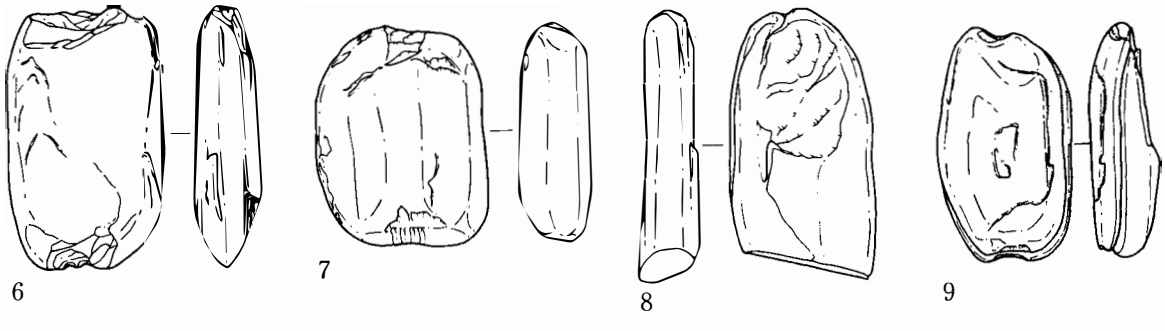

20

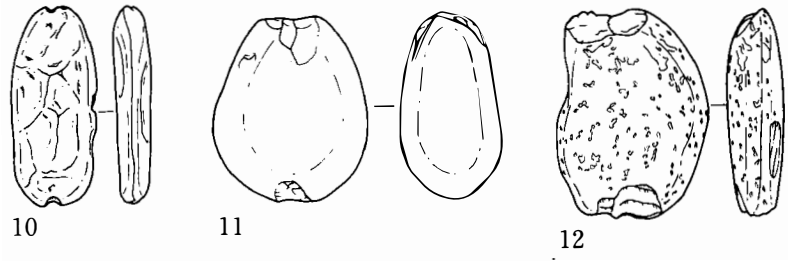
第280図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　石製品（２）（１：２）

第281図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　石製品（３）（１：２）









第282図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　石製品（４）（１：２）

第８章　古墳時代

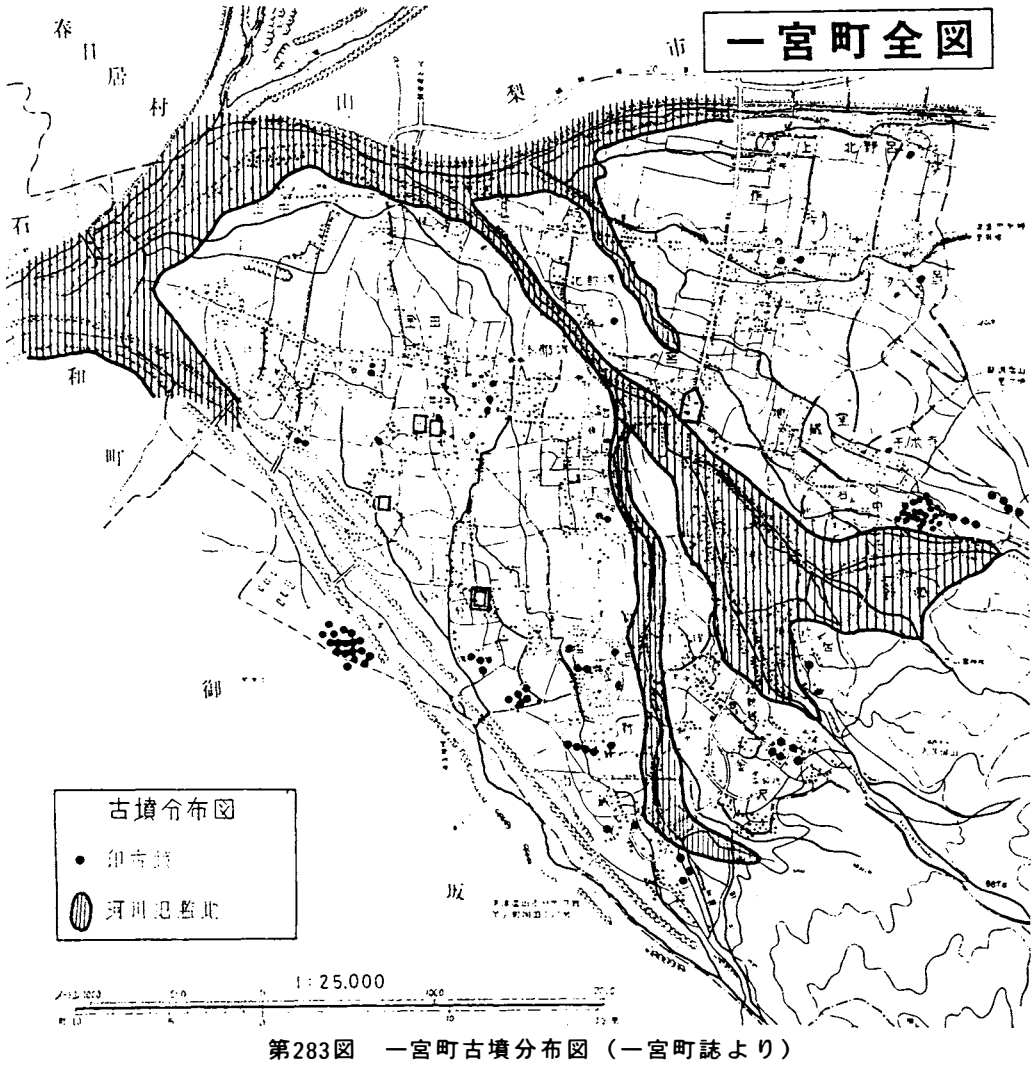
第１節　釈迦堂１号墳

千米寺・石古墳群は、京戸川扇状地の南西斜面に流路をもつ京戸川の右岸に位置している。町誌（1977年）の時点で、32基検出されており、勝沼町管内の物見塚古墳群も含めれば、36基となる。自然災害・耕作等によって失なわれたものも多数あるので、50基を越える一大古墳群であったと思われる。

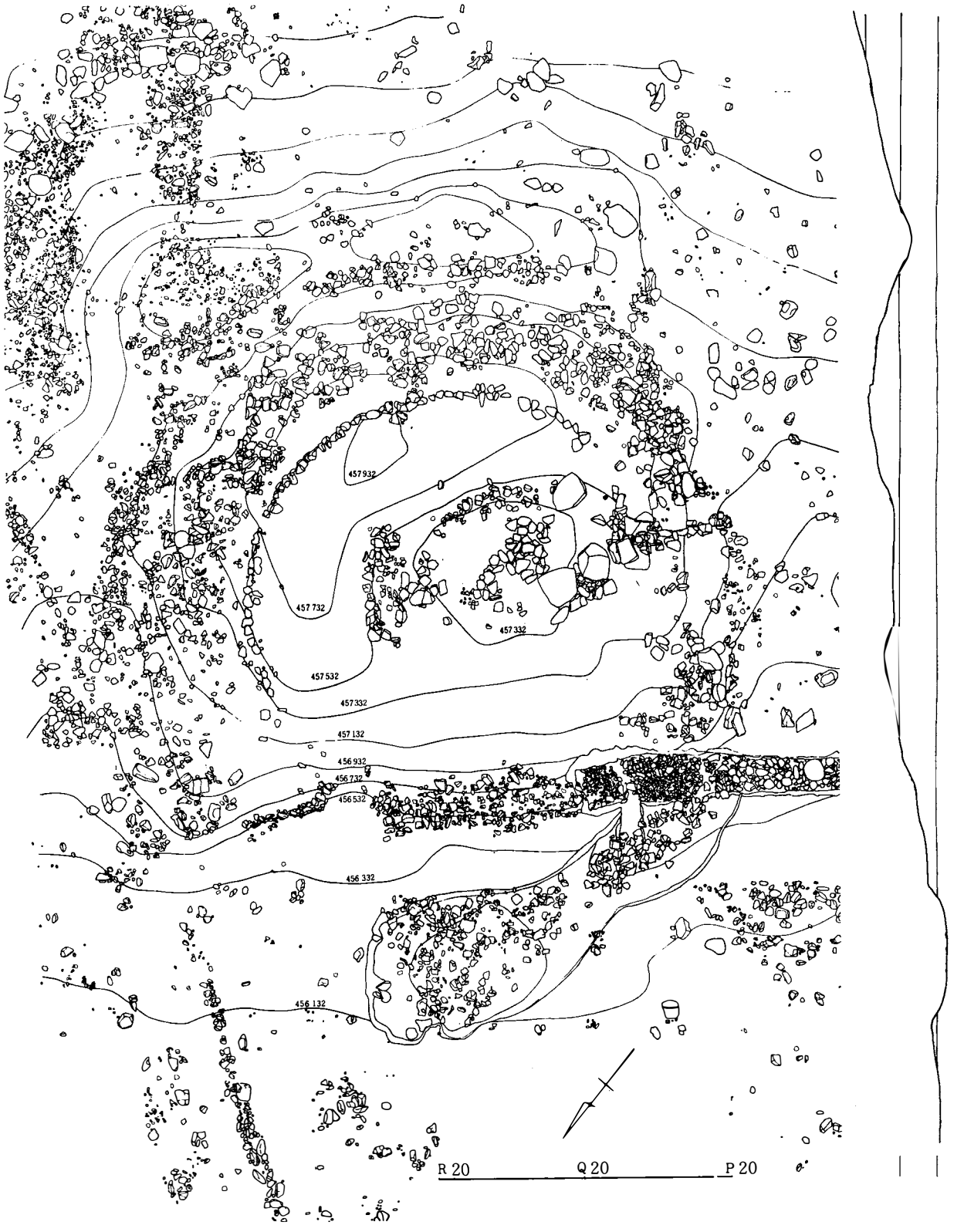
現存する古墳の中では千米寺大塚が、最もよく形状をとどめており、直径約17mの円墳で、石室の長さ9.5m、玄室の長さ6.7m、幅は奥壁で2.25mを測る両袖式の石室をもつものである。この古墳を中枢的な古墳とみなして、千米寺古墳群を考える研究者もいる。

なお、千米寺・石古墳群では、標高が上るほど、古墳の年代は下るようであるが、出土遺物等から、造築年代はおおよそ、７世紀初頭のものを中心とするようである。

さて、京戸川扇状地の北西側斜面には、古墳はほとんど築造されていないように考えられていたが、今回の発掘調査により、塚越北Ａ地区で釈迦堂１号墳を検出するに及んだ。また塚越北Ｂ地区で、巨石埋設坑があり、これも古墳の残存と思われる。



第283図　一宮町古墳分布図（一宮町誌より）

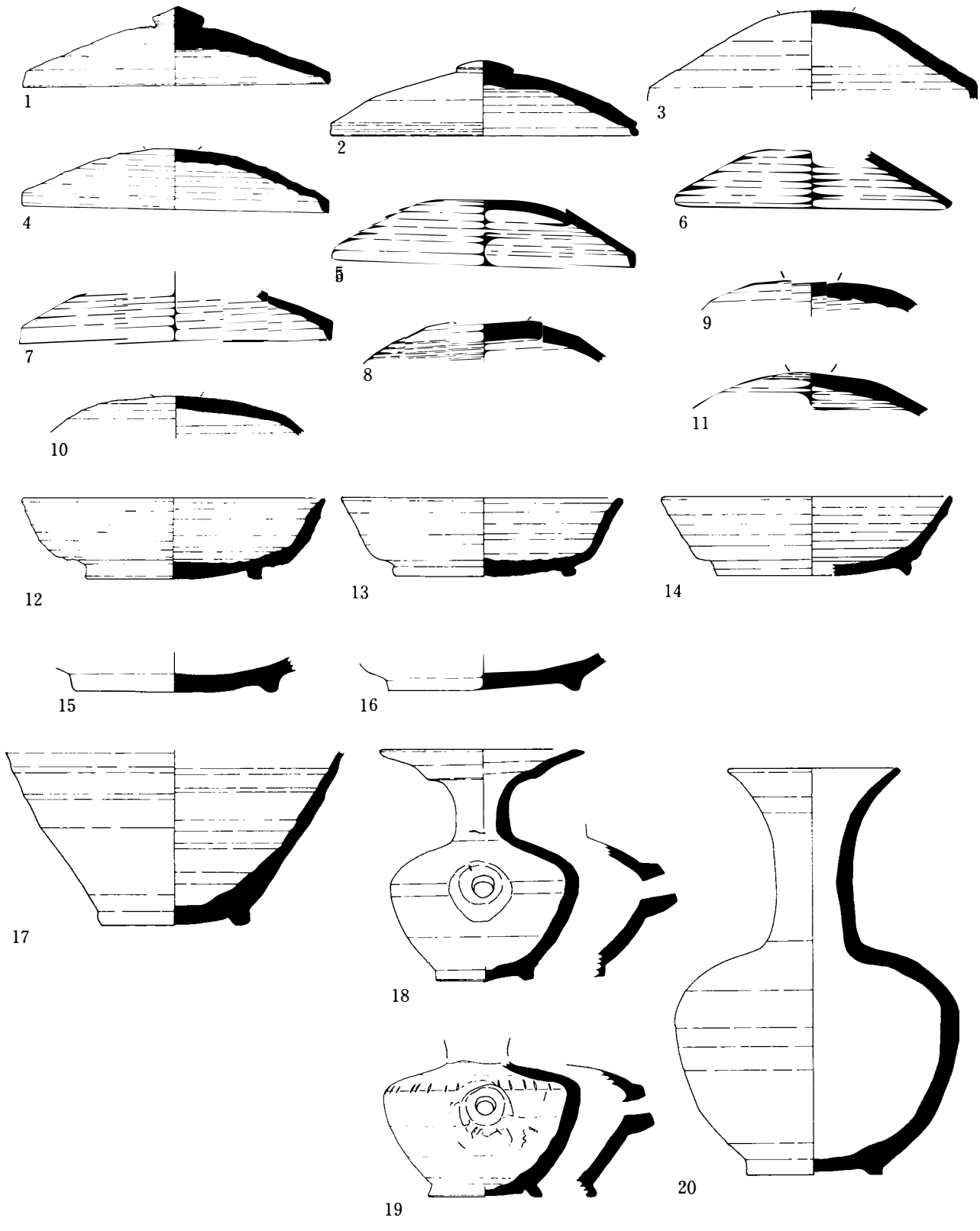


第284図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　古墳全体図（１：160）

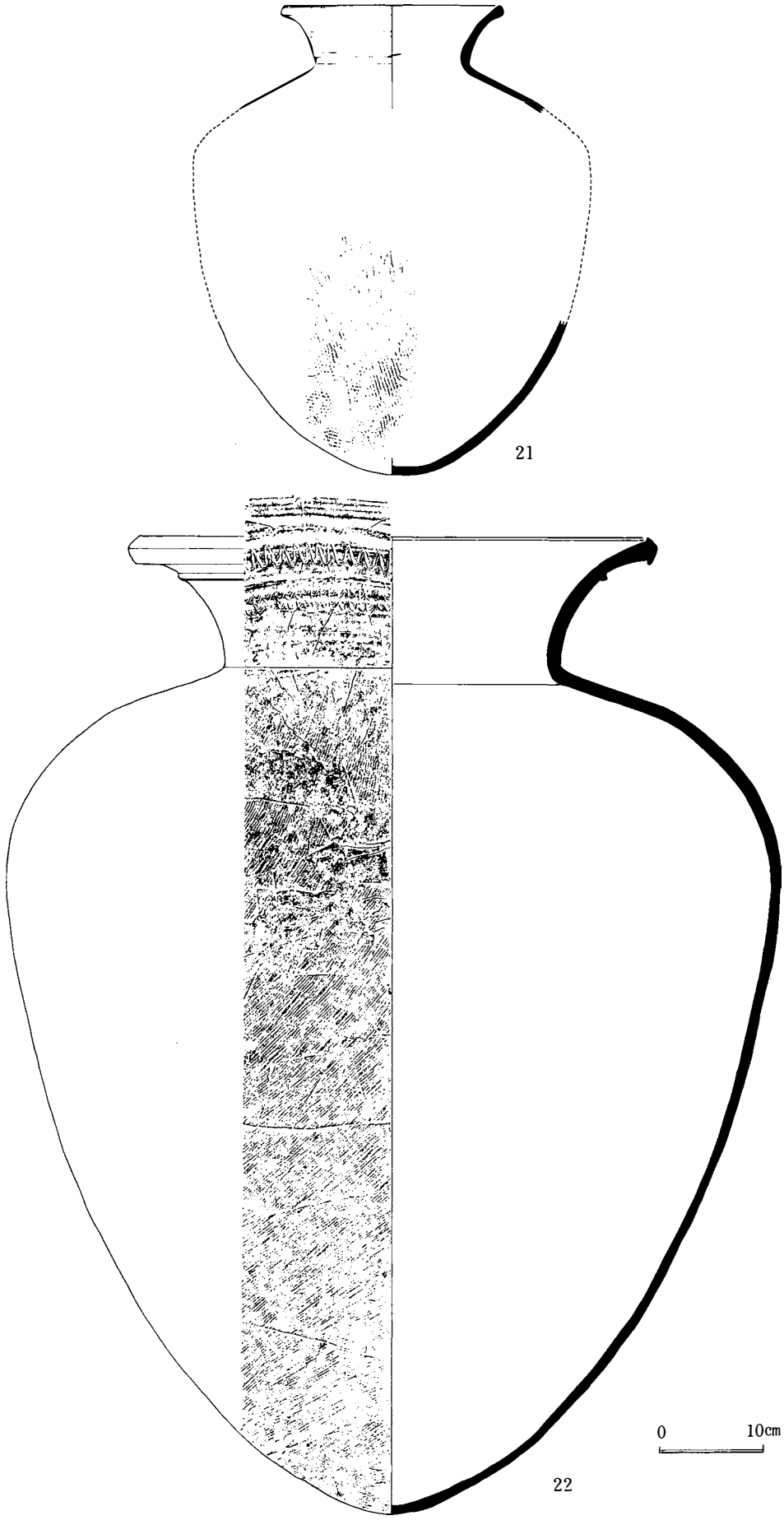
第285図　釈迦堂Ｓ－Ｉ区　古墳石室図（1：80）

第286図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　古墳遺物出土分布図（１：60）

釈迦堂１号墳は、千米寺大塚とほぼ同規模の古墳で、破壊されたとはいえ、出土遺物も豊富であり、千米寺大塚が中枢的な古墳であるとすれば、それに類するものであろう。また標高も456mと、千米寺・石古墳群では低い立置である。



第287図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　古墳出土須恵器（１）（１：３）



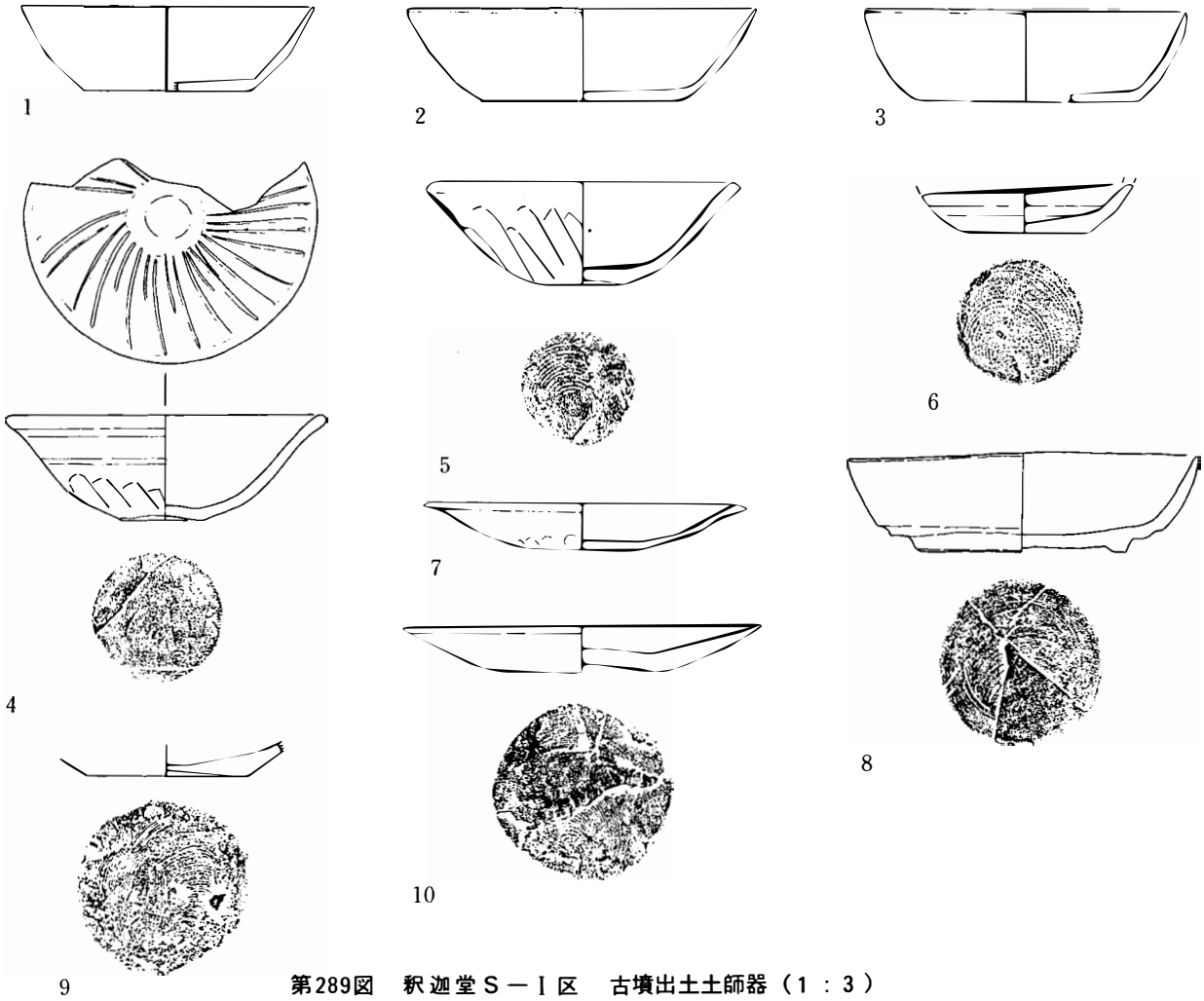
第288図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　古墳出土須恵器（２）（１：６）

須恵器

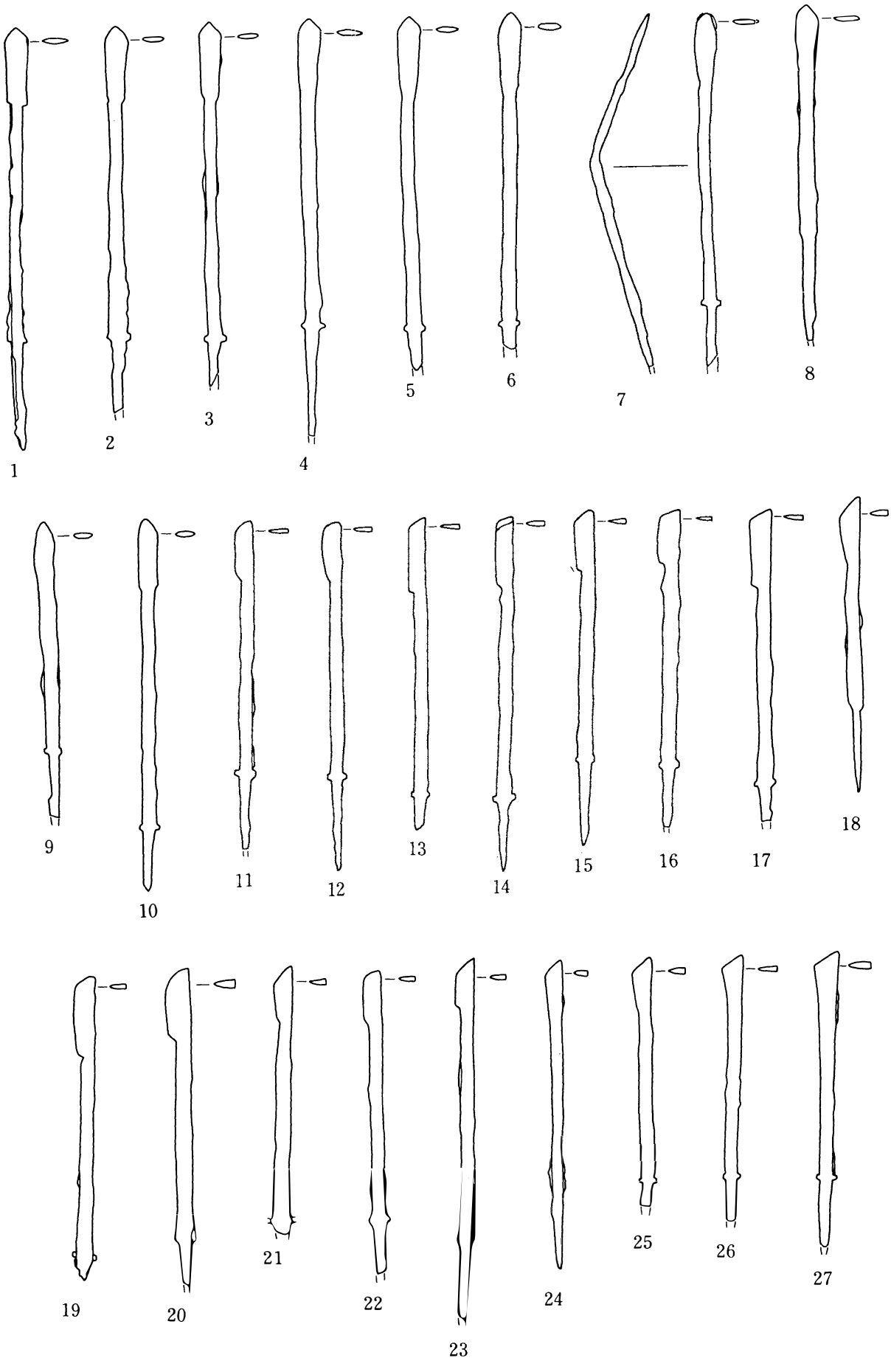
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
106	287	1	P 24 No.2、4、28、35 Q 24、25	須恵器 蓋	外面に自然釉あり、胎土のガスが気泡となっている。	4 cm		
		2	P 24 No.27、29、31	須恵器 蓋	外面に自然釉あり	4		
		3	P 24 No.32 P 25	須恵器 蓋	外面に自然釉あり 器形が前者とは異なる。宝珠を欠損			
		4	P 24 No.2 27、29、32、38 40	須恵器 蓋	自然釉なし、宝珠を欠損			
		5	P 24 No.32 37S 22 R 24 No.38	須恵器 蓋	自然釉なし、宝珠を欠損			
		6	P 24 No.28	須恵器 蓋	自然釉なし、宝珠を欠損			
		7	P 24 No.19	須恵器 蓋	自然釉なし、宝珠を欠損			
		8	P 24 No.40	須恵器 蓋	自然釉なし、宝珠を欠損			
		9	O 24 No.11 P 24 No.32	須恵器 蓋	自然釉なし、宝珠を欠損			
		10	P 24 No.27、21	須恵器 蓋	自然釉なし、宝珠を欠損			
		11		須恵器 蓋	自然釉なし、宝珠を欠損			
		12	P 29	須恵器 坏	灰白色を呈す。	4.2		
		13		須恵器 坏	青灰白色 高台より底部が突出するがN－Ⅱ、SX—01のものより顕著でなくわずかである。	4.2		
		14		須恵器 坏	青灰白色	4.2		
		15		須恵器 坏				
		16		須恵器 坏				
		17	P 23 P 22 P 24 No.26、27、51	須恵器壺か	胎土のガスが気泡をつくっている。灰白色を呈す。			
		18	P 24 No.32、33	須恵器 甕	外面に自然釉あり、この種の甕は千米寺古墳群から出土例あり	11.7		
		19	P 24 No.1	須恵器 甕	肩部に刻目あり			
		20	O 23 No.82 P 24 No.10	須恵器長頸壺	肩部に自然釉あり	21		
	288	21		須恵器 甕	灰白色を呈し、肩部、胴部に叩き目をもつ			
		22		須恵器大甕		94		

土師器

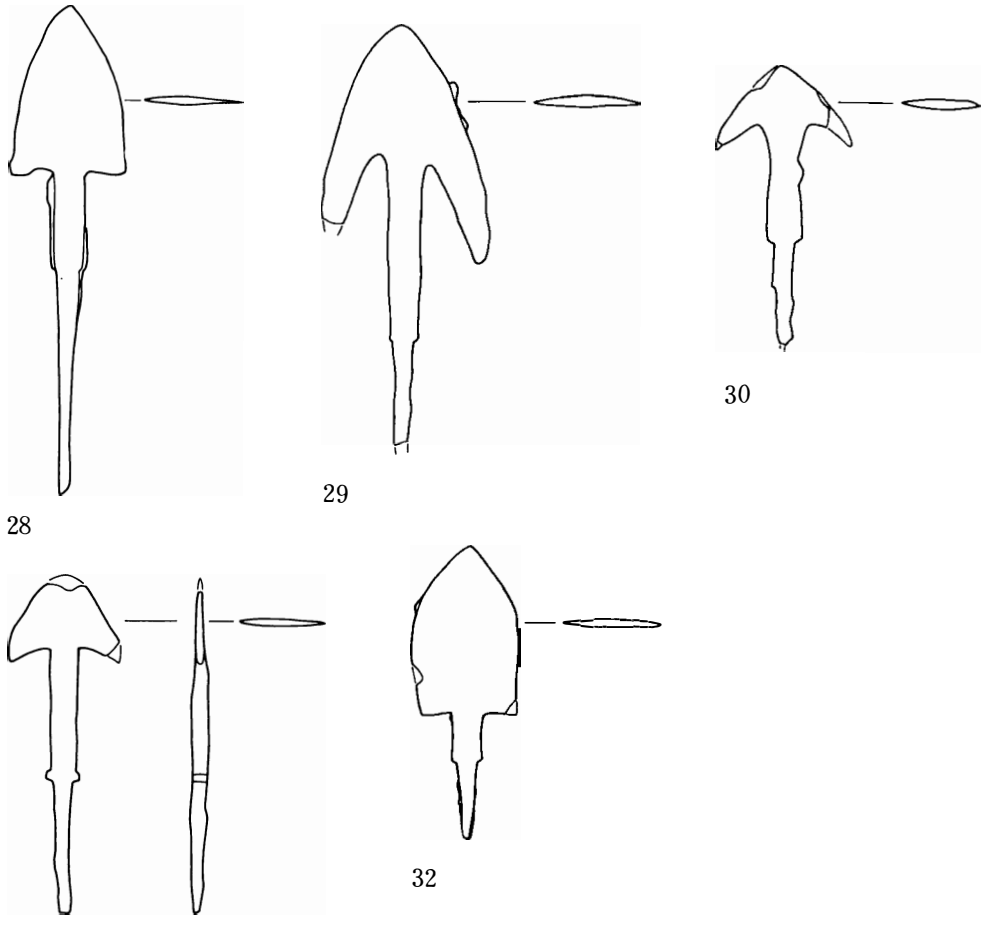
図版	挿版	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
106	289	1	P 24 No.7	土師 坏	ヨコナデ 底部ヘラ削り	3.4 cm		
		2	O 24、O 23	土師 坏	ヨコナデ 底部ヘラ削り	3.8		
		3	O 23 N 23 P 22	土師 坏	ヨコナデ 底部ヘラ削り	3.6		
		4	P 24 Q23、24	土師 坏	ヨコナデ 底部ヘラ削り 内側に暗文あり			
		5	Q 24	坏	ヨコナデ 底部ヘラ削り			
		6	P 25	坏	糸切底 擬似口縁となっている。スス付着、再利用			
		7	Q－24	坏	底部ヘラ削り			
		8	P－24 No.8	土師高台付坏	糸切痕あり内面にスス付着			
		9	P－22	土師 坏	糸切底 胎土に土師細片などを含む。			
		10	Q－24	坏	糸切底			



第289図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　古墳出土土師器（1 ： 3 ）

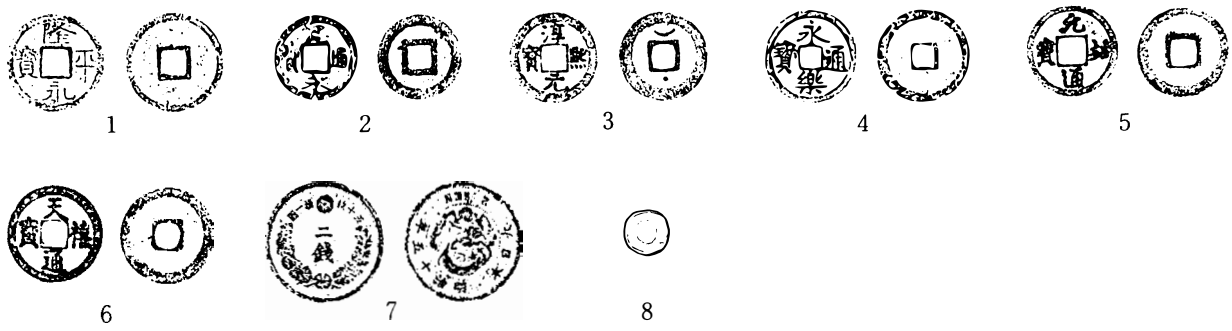


第290図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　古墳出土鉄鏃（１）（１：２）



第291図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　古墳出土鉄鏃（２）（１：２）

第２節　その他の遺物



第292図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　古銭など（１：２）

１の隆平永寶は釈迦堂Ｓ－Ⅴ区に出土例がある。２～６は古墳前庭部脇の人骨に伴うものと思われる。８は鉄鉋玉である。

第9章　まとめ

第1節　先土器時代

石器群の時期　本遺跡から出土した石器のうちナイフ形石器が二側縁加工と部分加工の2種類の形態のみがみられること、剥片剥離技術が上下両設打面であることなど、埼玉県砂川遺跡（戸沢　1986、砂川遺跡調査団　1974）の石器群のあり方に近似する。他の器種の石器がこれに伴うとしても、いわゆる「砂川期」（田中　1979）の石器群として促えることにむりはないであろう。他の器種のうち槍先形尖頭器を除いたものは、全て石刃ないしは石刃技法によって出現する剥片を利用しており、技術的な面からこれらが伴出していると考えておきたい。

一方、槍先形尖頭器については、本来「砂川期」の石器群には伴なわないとする考え方（田中　1979、1984）、伴うとする考え方（諏訪間・堤　1985）、伴う時期と伴わない時期とを区分する考え方（鈴木　1984）とがある。本遺跡では、出土状態や石材の面からそれを論議することはできない。ここでは、形態や技術面な面から検討したい。16は素材が横長剥片であり、自然面打面である。石刃石核の打面再生剥片とも考えうるが、そうすると正面の主剥離面と同方向の剥離は打面調整剥離ということになる。これらの方向や規模をみると、打面が自然面というのが奇異にみえる。積極的には支持できないものの、本遺跡の石刃技法によって生み出されたものではないと考えておきたい。17は大型で非常に精巧に作られている。薄さは剥片素材であることに由来するのであろうが、縄文時代草創期を含むかなり新しい段階のものと考えた方がよいであろう。18については、東京都仙川遺跡（小田他　1974）のものと形態が非常に似る。おそらく、これに近い時期のものであろう。19は石英製で、石材が違う。さらに、末端が丸くなる形態からして、縄文時代草創期を含むかなり新しい時期のものと思われる。以上のように、ここでは槍先形尖頭器はナイフ形石器群とは別時期のものと考えておきたい。

山梨県内の先土器時代石器群内での位置　県内では、先土器時代のまとまった発掘資料が少い。天神堂（山本他　1971、伊藤　1979）、権現堂（小林他　1976）、立石（山梨県立考古博物館　1982）、杯窪（小林他　1982）、丘の公園14番ホール（保坂　1985）が主なものである。このうち、天神堂の資料は最も充実しており、また本遺跡と近似する。まず、両者とを比較検討してみたい。なお、杯窪は一杯窪と改名された（小林他1986）

天神堂では、礫群10基に伴うかたちで石器群が出土したという。ブロックの区分や出土レベルの検討などがなされていないが、一応一括遺物であるとされている。ナイフ形石器、槍先形尖頭器、彫器、削器、石錐、楔形石器、二次加工ある剥片などの石器と、石刃技法による剥片、石核が出土している。ナイフ形石器は、基本的には二側縁加工と部分加工の二者をもつ。ただし、少量ながら、石刃の両端に部分加工様のブランティングがなされ、三角形や台形を呈するものがある。これについては、ナイフ形石器の細石化したものとの考え方（伊藤　1979）、部分加工のナイフ形石器の一種との考え方（田中　1984）とがある。天神堂のナイフ形石器の大きな特徴は、裏面加工が広範囲になされる点にある。二側縁加工のナイフ形石器の裏面全体や先端部にも施されたりする。他の石器のうち、槍先形尖頭器が問題となる。剥片素材、両面周辺加工、木葉形で小型のものが1点あるが、他のものについてはナイフ形石器基部であるとする考え方もある（田中　1984）。確かに、そのように言えるものもあるが、そうした判断をする場合、槍先形尖頭器とみまがうほどに両面とも平坦な剥離が行われたナイフ形石器の存在を認めねばならない。

剥片剥離技術は、三種類が抽出されている（伊藤　1979）。第1は、剥片剥離当初の稜形成が行われる両設打面のもの。第2は、稜形成を行わない両設打面のもの。第3は、稜形成を行う単設打面のものである。また、90度打面転移や剥片剥離作業面再生の技術もあるとされる。第1から第3までの技術的要素は釈迦堂の石器群にも見い出せるものであり、その手順はともかく、同様な技術であったろうと考えておきたい。

そこで問題は、先述した三角形状、台形状のナイフ形石器、裏面全体や先端部に裏面加工がなされるナイフ形石器、基部両面に平坦な調整がなされるナイフ形石器の存在と、槍先形尖頭器の伴出をいかに把えるかという点

である。天神堂と釈迦堂をおおまかに相模野Ⅳ期、武蔵野Ⅱb期、さらには「砂川期」に位置づける考え方はとるにしても、その中での前後関係など、両者を区別して考える必要があろう。天神堂石器群の一括性も問われるところではあるが、釈迦堂石器群より後出するものと考えた方がよいのではないだろうか。天神堂の類例が少いので、今後の問題としておきたい。

山梨県内の他の遺跡では、甲府盆地南縁の扇状地や丘陵地で若干の遺物が知られている。笠木地蔵（長沢他 1985）で槍先形尖頭器2点、上の平（未報告）で二側縁加工のナイフ形石器が2点、下向山（吉田　1963）で一側縁加工ないしは部分加工らしいナイフ形石器3点、米倉山（山本　1955、保坂　1985）で基部加工と部分ナイフ形石器が1点ずつ、後呂（中山他　1986）で二側縁加工が1点、弥二郎（未報告）で切出形ナイフ形石器が1点、横畑（未報告）で二側縁加工が1点、宮の前（長沢　1982）で彫器が1点、六科丘（清水他　1985）で二側縁加工が1点、槍先形尖頭器が1点、双葉二号墳（末木他　1978）で槍先形尖頭器1点が見い出されている。また、立石（山梨県立考古博物館　1982）では、ナイフ形石器のブロックが1カ所見い出されたという。これらのうち、上の平、米倉山、後呂、弥二郎、横畑、宮の前で、さらに石器は出土しなかったものの上野原（未報告）でローム層を広く調査したにもかかわらず、他の石器や剝片さえも得ることはできなかった。遺跡に多出すべき剝片はまったくといってよいほど出土せず、石器が少数出土する状況ばかりみられるのである。また、ブロックを把握できる立石や釈迦堂においても、出土点数は少く、礫群、配石を伴わない。今後、大規模な遺跡が発見されることも考えられようが、上記の状況が甲府盆地内の遺跡のありかたの一つであることも認めるべきではないだろうか。

時期の問題についてみると、先述したように、切出形、基部加工、一側縁加工、二側縁加工、部分加工のナイフ形石器や槍先形尖頭器、さらには表採品であるが舟底形の細石刃核もある（保坂　1985）ことから、釈迦堂の前後に位置する数段階の石器群が存在していることが予想される。

最後に礫群について考えておきたい。天神堂では礫群が多出したが、釈迦堂では存在しない。石器群の出土状態はあまりよくなかったが、焼け礫の出土がなかった点からして、存在しないものと考えたい。この違いについては、礫群多出地域と稀薄地域の違い（保坂　1986）との考え方がとれるが甲府盆地内では特殊な状況も考えられる。石器原材である信州産黒曜石は、東海地域や関東地域などで多く見い出されているが、甲府盆地は、供給地と需要地をむすぶルートにあたる。黒曜石の供給の方法については不明な点が多いが、直接採集にむかう集団もいた可能性もある。先述した甲府盆地内の遺跡のありかたを考え合わせると、礫群がない点はその遺跡が定着的な性格ではなく、黒曜石採集集団のキャンプ的な遺跡との説明もできる。ただし、これも仮説の一つであり、今後十分検討してゆく必要がある。

引　用　文　献

田中英司　1979　「武蔵野台地Ⅱb期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』第7号

田中英司　1984　「砂川型式期石器群の研究」『考古学雑誌』第69巻第4号

諏訪間順・堤隆　1985　「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層の石器群について」『旧石器考古学』30

鈴木次郎　1984　「第Ⅴ文化層」『栗原中丸遺跡』

小田静夫・永峯光一・宮崎博　1974　『調布市仙川遺跡』

戸沢充則　1986　「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』第4巻第1号

砂川遺跡調査団編　1974　『砂川先土器時代遺跡』

山本寿々雄他　1971　『天神堂遺跡』

伊藤恒彦　1979　「天神堂遺跡石器群の再検討」『甲斐考古』16の2

小林広和、里村晃一、藤本丑雄　1976　「山梨県権現堂石器文化の調査（第一次）」『信濃』第28巻第4号

山梨県立考古博物館　1982　『展示概説』
小林広和、上杉陽、里村晃一　1982　「桂川支流菅野川杯窪で発見された旧石器とその火山灰層序」『日本第四紀学会講演要旨集』12
保坂康夫　1985　『丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書』
吉田格　1963　「山梨県東八代郡下向山遺跡」『考古学雑誌』第48巻第３号
長沢宏昌、保坂康夫　1985　『笠木地蔵遺跡』
山本寿々雄　1955　「山梨県下に於ける無土器文化の調査（予報）―米倉山の例―」『石器時代』第１号
保坂康夫　1985　「山梨県下の先土器時代資料の検討―１―」『研究紀要』２
中山誠二、長沢宏昌　1986　『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』
長沢宏昌　1982　「市川大門町宮の前遺跡」『山梨考古』第７号
清水博他　1985　『六科丘遺跡』
末木健他　1978　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡双葉町地内１―』
保坂康夫　1986　「先土器時代の礫群の分布とその背景」『山梨考古学論集』Ⅰ
小林広和・里村晃一　1986　「村の歴史」『武川村誌』

第２節　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区の土器分類

釈迦堂遺跡群の土器は縄文早期～晩期まで、実に多種多様な土器があり、これを報告者一人で説明するにはあまりに重荷である。そこで、ここでは、旧知の土器型式に従って、群別し、さらに細別されるものを類別し、さらに文様・胎土の特徴によって、識別されるものを種別しておく。

第１群土器

早期末から前期初頭の土器群

釈迦堂遺跡群からは早期末から前期初頭にかけての住居址と土坑が多数検出されている。したがって土器の量もすこぶる多い。これら多量の土器は文様から次の数類に分離される。

１類　断面三角形の隆帯上にヘラ状工具による刻目を施したもの。
２類　断面三角形の隆帯上に貝殻腹縁刺突による刻目（貝殻刻目）を施したもの。
３類　断面三角形の隆帯上に貝殻背圧痕を断続的に押圧したもの。
４類　断面台形の隆帯上に貝殻背圧痕を連続的に施文したもの。
５類　断面台形の隆帯上に貝殻背圧痕を施す。隆帯モチーフは平行隆帯間に波状隆帯を加えたもの。
６類　断面台形の隆帯に貝殻背圧痕を加え、さらにその上に貝殻腹縁刺突および角押文（結節沈線）を加えたもの。
７類　口縁部無文のもの。繊維の有無によって、２種類に分離される。
８類　胴部の文様として、格子目文を有するもの。繊維の有無によって、さらに細別される。
９類　繊維土器のうち、口辺部に刻目隆帯で文様を描くもの。
10類　繊維土器のうち、口辺部にタガ状刻目隆帯を１本めぐらしたもの。刻目によって、２種類に分離される。
11類　繊維土器のうち刻目タガ状隆帯を２重にめぐらすもの。刻目の方向によって、細分される。
12類　繊維土器のうち、９類のように口辺部に文様を施すが、刻目をもたないもの。
13類　繊維土器のうち、10類や11類のようにタガ状隆帯をめぐらすが、刻目のないもの。
14類　東海系土器を一括した隆帯上の施文具により細別される。

第1群土器1類

隆帯モチーフにより、さらに分離される。

a種　波頂から懸垂隆帯が下がるもの。

b種　a種の波頂下に円文がつくもの。

c種　懸垂隆帯に加え、水平の隆帯がワラビテ文化するもの。

d種　懸垂隆帯と縦の隆帯と下の水平隆帯がワラビテ文化しないもの。

e種　縦の隆帯と水平隆帯によって構成されるもの。

f種　より特殊な文様となるもの。

g種　その他、モチーフが不明のもの。

これらの分類の他に、器面および裏面、さらに表裏に条痕を残すものが組み合せられる。

第1群土器2類

隆帯モチーフにより、さらに分離される。

a種　波頂部から懸垂隆帯が下がるもの。

b種　a種の波頂下に円文が付くもの。

c種　懸垂隆帯に加えて、下の隆帯がワラビテ文化するもの。

d種　懸垂隆帯と下の隆帯がワラビテ文化しないもの。

e種　より複雑なモチーフ

f種　水平隆帯に縦の隆帯が付くもの。

g種　その他不明のもの。

これに加えて、条痕の有無や他の加飾によっても分離される。

第1群土器3類

この類は、隆帯モチーフが多様である。

a種　懸垂隆帯が付くもの。

b種　a種の波頂部から縦の隆帯が下がるもの。

c種　b種に加えて、水平隆帯の一部がワラビテ文化する。この時、縦の隆帯が付けられる場合と失なわれる場合がある。

e種　縦の隆帯と2本の水平隆帯が加えられるもの。

f種　水平隆帯の間に波状隆帯を加えるもの。

g種　水平隆帯に縦の隆帯が付くもの。

h種　より複雑なモチーフをもつもの。

i種　その他、モチーフ不明のもの。

第1群土器4類

隆帯のモチーフによって、いくつかの細分ができる。

a種　懸垂隆帯をもつもの。

b種　水平隆帯に縦の隆帯が付くもの。

c種　懸垂隆帯・水平隆帯・縦隆帯が組み合せられる。

d種　水平隆帯に縦隆帯が接続するもの。

e種　小単位の弧文・円文が付くもの。

f種　水平タガ状1本隆帯
g種　水平タガ状2本隆帯
h種　より複雑なモチーフ
i種　その他、モチーフ不明

第1群土器5類

隆帯モチーフによって、いくつかに分類される。
a種　水平隆帯間に波状隆帯を加えるもの。1条のものと2条のものとがある。
b種　a種が重壇化したもの。
c種　a種の上の水平隆帯が失われたもの。
d種　a種の下の水平隆帯が失われたもの。
e種　より複雑なモチーフ
f種　その他、不明のモチーフ

第1群土器6類

隆帯上2次施文のあるもの。つまり隆帯上に貝殻背圧痕文を施し、さらにその上に貝殻腹縁刺突文または角押文（結節沈線文）を加えるものをいう。
a類――2次施文が貝殻腹縁刺突文のもの。
b類――2次施文が角押文のもの。

第1群土器7類

繊維の有無によって2種に分類される。条痕の有無によっても分類される。
c種　無繊維のもの。
b種　含繊維のもの。

第1群土器8類

胴部の文様として、格子目を描くものである。繊維の有無によって、2種に分離される。また1本引き沈線および条痕によって区分される。
a種　無繊維
b種　有繊維

第1群土器9類

含繊維で太い隆帯が文様を描くもの。
隆帯文土器のうち隆帯が文様を描くものを一括した。これらは大部分が波状口縁の尖底土器である。
a種　懸垂隆帯・水平隆帯・縦隆帯が付くもの。
b種　a種の水平隆帯が波頂部下で、ワラビテ文化するもの。
c種　水平隆帯に縦隆帯が接続するもの。
d種　懸垂隆帯・水平隆帯が併用される。
e種　その他

第1群土器10類

隆帯文土器のうち、多数を占めるのはタガ状水平隆帯のものである。これは刻目の傾きによって、2種に分離さ

れる。しかし同一個体に両者が施されることもあり、この区分はあまり厳密ではない。

a種　右傾刻目

b種　左傾刻目

c種　格子目刻目

第1群土器11類

2重隆帯も隆帯上の刻みの方向によっていくつかに分けられる。

a種　上下とも右傾刻目

b種　上下とも左傾刻目

c種　上が右傾、下が左傾刻目

d種　上が左傾、下が右傾刻目

e種　その他

第1群土器12類

隆帯上にはヘラ刻みが一般的であるが、中にはまったく、そうした文様のないものがある。この隆帯モチーフの一群はたいがい、波状口縁をなすことが多い。

a種　懸垂隆帯

b種　懸垂隆帯・水平隆帯・縦隆帯が付くもの。

c種　水平隆帯に縦隆帯に接続するもの。

d種　水平隆帯に波状隆帯が付くもの。

e種　その他

第1群土器13類

タガ状隆帯を有する一群の土器の中でも、隆帯上に刻目を持たないものがある。1本のタガ状隆帯が多いが、中には2本のものもある。小片のため1本か2本かは確定できないものもある。

a類　1本

b類　2本

第1群土器14類

東海系土器は、小量なので、極力図化することに努めた。

a種　隆帯上に貝殻背圧痕を施すもの。

b種　隆帯上に刻目を施すもの。

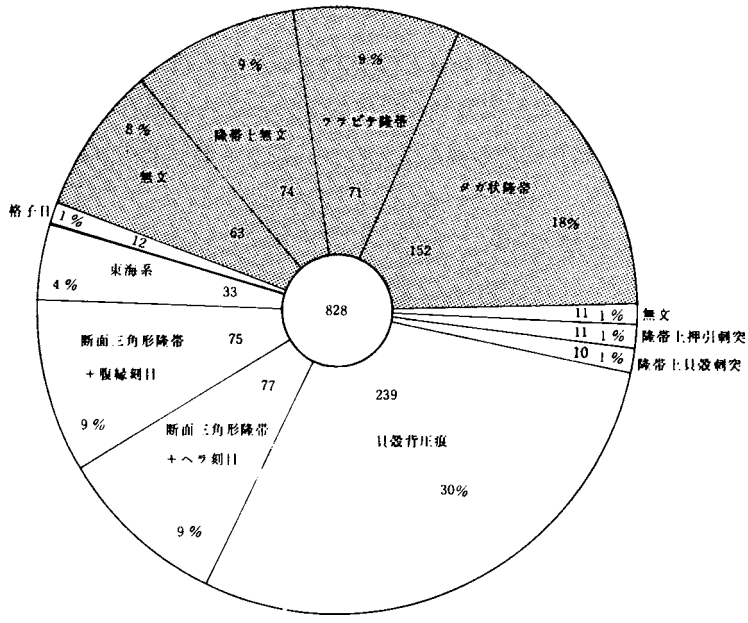
c種　隆帯上から器面にかけて竹管様工具による沈線を施すもの。

d種　隆帯に加飾しないもの。

e種　隆帯はなく、口唇部に加飾するもの。

f種　無文のもの。

g種　その他



第293図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期末～前期初頭の土器口縁出土量比較円グラフ

第２群土器

前期の土器の分類

釈迦堂遺跡の前期の土器は、第１群６類などが前期初頭に位置づけられ、前期後半のものは、関東編年でいう黒浜式から諸磯ｃ式まである。ただし、一部十三菩提式土器があるが、これは第３群土器に含めて扱った。

さて、黒浜式土器は搬入品として、該期の極く一部を占めるにすぎないし、また北白川下層式にいたっては、さらにその分量は少ないのである。ではその大部分を占める土器は一体どんな土器であろうか。信濃の有尾式という黒浜式土器に併行する土器がある。この土器は、櫛歯状工具による列点文を主な特徴とし、釈迦堂２群１類とは旨を異にしている。

釈迦堂２群１類は、下記のような特徴がある。

① 繊維を含まない。

② 器壁が薄く、５～６㎜程度である。

③ 繊維土器のような内面ミガキはなく、指頭圧痕や整形痕を明瞭に残す。

④ 縄文は２段の単節縄文による菱形縄および２段の反の撚りであるＬＬもしくはＲＲを用いた斜縄文およびこれと単節縄文を組み合わせたものが多い。

⑤ まれに縄文地の上に沈線を施すものがある。中には口縁波頂部から隆帯が下がるものもある。

これらの特色をもつ一群の土器に対して、新たに型式名を付与することは、一遺跡一型式というような批判のそしりを受けるかもしれないが、阿久遺跡や十二ノ后遺跡をはじめとして、釈迦堂第２群土器第１類に同定される土器は、近年増加が著しく、あえて、釈迦堂Ｚ３式という仮の型式を与えて、記述したいと思う。なぜなら、黒浜式、北白川下層式土器を客体にもち、この５点の特徴をもった土器であるからである。阿久遺跡では土器型式の設定は行っていないが、阿久Ⅲａ期、Ⅲｂ期の設定を行っており、実質的には土器型式の設定と同じである。

なお、釈迦堂Ｚ３式として一括して扱ったが、該期の住居址はＳＢ－02、05、06、09、21、27、28、38、39、55と多く、重複もあるので、いくつかの細別を要すると思われる。

さて、蛇足となるかもしれないが、該期の縄について若干触れておきたい。

黒浜式土器と併行する釈迦堂Ｚ３式は、縄文を多用する時期であるから、いくつかの縄がある。その中でも、無節の縄が割合と多く利用されている。

例えばR$\left\{\begin{matrix}\ell\\ \\ \ell\end{matrix}\right.$も、R$\left\{\begin{matrix}R\dfrac{\ell}{\ell}\\ R\dfrac{\ell}{\ell}\end{matrix}\right.$も同じ無節の縄として土器には施文される。

前者の縄は正の縄であるから条も正しく、整然と並んで施文されるが、後者は反の縄であるから、一般的には条はとぎれとぎれになり、4条ごとに同じ条が現われるのである。ところが撚り方によっては、両者とも同じような現われ方もする。一般的には、反の撚りには無理があるので、条の1本1本が直線的ではなく、波状をなすので一応区別が付く場合が多い。

さて、前期の土器群は次のように分類される。

第2群土器

1類　黒浜式に併行する在地の土器、縄文や沈線により細別が可能。

2類　諸磯a式直前から諸磯a式を含む。

a　沈線による菱形文――口縁は2重口縁になることが多い。

b　広義の助骨文

c　押引文・爪形文・平行沈線文

d　木の葉文および木の葉状入組文

e　その他

3類　諸磯b式に比定されるもの。

a　巾広爪形文を有するもの。

b　浮線文を有するもの。

c　沈線文を有するもの。

d　縄文

e　その他

4類　諸磯c式

5類　関東系土器の黒浜式を一括した文様によって、更に細別される。

これは新井和之氏の第3段階に位置するものであろう。

6類――近畿・東海系土器、北白川下層式土器とこれに併行する東海系土器を一括した。

a　北白川下層Ⅰa式

b　〃　Ⅰb式

c　〃　Ⅱa式

d　〃　Ⅱb式

e　〃　Ⅱc式

f　東海系末名型式

第3群土器1類

五領ヶ台式土器は複雑多岐にわたるので、文様に分析して、説明することにする。土器はいくつかの文様が組み合わされることが多い。

a　浮線文　刻目文

b　集合沈線文

c　細線文

d　無文地に沈線文など

e　縄文地に沈線文、沈線の施文具により、半截竹管文と1本引き沈線文の別がある。

f　縄文地に指頭圧痕隆帯など

g　結束・結節縄文

h　縄文

i　単軸絡状体による撚糸文など

g　その他

第3類土器2類

東海系土器である。縄文が堅い繊維でO段3条であることに特徴がある。

5群土器

いわゆる新道式土器を一括した。この土器群の内容もまた多岐に及ぶ。

1類　口辺部文様帯として、三角区画帯をもつもの。区画する隆帯にそって施される文様要素によって、さらに細分される。

6群土器

藤内式と呼ばれている一群である。釈迦堂遺跡群塚越北A地区では、この時期の集落があり、時期差も予測され、詳細な分析が必要であるが、ここでは概括的に分類しておく。

1類　深鉢形の区画文土器を一括する。

2類　深鉢形の抽象文などを一括する。

3類　無文および指頭圧痕文土器

4類　縄文を施すもの。

a　全面

b　胴部のみ

c　擬似縄文

5類　口頸部に楕円文を有するもの。

6類　有孔鍔付土器

7類　浅鉢形土器

8類　台形土器など

9類　その他

第10群土器

中期末から後期初頭にかけの土器群を一括した。

1類　縄文を有する土器群

2類　沈縄文を有する土器群

第11群土器

後期初頭の土器群、主に称名寺式土器を一括した。

1類　充塡縄文を有するもの。

2類　沈線区画の中に列点を有するもの。

3類　無文のもの。

4類　その他

12群土器

堀之内式土器を一括した。この土器は1式と2式に分類されているが、ここでは、分離しないで扱うことにする。

1類　2本の沈線で文様を描くもの。

2類　2本の沈線間に列点を施すも。

3類　3本沈線で文様を描くもの。1類とほぼ同様であるが、中には2本と3本を併用するものもある。

4類　3本の沈線間に烈点を施すもの。

5類　無文地に有刻凸帯文を施したもの。

6類　くの字形口縁を有すもの。

7類　めがね状文などを有すもの。

8類　縄文地に沈線を施すもの。

a　2本沈線

b　3本沈線

9類　胴部文様帯として磨消縄文を有するもの。

10類　口頸部文様帯として、横帯磨消縄文帯を有するもの。

11類　10類と同じであるが、縄文ではなく、沈線や列点を有するもの。

12類　無文粗製の土器

13類　底部を一括

14類　その他

13群土器

加曽利B式土器である。本遺跡群ではB1式以降の後期の土器は認められない。

1類　口頸部文様帯として、横帯文を有するもの。

a　横帯文が磨消縄文

b　横帯文が刻目文

2類　無文地に沈線文

3類　無文地に集合細沈線文

4類　その他

14群土器

晩期の土器である。ただ一片のみの発見である。おそらく雷文土器の終末に位置するもので、大洞C1に位置付けられよう。

第　3　節　　釈迦堂S—Ⅰ区の遺物分布

釈迦堂Ｓ－Ⅰ区は京戸川扇状地の一つの台地の中央部に位置し、先土器時代から古墳時代の長期にわたり　多くの遺物と遺構が重複していた。それ故に、時代別に分布図を作成しても、それが個別の時代を反映しているか否か疑問も残るが、まったく相反したものとも思えなく、むしろ、その個別の時代をある程度反映しているように思える。

この塚越北Ａ地区と三口神平地区とでは、遺物の分布状況は対照的な様相を見せている。すなわち、塚越北Ａ地区では住居址群の中央部に遺物が集する。それは単に土器片ばかりでなく、石鏃などの石器はいうにおよばず、石や水晶のフレイクまでも、台地の中央部に集中するようである。

まず294図の土器口辺部の分布状況を見ると、早期の住居址が台地の中央部に集中するのに対して、それを取りまくような分布を示す。これは早期の住居址が後の時代に撹乱されたためであろうか。次に前期の口辺部の分布状況には若干の注釈が必要である。というのは、諸磯式と黒浜式併行式（釈迦堂Ｚ３式）との出土比率と分布図の総数比が、ほとんど逆転しているように思える。というのは、小破片の口縁であれば、文様がないかぎり、その判別は非常に困難である。黒浜式併行式の場合、口縁直下では研磨を割合とていねいにしているが、それ以下に整形痕や指頭圧痕を残す場合が多いからである。よって、この黒浜式併行式と諸磯式の分布は合せて考えてみた方がよさそうである。次に藤内式の口縁の分布を見ると、ほぼ住居址と重なるような環状をなしている。次に後期の口縁は称名寺式から堀之内2式までを含むもので、中期とはわずかな間層を置いて、遺跡一面に分布が、見られたが、特に遺構と思われるものは、敷石遺構と土坑のみであった。

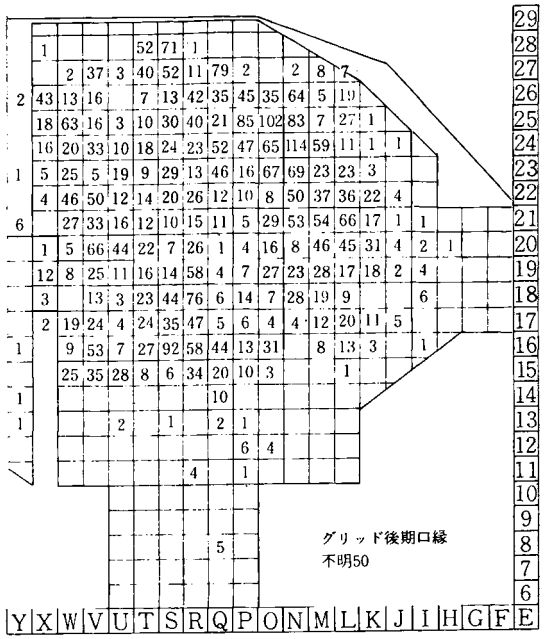
土偶の分布は、注目されてよいと思うのは、土偶が集落を離れてはなかなか出土しないという状況を示しているからである。

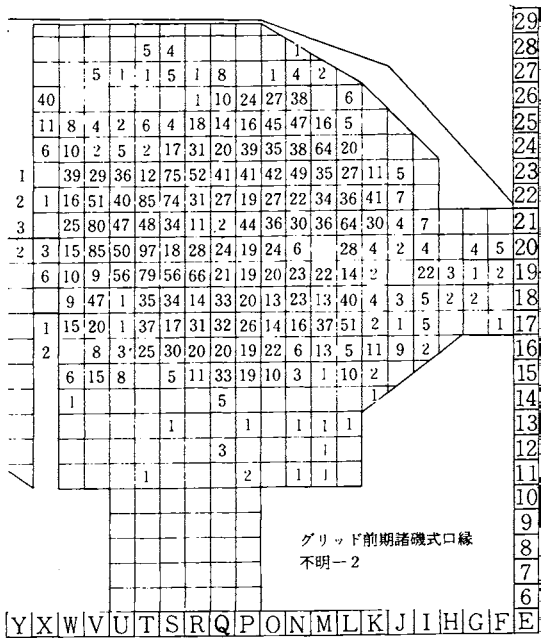
石器等の分布についてみると、ほぼ台地の中央部に集中しているようであるが、中心地区Ｐ－20付近では、遺物は稀薄になるように思える。

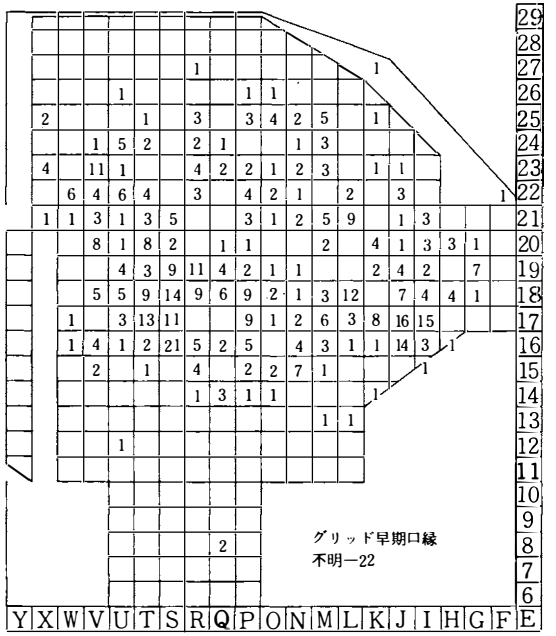
では、土器・石器等のこうした分布状況は、釈迦堂塚越北Ａ地区のどの時期の状況を反映したものであるかが、大きな問題となる。ここで、最も新しい後期の口辺の分布状況を見ると、それ以前のものと、相反するような状況ではなく、むしろ、早期や前期の状況と相似した傾向を示している。また早期についてみれば、いくつかの細別が可能で住居と遺物の分布については、口辺部を個々の型式区分した上でなければ、明言は避けた方がよさそうである。前期についても、同様なことが言えるが、ここでは、住居群と重なるように、あるいは住居群の内側に土器等が分布するようである。中期については、これがより一層顕著になり、しかも土坑（墓）が、住居群の内側に分布している状況を示すのである。

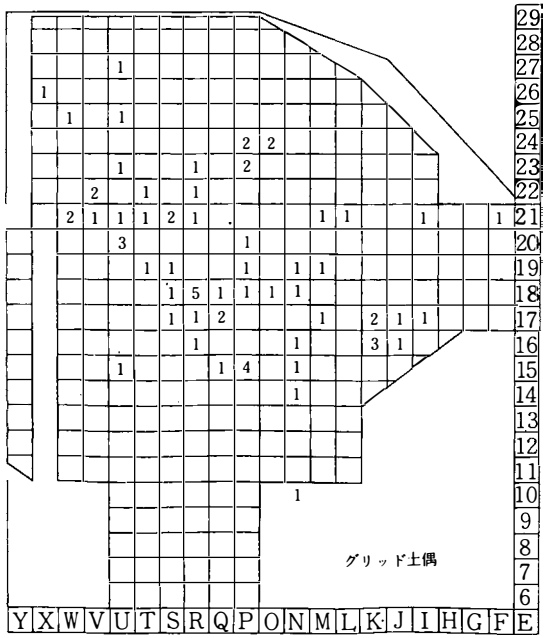
こうした集落空間の利用法は、中期後半を主体とする三口神平地区とは大きな違いを示している。むしろ、相反する分布である。これは時期的な差として理解されようが、個々の集落の差としても理解される。ところで、地理的な一つのまとまりを集落として考えてみても、実際には、一時期３～４軒という単位では、はたして、それが集落として成立するかどうかがあやぶまれるという問題も生じるが、地理的・時間的まとまりの住居群に遺物分布の１つの傾向があることは確である。

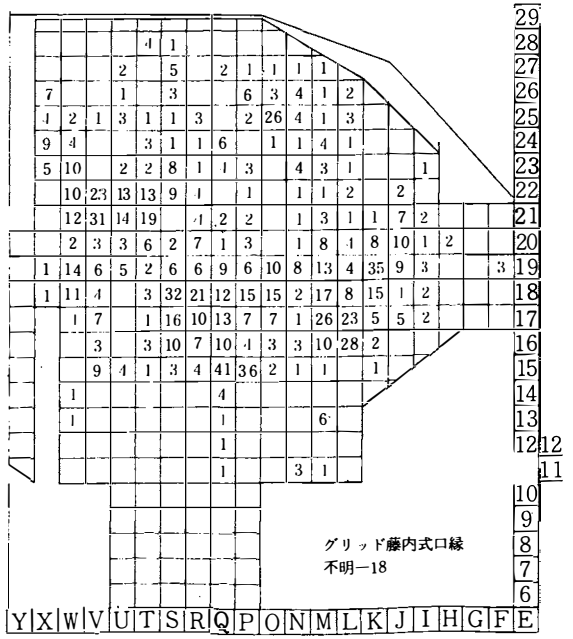
いずれにしても、遺跡に於ける土器・石器をはじめとする遺物の総体的な分布というのも、何らかの人間行動の反映であることはいうまでもない。

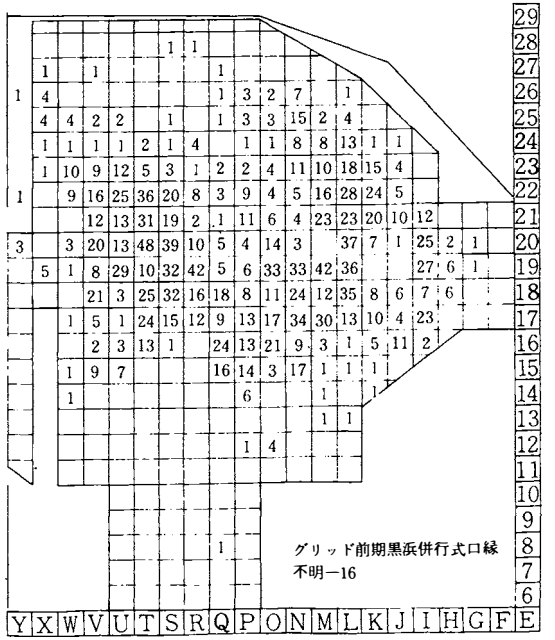






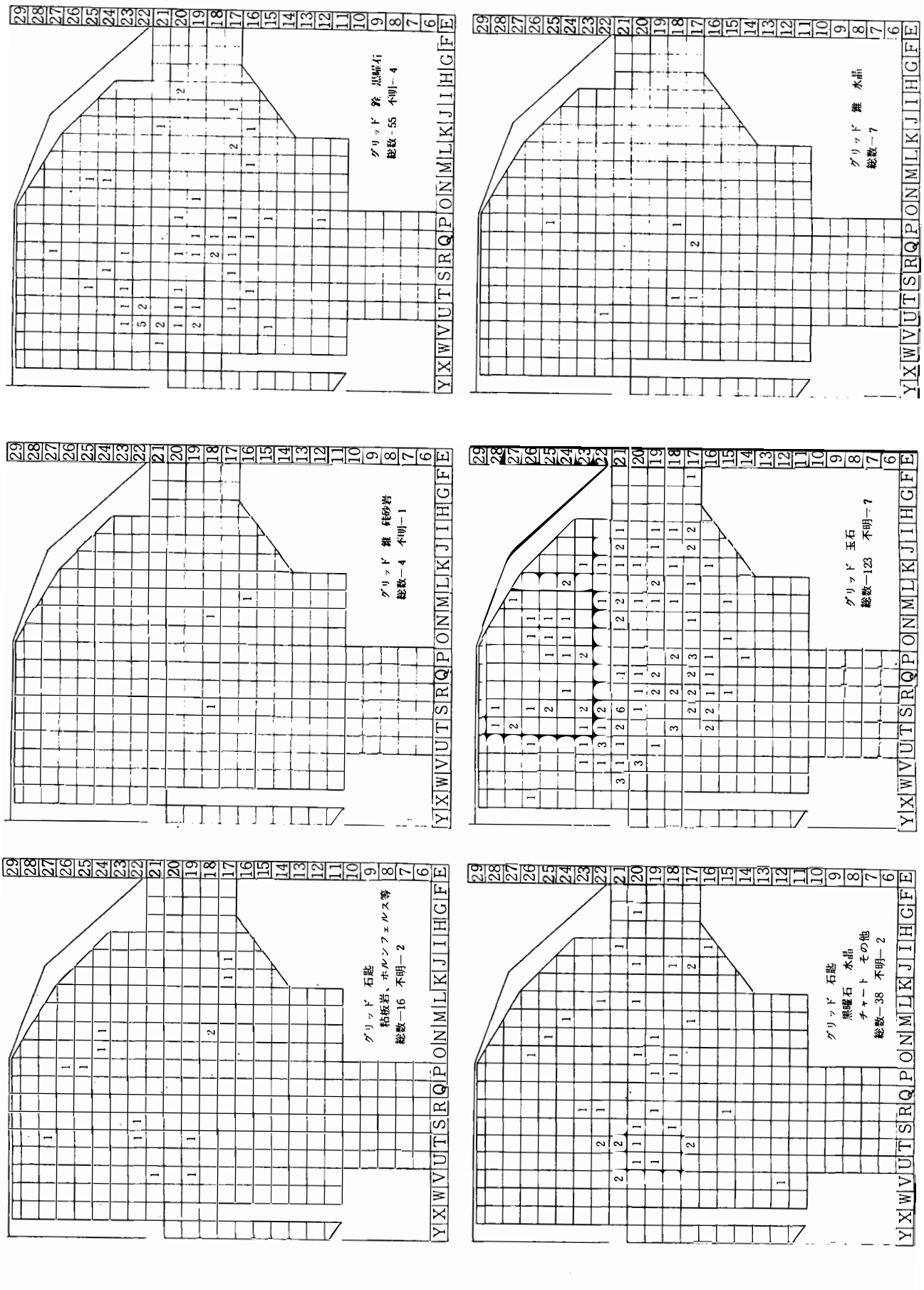




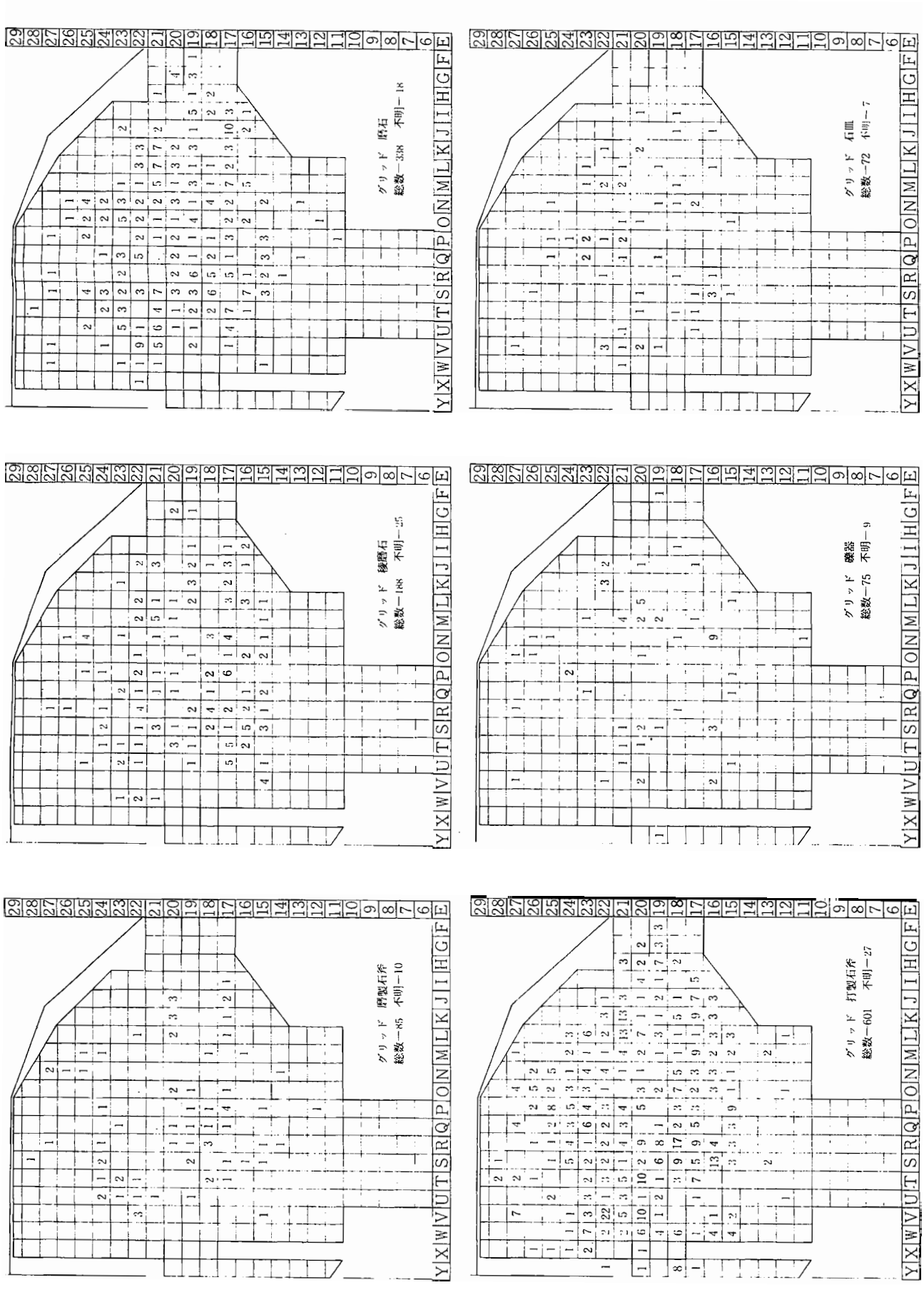


第294図　釈迦堂Ｓ－１区　土器口縁・土偶分布図

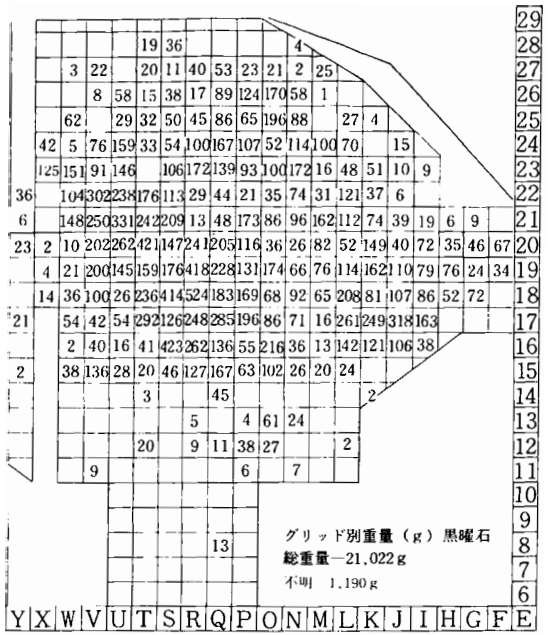
第295図 釈迦堂S−1区 石器分布図 (1)

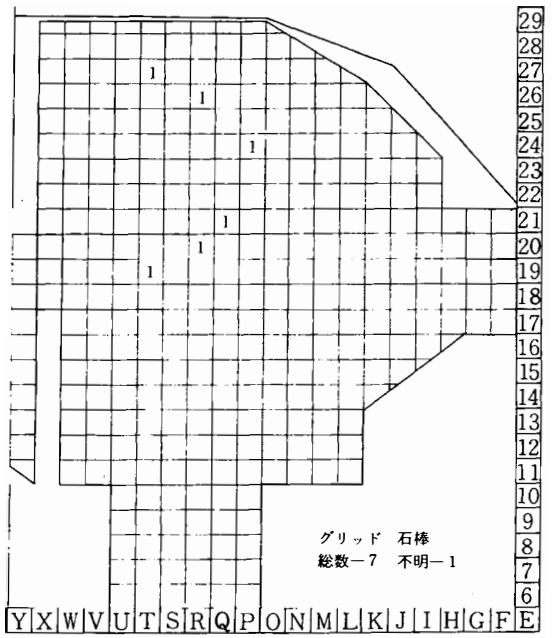


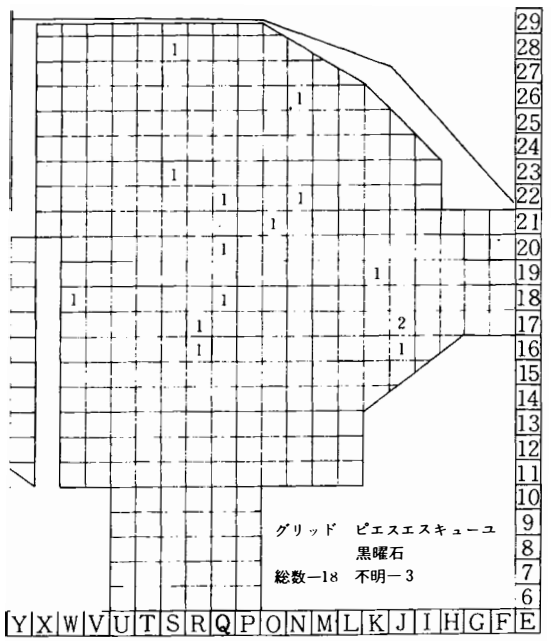
第296図　釈迦堂Ｓ－１区　石器分布図　(2)

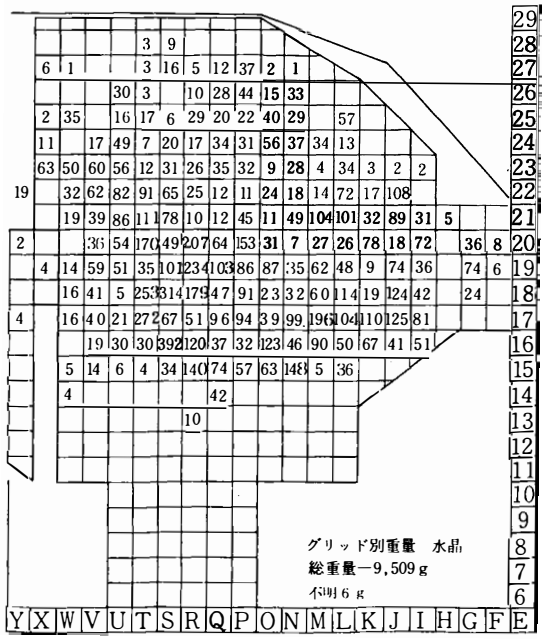


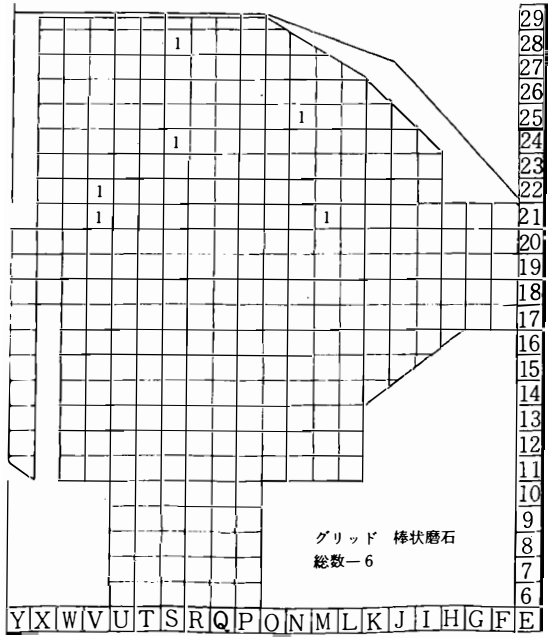
第297図　釈迦堂Ｓ－１区　石器分布図　(3)

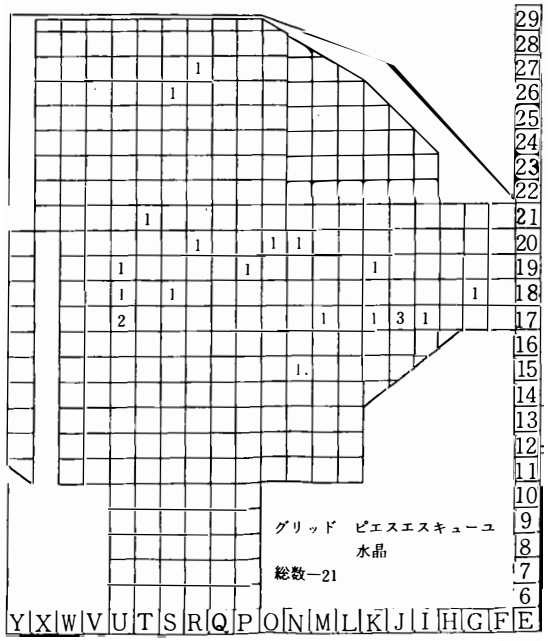




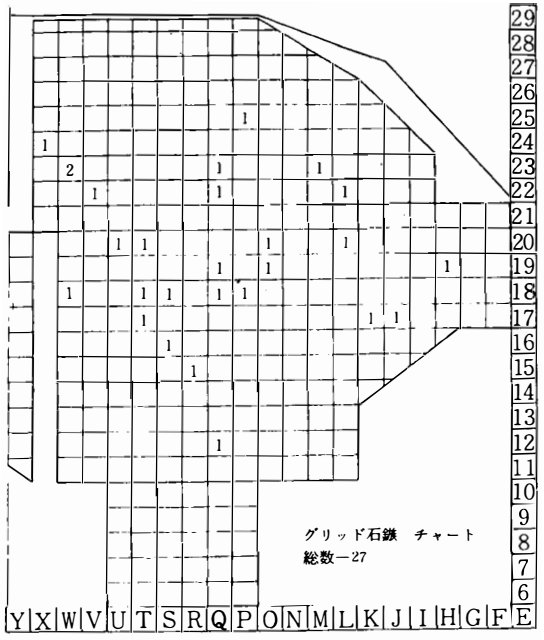


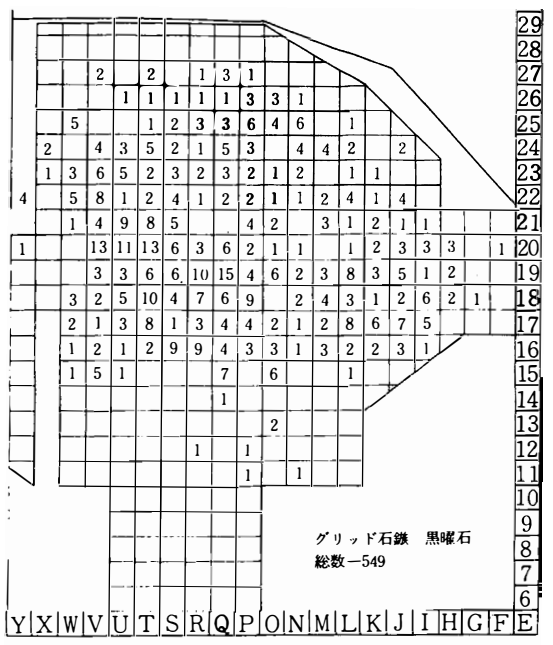


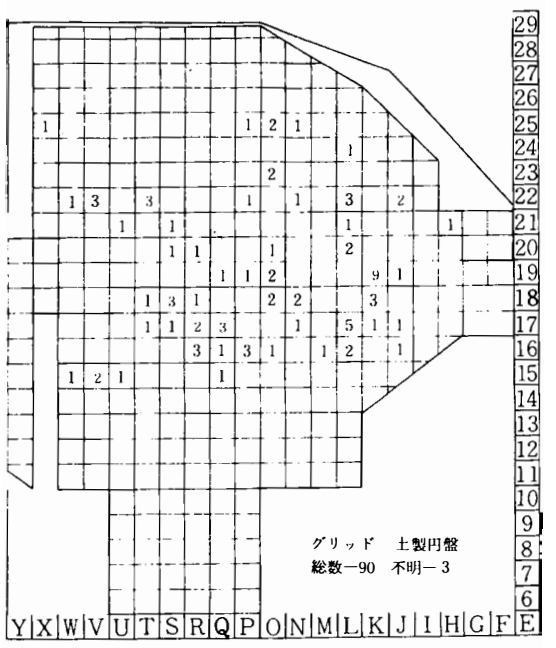


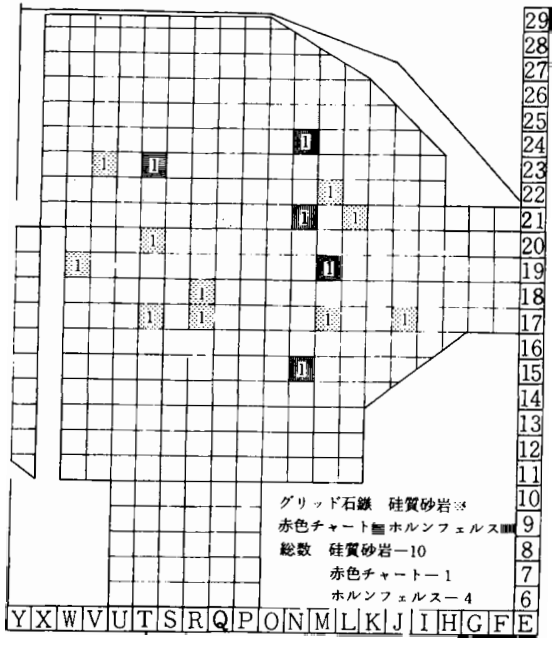


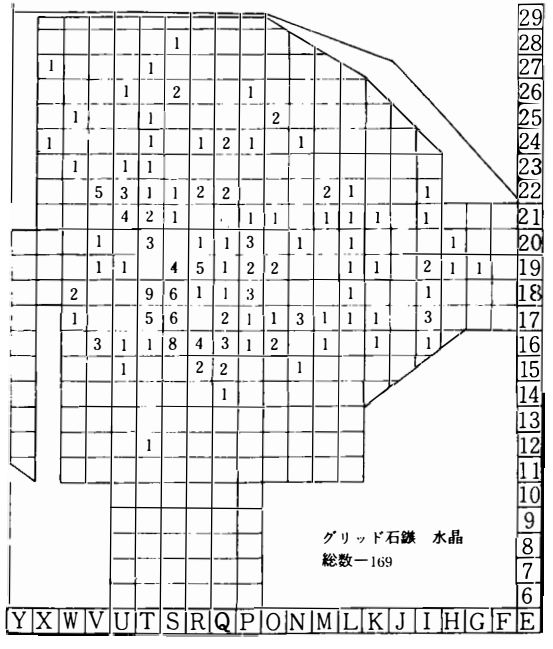
第298図　釈迦堂S—1区　石器分布図（4）

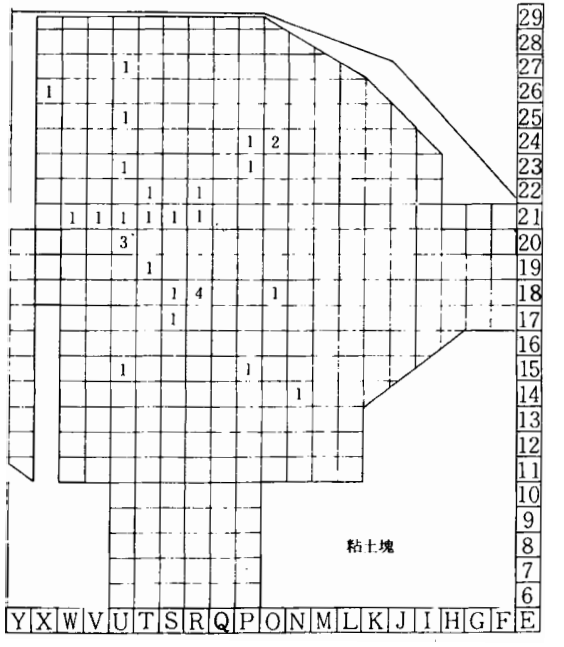












第299図　釈迦堂Ｓ－１区　石器等分布図（５）

第　4　節　　釈迦堂S—Ⅰ区の集落変遷

早期末～前期初頭の集落

早期末の神之木台式～下吉井式期にかけて住居群は、住居址内出土土器のうち口辺部の時期判別にたる資料が少ないため、時期不明の住居址もいくつかある。

遺物整理途上『研究紀要』において、早期の無繊維土器を5類に分類して説明し、それぞれ釈迦堂Ｓ1式～Ｓ4式まで設定した。この時点では含繊維土器の分類をし得てないのであるが、今回含繊維土器の動向も加味して、考えてゆきたい。この含繊維土器と無繊維土器は本来別系統のものであったが、併用されたものと思われる。

釈迦堂Ｓ1式期

断面三角形隆帯に貝殻腹縁刻目を施す土器を出土する住居址

ＳＢ—14、17、36、53、46

これに含繊維土器のうち隆帯がワラビテ文化するものも加えることにする。それはＳＢ—53でワラビテ文隆帯文の土器と断面三角形隆帯に貝殻腹縁刻目を施したものが伴出しているからであり、ＳＢ—17でもワラビテ文隆文土器が伴出しているのである。

ワラビテ文のある土器を出土する住居址

ＳＢ—52、15、16、54

これらの住居群は重複するものはないが、近接した住居址などがあり、さらに細分されるだろう。

釈迦堂Ｓ2式期

断三角形隆帯にヘラ刻目を加えるもので、Ｓ1式土器と施文具が異なるのみで、その施文具の判別は困難なものが多く。時間的にも同様であろう。

ＳＢ—11、25

これらの住居址は重複しているので、建て替であろう。

釈迦堂Ｓ3式期

断面台形の隆帯に断続的に貝殻圧痕を断続的施すものである。

ＳＢ—49、44、30、56

釈迦堂Ｓ4式期

断面台形の隆帯に貝殻背圧痕を連続的に施したものである。Ｓ3式に刻目の意識が残るのに対して、Ｓ4式ではそれは失なわれる。

ＳＢ—18、13

釈迦堂Ｚ1式期

ここでは下吉井式から前期と考えているので、Ｚ1式は下吉井式にある。下吉井式はその型式の幅があまりに広いので、ここでは細別して、隆帯上に二次施文として貝殻腹縁刺突や押引文（角押文）を施すもので、ＳＢ—48のように平行隆帯間に二条の波状隆帯を施しているものも含めると、ＳＢ—19、22、48となる。

なお、出土遺物が少なく、時期判別不可能な住居址は次のとおりである。

ＳＢ—35、33、24、32、34

前期後半の集落

釈迦堂Ｚ３式の新古を型式学的にも考究する手だてが少ないが、今ここに暫定的に住居址の時期を、重複と近接を避けて、推定すれば下記のようになる。

○全縄文の土器を主体とする住居　ＳＢ－21、02、28、55

○諸磯ａ式と竹管文をもつものを出土する住居　ＳＢ－06、09、41

○諸磯ａ式がやや多く含まれる住居　ＳＢ－05、27、39

この他に、ＳＢ－38のように資料が少なく、判別が不能なものもあり、ＳＢ－05、42のように埋甕が複数あり、ＳＢ－05のように埋甕炉の切り合いがあることは、継続時間にある程度の幅を考えなければならないであろう。

さて、釈迦堂Ｚ３式期の住居群がおおよそ３時期に分離されるとすれば、前期の集落もまた１時期３～４軒ということになる。

諸磯ａ式期の集落

諸磯ａ式土器の出土は、多いわけではなく、これ以前の黒浜式併行式期（釈迦堂Ｚ３式）のものと判別が困難なものが多い。

諸磯ａ式土器出土した住居址はＳＢ－03、08、42である。ＳＢ－03では諸磯ａ式土器と諸磯ｂ式土器の古い部分である爪形文系土器も伴出している。これはＳＢ－08においても同様である。これに対してＳＢ－42の埋甕炉（図141－３）は２重口縁を持つ竹管文土器で黒浜式併行式から諸磯ａ式の古い部分に属するものと思われる土器である。ＳＢ－08、06、41等は黒浜式併行期(釈迦堂Ｚ３式期)に属し、いずれも埋甕炉を持ち、これに対して、諸磯ａ式、ｂ式期の住居では埋甕炉を持たないから、このＳＢ－42の埋甕炉も、諸磯ａ式でも最も古い部分に属するものであろう。

また、ＳＢ－03と08は大型住居と小型住居の二棟対となったものではなかろうか。さらに諸磯ａ式期の土坑はＳＫ－103、132、137がはっきりしている。

諸磯ｂ式期

諸磯ｂ式土器の細別は４段階まで進んでおり、Ｓ－Ⅰ区の住居址の時期をどの段階に位置付けるかは、判断に迷う所がある。特にＳＢ－12のように、出土遺物の豊富な住居址においては特にそうである。今村氏の区分に従えば、ＳＢ－37、43が爪形文系土器を根拠に古にＳＢ－12を爪文系土器、沈線文系土器、浮線文系土器をも含むものであり、また住居も内接する住居があったと思われ、建替えおよび重複が考えられるので、古～中の段階と考えられる。ＳＢ－07は、破片としては何種類かのものがあるが、浮線文系土器の存在から中段階に置くことができよう。なお、この浮線文系土器は、無節の縦の縄文を地文としている。諸磯ｂ式土器の器形が中期のそれと近いことを合せれば、縄文においても同様なことが言えるのである。

ＳＢ－20は、少し離れた住居である。出土土器も、縄文地に沈線文を施すものであるが、その器形が後出の諸磯ｃ式に近くなっている。そうすれば、諸磯ｂ式期の集落は、

諸磯ｂ式古　　ＳＢ－37、43あるいは12または03が一部併行か。

諸磯ｂ式中　　ＳＢ－12、07

諸磯ｂ式新　　ＳＢ－20

以上の住居群が展開し、土坑は諸磯ｂ式期として、確定できるものはない。ただし少破片が入っていたものはいくつかある。

中期の集落

五領ケ台式期

五領ケ台式期の住居はＳＢ－23である。該期の住居は１軒のみで、他には検出されていない。全般的に五領ケ台式期の集落はまとまったものが少ない。大泉村天神遺跡のものが、７軒と環状集落の形態をなすようであるが、整理途上にあるので、細別された時期区分は不明である。釈迦堂遺跡群においても、集落景観をなすものは少ないようである。

土坑の時期も住居の時期と一致しない。ＳＫ－92は集合沈線文系土器で在地系のものと思われる。これに対してＳＫ－155は関東系の細線文系土器で、今村氏の五領ケ台１ａ式にあたる。

それぞれの遺構の時期に差があるようであるから、五領ケ台式期の集落は、遺跡群全体の中で考えなければならないだろう。

藤内式期

五領ケ台式から続く狢沢式土器は破片はあるものの遺構は存在しなかった。また新道式期のＳＢ－03上層遺構の新道式土器があるが、これは、新道式土器でも新しい部分にあたり、藤内式土器と一部併行するものであろう。新道式期では、ＳＢ－31藤内式期の住居址の炉址の下部で検出されたＳＫ－261の阿玉台式土器が、該期のもので、阿玉台Ｉｂ式にあたる。阿玉台Ｉｂ式はＳ－Ⅳ区ＳＢ－53で、新道式土器の古い部分のものとが伴出している。

藤内式期に至って、住居と土坑群が充実してくる。藤内式土器の厳密な型式学的区分は、未だ充分ではないが、Ｓ－Ｉ区の藤内式期の住居の出土土器を検討すれば、より井戸尻式土器に近いものと、藤内式本来の様相を示すものに分離される（県下の藤内式は縦区画文土器が主体を占める）。　そうすれば、ＳＢ－51、10、40、04が古い部分である。ＳＢ－10の炉形態は五角形石囲炉で、主軸と直角に出入口部側に方柱状石材を設置し、奥壁側が鋭角に突き出している。これに対して、ＳＢ－29、31は方形石囲炉となっている。他にＳＢ－47、01は炉形態が不明であるが、ＳＢ－47、31、01、29が、新段階の集落といえよう。さて、中央土坑群は、藤内式土器を確実に出土したものは53基である。この他に時期半別不能なものを含めれば、さらに土坑の数は増加するであろう。この藤内式期の土坑は、ほぼ完形土器を埋設しており、ＳＫ－01のようにミミズク把手付土器の中に、別々の土器の底部を利用して合子にしたものが出土している。他にＳＫ－46のように石製の玦状耳飾が出土した例もある。いずれにしても、これらの土坑群は住居群の中央部、つまり、いわゆる環状集落の内側に土坑群が集中することになる。これがＳ－Ｉ区の藤内式期の集落の特色であり、Ｓ－Ⅲ・Ｓ－Ⅳ区の該期の集落とは特色を異にしている。

よって、藤内式期の集落は１時期４軒の環状集落をなし、中央部は墓域という構成を取るのである。また個々の住居の集落内での役割は、それぞれの住居内での出土遺物と関連するものと思われる。仮にＳＢ－04、10、40、51の集落においては、有孔鍔付土器はＳＢ－04に限られ、広畑形態の土偶はＳＢ－04、10から出土している。土笛はＳＢ－51で出土している。またいわゆる鳴る土偶（楢原形態）の土偶はＳＢ－51で出土しているという状況である。土偶は個々の住居で保有しており、一般的な形態である坂井形態の土偶はそれぞれに共通した祭祀を、また広畑形態や楢原形態の土偶は、独立した特別な祭祀を窺わせる。

特に有孔鍔付土器は、藤内式期２時期を通じてもＳＢ－04以外の住居址には認められず、ＳＢ－04が他の遺物からも特別な住居であって考えられる。

次にＳＢ－01、29、31、47の時期について考えてみよう。いずれも撹乱の著しい住居であるが、楢原形態の土偶がＳＢ－31、土笛がＳＢ－47で出土しており、これはＳＢ－51の建て替えであろう。この時期、広畑形態の土偶や有孔鍔付土器を持つ住居址はないが、住居址の撹乱が著しいため、何らかの考慮を必要としよう。

ＳＢ	炉　　址	出土遺物（図化）	特　殊　遺　物	備　　考
ＳＢ－47	不明	11	土偶１　土笛	撹乱が著しい
ＳＢ－51	五角形炉（一部欠） （方柱状石材使用）	5	土偶３　土笛１ （鳴る土偶１） 土製円盤１	
ＳＢ－31	方形石囲炉 （方柱状石材使用） 完存	7	土偶４ （鳴る土偶１） 土製円盤１	撹乱が著しい
ＳＢ－01	不明（撹乱）	22　台形土器２	土偶４　土製円盤３	撹乱が著しい
ＳＢ－10	五角形炉 （方柱状石材使用）	46　台形土器１	土偶３　広畑形態土偶１ 土製円盤６	
ＳＢ－40	五角形炉 完存（柱状石材使用）	22	土製円盤９	
ＳＢ－29	方形石囲炉 完存	5	土偶１　土製円盤２ 決状耳飾（土製）	
ＳＢ－04	石囲炉（破壊） （炉石１個存在）	26　台形土器１	土偶７　広畑形態土偶１ 有孔鍔付土器２　ミニチュア１ 土製円盤７	

第 5 節　土　　偶

釈迦堂遺跡群は土偶の出土数が異常に多く、千数百点を越えるものと思われる。これは山梨県全般にわたって、土偶の出土数が多く、土偶を出土しない遺跡は稀れであるという状況を反映しているのであろう。

さて、土偶の研究は様々なアプローチの仕方があるが、考古学の本来的な方法は実物の観察から出発して、その類型化がまず、その第一歩と思われる。

そこで、土偶が割られるという事実に従えば、その割れ口を観察するのが最良の方法と思われ、そうした研究は、乙益（1965）、武藤（1975）、小林（1977）などがある。またこれとは別に土偶がどの部分で割れるかという研究もある。

筆者は割れ口の観察から、これがいくつかの粘土塊をつなぎ合せて、製作されたという結論を得て、これを土偶の分割塊製作法と呼ぶことにして、すでにいくつかの小論を発表した。（小野　1984ａ、84ｂ、86）それは、今回のような具体的事例を多用したものではないが、本報告にあたって、割れ口を次のように分類図化した。

①　単なる割れ口

②　分割塊の見える割れ口

③　分割塊のネガテイブな割れ口

④　割れ口を磨耗させたもの

以上の４種をそれぞれスクリートーンで表示した。これによって、どの部分にどのような割れ口があるのか、判明しよう。

次に、土偶はその割れ口ばかりでなく、その本来の姿が、一時期一集落に於いて、どのような役割を持っていたかを、考究する必要が生じよう。つまり、土偶という一つの遺物を遺物総体の中で位置付け、さらに遺跡全体の中で位置付けるという作業である。

そこで、土偶の出土数の多い遺跡に於いて、初めて顕著なことは、一時期の土偶についても、様々な形態、姿態があるという事実である。土器の器形――形式がその機能を反映するとすれば、土偶の形態もまた土偶の機能の反映しているという論理も成立しよう。もしそうでなければ、このような様々の姿態の土偶を製作した意味が薄れよう。東京都の神谷原遺跡の土偶を分割塊製作法の観点に立って分析した結果、この遺跡では一時期一集落において、いくつかの形態の土偶が存在するという事実が得られた。

それは次のように分類される。

坂井形態――有脚立像形土偶、両手を広げたもの。

神谷原形態――坂井形態の変形、両手を下げている。

広畑形態――出産の状態を現わした土偶

小形の形態――より小さな粗像の土偶

という分類であったが、これに1985年円錐形土偶のうち中が中空になるものを、楢原形態の土偶として付け加えた。

これらを、形態別に並べると、別表のようになる。この表からもわかるように、坂井形態の土偶が、土偶の基本的な形態ということができよう。これに、広畑形態、楢原形態の土偶が各２個体づつあり、小形土偶の数は多少問題もあるが、２個体を数えることができる。

なお、広畑、楢原形態の土偶は、各々の住居址に各１点という数であり、時期的には大別した２時期のうち、広畑形態は古期のみで、楢原形態は両時期にわたっている。ただし、集落の項でも触れたように、ＳＢ―04は特別な住居址であるから、この点をある程度考慮する必要があろう。

なお、土偶とともに忘れてならないのが、土器片利用の土製円盤である。この土製円盤の数は各地の遺跡でも比例する関係がある。例えば、岩手県立石遺跡で土偶218、土製円盤471、千葉県西広貝塚で土偶136、土製円盤120（うち有孔11）、東京都神谷原遺跡で土偶53、土製円盤155（29は擦っていないもの）、また千葉県高根木戸遺跡では、土偶も土製円盤も出土していないのである。

ふりかえって、釈迦堂Ｓ－１区の状況を見れば、131（後期が14）の土製円盤があり、中期では117個近くの土製円盤が利用されていたことになる。その中で、ＳＢ－04では土偶が７、土製円盤７、さらに上層で土製円盤が９出土している。こうした状況からも、土偶と土製円盤の関係が窺える。

次に、各土偶の機能および用途については、別稿に譲りたいと思う。

藤内式期土偶形態表

形態 / SB	坂井	広畑	楢原	小形	その他	備考
SB－04		30胴＋腰＋脚		24頭、	14頭、53胴、55胴、60胴、72脚	
SB－10		31腹			12頭、63脚	
SB－40						
SB－51	29腕＋胴＋腰		57胴		73脚	
SB－01				33胴＋脚	49臀、52臀、66脚	
SB－29					50臀	
SB－31	11全身		58胴		25頭、67脚	25は小形土偶か
SB－47					19頭、61胴	
SK－06	18頭＋胸					
SK－220	34胴					

形態 / グリッド	坂井	広畑	楢原	小形	その他	備考
I－21	35胴					
K－17	36胴					
F－21	37腕					
P－24	38腕					
1号墳	39腕					
P－15	40腕					
R－16	41腕					
V－22	42腕					
S－19・20				45腕		
N－16	47胴					
P－18	48胴					
P－20	51臀					
P－15	56腹					
I－17	64脚					
Q－18	65脚					
V－22	74脚					
R－18	78脚					

第 6 節　石　　器

釈迦堂遺跡群では、約15,000点以上の石器が出土している。そのうち粘板岩系の打製石斧は、風化が著しく、発掘時では石器として取りあげたにもかかわらず、整理時には石片と化してしまったものも多々あり、打製石斧に関するデータはある程度考慮しなければならない。

早期末～前期初頭の石器

この時期の特色は、住居址出土フレイクの重量比からもわかるように、水晶の使用頻度が他の時期に比べて著しく高いといえる。水晶の原石が手近に入手できるという地理的条件のみが影響しているとは思えない。

石鏃は、凹基三角鏃で、凹基五角形鏃といったものは、特に見られなかった。やはり水晶鏃の比率がやや多いといえよう。石匙はこの時期にはどうもあまり普及していたとは思えない。ＳＢ－19、22、50で出土し、いずれもやや小形のものである。ドリルは定型的なものというより、やや細長い剝片を利用したものが多いといえる。打製石斧は一般的なものでなく、住居址から１～３点程度の出土量である。磨製石斧は数点の出土がある。特にＳＢ－36および50で出土した片刃のものは、早期末の確実な資料といえよう。稜磨石・磨石ともに磨石類は多い。これと対応する石皿は、中凹みのものはあまり普及せず、盤状のものが多いと思われる。稜磨石はその使用痕から盤状石皿とセットになると思われる。早期の特徴的な石器の一つとして礫器があげられるが、この石器も前期から中期まで利用されるらしい。その他ユーズドフレイクも各住居址から数点づつ検出されているがこれは数えなかった。

前期の石器

前期になると石器の器種と量が増大する特色がうかがえる。石鏃の量も飛躍的に増加し、ＳＢ－06では24点という数である。石匙も定着するが、石材は中期のような粘板岩系の石材はなく、チャートや硅質砂岩や黒曜石が利用され、大型のものは稀である。ドリルもまたやや数が増える傾向にあり、ピエス・エスキーユの数も増える。打製石斧は完全に定着普及する。磨製石斧では乳房状磨製石斧が顕著となる。稜磨石・磨石ともにその量が多い。また石皿についても、住居址付きの盤状石皿とともに、熔岩製の中凹石皿が多くなる。礫器の量も意外と多い。玉石と呼んでいる小型の河原石もその数が多い。

中期の石器

中期の石器は前期とほぼ同様であるが、打製石斧の量が増大することが一つの大きな特色である。まず、石鏃の数がやや減少するようである。石匙は前期のようなチャートや硅質砂岩といった硬質緻密な岩質から、粘板岩質の岩石に統一されたようである。また形態的にも大型化する。打製石斧の量は前期よりさらに増大する。磨製石斧の量は横ばいというぐあいである。稜磨石・磨石の数は前期より減少するようであり、特に稜磨石は減少傾向にあるといえよう。石皿の数は少ないが、土坑に埋納されるという新しい傾向も見られるので、全体としては、減少していないといえよう。玉石は数は多くないが、定着している。

稜磨石について

石器個々についての研究を進めなければならないが、諸事情があり、今回は稜磨石について、若干の計測を行った。この石器の名称は、特殊磨石または穀磨石と呼ばれているが、この名称はあまりにも、この石器の名称としては不適切であるので、断面三角形の稜を磨面として、利用している特徴から、稜磨石と呼んでいる。

まず、この石の磨面は、巾１～４㎝位に限定しているように、あまり磨面が広くなると、打ちかいて、狭くしている。また磨面の長軸に対して、直角の擦痕が認められる。サドル・カーンのような使用法であったと思われるが、最大の相違点は、この稜磨石の両端には激しい敲打痕が認められる。それ故、稜磨石には、半壊したものが多いのである。

また、この石器の部位の計測値をグラフ化してみると、この石器は、縦と幅に制約されるようで、重さや長さには、それほど配慮していないことがわかる。

早期の住居址

S B	石鏃	石匕	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	玉石	コア		黒曜石g	水晶g
S B — 11	7		1		1？		1	6		1				84	391
S B — 13	8		1	2	2		3	6		5				312	261
S B — 14	3		1		1		2	6		1				31	144
S B — 15	4		1		1		1	2	1	2				61	95
S B — 16	4		1		2			5		1			1	120	110
S B — 17	5				1		1	1	2					90	100
S B — 18	3			1	3	1		7	2	3	1			65	59
S B — 19	2	1	1				5	2	3	1		1		48	17
S B — 22	14	1	4	1	1	1	2	棒状磨石1、7	1	4				180	72
S B — 24	3						1	3						27	43
S B — 25								1						2	28
S B — 26	3		1		1	1		3		7	1		1 石ヤリ	74	84
S B — 30								1						27	26
S B — 33	1					1	1	4						35	
S B — 34	3						2	2		5				64	30
S B — 35								2		3				12	10
S B — 36	6				2	2	5	5	1	3	1			44	185
S B — 44	7			1	1			4		3	1	1	1 スクレイパー	273	62
S B — 46	3				1			1		4	1			45	143
S B — 48	1				2		1	3		1			1 スクレイパー	38	24
S B — 49	3													20	4
S B — 50	2	1	1	2	1		4	1		7				66	98
S B — 52	6				2		3	5			2			9	5
S B — 53	3				4		2	7		2				49	78
S B — 54					1										
S B — 56			3				2	2						38	13

前期の住居址

S B	石鏃	石匕	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	玉石	コア		黒曜石g	水晶g
S B — 02	4				2		3	6	1	2	1			134	64
S B — 03	21	2	3	1	18	3	3	7	1	3	2	1		703	163
S B — 05	11	2	1		8	7	12	23	4	6		1	ポイント1	269	239
S B — 06	24	2	1		2	2	11	18	2	1	7	1		385	273
S B — 07	18	7	2	3	21	4	2	8	1	3	2	4		601	333
S B — 08	13			1		2	1						1 スクレイパー	275	37
S B — 09	19	2			3	2	6	8		3	1	1		653	181
S B — 12	20	9	1	1	5	3	10	17	2	7	4	1		1314	133
S B — 20	7				1			2		1	2			178	48
S B — 21	3				2							1		108	44
S B — 27	1	1			1		1	1		2	3			32	17
S B — 28	2		2	1	5	1	5	4	3	2	1		3 軽石	171	105
S B — 37	2					1			1					148	21
S B — 38				1？				1						8	6
S B — 39	21	1	5	2	1		3	11	1	1				400	400
S B — 41	1				1		3	2	1					124	90
S B — 42	2					2	1	10		3	1			111	18
S B — 43	6				1	1		1		3	2			323	109
S B — 45	4	3	1		1	1	6	6	1	1	1			225	94
S B — 55										1				22	20

中期の住居址（藤内式期）

S B	石 鏃	石 匕	ドリル	ピエス	打 斧	磨 斧	稜磨石	磨 石	石 皿	礫 器	玉 石	コ ア		黒曜石g	水 晶g
S B — 01	10	2	4		40	2		3			1			163	59
S B — 04	13	4		1	10	1	5	5	2		1		横刀1	269	55
S B — 10	6	3			33	2	2	9	3		1	1	7 コーフレ	88	20
S B — 29	5		1	1	9	1		2		1	1			80	30
S B — 31	6		1		2	2		7		1				250	51
S B — 40	6	2			5	3	3	6						150	94
S B — 47	3		2		12	3	3	4		1	2			178	30
S B — 51	2	1			12	1		5	1		1			144	35
S B — 23	6	1		2	15					5					

（なお、住居内に設置された石皿については、集計に加えていない。）

稜磨石データ表

No.	グリット	付 記	重量g	法 量	A	B	C	備 考
1	D — 21	3層			3.0×7.0（残存部）	1.3×6.4（残存部）	1.2×6.3（残存部）	末端の叩き
2	G — 19	3層			2.0×9.1	1.8×9.2	1.4×9.8	両端の叩き
3	G — 20	3層			0.9×5.0（残存部）			末端叩き
4	G — 20	3層			0.5×3.5（残存部）			
5	I — 16				1.5×11.5(残存部)	1.0×10.5(残存部)		
6	I — 16				0.6×7.6（残存部）			末端叩き
7	I — 17	3層	800 g	8.7×5.3×13.7	2.6×12.7			
8	I — 19				2.1×5.6			
9	J — 16	3層			2.6×9.0（残存部）		1.4×7.4（残存部）	末端叩き
10	J —.17	3層			1.9×2.9（残存部）	1.4×4.4（残存部）		スス付着
11	J — 17	3層下						はっきりせず
12	J — 17	3層			1.1×6.6（残存部）			
13	J — 18	4層			2.8×4.8（残存部）	1.1×6.1（残存部）		
14	J — 19	2層下	1525 g	10.8×7.7×14.8	2.8×10.7			
15	J — 19	2層下	1850 g	8.9×8.5×17.8	3.5×15.2			下端叩き
16	J — 21	3層、No.4	750 g	7.9×6.9×12.9	2.6×10.8(残存部)		2.0×7.6	末端叩き
17	J — 21	3層、No.2			1.7×12.5(残存部)	計測不可	2.5×13.9(残存部)	
18	J — 21	3層下			1.3×5.5（残存部）			末端叩き
19	J — 22	3層、No.1			1.6×6.3（残存部）			末端叩き、断面方形
20	J — 22	3層、No.3						計測不可
21	K — 17	3層			2.5×6.6（残存部）	2.3×7.9（残存部）		
22	K — 17	3層			1.8×4.8（残存部）			
23	K — 19	2層下	1900 g	8.7×9.3×20.4				No.84と接合
24	K — 19	3層			2.9×6.3（残存部）	2.0×5.4（残存部）	2.4×6.4（残存部）	末端磨る
25	K — 19	3層			3.6×4.7（残存部）			末端叩き、断面方形
26	K — 23	3層、No.7			1.0×9.8（残存部）	0.7×1.9	1.8×5.2	D0.7×3.4（残存部）
27	L — 15	2層下			1.5×2.1（残存部）			
28	L — 16	3層			0.5×7.2（残存部）			
29	L — 16	3層			1.6×5.2			
30	L — 16	3層			1.3×11.9（残存部）	1.1×7.8		
31	L — 17	3層			1.2×7.1（残存部）			末端叩き
32	L — 17	3層			1.9×3.6（残存部）			
33	L — 17	3層			2.2×6.5（残存部）			
34	L — 19	3層、No.6			2.9×10.3	0.9×9.4		末端叩き
35	L — 19				2.0×13.3			
36	L — 20	3層			2.1×6.4（残存部）			末端叩き
37	L — 21	No.3			1.4×7.1（残存部）			末端叩き
38	L — 22	3層下			1.6×4.0（残存部）	1.8×2.8（残存部）		
39	L — 22	3層						
40	M — 15	3層下			0.8×7.7（残存部）			末端叩き

No.	グリット	付記	重量g	法量	A	B	C	備考
41	M－20	3層			2.4×5.4（残存部）			磨石併用、一部スス付着
42	M－21	3層			1.3×3.9（残存部）			
43	M－21	3層、No.10			3.5×6.9（残存部）			末端叩き
44	M－21				0.6×4.2（残存部）			
45	M－21	サブトレ						
46	M－21	2層、No.3			2.8×13.6(残存部)	2.5×9.1（残存部）	2.4×12.6	
47	M－22	3層			2.0×5.6（残存部）	1.5×6.6（残存部）		末端叩き
48	M－22	3層			2.2×4.5（残存部）	1.3×5.9（残存部）		
49	N－15	3層下			1.9×4.9（残存部）			焼けた後磨る
50	N－17	3層、No.12	1150g	8.0×6.6×14.2	2.6×11.5(残存部)			下端叩き
51	N－17	川			1.8×3.6（残存部）			下端叩き、焼けている
52	N－17	川			1.2×7.6（残存部）			
53	N－17	川			1.0×6.9（残存部）	1.1×4.3（残存部）	0.9×5.1（残存部）	下端叩き
54	N－18	3層上						
55	N－18	3層上						
56	N－18	川	450g	3.9×6.2×12.0				
57	N－20	4層	700g					
58	N－21	2層			1.0×7.5（残存部）		0.7×8.3（残存部）	
59	N－23	1、2層			1.9×3.8（残存部）		痕跡あり	
60	N－25	川中	750g	16.1×5.8×14.5	2.3×12.6			
61	N－25	ベルト			1.8×8.5（残存部）	1.4×6.2（残存部）	1.3×7.5（残存部）	
62	N－25	ベルト			2.8×8.8（残存部）			下端叩き、スス付着
63	N－25	ベルト			3.0×7.9（残存部）			
64	N－26							
65	Nライン	川						焼けている
66	Nライン	川						
67	Nライン	川			1.9×7.1（残存部）		0.7×5.2	下端に凹み
68	O－15	3層	300g	5.5×4.2×9.4				上端とA面に凹み、A面は2コ
69	O－15	3層			2.0×4.1（残存部）			下端叩き
70	O－16	川中			1.2×6.8（残存部）	1.3×4.9（残存部）		
71	O－16	3層			1.7×7.7（残存部）	2.9×6.5（残存部）	1.9×7.9（残存部）	末端磨る
72	O－17	3層	500g	5.5×5.5×12.5	1.5×8.1	0.9×9.0（残存部）	1.2×3.9	両端叩き
73	O－19	溝中						
74	O－22	3層下	950g	6.6×5.8×17.2	2.2×14.1	1.5×6.8		
75	P－17	2層下			1.4×6.5（残存部）			上端叩きあり
76	P－17	2層下	1050g	7.3×5.6×18.8	2.2×11.6			上端叩きあり
77	P－17	川			2.0×6.7			
78	P－17	2層下	800g	5.7×7.0×13.0	1.4×7.0（残存部）			けて所々欠落
79	P－17	No.8			1.1×5.7	0.6×6.9	0.6×1.4	
80	P－17	No.11	650g	5.8×5.6×123	左 1.3×9.0 右 2.4×9.0（残存部）	1.3×8.5		一端叩き
81	P－18	3層	850g	6.7×8.6×12.8	2.0×11.9			
82	P－18				1.8×5.0			
83	P－20	2層下						焼けている
84	P－21	3層下	2650g	8.1×8.2×24.3	2.2×17.9			一端叩きあり
85	P－22	周溝	1900g	8.7×9.3×20.4	2.3×14.7（残存部）			Cに叩き、No.23と接合
86	P－22	3層			1.8×4.4	2.0×2.6		
87	P－24	4層			1.5×5.0（残存部）			
88	P－25	1号墳、フク土中			1.7×7.5（残存部）			末端凹みあり
89	Q－15	3層下						
90	Q－15	3層下			1.9×6.2（残存部）	1.2×6.1（残存部）		末端及びAの脇平面に凹み
91	Q－16	3層			2.7×4.4	2.2×6.4		
92	Q－18	3層下			1.4×6.1	0.9×6.6	0.9×2.4	
93	Q－20	2層			2.3×11.4	1.0×8.0	0.8×11.6	

No.	グリット	付記	重量g	法量	A	B	C	備考
94	Q－21	周溝			2.4×4.4	2.1×3.5		
95	Q－22	3層下			1.3×3.6	0.9×4.7		
96	Q－23	4層			2.3×3.4		0.7×8.4	
97	Q－23	4層	1150g	9.0×5.6×17.1	0.9×9.5	1.4×13.4	1.1×1.1	
98	R－15	川中			2.2×9.8（残存部）			末端叩き
99	R－16	川中	750g	7.5×7.1×10.3	1.6×9.0		1.6×9.5（残存部）	
100	R－16	3層下			3.0×9.8（残存部）	1.6×8.6（残存部）	2.0×8.7（残存部）	
101	R－17	2層下			2.1×9.1（残存部）	1.0×8.6（残存部）	痕跡あり	
102	R－17	川中			2.9×11.4		3.3×6.8（残存部）	焼けている
103	R－18	3層			2.9×6.9（残存部）			
104	R－18	3層			1.7×9.2（残存部）	0.8×3.3（残存部）		
105	R－18	3層下			2.8×8.4（残存部）			
106	R－18	3層			0.8×7.6（残存部）			末端叩き
107	R－19	2層	300g	5.3×4.9×10.3	1.7×9.0		1.1×9.3	
108	R－19	2層下						No.116と接合
109	R－20	2層			1.5×3.6（残存部）			末端打欠
110	R－20	3層			1.0×6.4（残存部）		0.8×4.0（残存部）	
111	R－20	3層下	250g	3.5×4.9×9.5				両端叩き
112	R－20	3層下			2.2×7.3（残存部）		0×5.4（残存部）	けている
113	R－24	古墳下層			1.8×5.6（残存部）			
114	R－26	1号墳周溝			2.6×5.3（残存部）	2.5×8.1（残存部）	1.5×11.4	上端磨り D 2.1×7.4 下端叩き凹みあり
115	R－27	2層下			2.2×12.1(残存部)		1.9×10.5(残存部)	末端叩き
116	S－15	3層			2.6×9.5（残存部）			末端叩き
117	S－15	3層			1.3×8.6（残存部）			焼けている　No.107と接合
118	S－15	3層	950g	6.8×6.4×15.4	4.6×13.9(残存部)	1.3×7.1（残存部）	3.5×12.6(残存部)	両端叩き　No.130と接合
119	S－16	3層下			2.0×6.7（残存部）			末端叩き
120	S－16	3層	700g	5.8×5.5×15.5	0.8×13.1			上端叩き
121	S－16	3層						叩き多し
122	S－16	3層			2.7×4.5（残存部）	1.5×4.5（残存部）	1.6×5.8（残存部）	辺に凹み
123	S－16		900g	7.0×6.9×13.8	3.7×12.1	2.4×11.5	2.2×11.6	上端叩き
124	S－17	3層	700g	8.0×6.0×14.8	1.4×12.9		0.8.10.7	一部焼けている
125	S－18	3層			2.7×7.4（残存部）	1.4×3.8（残存部）	1.7×4.7（残存部）	下端叩き
126	S－18	3層	750g	5.5×6.8×15.9	2.1×9.8（残存部）		0.8×7.3	下端叩き、上端不明
127	S－19	3層	950g	6.5×7.2×19.1				下端叩き
128	S－20	3層下			1.7×6.2（残存部）			
129	S－21	2層下			4.9×12.6(残存部)	1.9×10.5(残存部)	3.5×13.3(残存部)	両端叩き
130	S－21	2層下	700g	5.9×7.0×12.4				平面に凹み、両端叩き
131	S－21	2層	950g	6.8×6.4×15.4				No.117と接合
132	S－22	3層			1.8×5.2	0.6×3.8	1.0×2.4	下端叩き
133	S－24	1号墳						磨石
134	S－24	1号墳			2.2×6.1（残存部）			下端叩き
135	T－16	3層上、No.1	650g	6.7×7.1×11.6	1.3×8.6			下端叩き、焼けている
136	T－16	3層上、No.2			1.7×8.5（残存部）	0.9×8.9（残存部）		下端叩き
137	T－17	2層下						磨石
138	T－17	2層下			1.9×10.4(残存部)			下端叩き
139	T－17	3層上	1800g	9.2×7.9×20.5	1.7×18.8		1.0×6.3	下端叩き、No.141と接合
140	T－17	3層			2.7×7.1（残存部）	1.6×4.0（残存部）		
141	T－17	石ガキ			2.1×6.6（残存部）	1.1×2.1	1.3×4.5（残存部）	
142	T－19	3層	1800g	9.2×7.9×20.5				No.138と接合
143	T－20	3層下	250g	8×5.0×10.3				一部スス付着
144	T－20	3層下						下端叩き、焼けている
145	T－20	3層下						
146	T－22	3層下			1.8×12.1(残存部)		0.9×7.2（残存部）	
147	T－23	1層						磨石

No.	グリット	付記	重量g	法量	A	B	C	備考
148	T－24	川	1300g	7.4×7.4×15.4	3.8×13.2		1.9×11.7	凹み、下端叩き
149	U－15							
150	U－17	3層			2.1×4.5（残存部）	2.4×5.5（残存部）	0.8×6.6（残存部）	
151	U－17	3層			1.4×5.7（残存部）	0.7×5.7（残存部）		下端叩き
152	U－17				3.0×5.5（残存部）			下端叩き
153	U－17				1.7×5.6（残存部）			
154	U－17				2.2×6.4（残存部）			
155	U－19	3層下、No.1			2.1×5.6（残存部）			
156	U－22	3層上			1.3×4.5（残存部）			下端叩き
157	U－23	3層			3.3×5.5（残存部）			CA面凹み
158	U－23	No.1			1.7×8.5（残存部）			
159	U－25	3層			1.8×9.1（残存部）			AB面凹み2こ　裏面凹み2コ 下端叩き、焼かれている
160	V－15	2層			2.1×5.0			
161	V－15	3層下						
162	V－15	3層下						
163	V－15	3層下			1.0×5.9（残存部）			
164	W－21	3層下	250g	4.8×5.0×8.9	2.3×3.4（残存部）			
165	W－22	2層下						磨石
166	W－22	2層						磨石
167	W－23	3層	850g	7.6×4.5×16.2	2.8×6.7			焼けた後磨っている。下端叩き
168	表採		330g	5.2×4.0×10.4	0.7×5.5			上端叩き
169	表採	2層下	1400g	11.4×8.0×16.1	1.4×13.6			
170	表採		2600g	11.9×9.4×21.1	4.2×15.6			下端叩き
171	表採	No.1	1050g	6.1×8.6×18.1	1.0×15.2			
172	表採		1050g	8.2×5.9×14.5	3.2×9.6（残存部）			焼けている
173	石埋設坑		1150g	7.3×7.6×15.0	3.8×8.9	3.0×13.3	1.8×2.1	
174	ハイ土		650g	5.9×9.6×7.9	2.0×4.1			両端欠、AB面に凹み
175	不明		450g		1.3×5.3（残存部）			
176	UWXY	石垣			3.0×10.1(残存部)			
177	石埋設坑				2.9×8.0（残存部）			断面方形
178	表採				2.2×8.4（残存部）			末端欠損
179	表採				3.0×8.4（残存部）	1.5×7.8（残存部）		末端叩き
180	表採				2.3×8.7（残存部）			
181	表採				1.6×9.8（残存部）			末端叩き
182	表採				2.0×9.6（残存部）	1.7×8.7（残存部）	1.6×9.2（残存部）	末端叩き
183	表採				2.4×6.1（残存部）	1.0×3.7（残存部）	2.0×6.2（残存部）	
184	表採				2.9×3.3（残存部）	2.1×3.2		末端に磨り面1.8×4.6 断面方形
185	不明				2.4×8.8（残存部）	1.5×7.6（残存部）	1.6×8.0（残存部）	
186	K－25	3層	350g	5.3×3.9×10.6	1.3×5.0			AB面、CA面凹み一部スス付着
187	S－20	4層	450g	1×4.9×10.8	.9×3.9（残存部）			末端叩き
188	ハイ土				2.3×3.4（残存部）			

（A．B．Cは稜磨石の稜の磨面を示す。）

第 7 節　釈迦堂 1 号墳

京戸川扇状地の南よりを東西に走る京戸川右岸の崖ぞいには、千米寺古墳群の存在が確認されている。標高430mから480m付近にかけて分布する古墳は、『一宮町誌』によれば、32基が報告されているが、その多くがすでに封土を失い全壊に近い状態であるという。

千米寺古墳群は、古墳時代後期の横穴式石室を有する円墳群である。これらの古墳群を形成した集落は、現在の集落である藤井・千米寺・石・鈴郷・地蔵堂などから、さらに下方の南野呂・中尾・一ノ宮付近までが土師器の分布などから推定することができる。古墳群はそれらの集落を見おろす位置に築造されているのである。

本遺跡の 1 号墳は、千米寺古墳群の一画を占め、標高456mに位置している。古墳群のなかでも残存状況の良好な大塚古墳は、標高435mほどにあり、最下線の古墳であるが墳丘の長さが18mで最大規模となっている。封土がまったく削平されていた 1 号墳との比高は21mである。1 号墳の発掘によって周溝を有する横穴式石室の円墳であることが確認することができた。

1 号墳の規模は、墳丘の長さが16mほどで、周溝の幅は 2 ～ 4 mである。山側は深く掘り下げた周溝となっているが、谷側の一部は掘りこみは見られない。なお墳丘の裾から周溝の底にかけて礫があり、葺石の存在が考えられる。石室は全壊に近く、側壁の石と敷石がわずかに残っていた。

それらから計測すると、開口部が南西にある玄室の長さは約 5 m、幅は約1.7mを測る。両袖形式と思われ、羨道部は約1.4mである。さらに前庭部と考えられる石列も認められた。

1 号墳の規模は、千米寺古墳群のなかでも石室規模からは一般的なものであることが知られたが、それと同時に横穴式石室の開口部が南西にあることや、両袖形式であることは大塚古墳と類似することを指摘しておきたい。

出土遺物については、須恵器・土師器・鉄鏃が前庭部やその付近の周溝から検出されている。須恵器から 1 号墳の時期を 6 世紀後半ないし 7 世紀初頭に入るものとしてとらえておきたい。

なお本遺跡のＳ－Ⅱ区でＳＸ－04とした巨石の集合した部分は、石室の一部と思われるが、完全に破壊された状況であり、墳丘の基底部や周溝など確認することができなかった。1 号墳より東へ小谷を 1 つ越えた小尾根の先端部に位置していることから、千米寺古墳群の東端付近にあたる古墳であったことが推定される。

千米寺古墳群の形成期を 7 世紀前後におくことは、1 号墳の調査のみで結論づけることは早計であると思われるが、分布調査などの成果や大塚古墳の調査を合せて検討すると、およそ 7 世紀前半までにおくことができると思われる。

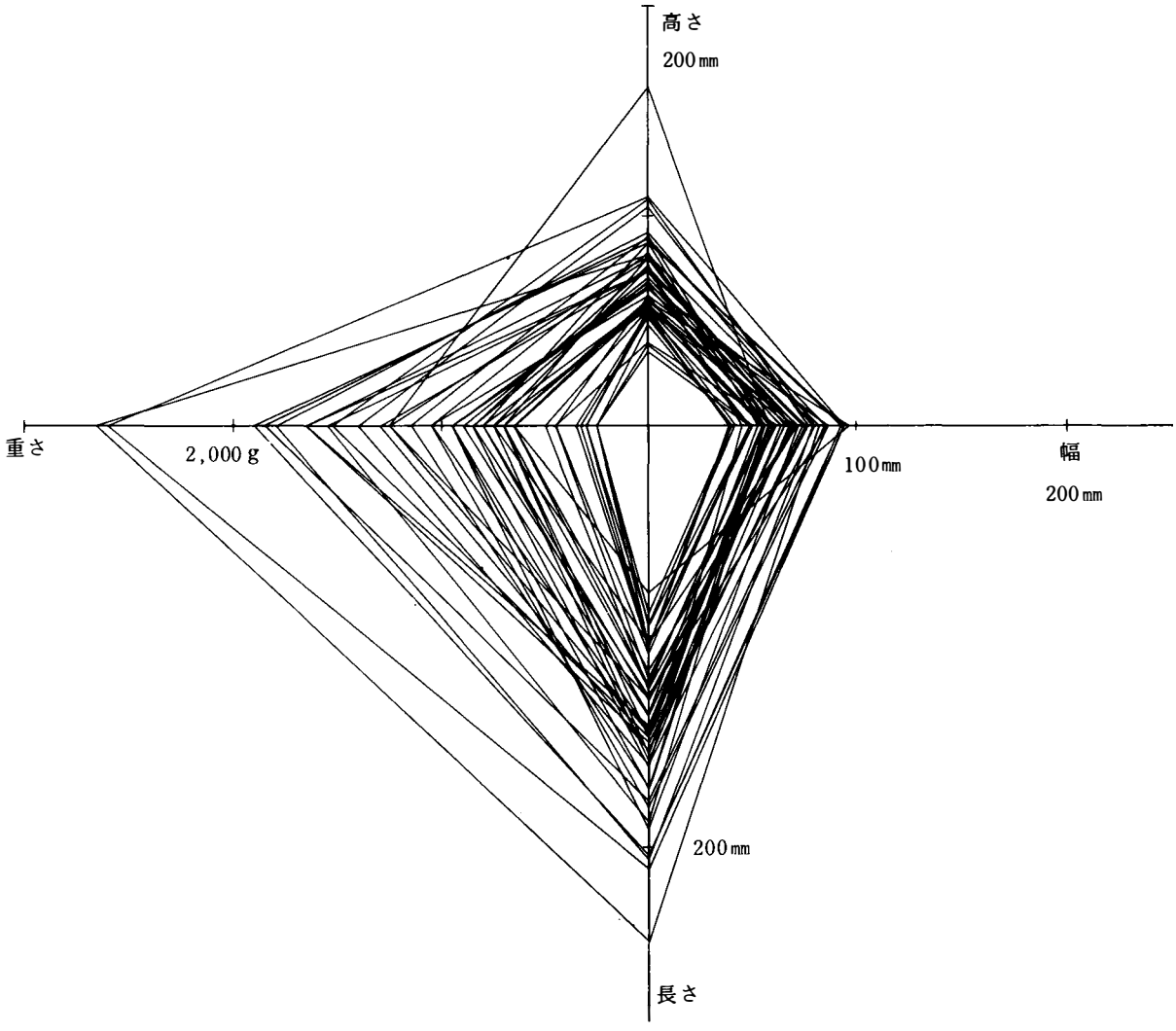
千米寺古墳群の所在地は一宮町であるが、同町にはさらに金川扇状地上に国分古墳群、四ツ塚古墳群が存在することが知られている。かつて国分古墳群のなかの 1 基が調査された。国分築地 1 号墳と名づけられたこの古墳は、墳丘の長さが10m、高さ 3 mの円墳で、横穴式石室は長さが 6 m、幅が 2 m、無袖形であったという。出土遺物からその築造期を 7 世紀前半としている。また金川左岸の四ツ塚古墳群も最近の調査によって、その時期が 7 世紀前半を中心に形成されたとされている。

今後の課題として、1 号墳の存在した千米寺古墳群と国分古墳群、四ツ塚古墳群の個々の古墳についての検討が必要であろう。各群の特徴を導き出し、その群集墳の成立背景を究明することが重要である。そのためにも破壊が進んでいる古墳の保護が一層重要な課題となっているのである。

参考文献

1 、『一宮町誌』一宮町役場　1967年

2 、山梨大学考古学研究会「大塚古墳調査報告」『丘陵』第 9 号　1982年



第300図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区稜磨石の法量・重量グラフ

参　考　文　献

○神奈川考古同人会縄文研究グループ編、1983『縄文時代早期末・前期初頭の諸問題――土器資料図集』

○高橋雄三・吉田哲夫　1977「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物」『調査研究集録』

○渋谷昌彦　1982「木島式土器の研究」『静岡県考古学研究』11

○渋谷昌彦　1983「神之木台・下吉井式土器研究」『小田原考古学研究会会報』11

○小野正文　1983「縄文時代早期・前期初頭の土器について」『研究紀要』1

○古谷健一郎　1983「神之木台・下吉井式土器の変遷」『丘陵』11

○長野県教育委員会　1982『長野県中央道埋蔵之文化財包蔵地発掘報告書』―（阿久遺跡）―

○長野県教育委員会　1976『長野県中央道埋蔵文化財包蔵発掘調査報告書』―（十二ノ后遺跡）―

○新井和之　1982「黒浜式土器」『縄文文化の研究』3

○網野克彦　1982「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』3

○今村啓爾　1982「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3

○佐原真　1981「縄文施文法入門」『縄文土器大成』3

○日本考古学協会　1984「縄文時代の集落変遷」

○小野正文　1981「土偶の分割塊製作法資料研究(1)」　『丘陵』11

第10章　付　　編

第　1　節　　釈迦堂遺跡群S－Ⅰ区出土の貝類について

渡　辺　　誠

1．は　じ　め　に

小野正文氏（山梨県埋蔵文化財センター）より検討を依頼された貝類は1片である（写真の上）。『釈Ｓ－1、Ｑ－15、3層、80．8．7、6ｇ』というラベルのつけられた資料であり、縄文時代早期に属するものである。

2．種　の　同　定

残存する大きさは4.7×2.7㎝、殻の厚さは4㎜で厚く、そのカーブはきわめて緩く、殻頂部や腹縁部などはみられない。また内面には套線がみられないので、中央部よりの部位であること、外面には放射助はみられず輪脈のみがみられ、それも左寄りでややカーブが強くなっているので、大型の二枚貝の左殻であることがわかる。そしてその種は、ハマグリ（*Meretrix lusoria* Löding）であると推定される。

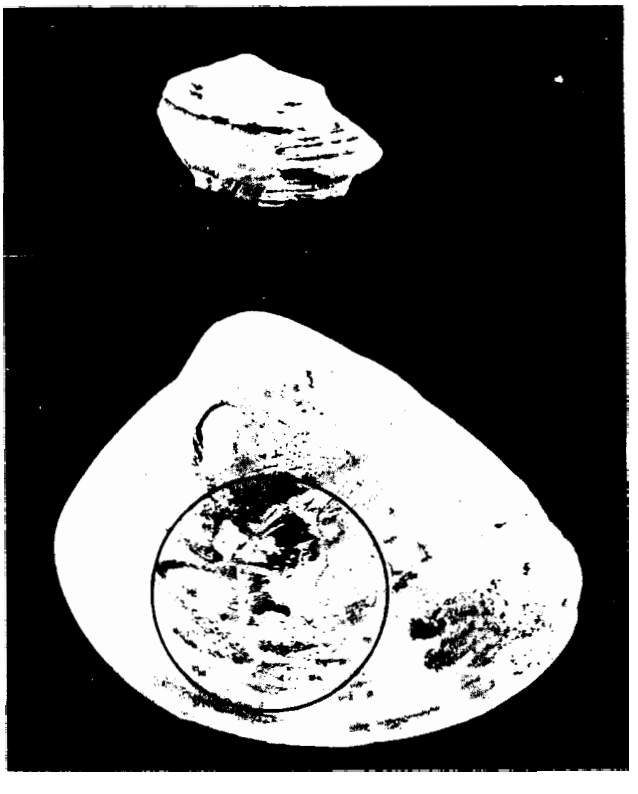
写真の上は本遺跡出土品であるが、同下はほぼ同じ大きさと推定される福島県いわき市寺脇貝塚（縄文晩期）出土品によって、指定部位を示したものである。

3　本資料の意義

最後に本資料の意義について、若干の私見を記すこととする。

その意義は、海岸部との交流を示す実証的な資料であるということに尽きる。従来土器の文様、石器素材、硬玉、天然アスファルトなどから、縄文時代の交流について論じられており、食料についてもすでに若干の指摘は行われている。

古くより知られている例としては、海のない奈良県橿原市橿原遺跡の場合で、海産魚類のエイ類・タイ類・フグ類・ボラ・スズキなどの骨が出土している。また近年の例としては、広島県の山間部に位置する帝釈峡遺跡群において、海産のハマグリなどの貝類が出土していることがあげられる。本遺跡に近い地域においても、埼玉県秩父市橋立岩蔭遺跡では海産貝類のアワビやハマグリが出土しているのである。



山梨県下においても将来こうした資料は増加するに違いない。そしてその伝播ルートは問題になってくるが、近世の煮貝の習俗からみてももっとも可能性の高いのは、駿河湾につながる富士川ルートである。しかしながら駿河湾沿岸には同時期の貝塚がみられず、今後に問題が残されている。交易の範囲は意外にもっと広かったのであろう。そこに縄文人の活発な生活の様子をみることもできる。

第 2 節　釈迦堂S－Ⅰ区遺跡出土の骨類について

小　池　裕　子

釈迦堂（ＳＢの部）

＜シカ＞

釈Ｓ－1	ＳＢ－06	800508	鹿角破片
釈Ｓ－1	ＳＢ－17	800818	鹿角破片
釈Ｓ－1	ＳＢ－31	800830	鹿角破片
釈Ｓ－1	ＳＢ－06	800507	舟状骨左近位端
釈Ｓ－1	ＳＢ－07	800521	末節骨近位端

＜イノシシ＞

釈Ｓ－1	ＳＢ－06	800502	大臼歯歯冠破片
釈Ｓ－1	ＳＢ－21	800815	下顎骨破片
釈Ｓ－1	ＳＢ－31	800830	大臼歯歯冠破片
釈Ｓ－1	ＳＢ－12ｂ	―	左距骨破片

釈迦堂（グリッドの部）

＜シカ＞

釈Ｓ－1	Ｑ－17	3層	800501	鹿角
釈Ｓ－1	Ｗ－21	3層（ＳＢ31）	801207	鹿角
釈Ｓ－1	Ｖ－20	2層下	800603	鹿角
釈Ｓ－1	Ｑ－18	3層下	800723	指骨遠位端
釈Ｓ－1	Ｕ－22	環状列石	800703	脛骨近位端
釈Ｓ－1	Ｖ－19	1層	800411	左・下顎第1切歯
釈Ｓ－1	Ｕ－21	2層	800417	下顎破片
釈Ｓ－1	Ｖ－22	3層	800731	中足骨遠位端
釈Ｓ－1	Ｖ－27	3層	801202	脛骨遠位端
釈Ｓ－1	Ｗ－21	2層	800223	頭骨・角座部分
釈Ｓ－1	Ｗ－21	3層下	800806	左・上腕骨遠位端
釈Ｓ－1	Ｙ－22	3層	800825	中足骨遠位端破片

＜イヌ＞

釈Ｓ－1	Ｔ－22	2層下	800929	右脛骨近位部	同一個体の可能性あり
釈Ｓ－1	Ｖ－22	2層上	800624	右脛骨近位端	

＜ヒト＞

釈Ｓ－1	Ｕ－21	3層	800630	寛骨破片
釈Ｓ－1	Ｓ－18	4層	800806	右橈骨遠位端

第　3　節　　熱中性子放射化分析による黒曜石の産地同定

金　山　喜　昭

分析者；鈴木正男（立教大学）、福岡久（日本大学）、金山喜昭（野田市郷土博物館）、戸村健児（立教大学）

分析方法；熱中性子放射化分析による微量元素の測定と判別分析

サンプルの抽出；各遺跡の対象資料全てを観察し外見で分類、それぞれの量比に従って10点のサンプルを抽出した。したがって、それぞれのデータにおける各産地の点数は、対象資料全体の中での構成比率とほぼ対応するものと考える。サンプルの抽出は、金山が行った。

各記号は次の産地を示す。

Ｓ－Ｗｇ（信州系・和田峠）

Ｓ－Ｈｔ（信州系・星ケ塔）

Ｓ－Ｙｋ（信州系・八ケ岳）

Ｓ－Ｏｒ（信州系・男女倉）

Ｋ－Ｓｋ（神津島・砂糖崎）

対象資料と分析結果；

①釈迦堂Ｓ－Ⅰ区（武蔵野Ⅱｂ期）

Ｓ－Ｈ（３点）

Ｓ－Ｗｇ（７点）

②天神堂遺跡第１号礫群包含土壌中遺物（県立考古博物館に展示する際の清浄作業で得た資料。武蔵野Ⅱｂ期）

Ｓ－Ｗｇ（８点）

Ｓ－Ｈｔ（２点）

③丘の公園14番ホール遺跡ローム層水洗選別資料（武蔵野Ⅳ期）

Ｓ－Ｏｒ（６点）

Ｓ－Ｙｋ（３点）

Ｓ－Ｈｔ（１点）

④釈迦堂遺跡Ｓ－１区ＳＢ－11（縄文時代早期－神ノ木台式期）

Ｓ－Ｈｔ（９点）

Ｋ－Ｓｋ（１点）

⑤天神遺跡47号住居址（縄文時代前期－諸磯ｂ式期）

Ｓ－Ｈｔ（８点）

Ｓ－Ｗｇ（２点）

⑥釈迦堂遺跡Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－10（縄文時代中期－藤内式期）

Ｓ－Ｈｔ（８点）

Ｓ－Ｗｇ（２点）

⑦豆塚遺跡１号住居址（縄文時代晩期－清水天王山式期）

Ｓ－Ｈｔ（10点）

付記　釈迦堂遺跡群では、この地域の遺跡としては珍らしく動植物遺体の検出があった。その自然科学的分析はたち遅れているが、上記の分析を依頼した先生方の御協力により、ようやくその解明途についた。また発掘調査時には山梨県立女子短期大学の市河三次先生の御指導があり、ＳＫ－21から植物遺体の検出ができ、貯蔵穴と確定できた。諸先生方の御協力と御指導に心より謝意を表したい。

山梨県東八代郡一宮町

塚越北B地区
（S－II区）

第１章　遺構と出土遺物

第 1 節　　住居と出土遺物

地形

Ｓ－Ⅱ区は、東八代郡一宮町と東山梨郡勝沼町との町境に所在する。地形は幅50ｍほどの舌状台地になっており、調査は主にこの舌状台地の尾根の部分を対象として行った。Ｓ－Ⅰ区のとの境はやはり幅50ｍほどの谷となっており、工事中の切断面には、Ｖ字状の埋没谷が認められた。

この京戸川の扇状地は何回もの洪水があったと思われ、小谷や小河川の跡がいくつも認められた。特にＳ－Ⅰ区では２本の小河川が存在している。Ｓ－Ⅱ区はより高い痩せ尾根であったため、こうした水害の影響はないものと思われたが、実際は尾根上は表土の流失があり、良好な包含層にはめぐまれていなかった。

概要

早期（釈迦堂Ｓ１式期）の住居址　１軒（ＳＢ－02）

中期（五領ヶ台式期）の住居址　４軒（ＳＢ－03、04、06、07）

中期（曽　利　式　期）の住居址　３軒（ＳＢ－05、08、12）

後期（称 名 寺 式 期）の住居址　１軒（ＳＢ－10）

後期（堀 之 内 式 期）の住居址　２軒（ＳＢ－09、11）

土坑は94基確認しているが、時期判定に苦しむものもある。

住居址と土坑

早期は１基のみであったが約100ｍ離れたＳ－１区に早期の集落があり、これらとどのような関係を持った住居であろうか。いずれにしても、断面三角形の隆帯に貝殻腹縁の刻目を持つことから、古い様相を示しており、Ｓ－１区のＳＢ－36等と同一の時期のものと思われる。

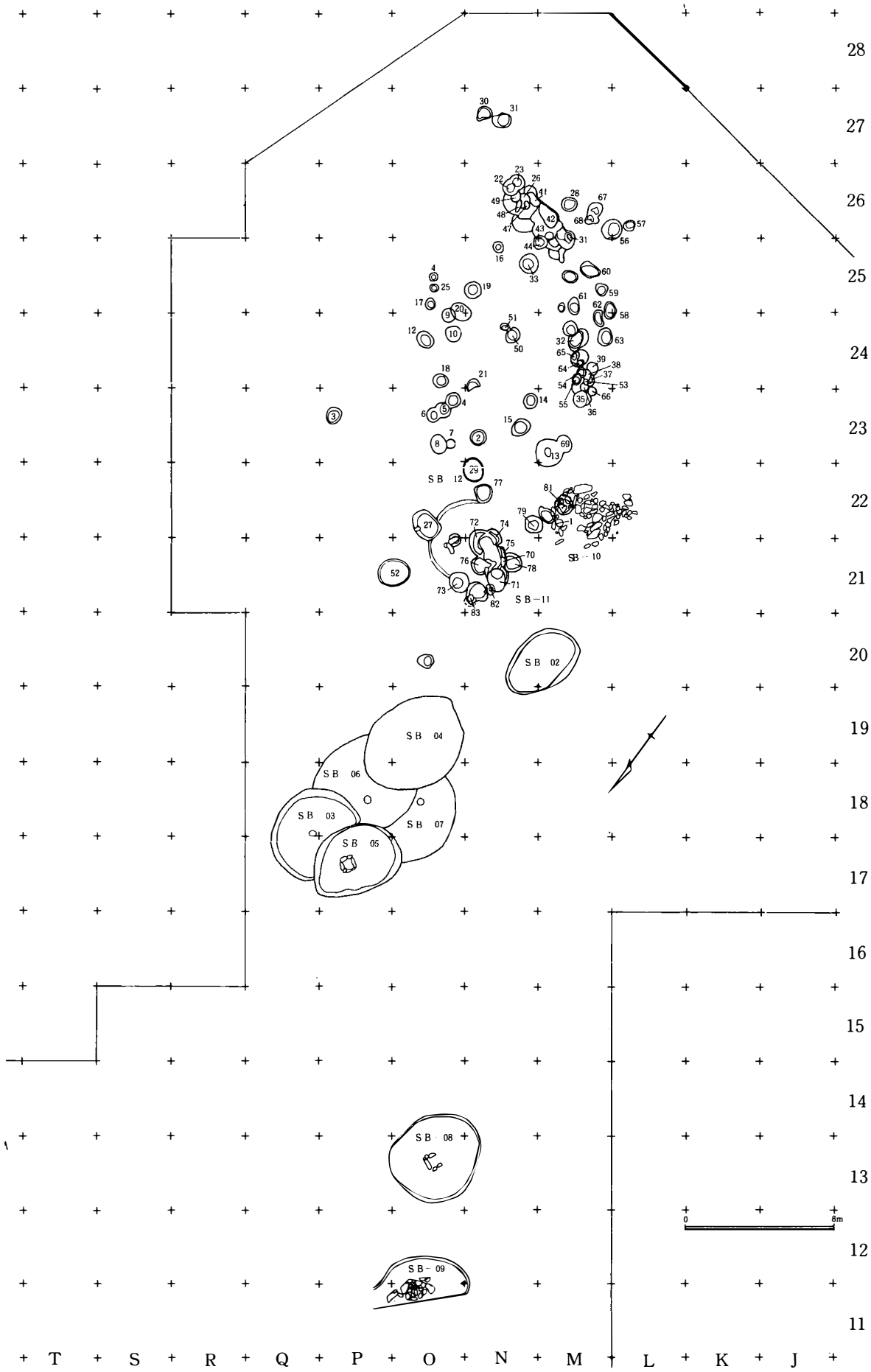
前期はＳＫ－01のみ遺構を検出したが、諸磯ｂ式の縄文地沈線文系土器が出土しているので、他に何らかの遺構があったと思われる。

中期は、集合沈線文系土器を主体とする時期のもので、広義の五領ヶ台式期に含められるものである。Ｓ－１区ではＳＫ－155で細線文系土器の最古のものが出土しており、ＳＢ－23では細線文系土器と集合沈線文系土器が融合したものが出土している。

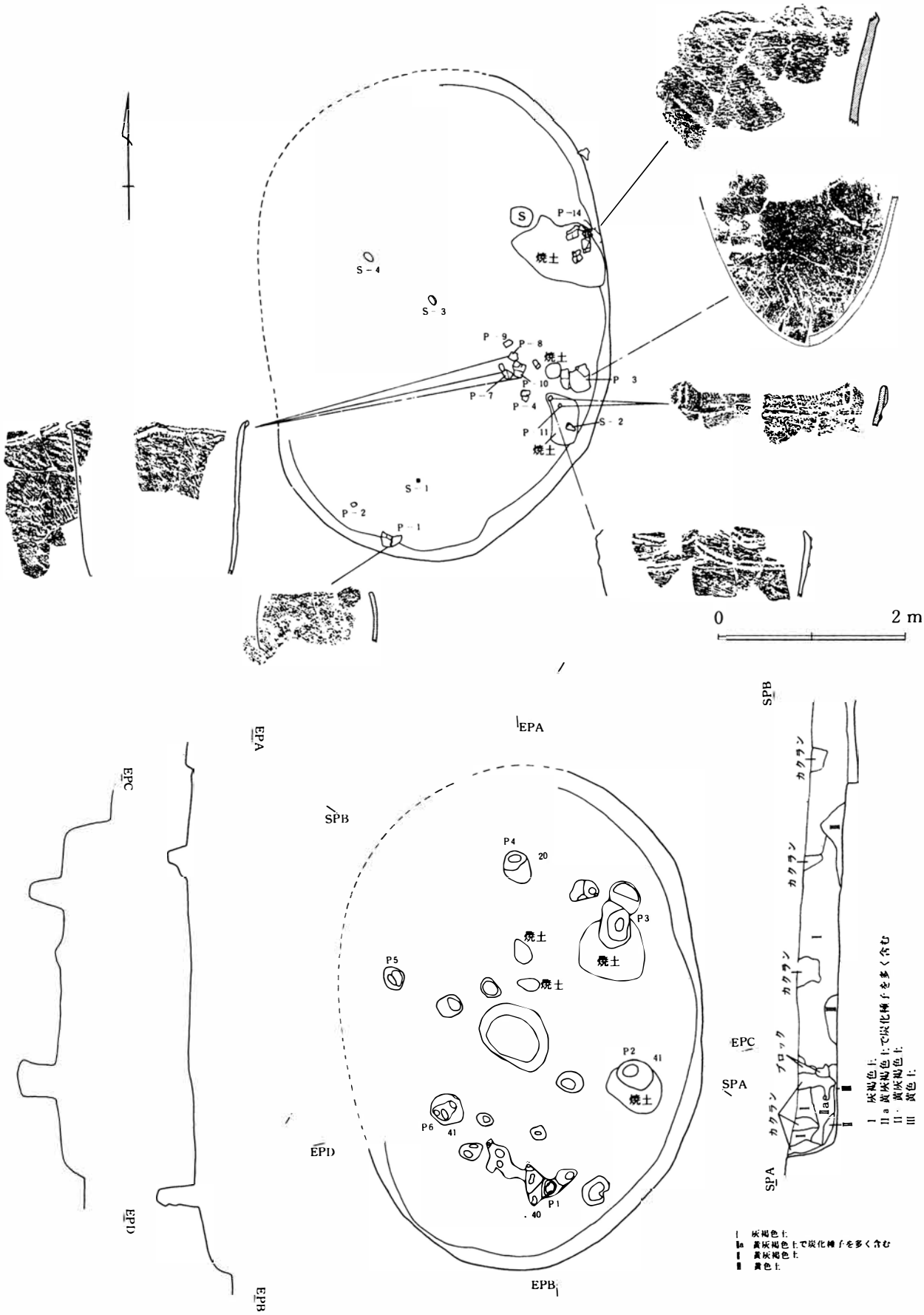
このＳ－Ⅱ区の集合沈線文系土器は縄文地指頭圧痕波状隆帯が伴うことが明らかとなっている。この縄文土器はおそらく鍋屋町式土器に伴うそれからの系譜をもつものであろう。また集合沈線文系土器に木目状撚糸文土器が伴出することはＳＫ－82の事例からも知られる。なお小量の鷹島式土器が出土しており、ＳＢ－04の事例から集合沈線文土器に伴出するものであろうか。

中期では他に曽利式期の住居址が２軒検出されており、このうち、ＳＢ－05からは吊手土器が奥壁部より出土しており、炉には石皿片を利用していることから、何らかの特別な住居であったと思われる。なお、ＳＢ－05、08共に奥壁部にピットを持たない住居である。

後期では柄鏡形の住居で出入口部が南西方向を向いたＳＢ－10敷石住居址があり、時期は称名寺式期と思われる。ＳＢ－09は、住居の中央部のみ敷石を用いている。時期は堀之内式期であり他に同時期のものはＳＢ－11がある。



第 1 図　釈迦堂S－Ⅱ区　全体図



第 2 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－02　　（1 : 60）

S－Ⅱ区ＳＢ－02

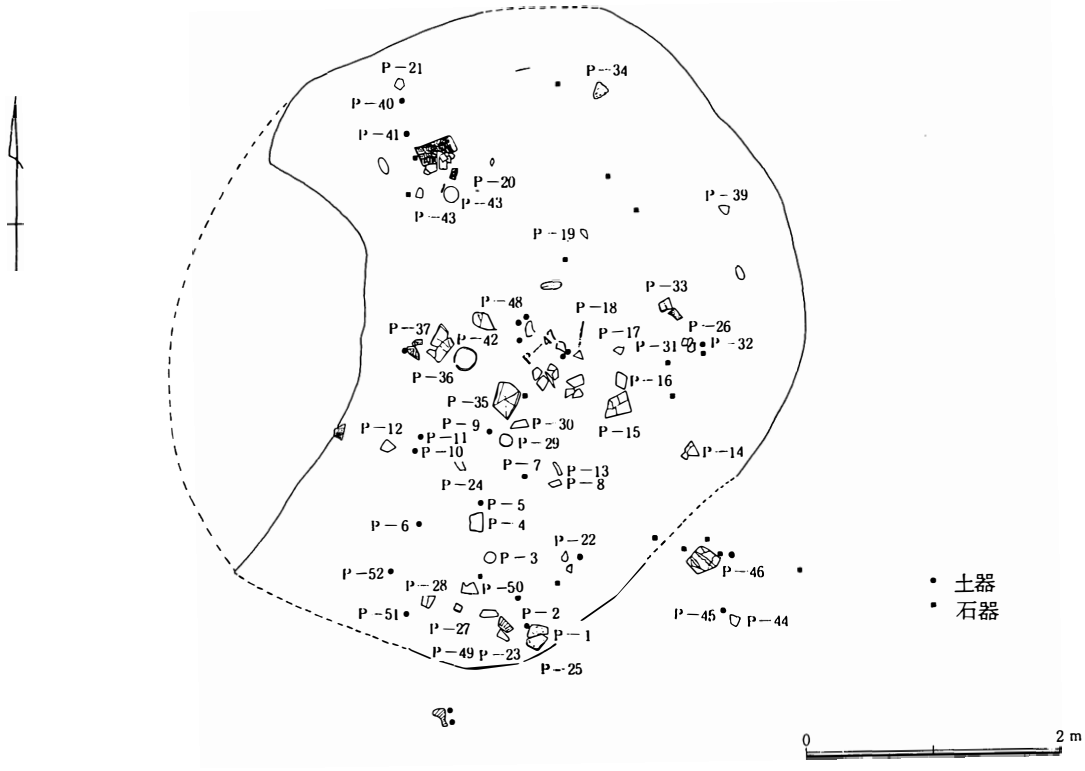
S－Ⅱ区唯一の早期の住居址である。扇状地尾根上の傾斜のためか、北西辺は失なわれているが、長軸520cm、短軸350cm（推定）の楕円形プランの住居址である。東壁寄りに焼土の堆積が厚く、また炭化材、炭化堅果類が多量に出土している。このことから火災住居であった可能性もある。炉址と思われる焼土の広がりは住居址中央部にある。柱穴は6柱穴で、早期末の釈迦堂遺跡群の住居としては定形的である。

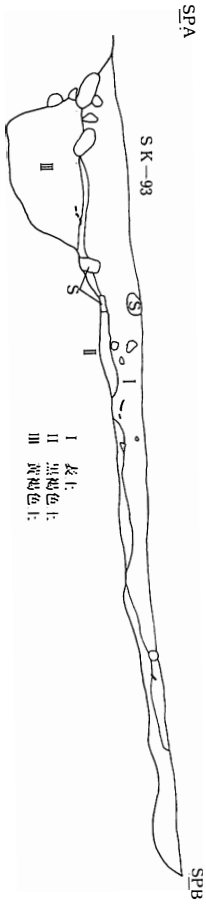
土器は1が懸垂隆帯が口縁に近い位置にあり、古い様相である。また2はS－1区の土器にはない文様で、断面三角形の隆帯がワラビテ文化している。これも古い様相と思われる。含繊維土器では4が水平隆帯に縦の隆帯が接続するものである。5も水平隆帯が見えるが全体の文様は不明である。一般に古い様相を示す含繊維土器の隆帯は細い傾向があり順次太くなるようである。石器は石鏃6、稜磨石2、磨石1、玉石1、石皿1、ユーズドフレイク2である。フレイクは黒曜石65g、水晶165gであり、ここでもS－1区と同じように水晶の割合が高い。

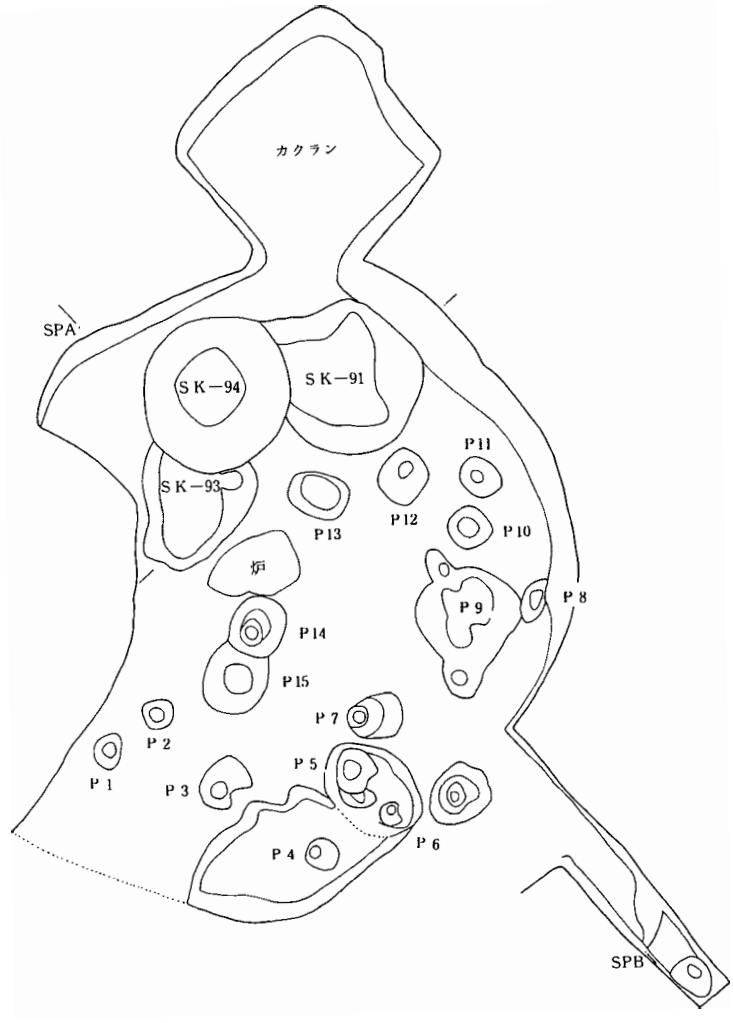
第 3 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SB－02出土土器（1、2、4、7、8は1：6）

SB－02

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
4	3	1	No.6、7、8	1－1－a	波状口縁から懸垂隆帯が付き、隆帯に貝殻腹縁刻目			
		2	No.10ほか	1－1－e	波状口縁に断面三角形の隆帯を複数付け、貝殻腹縁刻目			
		3		1－9－e	含繊維土器に断面三角形の隆帯			
		4	No.11	1－9－c	含繊維、水平隆帯と波頂部から縦の隆帯が付く、口縁と隆帯に刻目			
		5	No.14	1－9 or 10	含繊維、タガ状隆帯に右傾刻目			
		6	No.10、11	1－9 or 10	含繊維、タガ状隆帯に右傾刻目			
		7	No.1	1－7－b	含繊維、無文土器			
		8	No.3		含繊維、底部、貝殻頂部による条痕か。			







第 4 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－03　（1 : 60）

S－Ⅱ区　SB－03

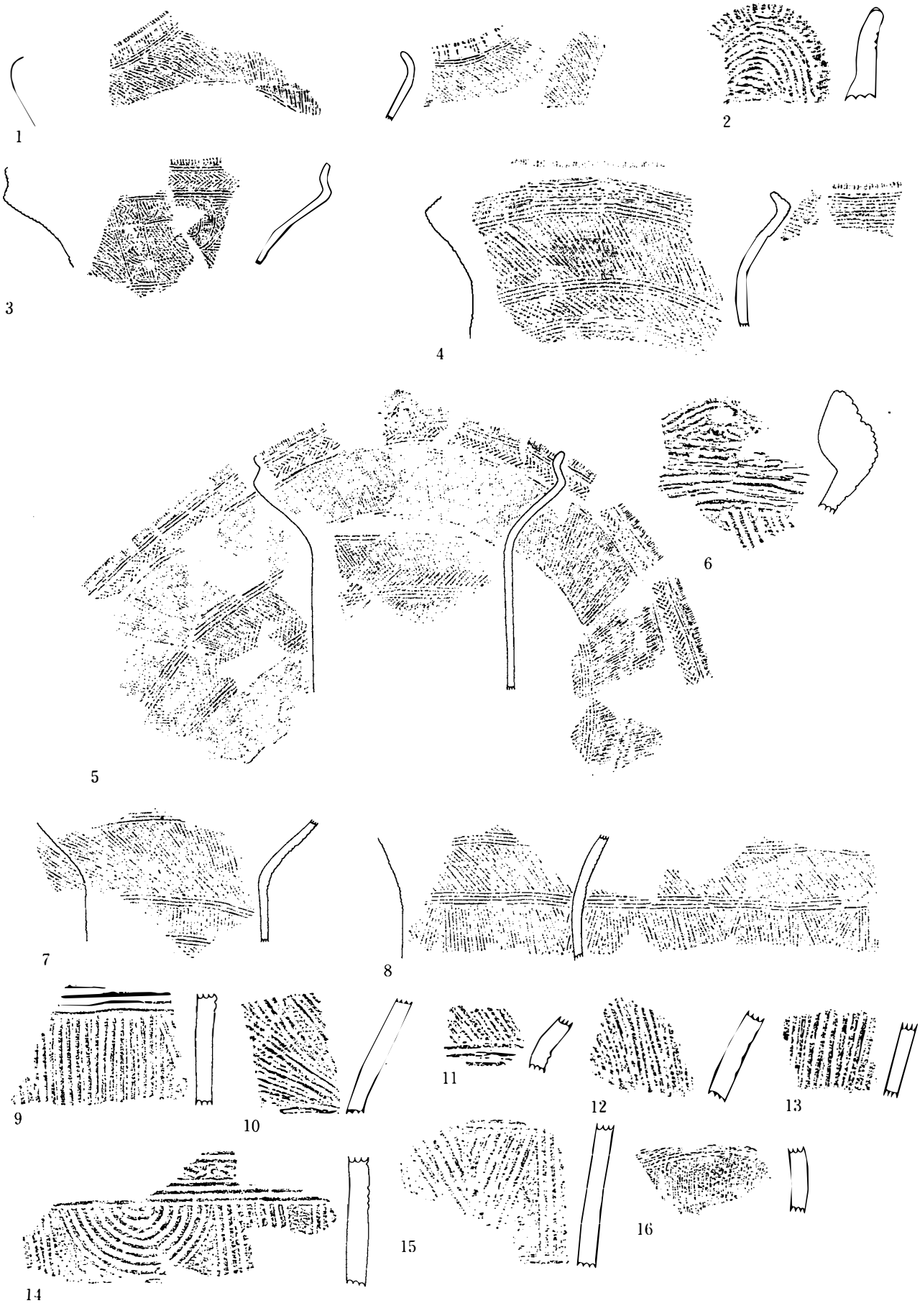
南西壁を中期のSB－05によって切られている。南壁はSB－04、06と重複しているが、重複関係は不明である。住居址は円形プランで長軸550cm、短軸450cmのである。炉は埋甕炉で、集合沈線文土器の胴部を利用している。柱穴は6本と思われる。

土器は集合沈線文土器を主体としている。器面全体を集合沈線文がおおうものと、口辺部に集合沈線文を施し、結束・結節縄文を施したものがあり、さらに全縄文の土器の口辺部に指圧痕隆帯を施したものがある。この土器はあるいは鍋屋町系の粗製土器であるかもしれない。縄文は例外なくRLである。

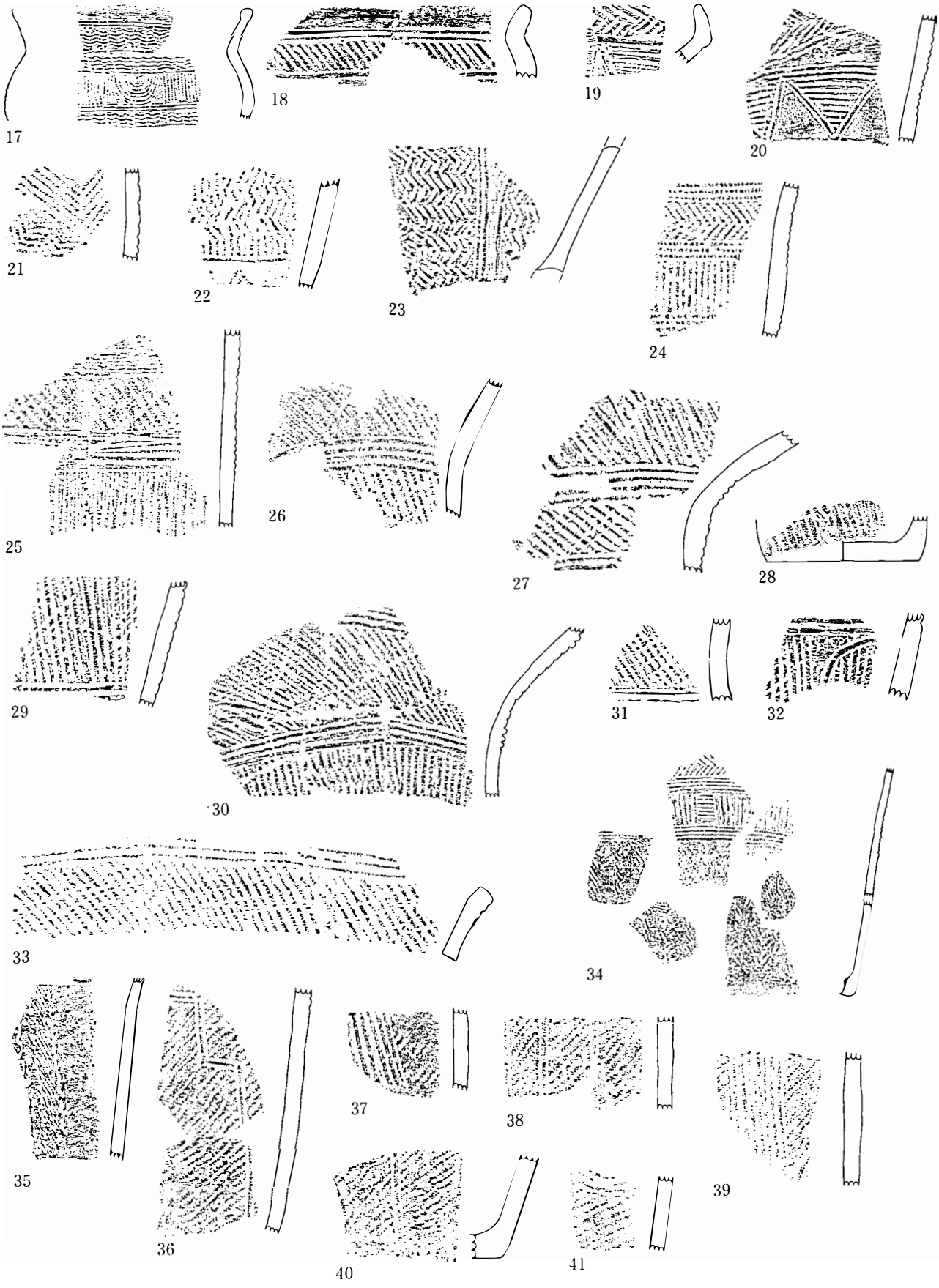
石器は石鏃4、打斧6、磨斧1、石錐1、スクレイパー1、石匕1、石皿1である。フレイクは黒曜石155g、水晶5gと早期のそれとはまったく量が異なっている。器種が豊富になって来る様相が窺える。

SB－03

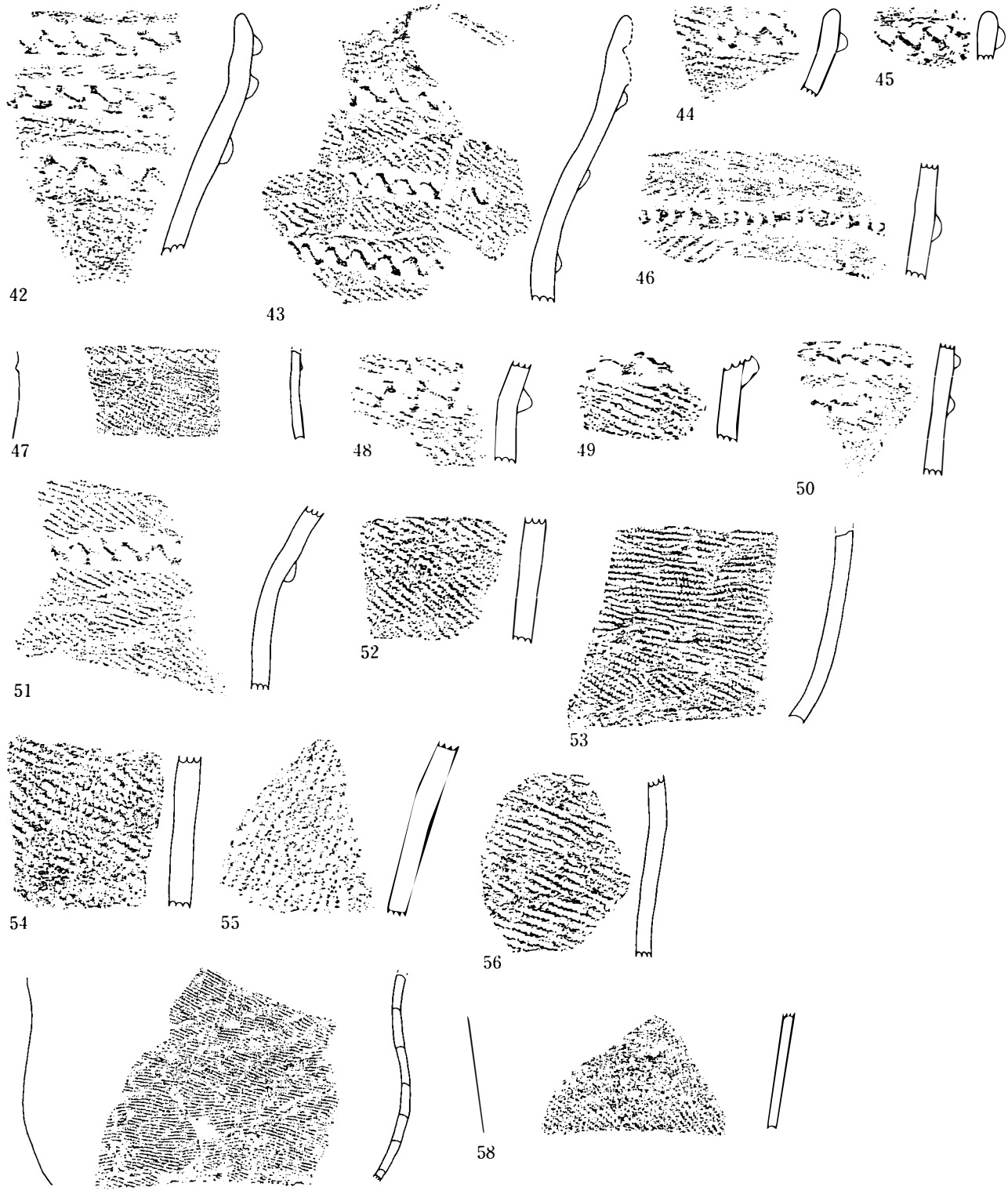
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
5	5	1	No.49	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部にソーメン状貼付文、口辺に集合沈線			
		2	No.52	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部に爪形文			
		3	No.45	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部に刻目、頸部に半截竹管で文様を描き、三角陰刻もみられる。集合沈線の2次施文もある。			
		4	No.35	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部に爪形文、口頸部の集合沈線には三角形状の空白部あり、集合沈線の2次施文もある。			
		5		3－1－b	集合沈線文土器　ほぼ器形のわかる個体、口唇部に爪形文、頸部に三角状空白部、胴部は羽状となっている。横帯区画が明確化			
		6	No.24	3－1－b	集合沈線文土器　口辺部			
		7		3－1－b	集合沈線文土器　横帯区画が明らか。2次施文は見られない。			
		8	No.86	3－1－b	集合沈線文土器　横帯区画、2次施文はない、三角状空白あり。埋甕炉			
		9	No.33	3－1－b	集合沈線文土器　胴部			
		10		3－1－b	集合沈線文土器　口辺部			
		11～13		3－1－b	集合沈線文土器			
		14	47	3－1－b	集合沈線文土器　集合沈線のモチーフとその間隙の三角状空白部がある。			
		15		3－1－b	集合沈線文土器　集合沈線のモチーフとその間隙の三角状空白部がある。			
		16		2－3－C	縄文地沈線文土器　諸磯b式であろう。			
	6	17	No.8、17	3－1－b	集合沈線文土器　14と同一個体か。			
		18～19		3－1－b	集合沈線文土器			
		20	No.29	3－1－b	集合沈線文土器　三角状空白部がより大きくなる。			
		21	No.31	3－1－b	集合沈線文土器　集合沈線による波状文を多用			
		22～23		3－1－b	集合沈線文土器　集合沈線による波状文を多用			
		24		3－1－b	集合沈線文土器　横帯区画にヘラ切浮線文の名残がある。			
		25	No.33	3－1－b	集合沈線文土器　胴部2次施文がみられる。			
		26～31		3－1－b	集合沈線文土器　胴部2次施文がみられる。			
		32	P46	3－1－b	集合沈線文土器　胴部2次施文がみられる。			
		33		3－1－b	集合沈線文土器　胴部2次施文がみられる。			
		34	P47	3－1－b・g	集合沈線文土器　集合沈線と結束縄文を同時施文、RLとLRの結束第1種の末端を結節している。			
		35	No.41	3－1－b・g	L2本の結束し、その両端を結節			
		36	No.47	3－1－e	RLのLの一方が細い。縄文地に半截竹管文			
		37	No.47	3－1－e	RLのLの一方が細い。			
		38		3－1－e	RLのLの一方が細い。			
		39		3－1－e	RLのLの一方が細い。			
		40	No.27	3－1－e	RLのLの一方が細い。			
		41	No.18	3－1－e				
	7	42	No.4	3－1－f	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		43	No.46	3－1－f	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯、耳状突起が付く。			
		44～45		3－1－f	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		46		3－1－f	Lの無節縄文、隆帯上ヘラ切			
		47	No.4	3－1－f	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			



第 5 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－03出土土器（１）（１～５、７、８は１：６）

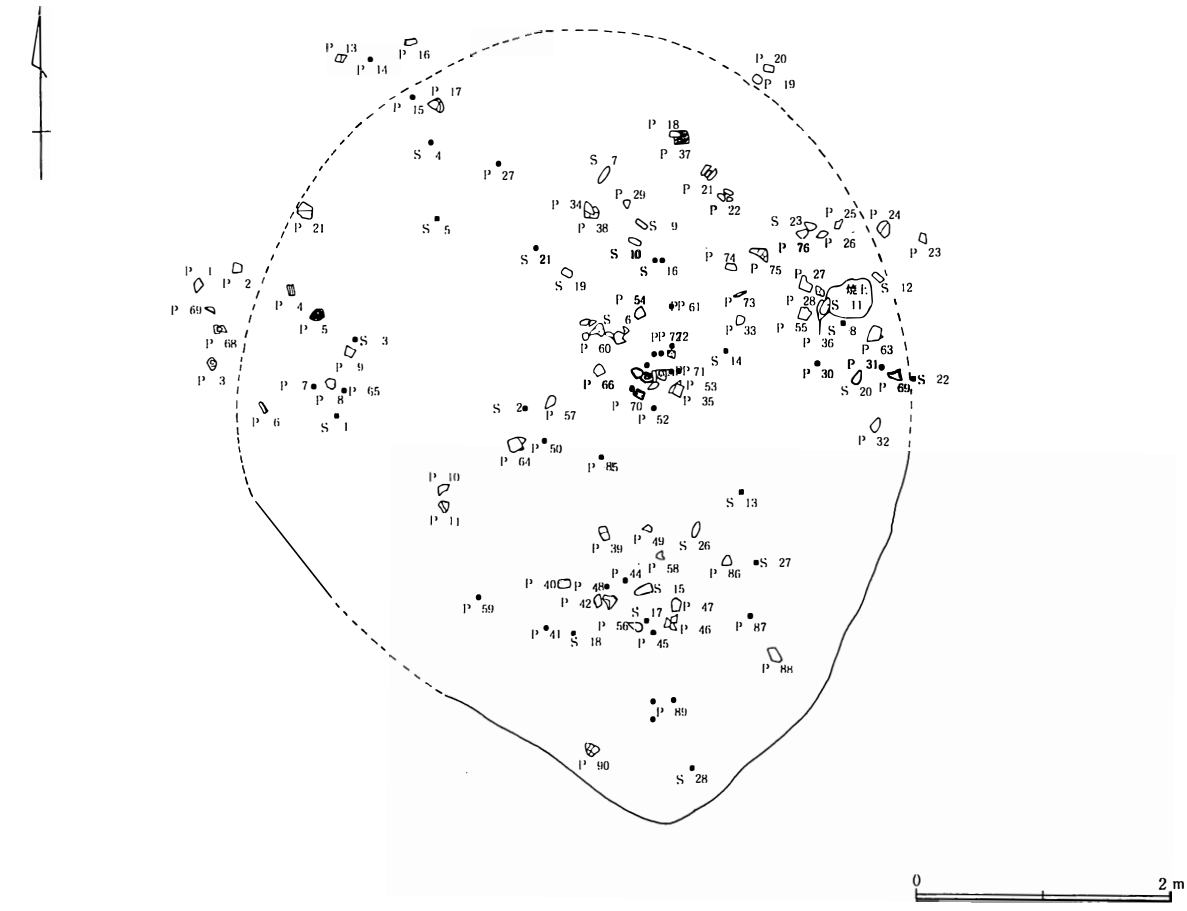


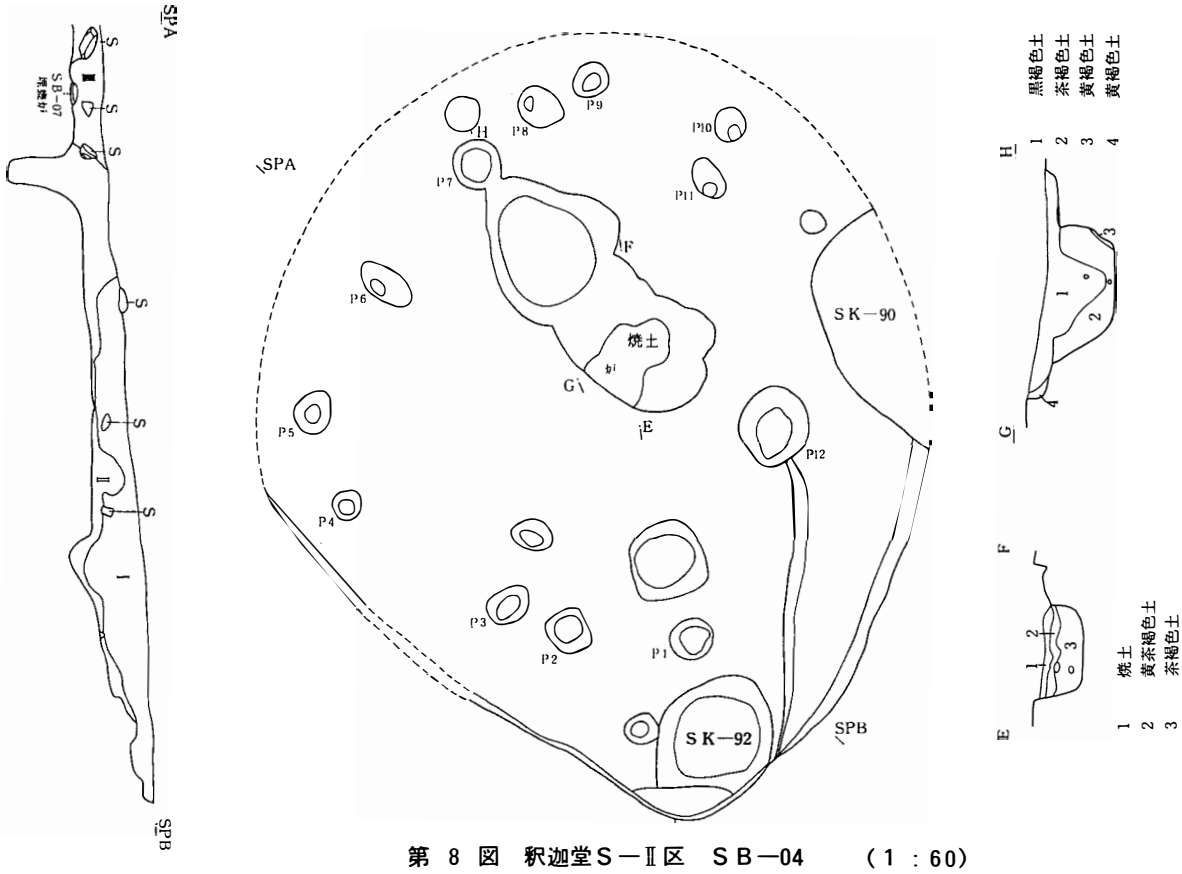
第 6 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－03出土土器（２）（17、34は１：６）



第 7 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－03出土土器（３）（47、57、58は１：６）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	7	48～49		3－1－f	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		50	No.7	3－1－f	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		51		3－1－f	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		52		3－1－h	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		53	No.28	3－1－h	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		54	No.12	3－1－h	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		55	No.39	3－1－h	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		56		3－1－h	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		57	No.57	3－1－h	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			
		58	No.47	3－1－h	RLの地文に指頭圧痕のある隆帯			





第 8 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－04　　（１：60）

S－Ⅱ区　SB－04

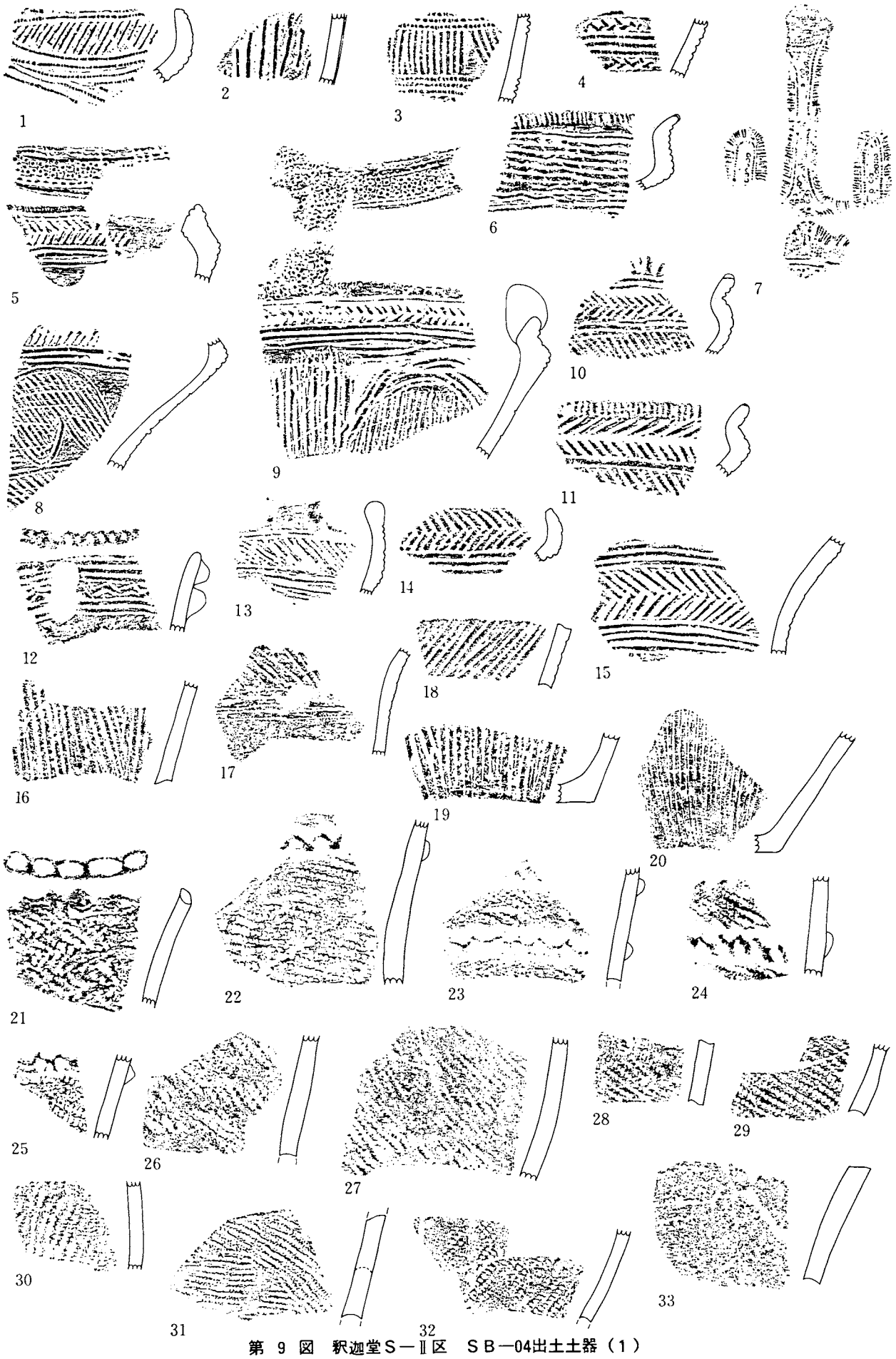
長軸600cm（推定）、短軸550cm（推定）の円形プランをなすと思われる。南東壁を確定できたにすぎず、北側はSB－06、07と重複関係をもつが、その前後関係はセクションの観察からも不明であった。炉は地床炉と思われ焼土の堆積があった。柱穴は確定できるものが少ないが7～8柱穴と思われる。

土器はやはり集合沈線文土器を主体とし、これに結節縄文土器・指頭圧痕隆帯文土器が加わる。SB－04で注目されるのは、上層から縄文地に結節浮線文をもつ十三菩提式土器が出土している点および、近畿東海系土器が出土している点にある。従来これらの土器の出土は県下にはほとんどなく、わずかな小片であるが伴出関係が注目される。

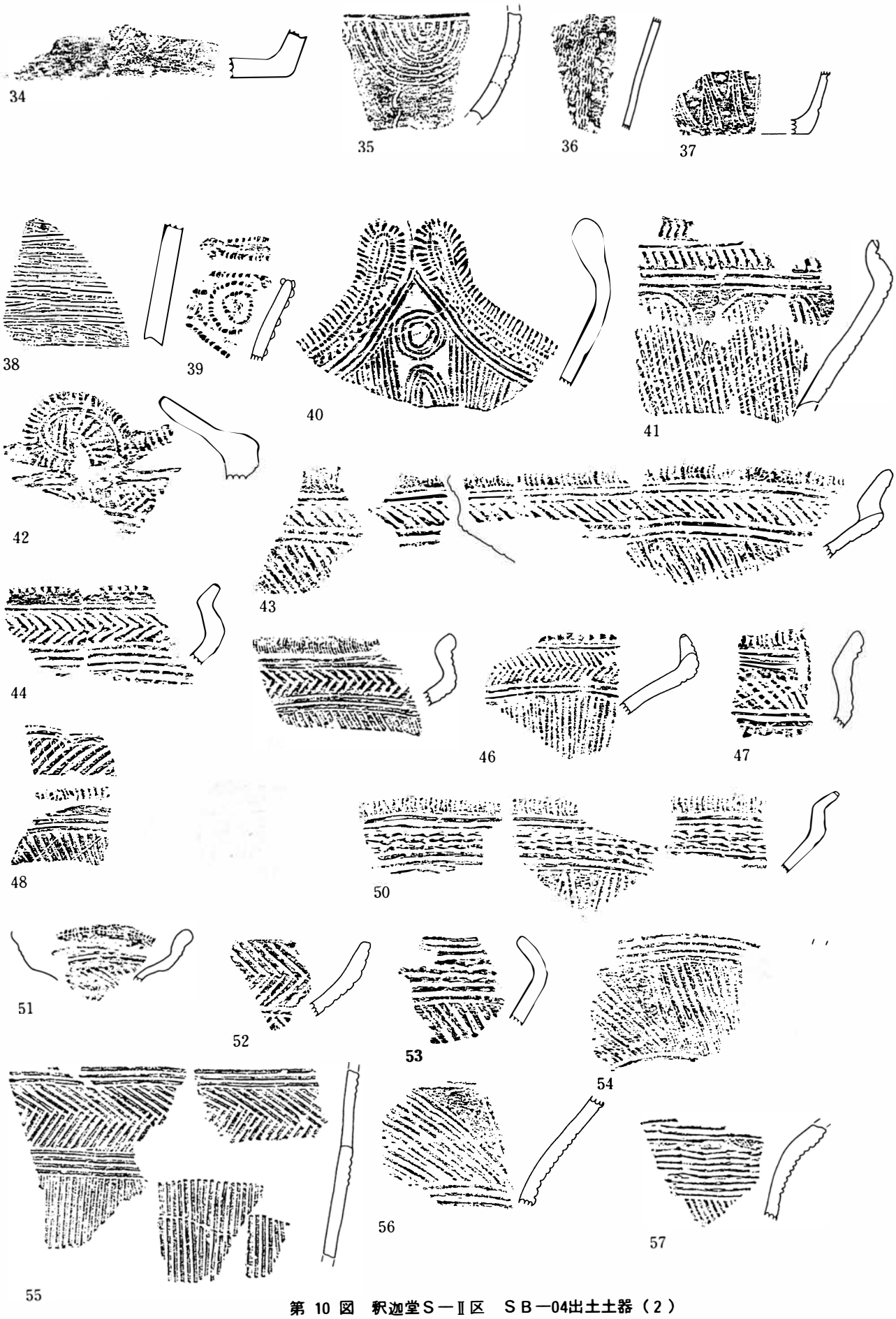
石器は石鏃3、石匕1、打斧8、磨石2、稜磨石3、石錘1、ユーズドフレイク3である。

SB－04

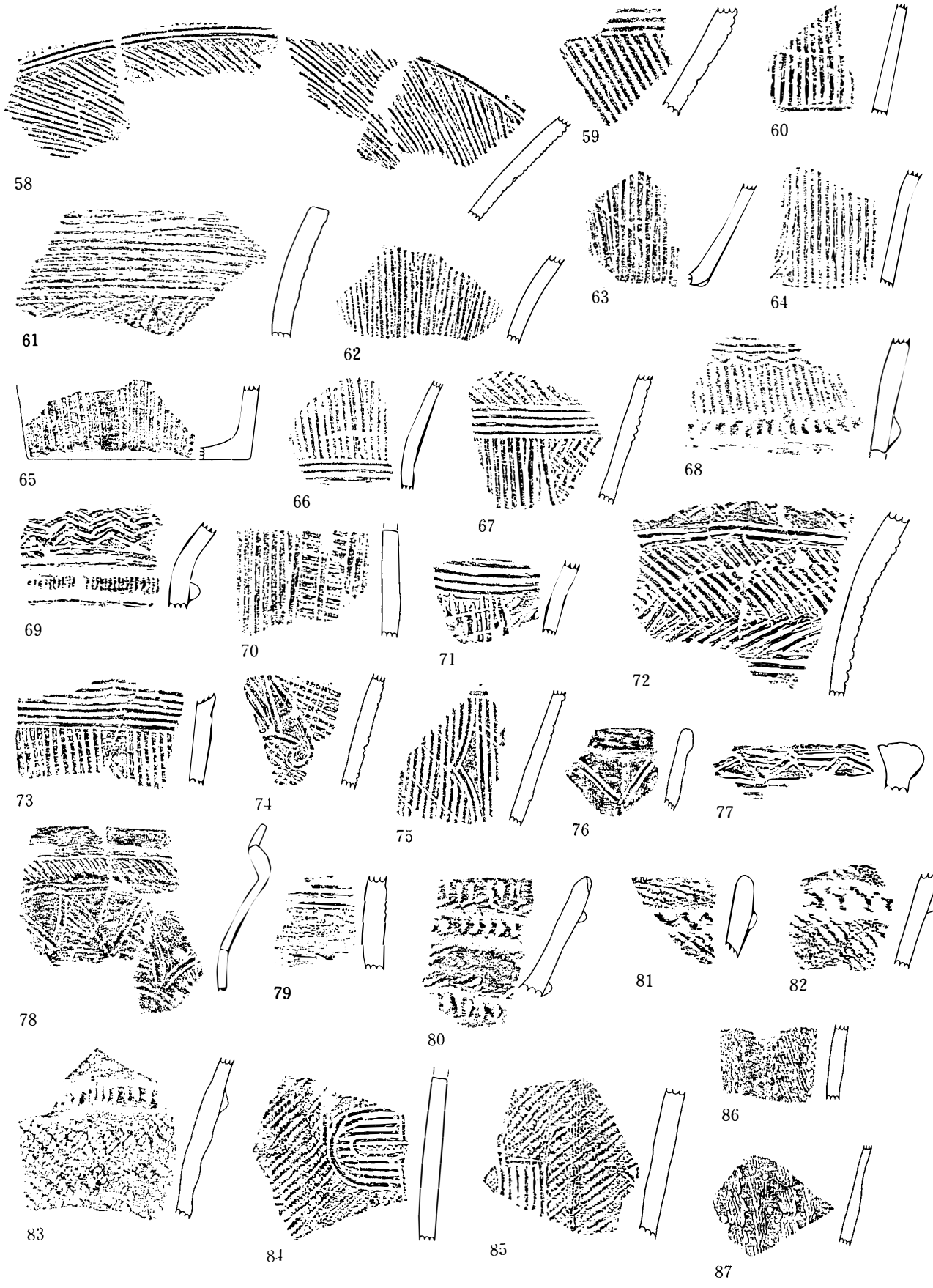
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
6	9	1	N－19	3－1－a	浮線文土器　RL？の地文に結節浮線文を付けたもの			
		2	N－18	3－1－a	浮線文土器　LRの地文にソーメン状浮線文			
		3	N－18	3－1－a	浮線文土器　集合沈線の間にヘラ切が見られる。			
		4	N－18　No.4	3－1－a	浮線文土器　稜杉状浮線文がみられる。			
		5	N－18	3－1－a or b	集合沈線文土器　口唇部に円形竹管文が付けられている。			
		6	N－18	3－1－a or b	集合沈線文土器　口唇部に爪形文			
		7	N－18	3－1－a or b	浮線文土器　把手の縁に浮線文を付け、円形浮文も付けている。			
		8	N－18　No.34	3－1－b	集合沈線文土器　頸部に半截竹管で文様を描き、その中を充填している。			
		9	N－18　No.24	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部に円形竹管文を付けている。			
		10	N－18　No.22	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部に浮線文			
		11	N－18　No.5	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部に浮線文			
		12	N－18　No.20	3－1－b	集合沈線文土器			
		13	O－18　No.19	3－1－b	集合沈線文土器			
		14	O－19　No.32	3－1－b	集合沈線文土器			
		15	N－18　No.6	3－1－b	集合沈線文土器			
		16	O－19　No.25	3－1－b	集合沈線文土器			
		17	O－19　No.28	3－1－b	集合沈線文土器			
		18	O－19　No.28	3－1－b	集合沈線文土器			
		19	N－19　No.16	3－1－b	集合沈線文土器			
		20	N－18　No.8	3－1－b	集合沈線文土器			
		21	N－18　No.2	3－1－g	縄文土器、結束第1種、RLとLR			
		22	O－19　No.27	3－1－f	縄文土器、RLの地文に指頭圧痕隆帯を付けている。			
		23	N－18　No.11	3－1－f	縄文土器、RLの地文に指頭圧痕隆帯を付けている。			
		24	N－18	3－1－f	縄文土器、RLの地文に指頭圧痕隆帯を付けている。			
		25	N－18	3－1－f	縄文土器、RLの地文に指頭圧痕隆帯を付けている。			
		26	O－19　No.33	3－1－h	縄文土器、RL　隆帯を付くものと思われる。			
		27	N－18　No.10	3－1－h	縄文土器、RL			
		28	N－18　No.13	3－1－h	縄文土器、RL			
		29	O－19　No.26	3－1－h	縄文土器、RL			
		30	N－19	3－1－h	縄文土器、RL			
		31	N－18　No.10	3－1－h	縄文土器、RL			
		32	O－18　No.21	3－1－h	縄文土器、RL			
		33	O－19　No.35	3－1－j	無文土器			
	10	34	O－18　No.22	3－1－g	底部　結束第1種RLとLR			
		35	N－18　No.19	3－1－b・g	RLとLRの結束の上に沈線文			
		36	O－18　No.18	3－1－i	単軸絡状帯第1A類　Lのゆるい縄文をLとRに巻いたもの。			
		37	P－18	3－1－i	単軸絡状帯第1A類　Rの大小の縄2本をLとRに巻いたもの。（1～37まで上層）			
		38		2－3－c	38～103まで住居確認後出土、縄文地に沈線文　諸磯b式			
		39		3－1－a	無文地に結節浮線文			
		40	No.67	3－1－a・b	口唇部に浮線文と結節浮線を付ける。円文の間に空白部がある。			
		41	No.38	3－1－a	頸部に三角状の空白部がある。			



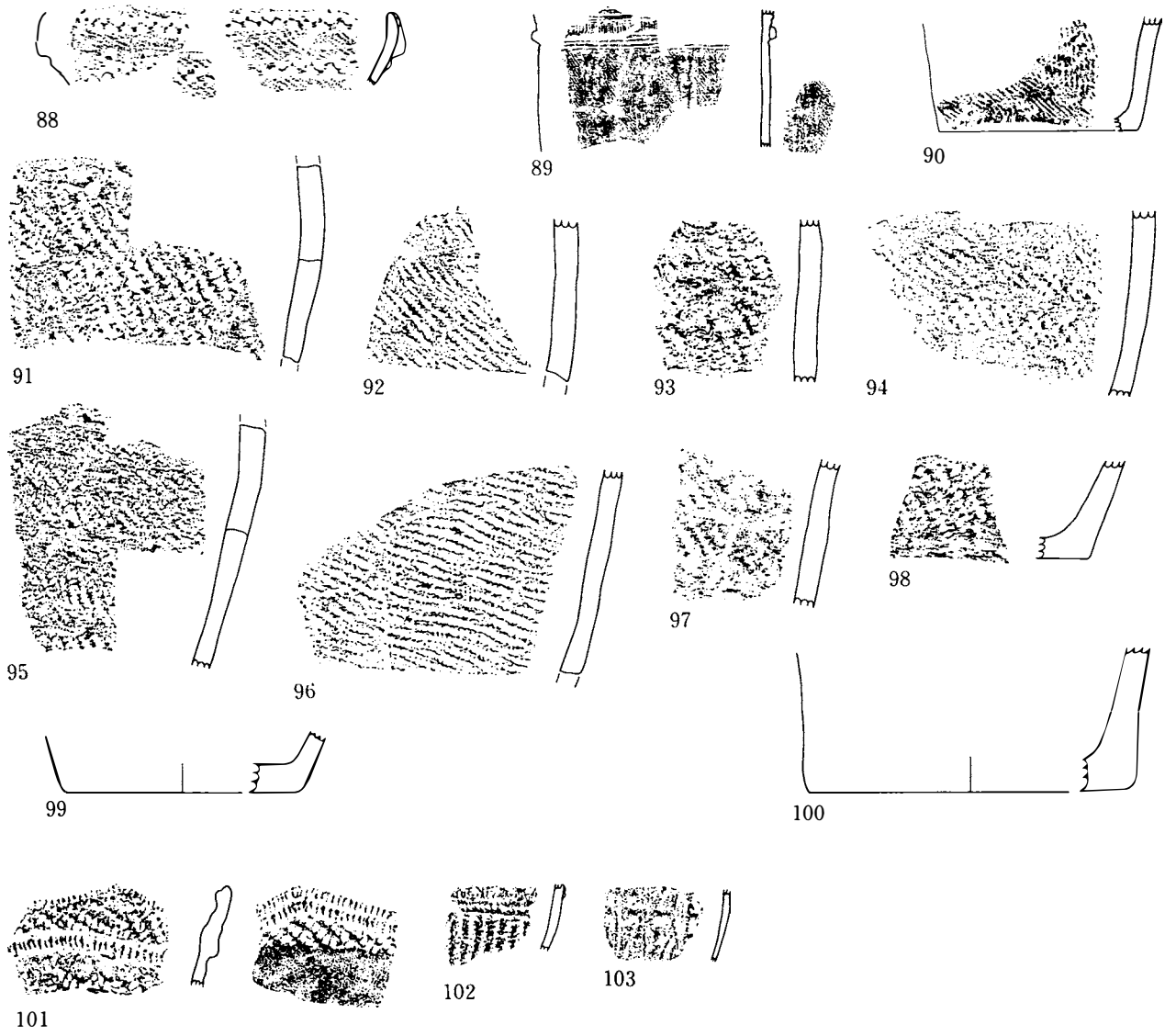
第 9 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SB－04出土土器（1）



第 10 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－04出土土器（２）



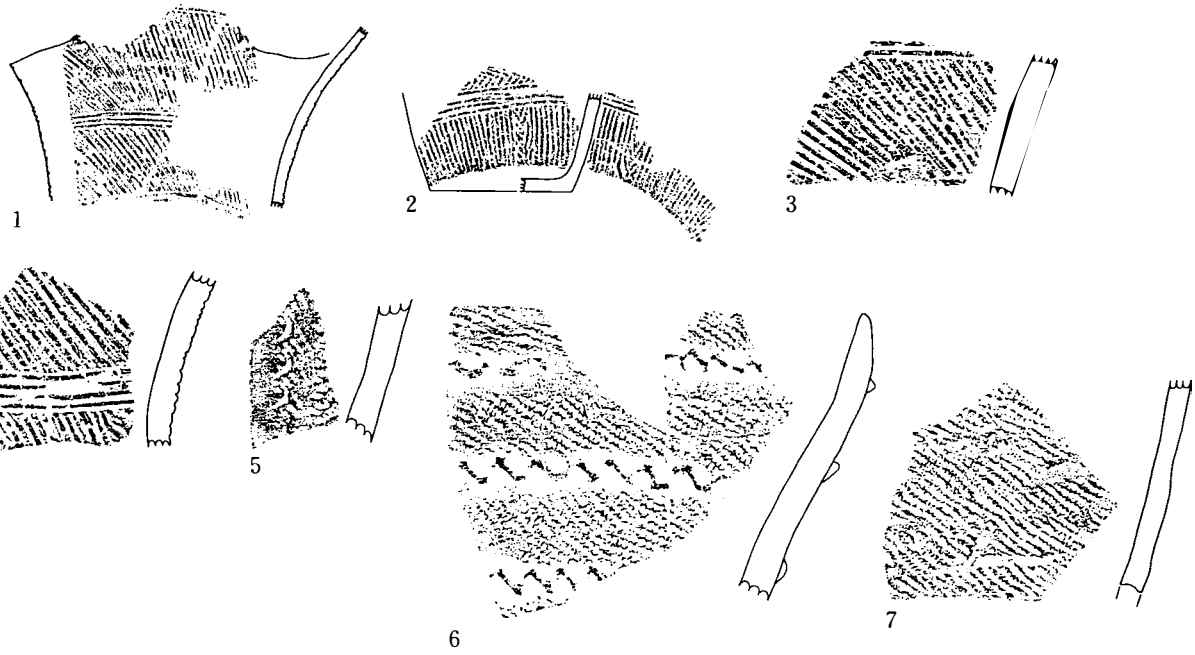
第 11 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－04出土土器（３）



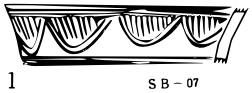
第 12 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区．ＳＢ－04出土土器（４）（88、89、90は１：６）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	10	42	No.42	3－1－b	口唇部に爪形文			
		43	No.46	3－1－b	口唇部に爪形文			
			O－19　No.32					
		44		3－1－b	口唇部に爪形文			
		45		3－1－b	口唇部に爪形文			
		46	No.74	3－1－b	口唇部に爪形文			
		47		3－1－b	口唇部に爪形文　２次施文がある。			
		48		3－1－b	口唇部に爪形文　口唇上にも集合沈線文　２次施文もある。			
		49	No.42	3－1－b	口唇部に爪形文			
		50	No.45	3－1－b	口唇部に爪形文　頸部に三角状空白部がある。			
		51	No.45	3－1－b	口唇部に爪形文　ミニチュア			
		52		3－1－b	口唇部に爪形文			
		53		3－1－b				
		54	No.81	3－1－b	頸部			
		55	No.84	3－1－b	頭部			
		56	No.56	3－1－b	頸部			
		57	No.72	3－1－b	頸部			
	11	58	No.72	3－1－b	胴部			
		59	No.71	3－1－b	頸部			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	11	60	No.85	3－1－b	頸部			
		61	No.88	3－1－b	頸部			
		62	No.85	3－1－b	頸部			
		63	No.44	3－1－b	頸部			
		64	No.46	3－1－b	頸部			
		65	No.82	3－1－b	胴部			
		66	No.46	3－1－b	頸部			
		67	No.82	3－1－b	胴部			
		68	No.47	3－1－b	胴部			
		69	No.66	3－1－b				
		70	No.70	3－1－b				
		71	No.82	3－1－b				
		72	No.37	3－1－b	胴部　胴部に2次施文がある。			
		73	No.68					
		74	No.48	3－1－b				
		75	No.48	3－1－b	胴部			
		76		3－1－b	口辺			
		77		3－1－b	口辺　ほとんど無文地に半截竹管文を加え、集合沈線は充塡しない。			
		78	No.77	3－1－b	口辺			
		79		3－1－b				
		80	No.62	3－1－f	縄文土器　Lか			
		81		3－1－f				
		82	No.71	3－1－f				
		83	No.55	3－1－f	RL　隆帯上ヘラ刻み			
		84	No.71	3－1－e	縄軸LにLをR巻き			
		85	No.71	3－1－e	縄軸LにLをR巻きしさらにその上に0段の細い縄を一部巻いている。			
		86		3－1－g	結束第1種Lを2本両端を結節			
		87		3－1－i	器面に一様の深さに燃糸圧痕が見られないことから、半截竹管の中央部、截かれた面に縄の中央を出し、その両側にLをL巻きし、しかもその両端の縄も穿孔して止めていると思われる。			
	12	88	No.8	3－1－f	縄文地に指頭圧痕隆帯を加えたもの、RL			
		89	No.64	3－1－b・g	おそらく口頸部を集合沈線文で描くもので、胴部は結束第1種RLとLRの羽状縄文とし、その末端を結節している。			
		90		3－1－h	RL　おそらく隆帯が付くものと思われる。			
		91	No.57	3－1－h	RL			
		92	No.58	3－1－h	RL			
		93	No.52	3－1－h	RL			
		94	No.73	3－1－h	RL			
		95	No.71	3－1－h	RL			
		96	No.51	3－1－h	RL			
		97	No.41	3－1－h	RL			
		98		3－1－h	RL			
		99	No.51	3－1－j	底部			
		100	No.64	3－1－j	底部			
		101	SB－04	3－2	近畿東海系土器　RLの地文の上に隆帯と爪形文、口唇部にも爪形文、内面にも縄文を施す。縄文は0段3条か。			
		102		3－2	近畿東海系土器　RLの縄文			
		103		3－2	近畿東海系土器　無文			



第 13 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－06出土土器（１、２は１：６）



第 14 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－07出土土器（１：６）

Ｓ－Ⅱ区　SB－06

ＳＢ－03とＳＢ－04の間のわずかな空間に、埋甕炉を検出した。壁も西壁の極く一部を検出したにすぎないが、この炉址をもって、ＳＢ－06を設定した。炉址のまわりには、ほとんど焼土の堆積はない。炉址の他は柱穴も不明である。

土器は甕体土器が集合沈線文土器の胴部を使用しており、住居址の時期もこの時期と考えておきたい。

石器は磨石（凹あり）と石筒状石器１が出土している。

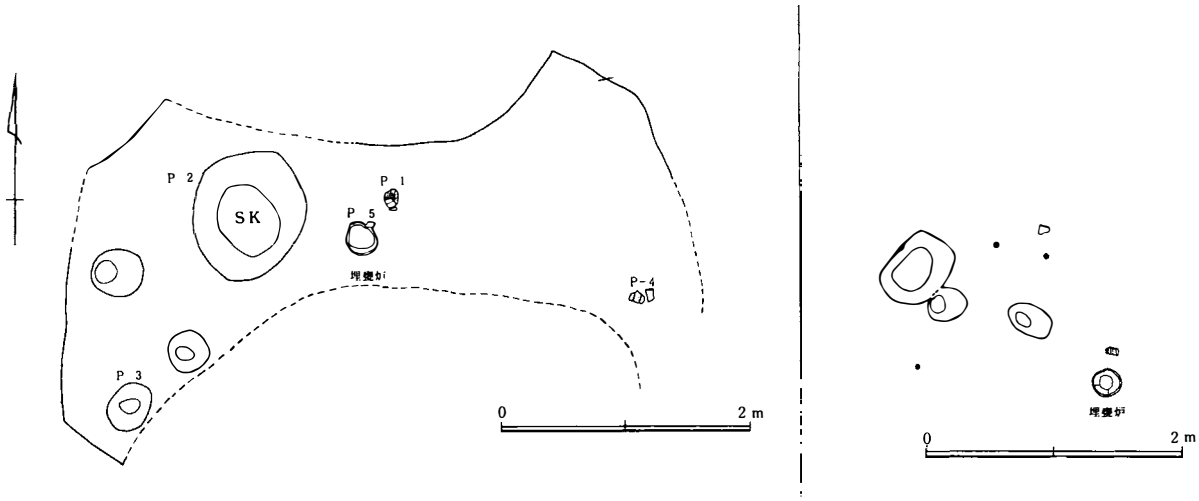
Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－07

ＳＢ－04の北壁を調査中、発見した埋甕炉であるが、焼土の広がりもなく、炉としての断定には若干疑問もある。

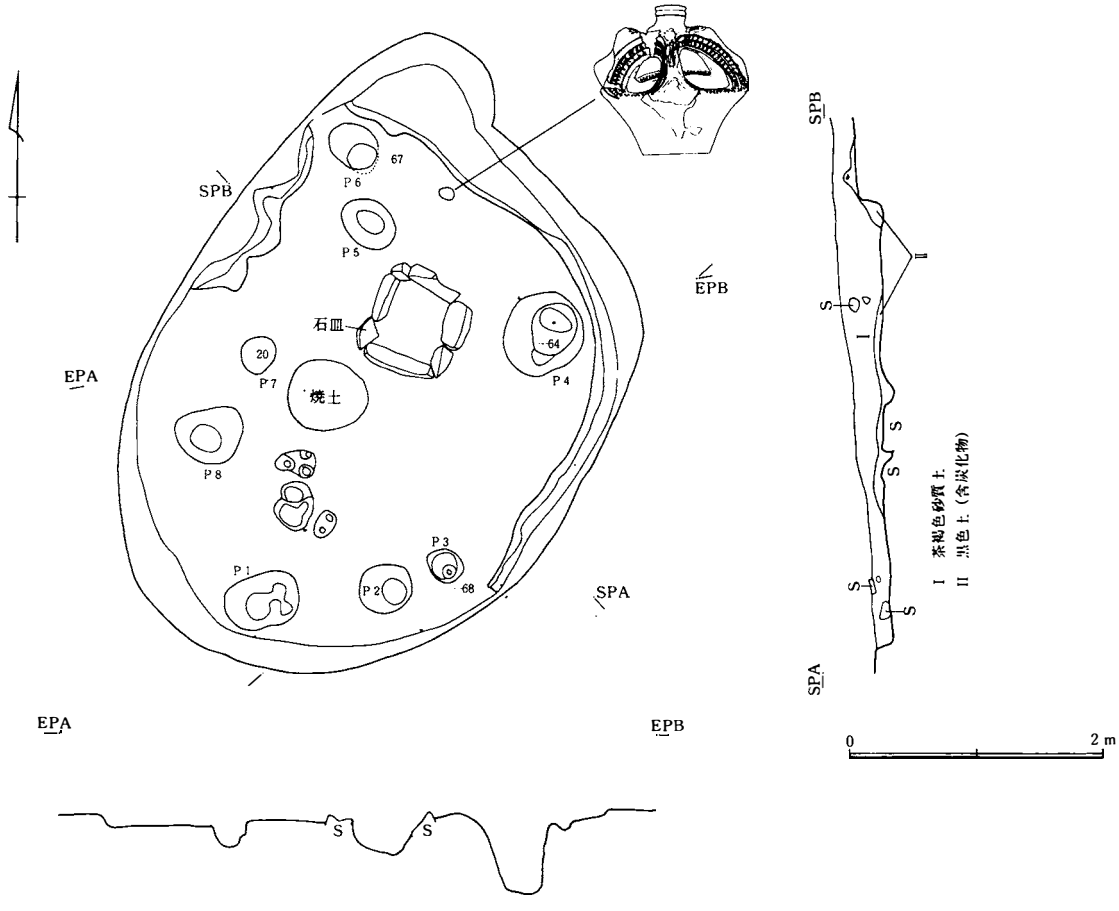
炉体土器は集合沈線文の施文もまばらで、密集はしていない。これはＳ－Ⅰ区ＳＢ－23の図164－３の土器に近似し、集合沈線文土器でもより新しい部分に属するものである。

SB－06・07

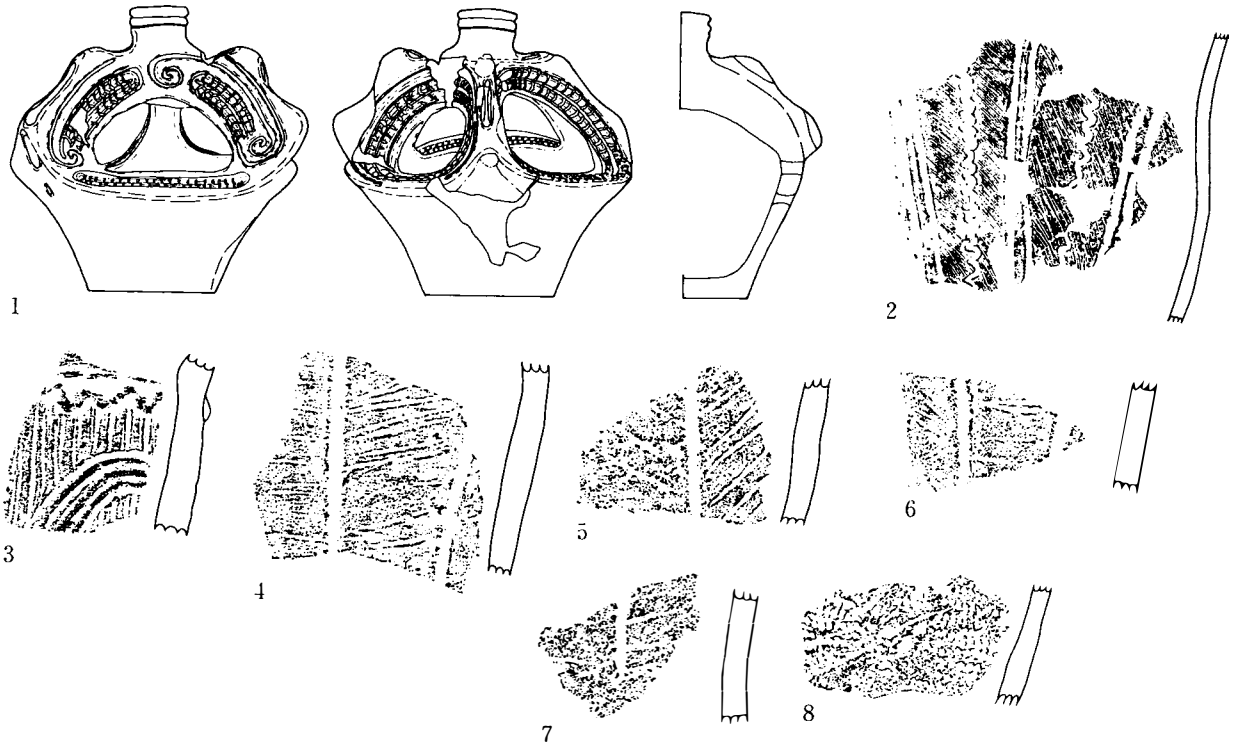
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
7	13	1	ＳＢ－06	3－1－b	集合沈線文土器　埋甕炉　口辺部を欠く。			
		2	ＳＢ－06　No.1	3－1－b	集合沈線文土器　底部			
		3		3－1－b	集合沈線文土器　口辺部			
		4		3－1－b	集合沈線文土器　口辺部			
		5		3－1－g	縄文土器　ＲＬとＬの結束第１種両端結節			
		6	No.4	3－1－f	縄文土器　ＲＬの縄文地に指頭圧痕隆帯			
		7	No.4	3－1－h	縄文土器　ＲＬ　０段３条			
	14	1	ＳＢ－07	3－1－b	集合沈線文土器　連弧状沈線の中に沈線を加えている。			



第 15 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－06、07 （１：60）



第 16 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－05 （１：60）



第 17 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SB－05 出土土器（1、2は1：6）

S－Ⅱ区　SB－05

長軸460㎝短軸350㎝の楕円形プランである。ただ奥壁部のラインはやや直線的である。壁高30㎝を測り、周溝は出入口部側には検出されていない。柱穴は4柱穴で、奥壁部炉の北の柱穴を欠くものである。出入口部にピットがあるので、これが埋甕ピットと思われる。炉址は方形囲炉で、石組の中に石皿片が用いられている。

土器は吊手土器の完形品が炉の北側の奥壁近くに検出されている。文様からはやや古い様相もあるが、曽利Ⅲ～Ⅳ式期のものであろう。他の土器は小片が出土しているのみである。石器は炉の用材として用いられていた石皿以外にない。

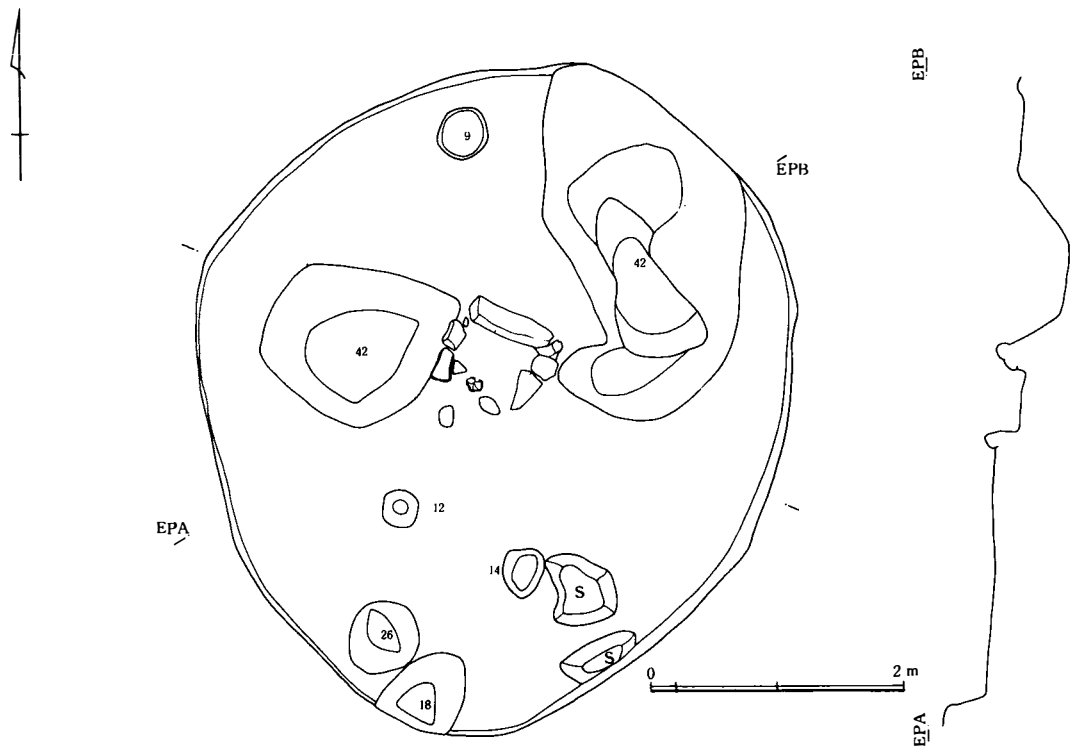
SB－05

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
6	17	1		8	吊手土器　住居址の奥壁に近い部分から出土	11.4		
		2		8	曽利Ⅲ～Ⅳ式の胴部			
		3		8	〃			
		4～7		8	曽利Ⅳ式の胴部であろう。			
		8		9	RL			

S－Ⅱ区　SB－08

長軸570㎝、短軸470㎝のほぼ円形プランである。炉址は方形石囲炉で出入口部の石材が抜き取られている。奥壁部の石材は大きく一段と高いものである。曽利式期の一般的な住居プランと柱穴の位置からすれば、この住居址に伴うピットは検出されていない。この住居址は撹乱が著しいことと、砂利層のための検出できなかったため柱穴が検出できなかったと思われる。出入口部にピットはあるが、埋甕は検出されていない。

出土遺物は極く少なく、曽利式土器と思われる少片が出土したにすぎない。



第 18 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SB－08　(1 : 60)

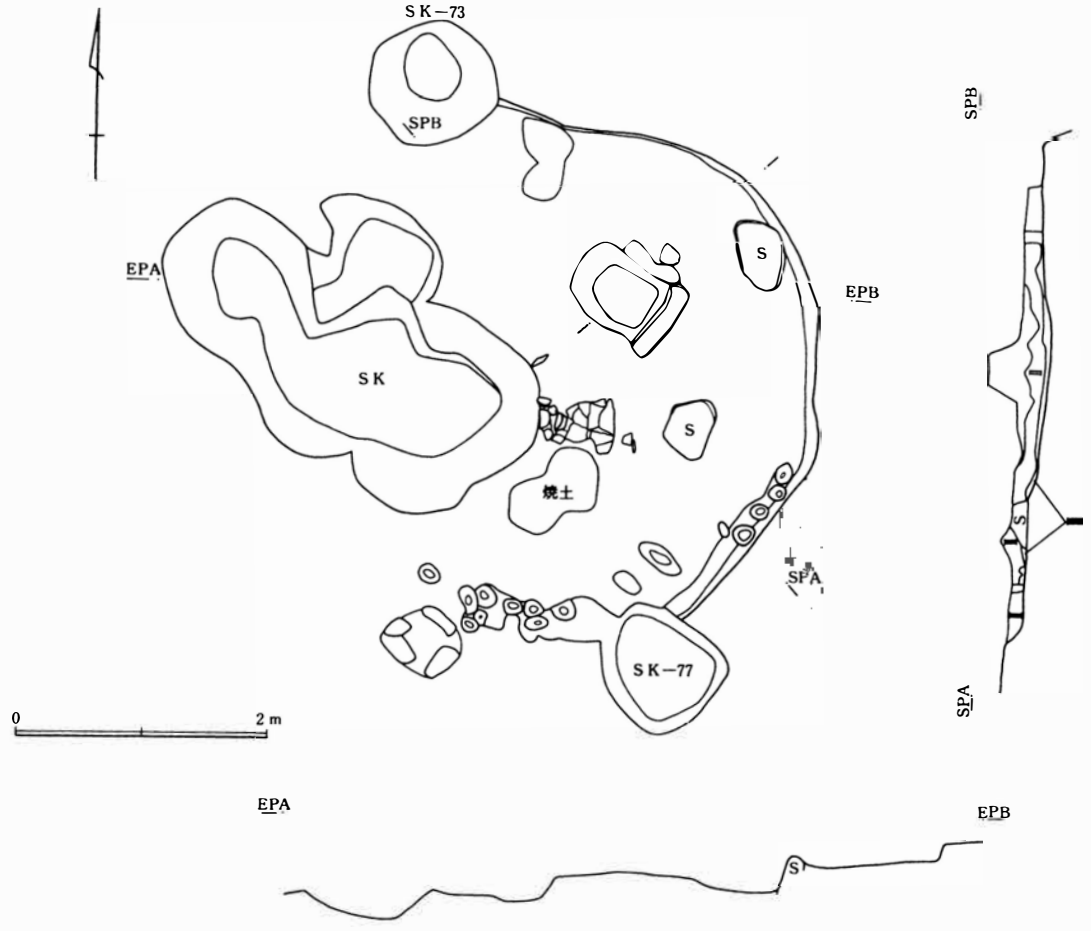
S－Ⅱ区　SB－12

東壁部分をほぼ半周検出した住居址で、直径400㎝の円形プランをなすものと思われる。東南壁に周溝があり、数個の小ピットが検出されている。炉址は方形石囲炉で、奥壁部分と東側石を残している。この住居址の柱穴は検出されていない。

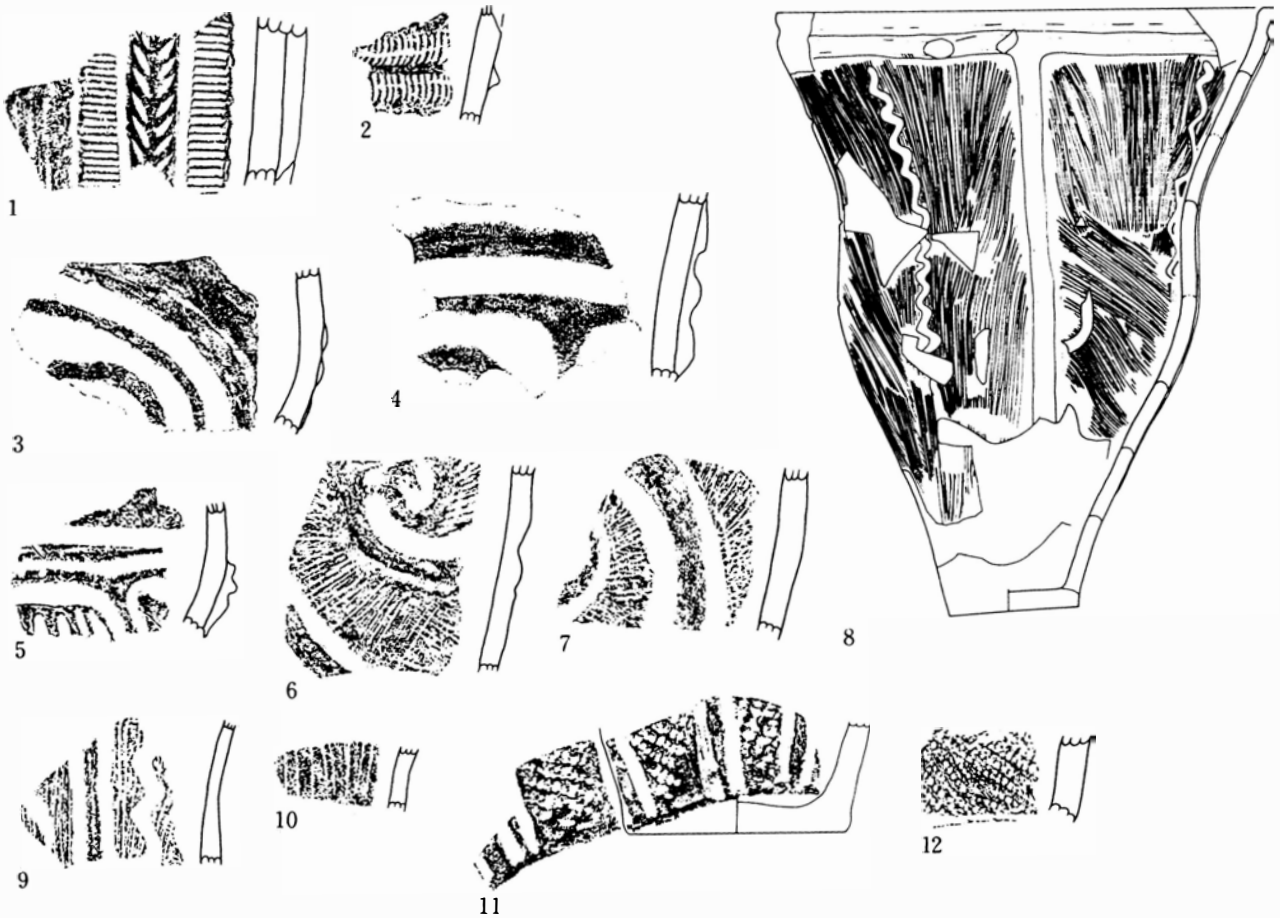
土器は炉に近接した床面上に曽利Ⅳ式土器が一個体分横たわっていた。口頸部文様帯は省略され、口辺にめぐる水平半隆帯から垂下する半隆帯によって区画された中に条線文を地文とし、波状垂線を施している。他は小片である。石器は磨石２、玉石１、稜磨石１である。

SB－12

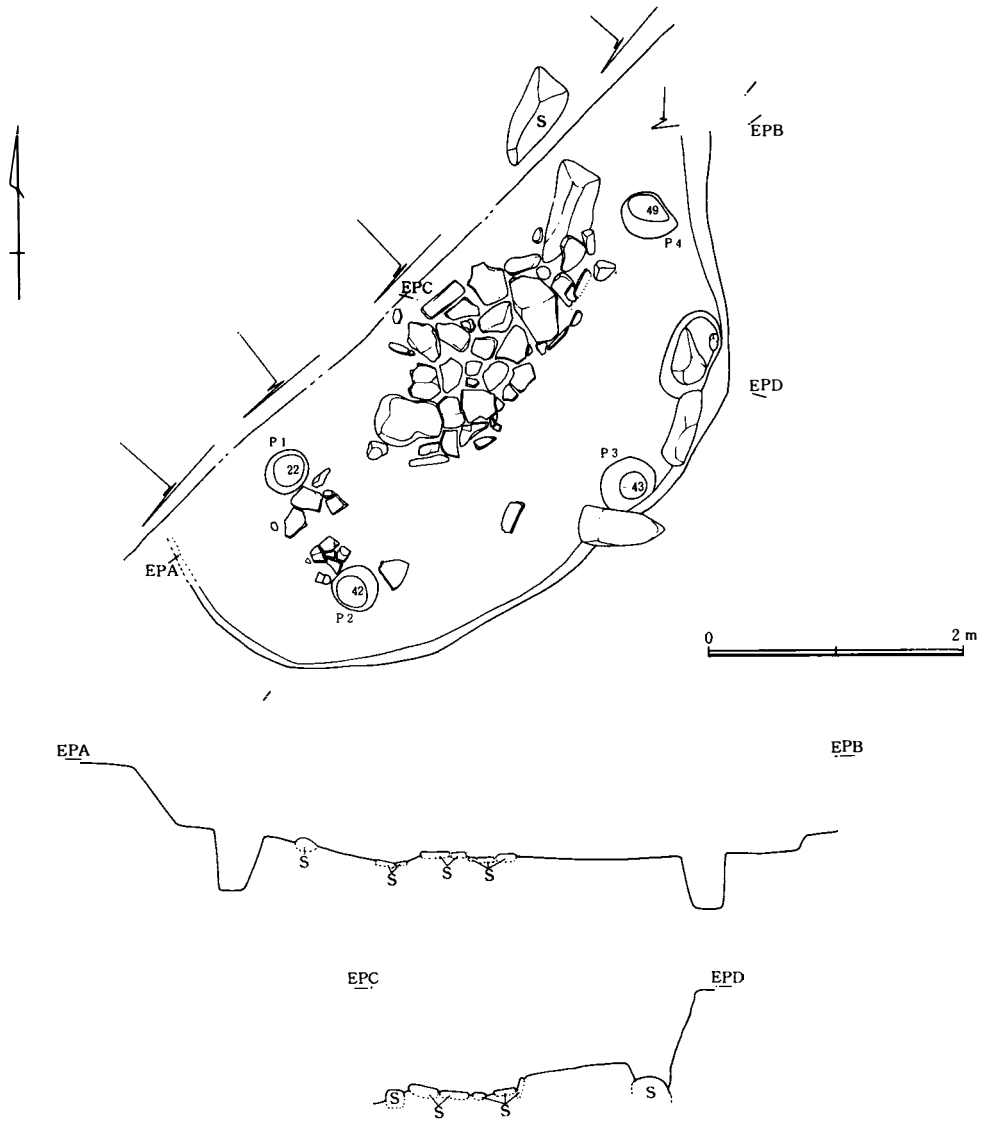
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	20	1		7	稜杉隆帯とキャタピラ文			
		2		7	爪形文１～２は混入であろう。			
		3		8	曽利Ⅰ～Ⅳ式の胴部			
		4		8	曽利Ⅳ式			
		5		8	曽利Ⅰ～Ⅳ式の鉢形土器			
		6		8	曽利Ⅰ～Ⅳ式の胴部			
		7		8	曽利Ⅰ～Ⅳ式の胴部			
		8		8	炉の近くから出土。垂下底隆帯で区画された中に半截竹管による条線とその上に波状沈線の垂下している。	47.4		
		9		8	曽利Ⅰ～Ⅳ式の胴部			
		10		8	曽利Ⅰ～Ⅳ式の胴部			
		11	No.11	9	ＬＲＬ			
		12		9	ＲＬ			



第 19 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SB－12



第 20 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SB－12出土土器（8は1：6）



第 21 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－09（１：60）

Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－09

北西壁は失なわれているが、長軸550cm、短軸400cm（推定）と思われる楕円形プランをもつ。敷石は住居址の中央部にのみ検出されている。炉址は確認されていない。柱穴と思われるピットはＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４である。

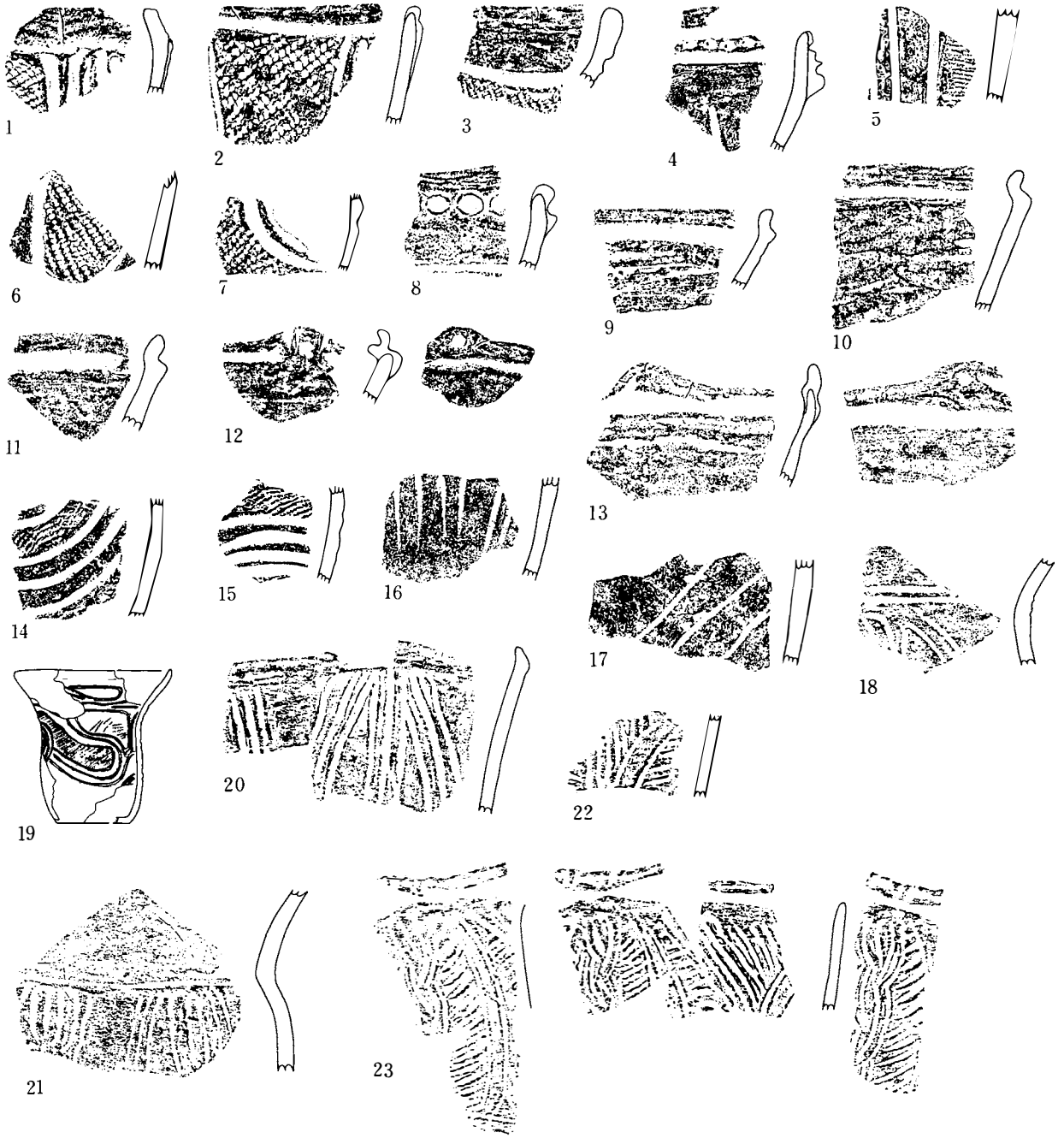
土器は中期末の加曽利Ｅ式土器と堀之内１式土器が出土している。住居址の時期としては、この堀之式期と考えておきたい。

石器は打斧が７点出土している。

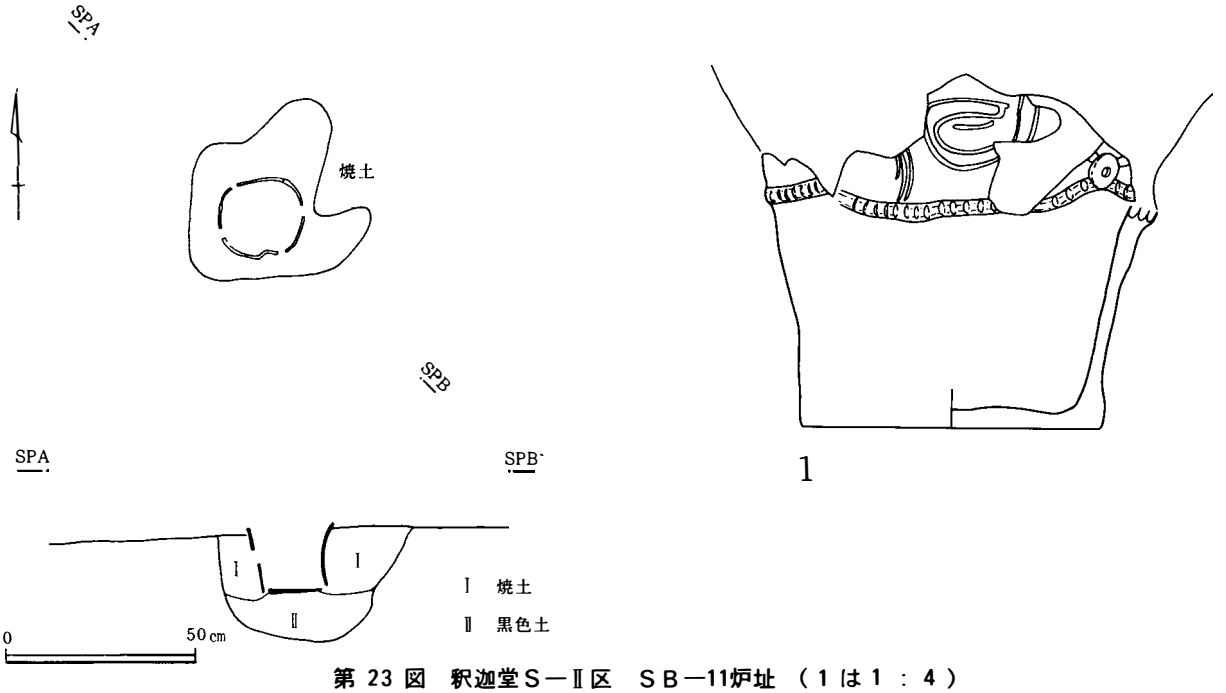
ＳＢ－09

図　版	挿　図	挿図No.	出土地点	分　類	文　様	高　さ	容量ℓ	備　考
7	22	1			口辺部、ＬＲ			
		2			口辺部、ＬＲ　縄文地３本引き沈線			
		3		10	ＲＬ			
		4		12－３	３本引き沈線			
		5			２と同一であろう。			
		6		10	ＲＬ			
		7		10	ＬＲ			
		8		10	口辺部に円形刺突			
		9		12－３	口縁部に沈線を加えたくの字形口縁			
		10		12－３	口縁部に沈線を加えたくの字形口縁			
		11		12－３	口縁部に沈線を加えたくの字形口縁			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
7	22	12		12—3	口縁部に沈線を加えたくの字形口縁			
		13		12—3	口縁部に沈線を加えたくの字形口縁			
		14		12—9	LR 磨消縄文			
		15		12—9	LR 磨消縄文			
		16		12—1	2本引き沈線文			
		17		12—3	2本引き沈線文			
		18		12—3	2本引き沈線文			
		19		12—8—b	無節の縄文Lを地文とした3本引沈線文			
		20		12—3	3本引き沈線			
		21		12—3	3本引き沈線			
		22		12—3	2本引沈線でモチーフを描きその間を沈線で埋めたもの			
		23		12—3	2本引沈線でモチーフを描きその間を沈線で埋めたもの			



第 22 図　釈迦堂S—Ⅱ区　SB—09出土土器（19は1 : 6）



第 23 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－11炉址　（１は１：４）

Ｓ－Ⅱ区　SB－11

Ｍ－21グリッドで、焼土と埋甕炉を検出し、これをＳＢ－11とした。この炉址に伴う柱穴の検出に務めたが、検出できず、住居址の範囲は不明である。

埋甕炉の土器は堀之内Ⅰ式で胴下半部で２本引き沈線文と隆帯文が見える。

Ｓ－Ⅱ区　SB－10

表土直下に検出された柄鏡形の敷石住居址で、円形部の直径350㎝、柄部は長さ150㎝、巾100㎝である。円形部の端の石は一段と高くなっており、縁石を形成していたと思われる。炉址が存在するであろう部分の石は貫き取られており、その存在を確認できなかった。石材としては扁平な安材岩も用いるが、主体は花崗岩である。出入部に石棒の一部が検出されている他は、石皿や多孔石は用いられていない。

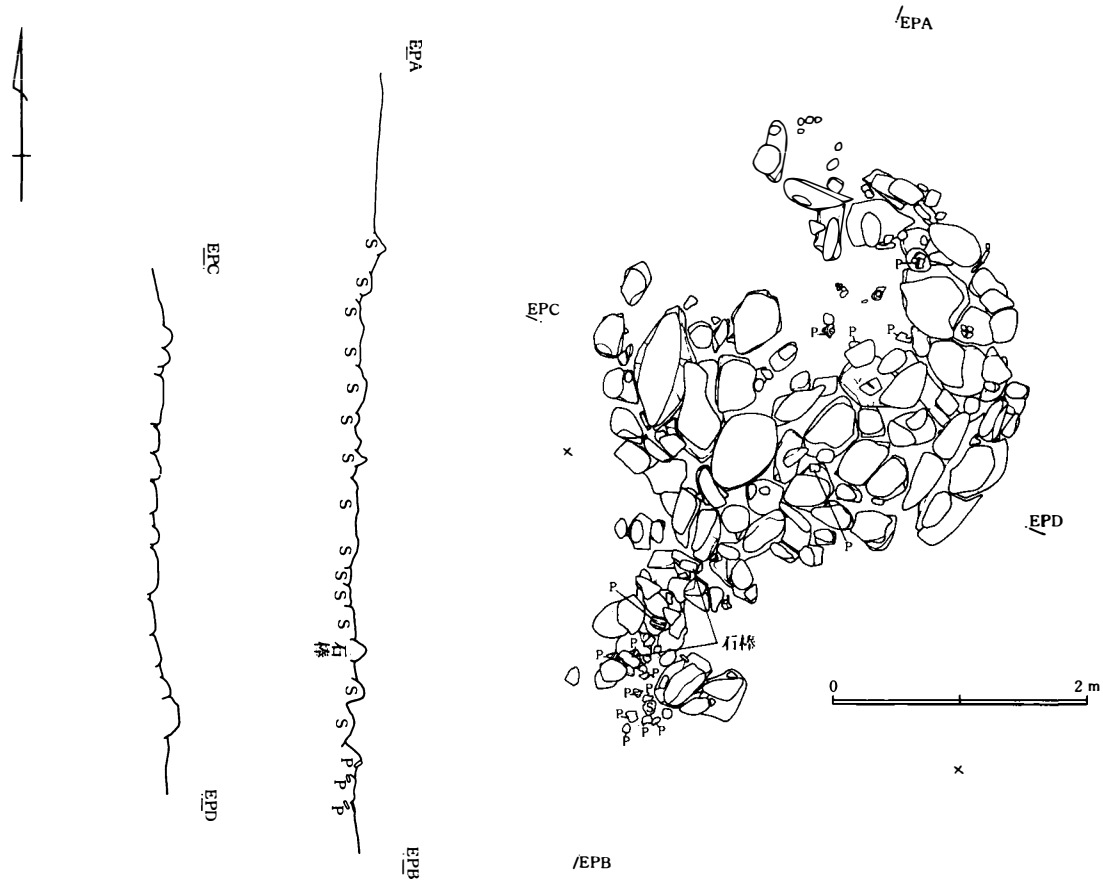
出土遺物は曽利式、加曽利Ｅ式土器の終末から堀之内式までであるが、住居址の時期としては、後期初頭の称名寺式土器の時期としておきたいと思う。

石器は石鏃１、石棒片２、磨石１が出土している。石棒はいずれも無頭石棒と思われる。

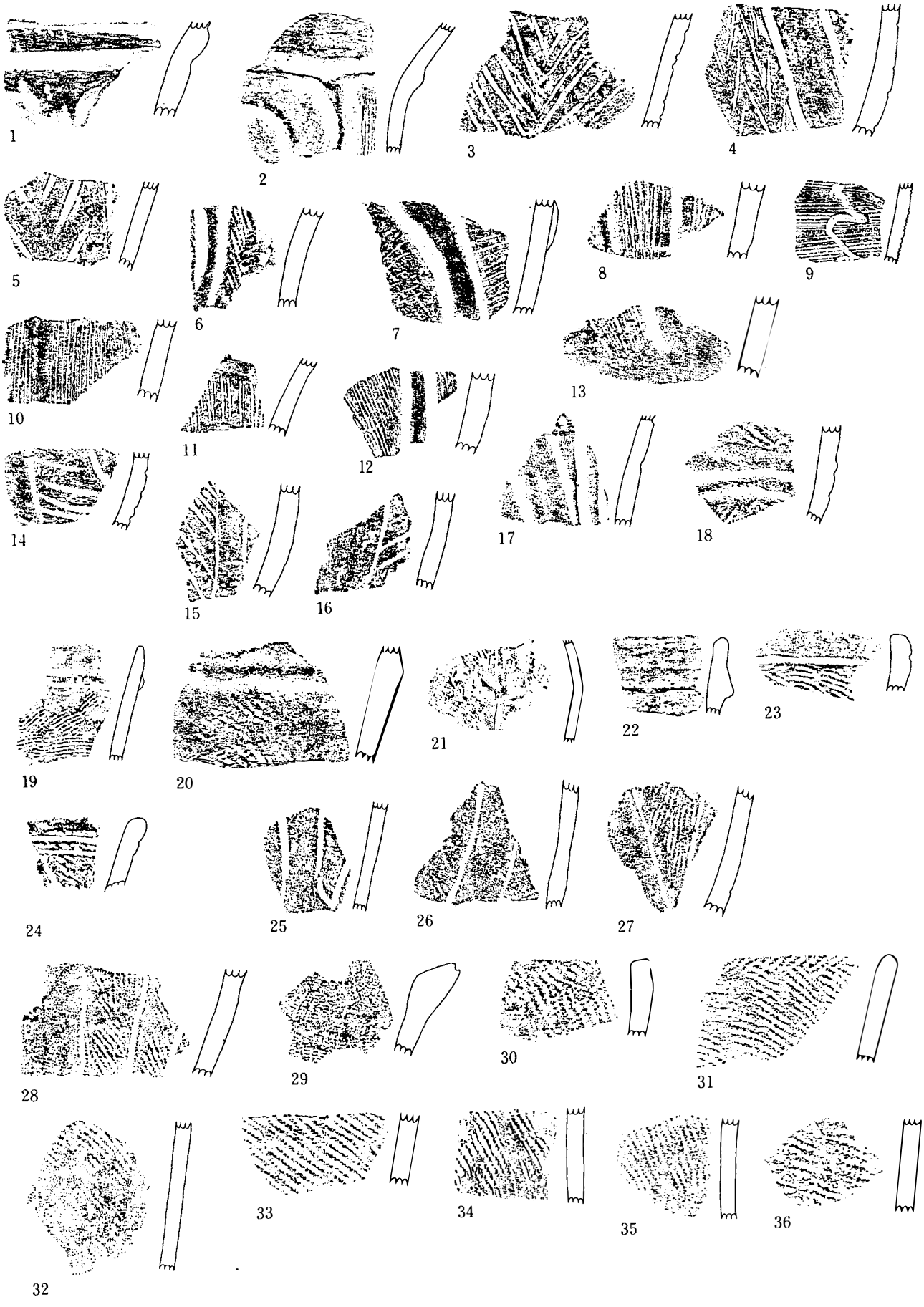
ＳＢ－10

図　版	挿　図	挿図No.	出土地点	分　類	文　様	高　さ	容量ℓ	備　考
8	25	1		8	曽利式土器　低隆帯と条線を主文様とする。口辺部			
		2		8	曽利式土器			
		3		8	曽利式土器　一本引き沈線による羽状文			
		4		8	曽利式土器　沈線とハの字文			
		5		8	曽利式土器　ハの字文			
		6		8	曽利式土器　半截竹管による条線			
		7		8	曽利式土器　半截竹管による条線			
		8		8	曽利式土器　半截竹管による条線			
		9		8	曽利式土器　半截竹管による条線　横位の条痕			
		10		8	曽利式土器　半截竹管による条線			
		11		8	曽利式土器　半截竹管による条線			
		12		8	曽利式土器　半截竹管による条線			

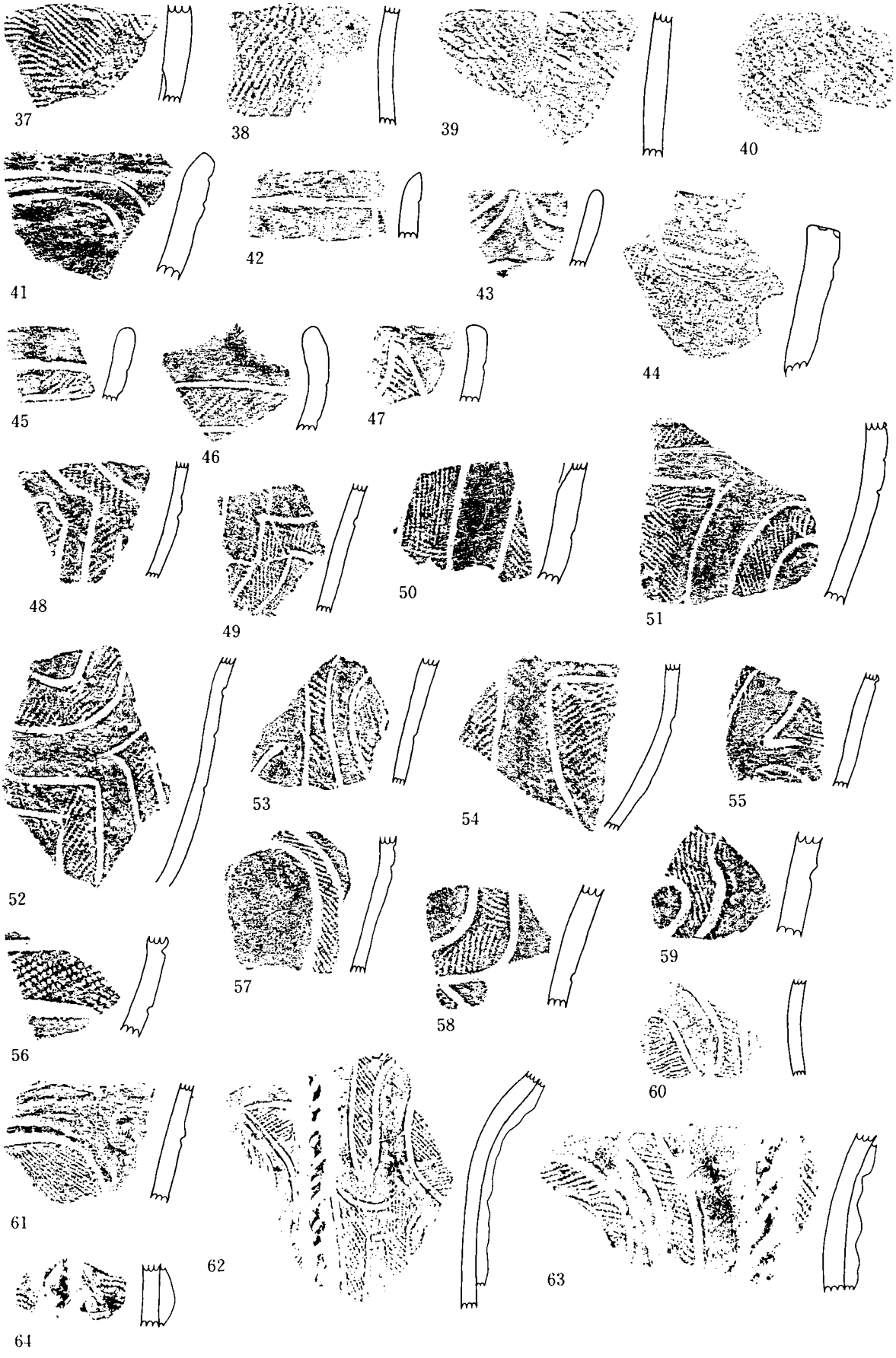
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	25	13		8	曽利式土器　半截竹管による条線			
		14		8	曽利式土器　一本引き沈線			
		15		8	曽利式土器　一本引き沈線			
		16		8	曽利式土器　一本引き沈線			
		17		8				
		18		8	曽利式土器　半截竹管による条線			
		19		10	中期末の土器群、微隆帯をもつもの、無節R			
		20		10	中期末の土器群、微隆帯をもつもの、無節の縄文R			
		21		10	中期末の土器群、微隆帯をもつもの、RL			
		22		10	中期末の土器群、微隆帯をもつもの			
		23		10	中期末の土器群、沈線をもつもの　R			
		24		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの　RL			
		25		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの			
		26		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの			
		27		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの			
		28		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの　L			
		29		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの　縄文の破片　RL			
		30		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの　RL			
		31		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの　LR			
		32		10	中期末の土器群　沈線で区画した磨消縄文をもつもの　L			
		33		10	中期末の土器群　縄文をもつもの　L			
		34		10	中期末の土器群　縄文をもつもの　LR　Rの一方が太い			
		35		10	中期末の土器群　縄文をもつもの　LR			
		36		10	中期末の土器群　縄文をもつもの　RL			
	26	37		10	中期末の土器群　縄文をもつもの　RL			
		38		10	中期末の土器群　縄文をもつもの　L			
		39		10	中期末の土器群			



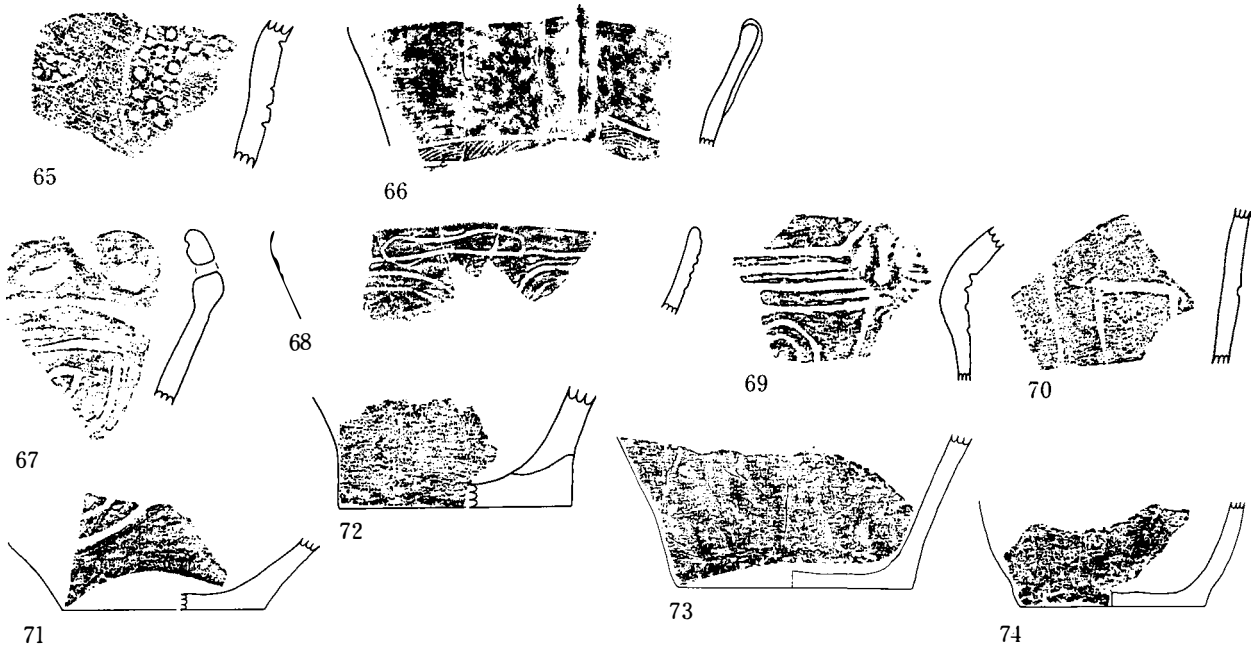
第 24 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SB－10　（1：60）



第 25 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－10出土土器（１）



第 26 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－10出土土器（２）



第 27 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＢ－10出土土器（３）（66、68は１：６）

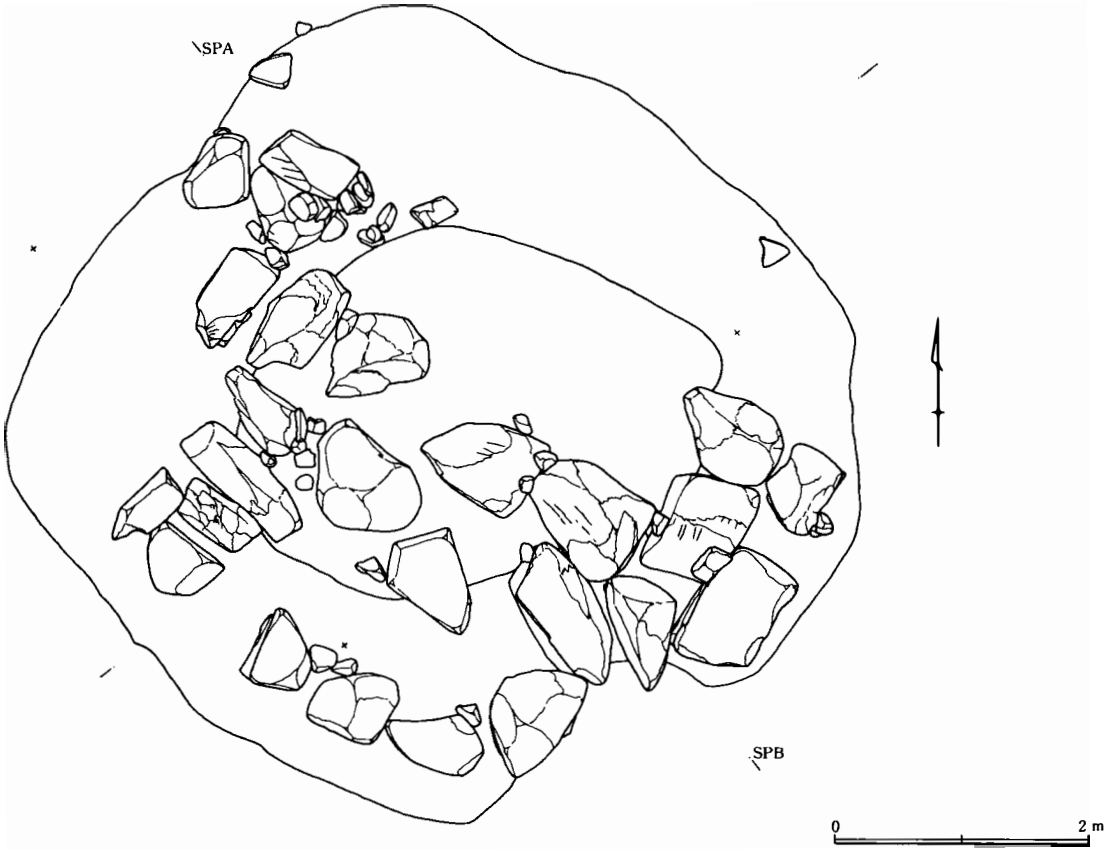
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	26	40		10	中期末の土器群　縄文をもつもの			
		41		10	中期末の土器群　沈線で主文様を描くもの			
		42		10	中期末の土器群　沈線で主文様を描くもの　口唇部に列点線のマド区画			
		43		10	中期末　沈線で主文様を描くもの　口唇部に烈点沈線のマド区画			
		44		10	縄文が見える			
		45		11	後期初頭の土器群　沈線区画の中に縄文を施している　ＬＲ一方が太い。			
		46		11	後期初頭の土器群　ＬＲ			
		47		11	後期初頭の土器群　Ｌの充填縄文			
		48		11	後期初頭の土器群　ＲＬ 充填縄文			
		49		11	後期初頭の土器群　Ｒ　充填縄文			
		50		11	後期初頭の土器群　ＬＲ 充填縄文			
		51		11	後期初頭の土器群　ＬＲ 充填縄文			
		52		11	後期初頭の土器群　ＲＬ 充填縄文			
		53		11	後期初頭の土器群　ＬＲ 充填縄文			
		54		11	後期初頭の土器群　ＲＬ 充填縄文			
		55		11	後期初頭の土器群　ＲＬ 充填縄文			
		56		11	後期初頭の土器群　ＬＲ 充填縄文			
		57		11	後期初頭の土器群　ＬＲ 充填縄文			
		58		11	後期初頭の土器群　ＬＲ 充填縄文			
		59		11	後期初頭の土器群　ＲＬ充填縄文			
		60		11	後期初頭の土器群　ＬＲの直前段３条太い・細い・細いの撚り、垂下隆帯が付く			
		61		11	後期初頭の土器群　Ｒ			
		62		11	後期初頭の土器群　60と同一個体			
		63		11	後期初頭の土器群　ＬＲ、垂下隆帯が付く			
		64		11	後期初頭の土器群　63と同一個体			
	27	65		11	後期初頭の土器群　縄文ではなく列点を施している。			
		66		11	後期初頭の土器群　口縁から隆帯が垂下する　ＬＲ　Ｒの一方が細い。			
		67		12－1	後期初頭の土器群　沈線で文様を描く　堀之内式			
		68		12	後期初頭の土器群　沈線で文様を描く			
		69		12	後期初頭の土器群　沈線で文様を描く			
		70		12	後期初頭の土器群　沈線で文様を描く			
		71		12－14	後期初頭の土器群　底部			

図 版	挿 図	挿図No.	出土地点	分 類	文 様	高 さ	容量ℓ	備 考
	27	72		12—14	後期初頭の土器群 底部			
		73		12—14	後期初頭の土器群 底部			
		74		12—14	後期初頭の土器群 底部			

S－Ⅱ区　SX－01

S－Ⅱ区の調査区のほぼ中央部に検出された遺構で、初め古墳の石室ではないかと調査を進めたが、古墳ではないことが判明した。

しかし扇状地の小尾根の頂部に巨石が存在することは自然でないので、やはり古墳の石室等の石材と思われる。畑の耕作のために、S－Ⅰ区の石埋設坑のように、これも巨石を地下に埋設した遺構と思われる。

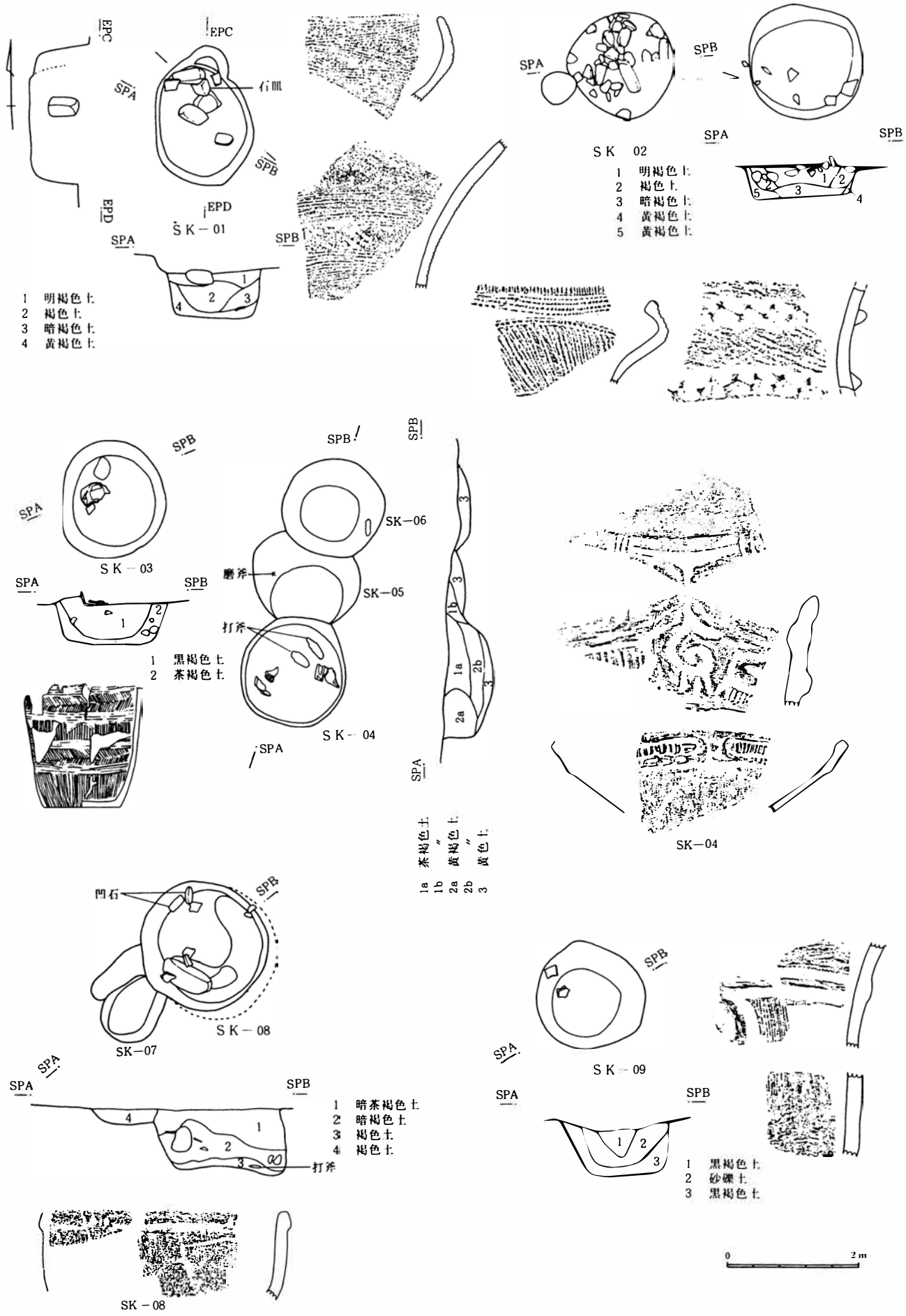


第 28 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SX－01　（1 : 60）

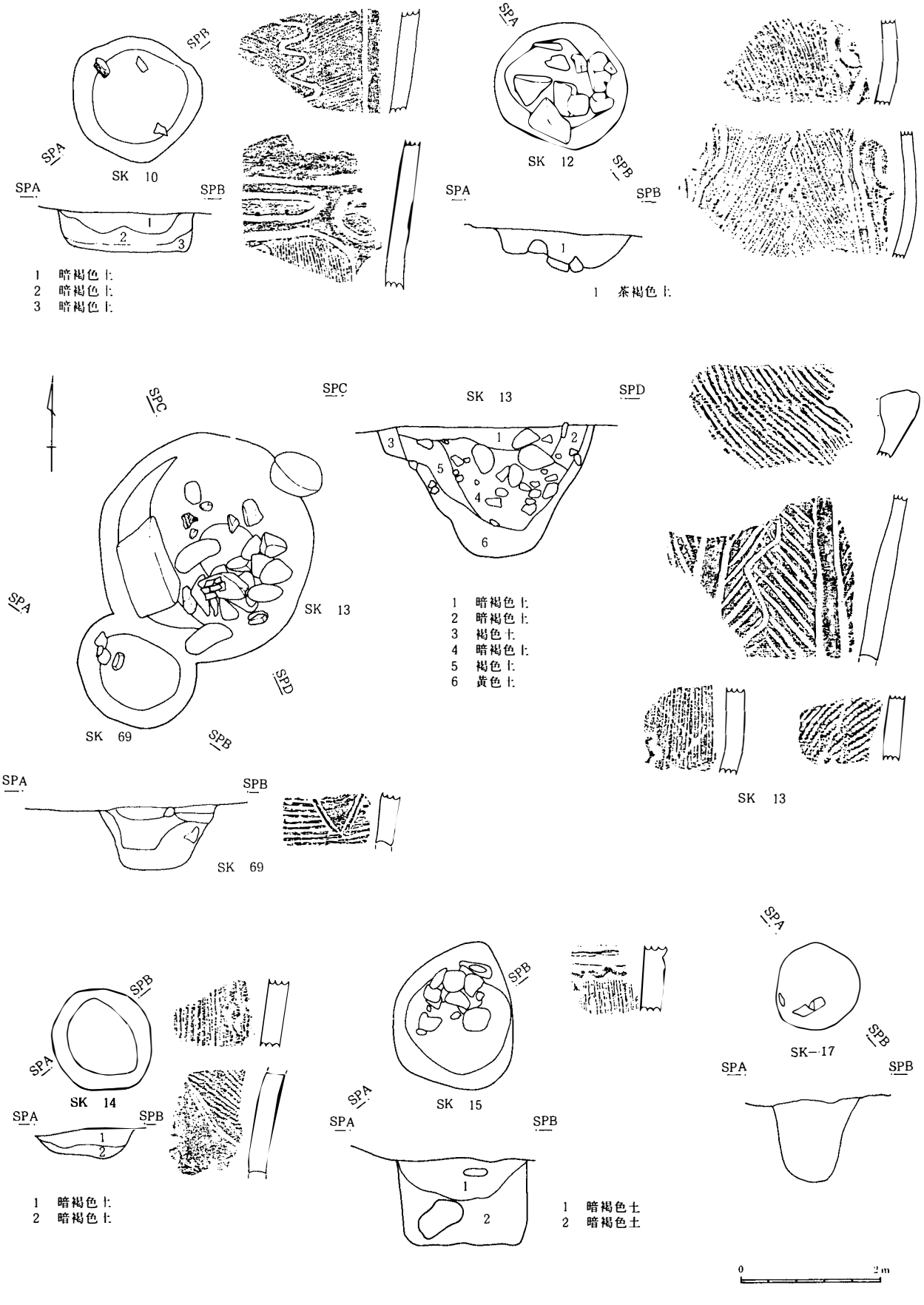
第 2 節　土　拡

整理番号	土壙番号	グリット	長径×短径×深さ	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK−01	M−23	98×64×45	諸b、石皿、ob	諸b	
	02	M−23	90×90×21	諸b、五領、石鏃　ob	諸b　五領	
	03	N−23	90×78×31	五領	五領	
	04	N−23	70×70×35	井戸尻、打斧(2)	井戸尻	
	05	N−23	75×（60）×12	小型磨斧		
	06	N−23	75×73×10	五領	五領	
	07	N−23	105×94×49			
	08	N−23	（55）×（44）×11	諸b、曽利、打斧(3)破、磨石、コーフレ、cl　ob	諸b、曽利	（異形すり石）
	09	N−24	85×70×35	曽利	曽利	
	10	N−24	94×90×29	曽利	曽利	
	11	N−22	74×70×20			
	12	N−24	97×90×30	曽利	曽利	
	13	N−23	150×150×92	曽利、堀之内、打斧(3)、ob　cl	曽利、堀之内	
	14	M−23	80×72×23	曽利	曽利	
	15	M−23	105×98×60	曽利、磨石 2	曽利	
	16	M−25	50×50×11			
	17		62×51×60			
	18	N−24	80×76×29			
	19	M−24	98×94×82	堀之内	堀之内	二つの土坑の重複か？
	20	M−25	66×91×36			
	21	M−24	80×49×11	曽利、堀之内、ob	曽利、堀之内	
	22	M−26	100×84×31			
	23	M−26	87×81×82			
	24	N−25	50×45×15			
	25	N−25	53×40×20			
	26	M−26	83×78×13			
	27	N−22	122×110×12	五領、石鏃	五領	
	28	L−26	76×74×20			
	29	N−22	162×72×23	打斧(2)、玉、ob		
	30	M−27	88×76×13			
	31	M−27	96×60×54	打斧		
	32	L−24	115×86×36			
	33	M−25	110×96×			
	34			加E 4、石鏃、横刀　ob	加E 4	
	35	L−23	103×88×56	五領(7)、cl	五領	
	36	L−24	48×46×27	五領(7)、cl	五領	
	37	L−24	56×（　）×34			
	38					
	39	M−22	60×50×26			
	40					
	41	L−21	(120)×(95)×			
	42	L−21	(125)×(120)×	フレクチョッピングツール		
	43	L−21	(140)×(100)×			
	44	L−20	82 × 72 ×	石鏃　ob　cl		
	45	L−20	(110)×(105)×	五領		
	46	M−26	(140)×(85)×	打斧　ob		
	47	M−26	(120)×(105)×			

（obは黒曜石　clは水晶）（玉領は五領ケ台式、十三は十三菩提式）

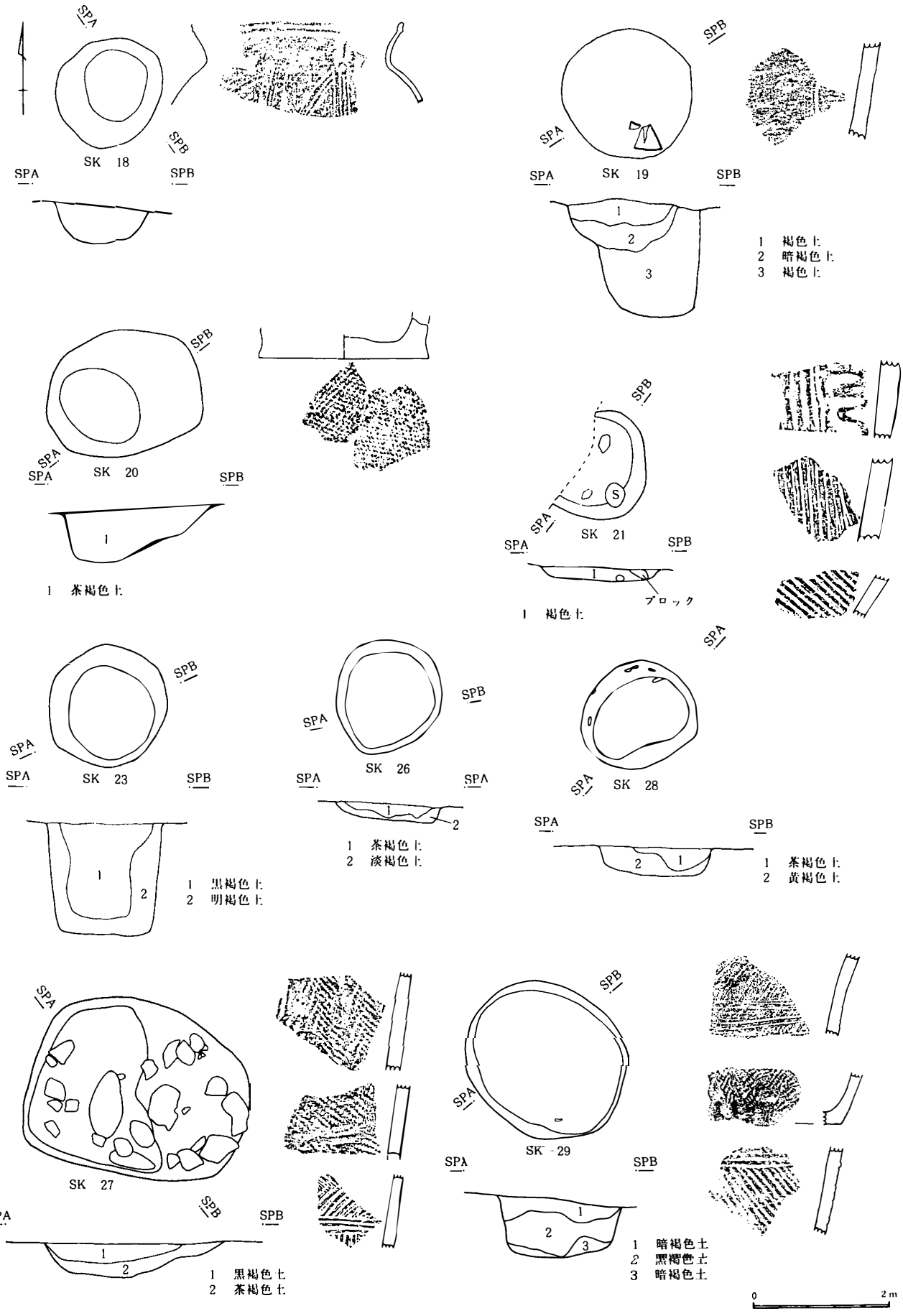


第 29 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ－01、02、03、04、05、06、08、09（ＳＫ１：40）

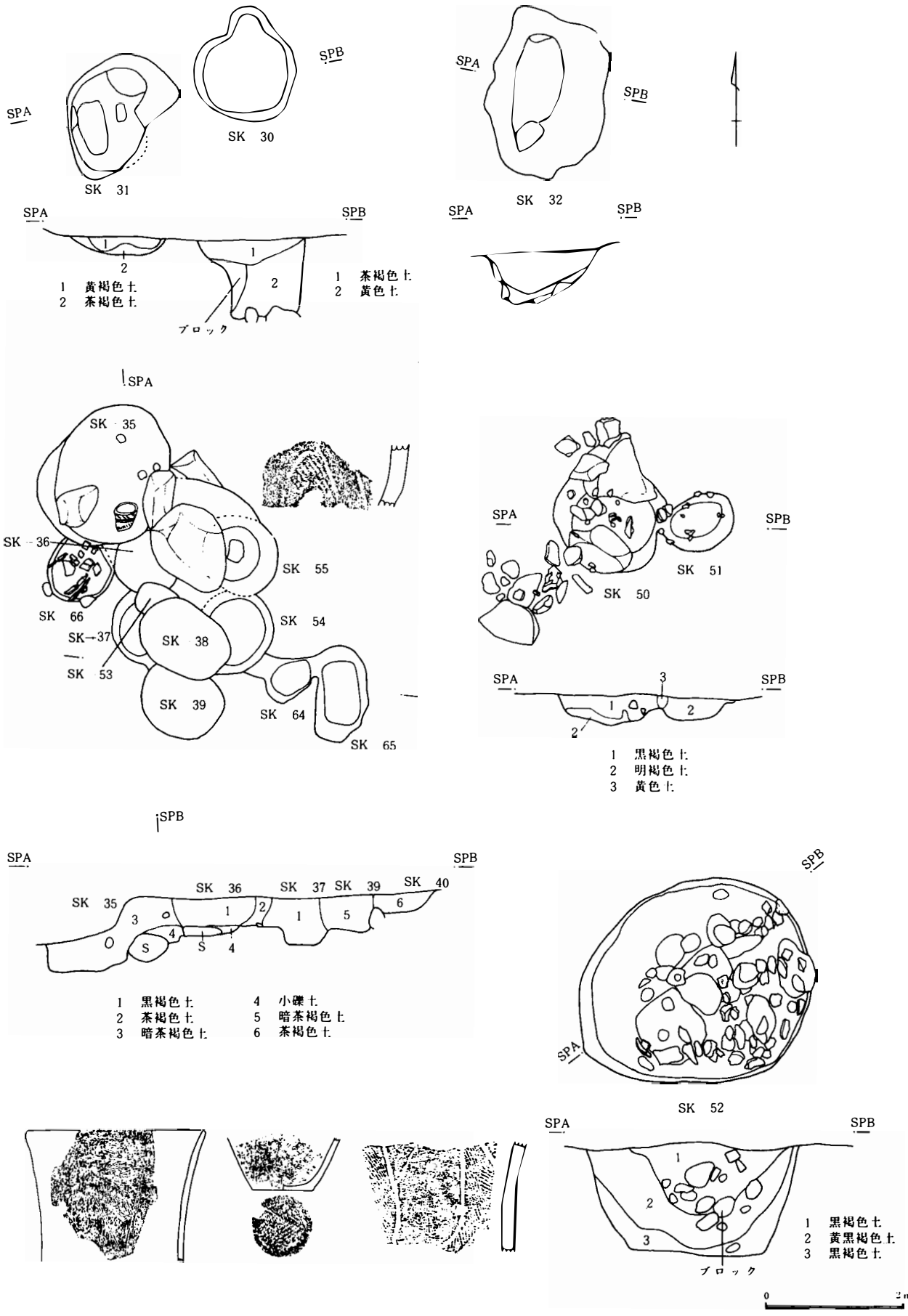


第 30 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ－10、12、14、15、69

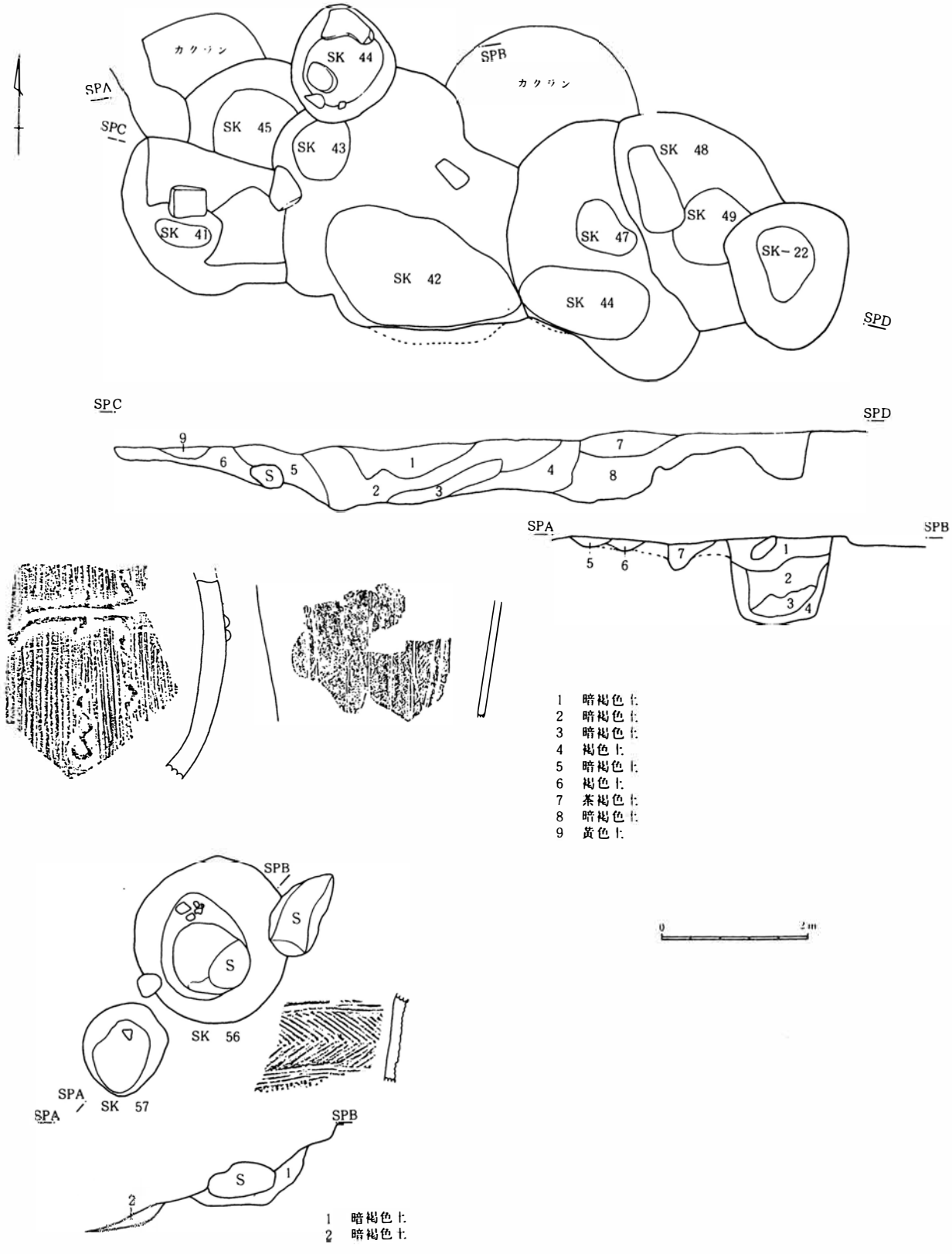
整理番号	土坑番号	グリット	長径×短径×深さ	出土遺物	図化した遺物	備考
	48	M－26	(120)×(95)×			
	49	M－26	(140)×(100)×			
	50	M－24	95 × 80× 26			
	51	M－24	55 × 40× 15	称名寺？、堀之内	称名寺、堀之内	
	52	N－22	170 × 95× 81	五領、磨石2、ユーズドフレイク ob	五領	
	53	L－24	30 × 25×			
	54	L－24	(64) × (55) × 30			
	55	L－24	(60) × (55) × 23			
	56	L－26	112 × 106× 20	五領、打斧、チッパー、凹石、ob、cl	五領	
	57	K－26	64 × 56× 12			
	58					
	59					
	60					
	61				五領	
	61					
	62					
	63					
	64	L－24	46 × 38×			
	65	L－24	70 × 39×			
	66	L－23	49 × 48×			
	67	L－26	80 × 75×			
	68	L－26	70 × 70×	ob		
	69	N－23	90×(70)×32	ob		
	70	M－21	(55) × (55) ×	五領 稜磨石、ob、cl	五領	
	71	M－21	(136)×(104)×60	五領	五領	
	72	M－21	(202)×(140)× 6	五領、ドリル、ob	五領	
	73	N－21	120 × 106	五領、凹石、稜磨石、ob	五領	
	74	M－21	96 × (82) × 44	五領	五領	
	75	M－21	(80) × (72) ×			
	76	M－21	106 × (77) ×	石鏃、磨石、ob		
	77	M－22	106 × 95×	五領、ob	五領	
	78	M－21	100×100×34	十三、五領、打斧、ob、cl	十三、五領	
	79	M－22	92 × 87× 32	五領	五領	
	80	N－20	92 × 78× 43	五領、ob、cl	五	
	81	L－22	108 ×100× 42	稜磨石、ユーズドフレイク、ob		
	82	M－21	124×94×37	五領	五領	
	83	M－21	60×50×( )	五領	五領	
	84					
	85					
	86					
	87					
	88					
	89					
	90	SB－04	220×190×68	五領、堀之内、ob、cl	五領、堀之内	
	91	SB－04	×120×54	五領、（石片）、ob、cl	五領	
	92	SB－03	120× 90×50	五領、ob	五領	
	93	SB－03	× 40×50	五領、石鏃、ob	五領	
	94	SB－03	122×120×40	五領、磨石、ob、cl	五領	
	95	SB－04	200×200×45	堀之内	堀之内	



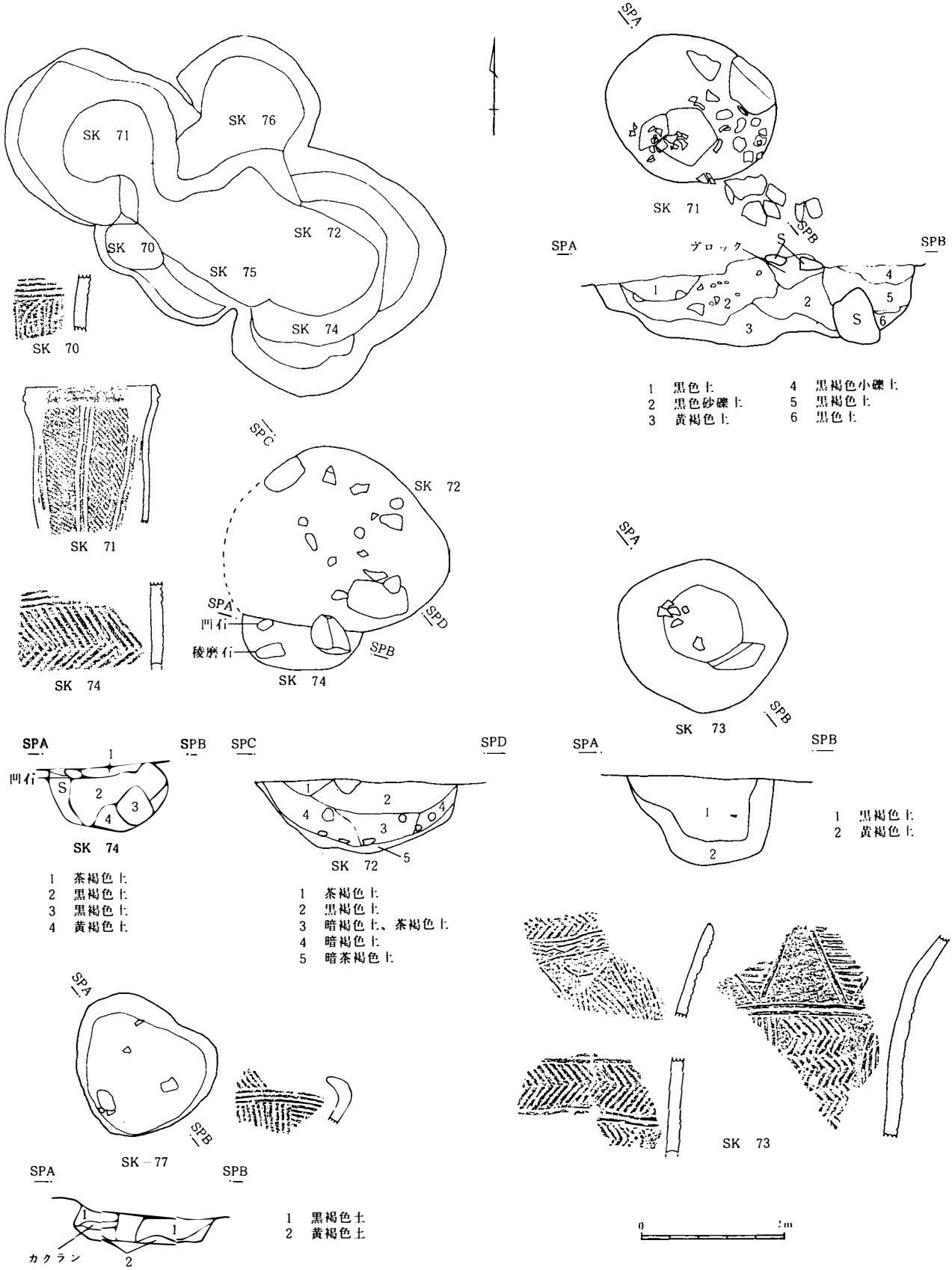
第 31 図　釈迦堂S－Ⅱ区　SK－18、19、20、21、23、26、27、28、29（SK 1 : 40）



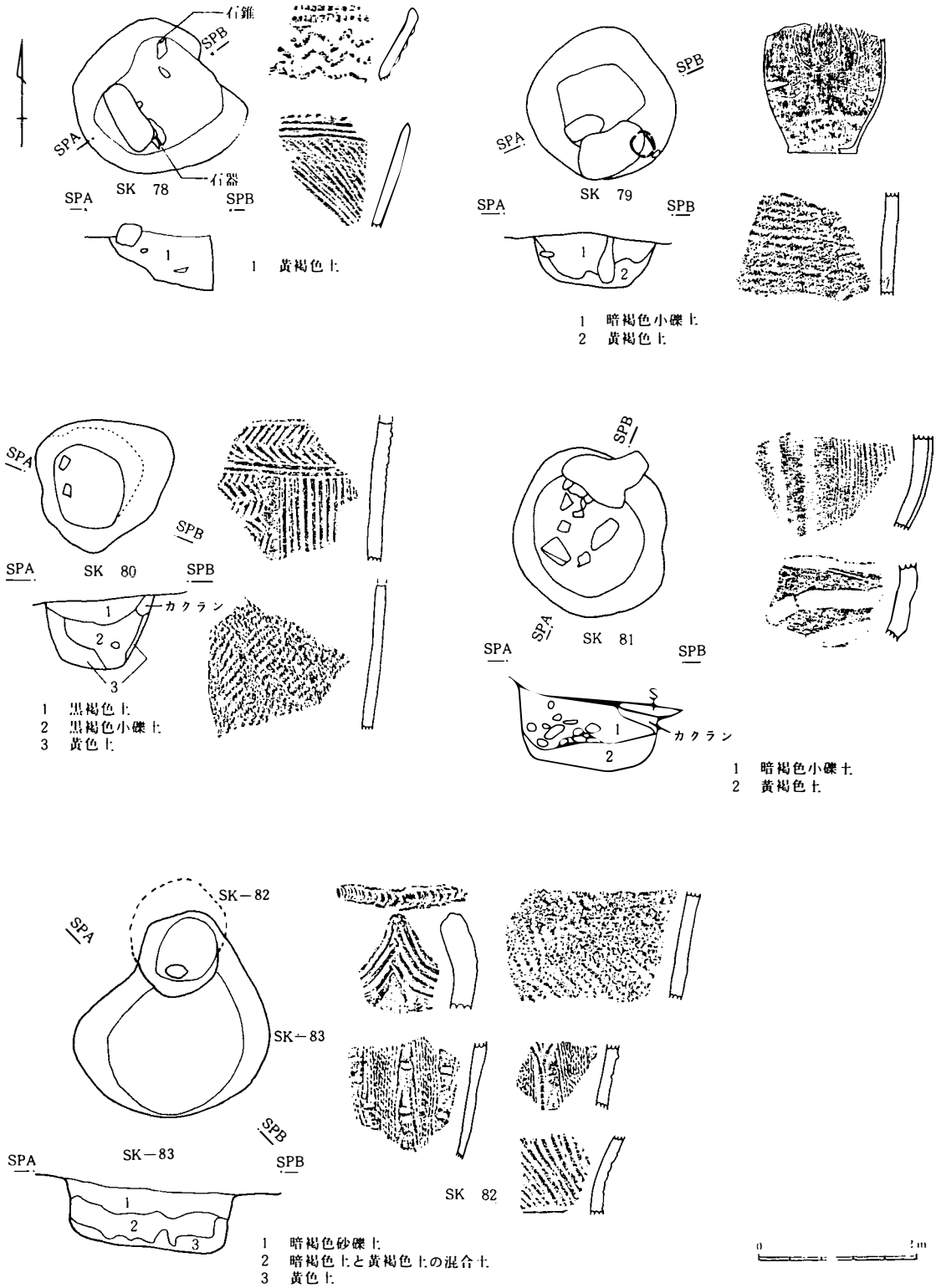
第 32 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ－30、31、32、35、36、37、38、39、50、51、52、53、54、55、64、65、66
（ＳＫ１：40）



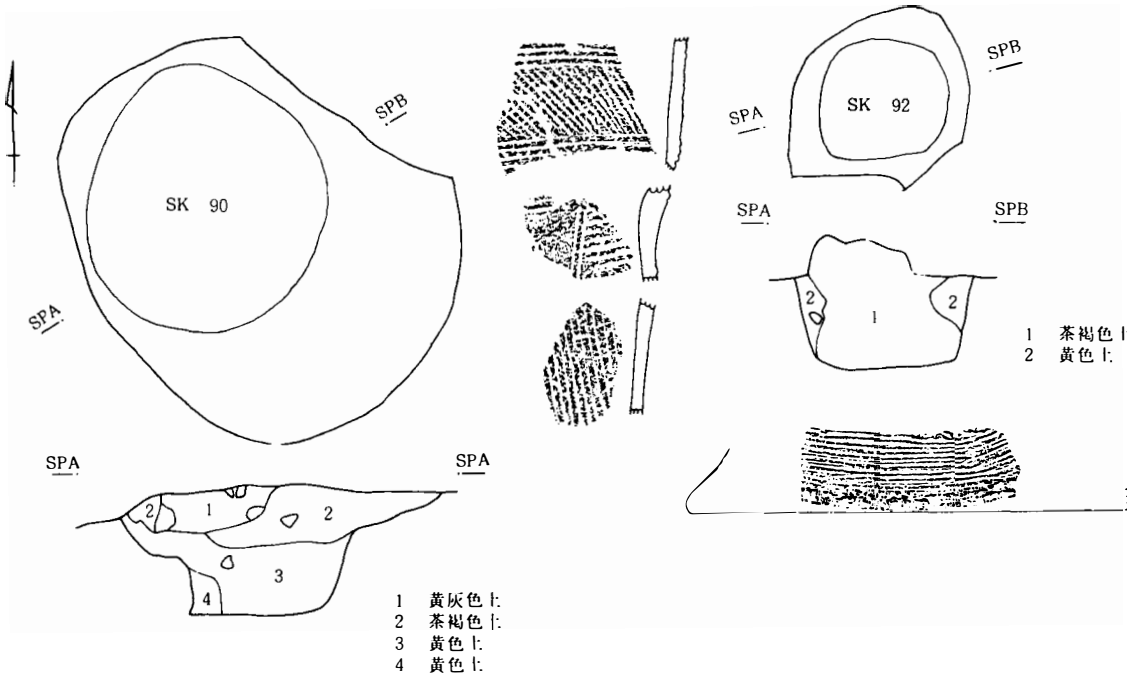
第 33 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ－22、41、42、43、44、45、47、48、49、56（ＳＫ１：40）

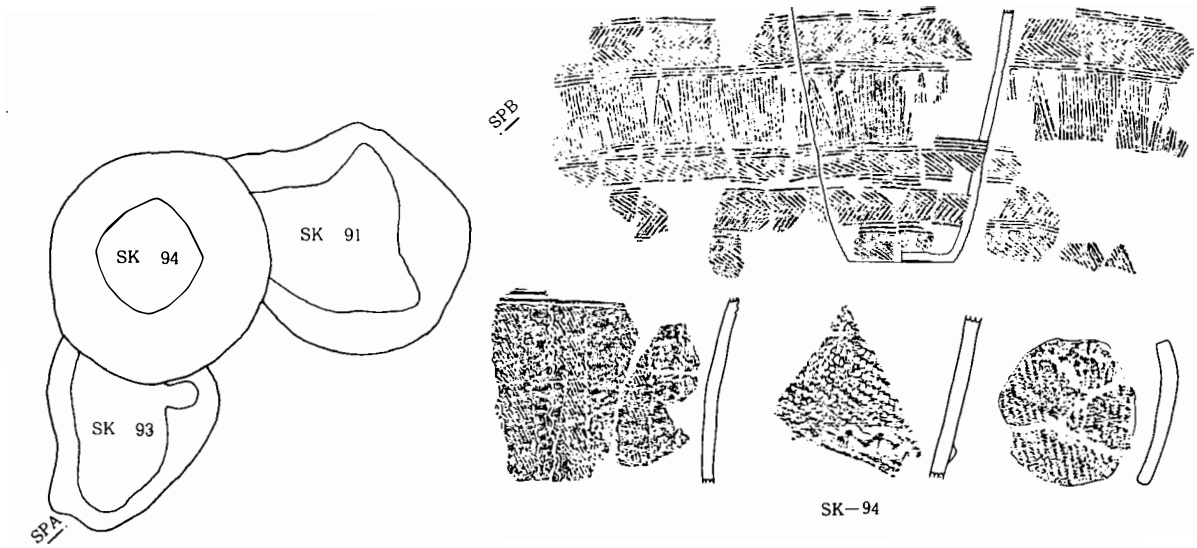


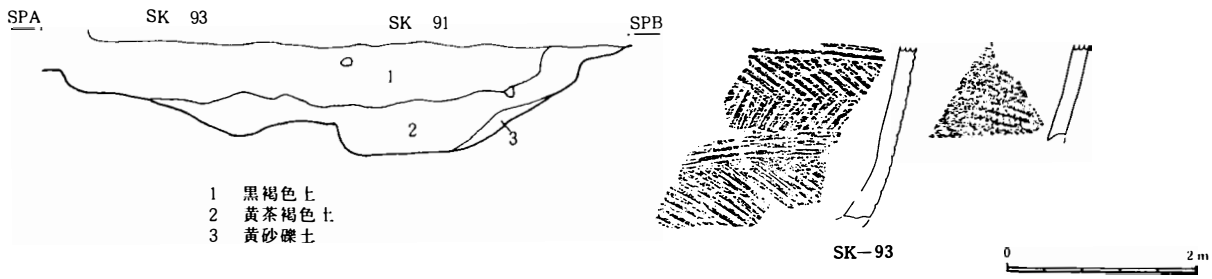
第 34 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ－70、71、72、73、74、75、76、77（ＳＫ１：40）



第 35 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ－78、79、80、81、82、83（ＳＫ１：40）

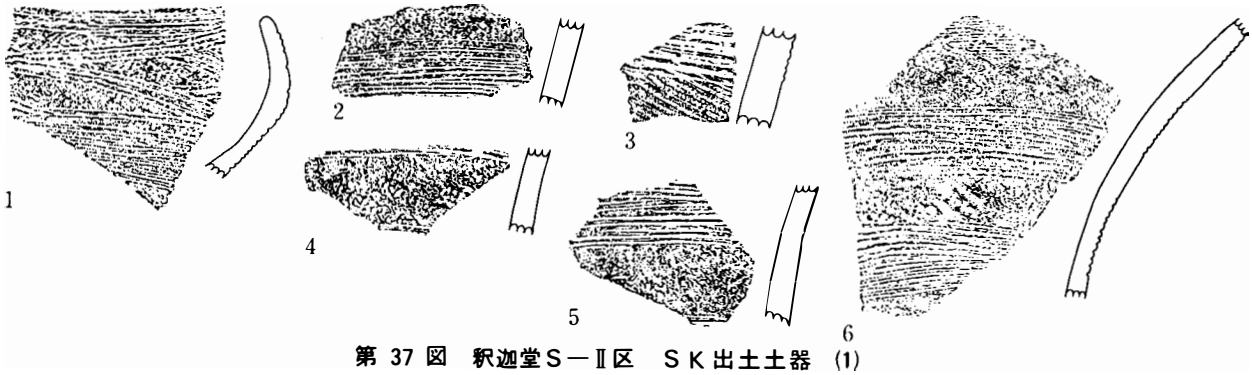






第 36 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ－90、91、93、94（ＳＫ１：40）

第 3 節　土拡出土土器



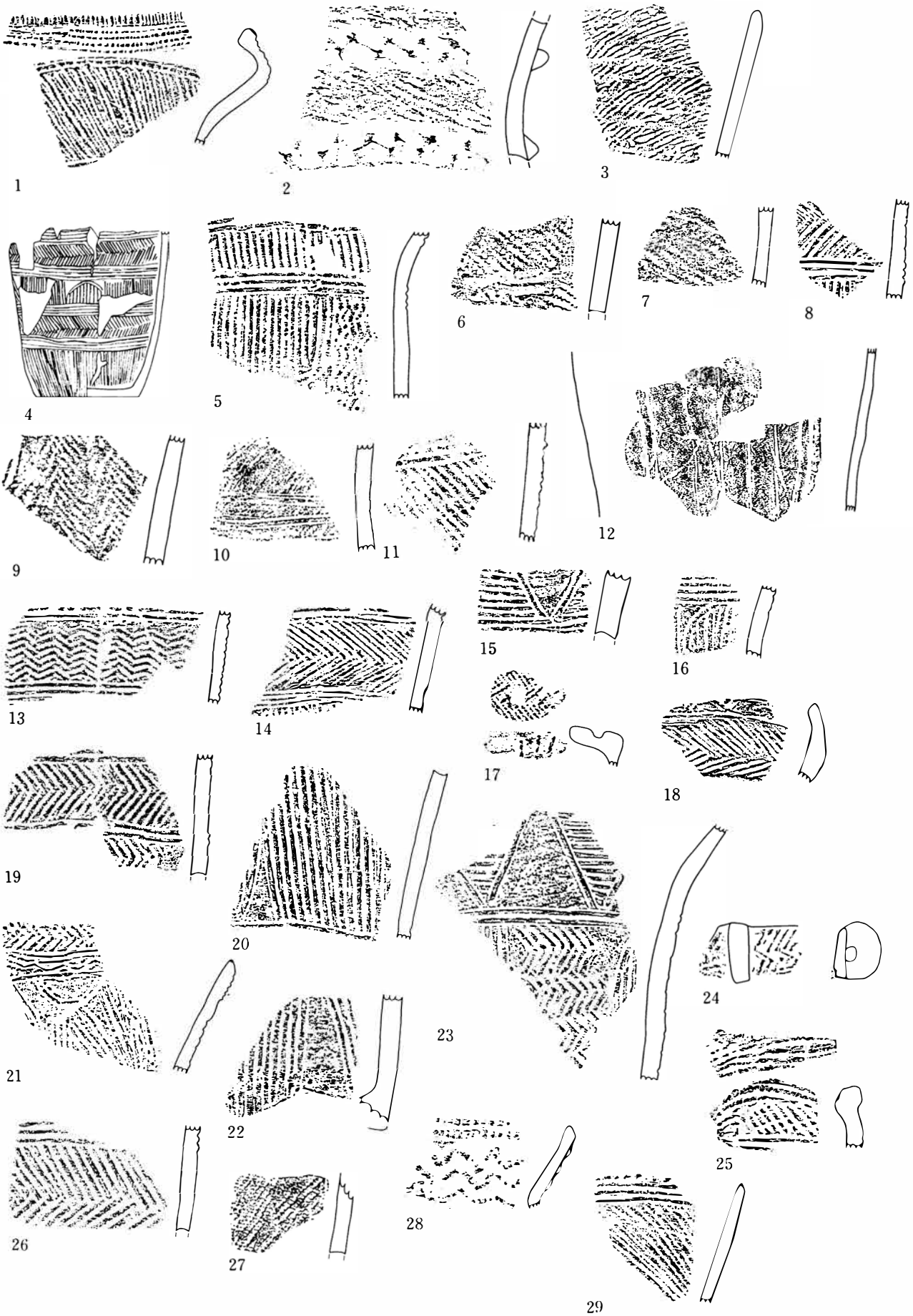
第 37 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ出土土器 (1)

前期のＳＫ

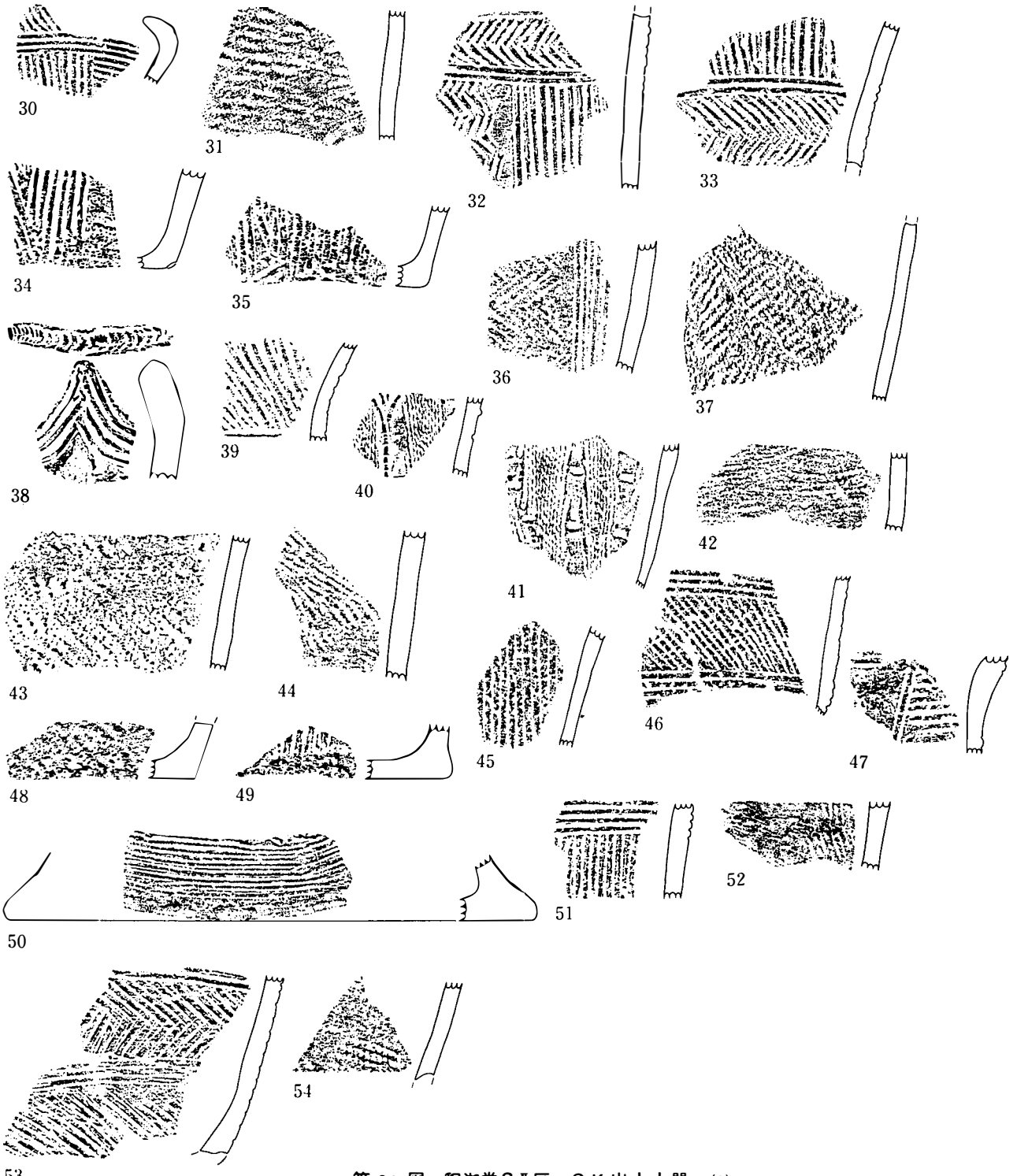
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	37	1	ＳＫ－02	2－3－c	縄文地ＲＬに半截竹管による文様を描くもの			
		2	ＳＫ－02	2－3－c	縄文地ＲＬに半截竹管による文様を描くもの			
		3	ＳＫ－01	2－3－c	縄文地ＲＬに半截竹管による文様を描くもの			
		4	ＳＫ－01	2－3－c	縄文地ＲＬに半截竹管による文様を描くもの			
		5	ＳＫ－01	2－3－c	縄文地ＲＬに半截竹管による文様を描くもの			
		6	ＳＫ－01	2－3－c	縄文地ＲＬに半截竹管による文様を描くもの			

中期のＳＫ

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
9	38	1	ＳＫ－07	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部に爪形文と結節浮線文を付ける。			
		2	ＳＫ－07	3－1－f	縄文土器　ＲＬの地文の上に指頭圧痕のある隆帯を付ける。			
		3		2－1	縄文土器　ＬＬの反の撚りである。前期中葉の土器			
		4	ＳＫ－03	3－1－b	集合沈線文土器　三角状空白部あり。			
		5	ＳＫ－08	3－1－b	集合沈線文土器　三角状空白部あり。			
		6	ＳＫ－27	3－1－h	縄文			
		7	ＳＫ－27	3－1－h	縄文			
		8	ＳＫ－27	3－1－b	集合沈線文土器			
		9	ＳＫ－27	3－1－h	羽状縄文　ＬＲの縄文方向をかえて施文			
		10	ＳＫ－29	2－1－c				
		11	ＳＫ－29	3－1－b	集合沈線文土器			
		12	ＳＫ－43	3－1－g	垂下隆帯とＲＬの結節縄文の上に縦の沈線			
		13	ＳＫ－52	3－1－b	集合沈線文土器			
		14	ＳＫ－69	3－1－b	集合沈線文土器			
		15	ＳＫ－70	3－1－b	集合沈線文土器　三角状空白部あり			
		16	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器　三角状空白部あり			
		17	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器　集合沈線の上に浮線文を付けている。			
		18	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器			
		19	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器			
		20	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器			
		21	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器			
		22	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器			
		23	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器			
		24	ＳＫ－73	3－1－b	集合沈線文土器			
		25	ＳＫ－56	3－1－b	集合沈線文土器			
		26	ＳＫ－74	3－1－b	集合沈線文土器			
		27	ＳＫ－78	3－1－g	縄文　ＲＬ　両端に結節がみえる。			
		28	ＳＫ－78	3－1－a	無文地に結節浮線文			

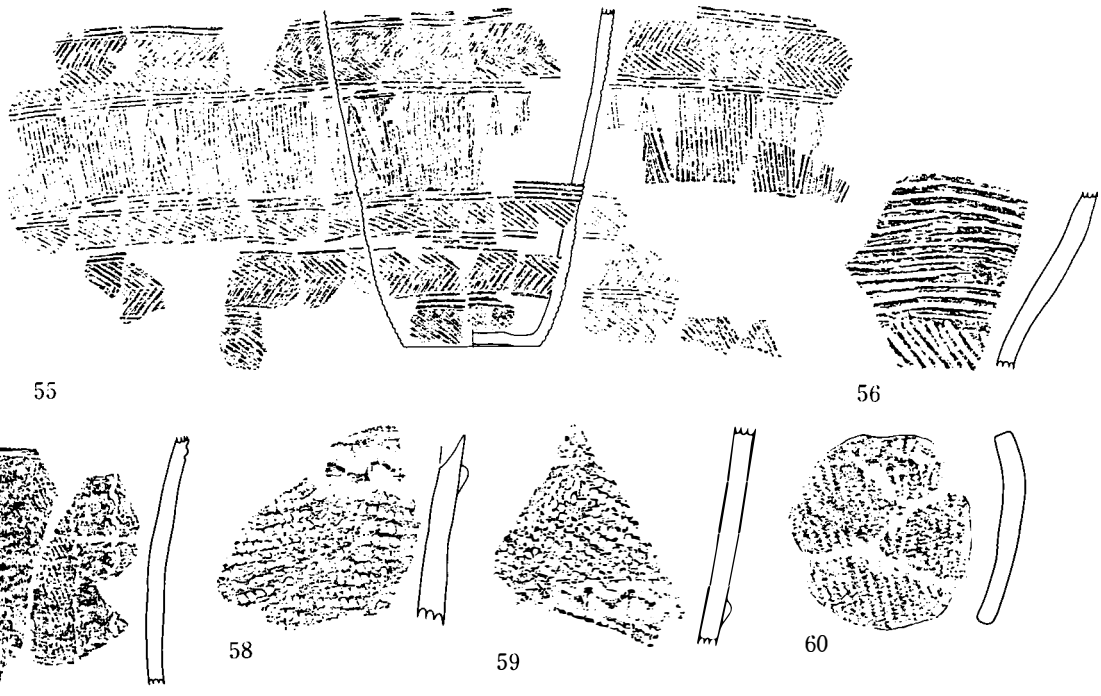


第 38 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ出土土器 (2)（４、12は１：６）



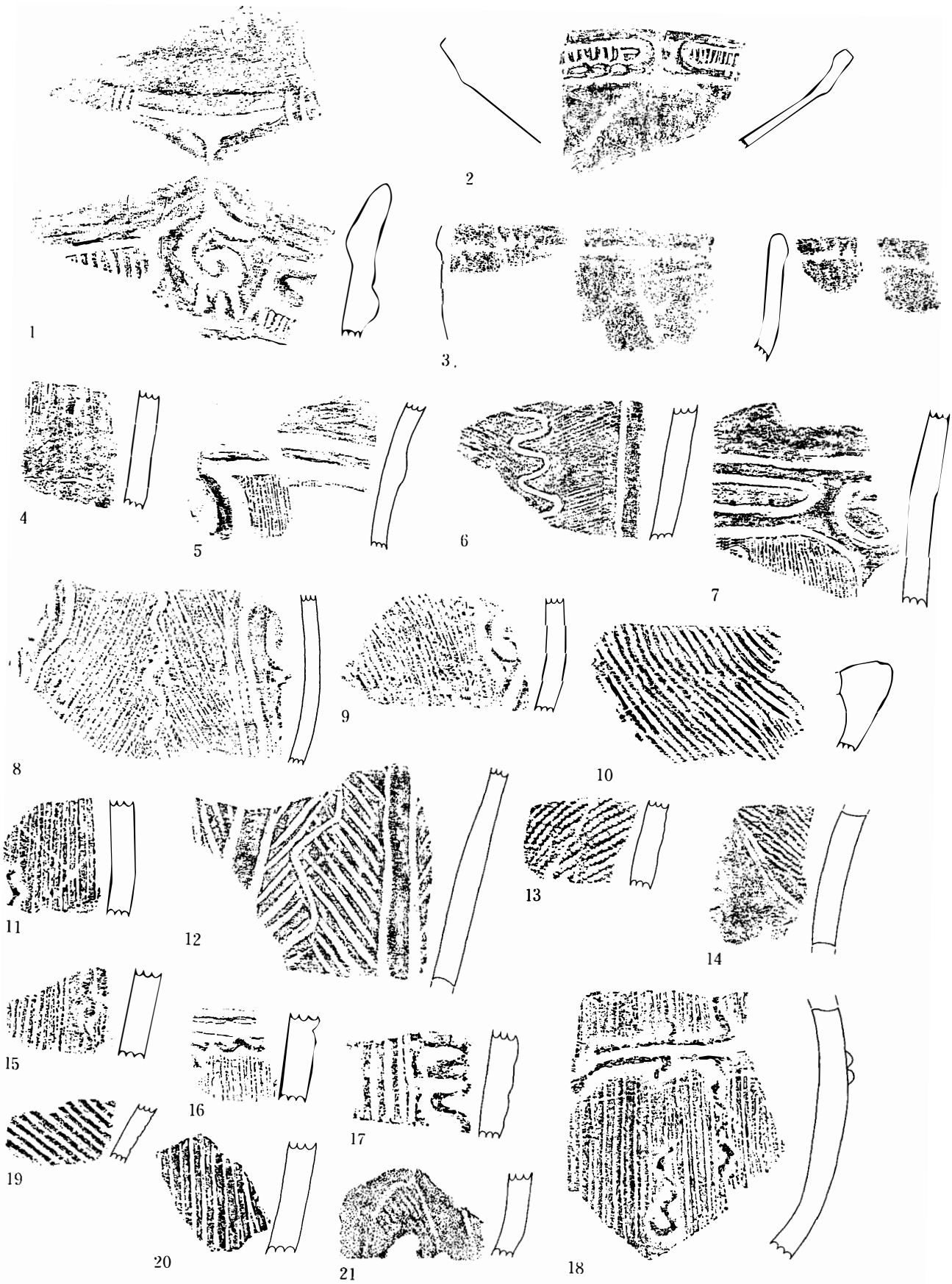
第39図　釈迦堂SⅡ区　SK出土土器　(3)

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	38	29	SK−78	3−1−b	集合沈線文土器			
	39	30	SK−79	3−1−b	集合沈線文土器			
		31	SK−79	3−1−h	縄文 RL			
		32	SK−80	3−1−b	集合沈線文土器			
		33	SK−80	3−1−b	集合沈線文土器			
		34	SK−80 No.1	3−1−b	集合沈線文土器			
		35	SK−80 No.1	3−1−b	集合沈線文土器　底部			
		36	SK−80	3−1−b	集合沈線文土器　底部			

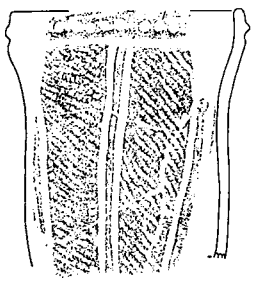


第 40 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ出土土器 (4)（55は１：６）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	39	37	ＳＫ－80	3－1－h	縄文　ＲＬ			
		38	ＳＫ－82	3－1－b	集合沈線文土器			
		39	ＳＫ－82	3－1－b	集合沈線文土器			
		40	ＳＫ－82	3－1－i	単軸絡状帯第１種　ＲのＲ巻きとＬ巻きを地文として、結節浮線文を加えている。			
		41	ＳＫ－82	3－1－i	単軸絡状帯第１種　ＲのＲ巻きとＬ巻き			
		42	ＳＫ－82	3－1－h	縄文　ＲＬ			
		43	ＳＫ－82	3－1－h	縄文　ＲＬ			
		44	ＳＫ－82	3－1－h	縄文　ＲＬ			
		45	ＳＫ－90	3－1－b	集合沈線文土器			
		46	ＳＫ－90	3－1－b	集合沈線文土器			
		47	ＳＫ－90	3－1－b	集合沈線文土器			
		48	ＳＫ－90	3－1－h	縄文			
		49	ＳＫ－90	3－1－b	集合沈線文土器			
		50	ＳＫ－91	3－1－b	集合沈線文土器　底部			
		51	ＳＫ－92	3－1－b				
		52	ＳＫ－92	3－1－h	縄文　Ｒ			
		53	ＳＫ－92	3－1－b	集合沈線文土器			
		54	ＳＫ－92	3－1－h	縄文　ＲＬ			
	40	55	ＳＫ－92	3－1－b	縄文沈線文土器　胴部に三角状空白がみえる。			
		56	ＳＫ－92	3－1－b	縄文沈線文土器　胴部に三角状空白がみえる。			
		57	ＳＫ－92	3－1－g	結束第１種　Ｌを２本開いて、両端を結節			
		58	ＳＫ－92	3－1－f	縄文地ＲＬに指頭圧痕隆帯			
		59	ＳＫ－92	3－1－f	縄文地ＲＬに指頭圧痕隆帯			
		60	ＳＫ－92	3－1－h	土製円盤　ＲＬの直前段３条			



第 41 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ出土土器　(5)（２、３は１：６）



22

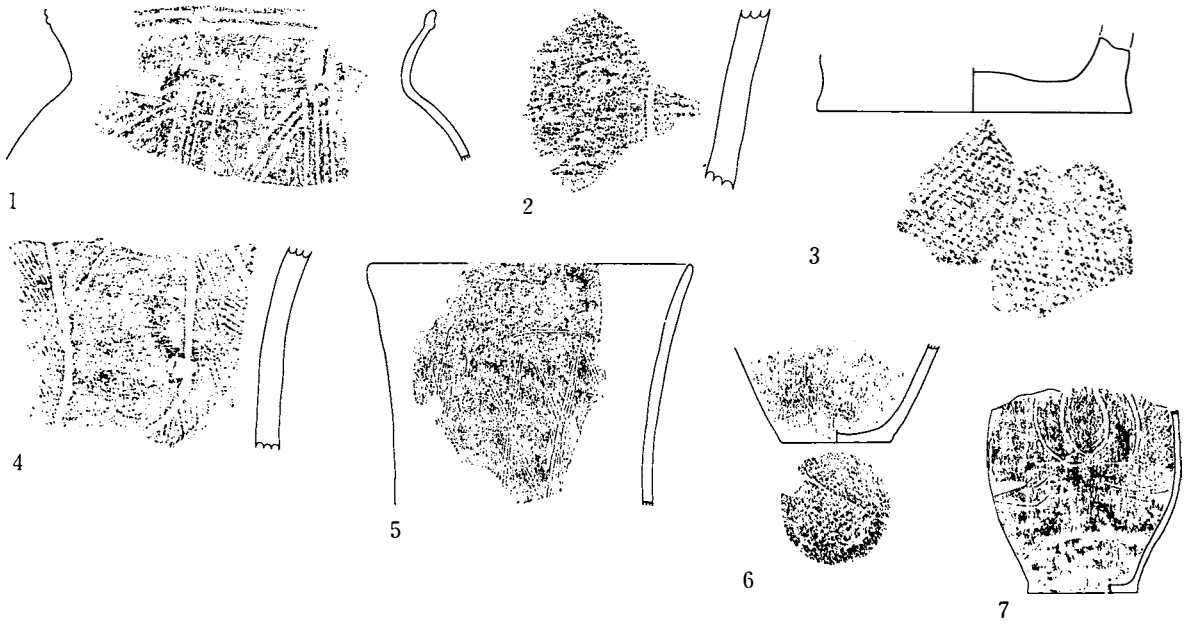
23

24

25

第 42 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ－出土土器 (6)（22は１．６）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	41	1	ＳＫ－04	7	楕円区画と彫刻的三叉文			
		2	ＳＫ－04、08、09 10、12	7	楕円区画をもつ浅鉢　あるいは１と同一か			
		3	ＳＫ－04、09、12	7	無文の浅鉢、口縁の隆帯部に三角陰刻を施す。			
		4～5	ＳＫ－09	8	曽利式土器　条線			
		5	ＳＫ－09	8	曽利式土器　条線			
		6	ＳＫ－10	8	曽利式土器　半截竹管による条線と波状沈線			
		7	ＳＫ－10	8	曽利式土器			
		8～9	ＳＫ－12	8	曽利式土器			
		9	ＳＫ－12	8	曽利式土器			
		10	ＳＫ－13	8	曽利式土器　籠目文土器			
		11	ＳＫ－13	8	曽利式土器　条線に粘土紐を付ける。			
		12	ＳＫ－13	8	曽利式土器　１本引き沈線に波状文			
		13	ＳＫ－13	9	縄文　ＲＬ			
		14	ＳＫ－14	9	縄文　Ｒ			
		15～16	ＳＫ－15	8	条線に粘土紐を貼付			
		16	ＳＫ－15	8	条線に粘土紐を貼付			
		17	ＳＫ－15	8	条線に粘土紐を貼付　条線が太い。			
		18	ＳＫ－15	8	条線に粘土紐を貼付			
		19～20	ＳＫ－21	8	条線文			
		20	ＳＫ－21	8	条線文			
		21	ＳＫ－39	9	沈線区画に縄文があるが、縄文は不明			
	42	22	ＳＫ－72	9	口縁部に刻点、大区画の中に縄文　ＬＲＬ			
		23	ＳＫ－83	6	把手と思われる。波状沈線がある。			
		24～25	ＳＫ－83	8	低隆帯と条線をもつ土器			
		25	ＳＫ－83	8	低隆帯と条線をもつ土器			

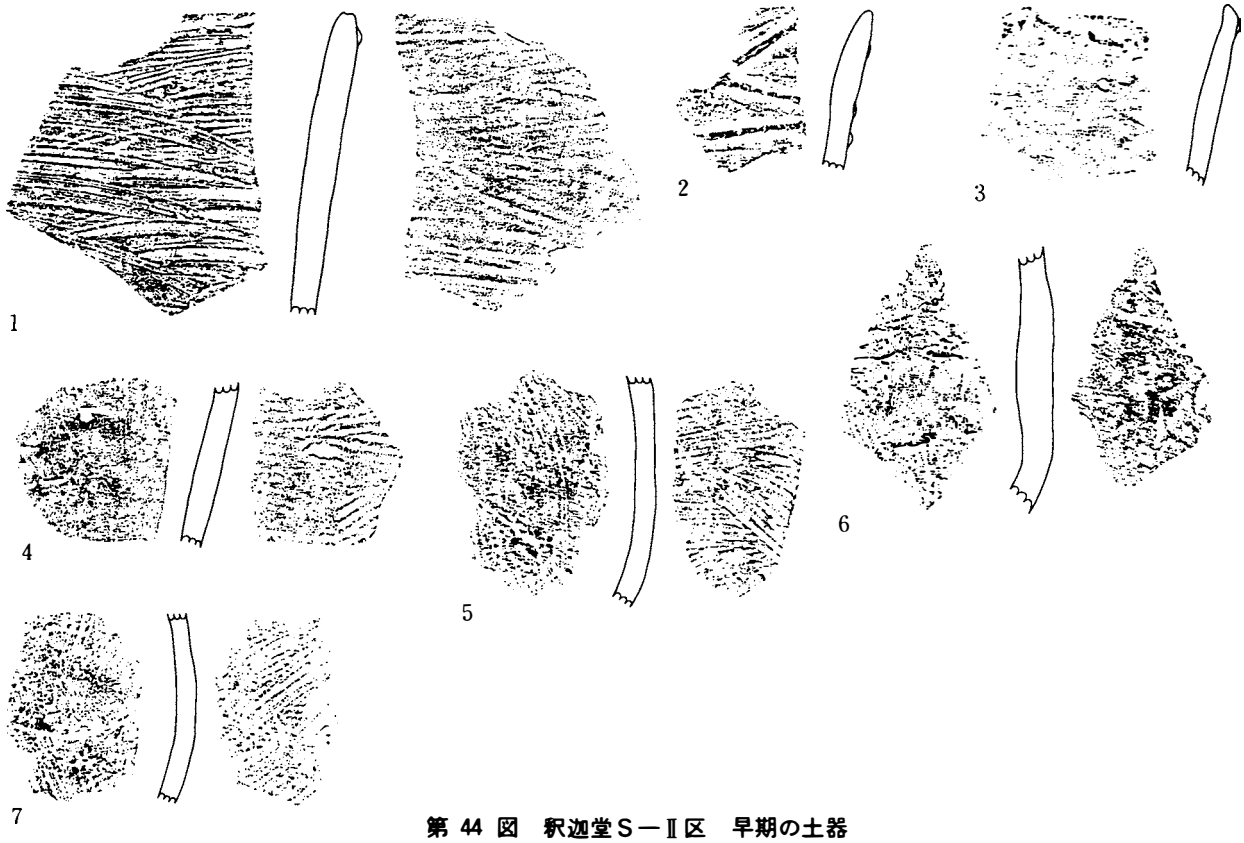


第 43 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　ＳＫ一出土土器 (7)（１、５～７は１：６）

後期のＳＫ

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	43	1	ＳＫ 18	12 3	後期初頭の土器　無文地に３本沈線			
		2	ＳＫ 19	12？	沈線区画と縄文			
		3	ＳＫ 20	12 - 13	網代底　１本越え１替り１本おくり			
		4	ＳＫ 52	12 - 9	磨消縄文　L			
		5	ＳＫ 52	12 14	無文地に格子目状沈線			
		6	ＳＫ 52	12 13	網代底　１本越え１本替り１本おくり			
		7	ＳＫ 79	12 - 9	沈線に縄文			

第 4 節　　グリッド出土土器



第 44 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　早期の土器

早期の土器

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	44	1	P－18	1－1 or 2	断面三角形の隆帯　表裏条痕			
		2	O－18	1－2	断面三角形の隆帯に貝殻腹縁刻目			
		3	M－19	1－2－a	断面三角形の隆帯に貝殻腹縁刻目懸垂隆帯			
		4	R－21	1	表裏条痕			
		5	M－21	1	表裏条痕			
		6	N－18　No.1	1	表裏条痕			
		7	M－21	1	表裏条痕			

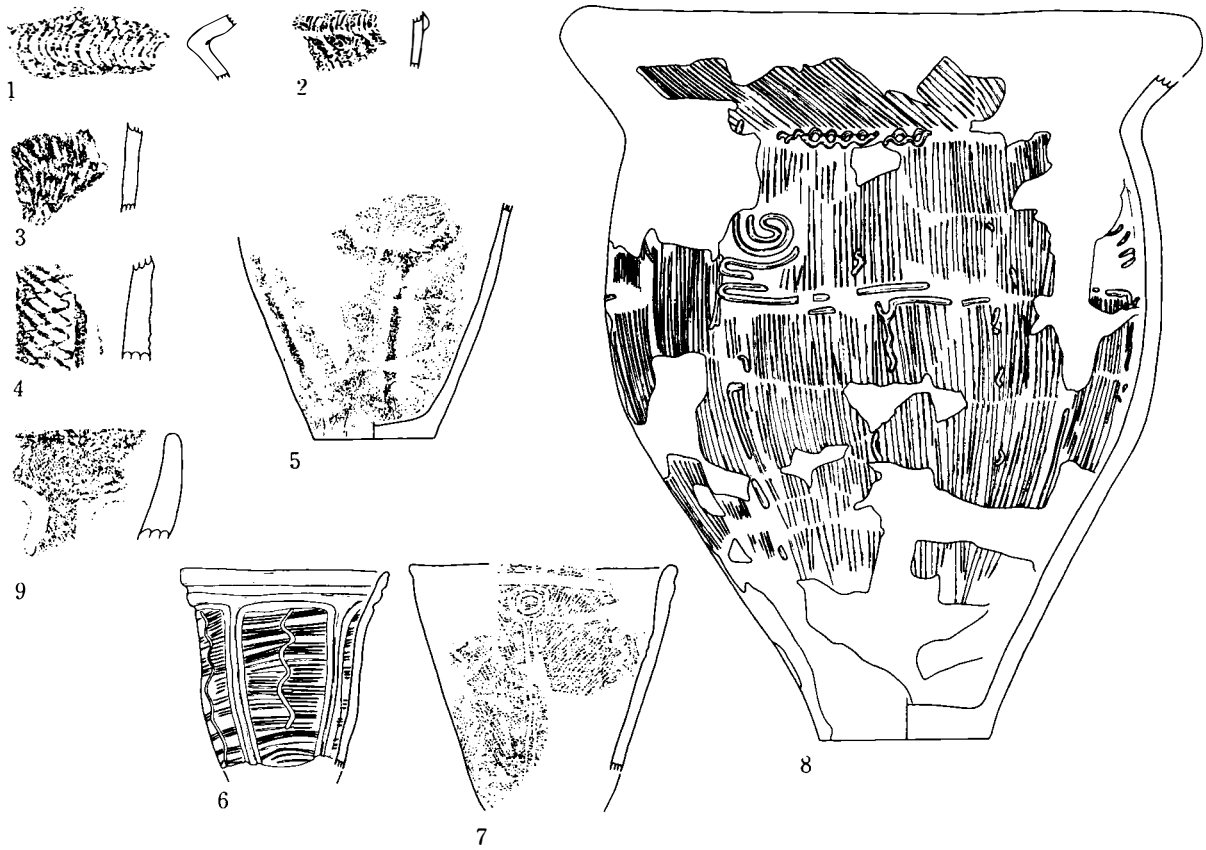
中期の土器

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様			
11	45	1	M－21	3－1－a	ＬＲの縄文地に浮線文が付く　縄文は０段多条か			
		2	M－21	3－1－a	ＬＲの縄文地に浮線文が付く			
		3	M－21	3－1－a	ＬＲの縄文地に浮線文が付く			
		4	M－21	3－1－a	単軸絡状帯縄糸文の上に結節浮線文			
		5	ＬＭトレンチ	3－1－a－b	集合沈線文土器　口唇部にソーメン状粘土紐を貼付し、さらに円形浮文も付けている。			
		6	K－21	3－1－a	細粘土紐による格子目文と結節浮線文			
		7	K－22	3－1－a	集合沈線文土器　胴部集合沈線の２次施文がある。			
		8	L－21	3－1－a・b	集合沈線文土器　口縁部に粘土紐の貼付文がある。集合沈線の２次施文はない			
		9	L－22	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部刻目			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	45	10	M－17	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部刻目			
		11	J－22	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部刻目			
		12	L－23	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部爪形文　垂下隆帯がみられる			
		13	M－19	3－1－b	集合沈線文土器　口唇部爪形文			
		14	L－22	3－1－b	集合沈線文土器　把手			
		15	K－15	3－1－b	集合沈線文土器　頸部			
		16	L－21	3－1－b	集合沈線文土器　2次施文で格子目状沈線となっている。			
		17	X－15	3－1－b	集合沈線文土器　格子目状沈線と三角状空白部がある。			
		18	L－23	3－1－b	集合沈線文土器			
		19	L－21	3－1－b	集合沈線文土器			
		20	P－8	3－1－b	集合沈線文土器			
		21	P－8	3－1－b	集合沈線文土器			
		22	Y－15	3－1－b	集合沈線文土器			
		23	H－25	3－1－b・g	集合沈線文土器　結束第1種RLとLのLの端を2回結節したものを地文として、その上に集合沈線を施す。			
		24	K－22	3－1－b	集合沈線文土器			
		25	X－15	3－1－b・g	集合沈線文土器　結束第1種RLと（不明）の両端を結節したものを地文として、その上に集合沈線を施す。			
		26	L－21	3－1－b・h	集合沈線文土器　口唇部にLR			
		27	X－15	3－1－g	25と同一個体か			
		28	L－25	3－1－g	結束第1種RLとLRの両端を結節			
		29	L－24	3－1－g	結節縄文がみえる。			
		30	N－23	3－1－g	単軸絡状帯第1A種Rのし巻きとR巻き			
		31	M－19	3－1－g	折り返し口縁に三角陰刻を施し、胴部に結束第1種LRとその末端を結節1方は不明、鍋屋町系か			
		32	K－21	3－1－g	胎土が異なる。結束第1種のLとRの末端を結節しているが、一方の結節の方法は不明			
	46	33	X－15	3－1－g	単軸絡状帯第1A種			
		34	K－21、22	3－1－g	単軸絡状帯第1A種　RのL巻きとR巻きした木目状撚糸文			
		35	N－21	3－1－g	RLの中央を結節して、施文したもの			
		36	O－26	3－1－g	RLの地文　口縁部に突起と隆帯上刻みがある。			
		37	P－21	3－1－h・f	口辺部は集合沈線文　その下に指頭圧痕隆帯を加え、さらにその下部にRLの縄文			
		38	D－21	3－1－f	口辺部に指頭圧痕隆帯　地文はRLで結節もある。			
		39	K－21	3－1－f	縄文地の上に指頭圧痕隆帯			
		40	Q－17	3－1－f	縄文地の上に指頭圧痕隆帯　RL			
		41	L－21	3－1－e	地文のRLに一本引き沈線			
		42	L－21	3－1－e	地文のRLに一本引き沈線			
		43	L－21	3－1－e	地文のRLに一本引き沈線			
		44	L－25	3－1－h	RL			
		45	L－23	3－1－e	LRの地文に一本引き沈線			
		46	L－21	3－1－e	RL　49の同一個体			
		47	L－21	3－1－h				
		48		3－1－h				
		49	L－21	3－1－e	46と同一か			
		50	L－23	3－1－j	無文地に沈線文			
		51	Y－15	3－1－j	無文地に三角陰刻			
		52	N－22	3－1－j	無文地に三角陰刻			
		53	L－21	3－1－j	無文地に玉抱き三叉文を施している。			

第 45 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　中期（五領ケ台式期）の土器（１）（７、８は１：６）

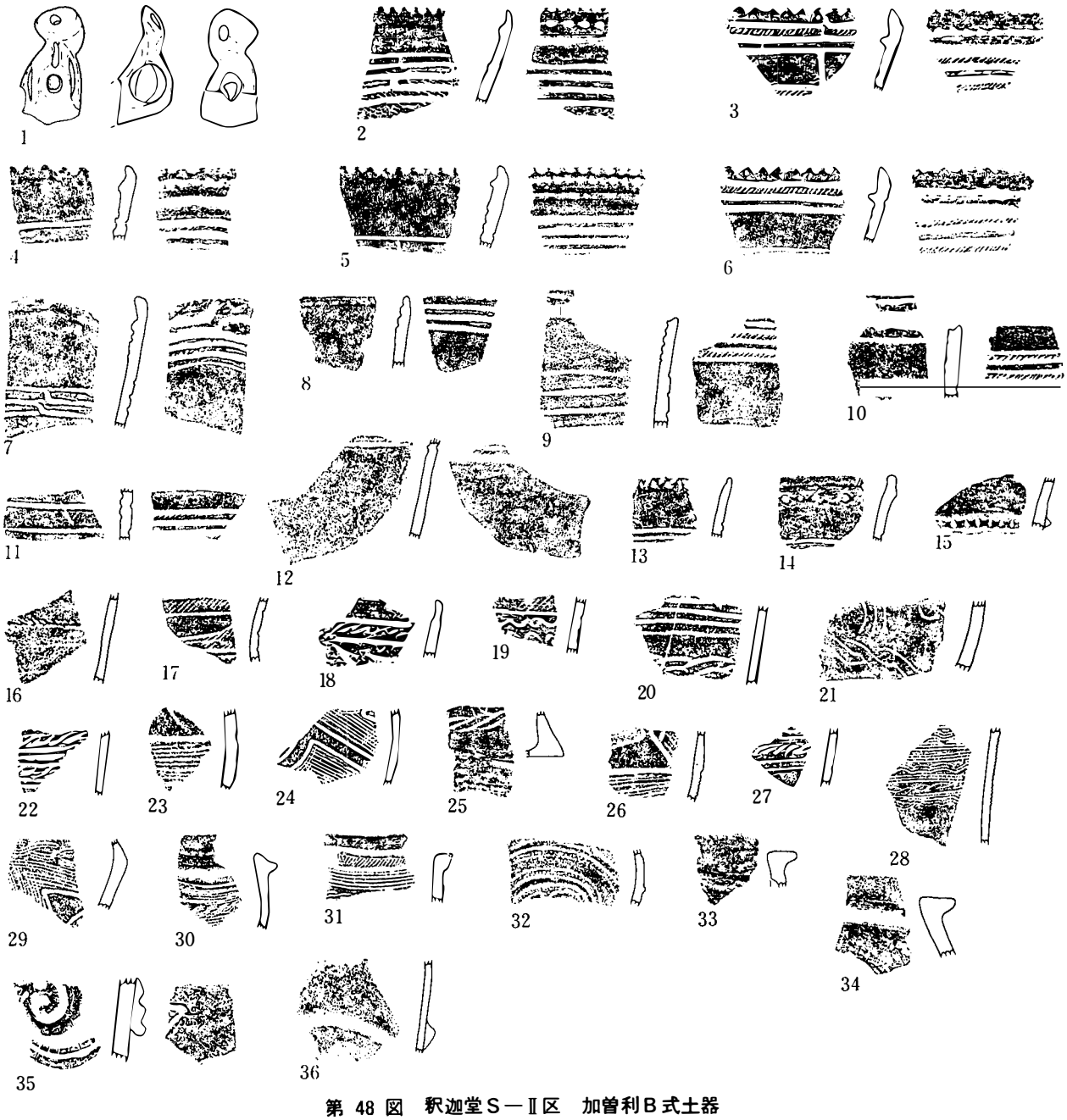
第 46 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　中期（五領ケ台式期）の土器（２）（49は１：６）



第 47 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　中期～後期初頭の土器 (3)（５～８は１：６）

その他の土器

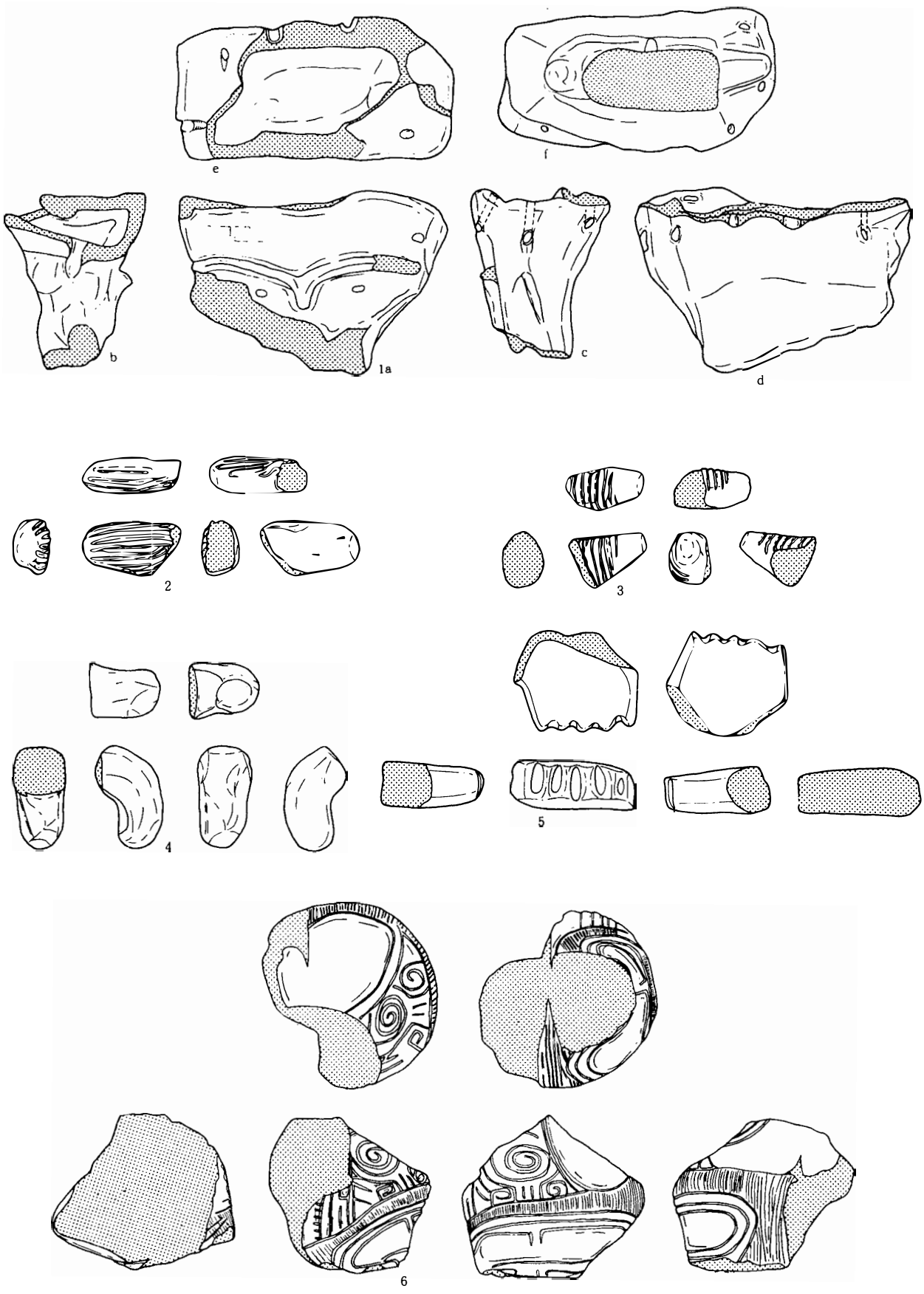
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
12	47	1	M－16	3　2	近畿東海系土器　ＲＬに爪形文			
		2	L－21	3　2	近畿東海系土器　ＲＬに爪形文			
		3	T－21	3　2	近畿東海系土器　無文地に爪形文			
		4		8	Ｓ　Ⅰ区　ＳＢ－37に同一個体あり、特異な縄文Ｌ			
		5	M　21	8	条線地と底隆帯による渦巻文			
		6	N－22	8	口辺部区画文は省略し、底隆帯で区画しその中に条線と沈状垂線を施す。			
		7	M　21	8	口辺部区画文は省略し、沈線による垂線と条線地に沈状垂線を施す。			
		8		8	口辺部に籠目文　胴部は条線地の上に粘土紐を貼付			
		9		11	深い沈線と貝殻の背圧痕（ヘナタリ）による擬似縄文。			



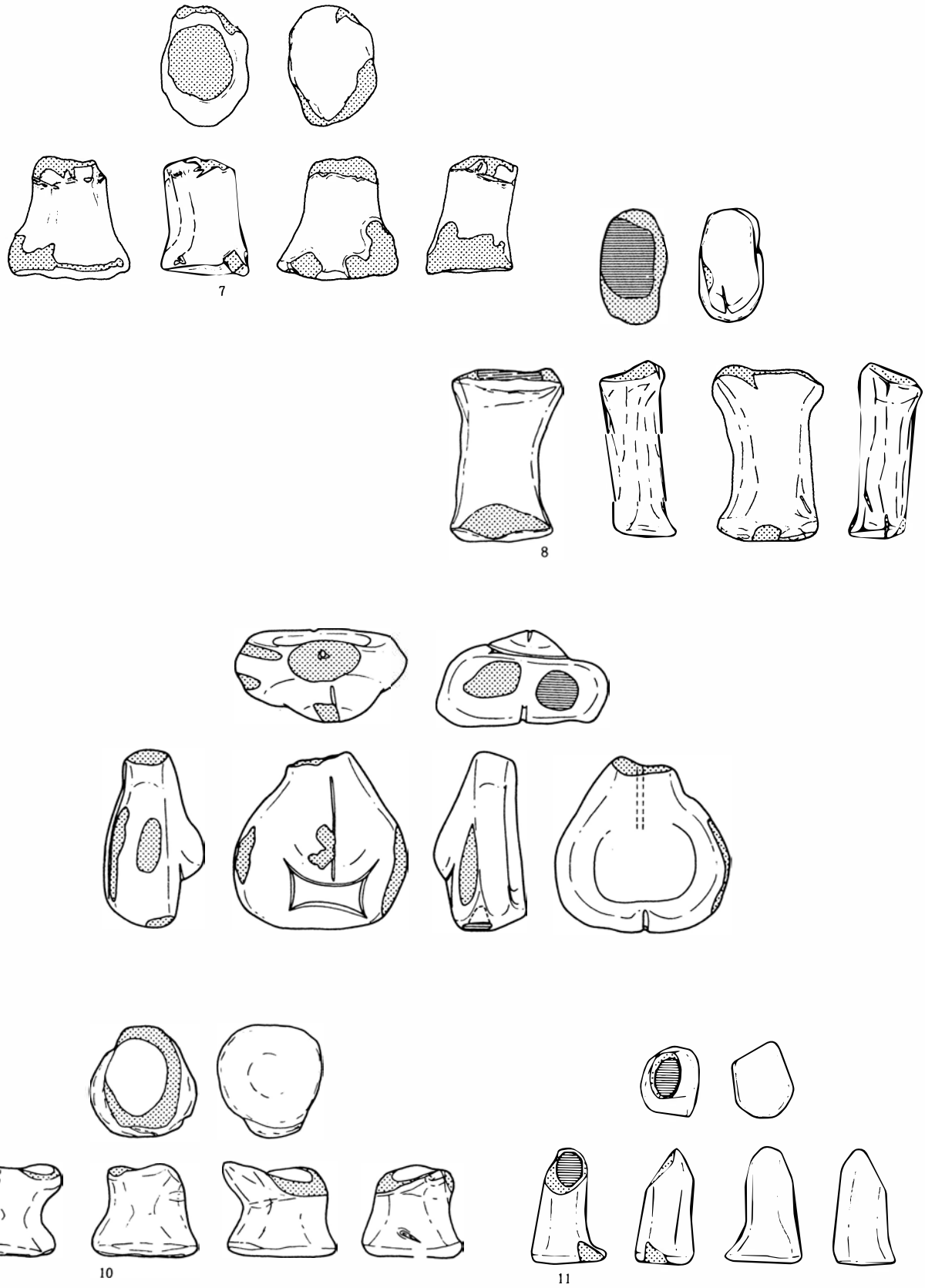
第 48 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　加曽利Ｂ式土器

加曽利B式

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
12	48	1	N-26	13-4	把手			
		2	O-24	13-1 a	口辺部の表裏とも文様を施す　表裏とも研磨が著しい。			
		3	P-24	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す　表裏とも研磨が著しい。			
		4	O-27	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す			
		5	M-21	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す			
		6	M-21	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す　表裏とも研磨が著しい。			
		7	O-27	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す			
		8	M-21	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す			
		9	SK-48、47	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す			
		10	M-24	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す			
		11	M-25	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す			
		12	O-27	13-1-b	口辺部の表裏とも文様を施す			
		13	M-24	13-1-b	内面に文様のない口辺			
		14	S-21	13-1-b	内面に文様のない口辺			
		15	T-22	13-4	隆帯上刻目			
		16	M-21	13-4	赤変している。			
		17	Q-17	13-1-a	LR			
		18	M-22	13-1-a				
		19	N-26	13-4	縄文不明			
		20	N-25　V-25	13-2				
		21	M-24	13-2	研磨した器面に縄状沈線			
		22	N-26	13-2				
		23	N-26	13-3				
		24	N-25	13-3	細線文を施し、研磨の著しいもの。			
		25	SB-04	13-2	底部　網代			
		26	N-26	13-3				
		27	N-25	13-2				
		28	N-21	13-3	細線で文様を描く			
		29	M-24	13-3				
		30	M-22	13-3	口辺部			
		31	N-26	13-3				
		32	T-23	13-4	細隆線と列点を施している。			
		33	Q-21	13-4	口辺部			
		34	Q-21	13-4	口辺部			
		35	Q-17		渦巻状把手が付く			
		36	Q-17		底部			



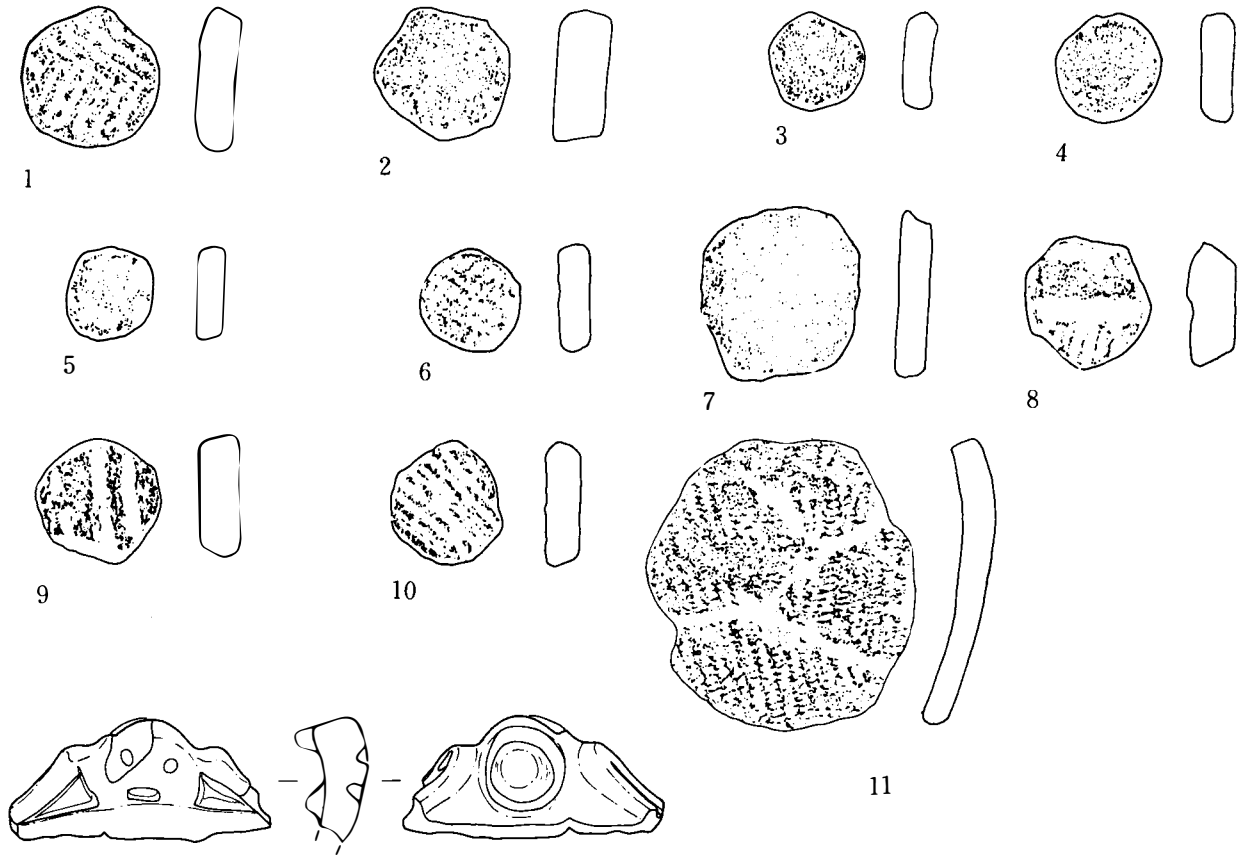
第 49 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　土偶（１）（１：２）



第 50 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　土偶（２）（１：２）

S－Ⅱ　土偶一覧表

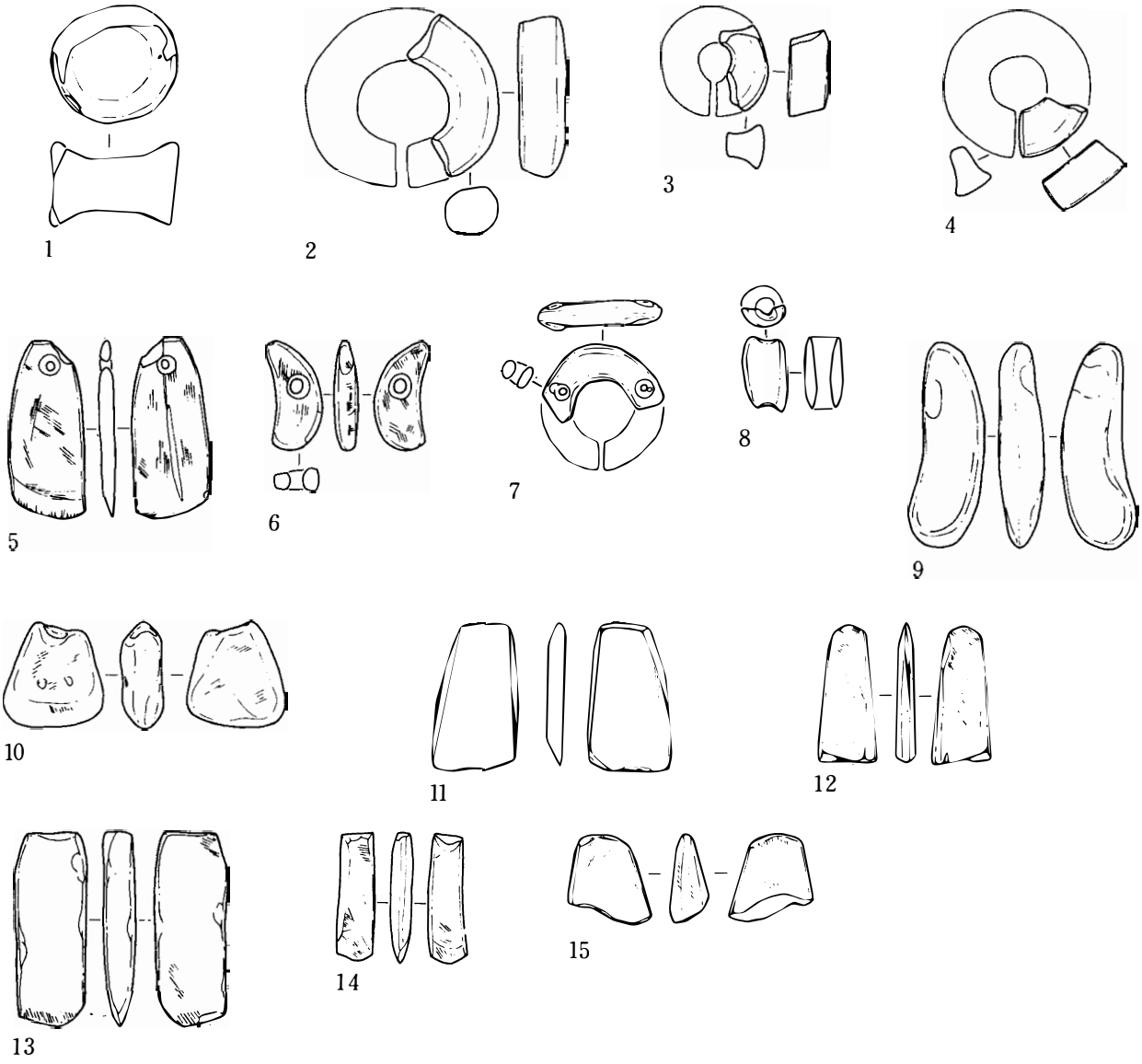
No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
1	SB－04 No.40	顔	6.0×9.7×5.1	五領		頭部、頭頂部は皿状をなしている。		
2	SB－04ベルト	手・腕	2.0×3.2×1.3			腕部に沈線文		
3	O－19	手・腕	2.0×2.8×1.8			腕部の付根に沈線文		
4	SB－04	手・腕	4.6×2.2×1.8					
5	L－25	手・腕	1.8×4.5×3.6	五領				
6	X－15	臀部	5.8×5.7×6.6	曽利		脇腹部に沈線による渦巻文と細状線文	沈線文と細沈線文	
7	M－21	足	4.1×3.0×4.2					
8	Y－15	足	6.0×2.2×3.9			臀部との接合部		
9	N－22	腹	6.0×6.0×3.0		左足の付根	下腹部に対称弧刻文		
10	Y－15	足	3.2×3.7×3.6		腹部が中空			
11	N－18 No.14	足	4.0×2.1×2.1		臀部との接合部			



第 51 図　釈迦堂S－Ⅱ区　土製円盤、把手（1：2）

S－Ⅱ　土製円盤・把手

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	L－21	3.6	1.0	16	五領ヶ台式	
2	L－22	3.7	1.4	19	中期	
3	L－23	2.6	0.8	4	不明	川中より出土
4	L－25	2.8	0.9	5	不明	
5	M－21	2.6	0.8	3	不明	
6	N－28	2.7	0.8	4	不明	
7	X－15	4.9	0.8	9	後期	
8	SB－10	3.3	1.2	14	井戸尻式	
9	SK－72	3.2	1.1	13	井戸尻式	
10	SK－72	3.2	0.9	9	曽利式	周縁は荒い打欠き
11	SK－94	7.8	0.8	50	藤内式	縄は0段3条
12	M－22				五領ヶ台式	顔把手



第 52 図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区　土製品、石製品（１：２）

Ｓ－Ⅱ　土製品石製品

図版	挿図	挿図№	出土地点	分類	材料	記事	備考
		1	Ｐ－27	耳飾	粘土	滑車状耳飾	
		2	Ｍ－22	玦状耳飾	粘土	玦部の端がないがおそらく玦状	
		3	Ｏ－19	玦状耳飾	粘土	中期の前半のものであろう。	
		4	Ｏ－19	玦状耳飾	粘土	中期の前半のものであろう。	
		5	表採	玉斧？			
		6	表採	勾玉	砂岩		
		7	ＳＢ－02	玦状耳飾？	メノウ		
		8	Ｍ－23	管玉			
		9	ＳＫ－29	玉		未製品か	
		10	Ｍ－22	玉		未製品か	
		11	ＳＢ－03　№5	磨斧	硅質砂岩		
		12	ＳＫ－05	磨斧		摺切技法痕あり	
		13	Ｍ－25	磨斧			
		14	表採	磨斧		摺切技法痕あり	
		15	Ｃ－20	磨斧			

山梨県東山梨郡勝沼町

釈迦堂地区
（N－II区）

第１章　奈良時代の土坑ほか

第 1 節　　土拡と出土遺物

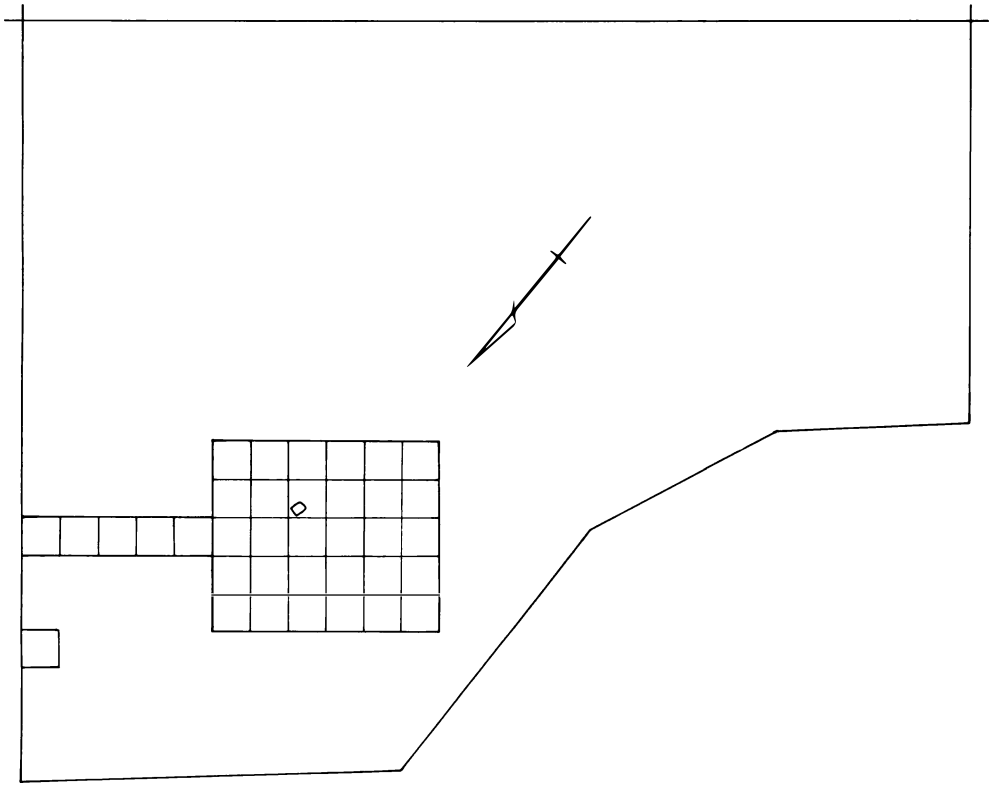
Ｎ－Ⅱ区の立地

Ｎ－Ⅱ区はＳ－Ⅱ区東側の谷が大きく広がった小さな谷地形を主な部分としている。京戸川扇状地には、無数の小さな谷が発達している。このＮ－Ⅱ区もそうした谷の一つであり、そこで発見されたＳＸ－01は、谷の中央部谷底に立地していた。

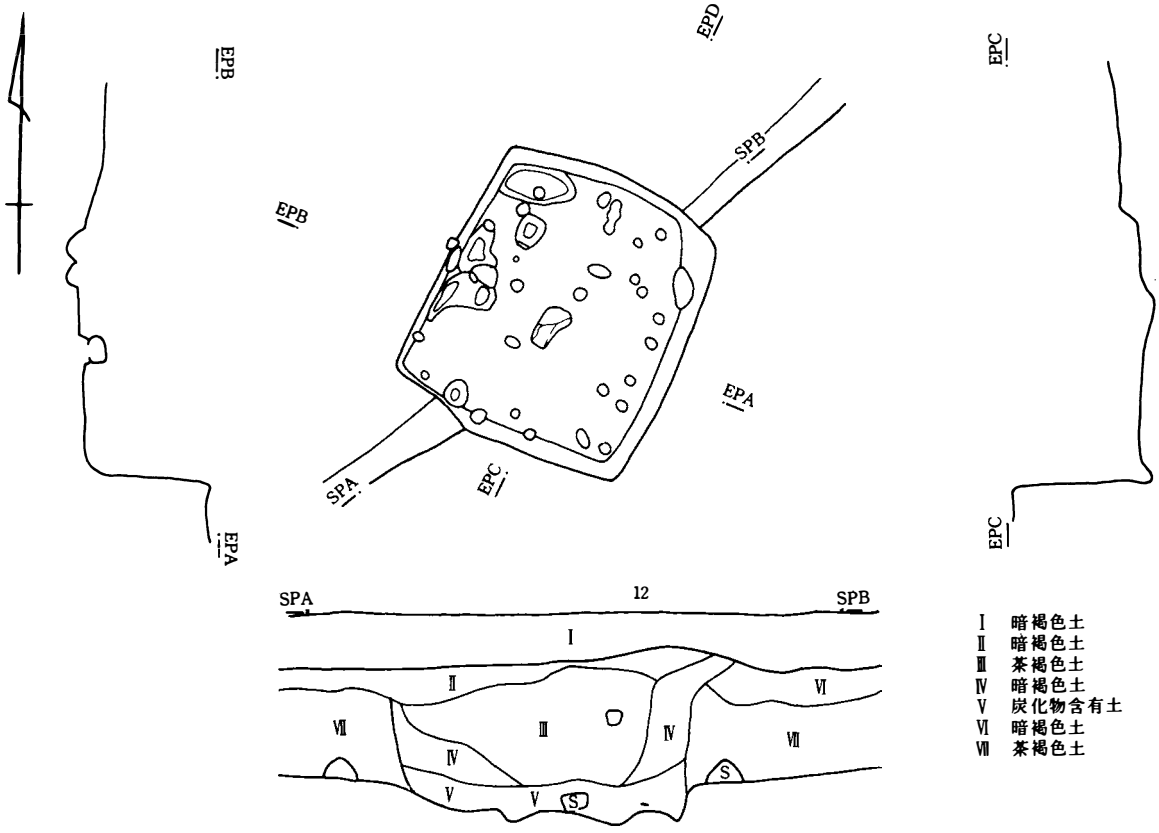
調査は1981年の厳寒の中、調査全域の試掘調査をしている時、遺構を確認し、同年夏、本格的に調査を行った。谷の調査では多くの縄文後期の土器片が出土しており、これらは、Ｓ－Ⅱ区方面から流されて来たものと思われる。

ＳＸ－01

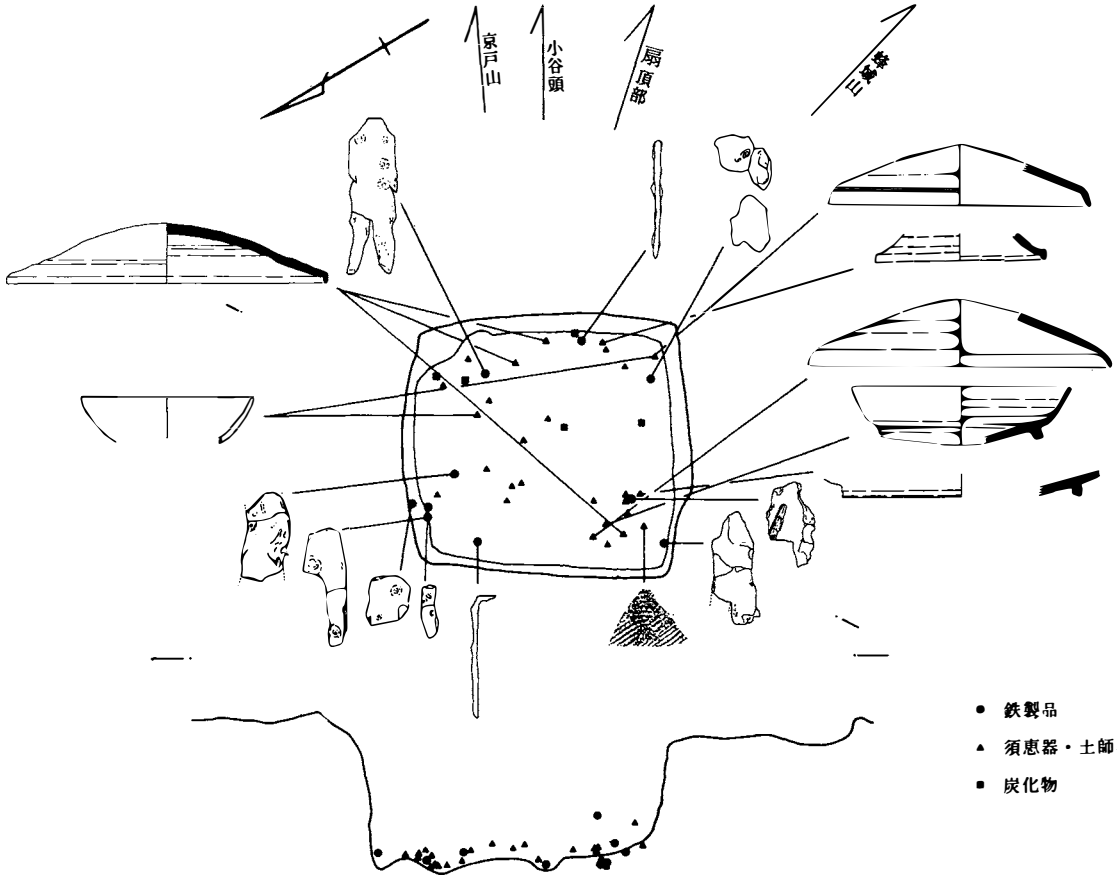
ＳＸ－01は、谷底に掘り込まれた長軸150㎝、短軸130㎝、深さ80㎝の土坑である。埋土からは炭化材・須恵器・土師器片および鉄製品が出土している。出土遺物はいずれも、土坑底面近くより出土している。この出土状況が、この土坑の用途を暗示している。



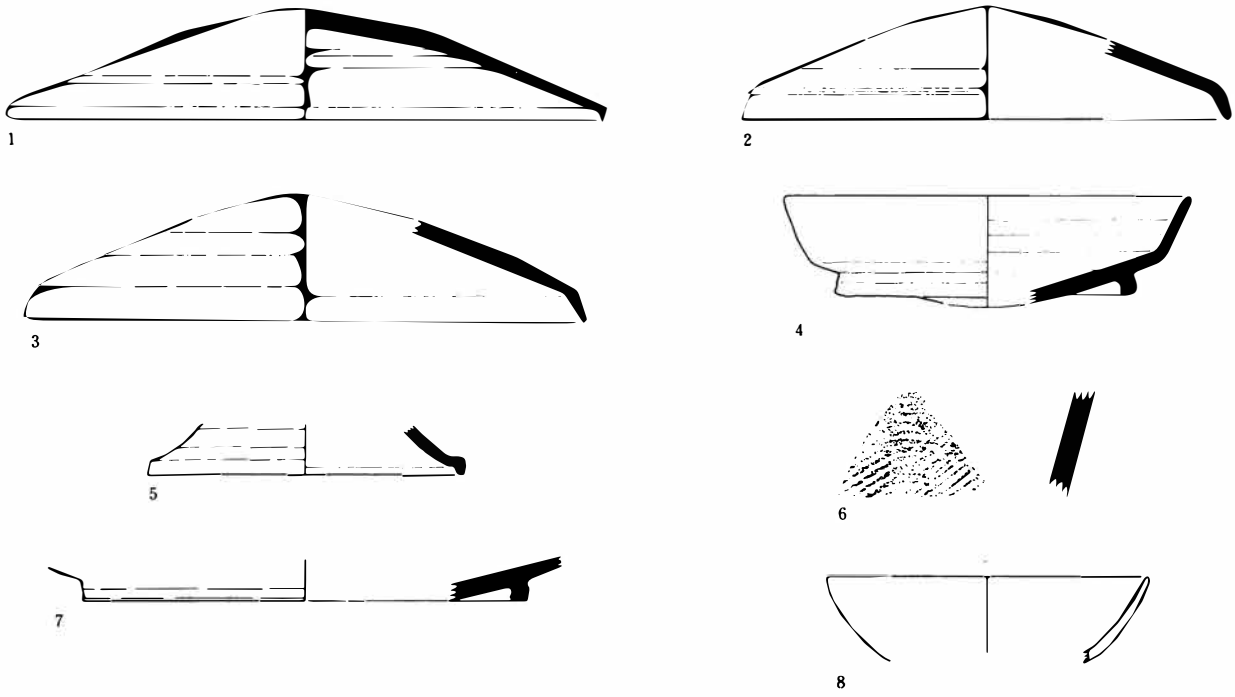
第 1 図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区グリッド図（1 : 400）



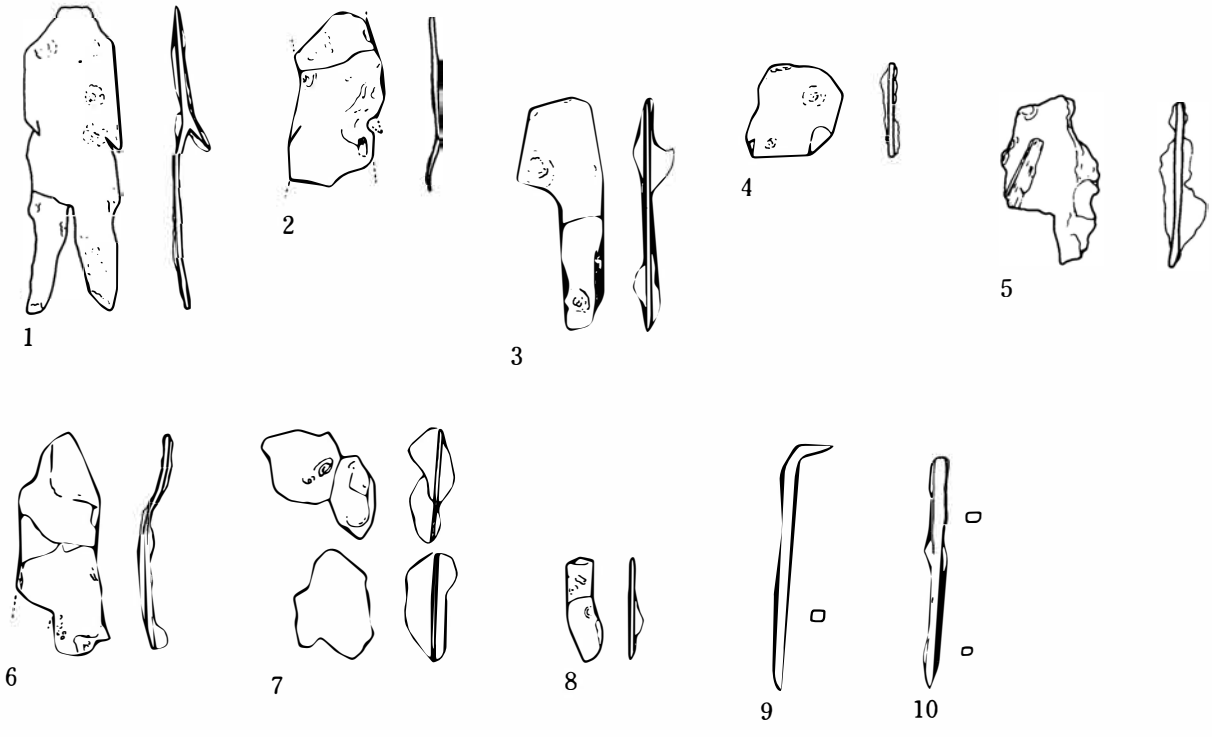
第 2 図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区ＳＸ－01（1：40）



第 3 図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区ＳＸ－01遺物出土状況



第 4 図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区ＳＸ－01須恵器・土師器（1 : 3）



第 5 図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区ＳＸ－01出土鉄製品（1 : 2）

SX－01

図版	挿図No.	No.	出土地点	名称	記事	高さ	容量ℓ	備考
	4	1	No.2・22・23	須恵器 蓋	ロクロ成形痕あり、2次焼成により赤変している。	4.9mm		
		2	No.23	須恵器 蓋	ロクロ成形痕あり、2次焼成により赤変している。			
		3	No.4	須恵器 蓋	ロクロ成形痕あり、2次焼成により赤変している。			
		4	No.12	須恵器 坏	丸底の坏に高台を付けたもの 灰色を呈し、2次焼成の赤変はないが、熱変している			
		5	No.34	須恵器 脚	ロクロ成形、2次焼成で一部赤変			
		6	No.1	須恵器	灰茸色を呈し、タタキ目を残す。			
		7	No.21	須恵器 坏	盤状の大型の坏で、底部が高台より出る。			
		8	No.23・39	土師器 坏	表裏ともヨコナデ。			

SX－01

図版	挿図No.	No.	出土地点	名称	記事	高さ	容量ℓ	備考
14	5	1	No.26	鉄製人形	頭部を欠くが、本来的にないものかどうか不明 全身			
		2	No.28	鉄製人形	手の切り込みがある。 胸			
		3	No.18	鉄製人形	胴と脚			
		4	No.19	鉄製人形	手の切り込みがある。 胸			
		5	No.15	鉄製人形	左足の付根が残る。 胸と胴			
		6	No.14	鉄製人形	左足の付根が残る。			
		7	No.31	鉄製人形	サビが著しく不明だが、わずかに足の付け根がわかる。 胸と胴			
		8	No.8	鉄製人形	脚			
		9	No.7	鉄製 釘				
		10	No.35	鉄製 釘				

第 2 節 ま と め

鉄製人形について

鉄製人形が出土した小竪穴遺構は、京戸川扇状地上の小谷の底に単独に設けられていたものである。なお遺構周辺は、遺跡群のなかでも無遺構に近い地区であった。この小竪穴遺構の位置からは、東に京戸川扇状地の扇頂部があり、そこを狭むように蜂城山と京戸山がせまっているのを見ることができる。また現在、この付近が東八代郡一宮町と東山梨郡勝沼町の境になっているところである。

小竪穴遺構は、一辺が約140cmの方形で、深さは約60cm～80cmである。遺物は底部近くから鉄製人形に共伴して、土師器の坏、須恵器の坏・蓋・釘が多量の炭火物に混じって検出されている。出土状況で注目されるのは鉄製人形の6体分が小竪穴の四隅にあったことである。この小竪穴遺構および出土遺物の時期については、須恵器から8世紀前葉ないし中葉を考えることができる。

人形については、山梨県内の最近の調査のうち、大坪遺跡（甲府市）や柳坪遺跡（長坂町）の平安時代の遺跡から、人形状の木製品が出土したとして話題となったが、報告書では木簡であろうと発表されている。

このことから、本県における人形の出土例としては、本遺跡の6体分が初出のものといえる。しかも全国的にも類例の少ない金属製人形が、小竪穴遺構から出土していることは人形の用途を考えるうえできわめて注目されるものである。

本遺跡の鉄製人形は、奈良時代における甲斐国の人形祭祀の1例として位置づけることができるが、火を用いたと思われる小竪穴の四隅にあった鉄製人形の具体的用途については、今後の課題である。

人形には木製・金属製・石製・土製などがあるが、なかでも都城跡や地方官衙跡からは木製品が多く出土していることが知られている。本遺跡の鉄製人形は、矩形の鉄板を切って顔・上半身・下半身を作りだし、足はV字形に切りこんで、手は側面から浅く切りこみ、やや折り曲げている。顔の部分は欠損しているが、残存状況がよい例で現長8cmである。なお本遺跡の鉄製人形に類似するものとして福岡県沖ノ島遺跡の例をあげることができる。これらの金属製人形は、形態的には木製人形のうち扁平正面像と近似しているといえよう。

都城跡出土の木製人形は、各所の溝からの出土例が多く、例外的に井戸からの出土も報告されている。これらの溝からの出土の意味は、人形が水に流されるものであったことを示しているとされる。まじないや祓いの形式としての木製人形は、最終的に「流される」ものであったのに対して、本遺跡の鉄製人形は火の中に投げ込まれたと思われるとこれに、人形祭祀の特徴を指摘することができるかも知れない。

金属製人形については、平安時代の「延喜式」にみられる。神祇官、伊勢太神宮、斎宮における祭式と祭料が示されており、その中で人形についてふれている。「人像」と書かれた人形は金・銀・鉄人像の各種のあることが記され、さらに金・銀人形は長さが1尺で広さが1寸、木人形は長さが8寸で広さが8分であることが記されている。

「延喜式」にみられるこれらの金属製人形は、平安時代の宮廷儀式に用いられたものであるが、その機能については本遺跡の鉄製人形を考えるうえで注目されるものであろう。

たとえば四時祭では天皇・中宮・東宮の除穢延命を願う祓い具として金・銀・鉄の人形が用いられている。また臨時祭の中に国境で疫神祭を行う場合（畿内境十処疫神祭）や、斎宮では国境や川を通過する時の祭（六処堺川供奉御禊）では鉄製人形が用いられている。

本遺跡の鉄製人形はその出土地を改めてみると、「倭名抄」の郡郷名では山梨郡10郷のうち野呂郷に関連することが推測される。東側に御坂山系が横たわり、その山裾の扇状地上に設けられた方形の小竪穴から鉄製人形が検出されたのである。このことから郷境あるいは郡境における疫神祭的な祭儀の場を推定してみることも可能であろうか。

鉄製人形について、若干の考察を行ったが、人形の具体的な用途など今後の課題としたい。

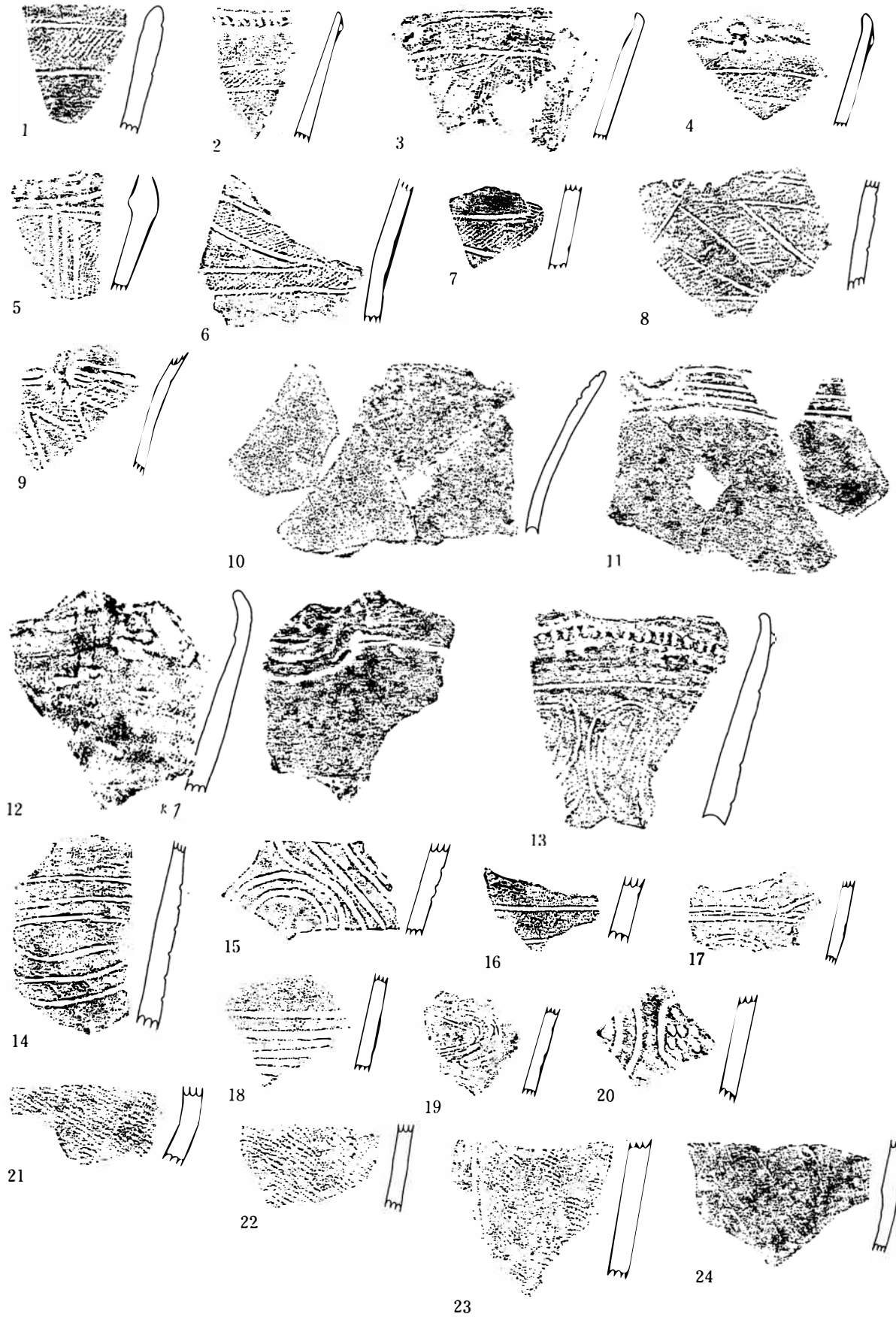
参考文献

1．乙益重隆、金子裕之「人形」『神道考古学講座』第3巻　1983年

第　3　節　　グリッド出土の縄文土器

N－Ⅱ区

図　版	挿図No.	No.	出土地点	分　類	文　　様	高さ	容量ℓ	備　考
		1	R－7	12−10	口辺部に磨消縄文帯をもつもの			
		2		12−10	口辺部に磨消縄文帯をもつもの　凸帯が付く			
		3	R－7	12−10	口辺部に磨消縄文帯をもつもの			
		4	R－7	12−10	口辺部に磨消縄文帯をもつもの			
		5		12− 9	口辺部に磨消縄文帯をもつもの			
		6	S－9	12−10	口辺部に磨消縄文帯をもつもの			
		7	S－9	12−10	口辺部に磨消縄文帯をもつもの			
		8	S－7	12−10	口辺部に磨消縄文帯をもつもの			
		9	R－7	12− 9	口辺部に磨消縄文帯をもつもの			
		10	R－7	12−14	器内面に文様が付くもの			
		11	R－7	12−14	器内面に文様が付くもの			
		12	R－7	12−14	無文地に2本沈線で文様を描くもの　刻目凸帯が付く。			
		13	R－7	12− 1	無文地に2本沈線で文様を描くもの			
		14	S－7	12− 1	無文地に2本沈線で文様を描くもの			
		15	R－7	12− 1	無文地に2本沈線で文様を描くもの			
		16	R－7	12− 1	無文地に2本沈線で文様を描くもの			
		17		12− 1	無文地に2本沈線で文様を描くもの			
		18	Q－7	12− 1	無文地に2本沈線で文様を描くもの			
		19	P－7	12− 1	無文地に2本沈線で文様を描くもの沈線区画に列点を施す。			
		20	S－7	12− 2	縄文			
		21	S－9	12−14	縄文			
		22	S－8	12−14	縄文			
		23	V－4	12−14	縄文			



第　6　図　釈迦堂N－Ⅱ区　グリッド出土土器

図　　版

S－I区

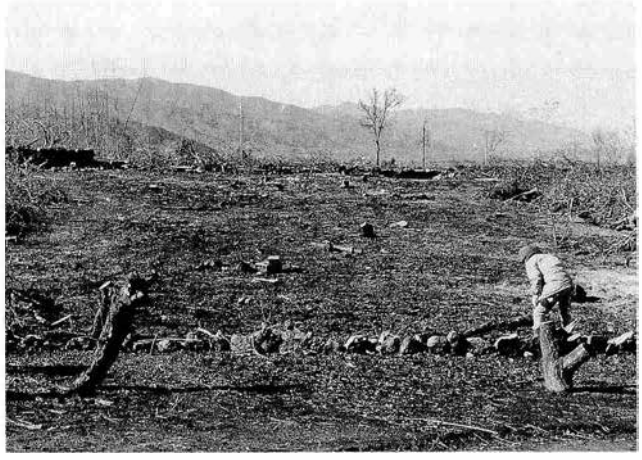
釈迦堂S－Ⅰ区・S－Ⅱ区　空中写真

釈迦堂S－Ⅰ区・S－Ⅱ区　空中写真

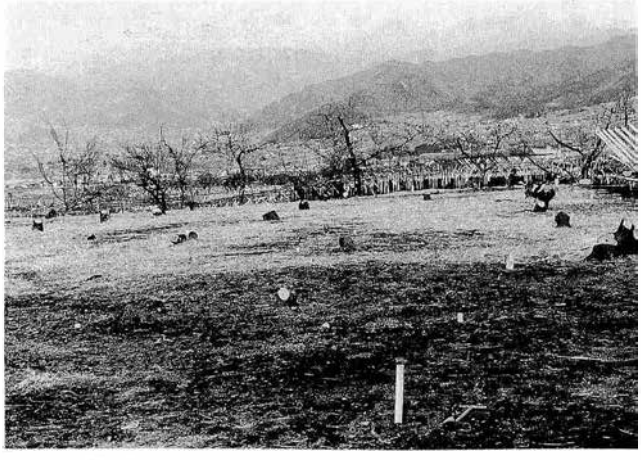
図版 2 発掘開始状況

S－Ⅰ区

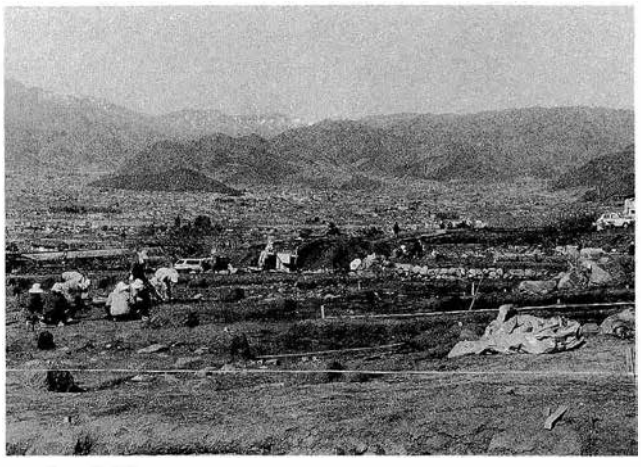
S－Ⅰ区



S－Ⅱ区



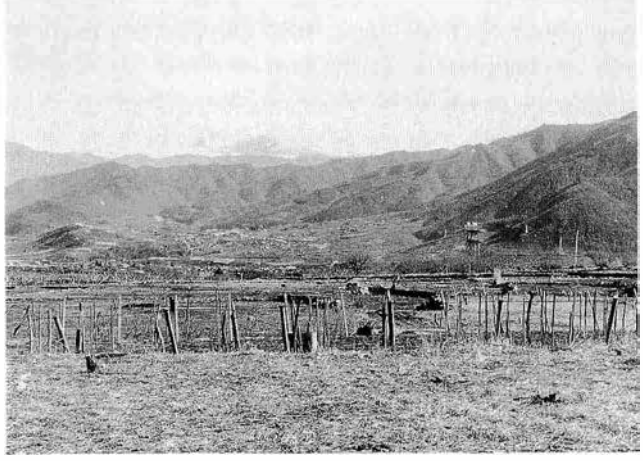
S－Ⅰ区



S－Ⅲ区

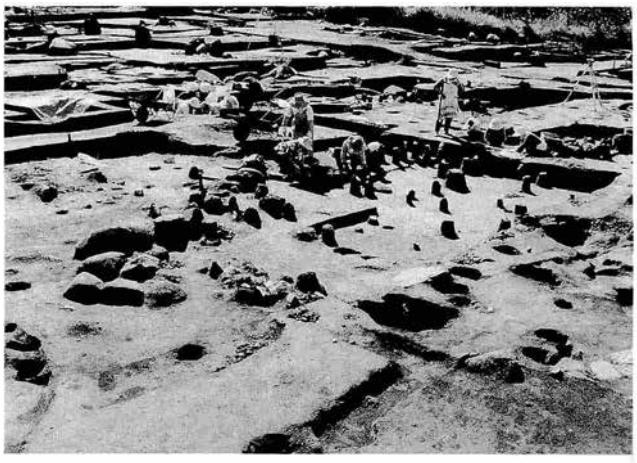
S－Ⅰ区

S－Ⅱ・S－Ⅲ区



S－Ⅲ区

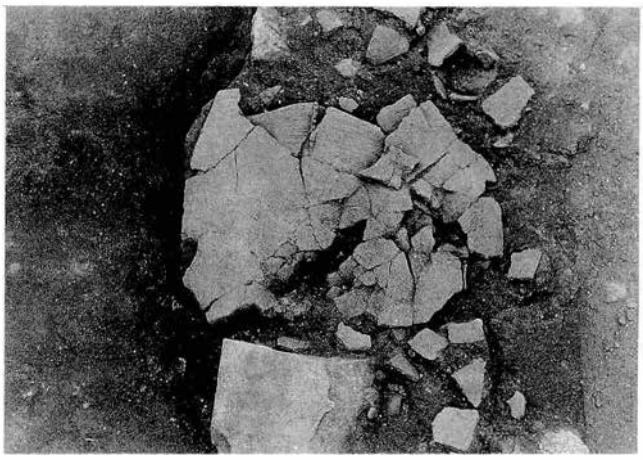
調査状況



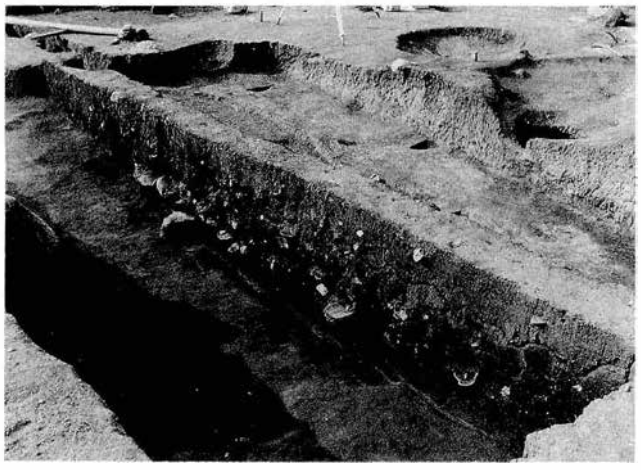
図版 4

ＳＢ－06

ＳＢ－06

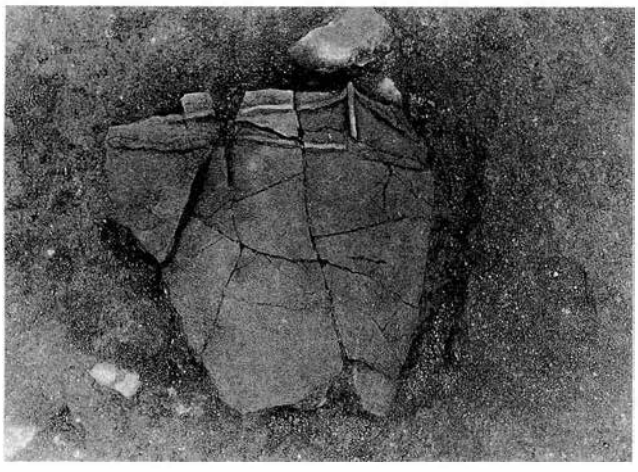


ＳＢ－06

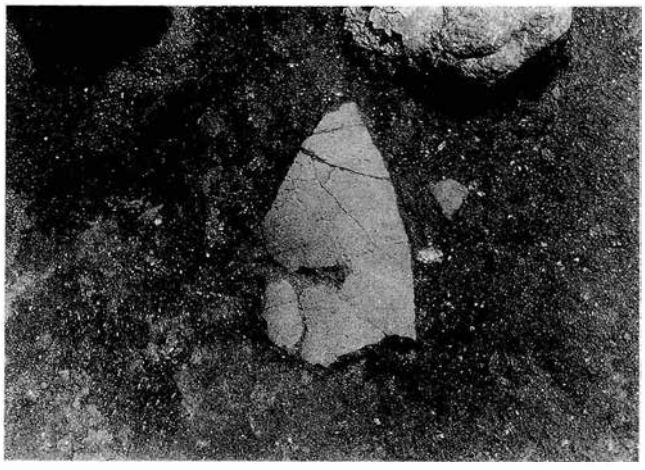


ＳＢ－10

ＳＢ－13



ＳＢ－15



ＳＢ－30

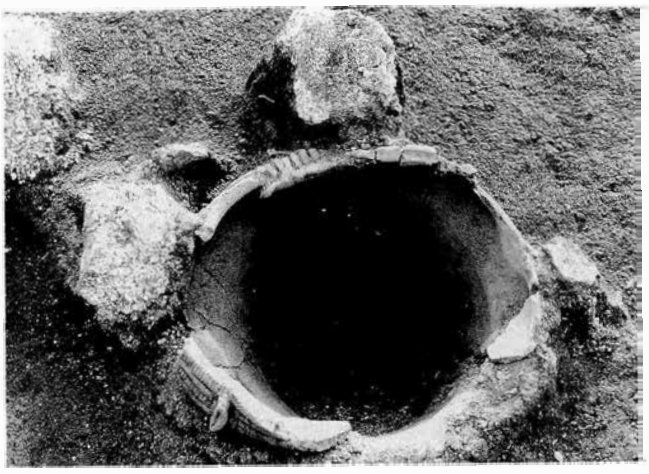
ＳＢ－51

SB—47

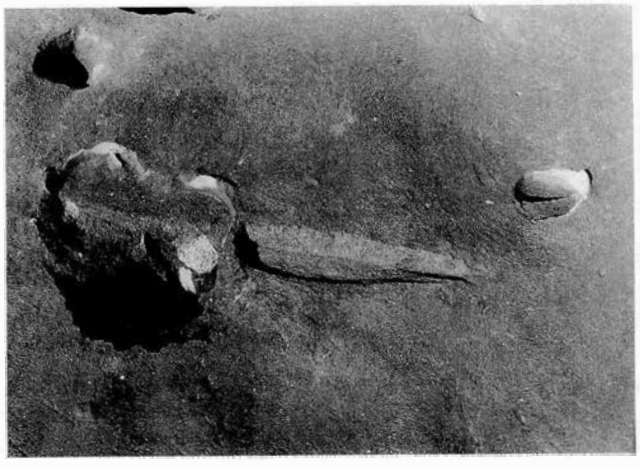
SB—47

SB—51

W—20



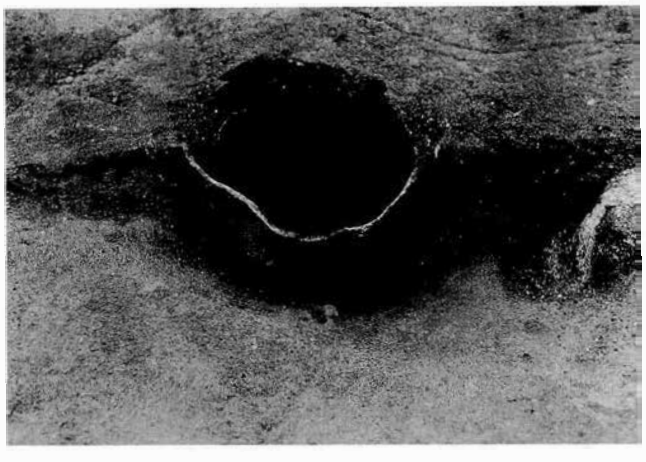
SB—05



SB—05

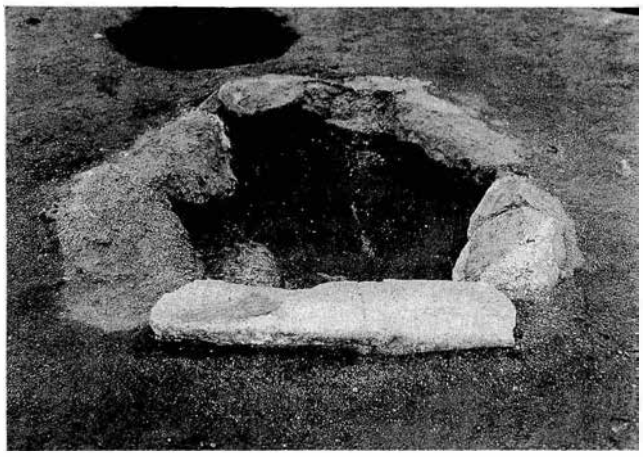
SB—05

SB—06

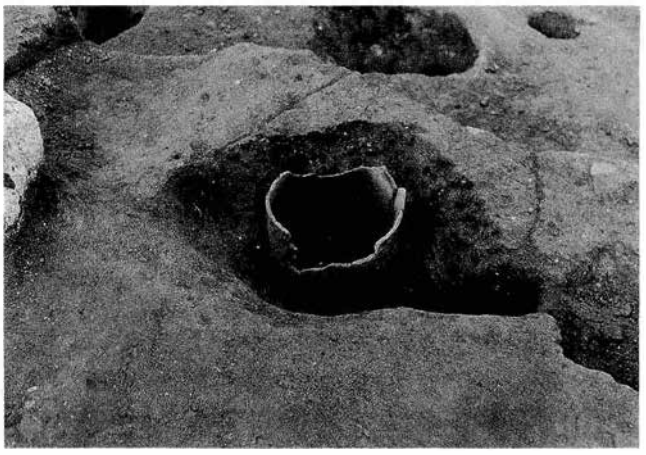


図版 6

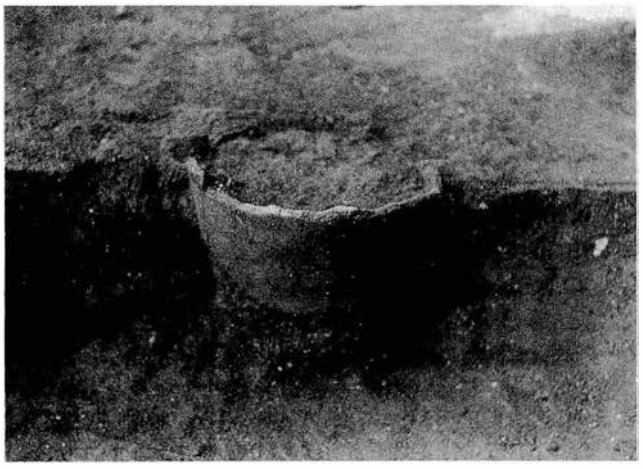
SB—10



SB—28



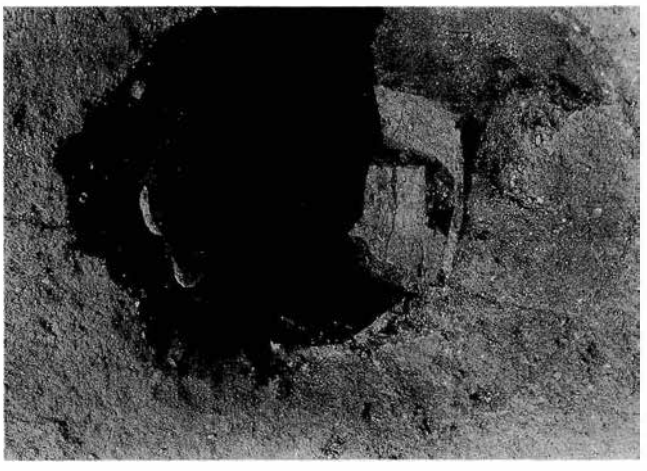
SB—23



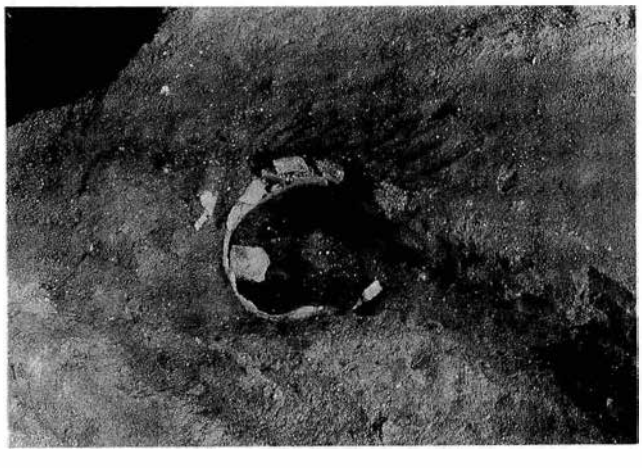
SB—23

SB—41・42

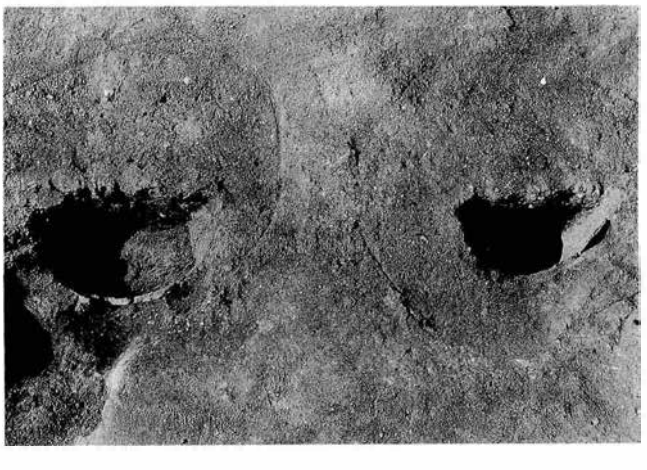
SB—41・42



SB—41・42

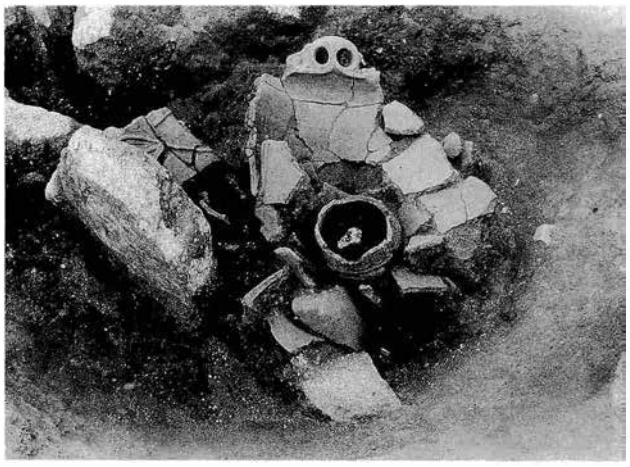


SB—41・42



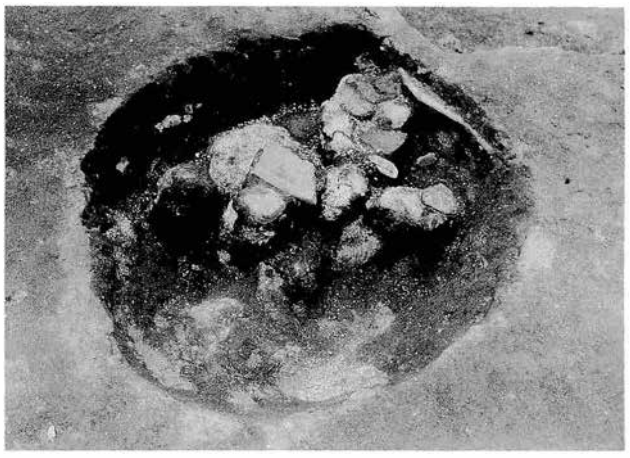
SK－01

SK－01

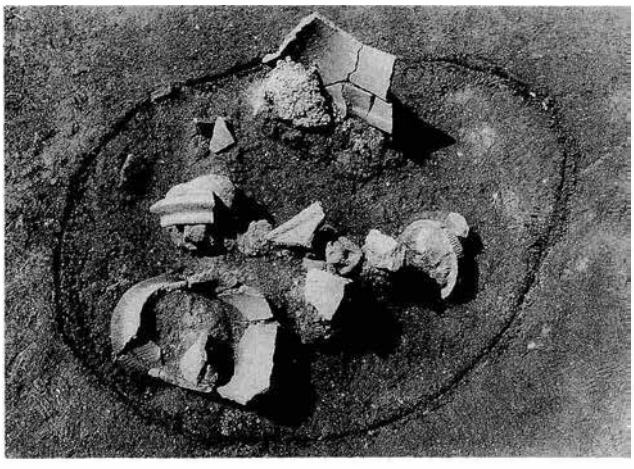


SK－04

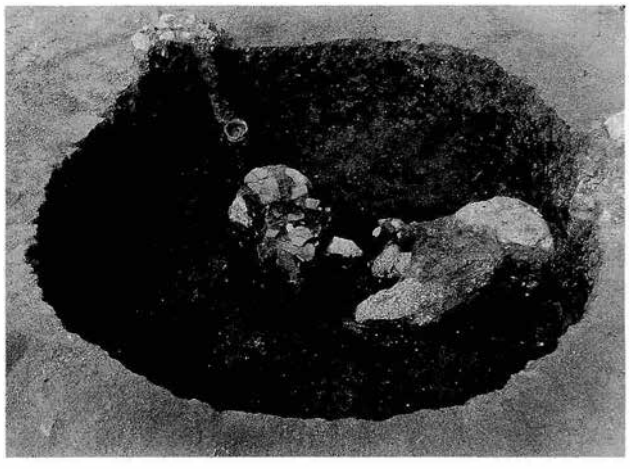
SK－05



SK－06



SK－10

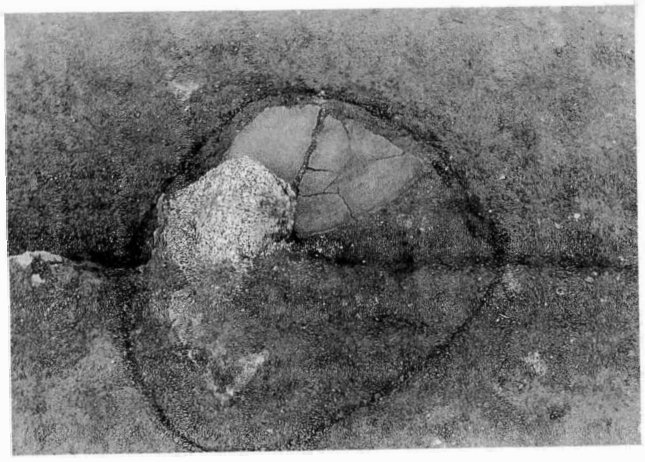


SK－18

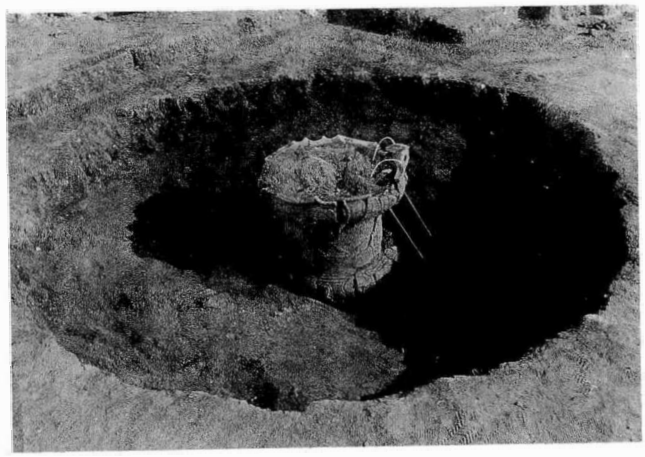
SK－19

図版 8

SK－20

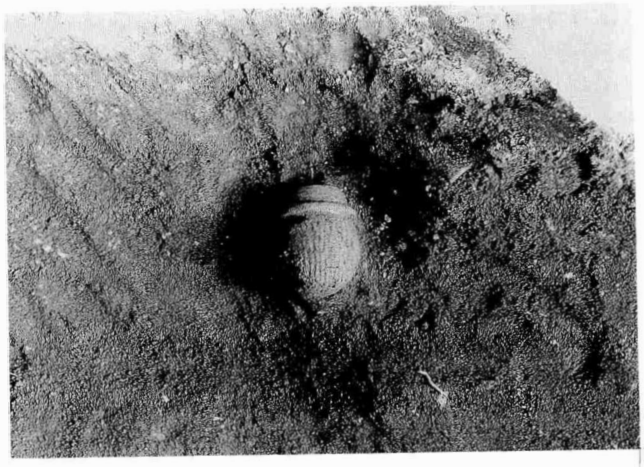


SK－22

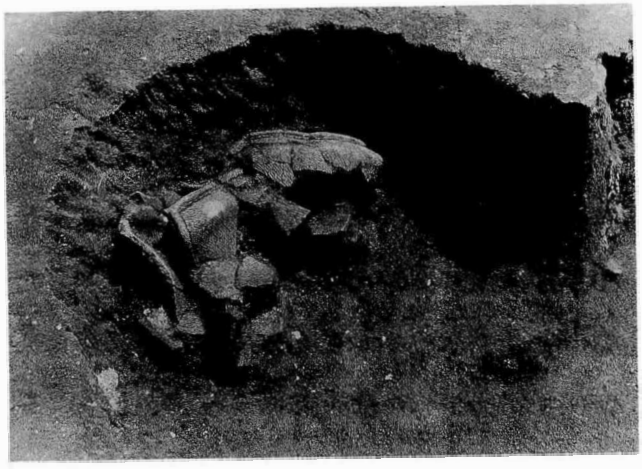


SK－22

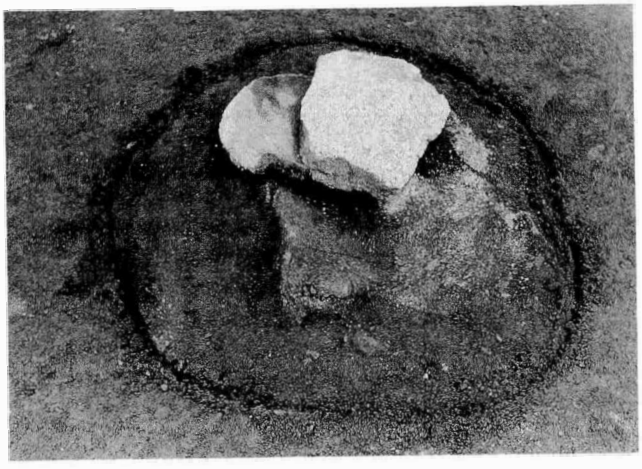
SK－23



SK－28



SK－30

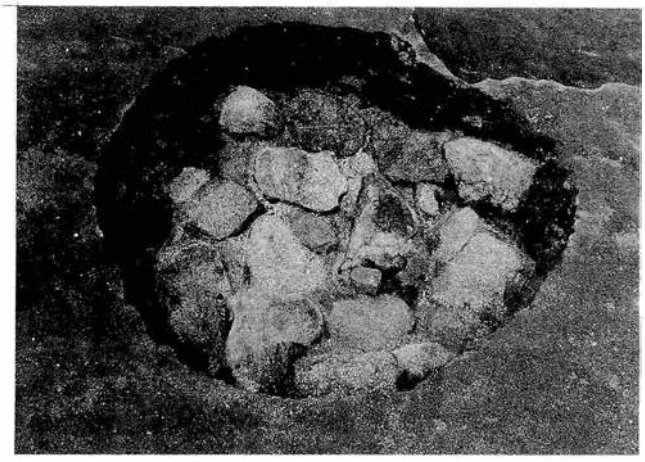


SK－33

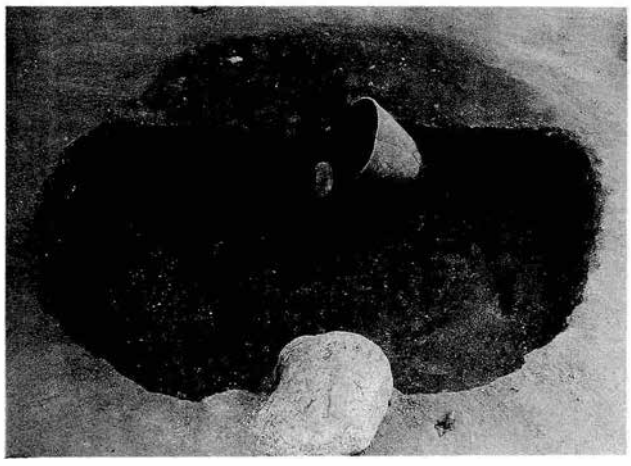
SK－33

SK－44

SK－49

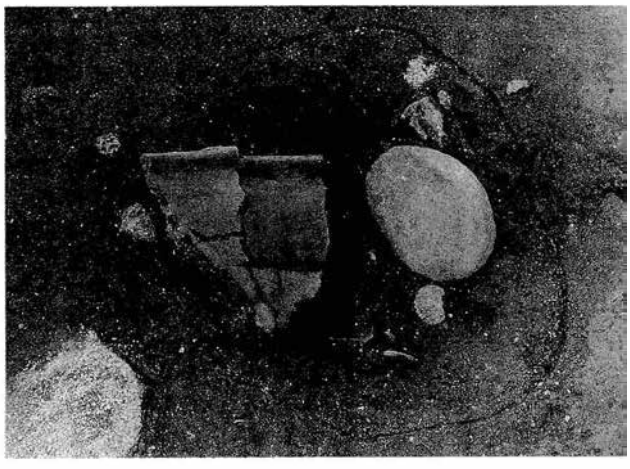


SK－55



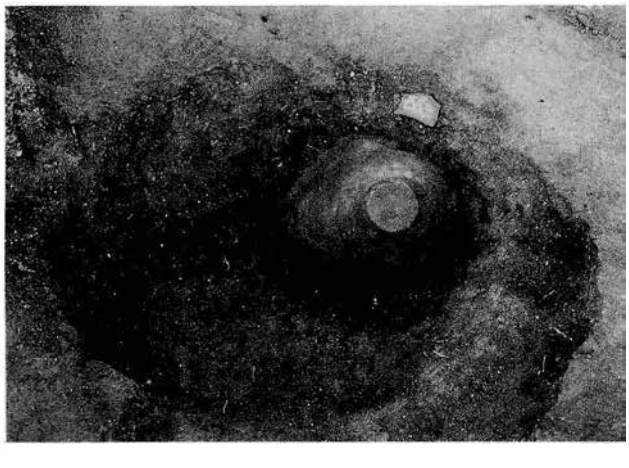
SK－60

SK－65



SK－69

SK－73A

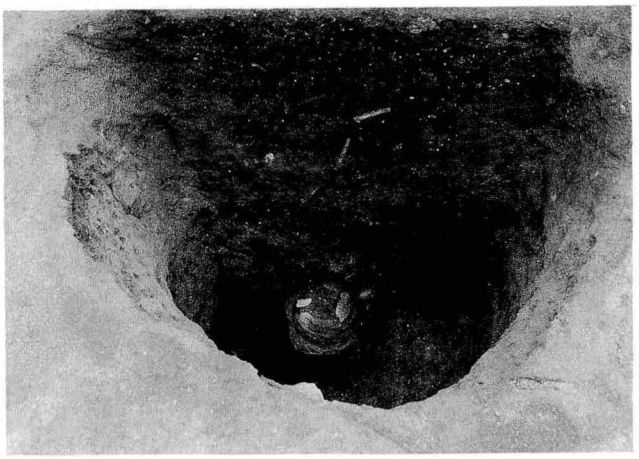


SK－77

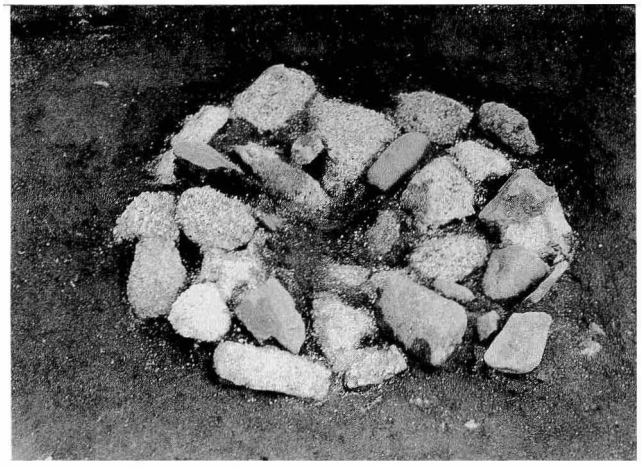
図版10

SK－81

SK－83



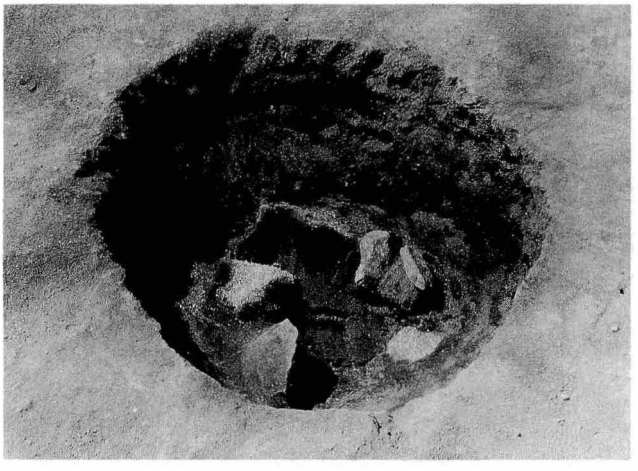
SK－88



SK－98

SK－98

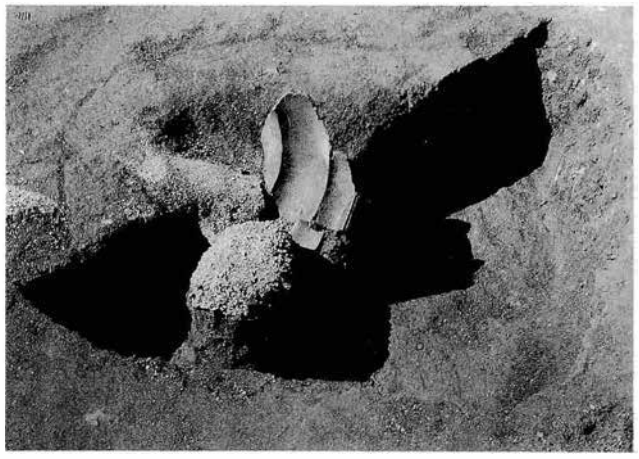
SK－101



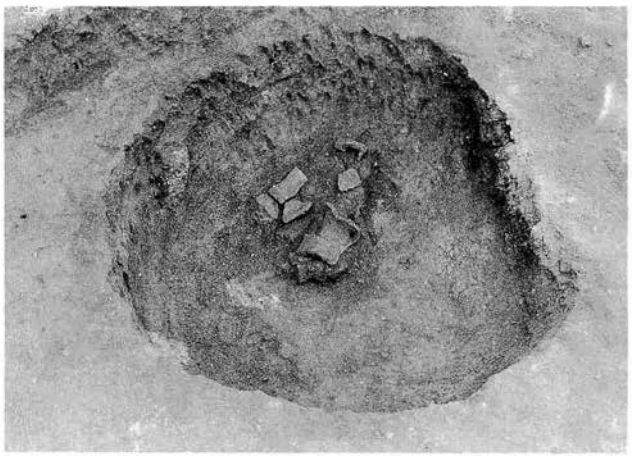
SK－125

SK－144

SK－155



SK－157



SK－165

SK－172

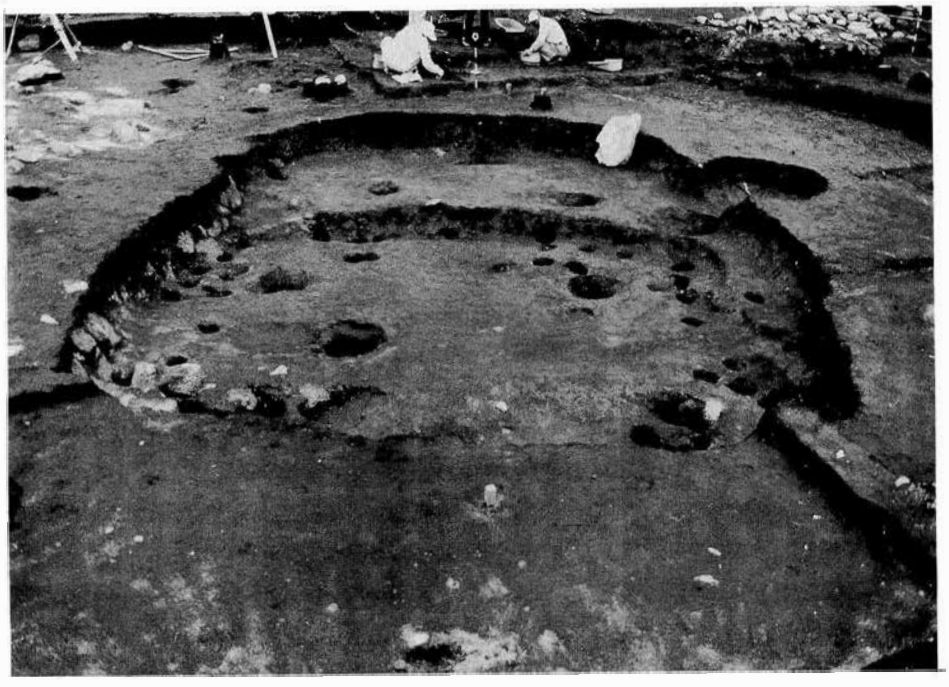
SK－193

SK－193

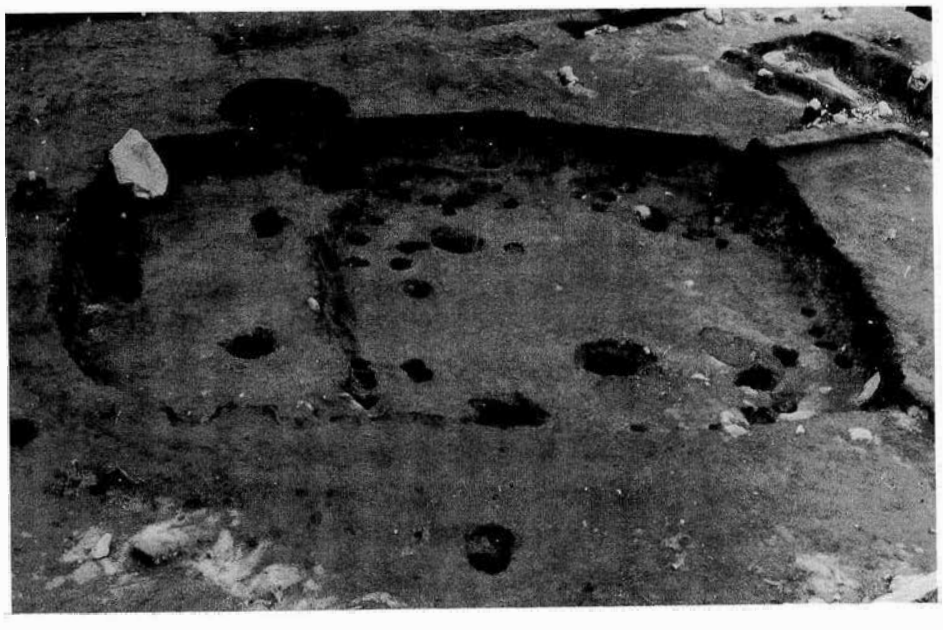
SK－193

SK－193

SB—01



SB—02
SB—03



SB—02・SB—03

SB—04

SB—05

SB—06

SB—07

SB—08

SB—09

SB－10

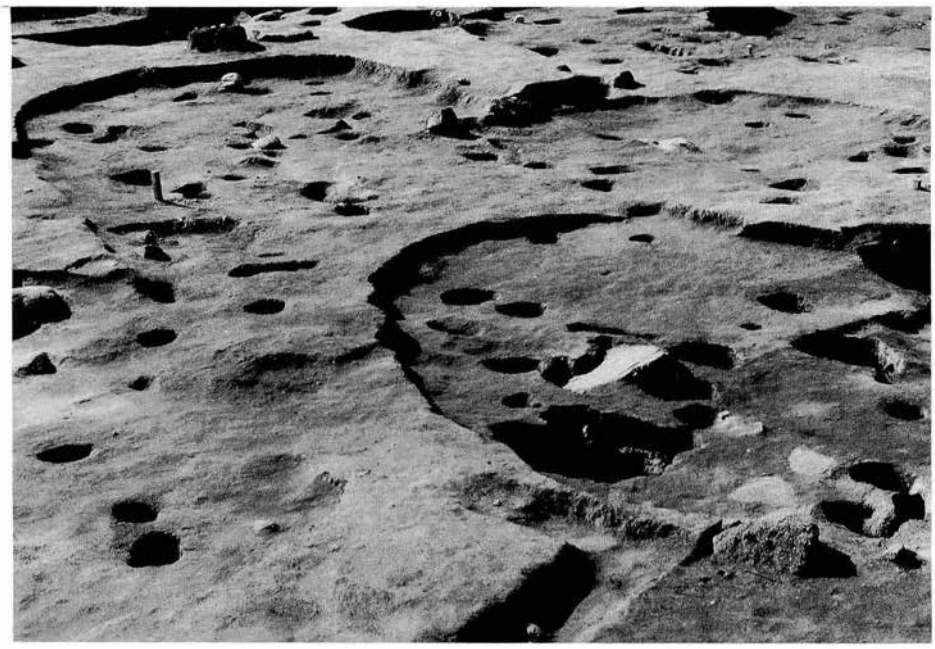
SB－10

SB－14

SB－11

SB－21

SB－12

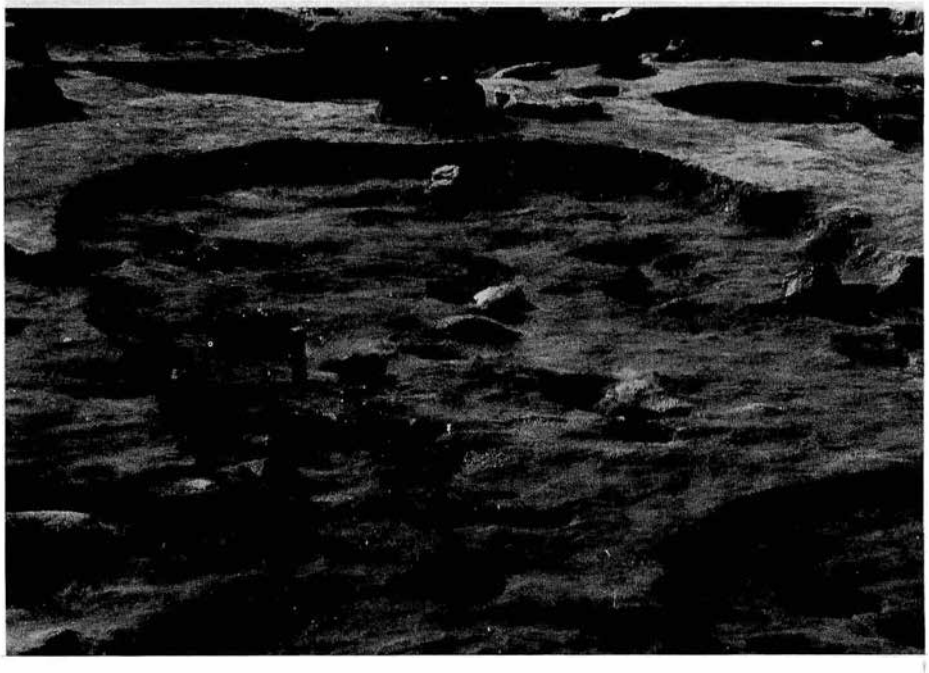


SB－15　　SB－13

SB－30

SB－34　　SB－26

SB－14



SB－15